

ガンダムビルドダイバーズ リビルドガールズ

守次 奏

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

徒競走で必死に走っても、3位だった。中学の3年間、死に物狂いで頑張ってきた吹奏楽は全部ダメ金だった。そんな、どこまでも人並みな少女、朝村愛香はある日バイト先のガンダムベースで、「世界を変える力」と、GBN——ガン普拉バトル・ネクサス・オンラインと出会う。

「あたしも、もしかしたら」

フォースメンバーは偽アイドル、メンヘラ、自治厨、銭ゲバ。これらをまとめて一つに括る。まともに前に進むのかどうかも怪しい、これはそれぞれに理由を抱えて電子の海にダイブする、ツダリかねない少女たちの小さな小さな冒険譚。

一万UA突破記念企画?↓ <https://syosetu.org/?mode=kappo|view&kid||245436&uid||325739>

FAQその2↓ <https://syosetu.org/?mode=kappo|view&kid||245688&uid||325739>

目次

| | |
|-------------------------------------|-----|
| 第一話「例えばABS関節にエナメル塗料でスミ入れするような」 | 1 |
| 第二話「世紀末GBN伝説はじめてのおつかいはモヒカンと共に」 | 11 |
| 第三話「はじめてのともだちく気になるあの子は同級生」 | 21 |
| 第四話「そこにある、理由」く袖の擦り合いにPKを添えて」 | 31 |
| 第五話「生き残れラスト・ダイバーズく誠意は言葉ではなく金額」 | 42 |
| 第六話「生存戦略MPKくチャートの祈りは必修科目」 | 49 |
| 第七話「銀の誇りと女神の怒りく少女、死線を超えて」 | 60 |
| 第八話「フォース・リビルドガールズ！く或いは、明日に託す約束のこと」 | 74 |
| 幕間：バエリングお嬢様 | 86 |
| 第九話「あたしの火力が足りてないく餅は餅屋とコアガンダム」 | 94 |
| 第十話「新たなる剣く愛香は廃人と化しかけたがさしたる問題ではない」 | 106 |
| 第十一話「その名はビルドボルグくごめんなさいより、ありがとうを」 | 117 |
| 第十二話「リブート、リビルドガールズ！く言動ブーメラン戦隊の短い一日」 | 129 |
| 第十三話「ネゴから始まる初陣宙域く確かに白けりやアルビオン」 | |

| | | |
|-----|-----------------------------------|-----|
| | 第十四話 「臆病勇者とNT―D―激突戦域・前編」 | 139 |
| | 第十五話 「生きてる限り負けじゃない―激突戦域・後編」 | 165 |
| 180 | 第十六話 「休暇はもう楽しんだでしょう―ビギニングお嬢様！」 | |
| | 第十七話 「魂を手にした女―ガンプラの民は修羅の民」 | 192 |
| 205 | 第十八話 「予習・復習・祈りの慣習―もしも、勝てないとして」 | |
| 216 | 第十九話 「銭ゲバ、その心はどこに―チイとアキノの決戦前夜」 | |
| | 第二十話 「バエル・ラプチャー―再臨する悪魔の王」 | 226 |
| | 第二十一話 「燃える誇りが奏でる調べ―執事、アグニカならずとも」 | 240 |
| | 第二十二話 「キズアト／キズナ―或いは、あたしの蹉跌と再生のこと」 | 253 |
| | 幕間其の二：FOEさんの短い一日 | 266 |
| 272 | 第二十三話 「はじめての聖地へ―その質問はあたしに効く」 | |
| | 第二十四話 「クロス・ユニーク・エンカウンター―聖地の王とFOE」 | 282 |
| 294 | 第二十五話 「あたしにできること―ニブンノイチの愛香と絵理」 | |
| 304 | 第二十六話 「黒兎は夢を見る―はじめてのお泊まり・前編」 | |
| | 第二十七話 「ウサギ再生産―はじめてのお泊まり・中編」 | 316 |

第二十八話「わたしの蹉跌が作る塔はじめてのお泊まり・後編」

328

第二十九話「モデラーズ・ハイと暴徒と鴨とエリイと兎」――

338

第三十話「白兔の舞う空とエリイ、戦場をその手に」――

350

幕間其三「ワンダリング・シルバリイ・ドリーム」――

362

第三十一話「翔るワン・ナイト・パーティーと今日もGBNは平和です」――

369

第三十二話「GBNの木漏れ日とあたしに何か足りてない」

384

第三十三話「チイの迷宮遠征録とご注文は14ですか？」――

393

第三十四話「星追いのアイカと邂逅する宿星たち」――

406

第三十五話「瞬くは導きの星とあたしが選んだあたしへと」

418

第三十六話「ミラー・ミラーとあたしの目線で見えるもの」

430

第三十七話「あたしリスタートと砂糖の返礼にとびきりのコーヒーを」――

444

第三十八話「舞い降りる黒銀の剣とアイカ、その巡礼へ」――

458

第三十九話「可能性の心核とレイズ・ユア・ハンズ」――

470

第四十話「仮想の岸辺でヴァカンスをくヤンデレ・サマーバケーション！」――

481

第四十一話「轟け真夏のキャノンボールと邂逅は戦鐘と共に」

491

第四十二話「黄昏ビーチサイド・ハニーと誓いのコア・チェンジ！」

505

第四十三話「架空の星の御伽噺〜新たに描くフェアリー・テイル」

517

第四十四話「^ゴ利用は計画的に〜ホーム・リビルド・スウィート・

ホーム」

530

第四十五話「あの忘れえぬ日々〜彷徨える黒銀の剣」

540

第四十六話「放浪の戦女神〜ゴールド・ドーンはまだ遠く」

551

第四十七話「邂逅、黒銀の亡霊〜再会、戦友よ」

564

第四十八話「誠意は金額だけではない〜アキノ、その訣別と挑戦」

577

第四十九話「リビルドガールズ、決戦開始〜チイの小さく大きな”

約束”」

589

第五十話「機動人形は未来の夢を見せるか〜亡霊が討ち果たされた

日

602

幕間其の四・特定電子生命体の誕生及び「閲覧権限がありません」

616

第五十一話「例えば塗装後に接着したパーツがもげるようなくアイ

ネ・クライネは突然に」

622

第五十二話「色褪せた空の下で〜電海カテドラル、あたしの小規模

なりライズ」

632

第五十三話「幸運にも黒塗りの高級車に拾われてしまう〜凜音、再

び

644

第五十四話「デカール仕掛けの現実（リアル）〜リライジングお嬢

様！」

655

第五十五話「モラトリアムとナラティブと〜あたしたちの小さな再

第五十六話「按手の誇り、仕手の謀り〜ヴィジランテ、今は」

679

第五十七話「誰が仕組んだ地獄やら〜開幕する饗宴（狂宴）」

692

第五十八話「その時、宇宙（そら）で〜チイの猿山逃亡録」

705

第五十九話「その日、流星は翔（と）んで〜リビルドバンガード、ミッション開始！」

718

第六十話「誇りと勇気の御伽噺（フェアリー・テイル）〜再び繋がるブーケトス」

731

最終話「それは世界で例えようがない」

749

リビルドガールズ・エクストラミッション

Ex. 01:「割と平穏なGMの一日〜プラスチックの雨が降る」

761

Ex. 02:「闘えバンデット・レーサーズ〜チイとイリハの小さな木漏れ日」

767

Ex. 03「恐れと畏れ〜FOEさんと奇妙な夏の日」

775

Ex. 04「シルバー・ブルースと積みプラの塔〜チイの小規模なお怒り」

784

Ex. 05:「バトリングお嬢様!〜お嬢様でなくなった者は失格となる」

795

Ex. 06「あたしの小さなやり残し〜星追いのコアガンダム（ふたり）」

804

Ex. 07「予兆〜或いは我らの決戦前夜」

814

E x . 0 8 「このGBN（せかい）の明日のために」ご注文は号砲
ですか？」
824

E x . 0 9 「きみの描く未来へ」あたしたちのRe：RISE」
836

L a s t M i s s i o n : 「いつか大人になって」
853

第一話「例えばABS関節にエナメル塗料でスミ入れするような」

だから、やめるを押ししておかなくやいけなかつたんですね。

その時ダイバーネーム、アイカの脳裏をよぎったのはそんな言葉だった。

右を向いたら爆発音、左を向いたらどこから飛んできたビームで四散する名前も知らないダイバーのガンプラ。

『ヒヤッハー!』

そして今時、アセットの素材をそのまま貼り付けて作っただけのゲームにも出てこないような世紀末的奇声を上げながら自分たちを追いかけてくる、全身にトゲを生やしたガンプラたち。

——なんだこれ、地獄か？

世界初の電子生命体、ELダイバーを生み出して、今やガンダムに詳しくないこれらの女子高生も第四の世界としてログインする花形フルダイブオンラインゲーム、「ガンプラ・バトル・ネクサス・オンライン」、通称GBN。

アイカも、例に漏れずその華々しいイメージを抱いていたのだが、初めて受けたミッションで飛ばされた先にあつたのは世紀末もかくやという地獄だった。

これをどんな気持ちで受け止めればいいのか、そんなことを考える余裕さえアイカには残されていない。ただ許されるならこんな場所をGBNに作りやがった開発者を一発殴りたかつた。

自身を狙つてのものもそうでないのも含めて、今もアイカがダイブしたディメンション——ハードコアディメンション・ヴァルガには梅雨空模様のように四方八方へと弾幕砲火が降り注いでいる。

「……ど、どうして、こんなことに……」

ぼそぼそと、蚊の鳴くような声で呟いた銀髪の少女が通信ウィンドウに映し出された。エリイ、とダイバーネームが表示された彼女こそが、今のところアイカの暫定パーティメンバーであり。

「だ、大丈夫！ あたしが聞きたいぐらいだから！」

——全ての元凶だった。

なんのフォローにもなっていないが、精一杯の明るい言葉を返して、アイカは自身が操るガンプラのブーストを全力で噴かす。

死んでペナルティがあるゲームではない。それでも、飛んでくる弾幕砲火の臨場感は否応なくアイカに死を想起させる。

ピンク色に染められ、ヒール状のパーツを脚部に接続し、腰回りのアーマーと頭部アーマー以外に追加装甲を装備していないコアガンダムー「コメットコアガンダム」と、コンポジット・シールドブースターを二枚失ったTR-6「ヘイズルII」はただ、降り注ぐ暴力の雨から逃げ回るしかなかった。

二人の受けたミツシヨンの内容は、「一個の花を納品する」だけだというのに。

何をやっても中の上だった。

指定された棚にガンプラの箱を並べながら、朝村愛香は己の半生をそう振り返る。

運動会で精一杯走っても三位を取るのが先の山で、それなりに本気でやってたはずの中学の吹奏楽部はダメ金に終わった。ならばと趣味に力を入れてみたけれど、愛香の作った手芸品に付いた値段の最高額は300円、1円の価値にもならないものをいくつも積み上げた上での結果だった。

今もテレビを見れば、同じくらいの年頃で名誉ある功績を受けた高校生がいる。本屋の雑誌コーナーを見れば、同じくらいの歳で、カリスマ読者モデルとして華々しくファッション紙の表紙を飾る高校生がいる。

上を見たらキリなんてないのかもしれない。もしかすれば、そんな愛香の中の上な、植物のような人生を望んでる人だってこの世のどこか、具体的にはこの国の北の方にいるのかもしれないけど、それでも。

「なんなのかなあ」

「それならバウですね、こっちの棚じゃないですか？」

「ありがとうございませーす」

お前には聞いてないしそういう話でもねえよ。

いらぬアドバイスを送ってきた知らない男に溜息を噛み殺した愛想笑いでそう返しつつ、バウというらしいオレンジ色のモビルスーツが描かれたガンプラを言われた通りの棚に並べる。

ガンダムベース。お台場近郊にそびえる実物大エールストライクガンダムを目印にした巨大ショッピングモールであり、愛香が店員としてバイトに従事している店の名前だった。

ガンダムのことは詳しく知らない。今並べているガンプラがバウでもザクでもなんでもいいけれど、ここは時給がずば抜けて良い。

学校から通いやすいのもメリツトだ。

一応、同級生の中にはここに置いてあるゲームをプレイする為熱心に通っている男子がいることは覚えているし、何度か顔も合わせている。けどその、確かクガといったか——彼と話したことは、一度たりとて愛香の記憶にはない。

愛香とガンダムの接点は、今まではその程度のものでしかなかった。

だが、愛香は世界を変える力を見た。

その映像を見たのはただの偶然だった。平時の業務は品出しがメインで、レジ打ちに立っているのはベテランの店員だったから、必然的にゲームブースに関わることもなかったのだが。

『私たち、「アルス・ノヴァ」です！』

世界のどこかで蝶が羽ばたいたことが、また違う場所で竜巻を起すように、きつと併設されたカフェで飲み物を頼もうと思わなければ、壁にかけられたスクリーンに映し出されるライブ映像を愛香が見ることはなかった。

特別なことは何も無い。そのスクリーンはGBNで配信されているライブ映像の種類を問わずランダムでピックアップして流しているだけのものだ。

猛者たちの激戦が拝めることもある。或いは不動のチャンプ、クジヨウ・キヨウヤが直々に高難度ミッションの攻略法を教授してくれ

ることもあれば、なんてことはない、ただデイメンジョンを行き交う人々の様子が映し出されるだけの時もある。

愛香が見たものは、「ノゾミ」というダイバーネームを掲げる、栗色の髪を二つ結びにまとめた少女をセンターにした三人組が、何やらピンク色に染められたストライクガンダムの掌で歌い、踊るというライブ配信だった。

「……かわいい……」

その言葉を、誰が呟いていたのかはわからない。愛香自身だったのかもしれない。他の誰かだったのかもしれない。

ただ、アツプテンポなガンダムの劇中挿入歌を完璧にコピーした振り付けで歌い、踊る少女の姿は、閉店時間間際に残っていた客が顔を突き合わせてそう呟く程度には愛らしいものだったといえる。

そして、その光景は愛香の固定観念を破壊するには十分なものだった。

「……GBNって、バトルだけじゃないんだ」

よくわからないけれど、ガンプラを組んで、スキャンして、果てのない頂点を目指して戦い続ける。

それが愛香をはじめとして、GBNというゲームに対してさほど興味のない人間が抱くステレオタイプであったし、GPDから移行したプレイヤーが多い稼動初期はそのような色が濃かったのもまた事実だ。

だが、ガンプラは、GBNは変わった。

その最たる理由である電子生命体——ELダイバーの出現とそれに伴う激戦や犠牲について、愛香が知ることはない。

それでも、彼らが、ビルドダイバーがもたらした未来と多様性の結実として、18メートルに拡大されたガンプラの掌で歌って踊るアイドルが、ガンダムベースの店内でそれこそアイドルのように来客から笑顔を向けられるプラスチックの身体を持つ電子の少女がいる。どうしてかはわからない。

アイドルをやるなら、現実でだってできたはずだ。それでも、あのノゾミという女の子はあえて、GBNを輝く舞台に選んでいる。

不思議だった。だが、その不可解さが、いつてみれば非合理性が、愛香の心を強く揺さぶっていた。

『キャプテン・ジオンの——』

アルス・ノヴァと名乗った少女たちが一曲歌い終わった辺りでライブ映像は切り替わり、今度は赤と黄色のツートンカラーに彩られた全身タイツに身を包んだ、筋骨隆々とした大男がモニターに映し出される。

不審者かと、それが愛香の率直な感想だった。

いやだって、さっきの感動も消し飛ぶ極彩色の全身タイツだ。不審者じゃなければツイスタに昼飯の画像でも毎日上げてそうな感じの人だ。

どうしてくれんだこれ、と、憤慨混じりに飲み終わったフラペチーノの容器を握り潰して愛香が立ち上がろうとした、その時だった。

『今回紹介するのはこの「コアガンダム」だ。私が見かけた——』

どうやら、昼飯の画像でも上げてそんな人の配信は制作講座らしい。

画面に大きく映し出された、クリスタルパーツを胸部に飾るガンダムの姿は、一応バイトで一通りの商品には目を通して愛香の知らないものだった。

まず、小さい。

昼飯の人が作ったらしいオリジナルのガンプラと、エールストライクガンダムとコアガンダムを比較した画像へと画面が切り替わるが、その大きさはまさに大人と子供。

彼の愛機、レージオンガンダムが大きめなことを差し引いても、それでも標準サイズのエールストライクと比べても尚、コアガンダムは小柄な体躯だった。

愛香はガンダムについて詳しくは知らない。昼飯の人がどんなプレイヤーで、辛うじてエールストライクがどんなガンダムか知っている程度だ。それでも。

「……かわいい」

コアガンダムに愛香が抱いたのは、奇しくもノゾミを見た時と同じ

感情だった。

一言で表すのならばきつとそんな陳腐な言葉に押し込められるかもしれない感情。だが、ノゾミの歌にも、コアガンダムの姿にも、そこには他人を突き動かす、大きな想いともいえるべきものがあったのかも知れない。

駆け出していった。

忘れないために。一秒でも早く、家に帰るために。

いつしか忘れかけていた情動に突き動かされるがまま、愛香は走り出す。

ノゾミ。アルス・ノヴァ。あえて、戦うために電子の海を泳ぐ人々のひしめくGBNでアイドルをやっていた、女の子たちのこと。コアガンダム。あの可愛いガンダムのこと。

何かが、できそうな気がした。

きつと、いつだってそうやって勘違いに終わってきたかもしれない、それでも忘れることのできない、捨てることのできない高揚感。

愛香は、何かになるうとしていた。何かを、作り上げようとしていた。

ここじゃないどこかで——ガンプラバトル・ネクサス・オンラインで。

「我ながら、初めてにしては上手くやったのかな？」

アーカイブ化されていたキャプテン・ジオンの制作講座と睨めっこをして一ヶ月、果たして愛香の鞆の中には、いわゆるへの字スリットがなかったり、細部こそオリジナルと違うものの、ほぼ記憶と映像の姿を再現したコアガンダムの姿があった。

ガンダムベースの中に併設されている制作ブースでは3Dプリンターや射出成形機が無料で貸し出されていることもあって、初心者でも思い描くパーツが作りやすいのは追い風だった。

初めて客として足を踏み入れるゲームブースのどこか剣呑とした空気に、愛香の心臓が早鐘を打つ。

「確かガンプラをセットして、ゴーグル被ればいいんだっけ」

事前にバイトの先輩から受けた説明をなぞり、愛香は完成したばかりのコアガンダム——ピンク色に彩られた「コメットコアガンダム」をダイバーギアにセットして、ゴーグル型のデバイスを装着する。

『GPEX SYSTEM START UP——』

「それじゃ……行きますか!」

長いエレベーターで永遠に降下するような、意識が下へと引つ張られていく感覚と共に、エントリーを決定した愛香の意識は電子の海へと転送され、そこで再構築されていく。

校則に引つかからない程度に色を抜いて、ボブカットに切りそろえた薄茶色の髪は、ふわふわとウェーブのかかった機体と同じ桃色に。瞳は青く染まり、その中心には星が煌めく。

そうして愛香は生まれ変わる。愛香からアイカへ。瞬きをするより早く、ダイバー……GBNのプレイヤーを総称する言葉としての姿へと。

「アカウントは一ヶ月前に作ってたんだけどねっ☆」

ふわり、と、意識と同時に愛香、もといアイカの両足がエントランステイメンジョンに着地する。

こうした感覚のフィードバックは最近まで曖昧なものだったらしく、はつきりと感じられるようになったのはここ数ヶ月のことらしいのだが、正直アイカとしてはどうでもよかった。

むしろアカウントを作らないとG—Tube——あのモニターに映されていた、GBN内の動画配信サービスが見られないことの方が改善してほしいぐらいだった。

おかげで自分のように動画を見たりするためだけにわざわざアカウントを作る人がそこまで珍しくないことを知れたのはよかったけど。一人眩いて、アイカは当てもなくエントランスを歩き回る。

「初心者向けって言ってもさ、最近の公式ミッションって難易度高めになってるんだよ」

「あ、あの、ええと……」

「んん?」

その声が聞こえたのは、歩いて5分も経たないうちのことだった。何やら、不穏な空気だ。アイカは、声のした方に視線を向ける。

エントランスの端の方、茶髪の男が何か自販機らしきものが二つ並んでいる隙間に話しかけている。

まさか自販機に話しかけていて、自販機が答えてくれるほどハイテクなゲームってわけじゃあない。それに、答える声は明らかに困惑とかそういうものが滲み出ていた。

アイカが近付いても、人の良さそうな笑みを浮かべて自販機の隙間にいわゆる壁ドンをしている男は気付く様子もなく、何やら隙間の主と思しき銀髪の少女にぺらぺらと語り続けている。

「俺ら情報屋ってさ、そういう初心者お断りなこのゲームを変えていきたいんだ、エリイちゃんだっけ？ ロビーミッション受けようとしてたみたいだけどやめといたほうがいいよ、代わりにこっちのミッション受けたほうがいいって。簡単だしさ、報酬だって相場よりいいよ？」

——うさんくせえ。

明らかにエリイと呼ばれた子は怯えてるし、この手のゲームで聞いてもなさそうな初心者に積極的に関わろうとするのはよっぽどの変わり者か、もしくは。

「そのお話、ちよつと私にも聞かせてもらっていいですかっ？」

「ん？ 構わないけど……キミは？」

「私、アイカです。始めたばかりでなんかよくわかんなくて」

「……ふうん、ちよつとプロフィールカード見せてもらっても？」

「どうぞ☆」

何が悲しくて開幕早々ロールプレイを崩したくなるような奴の相手をしなくちゃいけないんだ。

内心で舌を出しつつも、アイカは笑顔を崩さず出来たての初心者丸出しといったプロフィール画像に定型文だけが書かれたカードをスクリーンに提示する。

(……エリイだったっけ、なんかどっかで見た気がするんだよね)

情報屋を自称する男がアイカのプロフィールカードを穴が空く勢

いで睨め付けている間、アイカは自販機の隙間で震えているエリイを見つめていた。

知り合いというわけではない。アイカは正真正銘、エントランスに降り立つのは今日が初めてだし、リアルでGBNをやっている知り合いも、同じ学校に通っているというだけで、話したことすらないクガ……クガ・ヒロトぐらいしかいない。

というかそもそも話してないなら知り合いですらないのかもしれない。

ただ、エリイの姿にはどこか引つかかるものがあつたのだ。

アイカが既にそうであるように、ダイバールックは作ろうと思えばいくらでも作れる。現実世界の性別すら電腦の技術は超越する。それでも、中身までロールプレイする人間はこの時代でも少数派だ。

そして、あんな風に何かに怯えているような振る舞いをするような人間は、アイカの中に心当たりがないわけでもない。

「……OK、本物みたいだね」

「本物、ですか？」

「高ランクが初心者になりすましてパワーレベリング……まあ初心者の代わりに一人でミッションクリアするのは良くないからね、じゃあ二人がパーティー組むってことでいいのかな？」

自称情報屋は手際よくコンソールを操作しながら、エリイとアイカに問いかける。

「エリイちゃんだったよね？」

「……ひう……あ、あの……は、はい……わたしは、エリイです……」

「うんうん、私はアイカ。初心者同士よろしくねっ☆」

どうにもシャイな子みたいだ。アイカが震えている両手をそつと包み込むように握ると、エリイは顔を真っ赤にして目を逸らしてしまう。

「それじゃパーティー申請してからこのクリエイイトミッションを承認してもらっていいかな、アイカちゃん」

「はいっ☆」

思えば、ここでもいいえを押ししておくか、文面をよく読んでおく必要

があつたのだ。

例えば、インベントリの中身を確認してなかったせいで特定のアイテムを持つっていると崩落するギミックが仕掛けられた橋から落ちこちるかのよう。

誤差で済ませてきたことが蓄積して洒落にならないロスになり、そのせいでお祈り運ゲーを強いられたり。

つまり、アイカと、エリイが犯したのはそういう類の、どこにでもありふれたミスだった。

『クリエイトミッション：薬草を集めよう！』

『参加推奨ダイバーランク：F、クリア条件：指定されている座標に咲いている花の収穫と納品』

『ミッション開始地点：ハードコアデイメンション・ヴァルガ 北部都市残骸地帯』

『このクリエイトミッションを受領しますか？』

『YES』『NO』

「それじゃ行こつかエリイちゃん」

「……は、はい……よ、ろしく……よろしく、お願い、します……」

コンソールにつらつらと浮かぶ文字列を斜め読みして、アイカとエリイはそつと、YESの文字に指を置く。情報屋を自称する男がほくそ笑んでいるのにも気付くことはなく。

そうして始めたの二人は、いきなり地獄への片道切符を購入するのだった。

第二話 「世紀末GBN伝説」はじめてのおつかいはモヒカンと共に」

あなたは何のためにゲームをしますか。

そんなことを問いかけられた時、理由を大雑把に括れば人類の概ね大半はどんな御託や綺麗事を並べようと「自分が気持ち良くなるため」と答えるに違いないと、アイカはそう確信している。

故に、クソゲーとは忌むべきものである。

時折、何かに取り憑かれたかのようにクソゲーの蒐集と打破に命を賭ける人種も存在しているし、現に名前こそ覚えていないがアイカの学校にもクソゲーハンターと名高い少年がいるのだが、まあ、それ自体が一種のバグのようなものだから割愛しよう。

クソゲーは三種類に分けられる。

そんなモノローグと共に、アイカは脳内で戦闘機が飛び交う映像と共に、インタビュウを受けた兵士が指を3本立てて順に折っていくのを幻視する。

一つはバグまみれのやつ。ファイナルな感じの剣と魔法の世界で動く床になったら床だけが動いてプレイヤーが落下死したり、テキストボックスを持ち出してテクスチャの裏側に侵入できたり、果てはゲームとして成立しているかも怪しいようなものだ。

もう一つは、純粹につまらないやつ。シナリオが退屈だとかシステムが単調で苦痛だとかレベルを上げて物理で殴ればいいとか、ゲームへの介入がただお祈りするだけという絵のついたおみくじみたいな、そういうあれだ。

そして、今は――

逃避していた思考が炸裂音と共に仮想現実へと引き戻される。

アイカは今、エリイとハードコアディメンション・ヴァルガなる場所ので納品ミッションを受けている最中なのだが、目の前に展開されているのは世紀末もかくやという地獄そのものだった。

『ピヤッハー！』

「今時テンプレ悪役ですらそんなこと言わないよね!？」

「あ、あう……わわ……っ……!」

攻撃用途なのか趣味なのか、ハリネズミのようにスパイクを生やしたガンプラたちが、世紀末な奇声とともにビーム砲やら火炎放射器やら思い思いの得物を手に、アイカの「コメットコアガンダム」と、エリーの「ヘイズルⅡ」を追いかけ回す。

初心者向けのお使いミッションを受けたらモヒカンの集団に襲撃された。

単純に今の状況を言語化するならこうなるのだろう。操縦桿型のコントローラを握り締める手に汗が滲む嫌な感覚に、アイカは眉を潜める。

「……変なとこまでこだわってるんだなあ」

「……か、感心してる、場合……じゃ……」

「うわっ、と!？」

『ヒヤハッ!』

五感のフィードバックはフルダイブMMOにおける、技術的な面でも倫理的な面でも大きな課題だが、どうやらGBNは挑戦を選んだらしい。

無駄な感覚に辟易して、溜息とともに捨て台詞を零している間にも、どこかから飛んできた流れ弾をアイカが回避したことで、射線上にいたモヒカンの一機が爆散する。

「たまやー☆」

汚い花火だ。そうじゃなければ天誅だろう。

天誅と言っておけば概ねこんな感じのリスクや袋叩きが許されるクソゲーがあるなんて、巷で聞いたことはあるが何かの冗談に違いない。

スラスターを吹かしてモヒカンから逃げ回りながら、アイカは何度目ともしれない溜息をつく。

「にしても、逃げるだけなら結構なんか……」

スタート地点が市街地だったのは、不幸中の幸いだった。アイカの機体もエリーの機体も、標準的なガンプラと比べれば小柄な方だ。

対して、モヒカンカスタムのガンプラ群は無駄な装飾で大柄になっている。

それだけではなく、自動二輪や或いは四輪型のサポートメカを携行しているなど、市街地という障害物や遮蔽物だらけの場所で戦うには制約が多い。

加えて、集団で固まっている以上、誘爆や誤射を恐れて範囲攻撃も制限される。

それに、嬉々として数の暴力で初心者をつけ狙うような相手だ。お世辞にも個々のスキルレベルが高いとはいえない。

逃げ回るだけ、という条件をつけるのであれば、アイカとエリイでもなんとかなる範囲ではあるのだ。

「ねえ、エリイちゃん」

「……な、なんですか……？」

「GBNって全体的にこんな感じなの？」

基本的に戦闘狂が上位を占めるゲームだということはアイカも事前に調べて知っていたが、今の状況は明らかに常軌を逸している。

「……あ、あの……その。ご、ごめんなさい……わたし、なにがなんだか……っ」

「だよねっ、あたしも変なこと聞いてごめん……」

涙をこぼしながら、エリイはしどろもどろにアイカの問いへ答えた。

思わずエリイに問いかけていたが、彼女も紛れもない初心者だ。このゲームの内情についてなんて、詳しく知るはずもない。

アイカたちは知る由もないが、このハードコアディメンション・ヴァルガという場所は所謂プレイヤーキル行為が許可されている、超が付くほどの危険地帯だ。

MMOにおいてプレイヤーキルは大きなペナルティを課される重罪だが、そのスリルを楽しんでか、或いは弱い者をいたぶる嗜虐行為に酔っているのか、それとも単にバーサーカーなのかはともかく、それでも、あえてその罪を犯す道を選ぶプレイヤーは絶えない。

GBNにおいては、通常のディメンション内であれば相手にバトル

の申請をして、受諾された場合のみ戦闘行為が認められており、無許可での攻撃や撃墜に関しては重いペナルティが課せられることになっている。

当然、プレイ人口が多ければ多いほどこの問題は深刻化し、アクティブユーザー2000万人以上を抱えるこのゲームなら言わずもがなだが——一言で済ませるのなら、このディメンションが作られた理由は事実上運営が匙を投げたのに等しい。

要は隔離だ。PK行為を合法化する場所を作って、そこにそういうプレイヤーを収容しておけば通常ディメンション内において運営が介入せざるを得ないほどの事態は避けられる。

もちろん、ユーザーからフリーバトルが可能な区域を作ってほしいという声があったのも確かだが、ハードディメンション・ヴァルガの成立にはそういった後ろ向きな意図があったことは否定できない。

当然、アイカたちには、いや、おそらく彼女たちを追いかけているモヒカンたちにさえ知り得ないことだが——

「エリイちゃん右！」

「は、はい！」

乱立するビル廃墟群の隙間を縫うように、アイカとエリイはモヒカンたちから逃れていた。

ミッションの目的である花が存在する座標からは遠ざかっているが、まずはこのモヒカン共をどうにか振り払わなければ先には進めない。

ざっと見積もって十数機。横目に見たレーダーで明確に自分たちを追いかけている数は概ねそのくらいだった。

敵対を示す赤い点は各所に腐るほど配置されているが、アイカとエリイを示す青と黄色の点を追いかけているのはそれくらいだ。

遭遇当初はもつといた気もするが、恐らく流れ弾に巻き込まれて消えたのだろう。

数が減ったことで解禁されたのか、飛んできたミサイルポッドの弾頭を頭部バルカンで迎撃しながらアイカは考える。

(……まずい、かも)

コンソールの右側に映ったエリイも、同じことを予見していたのだろう。その瞼には涙が滲んでいた。

市街地は当たり前だが迂回路が多い。

ビルとビルの間隙や狭い場所、遮蔽物が多いという条件は二人の逃走には有利に働いていた。

だが、動き回らなければ確実に撃たれる以上、いつまでも身を隠しているわけにはいかない。

このまま逃走経路を維持すれば、アイカたちの行き着く先は開けた交差点だった。かといって迂回を選べばそこには自分たちよりは少なくとも腕がいい、三人以上で固まっているモヒカンを撃破しなければいけない。

恐らく、仕向けられていたのだろう。

——してやられた。

ぎり、と、奥歯を噛み合わせながら、ひび割れた道路を蹴って、ラスターを吹かして。

二人は、見事に交差点へと追い込まれた。

『派生機とはいえウインドウォートだ、兎狩りって風情だな』

天までそびえる赤いモヒカンに、今まで通信ウインドウに割り込んできた連中より一段豪華な金色のエンブレブが施された男が舌舐めずりをしながら哄笑をあげる。

トゲヤリベットまみれになっていて原型はわからないがザクⅢの派生機なのだろう、男の狩るカスタムモデルを中心に、残存するモヒカンカスタムたちは背中合わせになったアイカとエリイを包囲するように円の陣形を組む。

「誘われてた、ってこと？」

『そうよ、囲んで殴るのはこの手のゲームの常道だからなア……』

物言いこそ荒っぽいが見た目より切れるやつだ。アイカはエリイに聞こえないように、小さく舌打ちをする。

恐らくあれがモヒカンたちのリーダーなのだろう。多産多死を前提とする魚類の産卵か、そうでなければミツバチの蜂球のように、流れ弾や反撃による脱落者を前提にしながら数で圧殺する。

なぜそこまで初心者狩りに熱意を上げているのかはわからないしわかりたくもないが、戦術としては極めて合理的だ。

「あ、ああ……っ……うう……」

そうなれば、囲まれているのがスズメバチならいざ知らず、同じミツバチかそれ以下の小虫に等しい自分たちなら最早未来は決まったも同然だ。

それを察してか、単にモヒカンたちに怯えてているのかーエリイは操縦桿から手を離し、はらはらと涙をこぼしていた。

だが。アイカはじりじりと格闘武器を構えながらモヒカンたちがにじり寄ってくる間に、コンソールを一瞥する。

元々この機体は戦うために作ったものじゃない。

そもそも、戦いたくてGBNに来たわけでもない。それでも。

それでもこのコアガンダムだって、今は星屑にも満たないコメットコアガンダムだって、ガンダムだ。

頭部バルカン。右手に保持しているコアスプレーガン。そして背部に二基装備されたビームトーチ。

どれも、あの重装甲で覆われたモヒカンたちを撃破するには足りないだろう。

だとしても。

「……あたしはいいよ」

『うんっ?』

「理不尽とか報われないとかバカを見るとかそういうの、割と慣れるから。でも……」

通信ウィンドウに映るエリイはへたり込み、子供のように泣きじやくっている。

別に、この子に何か義理があるわけじゃない。

知り合って数分の間柄だし、初心者狩りだってオンラインゲームなら是非はともかく風物詩だ。今泣いていても、それがいつか笑い話になるなんて、誰かは言うのかもしれないけど。

「初めてのGBNがこんな、泣いてる女の子を囲んで殴るクソゲーであつちや堪えないのよー!」

GBNは、こんな場所じゃない。

アイカは咆哮し、コアスプレーガンの特リガーを引く。

ただの主観で、感情論だ。事実としてこのディメンションでの無差別攻撃を運営は容認している。

それでも、きつとあのエリイという子も、何かを求めてここに来た。そして今怯えて泣いているということは、こんな戦いを望んでいないという十分な証左たりえるだろう。

アイカにはアイカの理由がある。そしてきつと、エリイにもエリイの理由がある。

お節介かもしれないけれど、この子は泣くほど怖がっているのだ。なら、そんな恐怖に彼女の理由が押し潰されていいなどという道理はない。

トリガーを引く。引く。引く。激昂に任せて、アイカは右手の指を動かしていた。

果たして、真正面にいたザクⅢのカスタムモデルに、コアスプレーガンから放たれたビームは確かに全弾直撃した。

だが、その全てが胸部装甲に弾き返されて、虚しく宙へと霧散していく。

『へっ、何かと思えば中二病かい、フルダイブだろうがゲームはゲームだ』

楽しんだ奴が勝つ。それがどんなに最悪で、倫理や人道に背いても、多くの人間に嫌われたとしても。

そうだろう、とばかりに全てのビームを弾き返し、モヒカンたちの哄笑の中、リーダーとその愛機は背負っていた巨大なヒート・ホークを構えてアイカたちの前に悠然と歩を進める。

弾は尽きた。それ以前に全て弾かれた。

アイカは反射的にコアスプレーガンを投げ捨て、背部のビームトーチへと右手を伸ばしていたが、コメットコアガンダムの出力では、あの太斧と切り結ぶことは不可能だろう。

(……やられるしか、ない、か)

だとしても、一秒でも長く。

絶望し、頽れたエリイの機体を背に、アイカもまたモヒカンたちの元締めを睨んで前へと歩を踏み出した。

『やるってかい、いいねエ……そういうの、久々に生きがいいのに会えたア。おいお前ら、そっちのヘイズルⅡはやるから見とけ』

『わかりやした、ボス！』

無駄なタイムマン。スプレーガンを避けなかったように、恐らく装甲差と攻撃力の差を見せつけて絶望させようとしているのだろう。だが。

アイカはビームトーチを構え——それを思い切り投擲した。

『あん……？』

相手は装甲による防御へ頼り切っている。

それがアイカの見解だった。そして、答えを示すように投擲したビームトーチに対して、モヒカンリーダーの反応は一瞬だけ遅れた。

機体を傾け、頭部を狙って放たれたビームトーチをモヒカンリーダーは回避する。

が、刹那。

「これでえっ！」

『何……ッ!?!』

アイカの機体から放たれたビームが、敵のメインカメラを焼く。

スプレーガンで威力が足りないなら、ライフルを撃てばいい。

頽れたエリイのヘイズルⅠEが取り落としていたビームライフルを構え、コメットコアガンダムは頭部を失った敵機を毅然として睨み付けていた。

『く……ッソ、てめエ！』

メインカメラを失ったことで視界が不安定になったのか、やや怪しい挙動で正面に向き直りつつ、ザクⅢのカスタムモデルが手にした大斧を振りかぶった。避けられる。

大振りな一撃で、相手のメインカメラも破損しているなら、尚更だ。だが——

「……ぐすっ、えぐっ……うう……」

アイカの後ろにはエリイがいる。

泣いている彼女を見捨ててまでこの男と戦いを続けたいわけじゃない。

ただ、キレた。我慢ができなかった。それだけのことなのだから。ふつ、と自嘲するようにアイカは笑って、通信ウインドウを開く。

「エリイちゃん」

「…………ご、ごめんなき、わた、わたしの、せいで…………つ…………！」

「泣かないで、次はちゃんとロビーでミッション受けよっか」

一緒に。

せめてもの償いに、と、優しく微笑みかけながらアイカは振り下ろされる死を受け入れることにした。

だが、その瞬間だった。

『…………ミネルヴァ・ブラスト！』

どこかから、凜とした叫びが聞こえると共に、豪炎がアイカたちの眼前を走る。

『なん…………ぐああああっ?!』

『ぼ、ボス！ うわあああっ！』

しかし、巻き起こる炎はアイカとエリイを包み込むことなく、彼女たちを包囲していたモヒカンだけを的確に舐め、そしてその重装甲をも焼き尽くしていく。

ばらつきはあれど、全てのモヒカンが灰になるまでの時間は平均しておよそ五秒もかからなかっただろう。

炎が走った方角を振り返り、アイカはごくり、と生唾を呑み下した。

『守ろう心の南極条約…………初心者を狙って囲むなど、恥を知りなさい』

一瞬通信ウインドウに映った、長い金髪を左右で編み込んだ女性ダイバーはそう吐き捨てると、機体のスラスターを全開にしてアイカたちの間を通り過ぎていく。

「す、すごい…………です…………」

一瞬のことによく見えなかったが、巨大な剣を携えるあの女性の機体は恐らくシナンジュをベースにしたのだろう。

真紅のボディカラーに、各所のスラスター。アイカの中にあるガン

プラの記憶と多くの特徴が合致していたが、唯一剣以外で違うところがあるとするれば、頭部がモノアイではなく俗にいうガンダムフェイスに換装されていたことだ。

「あはは……」

捨てる神あればなんとやら、クソゲーの中にも一抹の輝きがあるように、助ける理由のない人を助ける物好きも世の中にはいるのだから。

どっと押し寄せる脱力感に、操縦桿へと突っ伏しながらアイカは曖昧に笑った。

いつの間にか、周囲を飛び交う弾幕砲火も収まり、乱戦のエリアは市街地から遠ざかりつつあるようだ。

無数の赤い点が市街地エリアから南下している——一応ではあるが、受けたミツシヨンの目標地点から離れているのを確認し、アイカは気を引き締め直すようにぴしやりと軽く自分の頬を叩く。

「いたた……こんな感覚もフィードバックされるんだ」

「……だ、大丈夫……ですか……？」

「うん、大丈夫。それより今がチャンスみたいだし、早くこのミツシヨンクリアしちやおっか☆」

「は、はい……！」

運悪く流れ弾に当たって死ぬかもしれないけれど。飛ばした冗談に、エリイは涙を拭って小さく微笑む。

——ああ、よかった。

何かなのかはわからない。だが、アイカたちは主戦場から離れる形で北進し、その後何事もなく納品用のアイテムを採取した時、アイカの胸にあったのはそんな安堵と高揚感にも似た感覚だった。

【Mission Success!】

クリアを示すウィンドウが開かれ、アイカたちの体は光に包まれてロビーへと転送されていく。

とりあえずあの男は運営に突き出そう。押し寄せる脱力感に身を任せながら、アイカは、そしてエリイは。

初めての勝利と、その凱旋を果たしたのだった。

第三話「はじめてのともだちく気になるあの子は同級生」

「ごめんなさいね、最近こういう手合いが多くてアタシも困ってるのよお」

頬に右手を添えて、悩ましげに首を傾げながら、筋骨隆々といった風情の体軀をくねらせて、紫髪のダイバー、マギーが嘆息する。

その左腕には、クリア報酬である100BC——ゲーム内通貨にして見ての通りの端金だ——をアイカたちに渡したクリエイトミッシヨンの発注主が抱き抱えられていた。

「はあ、そうですか……」

モヒカンの次はマツチヨか。

ロールプレイも忘れて、アイカは脱力感にがくりと両肩を落とす。

マギーがいうには、自分はそうした初心者狩りやシャークトレードを見つけては注意するお節介焼きで今回の件については別件の対処に回っている間のことだったために見逃してしまった、とのことだが、正直なところアイカとしては割とどうでもよかった。

それよりさっさとログアウトして家に帰って寝てしまいたい。それほどまでに、今回の一件でアイカの神経はすり減っていた。

「……あ、あの……っ」

「あら、何かしら？ えっと……エリイちゃん、っていうの。可愛らしいわね」

おずおずと手を挙げて、まるで自分風情にその権利があるのかとも怯えに両肩を震わせるエリイの右手を、宥めるようにマギーのそれが包み込む。

人の扱いに慣れているのだろう。オンラインゲームで相手のリアルを詮索するのは御法度だが、初めて会ったアイカにすらそう直感させるほど、マギーが取った一連の所作はこなれていた。

「……あ、あの。マギー、さんは……」

「ええ」

「……運営の、方……なんです、か……？」

エリイは自分の言葉を一語一語探り出すように、辿々しく問いかける。

確かに、初心者を騙す行為は褒められたものでこそないが、クリエイトミッションそのものは正式な手続きを得て受理されたものだ。

この手の機能で、作成主がクリア不能なミッションは認可されない。

実際に昔、十字キーとボタンで遊ぶタイプのゲームが流行っていた頃もそういうユーザー自身が作ったステージをアップロードするには、必ず作った本人のクリアが前提条件になっていたし、GBNも例に漏れずその黄金則を受け継いでいる。

「うーん、それを訊かれるとちよつと困っちゃうんだけど、アタシはただのボランティアよ。初めてのGBNで少しでも嫌な思いをする子たちが減ってほしい……って思ってたんだけど、中々上手くないのよね」

貴女たちにも、大変な思いをさせちゃったし。心から申し訳なさそうに眉を八の字に歪めて、マギーは小さく頭を下げる。

できた人だな、と、アイカはそう思った。

運営でもないのにこんなボランティアじみた活動を続けているだけでもお人好しだが、縁もゆかりもなければ恐らくダイバーランクも圧倒的に格下な自分たちに、ここまで真摯に接してくれている辺り、彼女の熱意は本物なのだろう。

「お詫びと言ったらなんだけど、これ、アタシがやってるフォースネストの場所。困った時はいつでも来て頂戴。相談に乗ってあげるから」
どんなことでも。

流れるような手つきでフレンド申請とフォース「アダムの林檎」が拠点にしているディメンションの情報をアイカとエリイに送りつけて、マギーは踵を返して去っていく。

その仕草は、一瞬二人を見惚れさせるほど優雅なものだった。

不思議な人だ。情熱に溢れているかと思えばクールで、キャラクターこそ濃いもののどこかキュートささえ感じさせる。

アイカもエリイも顔を見合わせて、ただ呆然と、雑踏に溶けて見えなくなるまで彼女の背中を見送ることしかできなかった。

「アダム的林檎……ってうわ、超有名ランカーじゃんっ!」

呆然としていたのも束の間、送りつけられた申請画面を右手で確認し、開いた左手で開いたサブスクリーンから検索ポータルにマギーの情報を打ち込むという芸当をこなしながら、アイカは表示された結果に驚愕する。

「……わ、わたしたち、なんかが……フレンドに、なって……あ、わたし……」

驚愕の事実と、そんな人物から飛んできたフレンド申請に慄いたのか、エリイはびくり、と、細い肩を大きく震わせた。

無理もあるまい。アイカだって突然の出来事に開いた口が塞がらないのだ。

失礼かもしれないが、自己評価が低そうなエリイからすればそれは天地がひっくり返るような事態なのだろう。

アイカはそう思っていたが。

「……あ、の……あの、っ……!」

「ん?」 どしたのエリイちゃん、どうも夢じゃなくて現実っぽいけど「現実には現実でも仮想だけだね、と右手で自分の頬を引っ張りながら、アイカは戯けてみせる。

まあ、受けて損がある話でもないだろう。悪い人ではなさそうだし、というかあれで裏は物凄い悪人だったらそれこそこのゲームで誰も信じられないし——と、マギーからのフレンド申請を受理しながら、アイカがぼんやりと考えを馳せていた時だった。

「……がうんです……」

「えっ?」

「ち、ちが……うんです、その、あの……わたし……」

何かを必死に伝えようとしているのだろう。突き出した両手を振りながら、頻りに左右を確認するという挙動不審極まる仕草と今にも消え入りそうな声で、エリイはログアウトボタンへと指先を伸ばすアイカの意識をこの場所につなぎ止めようとしていた。

「ん……何かあったの？」

「……あ、えっと、えっと……ご、ごめんなさい……っ！」

結局、何が言いたいのかわからないまま、エリイはどこか恥じ入るようにウインドウへ浮かぶログアウトボタンを押して現実世界へとほどけていく。

「……なんだったんだろ」

多分、何か大事なことだったのかもしれない。

訝りながらも、アイカも伸ばしていた右手を元に戻してGBNからログアウトする。

——あのマギーって人だったら、最後まで訊けたんだろうか。

途切れた言葉と、別に何も悪いことなんてしていないのに、必死に頭を下げ続けるエリイの姿が、脳裏に焼き付いて離れない。

それは長いエレベーターを延々と上っていく時にも似たような、意識を現実に戻す感覚——アイカが愛香に戻っていく間にも、消えることはなかった。

そして。

「……はー、つつかれた……」

ガンダムベース、シーサイド店のゲームブースに並べられた筐体の背もたれに体重を預け、アイカは気付けば深く長いため息とともに、そんな言葉を出力していた。

念願のGBNデビューを果たしたかと思えば初心者を騙そうとする悪質な奴に釣られて、即席のパーティーを組んで向かった初めてのおつかいは弾幕砲火とモヒカンの群れが跋扈する魔窟で、それが終わったかと思えばやたらと濃いキャラの超有名ランカーからフレンド申請が来て。

それほど長い時間ダイブし続けていたわけではないはずなのに、さつき起きた出来事を並べるだけで胸焼けがしそうだった。

なんとというか、カロリーが高すぎる。豚骨ラーメンの原液にタピオカを浮かべたものを喉に流し込まれたようだと、愛香は胃もたれにも似た感覚を抱え凝り固まった肩をほぐしつつ筐体を立つ。

だからなのだろうか。

「あ……っ」

「わわ……っ、ごめんなさい、あたし、周り見えてなくて……！」
不注意だった。だが、動かしていた身体は何かにつかっていたし、それが人であることも、蚊の鳴くような声が耳朶に触れたことで認識できた。

愛香はよろけるだけですぐに体制を立て直せたが、ぶつかってしまつた相手はそうもいかなかったようだ。

ぱたり、と、床に倒れ込んでしまう。

「すみません、大丈夫ですか!？」

痛々しい。それが、ぶつかってしまった相手——自分と同じ学校の制服を着て、腰まで届くほどに黒髪を伸ばした少女を見た愛香の率直な感想だった。

それは決してスラング的な意味ではない。彼女の右目と額は包帯に覆われているし、左の頬には絆創膏が貼られているという正真正銘、怪我人という出で立ちなのだ。

見ているだけでこっちの顔も痛んできそうな、どうしてガンダムベースまで足を運んでいるかが不思議なほどの重傷ぶりだ。

血の気が引いていくような感覚が、愛香を襲う。だが。

「あ……あ……わ、わた、しの……ガンプラ……」

「……へ？」

だが、少女の口から飛び出てきたのは痛みに対する苦悶ではなく、ガンプラを心配する言葉だった。

ぺたぺたと、手が汚れるのも厭わずにベースの床を触りながら、少女はぶつかった時に落ちてしまったであろうガンプラを探し出す。

(……もしかして、この子……)

包帯に覆われていない左眼は、サファイアを思わせる、綺麗な碧眼だった。だが、その焦点はどこか定まっている印象がなく、少女のすぐ右脇に落ちている白杖が、愛香の疑問を確信に変える。

「どい……どい……っ……？」

(見えて、ないんだ……)

恐らく白杖の存在は認識しているのだろう。だが、それが視認でき

る限界なのかもしれない。

右手で探り当てた白杖を握りながら、ぺたぺたと左手を突き回る少女のすぐ斜め後ろにある筐体近くに、それは転がっていた。

コンポジット・シールドブラスターを二つ欠いたハイグレードのヘイズルII。奇しくも、愛香が先ほどGBNで行動をともししていた機体と特徴を同じくするガンプラだ。

ヘイズルIIのキットにおいて、通常コンポジット・シールドブラスターはポリキャップを受けに持つ3ミリ軸によつて強固に接続されることを愛香は知らない。

だが、他にパーツが散らばった形跡が見受けられない以上、それが完全な状態であることは察せられる。

ぺたぺたと左手を突き回り、どこ、と繰り返す少女の左目にはじわりと涙が滲んでいた。

愛香はヘイズルIIを拾い上げると、壊れ物を扱うようにそつと、右手を少女の肩に置いた。

「あの」

「……は、はい……っ!? あ、ご、ごめん、なさい……ごめんなさい！ わたし、ぶつかって……」

「ううん、こつちこそごめんなさい。周り見てなかったから……それと、一つ訊いていいかな」

声が聞こえた方にゆつくりと、ぎこちなく少女が振り返るのを待ちながら、その左眼を見つめて愛香は問いかける。

「間違つてたら申し訳ないんだけど……エリイ、つて名前でダイブしてたりしない？」

ダイバーギアから回収したコメットコアガンダムを左手で差し出して、愛香は自身が「アイカ」であることを示したのだが。

「……っ……」

「？」

「えぐっ、ぐすっ……うええええ……っ……」

「えっ？ あ、ごめん！」

少女はあろうことか、火がついたように泣き出してしまった。

ちょうどログアウトしたのだろう。筐体から立ち上がった名前も知らないドライバーの冷ややかな視線を受けながら、愛香はとりあえず、暫定エリイである少女が泣き止むまで、針の筵と化したその場にとどまることしかできなかった。

「……はい、わたし……エリイ、です……」

カフェブースの隅っこにある二人席に腰掛けた少女は、赤く泣き腫らした左眼を拭いながらぽつりとこぼした。

フライドポテトとフラペチーノを二人分、愛香の奢りで注文する形でお茶を濁そうとしたが、それでもどこか気まずい空気は拭えない。やたらと塩気の足りない、芋そのものな味のするポテトをもそもそと咀嚼しながら、愛香はエリイが落ち着く頃合いを見計らって口を開く。

「あたしはアイカ。朝村愛香。同じ学校だったんだ、というか……」

「……はい、悠陽……悠陽、絵理です……あんまり、通ってないですけど……朝村さんと……同じ、クラスの……」

教室の片隅にほとんどいつも空白の席があることは愛香も知っていた。だが、それについて何か気を配ることはなかったし、こうして会うまで、悠陽絵理という人物がどんな出で立ちなのかははつきりと知らなかったし、知ろうともしなかった。

だが、縁というのは奇妙なものだ。

教室で出会うより先に、GBNでクラスメイトと出会う。それも一言で語り尽くせないような凄絶な経験と共に。

「なんか、あれだよね……色々忘れられないっていうか」

「……はい……」

漫画だろう。誰かに話すつもりもないが、もし語る機会があればそう自嘲したくなるほどにできすぎている。

「……あの、悠陽さん」

「……な、なんででしょう……」

「……怪我、大丈夫？」

恐らく通ってなかったのも、それが原因なのだろう。見るからに

痛々しい、ガンダムベースよりも病院の廊下で出会う方が似つかわしい絵理の有り様を見て、愛香は少し遠慮がちにそう尋ねた。

「……………ごめんなさい……………」

「悠陽さんは悪くないよ、怪我しちゃったのなんて……………」

「……………違うんです……………」

「へ?」

しかし、返ってきたのは愛香の想像、その遙か斜め上を突き抜けて成層圏すらぶち抜きかねないレベルの答えだった。

「……………ごめんなさい……………わたし、そ、その……………怪我、して、なくて……………ただ、その……………見えない、から……………目……………色、違うから……………それで……………」

無理やり笑おうと引き上げた唇の端がくしゃりと歪んで、絵理ははらはらと左眼から涙を零す。

——いじめられないから。

途切れ途切れの言葉で、絵理はそう呟くと、嗚咽を噛み殺そうと唇を引き結んだ。それでも彼女の涙が止まることはない。

(……………まずったなあ)

愛香は声には出さず、そう零す他になかった。

断片的だが、絵理の言葉から察するに彼女は視力と、恐らくその碧眼から迫害されていたのだろう。

そして恐らく、明らかな怪我人を装っていればそうした関わりを受けることを避けられると、そう思っただけで包帯を巻いていたということになるはずだ。

目が悪いことが先なのか、目の色が他の誰かと違うことが先なのか。そのどちらであつても、彼女を迫害してきた連中の罪の重さが変わるわけではない。

愛香はそのどちらにも特別な感情は持っていないなかった。絵理の視力が悪かろうと、絵理の瞳の色が自分と違っていても、それが何か自分にとって特別な意味を持つとは思わないからだ。

だが、知ろうとしなかった。

きつと、言葉一つ紡ぐのにさえ自信を持ってないほどに追い詰められ

ていた女の子が、同じクラスにいたことを。

——ならば。

ずきり、と、胸の奥が鋭く痛む。その感覚を踏み付けて、歩を進めるように愛香は必死に思考を巡らせて、探り当てた言葉を紡ぐ。

「悠陽さんは」

「……」

「明日、ガンダムベース来れる?」

あたしはバイト、休みだから。

精一杯の笑顔で、精一杯の言葉だった。

届いてくれるかとはらはらしながらも、愛香は宣告を待つ罪人のように、絵理の言葉を待ち続ける。

一分が、一秒が、どこまでも薄く引き延ばされていくような重苦しい感覚が両肩にのしかかるような錯覚に奥歯を食いしばり、そして。

「……いい、んですか……?」

「いいって、何が?」

「……わ、わたし……ゲームでも……今も、朝村さんに、迷惑……」

「迷惑じゃないって。それにほら、まだフレンド登録してなかったでしょ?」

あまりの出来事が続いたせいで記憶から抜け落ちてしまっていたが、最初に絵理へ、エリイへ行ったのは即席パーティーを組む申請であってそこにフレンド登録は付随していない。

「……あ、あう……わ、わたし……わたし……」

「それに、愛香でいいよ。こつちでも向こうでも。勿論、悠陽さんが嫌じゃなかったらだけど」

「い、嫌だなんて、そんな!」

さつきまで今にも消え入りそうな声を出していたとは思えないほどに力強く、絵理は自嘲気味に肩を竦めた愛香のそれを否定する。

ライブモニターに映っていたのがチャンピオンの試合で助かったと、自分たちに関心を払う気配のない他の客席を一瞥して愛香は苦笑した。

原因が自分にあるとはいえ、あんな針の筵はさすがに勘弁願いたい

のだ。

「…………ごめんさい、でも、わたしなんか…………いいんですか…………？」

「いいって。あたしは明日もここに来るから」

フレンドから始めよつか。

言葉と共に差し伸べられた右手に困惑しながらも、絵理は恐る恐る手を伸ばして、愛香の指先にそっと触れる。

きつとそれが精一杯だったのだろう。すぐに引つ込めた右手と、真つ赤に染まった頬を見やれば、なんだか頬が緩んでいくのを愛香は感じていた。

「それと、絵理、って呼んでもいいかな」

あたしだけ苗字で呼ぶの、寂しいから。

半分は本心で、きつと残り半分は罪悪感とか贖罪とか、ごちゃごちゃに煮詰まったそんなものだ。

それでも、これは愛香の精一杯だった。

マギーのように彼女の心を自然に開かせることなんてできないけど、今までフラットな振りをして、見落としていただけだったけれど。

「…………よ、よろ…………よろ、しく、おねがい、します…………あい…………か、さ、ん…………」

戸惑いと、緊張と、自嘲と、きつと愛香が知り得ないものを胸の内側で拍動するコンクリートミキサーにかけて、絵理は左眼から無色透明な血液を流し続ける。

それが少しでも濃んだ心を洗ってくれるなら。それが少しでも、前に進むことになるなら。

モヒカンに追いかけてまわされたのも、きつと無駄じゃないのかもしれない。

よろしくね、と、二人は互いの名前を呼び合って、きつと絵理だけ塩気が足りている芋々しいフライドポテトを齧るのだった。

第四話「そこにある、理由」　袖の擦り合いにPKを添えて」

時代が病んでも、人生は自分がどうにかするものだど、うろ覚えだけれど、そんな歌をいつか、どこかで聴いたことがあった。

愛香は人でごった返す通学電車の壁に背を預けて、アルス・ノヴァ——GBNで活動するバーチャルアイドルである——のシングルをイヤホンから流しながら、茫洋と考えを巡らせていた。
なりたい自分。なれない自分。

画面の中で、ビビッドな色に染められたガンダムの掌で踊る栗毛の少女を脳裏に浮かべながら、付いてきた言葉をすり潰すように愛香は奥歯をきつく噛み合わせる。

暦を見れば、時代は前に進んでいるはずだ。

ガンダムベースを訪れた客が、ガンプラの箱を手に取りながら、「こいつがキット化されるなんていい時代になった」と歓喜する姿を何度も見てきた。

一方で、街を歩けば、電子の海を彷徨えば、いつもどこかで誰かが時代がおかしくなっていくと嘆きの声を上げている。

そのどちらが正しいのか、愛香にはわからない。

あるいは両方とも間違っていて、両方とも正しくて、そんな曖昧さの中で何となく時間に沿って前へと押し流されていくような、そういう感覚があるだけだ。

「なんだろうね」

自分って。

ぼつりと喉からこぼれ落ちた言葉は、学校の最寄駅に着いたことを知らせる車掌のアナウンスにかき消されて霧散していく。

——あたしは朝村愛香で、GBNに潜れば「アイカ」になって。じゃあ、どっちがあたしで。そっからあたしは「アイカ」になって、そして。

茫洋と、同じ駅で降りる学生やサラリーマンの人波に流されながら

ら、愛香はただ考える。

それでも鞆の中には中身が大量の緩衝材で保護されたタツパーが詰まっっていて、その中には愛香が作ったガンプラがあつて。

そして今日は、理由だとか自分だとか関係なしに、ガンダムベースに、GBNに行く約束があるのだった。

「おはよー」

「おはよ」

どこか気怠い朝の匂いを残した挨拶が、教室を飛び交う。

儀礼的に、というよりは機械的にそんな四文字を呟いてから、教室は各々で作ったグループがそれぞれに好き勝手なことを話す場所になる。

それが今日まで続いてきたし、中学でも高校でも変わらなかった。ただ。

がた、がた、と控えめにフレームが鈍く軋むような音を立てて、教室の扉が開かれる。

誰かが登校してきたのだろう。

普段ならそんなことに注意を払う同級生はほぼいないし、愛香も出席番号順の都合で出入り口近くに配置された自分の席で、気怠げに鞆を枕にして突っ伏していたのだが。

「……誰？」

「うわ、めっちゃ痛そう……」

「あ、この席って」

昨日放映されていたドラマやGBNがどうのこうのと、バラバラになつていた教室の視線と話題が、誰かの呟いた言葉を皮切りに、一つに纏まってざわめき出す。

「ん？　なんかあつたの……って、あ」

野次馬根性に乗っかって、愛香も突っ伏して顔を上げたその時だった。

彼女の視界に、スライド式の扉を僅かに開いてその隙間から顔を覗かせていた絵理が映つたのは。

「絵理じゃん、おはよ」

「……お、おはよう、(う)ぎい、ます……」

教卓の真前。出席番号順に並べられた法則を例外的に外れたその席は、普段は空白地帯として認識されていたものだ。

だが、そこには座るべき誰かがいた。

たったそれだけのことなのに、クラスメイトたちはがやがやと騒ぎ始めている。

愛香は微かに眉を潜めて、肩を震わせながらその席に座った絵理の元へと歩き出す。

「大丈夫なの？」

自分で言っておいて、何が大丈夫なのかもよくわからないが、とりあえずの話題として、愛香は絵理に問いかける。

「……あ、えっと、その……はい、元気、です……」

「英語の授業じゃないんだから」

思い返せば謎だった。

確かに外国語を学ぶのには初歩的などころから入るしかないのだが、何かのジャーゴンのごとく「アイムファイン、サンキュー、エンドユー？」と繰り返していたのは今思えばどこか異様でさえある。

絵理の答えに少し昔を思い出しながら、愛香が苦笑していた時だった。

「愛香、その子と知り合いなの？」

席で言うとは教室のど真ん中ぐらいに座っていた、セミロングを、愛香よりも明るい茶髪に染めた女子生徒が席を立てて愛香に尋ねる。

「ん、そうだよ恵美。バイト先でねー」

「へー、愛香のバイト先ってガンダムベースだっけ？ どうなの？」

「まあ給料はいいかな、未だにガンダムの名前とか全部覚えてないけどね」

だよね、と、恵美と呼ばれた生徒は苦笑した愛香につられて一頻り笑った。

「でもわかるだけすごいよ、あたし、ガンダムとかザクとか全部おんなじに見えるもん」

そんな風に冗談めかして肩を竦めながら、恵美は元の席へと戻っていく。

スクールカースト。嫌な言葉だと、ひらひらと恵美に手を振りながら落ち着きを取り戻した教室を一望して愛香は喉元に溜息を押し留める。

とりあえずクラスの中で浮いていない愛香の知り合いで、中心的な恵美に渡りがついた。

それを判断材料に、絵理の存在はひとまずクラスに受け入れられたのだろう。

それでも尚、愛香と絵理に注がれる値踏みをするような視線と、関心を失って中断していた会話を再開する同級生たちに、愛香はどこか冷めたような視線を送ってしまう。

「……あ、ありがとう、ごさいます……」

「ん、気にしなくていいよ、てか学校来れたんだね」

萎縮する絵理を宥めるように、愛香は言う。

絵理の家がどこにあるのかは知らなくとも、精神的な意味でも抱えているハンディキャップという意味でも、それが自分の想像を絶するぐらいに難しいことぐらいはわかる。

「……約束、したので……」

どこか照れたように頬を染めて、両手の人差し指同士をもじもじと合わせながら、絵理は今にも消え入りそうな声でそう答えた。

律儀だな、と、そう愛香は思った。

義理堅い、とでもいうのだろうか。知り合って一日しか経っていないし、ガンダムベースに来てほしいというだけの意図で取り付けた約束なのに、絵理はわざわざ学校まで足を運んでいる。

(いい子、なんだろうなあ)

包帯で覆われた右眼と、左の頬に貼り付けられた絆創膏に視線を落とす。

絵理がどんな経緯で包帯を巻くようになったのかは、軽はずみに訊いてはいけないことだと愛香はわかっている。

それでも、きつと絵理はいい子だから。

いい子だから、狙われたのだろう。

そんなことぐらいいは、今も——恐らくはどこかで愛香にすら怯えている絵理を俯瞰すれば想像がつく。

そこにある罪について考えれば、悪いのは人間だ。疑いの余地はない。

それでも、標的にされるのがいつだって何か特別に悪いことをした人間じゃなくて、何も悪いことをしていない、虫だって殺さないような「いい子」なのは。

「寒い時代だね」

「……時代……?」

「なんでもないよ、それじゃ授業始まるし、またね」

病んでいく時代が人にそうさせるのか。それとも、人間という生き物が抱えている構造的な欠陥なのか。

答えは出ないまま、ひらひらと手を振って愛香は自分の席に戻っていく。

そこに、一抹の無力を抱えながら。

「いつ見てもでっかいねこれ」

「は、はい……」

全ての授業と教室の掃除を終えて愛香たちが訪れたガンダムベースシーサイド店の前に佇むエールストライクガンダムの立像は、今日も変わらずその白亜の巨体に威容を湛えている。

「エールストライク、っていうんだっけ、なんかストライクって名前だけでもいっぱいあって、最初何がなんだかわからなかったんだよね」
ガンプラを手にして立像の足元に屯した、恐らく記念撮影目当ての観光客であろう集団の邪魔にならないように大きく迂回するルートを取りながら、愛香はぼつりとそう零した。

ストライクガンダム。

型式番号GAT-X105。ガンダムSEEDの前期主役機で、背中の装備によって名前が変わったり、そもそも同じストライクでも顔と名前が違うのがいたり、同じ装備でも色違いで商品名が変わるもの

があつたりで、バイトを始めたばかりの頃は知らない人が「ガンダムなんて全部同じだ」とぼやくのも無理はないと思つたことを覚えている。

「……わたし、も……」

「うん」

「……ガンダムの、こと……よく……知らなくて……」

よく見えないけど、この大きなガンダムがエールストライクということも今初めて知つたと、絵理は少し気まずそうに呟いた。

まずつたか、と、愛香は自分が地雷を踏んでしまったことを悟つて、声には出さず小さく呟く。

それもそうだ。絵理は最前列にいて黒板の板書もぎりぎりな程に視力が悪い。

そんな絵理が、いかに大きかろうとここに佇む立像の全体を把握するのは不可能だろう。少し考えればわかることだった。

——ああ、全く。

気まずい。ただひたすらに気まずい。

絵理は特に気にした様子もなく杖を突き、愛香の右袖を左手で握り締めながら歩いているが、愛香の胃袋は今にも悲鳴を上げ出しそうなほどだった。

(……じゃあ、なんでこの子はここに来たんだろう)

現実逃避か、はたまた脳が悲鳴を上げた産物か、ふと、そんな疑問が滴のように、思考の片隅を転がり落ちる。

ガンダムを知らない人間がGBNをやつてはいけないなどという道理はどこにもない。

ただ、GBNというゲームを遊ぶのに、人は何かの理由を抱えている。

自分こそがガンプラバトルを一番上手くやれるんだと、そう叫びたい者がいる。丹精込めて作り上げた魂の分け身のようなガンプラを、多くの人に見てもらいたい、そして認めてもらいたいという者がいる。

そして、仮想の世界だからこそ、歌い、踊りたいと願つた彼女たち

もいて。

絵理の理由がなんなのか、愛香にはわからない。

それでも、それが切実なものであることぐらいはわかる。

ガンダムを知らないのに、ガンダムベースに足を運んで、あの世界にダイブする。それは愛香も同じだ。だが。

(本気、なんだろうな)

絵理の左眼は怯えながらもガンダムベースを真っ直ぐに見つめている。

強い動機が、本気の理由がなければできない目だ。そして。

三年間全力で頑張つて、その全てがダメ金に終わった吹奏楽、全力で走つて3位しか取れなかった徒競走。いくつもの本気と、そこに突きつけられたいくつもの現実と蹉跌を、愛香は思い返す。

きっとそれ以上の蹉跌を抱えながらも、それだけ強い動機を持つ絵理が、愛香はどこか羨ましかった。

強い動機に突き動かされたのは確かだ。

だが、愛香の中でそれは日ごとに薄れて、気付けばいつもと同じように、同居人のような諦めと背中合わせになりながら歩いている。

だからこそ。絵理が気付く余地はないが、自分が失つたその目を持つ彼女を、愛香はこの一瞬、本気で羨み、そして。

僅かばかり、妬んでいたのだった。

ダイバーギアにガンプラを読み込ませ、ゴーグル型のデバイスからGBNへのログインを試みれば、愛香の意識は解けて、アバターである「アイカ」へと再構成されていく。

意識が文字通り遠のいていく感覚は、どこかエレベーターで下り続けているようで、何度やつても慣れそうにないと、現実が解けて結ばれた仮想の身体でロビーに降り立ちながらアイカは苦笑する。

「エリイちゃん、いるっ?」

「……は、はい……」

一応、同時に同じ店舗からログインを試みても、ロビーは人でごった返しているのだから万が一ということもある。

周囲を一望しながらアイカが呼びかけると、すぐ後ろにいた、包帯を巻くことなく髪を銀色に染めて、青い瞳を鳶色に変えた以外は、学生服風の衣装であることも含めて現実とそう変わらない絵理のAvatar……「エリイ」が小さく返事をした。

エリイはなりきらないタイプなのだろう。

そこかしこでガンダムの原作アニメを再現したAvatarであったり、獣の耳や尻尾を生やした人間、獣人のようなAvatarであったり、何か粘土細工じみた質感の、埴輪にガンダムのアンテナやザクのモノアイを貼り付けたような謎のAvatar——アイカは知らないが、ピキリエンタポールレスというらしい——が練り歩いているほどに、GBNにおけるキャラメイクの自由度は高い。

かくいうアイカ自身、現実では茶髪のショートボブだがGBNでは鮮やかな桃色の髪にウェーブをかけ、お団子状のツインテールを結えた派手なAvatarを作っているし、衣装もどこかアイドル風な、リボンやフリルのあしらわれた肩出しのワンピースを選んでいる。

多分この辺が、ガンダムを知らなくてもこのゲームをやりたいが人間の動機になっているのだろう。

風の噂で聞いた、Avatarがワカメのようにぐにやぐにやに崩壊したり、拳のテクスチャが崩壊して、何故かその全てに当たり判定があるという格闘ゲームの存在を思い返す。

そんなクソゲーと比べること自体がそもそも失礼なのだろうが、恐らくキャラメイクという一点に限ってだけでも、GBNはその対極に位置する、いわゆる神ゲーに当たるのだろう。

そんな他愛もないことを思考の片隅に浮かべながら、愛香は絵理を一瞥する。

「……あ、あの……わたし……何か……？」

「ううん、なんでもないよ。それじゃ、フレンド申請しちゃうねっ☆」
元々今日GBNにログインしたのはそのためだ。アイカはコンソールを操作しながら、エリイへとフレンド申請を送る。

「……あ、ありがとうございます……！ わたしも、送り、ました……！」

ぱたぱたと、コンソールを眺めて小躍りしながら、エリイは目を輝かせる。

本当に嬉しいのだろう。彼女からのフレンド申請を受理しつつ、アイカは小動物を見るような面持ちではしゃぐエリイを見つめていた。「あたしも受け取ったよつ、さてと、それじゃミッションを……」

先日は騙されて散々な目にあったが、元々このロビーの真ん中にある窓口に配置されたNPC、このゲームではNPD、ノンプレイヤーダイバーと呼ばれるそれを經由してミッションは受けるものなのだ。

搭載されたAIも何を受けたらいいかわからない時は受付のNP Dに訊けばいいと、攻略サイトに書かれる程度には高度なものである。

(エリイちゃんを助けるとはいえ、思えばあたしはなんであんな時間を……)

そんなことはつゆとも知らず、モヒカンに追いかけて回された記憶に悲しみを覚えながら、アイカがエリイの手を引いて受付に向かおうとした時だった。

「待てやゴラアアア！」

「ぞっけんなボケ、死に晒せエエエ！」

二昔かそれ以上前ぐらいの任侠映画じみた怒号がロビーに響き渡ると共に、銃声が轟く。

「なんだ!？」

「げっ、PKかよ！ 運営何やってんだ！」

非戦闘区域に設定されているロビーでのプレイヤーキルは重罪中の重罪だ。

それでも尚禁を犯そうとした辺り、声を上げた連中の殺意の高さが窺えるというものだ。

ロビーにひしめく人々は平穏をかき乱し、乱入してきたプレイヤーキラーの凶弾から逃れようと慌ただしく駆け回る。

「あ、アイカさん、わたしたちも……!？」

「ねーちゃんたち、ちよつとそこにそのまま立ってて！」

エリイが逃げ出そうと呼びかけた声をかき消して、小さな子供のよ

うな叫びがアイカたちへと投げつけられた。

人混みをかき分けて、丁度ロビーの壁を背にする形になっていたアイカとエリイの背後にできた僅かな隙間へと、声を上げたと思しき人影が滑り込む。

『違反行為を検知しました、対象の確保と鎮圧に当たります』

受付のNPDがアナウンスを流すと同時に、赤いアラートの文字が乱舞するロビーが封鎖され、どこからか転移してきた【GBN―ガードフレーム】——本来はガンプラごと対処に当たるためのそれを人間サイズに小型化したものだ——が、銃撃を行ったダイバー二名を、その抵抗も物ともせず瞬く間に確保して、強制ログアウトの措置を取る。

『お騒がせして誠に申し訳ございません。鎮圧は完了いたしましたので、ロビーの封鎖を解除します』

恐らく、鎮圧されたダイバーのアカウントがGBNに戻ってくることはもうないだろう。

それを確信してか、平穏を取り戻していくロビーで、アイカはただ押し寄せくる疲労にまた厄介ごとかと溜息をつく。

「いやあ、死ぬかと思ったね、つたく……裏口クリアがイヤならあんなミッション作んなつーの」

アイカとエリイの後ろに隠れていた、黄色のレオタードにシースルーのパレオを纏わせたような衣装に身を包んだ小柄な少女が呆れたように肩を竦める。

「……えつと……その、あなた、が……?」

「ん? ああ、追われてたつて意味ならそうだよ、まあチイは悪くないよ、悪質クリエイトミッション作るような奴が悪い」

「チイ?」

「ん? ああうん、チイはチイだよ、チハヤつて名前だから縮めてチイ」

勝手に付けられた名前だしね、と、チハヤ改めチイと名乗る少女は追われていたことに悪びれるでもなく、あっけらかんとエリイとアイカからの疑問に答えてみせる。

さくらんぼのような髪留めでセミロングの茶髪を頭の右側に纏めたチイの外見は十代前半の子供にも見える。だがここはGBNだ。アバターとリアルは必ずしも一致するものではない。

勝手に付けられた、というチイの言葉に違和感を覚えながらも、アイカは言葉を続ける。

「チイちゃんていいのかな？ 追われてたって、何したの？」

「ただのチイでいいよ。ちゃんとかいらぬ……んで、追われてた原因だっけ、まあただの裏口作って申請通したような高難度クリエイトミッション受けて報酬ガメてたら目え付けられただけだよ」

クリエイトミッションは必ず作つた人間がクリアしない限り、ミッションとしての申請が通ることはない。

そのため、高難度のギミックを思いついた方がいいが自分ではクリアできないダイバーが突破のための裏口を作つて無理やりクリアしてから申請を通すというのは残念ながら珍しくないことなのだ。

そして、チイはその手のミッションを狙って受けることで、難易度による報酬を荒稼ぎしていた。結果、あのヤの付く自由業みたいなPKに目をつけられた。

彼女の説明を要約すると、こういうことになる。

「まあ、姉ちゃんたちには助けられたし、袖の……袖が？ まあ袖付きがなんとかかんとかって人間もいうしね、とりあえず迷惑かけた分はお礼させてよ」

「はあ……」

アイカとしては助けた覚えはないのだが、身を隠す場所を提供させられて結果チイが助かったという意味では間違っていないのだろう。コンソールを開いてBCの数字を確かめながら、とりあえずよろしくとでも言いたげに、チイはにやりと笑った。

——きつとあたしはこれからも何かしらこういうことに巻き込まれるのだろう。

笑うチイと、何かを言いたそうにしているエリイを横目に、アイカは根拠こそないがそんな予感を胸に抱くのだった。

第五話 「生き残りラスト・ダイバーズ」誠意は言葉ではなく金額」

絶界行。漢字三つでラストダイブと読ませる、有名な漫画に出てくるフレーズをなぞってGBNで使われるそれは、本来の意味とほぼニュアンスを同じくする。

転じて、GBNにおける絶界行とは初級者から中級者がハードコアディメンション・ヴァルガへ自らダイブすることを指して使われている。

元の漫画とは違って、撃墜されれば自動的にロビーへと帰還することとは叶うのだが、自らの意思で取り敢えず三分生存できれば一人前とされる超危険地帯へ踏み込む行いはそれに等しいとされたか、語感優先で広まったのかこそ定かではないが、言いかえて妙ではあった。

そして、何かを言いたげにしていたエリイが言葉を発した時、その唇から紡がれた内容はまさしくその決死行と、ほとんど内容を同じくするものだった。

「……え、えつと……チイ、さん……あの、わ、わたし……その……」
「エリイだっけ？　だからただのチイでいいってば。基本無茶なことでもなきや手伝うのはなんでもいーよ」

流星にまたPKにどつき回されそうになんのは勘弁だからね、と、子供らしい外見に似合わない哀愁を滲ませながらチイは肩を竦めてみせる。

どれだけの修羅場に身を置いてきたのか。アイカは今にも懐から煙草でも取り出して蒸しかねないチイの慣れた仕草に、少しげっさりするような感覚を覚えつつも、エリイが言葉を続けるのを待つ、

「あ、いえ……ぐめんなさい……あの……わたし……」

「まあどうしても無理だつてんなら、せめてさん付けはやめてほしいかな、背中がムズムズすっからさ。んで、用件の方は何よ」

緩慢なエリイの言葉に苛立ちを見せる様子もなく、チイは自然に続きを促してみせる。

その話術は、どこかマギーのそれをアイカに思わせたが、どちらかといえばチイの言葉は事務的、というよりビジネスライクだ。

エリイ個人を見て話しているというよりは、取引相手が交渉条件を持ちかけるのを待っているのに近いと、アイカは直感する。

(ネットゲ上級者って感じだなあ)

アバターの向こうには生身の人間がいる。

それはリアルと仮想現実の境目が曖昧になりかけている世の中では殊更、基本的なマナーとして覚えておかなければいけない。

だが一方で、現実と、その頭に仮想が付く世界には「遊戯」という点において決定的な境界が引かれていることは確かで、アイカとエリイのようにリアルでも何か繋がりを持っているのでなければ、どこかでチイのように割り切った上で打算的な立ち回りが要求されるのもまた事実なのだ。

アイカの場合はエリイのリアルを知ってしまった、というのもあるが、そういう点を抜きにしても、無駄に怒らず、焦らず、判断条件を提示する相手だと割り切って接するチイの態度は、“慣れた”ものだけといえた。

まあ、慣れた相手でもなければわざわざ蜂の巣に手をつ込んで蜜を盗み取るような、PKに目を付けられるのも無理はない行いで報酬をガメていたりはないのだろうか――

エリイの口からまたも予想の斜め上を突き抜ける言葉が飛び出したのは、そんな他愛もないことを思いながら、チイと共に彼女を見つめていた時だった。

「……わ、わたし……その、お礼が……」

「うん？」

「……ハードデイメンション……？　っていう場所で、助けてもらった人がいて……その……お礼が、したいんです……名前も、わからないですけど、わたし……」

物質化した1ビルドコインを指先で弾いていたチイの手が止まる。

「エリイちゃ」

「……エリイ、わりいけどあんた正気？」

何かの聞き間違いだろうと確認を求めようとしたアイカの声を遮って、先ほどまでとは打って変わってどこか冷たく、鋭利な色を帯びた声音でチイはエリイを一瞥する。

無理もない。あのモヒカン共に襲われていた時に助けてもらった人物にお礼を言いたい、というのはまたハードコアディメンション・ヴアルガへとダイブすることと同義だからだ。

名前がわかっていれば、ロビーでNPDに問い合わせさせてフレンド検索からメッセージが送れただろう。

もしくは遭遇地点が違っていけば、そのディメンションを搜索した上でエンカウントする、というエリイが想定している行いは現実的な選択したり得ただろう。

だが、よりにもよって彼女と、あの赤いガンダム——シナンジュを改造した機体を駆るダイバーと遭遇した場所は、チイの実力のほどこそわからないものの初心者二人を抱えたまま悠長に人探しをすることを許してくれるようなものではない。

正気か、と問いかけるチイの声音に怯えてか、エリイは眦に涙をにじませてアイカの後ろに隠れてしまうが、それでも視線だけはチイから逸らさず、真っ直ぐに、自分は正気だとばかりにその目を見据えていた。

この目だ。横目で見るエリイを宥めるようにそつと銀髪を撫でながら、アイカは今にも撃発しかねない、剣呑な空気を漂わせているチイをよそに小さく苦笑する。

小さな、それこそ、ガンダムベースで会うだけでよかった約束なのにわざわざ学校にまで顔を出して、何かに怯えていても、自分が大事だと思ふものまでは捨てたくない願っている、そんな矛盾とも取れる繊細さと強情さが、エリイの瞳には同居している。

「アイカはどうなのさ、見たところエリイの友達なんでしょ？」

チイの問いかけは明らかに、諦めさせることを前提にしていた。

確かに、またあのモヒカン共に追いかけて回されたり、耳をつんざくような弾幕砲火が飛び交う場所に戻りたいかと訊かれれば、その答えは間違いなくノーになる。

アイカ一人であればそんなことなんて考えもしなかったし、仮に思いついたとしても即座に棄却していただろう。それでも。

「んー……あたし、今日はエリイちゃんに付き合おうって決めてるから。エリイちゃんがそうしたいなら、いいかなっ☆」

胸を張り、エリイを庇うように、そして自分を鼓舞するように背筋を伸ばして、アイカはあの日「アルス・ノヴァ」のセンターを務めていた少女——ノゾミが曲の合間にそうしたように右目の近くでピースサインを取ってみせた。

チイが期待したように、エリイを宥めて諦めさせることが正解の手なのだろう。それは理性として、アイカ自身もよく理解している。それでも、感情が、心がそれを許さない。

エリイがそこまで自分との他愛ない約束を真摯に捉えて、勇気を振り絞って学校まで来てくれたのなら、そんな彼女の願いに今、背を向けることはきつと誠実ではない。

そこにどれほどの後悔が伴っていたとしても、それがどれだけ無謀だとしても。

それを割り切ってしまうことは、アイカには出来なかった。その先に行き着くものが、例えばモヒカン共に囲まれるか交通事故のように飛び交う弾幕砲火や闇討ちの格闘に焼かれる仮想の死だとしてもだ。

それに、地雷を踏むのもバカを見るのも慣れている。今日ログインしたのだって元々エリイにフレンド申請を送ること以外の目的だったのだったわけだし、何かを差し置いてでもやりたいことがあるというわけでもない。

格好こそアイドルを参考にしているても、アイカがやりたいことはこの仮想の海の中で歌って踊ることではない。じゃあ何がしたいのかと訊かれれば、それに答えこそ出せないが、今はエリイの願いを叶えたい。

それだけで、アイカにとっては十分だった。

「ぐぬぬ……いや確かになんでも手伝うって言ったのはチイだけどさあ、物事には限度つてのがあると思うよ、ねーちゃんたちだって考えてみればわかるじゃん？ 初心者狩り、リスキル、リンチ、なんで

もありな場所だよ？ それに助けてもらったってったって、また会えるとも限らないんだよ？」

確かに、あのディメンションで活動していたからといって赤いガンダムのだ이버が今日もそこにいる保証はない。

「でも、あの人『守ろう心の南極条約』って言ってたよねっ。それってキャプテン・ジオンと同じでしょ？」

キャプテン・ジオン。自分で口走っておきながら、懐かしい名前だとアイカはどこか感慨深さを覚える。

ツイスタで昼飯の画像でも上げてそうな、月末はそれが乳酸菌飲料一本になってそうな出で立ちの人物だが、アイカがコメットコアガンダムを製作するに当たってG-Tubeを漁っていた時、おすすめ欄には奇しくもあの赤いガンダムとよく似たガンダムに乗って、マナーの悪いダイバーに戦いを挑むという彼のアップロードした動画のサムネイルが貼り付けられていた。

制作講座とマナー啓発、GBNにおけるディメンション探訪など彼の活動はどうやら多岐に渡るらしいが、重要なのはその決め台詞だ。

守ろう心の南極条約。マナー違反を犯したダイバーに一方的にフリーバトルを仕掛けて制裁を行うという趣旨の是非は置いておくとしても、彼の決め台詞をあの女性が引用していたのなら、そのフォロワーである可能性は限りなく高い。

だからこそ、あの女性がハードコアディメンション・ヴァルガにいる確率も同様に確かなのではないかと、アイカはそう推察している。

「キャプテン・ジオンだ？　ぐぬぬ……あれのフォロワーだったら確かに……いやなんっはた迷惑な……」

「……あ、あの、っ……」

「あん？」

チイも同じ可能性に行き着いたのか、頭を抱えて呟いた言葉を遮って、エリイはふるふるすると全身を震わせながらも、おずおずとアイカの前に歩み出た。

相変わらずぼろぼろと両眼からは涙が溢れているし、左手はぎゅつと強くアイカのスカートを握りしめている。だが、エリイはきつと不

退転の決意を掲げて、チイへとそれを差し伸べたのだろう。

「……………これ……………その……………わたしが、持つてる……………ぜ、全部のお金です……………少ない、ですけど……………た、足りないの……………わかってます……………けど……………つ……………」

最後まで言い終えることなく、全財産である100BCが記された、譲渡を示すウインドウと共に右手をチイに差し出したままながらロビーの床にへたり込んで、エリイは泣き出してしまふ。

「よしよし、頑張ったね、エリイちゃん。ねえチイ、あたしも持ち合わせこれしかないんだけど、お願いできないかな?」

アイカも、チイへと100BCの譲渡画面を開いて頭を下げる。

あの骨折り損のくたびれ儲け、そのついでに手に入った端金だ。それでも他にミツシヨンなど受けていない、これがG—Tubeの閲覧を除けば二回目のダイブであるアイカの持つている全財産で、示せる限りの全ての誠意だ。

「……………なるほど、しよーじき言やあ、割には合わねーな。でも」
「でも?」

「誠意は言葉じゃなくて金額……………チイの大好きな格言だよ、それがねーちゃんたちにとって提示できる全財産なら、全部の誠意ってことだ。だったら涙を呑んで受けるしかねえ」

そもそも手伝うって言い出したのはチイだし、その分は割引ってことにしとくよ。

少しだけ渋い顔をしながらも、唇を半月の形に吊り上げて、チイは不敵に笑う。

「えぐっ……………ぐすっ……………」

「良かったね、エリイちゃん。チイもありがとね」

どこでそんな格言もとい迷言、いや、転じて名言になったから格言でも間違いじゃないのかもしれない——を覚えてきたのやらとチイに苦笑しつつも、アイカはエリイを宥めながら頭を下げるのだった。

一度目は騙されたことも、助けられたことも偶然だった。

ならば、二度目は自分たちが選び取った必然だ。

改めて自分たちが選んだ選択肢がトチ狂っていることに、正気に返

りそうになりながらも、アイカは心でそれを蹴り付けて、震えるエリーの手を取って、ラスト・ダイブへと向けて立ち上がる。

天国なんてあるのかな、と、どこかで誰かが尋ねたけれど、アイカにそれはわからない。そして、そこに住んでいるはずの神様だって同じことだ。

それでも、運命だったら、ちよつとは信じられるかもしれない。

一度目の偶然。散々だって泣きそうになったことばかりだったかもしれないが、連れてきてくれたのはそれだけではない。

もしも偶然が、運命が、何か意図を持ってアイカとエリーを引き合わせたのなら。

あの女性との縁も、偶然から必然に変わるんじゃないだろうか。

バカバカしいと笑い飛ばせそうなセンチメンタルだ。きつとGBNに、あのストライクガンダムの掌の上で踊る、「アルス・ノヴァ」に、バーチャルアイドル・ノゾミに出会っていなければアイカは間違いなくそうしていただろう。

それでも、今はそんな運命を信じられる。

理由を説明しろと言われれば、アイカはきつと答えに困るだろう。答えることはできないだろう。

そうして、道行く大人が、過去に走るのを諦めた「愛香」が、吹奏楽を捨てた「愛香」が情けないと、どうせまた同じことだと笑い飛ばすのだとしても。

今、アイカの手にはエリーのそれを優しく包み込む感触が残っている。それを、アイカ自身がなんとも思わなくとも。

命を燃やす理由など、きつと——それだけで、十分なのだった。

第六話 「生存戦略MPK」チャートの祈りは必修科目」

絶界行に安全の二文字はない。

出撃前のブリーフィング……というよりは簡素な情報共有の話し合いで、チイがそう語った通り、ハードコアデイメンション・ヴァルガにおいては、足を踏み入れた瞬間、ダイブ直後の無敵判定が切れた時点でそれを狙って撃ち抜かれて爆散することなど日常茶飯事だ。

GBNにおいて、ランダム要素こそあれどスポーン地点にはある程度の法則性が存在している。

そのため同接人数が多いサーバーであればダイブしてきた瞬間を狙つてのリスク、ならぬスポーンキルが可能となつているが、言うまでもなく通常のデイメンションであれば御法度だ。

明確に禁止する規定こそないものの、運営に報告すれば、利用規約における「その他悪質な行為」の項に該当するとしてペナルティが課されることは検証スレッドにおいて証明されている。

わざわざ検証のためにアカウントを作つてリスクを行うのも大概狂つているとアイカとエリイは思うのだが——今から行く場所はそれより遥かに狂つた、そんなペナルティすら無罪放免の危険地帯、誰が呼んだか戦闘狂のラスト・リゾートだ。

『言つとくけど、貰った金の分は全力でやるけど、会えるとは限んないかんね』

出撃前に、「キャプテン・ジオンの機体とよく似た大剣を持つ、シンジユの顔をガンダム頭に変えた機体」を駆る女性ダイバーの特徴を伝えた直後、チイは二人にそう釘を刺した。

ハードコアデイメンション・ヴァルガの性質がそうさせるのもあるが、一番狂っているのはこのデイメンションの同接人数が、各デイメンションを並べた時に上位に位置するという事実だ。

ダイバーたちが猿山だのモヒカンの巣だの知性を失った人間が行き着く先だの、各々が憎しみを込めて呼ぶこの場所だが、運営が公に

示している用途はフリーバトルのため、ということになっているし、事実として上級者、特にソロダイバーの間では修練としてこのデイモンションを利用することはそう珍しくない。

だからこそ、本来の需要と裏の需要が同時に満たされているといった状況であるために、接続人数もそれに比例するのだ。

コックピットで固唾を呑んで、アイカはデイモンションへのゲートが開くのを待つ。

『わかっているとは思うけど、基本的に入った瞬間撃たれることも珍しくないから身を隠すか伏せるか、まずは十秒生き残るための鉄則がそれだよ』

出撃前に聞かされた、チイの言葉を何度も脳内で繰り返し、そしてゲートが開いた瞬間に、アイカとエリイ、そしてチイは操縦桿を倒して機体を急降下させる。

そして予測通り、三人の無敵判定が切れる頃合いを狙って、明らかにゲートがあつた位置を狙つたと思われる砲撃が通過する。

「つと、射線的にこっちは！」

伏せていた機体を立て直し、チイは愛機であるSDCS陸戦型ガンダムをベースに独自の改造を施したガンプラ——「ガンダムグラスラunner」の腰部アタッチメントからファイア・ナッツを手にとって投擲した。

ハードデイモンション・ヴァルガ、北部廃墟都市地帯。文字通り遮蔽物だらけなだけに、狙撃手が潜むような場所はそこかしこにありふれているが、射線を読めばある程度は把握ができる。

アイカたちを狙つた狙撃、というより威力的に砲撃といった方が差し支えないそれは、九時の方向から飛んできたものだ。恐らくゲートの出現位置を絞り込まなかったか、一網打尽を狙つたのだろう。そして。

『ウソだろ、おまつ……うわああああ！』

「けっ、汚え花火だぜ」

炎上効果を持つ投擲弾が、廃ビルから半身を覗かせて二撃目を放たんとしていた狙撃手の機体——都市迷彩を施したケルデイルガンダ

ムにアリオスガンダムのGNビームキャノンを持たせたその砲身近くで炸裂し、行き場を失ったエネルギーの暴発に吞まれて機体が爆ぜる。

「チイちゃん、すっごーい☆」

「あんなん自慢にもなんねーよ、それよりねーちゃんたち、チイが言ったこと覚えてるよね!？」

「……………はい……………！ 絶対に、足を止めない……………！」
「そうー！」

答えた通りにアイカのコメットコアガンダムとエリイのヘイズルIIは遮蔽物を利用しつつ小刻みにブーストを蒸す形で着地の隙を減らしながら、都市地帯を北進していく。

チイのガンダムグラスランナーは、ベースの陸戦型ガンダムをより強襲、偵察に特化させただけではなく、通常のSDガンダムに比べて独自の大型化が施されている。

SDCSー正式名称SDガンダムクロスシルエツトというブランドは、それ自体が内部フレームの換装によって体軀を好みの形に変更することができるのが売りなのだが、チイは更に独自のフレームを自作し、HGシリーズからもパーツをコンバートすることで、SD体型からは少し外れるものの、可動域を更に引き上げることを目論んだのだ。

自身のコメットコアガンダムとそう体軀が変わらないガンダムグラスランナーを一瞥し、細かい事情こそわからないものの、売り場にサンプルとして展示されているSDCSのそれとは明らかに違う体型から想像する作り込みに、アイカは驚嘆する。

（あたしでもこれ作るのに結構かかったのに、中身まで別物にするっでどれぐらいかかるんだろうな……………）

アイカは知らないが、フレームはこのGBNにおいて作り込みが最も反映される箇所として重要視するダイバーが多いパーツだ。

考えてみれば機体を動かす、文字通りの屋台骨なのだから当然でもある。

反面、パーツとしては最も地味で、仮にフルスクラッチやマスター

グレード、パーフェクトグレードのそれに丹念な塗り分けを施したとしてもそのほとんどは外装に隠れてしまうということもあって、労力に対する対価が得づらく、メンテナンスやマスクングも難しいということから忌避されてきた部分でもあり、GBNにおいてはそうしたフレーム構造を採用していない、もしくは関節部分のみに簡易的な構造を採用したHG、ハイグレードブランドが幅を利かせている部分がある。

関節部分のディテールを詰めたり強度を補強したりといった工作が、恐らくはゲームバランスやリアルでの資金事情などを考慮してフレームを作り込むのとパラメータの補正的にはあまり大きな差が出ない、というのも大きな向かい風なのだろう。

しかし、そんな事情はどこ吹く風とばかりに、チイの機体は自作したフレームの強みを遺憾なく発揮し、グラスランナーの名に恥じない軽快さで舗装が破壊されたコンクリートの地面を蹴り、遮蔽物にはファイア・ナッツを投げ込んでから身を隠すなど、まさに八面六臂といった風情の立ち回りを見せていた。

「……っ、アイカさん、伏せて……！」
「んっ！」

エリイの警告を聞くと同時に、斜め後ろから自機を狙ってきた射撃を、半ばすつ転んで地面に顔面を打ち付ける形になりながらもアイカはなんとか回避する。

「ブリッツか！ クソっ、相変わらずせけーんだよそれ！」
「……お願い、当たって……！」

襲撃者であるブリッツガンダムはミラーージュ・コロイド——攻撃行動を起こすまでの間、自機を透明化してリーダーからも目視からも逃れ、更に攻撃武装の誘導を切るというシステムだ——を解除し、エリイへの反撃を目論むが、フォローに入ったチイが両手に持っていたビームマシンガンに足止めされ、コックピットに直撃弾を受けることで敢えなく爆散した。

「ったた……ちよつと舌噛んじやった、ありがと、エリイちゃん」
「い、いえ、そんな……」

「いや、今はよく見てたよ、申し訳ねーけどチイも見逃してたからさ」

ミラージュ・コロイドはレーダーに映らないという特性上、積み得ともいえる特殊兵装なのだが、そこに弱点が存在しないかと問われればその答えはもちろん否である。

まず、ブーストの軌跡を誤魔化すことができない。宇宙であればデブリにアンカーを差し込むなどして慣性移動を行うことでそれを誤魔化することができるが、地上ではそうもいかない。

加えてブーストに頼らなかつたとしても、歩行で発生する砂埃や、先程の慣性移動を例に取るならアンカーを打ち込んだデブリの破片は可視化されているなど、透明化した機体が及ぼす物理的な影響までは無視することができないのだ。

だとしても、エリイはよく見ていた。

恐らくブリッツとの連携を想定していて、相方の撃破に動揺していたか、まさかギャグ漫画のようにすっ転んだ機体と鉢合わせすることは想定していなかったのだろう。アイカがすっ転んだ先に聳え立つ廃ビルに身を隠して硬直していたスローターダガーのコックピットをそのままコアスプレーガンで撃ち抜いて、アイカは戦闘機動に復帰する。

「やっぱりあのモヒカンが硬いだけか……」

「お、アイカもキルスコアおめつとさん。まあ連中は飽きもせず初心者狩り特化してっからな……つと、そろそろかな」

「そろそろ?」

チイは時折横目でコンソールのレーダーに気を払いつつも、増設した各種センサーやサブカメラが分割されたモニターウィンドウに映す空中の様子を注視しながら呟いた。

チイが出撃前に語った、十秒生き抜くための生存戦略はスポーンキル回避のために身を伏せること、そして基本的に、三分の壁と呼ばれる時間を生き残るための生存戦略がとにかく足を止めない、止める時間を最小限にすることだった。

「こっからが三つ目の生存戦略よ」

とはいえ、提言したチイ自身、この戦略が通じるかどうかははつきりいって運ゲーだと思っている。まさしく上手くいったらお慰み、一定のラインを超えれば通用しない一発芸といわれればそれまでだ。

だが、チイやアイカ、エリイー特に初心者から中級者がただ生き残る、それだけを目的にするのであれば、最初のお祈りポイントさえ乗り切れば、失敗する「一定のライン」に乗ることは絶対にならない。

「ちよいと足止めなきやいけないのが難点だけど、幸い乱戦エリアはちよい向こう、周辺のクリアはある程度やってる……ねーちゃんたち、悪いけど五秒持たせて！」

「了解っ☆」

「……わかり、ました……！」

チイの指示に従って、足を止めた彼女と愛機の左右をカバーするようにアイカとエリイの機体が立つ。

とはいえ初心者二人にできることなどたかが知れている。

ここで一番効果を持つのは、迎撃の射撃をコックピットに命中させることでもなく、二人が襲撃者からチイを守る盾として勇敢に散っていくことでもなく。

「……どうか、来ませんように……来ませんように……」

がくがくと操縦桿を握る手を震わせながらエリイが祈りの言葉を口にする。

そう。ここで二人がなせる最良の手段は、攻撃が飛んでこないことと近くに狙撃手と暗殺者の取りこぼしが潜んでいないことを祈る、ただそれだけだ。

いわゆるお祈りゲーである。それがアイカとエリイにとつての最善であるなら。

「データリンク、広域索敵……拡大。頼むぜ乱数の神様、いるかどうかわかんねーけどよ……！」

チイにとつての最善も、またお祈りであった。ここをクリアすれば何とかなる。だが、ここでつまづいてしまえば全てがパーになる。

氷の橋から落っこちたとしてもその後にくソみたいな運ゲーをすればリカバリは利く。だがこのゲームはプラクティスモード……練

習試合や低難易度の対NPDミッション以外で一度撃墜されれば修復に時間がかかるという仕様から、基本的にはセーブとリセットで歩き回る古典的な手法を良しとしていない。

だから、ここでランダムエンカウントという名の乱数を引き当てる必要があるのだ。

そして。

「……っしやビンゴ！　ねーちゃんたち、今からチイが転送した座標に向かって全力でブーストして！」

「その間に後ろから撃たれたら!?!」

「運がなかったって諦めな！」

アイカの問いをチイは身も蓋もない答えで切り捨てるが、実際それしか言うことはないのだ。

進路上のクリアは丁寧にやってきた。

だが、同接人数の都合上、背後からの襲撃者は理論上はほぼ無限にリスポンするといってもいい。しかも全て性質不明のアンノウンだ。

光が強ければ生まれる影もまたその色を濃く、深くする。そんな世界の節理に従って、GBNがアクティブ2000万人を抱える神ゲーだからこそ生まれたクソゲー部分といっても過言ではない。

背後からの攻撃をアラートを参考に回避しつつも全力で前に向かってアイカたちのなぞる直線軌道は襲撃者たちにとってのカモなのだろう。

アイカたちを素直に背後から追跡しようとしたゲドラフがどこから湧いてきたのか、廃ビルの上に陣取ったジン強行偵察型にミサイルポッド部分を撃ち抜かれて爆散する。

そしてそのジン強行偵察型が五秒もしない内にビルごとアナザートライアルランチャー・ストライカーを装備したストライクEに撃ち抜かれて塵へと消えていく。

阿鼻叫喚、まさに地獄か、そうでなければ蠱毒を体現したような光景だった。

「ビルの上なんか陣取るからだっつー……のっ！」

チイは背後へと、背負っている武装コンテナからダミー・バルーンをバラまいて自分たちへのヘイトを逸らしながら、目標ポイントまでひた走る。

このバルーンにも抜かりなく強力な爆弾が仕込まれているため、撃ち抜けば目眩しに、ゲドラフの僚機と思しき追跡者であったブルツケングがそうしようとしたように、力任せに踏みつけて進もうと思えば手痛いダメージを被ることになる。

無論、コンテナを狙撃された際に自機へ与えられる誘爆とのトレードオフとなるリスクを承知した上でのカスタマイズだ。

チイのカスタマイズは、いわば斥候だった。避けて、逃げて、嵌めて勝つ。

それも当然だ。クリエイトミッションの穴を突いて単機で攻略するのなら最も重要なのは、どこに何があるかを把握して、行動を起す頃には勝利の方程式が組み立てられている。それこそが理想的なチイの勝ち筋なのだから。

そして、今回もチイはその勝ち筋を手にしたことになる。

「ここでもいいの、チイ!」

「……ここに、何が……!?!」

チイが指定したポイントは、周囲に遮蔽物となる瓦礫が多少転がっている以外は開けているといっても過言ではない、都市部から僅かに外れた地点だった。

アイカとエリイが様子を見ても、何か逆転の切り札となるようなアイテムがある様子はないし、遮蔽物に身を隠すこととチイがバラまいたダミー、そして三人のガンプラが比較的小柄なものもあって今は何とかやり過ごせているが、反対方向からの弾幕や追跡者はその数を増している。

「……いいや、あるね」

——上にな。

困惑するアイカとエリイをよそに、チイがニヒルに口元を歪めて笑った、その瞬間だった。

『トランザムブーストモード、ツヴァイアクセル……GNディバイン

ブラスタ―、マルチロツク、セツト』

チイの機体が傍受したと思しき通信ウィンドウが開かれ、そこに映っていた黒髪の青年が何事かを呟くと同時に、「それ」はモニターを覆い尽くした。

「な、何これ……っ!？」

「……ひか、り……!？」

アイカとエリイは巻き起こった事態に困惑しつつも、その光景自体にはどこか既視感のようなものを抱いていた。

シナンジユを改造した赤いガンダムがモヒカンの群れを猛る炎で薙ぎ払った、あの瞬間だ。

そして――それを上回る規模の光が上空の一点を中心に降り注ぎ、ちようどアイカたちが身を潜めていた廃墟群の少し手前辺りで収束したかと思えば、そこから無数の束に拡散し、廃墟都市をなぎ払っていく。

あの青年はマルチロツクと呟いていたが、そんな生易しいものではない。むしろロツクから外れた機体も勢いで巻き込まれかねない、拡散ビーム砲というよりは拡散波動砲に片足を突っ込んだ砲撃だ。

恐らくは逃げる相手を逃さないためのカスタマイズなのだろう。とはいえ、桁も規模も段違いだ。

光が去った後に残った静寂と、ここがハードコアデイメンション・ヴアルガであることすら忘れそうになるレーダーに生まれた空白、そしてそれを生み出した上空を見上げて、アイカは固唾を飲む。

チイが浮かべていた観測機から転送されてきた映像にその威容を誇る上空の機体は、ダブルオークアンタのカスタマイズモデルと思しきものだった。

その機体が構えている、カレトヴルツフフェアダーと微妙に形状の変わったGNソードVが槍のように連結された武装は、二枚に増えたバインダーから分離したGNソードビットがまとわり付いて砲身を形成している。

原作でも披露していたGNバスターライフルの延長線上にある武装なのだろう。チイはそう推測したが、それにしただって相も変わらず

馬鹿げた威力だ。

だが、何かが不満だったのか、通信ウィンドウに浮かぶ青年は小さく首を傾げると、足元にいるアイカたちに何か注意を払うこともなく、自らが生み出した空白に背を向けて、乱戦エリアが形成されている南部地帯へと粒子のマントを翻して飛び去っていく。

「……相変わらずバカみてーな威力」

「チイちゃん、これって……」

「おうよ、これがチイたち弱者の生存戦略、最後の切り札」

MPK。モンスター・プレイヤー・キルの略称だ。

それが意味するところは、強いモンスターと意図的に交戦し、それをプレイヤーたちが集まる区画まで誘導することで間接的に他のプレイヤーを葬り去るテクニクだった。

正確には今飛び去っていった彼はモンスターではなく中身の入ったプレイヤーだが、災害みたいだという意味では大差ないはずだ。

チイは肩を竦めてあっけらかんと笑ってみせるが、当然の如く一般的なネットゲームのマナーには背を向けて中指を突き立て、そのまま唾を吐きかけるような行いであることは言うまでもない。

「……あ、あう……こ、これは……」

「げ、外道……」

「アレがいてくれて助かったわけよ、とーぜんここじやなきや運営に睨まれっからやんないけどね」

つつても、何やつても無罪放免なこのクソみたいなデイメンション作つたのは運営だからチイは悪くないよ。

当然の権利のように自身の無罪を主張するチイだったが、助かったとはいえその外道そのものな戦術にアイカとエリイはただ顔を突き合わせて閉口する他になかった。

「さて……ねーちゃんたち、いいニュースと悪いニュースがあるんだけどどっち聞きたい？ 時間が無いから片方だけだよ」

絶句する二人を尻目に、チイはコンソールを確認しながら、こめかみから冷や汗を流しつつ二人へと問いかける。

「それってどっち選んでも悪いパターンでしょ？ なら……悪い方」

「……わ、わたしは……アイカさんと、同じで……」

「よしわかった、じゃあ悪いニュースの発表だけど、生き残った奴らがいる、んで、こつちを……」

『ヒヤッハー！』

チイが言葉の続きを紡ぐよりも早く、聞き覚えのある、そして二度と聞きたくなかった世紀末的咆哮が、アイカとエリイの鼓膜を震わせる。

「狙ってる、ってわけだ」

モニターから視認できるその数は僅かに五。だが、初心者のアイカとエリイ、そして直接戦闘向きのカスタマイズをしていないチイを葬るには十分な重火力と重装甲に身を包んだカリギュラの剣闘士——というのも剣闘士に失礼な猿山の住人が、獲物を見つけた歓喜に吠える。

それは、先程の砲撃への衝撃で呆けていたアイカとエリイに、ここがどこなのかを思い出させるのに十分なほどに穢れた、冒瀆的な響きだった。

そして、ありとあらゆる遮蔽物が砲撃の余波で無残に砕け散った異常、そこから逃れえぬことを示す、戦鐘だった。

第七話「銀の誇りと女神の怒り〜少女、死線を超えて」

『ヒャア！ 生き残りがいるから誰かと思えばあの時恥搔かせてくれやがった野郎じゃねエか……！』

通信ウインドウに割り込んでくる、天まで高く聳え立つ赤いモヒカ
ンヘアーの男——ダイバーネーム、「モヒー・カーン」は視界にアイカ
のコメントコアガンダムを見つけるなり、青筋をこめかみに浮かべて
吐き捨てる。

まずいな、と、口にこそ出さないもののアイカの直感も脳内でけた
たましいアラートを鳴らしていた。

よく観察してみれば、あの意味がわからないレベルの砲撃を受けて
さしもの重装甲とて無傷とはいかなかったのだろう。

こちらを包囲するように鶴翼陣形を展開して突撃してくるモヒカ
ンたちのガンプラは腕が脱落していたり、頭部が吹き飛んでいたりと
そのほとんどは中破以上といった風情だが、モヒー・カーンが駆る、ザ
クⅢに何やらトゲやラベツトやらを生やした世紀末カスタムモデ
ルの損傷は彼らの中で一番少ない。

「あの意味わかんねー砲撃から生き残りやがったのか……」

『おうともよ！ おかげで六十の部下が消し炭になっちまったから
なア……ツケはテメエらの命で払ってもらうぜ！』

呆れたように吐き捨てたチイの言葉に顔を歪めて品のない哄笑を
上げながら、カーンのザクⅢは先陣を切って突撃する。

恐らく例の蜂球作戦を防御に応用したのだろう。咄嗟のアクシデ
ントに、犠牲を前提にしているとはいえある程度対応できている辺
り、このハードコアデイメンション・ヴァルガにおいてカーンは間違
いなく慣れたプレイヤーだ。六十も部下を用意してやるのが初心
者狩りということの是非は大きく問われるべきことだが。

とりあえず、アイカの見立てでは、カーン以外の四機であれば、運
が良ければ何とかなるといったところだった。

相手戦力の内訳はカーンのザクⅢモヒカカスタムを先頭にドー
ベン・ウルフのモヒカカスタム、ドライセンのモヒカカスタム、そ

してシユツルム・ディアスのモヒカンカスタム、R・ジャジャのモヒカンカスタムとももの見事に装甲が厚い、第一次ネオ・ジオン戦争期のアクシズ側に属するガンプラで固められている。

とはいえ、ドーベン・ウルフとシユツルム・ディアスはバックパツクを損傷し、ドライセンは左腕が脱落し、カーンの機体も含めてその重装甲は砲撃の余波で融解している部分が多い。

あの時と違って相手の装甲が万全ではない以上、装甲が融けている点を狙えばコアスプレーガンによる攻撃も通用するだろう。

だが、万全でないのはこちらが変わらない。

遮蔽物の影にいたとはいえ、巻き上げられた無数のデブリはアイカたちの機体を蝕んでいたし、五体満足でなんとかあったとはいえ逃避行時の攻撃も全て無傷で切り抜けた訳ではなく、掠めたダメージも馬鹿にできないほど蓄積していて、今もアイカのコックピットに浮かぶコンソールはダメージレベルが増加している警告を示す黄色に染まっている。

そして何より問題なのが、この場で一番状態がいいのはカーンのザクⅢである、ということなのだ。

「残弾は……どっちにしろやるしかねえか、ねーちゃんたち、一応言つとくけど」

「うん」

「は、はい……」

「先に謝つとく。ここで死んだら悪かった」

チイがそう零したということは、この戦いに勝ちの目は薄い、ということなのだろう。

ガンダムグラスランナーが直接戦闘向きの機体ではないことを差し引いても、その有り余る支援兵装は最後の生存戦略を組み立てるためにほとんど費やしてしまったし、アイカの武装も遠距離の火力源がコアスプレーガン、そして、エリイは。

確認をする間も無く、ホバー移動でエリイの背後に回り込んだ隻腕のドライセンが、背中のアタッチメントから引き抜いたヒートサーベルで彼女のヘイズルⅡへと切り掛かった。

「……あ、あ……っ……！」

反応が遅れた訳ではない。エリイは左手に装備していたシールドでドライセンの斬撃を完全に受け止めていたが、そんなことなどお構いなしだとばかりにヒートサーベルは受け止めた盾ごと、ヘイズルⅡの左腕を斬り飛ばしてしまう。

「エリイちゃん！」

『おっと、テメエはこの俺様自らぶちのめすって決めてんだ、よそ見してんじやねエぞピンク色！』

エリイのカバーに入ろうとしたアイカの間へと割り込むように、牽制弾というには重いザクⅢの銃剣付きビームライフルから放たれた一撃が地面を穿ち、土埃を巻き上げる。

包囲した上で、三人の中で一番戦力がありそうなチイには数と、バックパックはともかく五体は揃った連中を、そして、カーンは私怨でアイカを狙う——あのドライセンは消去法でエリイに割り当てられたのだろうが、それでも十分なこととは防御が通じないことから見て取れるだろう。

『可哀想に、素組みの機体じゃなあ……楽にしてやりてエところだが、ボスからできるだけ痛め付けて殺せって言われてんだ、恨みは特にねエが黴らせてもらうぜ』

ドライセンを駆る、緑色に染め上げたモヒカンに、カーンのそれと比較して装飾等こそないものの造形的には形を同じくするトゲ付きの肩パッドが装着された革ジャンという標準的モヒカンスタイルの男——ダイバーネーム「モツヒー」は舌舐めずりをしながら、エリイへ無慈悲な宣言を突きつける。

エリイの機体は、全くの素組み——箱を開けた状態で説明書通りに組み立てて、塗装や追加工作を施さない状態だ。

素組みでGBNをプレイしてはいけないなどというルールは存在しない。現に塗装無し、ゲート処理のみを認めた素組み限定のフォーラムも存在し、ランキングでは中堅といったところまでコマを進めている事例もある。

だが、作り込みが機体性能に反映されるというこのゲームの性質

上、パラメータの面で大なり小なり遅れをとる、というのもまた純然たる事実なのだ。

ヒートサーベルをラックに収め、バックパックから展開したトライブレードをエリイの機体へ投げつけながら、残った右腕に仕込まれている三連装ビームキャノンでモツヒーは、それこそ生皮を剥ぎ取るように、エリイのヘイズルⅡ、その装甲をじわじわと痛め付け、剥離させていく。

「このっ、よりにもよってエリイちゃんに……！」

『余所見してる余裕なんかあんのかい！』

コアスプレীগンによる牽制弾を全て回避し、クロスレンジに紛れ込んだカーンのザクⅢはあの日の雪辱を晴らすとばかりにジャイアント・ヒートホークを振り被ってコメットコアガンダムへと振り下ろす。

大振りで単調な攻撃だ。回避するのは容易いが、恐らく避けられることも計算の上なのだろう。

続いて左腕で腰に増設されたマウントラッチから銃剣付きビームライフルを引き抜いて放たれる牽制射撃にアイカも応戦するが、火力も弾幕の質も大違いだ。

要するに、前に進めていない。エリイのカバーに入らせないというのが、今のカーンが抱いている戦術目標であり、屈辱だが、それが滞りなく遂行されているのはアイカの目にも明らかだった。

「あ……ああ……っ……うう……」

トライブレードによる斬撃を回避した先を読んで、収束モードで放たれた三連装ビームキャノンがヘイズルⅡの左脚を直撃する。

元より装甲が薄く、着陸脚以上の意味を果たしていないウインドウオート系列の機体だ。例えば素組みでなかったとしてもその攻撃に耐えることは叶わなかっただろう。

左脚が脱落し、バランスを崩したエリイの機体は切り揉まれるように回転し、地面に背中から叩きつけられた。

「……か、はっ……！」

その衝撃がフィードバックされ、痛覚が訴えかける痛みに、エリイ

は息を詰まらせる。

バージョン1.78以前であれば、高高度からのフリーフォールで地面と熱いベージュを交わしたとしてもそのダメージが反映されるのは機体だけであるため、極端な話、機体が落下ダメージに耐えられるのであればそんな無茶から立て直すこと自体は容易であった。

だが、制限こそあれど五感へのダメージフィードバックも機能として実装されたバージョン1.78ではそんな無茶が効かなくなっている。

そんな仕様をエリイやモツヒーが把握しているかはわからない。だが背中から地面に叩きつけられる感覚をリアルに再現したその痛み、エリイは悶え、苦しみ、はらはらと両の瞳から涙を零してしまう。「……………ほっ、げほっ……………！　う、うう……………えぐっ……………ぐすっ……………」

『可哀想になア……………お悔やみならいくらでも申し上げてやらなくもねエからまあ安心してキルスコアになってくれや』

獲物を前に舌舐めずりをするのは三流のことだどこかの軍曹は語っていたが、例え三流であっても捕食者と非捕食者、そのヒエラルキーが成立してしまえば関係はない。

存分に、悶え苦しみ涙を零すエリイを更に追い詰めるがごとくゆっくりと前歩きで接近しながら、モツヒーはわざとらしく唇を舌で舐め回し、右手の甲で口元を拭うという下品な仕草を見せつける。

お前は餌。俺は餌を食べる側。どこまでも品がないが、力の差を散々見せつけた上での無言の宣告はエリイのように繊細な人間にはとにかく「効く」。

「クソっ、テメエらには人の心つてもんがねーのか！」

『MPKやってたテメーには言われたくねえよ!』

「うるせえチイは悪くねえよ、こんなクソみたいなディメンション作った運営が悪いんだよバーカー！」

モヒカンカスタム三機を相手取り、なんとか逃げに徹していたチイが叫ぶが、その呼びかけが通じる相手であれば最初から初心者狩りに特化した軍団など組むはずがないだろう。

ブーメランそのものな指摘を踏み倒すがごとく逆ギレで返して、ガ

ンダムグラスランナーの腰部装甲から、ガンダムピクシーが用いていたビームマシンガンを手にとってチイは弾幕砲火を形成する。

幸いとは言えないが、五機のモヒカンそれぞれ自分たちの優位を確信してそれに甘えている。露骨な遅延——この中では一番装甲耐久値の低いエリイに対してすら罠り殺しを選択しているのがその証拠だろう。

だったら、穴になるのはそこしかない。

バックパックを損傷したことで、相手は包囲を敷いてはいるが俊敏な機動こそできなくなっている。左手の撃ち切ったビームマシンガンを正面のドーベン・ウルフへと投げつけてから、チイはファイア・ナッツを振り向かず背後に投擲した。

『なっ……』

「隙ありつてなあー！」

チイの背後をとっていたのはグライ・バインダーを喪失したシュツルム・ディアスにトゲやらリベットやらを盛り付けた機体だ。

R・ジャジャとドーベン・ウルフ。それぞれバックパックや機体の一部を砲撃の余波とチイとの戦いで消耗しているが、それでも一番「楽」なのはシュツルム・ディアスだ。

「高機動型から……機動を取ったら何が残るってんだ！」

ハンドスプリングの要領で大きく機体を後方に跳躍させて、チイは機体の右手に持っていたビームマシンガンの弾を、ダメージが残るシュツルム・ディアスの背面へ狙いをつけて全弾惜しみなく叩きつけた。

元からの傷口からビームの弾丸が侵入したのに加え、残されていたサブスラストーにそれが誘爆を引き起こさせることで、シュツルム・ディアスは辞世の句を読む間もなく爆炎に包まれて四散していく。

いかに正面装甲が分厚かろうが、やり方次第でどうにでもなるってことだ。

吐き捨てるチイの目には喜びも哀れみもない。なんの自慢にもならないキルスコアに一つ数字が加算され、ダイバーポイントが僅かに増えただけのことなのだから。

増えて嬉しい数字は所持金だけだ。世の中にはキルスコアの方が大事だと主張する人間も少なくないが、チイはそう考えている。

互いが合意した上でフォース戦において報酬金を設定することは可能だが、ハードコアデイメンション・ヴァルガにおいてBCの獲得は原則として見込めるものではない。

つまり人が言うところのまずあじ。チイにとってはミツシヨン以外でダイブするのが憚られる理由の一つでもあった。

恐らくこいつらはまだ、自分たちの勝利を確信している。レーダーから赤い点が一つ消えても尚自分に固執して大振りな格闘攻撃を続けるカーンを睨んで、アイカはそう推測する。

チイの機体がどれだけのリソースを残していて、それが残った二機相手に通じるものなのかどうかを確認する時間はない。

だが、包囲が緩んだということは当初カーンが思い描いていた想定から外れたということだ。

そこで慢心、というよりは自分の面子に拘らず、陣形を組み直して確実に殺しに来たのであれば、この男はクレバーだったのだろう。

だが。

『ちよこまかと逃げまわってんじゃねエ！ 死に腐れこのピンク女ア！』

こいつは、怒りで前が見えていない。

アイカは別になんとも思っていないし、あれはただの偶然として処理しているが、それでも始めたての初心者に自身の機体を傷つけられたというのは、このカーンという男にとっては許しがたい屈辱だったのだろう。

ちらりと横目で伺ったウィンドウに映るエリイの機体は片脚を喪失しながらも、バックブーストを駆使してなんとか距離を取り、延命には成功していた。

——ならば。

『大人しくこのハイパーエクストリームザクⅢカスタムF4000バルバロイの餌食になりやがれヤクソ女ア！』

「ごめん、何言ってるかちよつとわかんない、もう一回言つて☆」

『ウルトラスーパーザクⅢカスタムF6000バルバトスの餌食になつて死ねつてんだよオ!』

名前変わってんじゃねえか。

冷たく吐き捨てたくなるのを堪えて、アイカは敢えて自身の近くまでハイパー……とにかくザクⅢのモヒカンカスタムが寄ってくるように誘導する。

砲撃の余波でその重装甲に収められている武装を失ったのか、単にプライドがそうさせているのか、カーンはあのバカでかいヒートホークによる決着に固執している節がある。

そして、ヒートホークは原理としてビームサーベルとは似ていて異なる質量兵器だ。相手の装甲を熱で溶断する、という一点においては間違いなく共通しているが、しかし。

(落ち着いて、アイカ……要領的にはさっきの弾幕避けるのとあんまり変わらない……!)

自分を鼓舞するように胸の内側で何度も繰り返しながら、カーンのザクⅢと今にも振りかぶらんとする大斧を注視しつつ、アイカはギリ、と操縦桿を握りしめる手に強く力を込める。

果たして想定通り、アイカのコメットコアガンダムを狙って、大上段に構えられたジャイアント・ヒートホークは振り下ろされた。

渾身の力を込めて、その巨体が誇る臂力が振り下ろす一撃は、直撃していればよく磨き抜かれた断頭台の刃のように、容易くアイカの機体押し潰し、溶断していたことだろう。

だが、アイカはすんでのところで全力のバックブーストを蒸し、強く地面を蹴って宙返りをする要領で、その斬撃を紙一重のところ回避していた。

そして。

『なツ……俺を踏み台にしやがったア!?!』

「構ってる暇なんてないから。ごっめーん☆」

当然、込めた力の分だけ深く地面にめり込んだジャイアント・ヒートホークの柄に着地すると、ホップ・ステップ・ジャンプの要領でザクⅢのモヒカンカスタム、そのモヒカンを模したと思われる大型化さ

れたアンテナを踏みつけ、へし折ってアイカは機体を跳躍させる。

良くも悪くも、二度の絶界行でアイカの動体視力は大きく鍛えられた。決して他人に勧められるような方法ではない荒行だが、並居る上級者たちがここを猿山やモヒカンの巣ではなく修練の場として定義していることはあながち間違つてはいない。

跳躍の勢いをブーストに乗せて、今度はエリイのヘイズルIIに残されていた右脚と右腕を破壊したことで優位を確信して疑わなかったのか、依然としてアイカには背を向けた形なっているドライセンへ向けて、アイカは左のサーベルラックから引き抜いたビームトーチに全出力を集中させる。

「あたしの友達を……エリイちゃんを……苛めんなああつ！」
『なっ……！』

背後からの急襲。モツヒーは咄嗟に振り向いて対応しようとするが、ヘイズルIIの四肢をもぐために三連ビームキャノンの残弾は全て使い切っていたし、トライブレードも先ほど手に持っていた最後のものを投擲して宙へ逃れようとしたエリイを地面に叩きつけたのだ。

それでもヒートサーベルを抜刀しようと反応したのは最後の意地がそうさせたのか。しかしそれは間に合うことはなく、刀身が伸長さされたことでビームトーチからビームサーベルへと姿を変えたその粒子の刃はブーストダッシュの勢いを乗せたままバックパックを貫いて、容易くコックピットまで到達した。

アイカのキルスコアに数字が一つ加算され、ダイバーポイントもそれに応じて上昇する。だが今はそんなことを確認する余裕などないし、仮にできたとしてもどうでもいい。

四肢をもがれ、推進器を潰される形で地面に横たわるヘイズルIIを抱きかかえて、アイカは呼びかける。

「エリイちゃん、大丈夫!？」

「……つく……ぐすつ、えぐつ、うええええ……つ……」

怖かったのだろう。通信ウィンドウに映るエリイは操縦桿から手を離し、コックピットにへたり込んで涙を流していた。

無理もあるまい。ただでさえ厳つい風貌の相手が明確な殺意を

もって自分を髑り殺しにしようとする、なんてシチュエーションを想像すれば、アイカだつて恐怖に震えるし、リアルだったら泣いていただろう。

仮想の肉体は死ぬことはない。だが、そこに迫る殺意と、脳が連想する死への恐怖から人間は逃げるなどできるだろうか。

答えは否だ。フルダイブMMOが全盛の現代において反対派が声高に叫んでいる主張の根拠でもあるのだが、そんな連中のことはどうでもいい。

エリイが恐怖に押し潰されて涙を零している。アイカにとって仮想の死は、その理由以上でも以下でもないのだから。

大丈夫だよ、と、泣いているエリイへ何度も繰り返し、四肢を失ったヘイズルIIをアイカが抱き抱えようとした、その時だった。

『このアマ……一度だけじゃねエ、二回もだ、二回もこの俺様に屈辱を味わわせてくれやがったア……』

「ッ！」

『死ねよやア！』

復帰したカーンの機体が、懲りることなく大上段に大斧を振りかぶる。アイカは咄嗟に右のサーベルラックに残されていたトーチを抜き、応じようとするが――

『ヒヤッハアアア！』

「な……っ……い！」

元よりビームトーチとジャイアント・ヒートホークではその質量は元より、出力の違いも雲泥の差だ。

しかし、小型であるとしても、コメットコアガンダム出力そのものは並いる機体と比較してそう大きく劣っている訳ではない。

だが、今回は、というより今回も相手が悪かった。パワーと装甲に全振りしたと言わんばかりの見た目通りにその膂力を発揮する斬撃は受け止めようとしたコメットコアガンダムのビームトーチ、そして右腕ごと切り裂いて、頭部アンテナの右半分、太腿部と右足をも巻き込んでその半身をもぎ取っていく。

レッドアラートがコンソールを埋め尽くし、大質量が叩きつけられ

た感覚のフィードバックに、アイカはコックピットの背面に叩きつけられてかは、と乾いた息を吐き出した。

死んだ。厳密には死なないのだろうけれど、肺の辺りに軋むような感覚が伝えられたのは間違いなく本物だったし、ここから何をしようにもザクⅢとコメットコアガンダム、彼我の距離はゼロだ。

操縦桿から手を離してしまった以上、抵抗することは叶わない。詰んだか、と、これから振り下ろされる仮想の死を連想し、アイカはきつく目蓋を閉じる。

『仲良しこよしのお友達ごと殺してやるぜエ……辞世の句でも考えとくんだなア』

「アイカ！ エリイ！ クソっ、どけよモヒカン！」

左腕と頭部の一部を欠損させながらもR・ジャジャを討ち果たしていたチイがカバーに入ろうとブーストを蒸すが、眼前に立ちはだかったドーベン・ウルフがそれを見越して、ガンダムグラスランナーに強烈な蹴りを見舞う。

「が……っ……い！」

『悪いなあ、ボスはお怒りなんだ、邪魔なんざさせねえよ』

「クソ……がッ！」

地面に叩きつけられたチイの機体を狙って、ドーベン・ウルフの腹部から追撃のメガ粒子砲が放たれる。

無理やり機体を立て直して直撃は回避したものの、武装コンテナは焼き払われて、文字通りチイも万事休す、成す術を失ってしまった。

ゆらりと、三度大上段にジャイアント・ヒートホークを振りかぶって、カーンのザクⅢが今度こそ雪辱を果たさんと、汚名を返上ーできるかどうかはともかく、腹の虫を治めようと青筋を額に浮かべながら全力で振り下ろさんとしている。

こいつは、失敗か。

チイが諦め、アイカがきつく目を瞑り、エリイは泣き暮れ、誰もが匙を投げようとしていたその時だった。

「なんだ、飛んで……？」

飛来する”それ”に気付いたのは、索敵能力に優れていたチイだっ

た。

暗雲を裂いて壊滅状態の北部廃墟都市地帯からアラートを鳴らして接近してくるその正体に、チイが気付きかけた刹那。

『防楯展開……アイギス、護りなさい！』

凜とした叫びと共に、新たにポップした通信ウインドウに長い金髪で左右におさげを作り、頭には黒を基調とし、銀のエンブレムや赤の刺繍が施された軍帽のようなものを乗せた女性の姿が映し出される。

果たして飛来したその正体は、剣だった。しかし、剣というにはあまりにも大きく、分厚く、取り回しの悪そうなそれは、キャプテン・ジオンが自身の愛機であるレージオンガンダムに取り入れていたジオニックソードと形状がよく似ているものの、その性質は大きく違う。

女性の叫びに呼応して、アイカとエリイ、そして今大斧を振り下ろしたカーンの間で静止したその剣は一秒足らずでその姿を盾へと変じさせ、不可視の護りをアイカたちの間に作り出す。

『Iフィールドだとオ!? だが、なんでヒートホークを……!』

『答える必要はありません……そして、私は言いました。初心者をつけ狙い、あまつさえ恐怖を覚えさせるような形で倒す……そのような行いに恥を知りなさいと！ 守ろう心の南極条約と!』

盾へと変形した剣に遅れる形で戦場へと乱入してきたその機体ーシナンジュの頭をガンダムタイプのそれへと改造した、そしてエリイが探していたガンダムはまさしく満身創痍といった風情で、アンテナの右半分は折れ、バックパックのフレキシブル・スラスタは片方を欠損し、右腕も肘から先を失っていた。

『ザ・シルバリーの名に懸けて……おとおおっ!』

それでも決して臆することなく、退くことなどないとばかりに深紅のガンダムを駆る女性は猛スピードでカーンの機体へと肉薄し、残った左腕から発生させたビーム・トンプアーでザクⅢの両腕、その関節部だけを的確に斬り捨てる。

しかし、それで限界を迎えていたのか、元よりショートして関節部に火花が走っていた深紅のガンダムの左腕はそこからもげて、爆散す

る。

ザ・シルバリー。聞こえたその単語にアイカとエリイは聞き覚えがなかったが、チイは動揺して足を止めたドーベン・ウルフの腹部を目掛けて、アイカがエリイを抱き抱えるときに取り落としていた左のビームトーチを投げつけながら小さく溜息をつく。

(なる、元シルバリーだってんならキャプテン・ジオンのフォロワーになるのも無理はねえか……)

とはいえ、これで目的は果たされた。

投げつけられたビームトーチを回避しようと身をよじらせたドーベン・ウルフに肉薄して背後に回ると、チイは止めとばかりに最後に残っていたファイア・ナッツを投げつける。

『う、うおおおっ!?』

「汚物は消毒だ、つてな。一丁上がりだ!」

残されたのは両腕を喪失したカーンのザクⅢだけだ。

そして、最大の武装であるジャイアント・ヒートホークも失われ、元のザクⅢが持っていた隠し腕は装甲に埋もれて使えなくなっている以上、使える武器は口部のメガ粒子砲だけになる。

『私の武器を!』

「了解つ、こんの……いい加減、どっか行けえええッ!」

女性は今一マニニューピレータが残されたアイカの機体へとドラグーン・システムを組み込んだことで自律稼働が可能になっている自身の愛剣を託し、アイカと、コメントコアガンダムはその意図に応え、左手を支えに残った足で地面を蹴って跳躍し、全力でスラスターを蒸してその持ち手を握り締める。

『た、タダじゃ死なねエ、テメエも……!』

「うっさい!」

悪足掻きに放った口部メガ粒子砲はビームコーティングが施された金色の刀身に弾かれて、虚しく霧散していく。

これなら、殺し切れる。

奇しくも「鉄血のオルフェンズ」において主人公である三日月・オーガスが抱いたのと同じ確信を胸に、残った推力と全力を大剣に乗せ

て、ビームを切り裂きながらアイカはその刃を、カーンのコックピットへと突き立てた。

『クソっ、こんな結末……』

「うっさいうっさいうっさい！ エリイちゃんを泣かせた時点でもう死刑、あんたの声なんか二度と聞きたくない！」

カーンが残そうとした辞世の句を遮るようにアイカは思いの丈をぶちまけて、コメットコアガンダムは自分が発生させた爆炎に飲み込まれていく。

「……アイカ、さん……！」

エリイは反射的にコックピットの中で爆炎に呑み込まれるアイカとその機体が映し出されるモニターへと手を伸ばすが、できることなどあるはずもない。

愕然と伸ばした右手が空を切り、再びエリイがコックピットにへたり込もうとした、その時だった。

『Iフィールドソード……護ってくれたようですね』

晴れていく爆炎の中にあつたのは、ボロボロに刀身が崩れ、その機関部も外部へ曝け出されるといふ惨状にありながらも、コメットコアガンダムを護り通した女性の愛剣と、その影に身を隠していたアイカの機体だった。

ミッシェン完了。そこに言葉はなくとも誰もが思い描いた言葉で、満身創痕の四機はそれぞれに帰還を選択し、仮想の機神はテクスチャへと解けていき、ロビーに転送するべくアイカたちもまた、瞬きをするまでの僅かな間、電子の海へと還るのだ。

エレベーターを下っていくような感覚に混じって、どっと、アイカの胸にもエリイの胸にも気怠い疲労が押し寄せてくる。

だがそれは間違いなく、アイカとエリイが二度目の勝利を手にしたこと、目的を果たして帰還したこと、この証明であり、一つの勲章だった。

第八話 「フォース・リビルドガールズ！〜或いは、明日に託す約束のこと」

ハードコアデイメンション・ヴァルガから帰還したロビーにアイカたちを出迎える者はいない。

普段であればフレンドの様子をくまなく探しているであろうマギー辺りが初心者、それも初めて二日目のダイバーが自発的にあのデイメンションに潜って生還を果たしたとあらば祝福してくれそうなものだが、生憎彼女は今、別件で多忙の身だ。

それ故にアイカとエリイはあの悪質クリエイトミッションに引つかかることになってしまったのだが——そんな事情は露知らず、帰還した二人がまず最初に行ったのは生還を喜ぶことではなく、ぐつたりとロビーにへたり込んで、大きな溜息を吐き出すことだった。

疲れた。死ぬかと思った。

自分で決めたこととはいえ、情報が洪水を起こして脳裏で氾濫しているような感覚にはとにかくげっそりする。

エリイに至ってはどこか上の空で、焦点の合わない目でロビーの天井を茫洋と見つめている始末だ。

「だから言ったじゃん？ 割に合わないってさ」

修羅場慣れしているチイは大して思うところもないのか、ロビーの壁に背を預けて、いつものように物質化した1BCを親指で弾きながらニヒルに唇を歪めて笑っている。

200BCでヴァルガ行きとか、チイじゃなかったら絶対引き受けてなかったかんね。

釘を刺すような言葉の意味も、今となっては心で理解できる。とはいえ、事前にさっきの出来事を一部始終見せつけられたとして、それでやめるかと訊かれればアイカは首を横に振るだろう。

まあそれは、エリイの願いだっただからであってアイカ一人だけでもう一度あの場所に行きたいかと問われればやっぱり首を横に振るだろうが。

脳裏を荒れ狂う情報の波が去って、落ち着きを取り戻した思考回路が変わらない答えを導き出すことに、アイカは小さく笑った。

——なんだ、エリイちゃんも大概意地っ張りだけど、あたしも大して変わんないじゃん。

そんな、遅れてやってきた達成感しみたものに身を委ねている時だった。

「以前……お会いしましたね」

どこか剣呑な空気を漂わせて、あの紅いガンダムを駆っていた金髪碧眼の女性ダイバー……ダイバーネーム、「アキノ」が沈黙を破って口火を切る。

その目付きは険しい。恐らく、無理をしたことを咎めているのだろう。

有無を言わさない圧を持ったその眼光に少しだけ怯みはしたものの、臆することなく真っ直ぐにアキノの視線と自らのそれを重ね合わせて、アイカは続く言葉が紡がれるのを待つ。

「申し上げにくいことですが……また、騙されたのですか？」

「へ？」

しかし、その口から飛び出てきたのはアイカが予想もしていなかった言葉だった。

微かな怒りが窺えたその瞳は憐憫や同情に色を変えていて、ああこの人は本気なのだ、と、本気で二度も自分たちが騙されてあの場所に行かされたと思っっているのだと理解する。

(……なんていうか、失礼だけど……)

「アキノだっけ？ 堅物だね」

アイカが頭の片隅に浮かべたものの胸の内側にしまい込もうとした言葉を継いで、チイがコイントスをする手を止めて戯けたように首を傾げ、肩を竦めてみせる。

「堅物……？ 失礼ですが貴女は？ 初対面の人間に対してそのような」

「あーうん、ごめん。気に障ったなら謝るけどさ、アイカとエリイはあなたに会いにくくためにわざわざあそこに潜ったんであって、誰かに

騙されたわけじゃないし、チイを疑ってんなら申し訳ないけどシロだよ」

あの視線が向いていた先はチイだったのだろう。どこまでその評判や手口を知っているかはともかくとして、マナーを重視しているアキノであればいくらハードコアデイメンションとはいえMPKを誘発したり、作る方も作る方とはいえ開発者用の裏口突破で報酬をせしめるといった彼女を問題視していてもおかしくはない。

だが、もしチイの手管を知っているなら疑いよりも先に嫌悪を向けていただろうから、知らないと見る方が妥当だろう。

ふむ、と、右手の指、その甲を唇に、親指を細い顎に当てる仕草を見せてアキノは数秒間沈黙した。

「……そうですね、貴女が仮に彼女たちを陥れたなら彼女たちは嫌悪を示していたでしょう、疑って申し訳ありません」

「あー、別にいいよ、そういうの。てか敬語やめて、マジで背中痒くなっからさ……おいエリイ、あんたの探し人だぜ、いつまで惚けてんだ」

何故そこで突っかかる必要が、と、反目するアキノの言葉を遮り、チイは未だ心ここにあらずといった風情で天井を見つめていたエリイの両肩を揺さぶって意識を無理やり引き戻す。

「……あ、あう……わたし、何を……」

「生き残って帰ってきたんだよ、それより早くあいつに礼なりなんなり伝えることがあるんじゃないのか」

荒療治ではあったがエリイの再起動も完了したようで、当惑する彼女にアキノの存在を指し示してチイは小さく溜息をつく。

まあ、考えてみれば無理もないことではある。レクチャーしたとはいえ初心者が三分の壁を突破して、その後に関手も手負いだったからとはいえリソースの全てを使い果たすような戦いの果てになんとか勝利を収めたのだ、それだけ一気に情報を詰め込まれて、パンクするなというのも難しい。

「エリイさん、でよろしいですか？」

「は、はい……」

「不躰ながら貴女たちの行動は危険なものです。今後は謹んだ方がよろしいかと。ですが、そうまでして私に伝えたいことがある、というのは……何か見過ごせない違反行為か何かに巻き込まれているのでしょうか？ 私に力になれることであれば、ザ・シルバリーの名に懸けて力をお貸しいたしますが」

頭の中に石でも詰まってるか脳みそが利用規約で出来てんのか、こいつは。

何から何までGBNの秩序に関することしか考えていないようなアキノの態度にチイは気付かれないうように呆れて、それを俯瞰するアイカは、どこか剣呑で正反対な二人の様子にただ愛想笑いを浮かべることしかできなかつた。

「い、いえ……その……巻き込まれている、わけでは……」

「では、何か人には言えないような事情を知ってしまったと？」

「あ、あう……その……あの……」

「えっと、エリイちゃんはお礼が言いたいんです」

どこまでも融通の効かない二人をこのまま放置していれば平行線を辿るであろうことは火を見るよりも明らかだ。

アイカはずい、と詰め寄られて少し引き気味になっているエリイを庇うように前に出て、端的に事情を説明する。

「お礼、ですか……？」

「はい。あたしも、最初にあのヴァルガってディメンションに行った時は騙されて飛ばされちゃったんですけど、アキノさんが助けてくれたじゃないですか」

忘れはしない。深紅のガンダムが炎を携えて小悪党共を薙ぎ払ったあの光景と、凜と響き渡る言葉を。

ありがとうございます、と、頭を下げるアイカに続いて、エリイもまた、相変わらず蚊の鳴くような、今にも消え入りそうな儂い声で同じ言葉を唇から紡ぎ出した。

たった、それだけのことだ。それだけのこともかもしれないけれど、きつと死力を尽くして気力を削って、手繰り寄せる価値のあった運命だと、アイカはそう確信している。

チイはあの災害みたいな砲撃を放ったクアンタのカスタムモデルに遭遇することを乱数の神に祈っていたのなら、きつとエリイが同じ神様に祈っていたのはこの再会で、それが果たされた。

なら、それで十分だ。死ぬような思いをしたとしても、苦勞に見合うだけの対価はある。

じつと、唇を真一文字に引き結んだアキノの瞳を見つめるエリイが同じことを考えているのかどうかはアイカにはわからない。

それでもその目には、消え入りそうな声とは対照的に、アイカが垣間見てきた強く真の通った想いが宿っている。

沈黙。そんなつまらないことのために危険を犯すなどアキノが怒り出すのであっても無理はないと思うし、それでも構わないと思う。

それは正当なものだ。自分たちが褒められたことをしたのでないことぐらいアイカにもわかってるし、何よりもGBNの秩序や安寧、マナーを優先しているであろうアキノの信念がエリイの瞳に勝るとも劣らないぐらいに堅いものであることだって想像がつく。

だが、それはそれとしてこの空気は気まずい。どこか刑の執行を待つ罪人のような面持ちでアイカはアキノを見つめ、チイが指で弾くコインの音を数えながら、ただ答えが返ってくるのを待つ。

そして。

「……ええ、と、その……」

「はい」

「ああ？」

「……あう……」

「正直、その……困惑しています……」

長い沈黙の末にアイカが見たものは、鋼鉄の意志で武装して、凜とした表情を保っていたアキノのそれがふにやふにやと崩れて、頬を真っ赤に染めながら三人へと向けていた視線を外すという、またも予想の斜め上を行くような光景だった。

ダイバールツクにアクセントとして銀色が各所に配された黒いロングコートを纏う軍人然とした姿の女性が、同じ装飾が施された軍帽のようなものを目深に被り、生娘のように頬を染めている。

なんとというか凄絶だ。ギャップとか、そういうあれが。

急にもじもじと自信をなくしたアキノに、アイカは驚愕を、エリイは困惑を、チイはいつも通りに感情の読めないニヒルな笑いをと、三者三様、しかしその根底には同じく好奇を宿した視線が突き刺さる。「……私は、煙たがられこそしても、誰かに感謝されたことなどありませんでした。なので……その、困惑していて……尊敬するキャプテン・ジオンのようにウィットに富んだセンスがあったなら、少しは違ったのかもしれませんが……ええ、そうです。チハヤさん。貴女が指摘する通り、私は堅物なのです……」

はらり、と、アキノの碧眼から一筋の滴が溢れて落ちる。

それはきつと、あの日ガンダムベースで見た「絵理」の涙と根を同じくするようなものだ、アイカは思った。

自治厨、という言葉がある。

古くはインターネットの匿名掲示板において利用者が立てたスレッド、特定の話題について話し合うトピックの中でもパート化して長く続いてきたものに見られる、ローカルルールを守らない人間を過剰に咎める人間を指して使われてきたように、それは決してプラスのイメージを持った言葉などではなく、厄介者に押される烙印に等しい。

そしてアキノの行いは、その是非を問うことを置いておけば、間違いなくその烙印を押されるに値するものなのだろう。

煙たがられてきた、の一言に包み込まれた重みに、アイカは、かける言葉が見つからなかった。エリイも、同じだった。

「アキノでいいんだよね？　とりあえずそのチハヤってのやめてよ、チイはチイでいいからさ」

見りやあわかるよ、と、皮肉を飛ばさなかったのはチイの優しさなのか、それ以上に自分が嫌っているダイバーネームで呼ばれたことへの反駁なのかわからない。

だが、きつと前者なのだろうと、アイカは思う。

誠意は言葉ではなく金額。チイが好んでいるその言葉が示す本来の意味は、言葉や感情ではなく金額、その数字の大きさこそが他人に

示せる誠意の証明であり、裏を返せばそこにある想いなど、何の役にも立たない、ということでもある。

その言葉を残した人物は後に何も言わずに大金だけを寄付するという形で自らの誠意を体現させたのだが、それは置いておくとしても、チイがもし本当に、厳格な意味でその言葉を好んでいるのなら、200BCというアイカとエリイにとっての全財産であったとしても端金で無謀なミッションを引き受けたりはしなかっただろう。ならば、そこにあつたものは優しさとか、そういうものではないかと思う。

無論、チイが自分から何でも手伝うと言い出した負い目はあるだろう。それでも、彼女が慣れたプレイヤーであるなら、ネトゲについて回るトラブルの一つとしてアイカとエリイを切り捨てることだつてできたはずだ。

だが、チイはそうしなかった。

「チイもさ、感謝してんだよ。堅物つつつたのはマジでごめん、それはチイが悪かつた。あの時アキノが助けてくれなきゃ死んでたからね」
「チハヤさん……いえ、チイ……」

「だからさ、まあなんつーか……何があつたか知らねーし訊かねーけど、とりあえずありがとよ、アキノ」

踵を返して、ばつが悪そうに髪をかき上げながらチイは言った。

恐らく、照れ隠しなのだろう。だが、そんなチイの子供っぽさを笑う者はこの場に一人としていなかった。

「……あ、あの……アキノ、さん……」

「なんででしょうか、エリイさん」

「……その、わたしも……改めて、ありがとう、ございます……そ、それと……差し支えなければ、わたしも、エリイで……構いません、の……」

きつと精一杯の勇気を振り絞って、そこまで語ると、エリイは先ほどまでのアキノのように顔を真っ赤に染めて、アイカの後ろに隠れてしまった。

それでもよく頑張った。その勇気を認めるように銀髪をそつと撫

でながら、アイカはちらりと横目に見たエリイにそつと微笑みかける。

「……てかアキノ、今フォースとか所属してんの？」

「チイちゃん、何言つて……」

「チイの記憶が正しけりや、ザ・シルバリイつてもう解散したフォースっしょ？ ならさ、アキノ……ってかアイカもエリイもだけど、良けりやフォースとか組んでみない？」

袖付きがどうのこうのって言うしき、といつもの誤用を披露しつつ、チイは三人にそう提案した。

そこにある意図は半分ぐらいは善意からくるものだ。だが、打算がないかと問われれば嘘になる。

チイとしては一度目をつけられてしまった以上、また悪質クリエイトミツシヨンの穴をついて荒稼ぎに回るのもリスクが高いし、野良で所属フォースを探すにも、自分のやり口はGBN内にコンテンツとして設置された掲示板で共有され、ブラックリストに突っ込まれている可能性が高い以上、それも厳しい。

(アキノは見たとこクソ強いし、アイカもエリイも素質は悪くねえ、すぐに……って訳にやいかねーだろうけど、足掛かりとしちや十分だろ)

ならば、ゼロからフォースを作るにもチイの素性を知らず、知つていても関心を持たず尚且つ伸びる素養のある人間を探すという手間を省ける今は、面子に多少人格的な問題を抱えていようが最大の好機だ。

あくまでも金を稼ぐこと。何よりそれがチイにとってこのGBNに潜り続ける理由で、そのためならリスクも厭わない覚悟もあるが、ギブアンドテイク、WIN-WINの関係が成り立つのであれば、そしてそれが自分にとって利益を最大化する手段であるのなら、多少の不利益に目を瞑るのだってやぶさかではない。

——それに。

もう一つ、内心で呟きかけた言葉を形にする前に押し潰して、何事もなかったかのようにチイは提案への返答を待つ。

「私を……受け入れてくれるのですか？」

「もちろん！　って、なんかあたしが代表者みたいになっちゃって申し訳ないんですけど、あたしとしてはエリイちゃんとチイちゃんとアキノさんがいいなら、フォース？　っていうの、組んでもいいかなって思ってます☆」

ビシツと右目の脇でピースサインを掲げて、アイカはチイの提案を承諾する。

フォースについて詳しくはわからないが、要するにチームみたいなものだろう。

あまりバトル系の動画は漁ってこなかったからよくわからないが、バイト先のライブモニターに結構な頻度で映るチャンピオンの動画には「AVAILABLE」というフォースでミッションを攻略するといった趣旨のものが多かったように記憶している。

「……わ、わたしも……お三方の、ご迷惑で、ないのなら……」

「チイはさつき言った通りだよ、そんじやとりあえずアキノ、あんたは？」

「……不束者ですが、よろしくお願いします」

「そんじや決まりって訳だ、んじやアイカ、びしつとよろしく」

「了解☆、それじや、申請を……って、あ」

アイカが開いたコンソールからフォース結成申請を送ろうとしたが。

【ERROR：フォースの結成にはダイバーランクD以上が条件となります】

吐き出されたものは、無情なエラーメッセージだった。

『それでは……不躰かもしれませんが、とりあえずフレンドから始めましょう。ランクが上がったら教えてくださいね』

『フレンドだけど、チイは悪いけどパスするね。三人が嫌いとかじゃなくて……まあ訳ありみてーなもんだからその辺は聞かないでくれると助かるわ、一応毎日ロビーにはいるから手間かと思うけど探して

教えて』

なんともしまらない結果に終わってしまったが、アキノとフレンド交換を、チイとは約束を交わす形で、愛香はGBNからログアウトする形になった。

顔から火が出そう、というのはきつとこういうことなのだろう。

「ネットゲやってる人がWiki読まない人に怒る気持ちがわかったよ……」

「……あ、あの、落ち込まないで、ください……その、わたしも……リンク……足りて、なくて……」

「ありがとね、絵理……あーもう恥つずいなあ……」

絵理に左手を掴まれる形で、寄り添いながら二人はすっかり夜の帳が降りたシーサイドを歩いていった。

かつん、かつんと、絵理の白杖がコンクリートの地面をなぞる音が夏の気配を宿した海風に乗って、彼方へと吹き抜けていくような、少し気怠くも心地よい感覚に、現実逃避をするように身を委ねながら愛香はがくりと肩を落とす。

チイが言っていた訳あり、というのも引つかかるといえば引つかかるが、それ以上に自分の失敗がただただ恥ずかしい。穴があったら全力で飛び込みそうな勢いだ。

「……その、愛香、さん……」

「んー……なに、絵理？」

消沈していた愛香の耳朵に、囁きかけるような絵理の声がそつと触れる。

生返事で済ませてしまうのもなんだか悪い気もするが、もう今日の愛香は店じまいだ。あの情報量の洪水みたいな出来事だけで神経が焼き切れそうだったのに、最後の最後に特大のミスを犯してしまえばこうもなろう。

これも乱数の神様が望んだ運命を引き当ててくれた反動か。だとしたら乱数の神様とやらはとんだ性悪だ。お祈りゲーは悪い文明。鉄パイプがミサイルポッドに化けるのを祈りながらリセゲーさせられるのも全てあの神様のせいだ。

誰かが聞いているわけでもないが、自己弁護じみた言葉を疲れた脳内で繰り返しながら愛香は続く言葉を待つ。

「……ありがとうございます、ごぎいます……」

「ん、何が？」

「……わ、わたし、その……今まで、生きてて……よかつたことなんて……数えるくらいしか……なかつたんです……」

絵理は足を止めて、長い前髪の左側を止める、イルカを象った銀色のバレツタに触れながら静かにそう呟いた。

その仕草に、そして指先が触れたバレツタにどんな意味が込められているのかを、愛香はきつと完全には理解できない。

それでも、きつと無理をして笑おうとしてきたのが癖になって、くしやりと歪んでいつも、誰かの機嫌を伺っているように笑う絵理だ。ならばその言葉には何一つ誇張などなく、真実なのだろう。

重い。わかつてはいたけれど、ただひたすらに絵理の言葉は愛香の心臓を鉛の塊で包み込むような感触を持って鼓膜を震わせる。

「だから……ありがとうございます……迷惑、かけちゃったかもしれない……ごめんなさい……でも、今日は……楽しくて……わたし……本当は……思っちゃ、いけないのかも、しれません……でも、でも……生きてて……よかつた、って……」

だが、それでも決めたのだ。ぼろぼろと焦点の定まらない左眼から涙を零し続ける絵理の頬にそつと右手を伸ばして、愛香はその涙を掬い取る。

そのまま口元に指先を運んでみれば、薄い塩の味が舌先を伝わって胸を刺す。こんなことが何かの代償行為になるとも思っていない。こんなことで絵理が味わってきた痛みや苦痛を分かった気になれるとも思っていない。

それでも知っておかなきゃいけない気がしたのは、もう脳みそが疲れ果てていたからなのか、それとも自分があの時、「アルス・ノヴァ」のノゾミを見た時と同じなのか——夜の塩気と気怠さと疲労に当てられて、どこか朦朧とした愛香の頭では、その答えはわからない。

だが、きつとどつちでも同じだった。痛みを、生きているという当たり前にさえ罪の意識が傷を作って流れ続ける無色透明な血液を、一雫でも掬い上げること、それができるなら、それしかできないとしても。

「あたしもなんだかんだ言っただけよ、絵理。それじゃ……」
また、明日。駅のホームに着いてしまえば、二人は一人になってしまふ。

「……っ、はい……愛香、さん……また、明日……っ……！」

それでも、きつとこの言葉があれば、明日にまた二人に戻る。

何の確証もないけれど、何の根拠もないけれど。

願っている。そうなることを。守ろうとする。そうであれというように。

だから、世界は根拠も理由もないその言葉を、守ろうと思うことを含めて、約束と呼ぶのだろう。

そんな約束を抱えて、愛香と絵理は反対のホームに分かれて家路に着くのだった。明日の再会を、頭の片隅に描きながら。

幕間：バエリングお嬢様

【猿山】ハードコアデイメンション・ヴァルガ総合スレ [part178](#)

【蠱毒】

1：以下、名無しのダイバーがお送りします

ここはGBNにおける超上級者向け、無制限のフリーバトル区域、ハードコアデイメンション・ヴァルガに関しての雑談スレッドです。ヴァルガ構築、クリエイトミッション攻略に関する相談はビルドスレ、クリエイトミッションスレでお願いします。

【GBNまとめWiki】 [https](#)

【ビルド構築相談スレ】 [https](#)

【クリエイトミッション攻略スレ】 [https](#)

※※※

378：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

今日も苦行するかってヴァルガに絶界行したら開幕で消し飛ばされたんだが

379：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>>378

避けないお前が悪い定期

380：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>>378

ヴァルガにダイブする時は初手回避ってママから教わらなかったのか？

381：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

草

382：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

騙されて悪質ミッション踏まされたとかじゃなく自分で行ったのか、なら自業自得だわな

383：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

でも上級者の動画見ると俺もいけるかも、って思うようになるよ

な、それでいざ行ってみたら開幕天誅は耐えてリスキル狙いに天誅返して気持ち良くなつてるとどっかから飛んでくるビームで天誅されるんだよ

384：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>383

頭幕末かよ、つーか別ゲーの話題はNG

385：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>379

>>380

いや何度も苦行で潜ってたんだからそんぐらいわかるわ、なんかインした瞬間に拡散波動砲みてーなのが飛んできて避けようにも逃げ場がないから無敵切れた瞬間にそのまま蒸発させられたわ、クソゲー

386：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

拡散波動砲……あつ（察し）

387：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ああうん察したわ、それはお前のエン力運が屑運だったから諦めろ

388：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>385

すまん俺が悪かった、それ撃ってきたクアンタ、個人ランク39位のSSSランだからFOEみたいなもの

389：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ヤバイとは聞いてたけど個ラン二桁クラスまでいんのかよ……（絶望）

390：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

フリーバトルがしたいって要望出した奴が悪いんだよ

391：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

シャ○子が悪いんだよ

392：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

なんでもかんでもシャ○子に罪を擦り付けるのはやめろ

393：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

つってもあのFOEさん練習場所として根城にしてるっばいから

なあ……ソロ専って聞いたしもう会った時点で諦めるしかないだろ

394：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

FOEさんは基本俺らみたいいな低ランは相手にしないから本当ただの巻き込まれ事故で草枯れる

395：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

枯れる草も生えてねえだろ

396：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

なんかそのFOEさんとエンカウントして生き残ったFランダイバーがいるらしい

397：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

そりや会っただけなら生き残るでしょ

398：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

オーガとか会った瞬間に斬られるからな

399：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>398

オーガに斬られる時点でお前の腕が上手い定期、あいつ喋ってること翻訳するとFOEさんと同じで見込みのある奴だけ襲ってるっぽいからな

400：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

いや、俺も噂で聞いただけなんだけどそのFランダイバー、ログイン2日目のアカウントらしいぞ、しかも2回ヴァルガに行つて2回とも生還してるとか

401：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

マ？

402：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

流石に嘘乙、って言いたいけどGPD復帰勢とかもいるからな

403：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ログイン2日目（GPD18000戦勝率8割）

404：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>401

噂の出所は知らんけどマギーさんに初心者フレが2人増えたと

か聞くしそいつらじゃね？

405：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>404

また剛運チャートか壊れるなあ……

406：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ガチ初が運だけで生き残れる場所じゃないし3分の壁超えてんなら素質はあるな、勿論ランダムエンカでFOEさんがほとんど消しとばしてくれて自分は生き残る剛運引き当てたんだろうけど

407：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

なんか前にFOEさん使ってMPKしてた奴と一緒にいたっぽいしそいつらじゃねえかな

408：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ガチ初ならあんま特定とか晒してみたいなことすんなよ

409：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

そもそもガチ初とか関係なく晒しと特定は禁止だからな

410：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

そもそもガチ初がなんでこんな猿山に潜ろうと思ったのかこれもうわかんねえな

411：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

むしろ猿山とはいえガチ初に堂々とMPK見せつける奴の方がヤバいと思うんですがそれは

※※※

「ふ、ふふ……ふふふ……」

デイメンション・シユバルツバルト——常闇に覆われ、鬱蒼とした森の奥深くにその居を構える洋館のようなフォースネストで、話題を取り扱うデイメンションさながら阿鼻叫喚といった様子のスレッドを眺めつつ、その女性はくぐもった笑いを浮かべていた。

「うふふ……あはは……あーっはっは！ ゲホッゲホッ!!」

「お嬢様、いい加減その高笑いはやめた方がよろしいかと……」

「ゲホッ……余計なお世話でしてよセバスチャン、これが笑わずにいられまして？」

赤みが強いブロンドを、白いリボンでツイントールに結えた赤い瞳の女性は悪役のような高笑いをあげようとしてむせ返りながらも、傍に立つセバスチャンと呼んだ燕尾服に身を包んだ、褐色の肌に青髪といった出で立ちの少年を静止する。

かつて、ロータス・チャレンジという高難度クリエイティブミッションが存在した。

チャンピオン率いるフォースランキング、堂々の頂点たる「AVA LON」も、戦術や戦略の構築にこそ重きを置いて、常に始まる前から戦を制し続けてきたフォースランキング次席、「第七機甲師団」も数度挑戦してクリアが叶わなかったそのミッションを、人々はクソゲーと罵りながらも打開策を拓くべく、あらゆる手を使ってあの難攻不落の要塞を突破してきた。

だが、最近のGBNといえばどうだ。

停滞している。ゲームシステムこそ大幅に進歩しても、プレイヤーの本質はGPDから、いや、それ以前に流行したゲームから何一つ変わっていない。

かつてブレイクデカルなどというチートツールが流行した理由はその痕跡が運営ですら掴めなかったという秘匿性で後ろめたさを覆い隠したことが大きな理由だが、その根底にある感情はただ一つだ。

楽をして勝ちたい。

かつて流行したゲームがそうであったように、負けた試合における自分の立ち回りを振り返ることなく、組んだ相方に全ての責任を押し付けて煽り倒す不逞の輩が横行したように、勝負が絡むツールで複数人のチームが生まれれば、その敗北という屈辱、そこにある自らの負い目から眼を覆いたくなってしまいう気持ちは、女性——ダイバーネーム「アリア」にも理解できるところは確かにある。

だが、人間はいつも挑戦することで前に進んできた。

誰かが環境構築を見つけるのを待つのではない。

手探りで重ね続けた敗北に枕を涙で濡らし、ハンカチを噛みちぎり、それでも尚困難に挑み続けた者こそが明日の栄光と戦場の環境、覇権を我が手に収める。

故に、挑戦者とは常に気高く、そして飢えた存在でいなくてはならない。

少なくとも、アリアはそう確信している。

そう、例えるのなら世界を変えるために、率いた軍勢はことごとく壊滅し、己一人という状況に追い込まれて尚革命の志を絶やすことがなかったあのマクギリス・ファリドのように、常に他の誰かではなく自らに責任を問い続け、手負いの餓狼のごとく逆境にこそ己の勝利を信じて疑わないその闘志こそ、今のGBNに、否、人類に欠如している、剣二振りのみで厄祭戦を終結へと導いた英雄、アグニカ・カイエルの魂に他ならない。

握り締めた拳に力を込めて、アリアは熱く、セバスチャンと呼んだ少年へと幾度も繰り返してきた持論をぶちまける。

「そう、初心者でありながらあのハードコアディメンションに自らダイブし、ましてや生き残って帰ってくる……これ以上アグニカな行いがあると思いません、セバスチャン？」

「なんですかアグニカな行いって、それに僕はセバスチャンという名前ではないと」

「お黙りなさいセバスチャン、ああ……わたくし、いたく感動いたしましたわ、これほど心躍らされたのは一体いつ以来のことかしら」

いくつもの記憶が、そこに伴った身悶えするほどの興奮が、アリアの脳裏でスパークしては消えていく。

FOEさんと呼ばれていたあのクアンタの改造機に喧嘩を売って為す術もなく完封された哀しみも、「獄炎のオーガ」の二つ名を欲しいままにするトップランカー、オーガと言葉は無用とばかりに剣を交えて斬り裂かれた屈辱も、そして巡り合った先進気鋭の天才少年――「ビルドダイバーズのリク」が手にした新たな剣にその身を裂かれた驚愕も。

全てが愛しく、かけがえのないアグニカ・カイエルの魂に溢れた戦

いであつた。

その、幾度重ねたか知れない敗北にすらアリアは心を躍らせ、何千、何万……いや、それすら乗り越えた未来の果てに彼らを打倒し、やがては不動のチャンピオン、クジヨウ・キヨウヤに挑みかかり、掲げる黄金の剣の切っ先にその首級を掲げんと、興奮と屈辱の狭間で悶え、ハンカチを何枚も喰いちぎりながらも、諦めの二文字とは無縁に、ただ己の描く理想をその手に収めるべく燃えてきた女なのだ。

端的に表現すれば頭のネジが一本か二本外れているともいう。

「……戦いたいですわね、あの、アグニカの魂を継ぐ者たちと」

だが、今はまだ早い。

セバスチャンと呼ばれた少年が哀れみを込めた目と共に差し出してきたエナジードリンクをティーカップに注ぎながら、仮想の刺激が舌の上で弾ける感触と、現実のそれと違わぬケミカルな味わいにアリアは舌鼓を打つ。

きつと、アグニカの魂を継ぐそのダイバーたちであれば名を上げて、すぐに自分の領域まで成り上がってくることだろう。その時、その瞬間にこそ互いが至高の領域にまで高め合ったアグニカンスピリットをぶつけ合い、至福にして至上、それこそ天にも昇る心地の戦いを味わえる。

「楽しみですわねセバスチャン……ふふふ……おほほ……おーっほっほ！　ゲホッゲホッゴホッツツ！！」

「お嬢様あああっ！！！」

だから炭酸飲料飲んでる時に高笑いなんかするなど言っただけとばかりに盛大にむせ返ったアリアの背中を摩りながら、暫定セバスチャンことダイバーネーム、「ミツルギ」は深い溜息を吐き出す。

多分明日も自分はセバスチャンと呼ばれ続けるのだろうし、アリアに目をつけられたそのダイバーについても自分が調べる羽目になるのだろう。

厄介ごとへの予感と、目をつけられた拳句勝手にアグニカ・カイエルの魂を継ぐ者だと決め付けられた名前も知らない誰かに同情を寄せながら、ミツルギはアリアの咳が治まるのを待つのだった。

尚、これは二人の間でそう珍しくもない日常の一幕であった。

第九話「あたしの火力が足りてない、餅は餅屋とコアガンダム」

「ぐぬぬ……」

フオース結成（未遂）から数日後、愛香は学校の昼休みに、設定をデフォルトのままにしていたために保存されていた第二回絶界行のリプレイと、その後に関数を上げるために受けたロビーミッションのリプレイを比較しては唸り声を上げるといふ奇行を繰り返していた。

初めて正式に受けたロビーミッションは、当たり前だがあの蠱毒の壺とは比較すべくもなく平和なものだった。

初期配置のリーオーNPDを合計六機撃破すればクリア。NPDナビゲーターから操作レクチャーを受けつつ、最初は棒立ちのそれ相手に射撃や格闘、そして操作の確認を行い、受けた人数に応じて敵の数やステータスは割増されるというチュートリアルミッションとしては模範的な程にテンプレートなものだ。

一機ずつリーオーNPDが降ってくる、操作、射撃、格闘の各々三フェイズをクリアした後は開けた空軍基地に陣取って攻撃や反撃を行って来る残り三機との格闘が待っている。

待っているのだが、なんと表現すればいいのか、あまり棒立ちの敵と戦った感触が変わらない、というのが愛香の所感だった。

数の優位を生かして十字砲火を試みてもなく、こちらの攻撃を先読みしていたかのごとく先行入力で格闘攻撃を出してきたとしか思えない超反応でビームサーベルを振ってくるのでもなく、単純にふらふらと動いては散発的に射撃を繰り返し、たまに気が向いたら格闘を振る、というような思考ルーチンに設定されたそれらをコアスプレーガンの一撃で屠ったとして、なんの感慨が湧くだろうか。

もちろん、チュートリアルミッションでいきなりそんな超反応や戦術連携を浴びせてくる方が非常識的なのはわかっている。

——というか、そんなチュートリアルで初見殺しを浴びせてくるよ

うなクソゲーがあつてたまるか。

愛香とて頭の中ではそうわかつている。わかっているのだが。

(あたしたちがやってきたの、そのクソゲーなんだよね……)

強くてニューゲーム、というのはちようどこういう感覚なのだろうか。

仮に自分たちの行動が初心者を育てる最短ルートの正解なのだとしても、間違いなく、他人に同じことを勧めたいだなんて心の底から思わないが。

静かに溜息を吐き出しながら、愛香は人差し指でスクリーンをなぞり、再生が終わったチュートリアルミッションのリプレイから画面を切り替える。

その後を受けた、Fランク推奨ミッションにおける討伐ミッションに設定されたエネミーの思考ルーチンもそう大差ない。

精々ガンダムの原作キャラを再現したNPDは他の名前を持たないNPDよりも少しだけ攻撃や戦術の幅を広げた高度なAIを搭載しているのだが、それでもランクに応じた、明確に隙や見逃しが多いものとなっている。

ただ、バージョン1.78へのアップデートでAIの大幅な技術革新が導入されたことでネームドのNPDはより原作キャラに近い行動や思考を行うようになっていたのだが。

「……いくらなんでもなんも考えないで突っ込んでくるとは思わなかったなあ」

「……そ、そうですね……あはは……」

愛香のスマートフォン画面に表示されているミッション、「グジャン家当主、誇りの模擬戦」におけるリプレイ映像では、黒と金という勇ましさを感じさせるレールガン装備の機体、「レギンレイズ」がそのレールガンを抱えたままアイカとエリイに向けて全力で直進していく姿と、それをフォローしようにも思考ルーチンの枷が邪魔をしているのか、各々混乱した様子で好き勝手に動いては二人の十字砲火を受けて爆散していく緑色のレギンレイズが映し出されている。

黒と金のレギンレイズは耐久値が高めに設定されていたものの、あ

くまでこれは初心者向けミッションだ。

明らかに近距離での取り回しが悪い射撃兵装を、足を止めて撃ち続けているのであれば多少ビーム属性を持つ攻撃に対する耐性があったとしても、その隙についてちまちまと削り倒せる。

実際、二人は教則通りにその隙をつく形で、名前は覚えていないがーとにかくクジャン家当主なるネームドのNPCを撃破していた。

だが、愛香の指先がすつ、と画面をなぞれば、そんな、どこかほのぼのとした雰囲気さえ感じられる初心者向けのミッションとは対照的な地獄を映し出したものへと切り替わる。

先日、ハードデイメンション・ヴァルガにおいてアイカが上げたキルスコアの数は三だ。

一機はすつ転んだ先で硬直していたスローターダガー。もう一機はもう二度と名前も思い出したいくないモヒカンを踏み台にして背後から貫いたドライセン。もう一機は、その名前も思い出したいくない奴の愛機であるザクⅢ。

数と内容だけ見れば、確かにそれは華々しい戦果だといえよう。

スローターダガーは棒立ちに近い状態で硬直を晒していたから例外だとしても、奇襲で一機を、正面から一機をーそれもカスタム機を撃破したという内容だけを見つめれば、愛香の上げた戦果は大金星に近い。

だが、その内容の中で、純粋に愛香の力で撃破できたと評価できるのはその例外の一機だけなのだ。

「……あの、愛香さん……どう、されたんですか……？」

気づけばまた溜息を吐き出していたらしい。

依然として右目と額は包帯で覆っているものの、左頬に貼っていた絆創膏を剥がした絵理が、懺然として機嫌が悪そうな愛香に、もそもそと、小鳥が啄むように齧っていたメロンパンで顔の下半分を隠しながら恐る恐るといった風情で問いかけてくる。

「ああごめん、絵理……ううん、なんでもない……ってわけじゃないん

「だけど」

「？」

「なんていうか、あたしの火力が足りてない」

味方の火力が足りてない。

昔のゲームで野良の即席パーティーを組んだ時、足を引っ張っていた方のプレイヤーが残したことで広まり、スラングと化した迷言だとされるが、その経緯と詳細については割愛しよう。

貢献の是非、誰が足を引っ張っていたなどの責任問題も置いておくとして、客観的に見てもそのような事態に陥ることは、GBNにおいてもそう珍しいものではない。

ロビーのNPDに設けられた機能であるマッチングシステムを利用して野良で即席パーティーを組んだら全員が偵察型だったとか、逆に全員が格闘型のアタッカーで射撃特化の相手になす術もなく全滅したとか、そういう悲劇は笑い話に姿を変えて、今も巷を飛び交っている。

愛香たちの場合、あのハードディメンション・ヴァルガへのダイブを三人パーティーで受けたミッションとして見るなら、そのMVPは間違いなくチイだった。そこに疑いの余地はない。

愛香たちが始めたばかりで不慣れだったということもあるが、それを差し引いても先ほどのチームにおいて自らの立ち回りを省みるなら、先ほどの一言に、「自分の」火力が足りていないということに尽きるといった風情だ。

「元々あたしのガンブラ、戦うために作ったやつじゃないんだけどね……それでもやつぱりフォース組むなら、そういうことも気にしなきゃいけないし」

愛香が溜息まじりに語った通り、コメントコアガンダムが自前で備えている武装は最低限だ。

コアスプレーガンに、背部のバックパックに装備されたビームトーチ二基。普段はビームダガーと変わらない刀身の短さで、それよりも出力が劣るといった有様だ。

一応、出力を集中させればビームサーベルとしての使用も可能であ

るが、それを行ったところで特別な、必殺と呼べるほどの火力にはならない。

あくまでも汎用機に備えられた標準的なビームサーベルに姿を変えただけ。事実ではあるのだが、羅列すると悲しくなってくる。

「……で、でも……その……」

「いいよ、言ってる？ あたし一人だと煮詰まっちゃってさ」

遠慮がちに、メロンパンで顔を隠したまま絵理がぼそぼそと何事かを呟こうとして引つ込めたが、愛香は気にすることなくその続きを促した。

それは配慮とかそういうものではなく、純粋な本心だ。

一応あれこれと考えてはいるのだが、結局のところ自分でもどうすればいいのかよくわからない、というのが愛香の抱えているもやもやとした気持ちの正体なのだ。

そんな状況で第三者から意見を貰えるなら、願ったり語ったりだろう。

愛香が促したのに答える形で、しかしどこか気まずそうに八割以上の面積が残っているメロンパンで今度は顔を完全に覆いながら絵理はぼそぼそと、打ち切りかけた言葉を続ける。

「……ええ、と……その……ミッションを、受けるだけなら……今は、その……えつと……問題は……」

「まあ、確かに……」

実際、もう一度ハードコアデイメンション・ヴァルガにダイブする予定があるかと訊かれれば即座に首を横に振るし、今後潜るつもりがあるかと訊かれればそれだって絶対にノーだ。

アキノにお礼を言う、その目標を達成した以上絵理としてもあの場所にこだわる理由はなかったし、今も絵理はモヒカンに鬨り殺されかけた光景を夢に見るほど、ハードコアデイメンション・ヴァルガにおける一連の戦いはトラウマになっている。

とはいえ、火力が足りないという問題が避けて通れないものであることぐらひは二人とも理解している。

上のランクで受けられるミッションに登場するNPDの耐久値が

どれぐらいに設定されているのかはわからないし、とりあえずフォースを組める手前のEランクまで上がって、腕試しに受けたEランク推奨ミツションも、確かにFランク推奨のそれよりは苛烈さを増していた。

しかし、此処までがチュートリアルだ、といった風情で反応や攻撃密度の上昇こそあっても行動ルーチンには露骨な隙が設けられていたり、耐久値そのものこそ上がっているものの、あのモヒカンカスタムのような理不尽さはない。

問題を先送りにして、火力不足に陥った時に悩めばいいというのはそれも確かだ。

自論を語ってしまった後悔なのか気恥ずかしさなのか、愛香から目を逸らしつつもそもそとメロンパンを啄むのを再開した絵理を見つめながら、愛香はまた喉から飛び出そうとした唸り声を押し留める。

先送りにすることはよくないことだ、とは小学校から高校まで一貫して教えられてきたが、それでも国語の授業で教えられたらあの青い空が落ちてくることを心配し続けて毎日眠れない夜を過ごしたらしい人物よりは健全であることは確かなわけで。

横目で見遣った窓の外に広がる空は、絵理の瞳よりもどこかくすんだ青を湛えていた。

都会の空は煙っていると、県外から引越してきたらしい同級生が、そんなどこか詩的な言葉を呟いていたが、都会生まれの都会育ち、そしてこの都会から修学旅行以外で出たことのない愛香にはその言葉が本当かどうかはわからない。

修学旅行では空なんて見ている暇もなかった。だが。

(まあ、くすんでるんだろうなあ)

焦点が合わず、いわゆるハイライトが消えて濁っている、それでも絵理の瞳が湛える青は、見上げる空より遥かに澄み渡っている。

「……………あ、あの……………愛香、さん……………」

「ん、どしたの絵理」

「……………えっと、その……………わ、わたし、何か……………？　愛香さんに、悪い……………こと……………」

「ううん、なんかハムスターみたいだなんて思っただけ」

「……？」

「だから気にしなくていいよ」

それでも、愛香が綺麗だと信じて疑わないそれは、きつと絵理にとつては触れられたくないことで、持っていたくもないものなのだろうから。

銀髪に鳶色の瞳といった出で立ちの「エリイ」と、黒髪に青い瞳という「絵理」の姿を脳裏に重ねて、愛香は誤魔化すように、曖昧に笑った。

半分は嘘。でも、半分は本当。

純粹に、もそもそとメロンパンを齧っている絵理が小動物じみていて可愛らしいというのも、また事実なのだから。

「店長、ちょっと相談なんですけど」

「随分とまた唐突だね、愛香ちゃん」

今日の分のバイトを終え、人がいなくなつたビルドブース……ガンダム製作を行えるコーナーの片付けを手伝いながら、愛香は紺の布地に、機動戦士ガンダムやその他様々なシリーズに登場するマスケットロボットの、「ハロ」の刺繍が施されたエプロンを首から下げた黄色いポロシャツにジーンズといった姿の中年男性——ガンダムベースショップの店長である、マツムラ・ケンへとその話を持ちかけていた。利用客がニツパーで切り離れた際に床へと飛んでいったゲート——ランナーとパーツを繋いでいる部分だ——の破片を箒とちりとりで丁寧に掃き取りながら、マツムラ店長は珍しい人物からの相談にその手を止める。

愛香はコミュニケーションを取らない、というわけではないし、むしろ積極的にわからないことは訊いてくれるし、利用客に対しても愛想良く接しているが、どこかで何かの線を引いているのか、仕事に関する質問こそすれど「相談」を持ちかけてきた記憶はないように思えた。

人間関係についても同僚とは上手くやっているマツムラ店長は

思っているし、実際愛香が仕事上でミスをした、という報告は何度か受けたことはあるが、朝村愛香という個人について何か折り合いが悪いスタッフがいるという話は聞いたことがない。

「それで……何かあったのかな？ 相談に乗れることならいいんだけど」

「ああいえ、餅は餅屋というかなんていうか、ガンプラについての相談なんですけど」

「ふむ？」

そういえば愛香が先日GBNを始めた、というのはマツムラも覚えている。店舗の巡回中、なんだか重傷患者みたいな感じの黒髪の女の子……奇しくも愛香本人と、その同僚であるムカイ・ヒナタ及び、マツムラ個人が昔から懇意にしている利用客であるクガ・ヒロトと同じ学校の制服を着ていた——と、一緒にゲームブースを利用していたことは記憶に新しい。

ガンダムなんて興味ありません、とばかりに棚卸しや陳列の仕事も商品リストと睨めっこをして、たまにカフェブースを利用する以外は仕事が終わるなりすぐに帰っていた彼女に何があつたのかはわからない。

だが、ガンダムに、ガンプラに興味を持ってくれるのであればそれに勝る名誉はない。

苦節十年、ガンプライマスターという、卓越した製作アドバイザーに与えられる称号をマツムラが手にしてから、幾星霜の時が経った。

GPDやGBNというゲームの後押しこそあれど、ガンプラがここまでブームを引き起こした世の中には、確かに感慨深いものを覚えている。

だが、何度経験してもこの興味のなかつた子がめくるめくガンプラの世界に足を踏み入れてくれた嬉しさに勝るものはない。

小首を傾げてマツムラの返答を待つ愛香に、その熱と感慨を悟らせることがないように平静を装うために小さく咳払いをして、彼は答える。

「ごほん。それで、相談って言うのは何かな」

「えっと、多分見てもらった方が早いでちよつと見てほしいんですけど」

そう言つて、愛香が鞆の中から取り出したものは緩衝材がギツチリと詰め込まれたタツパーだった。

彼女が蓋を開けてみれば、緩衝材に丁寧に包まれたその中に眠っていたものは、果たしてマツムラにも見覚えがある、と、いうよりは最早見慣れたものであるガンプラの姿だった。

「コメントコアガンダム、つていうんですけど……いや、なんていうか、あたしGBNで戦うつもりなかつたんです」

「う、うむ……」

キャプテン・ジオンが製作講座の中で話題としてコアガンダムを取り上げていたことはマツムラも覚えているが、それでも懇意にしているクガ・ヒロトのそれと同じ機体を同じ学校の、しかも同僚がアルバイト先にいる女の子が使っているというのには、どこかセンチメンタリズムな運命と、少しの複雑さを感じてしまう。

「なんていうか……こう、この子、可愛いじゃないですか」

「可愛い？」

「はい、ちっちゃくて、でもただ可愛いだけじゃない、つて感じで」

キャプテン・ジオンの製作講座においてコアガンダムを取り上げた回を、愛香はスマートフォンに穴が開くほど見返している。

その中での全身タイツの彼は、ベースとなったコアガンダムが備えている拡張性——四肢を換装して十八メートルクラスまで機体をグロリアアップさせる特殊機構、プラネッツシステムに着目しながらも、コアガンダムはあくまでその前座ではない、とした上で自身の考案する、コアガンダム自体の戦闘能力を引き上げるカスタマイズを紹介している。

それを参考にしようにも、作例の中に使われていたサポートメカのマシンライダーはアイカのランクでは受けられないミッションの報酬だし、かといって動画を締めくくる時に紹介されていた、「コアガンダム」の随伴機となる二機の量産型、コアジムを用意し、それぞれにプ

ラネッツシステムのアーマーを用意した上でコアガンダムにその全てを纏わせる」という派手な作例は愛香の技量ではとても再現し切れるものではない。

それに何より、十八メートル級の機体になってしまっただけは、可愛くない。

身も蓋もない感想だが、それでも愛香が情動を突き動かされた部分は、そのどこか愛らしさすら覚える小柄な体躯なのだ。

頭部にはG―セルフを思わせる前向きアンテナ、腰のアーマーに、バツクパツクに補助フライトユニット、そしてアーマーの脚部が接続されるハードポイントにはHi―レックガンダムヴレイヴの靴を、接続パーツを介して装着しているのがコメットコアガンダムだ。

大ききこそ純粋なコアガンダムより大きいものの、それでも小柄によくまとまっている。

マツムラから見たコメットコアガンダムに対する所感は、そのようなところだった。

「そういう見方もあるね。で、多分だけど……愛香ちゃん、火力不足に悩んでるのかい？」

「えっ……すごっ、どうしてわかったんですか？」

「ははは、これでも何年もガンプラと向き合ってきたからね」

バトル用ではない、という愛香の前置きも鑑みるに、この機体はコアプレーガンとビームトーチという基本装備しか持っていないのだろう。

そして愛香が友人……かどうかはわからないが、同行者と共にGBNを始めたのであれば、バトルをしている可能性は高い。

それがマツムラの組み立てた推論だった。

「そしてラネッツシステムでのグローアップは愛香ちゃんのポリシーに反する……と、なれば、そうだなあ、軽くて大型の実体剣なんか、いいんじゃないかい？」

小柄な機体、というよりSDガンダムは、HGブランドのような大型の機体に対して不利を背負っている、というのがGBNにおける定説だ。

それは手足の短さから来る可動範囲の狭さに由来する、とされているが、もちろんその定説を覆す形で、あえてSDガンダムで近距離ビルドを組んで活躍するダイバーも存在している。

そして、コアガンダムの体軀はSDのそれに極めて近いが、最大の特徴を挙げるとすればその可動範囲はHGと同じフォーマットを採用している、ということだろう。

「大型の剣を持って戦場を走る小さな機体、っていうのが愛香ちゃんにとってどうかはわからないけれど、個人的には可愛いと思うなあ」
姪が嵌っている魔法少女ものの特撮、「マジカル☆クラウン」なる番組の中には魔法少女らしからぬ物騒な武器、鎖分同を振り回して敵である悪魔を残虐ファイトで一掃する魔法少女が登場するが、姪はその、長い黒髪を白滝みたいな髪型に結んだキャストが演じる役柄と戦闘スタイルを「可愛い」と評していたし、そういうギャップも何か需要があるのだろう。

マツムラには理解が及ばなかったが、価値観の多様化した世の中だ。誰かの作り出した「可愛い」にケチをつける権利など誰も持ち合わせてなどいない。

その魔法少女の真似をしてイヤホンを振り回している姪の姿を脳裏に浮かべながら、マツムラは愛香に提言する。

「剣……なるほど……ありがとうございます、店長」

「うん、いつも後片付け手伝ってくれてこっちもありがとうね、愛香ちゃん。暗いから帰り道は気をつけるんだよ」

何かに弾かれたように駆け出していく愛香の後ろ姿を横目に見ながら、マツムラはどこか昔を懐かしむように小さく息をつく。

「いいねえ、若いって」

自分が彼女たちと同じぐらいの年の頃、愛香や——かつてのクガ・ヒロトがそうしていたように、がむしやらに夢を追いかけていた姿を思い出す。

あの日の夢はこの手に掴んだ。それでも、その時は夢を掴めるのかわからずに、いや、夢がなんであるのかさえ漠然とした状態で、ただ熱意と情動だけが自分を動かしていた。

「認めたくない過ちも、後悔も……ただ認めて次の糧にすればいい、か」

——時間はいるだろうけれどねえ、ヒロト君。

店内に流れるBGMが「蛍の光」に変わり、客がいなくなったことを確認した上でマツムラは掃除機をかけて、そう独りごちるのだった。

第十話 「新たなる剣」愛香は廃人と化しかけたがさしたる問題ではない」

剣。人類が有史以来発明してきた、柄の先端に長めな刃を備える手持ち式の武装を指して人はいう。

その単語を聞いた時、大多数の人々が一般的にイメージするのは恐らく片手持ちかつ両刃の西洋剣、ロングソードという名前で様々なファンタジーRPGに登場するそれであろう。

だが、一口に剣といっても様々な種類が存在する。ロングソード、ブロードソード、バスタードソード、ショーテル、ジャマダハル……羅列していくだけでもキリがないので割愛するが、種類が異なればその特性も使用感も大きく異なるものであり、一概に「剣をメインにした構築を考えているんですが何かオススメはありませんか？」などとビルド構築スレで相談を持ちかければ、まず間違いなく「どの剣？」と聞き返されるように、GBNにおいてもその種類と運用の幅は段違いに広い。

店長からのアドバイスを受けて、家に帰るなり「ガンプラ 剣」という初心者丸出しなキーワードを検索エンジンに打ち込んだ愛香であったが、吐き出された情報の暴力は彼女の頭を抱えさせるのに十分なものだった。

まず、剣を自分で作るのか、それとも既存キットから流用するのか？そして、流用したキットの装備をそのまま使うのか、改造するのか？

GBNにおいて装備の選択を行う場合は、まずそこからスタートしなければならぬ。

他のフルダイブMMOと比較して、GBNが特異だとされているのは、スキャンしたガンプラが別なゲームにおける「装備」と「プレイヤーキャラ」という両方の性質を持ち合わせていることと、ゲームで規定された素材を利用して規定された性能の装備を作り出す「生産」と異なり、ゼロベースで「製作」することも現実的な手段としてあり

得ることだ。

一応、今はガンダムベースで高速射出整形機が貸し出されているため、設計データさえ存在するなら昔のようにプラ板を一枚一枚丁寧に切り出して貼り合わせていく、という工程は簡略化することができる。

だが、ゼロから作る——フルスクラッチを行うのであれば、プラ板積層と呼ばれる昔ながらのスクラッチ手法を用いるにしろ高速射出整形機を利用するにしろ、どのキットのどの武装がどんな特性を持っている、という細かな把握は必要なくなるものの、作り手のセンスや刀剣に対する知識が問われることには変わらない。

一方で流用を選べば、前述した通り様々なガンプラとその武装の特性を把握しなければならぬ。

正直なところ、バイトである程度ガンダムの名前と顔は覚えてきたものの、まだまだ全てが一致するわけではない。

一応ガンダムと剣で検索して出てきた全てのガンプラのスクショを撮って、それらをガンダムベースで探して購入した上でコメントコアガンダムに一つ一つ持たせて性能を検証する、という手段も考えたが、主に金銭的な面でほぼ不可能に近い。

厄介なのは、GBNにおける「剣」は、何も愛香がイメージしていたステレオタイプのような実体剣だけではなく、ビームサーベルもそこにカテゴライズされることだ。

「剣……剣……うわ、なんかノイローゼになりそう」

愛香は頭を抱えてそう呟く。

よく考えたらそもそも仕事帰りだし、これ以上考えるのは脳に良くないはずだ。うん、そうに決まっている。

そう断定するなり検索エンジンでの調べ物を打ち切って、スマートフォンからGBNへの簡易ログインを行い、現実逃避をするようにG—Tubeで新着のおすすめ欄を茫洋と眺めていた愛香だったが、奇しくもそのサムネイルに映っていたのは機体の八割に匹敵する長さの実体剣を装備しながらも、つま先からどす黒い、風化しかけの血液みたいな色をしたビームサーベルを発振したガンダムが、相対する敵

機を奇妙な動きで戦闘エリアの壁際に追い詰めて轢き飛ばす光景だった。

「……剣ってなんだろう」

あれだけ大きな剣を持っていれば、弾き飛ばされたオーツ……ゼロ……ではなく、00と書いてダブルオーと呼ぶガンダムを一方的に破壊できそうなものだが、あの赤いガンダムが決め手にしていたのは爪先のビームサーベルと、身を振らせながら横回転をかけて体当たりをするときか表現できない奇妙なマニューバだ。

剣。確かにわかりやすく強力で、ファンタジーRPGや小説、漫画、アニメの主人公が持っている確率が高い武器。

だが、武器だけで戦闘の勝敗が決まるわけではない。考えてみれば当たり前のことだ。

いつの間にかタップして、再生していたその動画で00ガンダムに勝利を収めた赤いガンダム——アルケーガンダムというらしい——のファイターは勝利の瞬間には悪役レスラーが行うポーズの如く挑発的に左手を手招きさせていたが、戦いが終わった後はダイバー同士互いにお礼をして、握手を交わしている。

アルケーガンダムを操っていたダイバー……ダイバーネーム「ヒロシ」は見事に悪役、といった感じのボサボサの長髪に無精髭を生やした風体だが、00ガンダムのダイバーに接する態度は極めて温厚で真摯だ。

そういうのが、演じる役柄が善であれ悪であれ正しいロールプレイのあり方なのだろう。

先日遭遇したモヒカンたちとは雲泥の差なヒロシの態度に関心しつつ、愛香はヒロシと00を操っていたダイバー、「マモル」が仲良くツーショットを撮ったところで動画を閉じる。

「そうになると、あたしは……」

店長の言葉が、愛香の脳内でリフレインする。

——小柄な機体が、あえて大型の武器を振り回す。

そしてこのコメットコアガンダムそのものの出力は、決して他の十ハメートルクラスのガンプラに劣っているわけではない。

スマートフォン隣の隣で足を伸ばして寛ぐような姿勢を取らせていたコメットコアガンダムを人差し指で突きながら、愛香は頭を使いきたせいか、押し寄せてきた眠気に船を漕ぐ。

ねえ、もしも君が喋ったなら。

どんな剣を、選んでくれるのかな。そんな夢ともうつともしい言葉は、唇が紡ぎ出したのか、愛香の脳裏で溶けて消えたのか。それさえ曖昧なまま、愛香は眠りに落ちていくのだった。

休日出勤。この国で嫌いな言葉はなんですかと訊かれればおよそ八割ぐらいの人間がそう答えるであろう読んで字の如くな四字熟語だ。

欠員が出たからその穴埋めとなる存在が必要になる。

それは当たり前のことで、頭で理解していたとしても、世間がやれゴールデンウィークだやれ盆休みだ、挙げ句の果てには土曜日日曜日だと浮かれている傍で死んだ目をしながらエナジードリンク一つを友にして、会社に出勤し続ける企業戦士が存在しているのは常人たちからすれば不条理極まりないことであろう。

怒りに満ち溢れた身体が闘争を求めてロボゲーの新作が出る、というわけではないが、それでも日々ガンプラは新作や再生産の如何を問わず、絶え間なく世に送り出される。

愛香もまた、欠員の存在により人々が謳歌している日曜日にガンダムベースへと、仕事で足を運ぶことになっていた。

救いがあるとすれば、午前中のヘルプ要員として呼ばれたことと。

「まあどの道来なきやいけなかったんだけど……」

バイトの存在に関わらず、近い内に足を運んでおかなければならなかったことだろうか。

そういう意味では休日出勤とはいえ、ガンダムベースに来る口実ができたのは喜ばしいことなのかもしれない。

業務を終えて、店長がしているのと同じ、ガンダムベースの店員が纏う制服みたいなものであるハロプリントのエプロンを解いてロツカーに仕舞い込み、タイムカードを切る。

あるかどうかはわからないが、タイムカードRTAがあつたら記録を狙えるんじゃないかと自賛したくなるほど一連の動作を素早くこなしながら、愛香は休日の昼間ということもあり、人でごった返している店内に今度は来客として足を踏み入れた。

「大きな剣となると意外と持つてるガンダムって少ないんだよね」

愛香が脳裏に描いていた新たな剣の姿は、奇しくも寝落ちしかけながらも見届けたアルケーガンダムと同様に機体の身長ほどの長さで大きさを持つバスターソードだった。

土曜日を使って、大剣だけに絞り込んでガンダムとの組み合わせを調べていたが、出てきた中で代表的なのは機動戦士ガンダムSEED DESTRUCTION——奇しくもシーサイドベース店の守り神として聳え立つエールストライクガンダムが出てくる作品の続編である——の主人公機であるDESTINYガンダム、そして先ほどのアルケーガンダムと、同じ作品に出てくる00ガンダム、その後継機であるダブルオークアンタ、そしてガンダムSEEDの外伝である「ASTRAY」に出てくる、ブルーフレームセカンドL辺りだった。

難儀なのは、愛香にとって「大きな剣」という定義が愛機であるコメットコアガンダムにそのまま当てはまるとは限らないことだ。

十八メートルクラスの機体にとっても「大きな剣」であるなら、それはより小さな体躯のコメットコアガンダムにとつて、「超大きな剣」になってしまうことだ。

一応、二回目のハードデモンション・ヴァルガへのドライブでモヒー・カーンのザクⅢへとトドメを刺した時には、恐らくブルーフレームセカンドLの剣をベースとしたアキノの武器を使わせてもらった形になるが、あれは剣自体が推進装置と遠隔操作機能を組み込んでいたため、アキノのアシストがあつてようやく運用できたという趣が強い。

それに、あくまであれはアキノの武器だ。彼女の癖に合わせたそれは彼女自身が使った方が強いだろうし、実際、マニピレータが損傷していなければそうしていただろう。

他人の剣に対して譲ってくれ、頼む、だとか、殺してでも奪い取る

とかそういう選択肢が存在するゲームもあるが、NPCを相手にするからできることであって、間違っても人間相手にやっていい行いではない。

何より、愛香にアキノの剣を借りるというチョイスは最初からないので。

でなければ、わざわざガンダムベースに足を運んだりしないのだから。

作品ごとに分けられたエリアを散策し、とりあえず目につけた、HGC Eステイニーガンダムの箱を手にとって、愛香は小さく首を傾げる。

「うーん……大きき的には多分許容範囲だし、折りたためるのはいいけどどうやって機体に付けよう」

アロンダイト。決して折れない伝説の剣を名前の由来に持つ対艦刀——実体剣とビームサーベル双方の性質を持つその剣は、愛香が採用しようと思った第一候補だった。

先ほど呟いた通り、刀身を折り畳めるとというのが何よりも魅力的だ。コメットコアガンダムは小柄なものもあって、武装を持たせたとしてもそれをマウントするレイアウトにも気を払わなければいけない。

そうなると、確実にどこかしらに改修を加えなければならぬのだが、いざキットの箱を手にしてみれば、あれほどイメージしてきたはずの、アロンダイトをその手に持ったコメットコアガンダムの姿が思い描けないのだ。

「うーん……」

「……もし、なにかお探しでしょうか？」

そよ風のような声が耳朶に触れたのは、頭から煙でも噴き出しそうな勢いで愛香が首を捻っていたその時だった。

声が出た方に振り返れば、そこには車椅子に腰を落ち着けた、全体的に儂く、そして「薄い」印象を抱かせる女性が、愛香に微笑みかけている姿がある。

絵理とよく似て、真っ直ぐに伸ばされた髪の毛は色素が薄く、黒というよりは紫に近い印象を受けるし、その瞳も同様に、角度によつて

は薄紫に見えなくもない淡い色彩を湛えていた。

決定的に違うのは、彼女が車椅子に乗っているのと、その目には儂くも確かな光が宿され、焦点を結んでいることだろうか。

色素の薄い長髪をまとめたリボンが、全力稼働する空調にふわりと揺れる。

「あ、すみません……邪魔でしたね」

「いえ、そのようなことは決して……何かお探しの様子でしたので……よろしければ、わたくしもお手伝いいたしましょうか……？」

これでもわたくし、ある程度ガンダムは嗜んでおりますので。

全体的に薄い感じの女性は儂げに微笑みかけると、愛香へその右手を差し伸べた。

ガンダム好きは良くも悪くもお人好しが多い。

彼らがまくし立てる専門用語やモビルスーツに対する細かい造詣は、知らない人間に対して純粹な善意での解説を行っているのだと愛香たちのような「知らない」側の人間も認識しているが、そもそもガンダムとザクの違いすらわからない人間にグフだのドムだのツダだのと種類を並べられても、パンクしてしまうからすれ違う。

ぶつけ合い、傷つけ合うことを望んでいないはずなのにすれ違いがその痛みを生み出してしまふ。儂い世の摂理だ。

嗜んでいる、と控えめな言葉を使っているものの、ガンダムベースを訪れる利用客たちを観察する愛香の目には、その女性の瞳は間違いなく「ガチ」のそれだと映っていた。

(まあでも、店長の時もそれで正解だったし……餅は餅屋だよね)

バイトを始めた時ならいざ知れず、今の愛香はある程度であればガンダムの知識を備えている。

目の前にいる薄く儂い感じの女性がそんなことを喋る光景を想像するのこそ難しいが。例え濃いトークをぶちまけられたとしても日頃の接客スキルを活用すれば対応自体は可能なはずだ。

これらの打算を二秒に満たない間に済ませ、愛香は女性の出してくれた助け舟に乗ることを決めた。

「えっと、あたし、剣持ってるガンプラを探してて……」

「それなら、鉄血のオルフェンズに登場する機体はいかがかしら……？ 主役のバルバトスルプスが持つているソードメイスも剣と定義できるものですわ、それに……ガンダム・バエルが持つているバエル・ソードは有名ですよ……？」

こほつ、こほつ、と、長広舌を一息にぶち撒けたせいなのか、女性は軽く咳き込んでしまう。

「えつと……ありがとうございます、大丈夫ですか？」

「ええ……わたくし、どうにも身体が弱いもので……ごめんあそばせ。咽せてしまっただけですわ……」

「なんていうか、ごめんなさい……」

バエル・ソードについても一応愛香は調べていた。奇しくも「折れない剣」という言葉にアロンダイトと縁を持つその武器ではあつたが、同じ作品に登場する武器、それこそ先ほど女性が挙げたソードメイスなどと比較して軽量であることも含めて、恐らく近距離での取り回しを優先したのだろう。

標準的なサイズであるバエルと比較してもその刀身は決して長いとはいえず、剣そのものがダメージディーラーとしての要なものではなく、翼を象ったスラスタが生み出す推進力とその機動力を活かして懐に飛び込み、手数で圧倒することこそがバエルという機体の本質なのではないかと、愛香は考えている。

一応、目指している戦闘スタイルそのものは近いため、バエルとコメットコアガンダムをミキシングする案も考えてはみたが、可愛くないということでシンプルに却下していた。

と、そこまで詳細に語ったわけではないが、軽さは確かに求めているけれど刀身のサイズが短い、といった具合にお茶を濁す形で、女性へと自身が求めている剣について愛香は語った。

「なるほど……刀身、となると残念ですが、バエル・ソードは短めですわね……そうなってしまいますと……」

女性は残念そうに細い眉を八の字に歪めるが、しばらく考えこむように小首を傾げると、車椅子の肘掛け、その左側に提げていたトートバッグに手を入れて、ごそごそと中身を探り出す。

「けほっ……ああ、ありましたわ……ならば、このキットはいかがでしょう……?」

女性を取り出したのは、単色刷りの小さな段ボールのような材質のパッケージにガンダムアストレイ……アキノが使っていた剣の元ネタである武器の持ち主とは別の、恐らくレッドフレームと呼ばれるそれが印刷されているものだった。

「これは……」

「カレトヴルツフ……昔に雑誌の付録でキット化されたものですわ、ですから、こほっ……塗り分けは難しいかもしれませんが、長く、軽い……そして大きな剣ですわ」

カレトヴルツフ。立体物としては一番最初に、模型誌の付録としてキット化されたそれが現在、市場においてどれほどの価値を持っているか愛香はわからない。

だが、昔の付録というのは得てしてプレミアが付きやすいものだ。それをこの女性は、愛香が勘違いしているのだから惜しげもなく差し出そうとしているように見える。

「いや、あの……あたしの勘違いだったら申し訳ないんですけど、その……これを、あたしに?」

「ええ……貴女、剣を探しているらしやるのでしよう?」

となれば、GBNを嗜まれていらつしやるのですわね。女性は少し咳き込むと、朗らかに、しかし儂く薄い笑みを浮かべながら腰を浮かせて、右手に持ったカレトヴルツフの箱を愛香へと差し出す。

「わかっちゃうもんですか」

「特定のパーツを探す方は、あの遊戯を嗜まれている傾向にありますの……そして、わたくしもまた嗜んでいる身……同じダイバーが困っているのであれば、よしみで手を差し伸べるのも、やぶさかではありませんわ……」

それに、蔵を掃除していただいた時に出てきたものですので。

差し出されたカレトヴルツフを受け取りつつ、愛香はさらっと飛び出してきたスケールの大きな単語に、引きつった笑みを浮かべる。

「あ、ありがとうございます……」

蔵ですか。声にこそ出さなかったが、内心愛香は押し寄せてくる恐れ多いような、申し訳ないような、なんとというか小市民そのものな自分と生きている世界が違うような感覚に、手にしたカレトヴルツフの箱が鉛に変わったかのような重苦しさを覚える。

純白のワンピースといい、いかにも深層の令嬢といった出で立ちだが、カレトヴルツフの市場価値に頓着しないことも含めて、この人はガチのそれなのだろう。

「貴女、お名前は……？」

「あたしですか？ 愛香。朝村愛香です」

「そう、愛香……美しく、素敵なお名前……わたくしは凜音……」

桜宮凜音と申します。もし、ご縁があれば……どちらの世界でも、また、あいまみえたいものですわね……けほっ……」

桜宮凜音。彼女が持つ「もう一つの名前」が名乗ったそれと同じなのかどうかはわからないし、凜音もまた愛香と読みを同じくしつつも意味を異にする「アイカ」という名前を尋ねることはなかった。

「御嬢様、僭越ながら……」

「ええ、石動……元々これを組み立てるだけのつもりで作った時間が、素敵な出会いに変わる……これもまた、一つの革命なのやもしれませぬね……」

うわ、と、愛香が驚愕に声を上げる間もなく、さながら人々の影に溶け込んでいたかのように何の気配も音もなく、石動と呼ばれた、燕尾服を身に纏う長身の男性はその場に突然現れた。

恐らくは凜音とのやり取りをずっとどこかで、いや、気付かなかっただけですぐ近くで見えていたのだろうが、身のこなしは見た目から連想する執事どころか暗殺者のそれだ。

目を凝らして注意深く辺りを窺えば、凜音と付かず離れず、何かがあればすぐその身を盾にできるような距離感で、目立つ燕尾服姿であるにも関わらず気配を極限まで薄くした男性が残り四人ほど愛香を包囲している事に気付く。

(下手なこと言ったらあたし、東京湾に沈んでたんじゃ……)

冷や汗が一筋、愛香のこめかみを伝って落ちる。

改めて凜音へ礼を伝えようと、愛香は全力で駆け出して、ガンダムベースを後にする。

いや、なんというか、濃い。薄いはずなのに、全体的にカロリーが高すぎる。

考えてみればここ最近、こんなことばかりだ。帰りの電車にまだ石動と呼ばれた男の、こちらを鋭く見定めるような視線が残っている錯覚に、愛香は思わず身を震わせてしまう。

「……よし、考えないことにしよう！」

何はともあれ、求めていた剣は手に入った。

それが全て。凜音さんって優しい人に譲ってもらった。他には何もなかった。あたしは何にも見なかった。

愛香は呪文のように、声には出さず呟き続ける。

カレトヴルッフとやらがどんな武器かは調べていないからわからないが、凜音の言葉を信じるのであれば自分の要求に応えうる武装なのだろう。

まだ鉛のようとは行かずとも、どこか重さと圧力を感じる、単色刷りの箱を胸元に抱き寄せて、愛香はその中身に想いを馳せる。

数十分後、凜音が「塗り分けが難しい」と、大剣であるにも関わらず、「軽い」と評していた理由の根幹である真っ白なランナーに頭を抱えることになることを、この時の愛香はまだ知る由もないのであった。

第十一話「その名はビルドボルグくごめんなさいよ
り、ありがとうを」

結論からいえば、確かにカレトヴルツフは愛香の要求を全て満たしていた武装であった。

家に着くなり開封したランナーの真つ白さ……多色成形による色分けが格段に進歩した現代において、HGFAトルギスIIIを見たときのような驚きの白さに頭を抱えながらも、愛香がそれを組み立て終わった時、凜音の言葉が嘘ではなかったと確信したものだ。

だが、世の中そう上手い話ばかりではない。

例えば、現在のGBNにおいていわゆる「環境構築」とされている、装備しているだけで他機に対してのアドバンテージを得られるパーツに、機動戦士ガンダム00に登場した動力源でありスラスタートなる太陽炉、GNドライブの存在が挙げられる。

GNドライブを採用することで見込める最大のリターンは、やはり時限強化特殊兵装であるトランザムシステムが機体に組み込まれることだろう。

細かい原理は割愛するとしても、とにかく発動するだけで機体の出力、速度、パワーが造り込みに応じて、一説によれば通常の三倍まで引き上げられるという具合だ。

ハードディメンション・ヴァルガで千人斬りを達成した「獄炎のオーガ」も、そしてELダイバー……電子生命体の救世主、GBNとガンダムベースのアイドル店員にして史上初だと日本政府に公認された電子生命体、「サラ」のどちらかを消さねばならないという時にそのどちらをも救い出した先駆けの英雄、今、最もチャンピオンに近いとされる「ビルドダイバーズのリク」もその愛機に太陽炉を組み込んでいることから、有用性が窺えるというものだろう。

それだけを聞くなら、じゃあ強さを求めるなら適当に太陽炉を機体から生やしてしまえばいいのか、と誰もがこぞってGNドライブを採用しそうなものだが、トランザムシステムが機体に齎すのは先述した

メリットだけではない。

まず、造り込みが浅ければトランザムの出力上昇に機体が耐えられずに自壊するし、そのラインをクリアしたとしても、原作通りの超スピード、超パワーを得るには更なる造り込みが必要になるし、加えてそのラインをクリアしていざその力をその手に収めてもそのスピードを制御しきれず、破壊不可能オブジェクトに突っ込んで壁の染みになるダイバーも星の数とまではいわなくともそれなりに存在する。

要するに何事もメリットばかりではない、ということだ。

カレトヴルツフが銃器としての運用も可能としていたのは、愛香にとって嬉しい誤算だった。

だが、その色分けだけではなく愛香はその「銃として使える」事実にも頭を抱えることとなってしまった。

まず、当たらない。

愛香のエイミングに問題がないとはいわないが、基本的にシステムとしてオートロックオンを採用している以上、狙いをつけても当たらない、という状況は、相手に弾を避けられたか、銃口が発射の瞬間にブレたかの二択なのだが、今回の問題は後者だった。

カレトヴルツフは溶接用トーチ……という名目のビームライフルであるコアユニットにビルドナイフとビルドカッターと呼ばれるそれぞれ大剣の刃を構成するユニットが接続されることで完成する。

だが、その合体機構の都合上、グリップの抜き差しを前提にしているために塗装で上手いことクリアランスを調整してやらないと、射撃時にグリップがブレるといふ問題が発生する。

それをクリアしても、今度はカレトヴルツフという工具……という名目で作られた事実上の武器が抱えている構造そのものが、愛香にとっては何問題であった。

まず、ビルドナイフ……剣モードでは先端となる大型の刃を構成するユニットが銃身の真上に接続されることで、よほど手首関節を補強していない限り、重力化ではその重量を支えきれず、銃身が下を向いてしまう。

凜音は確かに嘘は言っていない。

カレトヴルツフを純粋な剣として運用するなら、後に発売されたR
G版やHGCEガンダムアストレイレッドドラゴンに付属するそれ
と比較して、組み立てるパーツ数が少なくて済むため重量そのものは
軽く済んでいる。

つまり、カレトヴルツフを銃としても剣としても扱うのであれば、
その強すぎる個性でありクセと向き合った上で機体を調整するか、も
しくは割り切ってどちらかに固定した上での運用を行う必要がある、
ということだ。

そして更なる問題は、元々本キットが発売したのは、HGSEED
シリーズ、「ガンダムアストレイレッドフレーム　フライトユニツ
ト装備」と連動する形で模型誌に付属したということだった。

単純に言ってしまうえば持ち手が合わない。

一応、カレトヴルツフのランナーに専用の角度付き手首は付属して
くるためそれをコンバートすれば、ジャストフィットで持たせること
は可能だが――

「……あたしのコメントコアガンダム、丸指なのよね……」

「……あ、あの……愛香さん……な、泣かないで……ください……あの
……メロンパン、あげますから……」

「いいよ大丈夫だよ泣いてないよ絵理、これは脳が摩擦熱とオーバ―
ロードでどうかこうにかして出てきた何かだよ……」

流星に友達が毎日食べている昼ごはん、それも泣きそうになりなが
ら差し出してきたものをいただきますと言えるほど愛香の面の皮は
厚くない。

いつもの昼休み、愛香は絵理の机に突っ伏して、素組み状態で試験
運用したことで浮き彫りになった様々な課題に絶望しかけていた。

一応Eランク相応のミッションであれば、ゲート処理とフラッグ―
ガンダム00に登場するモビルスーツではなく、安全基準のため、
主に鋭角に当たる部分に配置されたゲートのようなもの――の処
理を丁寧に行っただけのカレトヴルツフでもその威力の程は実感で
きたが、銃身のブレ、そして微妙に緩いことで勢いよく振ったらすっ
ぽ抜けていくカレトヴルツフと、絵理のアシストがあつたためにクリ

アできたものの愛香の戦果だけを抜き出せば散々だったといっている。

「とはいえ、これ以上の剣なんて見当たりそうもないんだけどね……」

一応、あの後愛香はHGCEステイニーガンダムを追加購入して比較検証用にアロンダイトもコメットコアガンダムに持たせてみたが、こちらの場合ビームサーベルと実体剣の両方の性質を持つ、という癖に振り回されそうになったため、すっぱ抜けてしまうことにさえ目を瞑れば、剣としての好みはカレトヴルッフに軍配が上がることになる。

「……も、持ち手が……」

「うん……?」

「……あ、あの、えっと……ごめんなさい、わたし……」

「ううん大丈夫、続けて?」

「……あ、あう……そ、その……持ち手が……ビームサーベルと同じ、なら……扱い易いのかなあって……あの、ごめんなさい、わたし、差し出がましい、こと……」

「それだよ絵理!」

俯き、例によって食べるのが遅いため六割近く面積を残していたメロンパンで顔を隠してしまった絵理の両手を取って、愛香は言い放った。

そうだ。コロンプスの卵。コペルニクスの転回。持ち手がコメットコアガンダムに合わないのなら、コメットコアガンダムが持ち手に合わせようとするのではなく、その逆をすればいいのだ。

徹夜明けなのもあって異様なテンションになった愛香と絵理に好奇の視線が突き刺さるが、もはや天啓を得た気分になっていた愛香にとってそれはさしたる問題ではなかった。

単に寝不足で周りが見えていないともいう。

「愛香、なんかめっちゃ嬉しそうだけどいいことあったの?」

騒ぎを聞きつけたのか、珍しく学食ではなく教室で弁当を食べていた恵美が数人の友人を引き連れて、絵理の机近くの席に訪れる。

タイムリングが悪かった。普段絵理の後ろに座っている野球部員の

男子やその隣の女子サッカー部に所属する生徒は、大盛りが山のようだ」と定評がある学食に行ってしまったている。

慣れない、大人数に囲まれる感覚に絵理の両手は震え出し、左眼にはじわり、と涙が滲む。

この恵美という生徒が自分に危害を及ぼすような存在ではないことはわかっている。

事実として愛香は普段恵美とも楽しそうに会話をしているし、恵美も、いつまで経つても取れる気配のない絵理の包帯について心配はしてきてもそこに悪意はない。

恵美の友人たちだって、絵理の存在について何かとやかく言ったわけではない。だが。

だが、とにかく。とにかく、絵理にはその大人数に囲まれるということそのものが怖くて仕方なかったのだ。

「ん、恵美？ いやね、ちよつと絵理が天才なんじゃないかって思ったの」

「へー、そーいや絵理ちゃんこの前歴史の小テストで九十点取ったよね」

アタシは赤点だったけどね、と、渋い顔で小テストを返してきた壮年の歴史教師の姿を浮かべながら、苦笑しつつ恵美は絵理に話を振る。

「…………い、いえ…………あの…………わたし、そんな…………」

「あれで九割取れんのマジ？ うちらも赤点ギリギリだったんだけど」

「…………ぐ、偶然…………偶然、です…………です、から…………」

まずったか、と、愛香が気付いたのは、俯きながら恵美たちの振ってきた話に対応している絵理の瞳から涙が溢れているのを見てしまったからだ。

やらかした。徹夜明けなんて言い訳にもならない。

恵美たちが、絵理を迫害するような存在ではないことは愛香にも保証はできる。

だが、それを絵理が受け入れられるかどうかについては全く別の話

なのだ。

「それより恵美、次の授業体育だけど行かなくていいの？」

「えっそうだったけ？ ……ってうわマジじゃん、絵理ちゃんも早いとごご飯食べちゃった方がいいよ」

見学でも遅刻されると露骨に機嫌悪くなるから。

ゴリラの渾名を生徒から影で頂戴している強面の体育教師が露骨に仏頂面をするのを想像して、恵美たちは黒板近くの壁に貼り出された時間割を一瞥するなり、体育館にある更衣室に向けて駆け出していく。

「……ごめんね、絵理」

「……い、いえ……愛香さんは、悪く……悪く……ない、んです……ぜんぶ、わたしが……」

体育教師、通称ゴリラ先の仏頂面と露骨に不機嫌な低い声を恐れたか、泣き出した絵理に注意を払うことなく、食事を終えたクラスメイ卜たちも、我先にとばかりに体育館へと駆け出していった。

「……保健室行こっか」

「……ごめんなさい……愛香、さん……ごめんなさい……」

——わたしが、わたしで。

その言葉に込められた絶望は、一体どれほどのものなのだろう。

絵理の手を握りながら、保健室へ誘導する廊下が、果てしなく長いものに感じられる。

きつと、自分がさつきまで抱えていた絶望なんか比較に出すのも失礼だ。きつと、自分にとって最大のトラウマになっている徒競走と吹奏楽のことだって、きつと今も心の中でひび割れて砕け続けている絵理の絶望には届かない。

それでも——

(絵理にとつてのGBNって、何なのかな)

それでも絵理は、数人に囲まれただけで泣きそうになるのに、それ以上の人数が行き交って、人口密度が凄まじいことになっているGBNにログインし続けている。

きつと絶望と同じぐらいに重い、そこに懸けた理由に対して、自分

は釣り合う存在なのだろうか。

保健室のベッドに腰を落ち着けて泣きじやくる絵理の背中を優しく撫でながら、愛香は一人自らの失態に押し潰されそうになりつつも、その答えを問い続けるのだった。

後味の悪い結果にこそなってしまったが、絵理の提案はまさに天啓、革命的なものであることに違いはなかった。

バイトを終えて帰るなり愛香は小学校の時に使っていた粘土板兼カッターマットを作業台に、コメットコアガンダムのパックパック、その右側に配置されたビームトーチと、HGCEステイニーガンダムのアロンダイト、そして素組みのカレトヴルッフ、バイト帰りに滑り込みで買ったHGBCバトルアームアームズを並べ、ニッパーに手をかけた。

複数のキットを混ぜて、自分好みの形にするーミキシングは、愛香にとって初めての経験ではない。

コメットコアガンダムのソールになっているHiiレガンダムヴレイヴの踵部分がまさにそれなのだが、その工作は偶然でこそあるが接着を伴わない、驚くほど簡単なものだった。

だが、接着を伴う、本来合わない規格を無理やりに統一するという意味でのミキシングは初めてだった。

だからこそ、つけすぎた接着剤で指紋型のモールドを作ってしまったら、真鍮線を通さなかったことであらうっかり落としてしまった時に接合部がもげたりして色々手間取ったりもしたけれど。

「本邦お披露目！これがあたしの……『ビルドボルグ』だっ☆」
「わぁ……！」

アイカは、カレトヴルッフのコアユニット、ビルドトーチにHGCEステイニーガンダムのアロンダイトを加工したグリップガードと、グリップ部分にコアガンダムのビームトーチをそのまま取り付けた大剣、カレトヴルッフ改めビルドボルグを天に掲げてみせる。

結果としてカレトヴルッフが持っていた強みである鏢に当たる部分に配された追加バッテリーを失うこととなったが、元々銃としての

機能はオミットするつもりだったために問題はない。

むしろ、ビームトーチを基部に用いたことで刀身を赤熱化させ、斬れ味を上昇させる効果を得たメリットの方が大きい。

アイカとエリイは今、対モビルアーマーの討伐ミッションを受けている最中だった。

Wikiを確認したところ、検証班のそれが正しければ、二人のダイバーポイントはあると少しのミッションクリアでDランクに到達するレベルの数字らしい。

対モビルアーマー討伐ミッションは、敵が大型かつ難易度が高めということもあって、クリア時の獲得ダイバーポイントは高めに設定されている。

だからこそ、念には念を入れて、という意味と、せつかく大きな剣を作ったのだから大物狩りにチャレンジしてみたい、と、GBNに順調に染まりはじめてきたアイカのリクエストによるチョイスだった。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか……」

「……っ、アイカさん、来ます……!」

「オツケー☆」

エリイの指摘から僅かに間を置いて、十二時方向から飛来したビームの色は白に赤のプラズマが走った、SEED系特有のものだ。

右のビームトーチを犠牲にこそしたものの、接続部の三ミリ軸を利用して、愛香はそこにアームアームズからコンバートしてきた一番小さいアームを接続し、さらにアームの三ミリ穴を同系の軸に変換するパーツを挟み、カレットヴルツフのコンデンサ部分に穴を空けることで、取り回しの問題を解決していた。

とはいえ、しまうのにビルドナイフ部分を銃モードの時同様先端から上端に組み換えなければならないのだが——小柄なコメットコアガンダムでも、大剣を邪魔することなく持ち運べるメリットとトレードオフなのだから致し方あるまい。

アイカはビルドボルグを一旦背部のマウントに戻すと、それに、メリットの方が遥かに大きい——腰部のアタッチメントに接続していたコアスプレーガンを牽制射としてビームが飛んできた方向に放つ。

このステージは、遮蔽物の少ないNPDチュートリアルミッションでも採用された空軍基地モチーフのものだ。

牽制射撃を放ちつつも基地の滑走路に着陸し、二人が見上げた空、そこに浮かんだ雲を割いて現れたのは。

「ザムザザー、だっけ」

「……は、はい、確か……」

確かこの前HGC Eの新作として発売されたことで、ガンダムベースにこぞって客が買い求めにきたからアイカもそれは覚えていた。

なんでこんな可愛くもないゲテモノを、と不思議に思ったものだが、蓼食う虫もなんとやらだ。根強いファンの存在はどこにでもあるのだろう。

そんなアイカの身も蓋もない評価に激昂したのかしていないのか、緑色の化蟹、といった風体のモビルアーマー……ザムザザーは怪獣のような桃色のツインアイを光らせて、空中に浮遊したままX字状に伸びたユニットから砲身だけを地上に向ける形で一斉砲火を放つ。

「うそ、聞いてないんだけど!?!」

「わ、わわ……っ……!?!」

迂闊に飛んでいれば真下が死角になる。

それはハードデイモンシヨン・ヴァルガで嫌というほど教えられたことだし、実際NPD相手でも、それ自体に特化してこそいるものの、迂闊な先飛びを咎めるようなルーチンに設定されたいやらしい敵がEランクからは現れはじめる。

だが、そんなお約束など知っているとばかりに真下へ砲撃を放ちながら、ザムザザーはアイカたちを抹殺せんと怪しくセンサーを光らせた。

一応原作でも真下にいたシン・アスカのインパルスガンダムを狙って撃っているのだが、アイカたちは生憎それを知らない。

しかし、何よりザムザザーという機体の厄介なところは、死角をカバーする矛を備えていることではない。

「……ビームが、弾かれて……っ……!?!」

弾幕砲火を小刻みに回避しながらエリイのヘイズルIIが撃った

ビームライフルの一矢を、ザムザザーは自身の正面に展開した虹色の光で受け止める。

陽電子リフレクター。原作でも猛威を振るった鉄壁の盾だ。

「射撃が通じない、つてことは……」

だが、カレトヴルツフがそうであったように、メリットがあればその裏にはほぼ必ず何かしらのデメリットが存在している。

アイカはそれを、格闘戦に弱い、と踏みかけたのだが。

(待って、それだと流星に誘導が露骨すぎる)

ハードデイメンション・ヴアルガに潜っていなければ、アイカは嬉々として飛び上がり、ザムザザーに格闘戦を仕掛けていたのだから。

ビルドボルグに伸ばしかけた手を止めて、一旦回避のマニユーバで機体の体勢を立て直しながら、猜疑心がもたらした警告を再考する。

良くも悪くも、というより八割ぐらいは悪だがーハードデイメンション・ヴアルガは、アイカの動体視力だけではなく、猜疑心を鍛えてくれた。

例えば、自分たちがスポーンした瞬間を狙ってGNビームキャノン放ったケルデムガンダム。あの機体がチイの投擲弾で破壊されたのは、射線が露骨すぎたからだ。

襲撃者の攻撃に対して物影に隠れてやり過ごそうとすれば、偶然撃破こそできたもののあのスローターダガーのような伏兵がいる。

つまり、わかりやすさというのは罠である可能性が高い。

そして、アイカの推察は正しかった。

ザムザザーの四つ足に当たる部分に装備されていた、着陸脚と目していたパーツが展開し、「爪」と化したそれを急降下したザムザザーがアイカたちへと叩きつける。

「やっぱりね……」

「……アイカさん」

ザムザザーの爪、超振動クラッシュャーは近くに固まっていたアイカのコメントコアガンダムとエリーのヘイズルIIを分断し、追撃の弾幕砲火でその連携を更に崩しながら、空中へと退避していく。

エリイが何かを考え込むように俯かせていた顔を上げたのは、まずい、と、久しぶりに操縦桿を握る手に汗が滲む嫌なフィードバックにアイカが顔をしかめていた時だった。

「どうしたの、エリイちゃん？」

「……ビルドボルグを、敵に……叩きつけられますか」

可能か不可能かといえば可能だろう。だが、その為にはあの四つ足から展開される爪に捕まらないという条件がつくと、アイカは浮かんだ答えを要約して短く伝えようとしたが。

「……足は、わたしが止めます……！」

「……オツケー、エリイちゃん。信じてるからね！」

エリイがいつになく力強くその言葉を紡いだことで、アイカは張りかけていた予防線を引きちぎり、迷いなく背部にマウントしていた「ビルドボルグ」に手をかける。

ザムザザーは確かに強い。あの陽電子リフレクターは、二人は知らないものの原作においては戦艦の特装砲……平たくいえばあのクアンタの改造機が放っていた砲撃に近い必殺の武装さえも受け止める。もちろん、Eランクに合わせてステータスが調整されている為あのクアンタが放った砲撃をこのザムザザーは受け止められないだろうが、それはどうでもいい。

エリイの見立てでは、あの盾を展開するのには。

「……足が、止まる……！」

ならば、ダメージこそ通らないものの、攻撃は効く。

一人であれば、きつと絶望していた。きつと、挑戦しようと思え思わなかった。

エリイは人差し指でトリガーを何度も連打しながら、アイカのコメントコアガンダムがザムザザーに向けて飛びかかるのを見る。

——お昼休みには、迷惑をかけてしまったかもしれないけど。

「こんの……蟹いいっ！」

ビルドボルグ。エリイのアイディアが取り入れられた、アイカの新たなる剣。

もしも、わたしが、アイカさんの助けになれたのなら——そう、信

じたい、信じさせて、くれるのなら――

エリイの祈りに呼応するかの如く、天高く飛び上がり、くると機体を反転させてブーストを再び全力で蒸したコメットコアガンダムが構えているビルドボルグの刀身が赤熱し、虹の盾へと重力の勢いも乗せた一撃が叩きつけられる。

果たしてその刀身は、鉄壁の陽電子リフレクターを貫いていた。

鉄壁の盾を貫いて、コックピットに当たる部分までビルドボルグは易々とその装甲を貫通して侵入する。

――想定以上の威力だ。

アイカは、凜音が託してくれたカレトヴルツフ、エリイが作り上げてくれたアイディア、その思いの結晶が組み立てたことでまた偶然手に入れた機能の力に身震いした。

愉悦。感動。恐怖。様々な感情が緋い交ぜになった思いが胸の内側でスパークする様を、人は何と例えたのか。

爆散しようとしている機体からビルドボルグを引き抜いて、コメットコアガンダムは華麗に着地を決める。

――高揚、だろう。

【Mission Successful!】

【ダイバーネーム：アイカのランクがDに昇格しました】

【ダイバーネーム：エリイのランクがDに昇格しました】

ウインドウがポップし、ダイアログに並ぶ昇格の二文字さえ、今は意識の外側だ。アイカとエリイは通信ウインドウ越しに顔を合わせ、胸に沸き起こる高揚にむずむずと唇を動かしながら。

「エリイちゃん」

「……アイカ、さん……」

――ごめんね。そして、ありがとう。

――ごめんなさい。そして、ありがとうございます。

二つの言葉を交わして、同じ笑顔を浮かべるのだった。

第十二話「リブート、リビルドガールズ！〜言動ブー メラン戦隊の短い一日」

偵察というのは、最も能動的にして効果的な攻撃手段である。

フォースランキング第二位、「第七機甲師団」を率い、「智将」の二つ名で恐れられているやたらとモコモコしたオコジョーのダイバルックにその獰猛な本性を包み隠した推定男、ロンメルがGBN黎明期に語った名言として今も語り継がれているそれが、真実なのかどうかは定かでない。

だが、経緯の怪しさはともかくとして、それがフォース戦においても、個人戦においても勝敗ないしアドバンテージを最初に決める絶対条件である、というのはチイも同意するところだった。

漆黒の宇宙空間、星々の微かな光さえも届かない暗礁地帯。展開された肩部装甲から噴出されるミラーージュ・コロイドを機体に纏わせ、チイは静かにその空間で息を潜めていた。

以前遭遇したブリツガンダムが搭載していたそれを「セコい」と評したチイだが、掌にボールジョイントを搭載し、ブーメランを握りしめていなければGBNでは生きていけない。

偵察、斥候という己の任務を鑑みれば、セコかろうがアコギだろうが、この武装は積み得なのだから。

しかし、偵察という任務は得てして地味なものだ。

故にこそ、人気を博すようなものではない。

自ら進んで引き受けているものの、チイもそれは認めるところだった。

GBNにおける「環境構築」に、偵察やステルス機がその名を連ねたことはない。

その理由は様々だが、まず、いつの時代も「環境」を握るのは他のゲームでいうところのDPS——要するにアタッカーであり、その華々しさに人々は魅了され、アタッカー構築は「環境」に合わせて形を変えながらも戦場の花形として君臨し続けている。

一応、以前に何故かランサーダートの攻撃力や弾速、当たり判定がダインスレイヴと同一のものとして判定されるバグと、ミラージユコロイドが攻撃動作中も継続するバグが発生した時は「ミラコロダインスレイヤー構築」なる暗殺スタイルがランキングに溢れ返ったこともあった。

だが、その天下は当然の如く実施された緊急修正により僅か二日、セミの一生どころか明智何某が築いたものより遥かに短く終わってしまった為に例外だろう。

それに、ランキング二桁以上の上位者となれば透明化していようがなんだろうが、気配や痕跡を問答無用で読み取った先行攻撃で確殺するという人間離れした芸当を当たり前に行っているのだからどうしようもない。

現にミラコロダインスレイヤー構築が流行った時だって、上位三桁、具体的には百位ぐらいまでに並ぶ名前は何一つ変わらなかったほどだ。

あれは最早人間の形をした別の何かだと、チイはそう思っている。

だが、ランキングや環境に名を連ねないからといって、このGBNにおいて偵察機は無用の長物なのか？

そう問われれば、答えは否だ。

先程のロンメルが戦略、戦術に重きを置いている、個人の超絶技巧に重きを置く傾向が強い上位ランカーの中では、特異なタイプであることを例外においても、フォースランキング第一位、不動のチャンピオンにして人間災害のような超絶技巧を誇るアタッカーたるクジヨウ・キョウヤが率いる「AVOLON」も、そのメンバーに偵察を生業とするダイバーを迎えている。

それを鑑みれば、特にCランクからAランクに上がりたて辺りのダイバーがその問いを首肯する行いが、ナンセンスなものであることは明白だろう。

チイが暗礁空間から飛ばしていた、同じくコロイド粒子を纏って透明化していた観測機が、今回の「敵」に当たる存在が潜んでいる廃コロニー内部の映像を、ガンダムグラスランナーのコックピットへと転

送する。

「なるほどねえい……」

チイは観測機が捉えた「それ」の威容に、慄くどころかしてやったりとばかりに唇を歪めてニヒルに微笑む。

敵の正面戦力の内訳は、チイより先に飛び立って今、黒い宇宙に光の花を咲かせている、レドームを背負ったゼータプラスが、「お味方」に転送してくれていることだろう。

ならば、チイが調べるべきことは一つ。敵の「隠し球」を見抜き、その情報を持ち帰ることだ。

そう、どんな犠牲を払ったとしても。

チイは早速、捉えたビッグガン——「機動戦士ガンダム サンダーボルト」に登場する巨大な狙撃砲を構えるザクと、その護衛として残っていたのであろう高機動型ジオングの存在を本陣に伝えるべく、慣性移動で安全に本陣へと帰還しようとした。
だが。

観測機からの映像が途切れる。流石に、チイがビッグガンがはつきり見える距離まで飛ばしていれば、機体から伸びるワイヤーもまた、相手に見えていたということだろう。

そこに不可視の脅威がいることを認めた高機動型ジオングが、ビッグガンの情報を持ち帰らせまいと、ワイヤーが伸びていた方向へとブーストを蒸す。

「これだから有線は……つと、まあ無線ならそもそも透明化できねーからこんなもんか」

観測機が無線か有線かというのにもまたメリットとデメリットが同居している。

一応、チイはその両方をコンテナの中に積み込んでいるが、今回は敵に伸ばしたワイヤーから位置を悟られることより、透明化したそれを飛ばせるメリットを取った。

そして、その選択は十分すぎるほどに利益をもたらしてくれた。

「へっ、今更気付きやがったところでおせーんだよ！」

とはいえ、流石はAランクダイバーとでもいうべきだろう。ワイ

ヤーの伸びていた方向から廃コロニー近くの暗礁宙域にチイが潜んでいることを一発で見抜き、強みの弾幕砲火、その一斉射でデブリを排除しつつ、大型の機体である高機動型ジオングでの侵入経路を確保するという一連の芸当をやったのけているのだから。

だが、その観察力はもつと前に、具体的には試合開始前に活かすべきだった。

ミラージユ・コロイドを切って姿を現したチイのガンダムグラスラunnerは、デブリの破片を蹴り飛ばしながら、レーダー上で味方を示す青い点と敵を示す赤い点が団子になっているところを目指して全力で逃走する。

「わりーが、もう一回チイの役に立ってもらうぜ……！」

『この……やってくれた、しかし、逃すわけにはいかない！』

ポップした通信ウィンドウに映し出される、機動戦士ガンダムに出てくる仮面の男、シャア・アズナブルが被っていたヘルメットとマスクを被った女性、ダイバーネーム「シャルロット」は高機動型ジオングの両腕を分離させ、オールレンジ攻撃でチイを捕らえようと試みた。

その判断そのものは妥当だったといえよう。

だが、機体のチョイスが悪かった。

チイは本体に遅れて射出された高機動型ジオングの両腕——有線オールレンジ攻撃の端末となったその機動を目視し、最低限の機動で「置かれた」攻撃を予測しながらのらりくらりと乱戦エリアへ退避していく。

別に、高機動型ジオングという機体は悪い機体ではない。敵機に高速で接近し、有無を言わず得意距離からオールレンジ攻撃を叩きつけるという勝ち筋は、無論チイも警戒するところだった。

あえてシャルロットが誤ったところを挙げるのであれば、その手札を切るのが早すぎたところだろう。

高機動型ジオングは、大型バックパックを装備することでその速力を大幅に強化しているが、腕に追加装備は施されていない。

つまるところ——

『な……っ!?!』

「付いてこれねーんだよな」

大幅に上昇した本体のスピードに対して、端末の推進力が追いついていないのだ。

そうなれば、あの機体に追跡を行いながら切ることでできる手札は、口部メガ粒子砲ぐらいしか残されていない。

チイを追いかけることに夢中だったのか、本体に置き去りにされる形でデブリの残骸に引つかかって、線が切れてしまったオールレンジ攻撃端末を一瞥してチイはにやりと笑う。

『こ……っの、Cラン風情が!』

「化けの皮剥がれてんぜ、つと……!」

『なっ……』

シャルロットが怒りに任せ、足を止めて照射した腰部のメガ粒子砲をチイは回避したが、その先にいたものは青い点——つまり、味方側の機体であるジム・ガードカスタムだった。

『てめえ、味方を何だと思ってる!?!』

「避けないあんたが悪いんだよ、チイは悪くない。ついでに言つとくとチイの仕事はなんだと思ってるの?」

咄嗟にその大楯を構えることでメガ粒子砲の直撃をいなした味方側のダイバー、「ジミー」はチイに対して口角泡を飛ばす勢いで怒りを露わにするが、それもどこ吹く風とばかりにチイは片目を瞑ってせせら笑う。

「はいよ、これがチイの報酬分の仕事だから。敵さんビッグガンであんなたらを一網打尽にするつもりだったっぽいよ、多分フラッグ機もそいつ」

フラッグ戦。フォース同士の戦いにおけるメジャーなルールの一つで、どちらかが全滅するまで戦うのではなく、例え数の上で劣勢になっていたとしてもフラッグ機……フォースでの役割はともかく、その試合における大将機の首さえ獲れば勝利できるというものだ。

そして今、そのフラッグ戦で凌ぎを削っていたのはチイの味方であるフォース「ジムの惑星」と、ビッグガンを隠し球にしていた「ゾツ

ク・ズゴック・ジョング」だった。

だが、味方であれどチイは「ジムの惑星」に所属していない。いわゆる傭兵というものだ。事前に規定の報酬を支払った上で外部戦力をフォースに招聘する。

GBNの運営も正式に認めているルールに則って、チイは同じく傭兵であった黒いゼータプラスが囷となって敵の正面戦力を調査している間、隠された戦力を暴き、その情報を持ち帰るといふ契約で「ジムの惑星」にこのフラッグ戦の間だけ雇われているのだ。

『クソ……っ、礼は言わねえからな』

「別にいーよ、これがチイの仕事だし」

吐き捨てるジミーを横目に見つつ、チイは自身に飛んでくるミサイルだけを両手に持ったビームマシンガンで撃ち落としながらそう返す。

GBNにおける傭兵など、良くも悪くもそんなものだ。

貰った報酬と任された仕事は命をかけてでも達成するが、それ以上のアフターケアは気分と金額次第といったダイバーは決して珍しいものではない。

変わったところでは、傭兵派遣専門のフォース、「セルピエンテ・クー」辺りはアフターケアまで万全にこなした上で己の仕事を達成するダイバーたちで溢れているが、その評判も折り込んで自分たちを売っている以上、雇用報酬として提示される条件も高い。

チイが雇われたのは、「どんな情報もとりあえず生きて持って帰ってくる」という点を買われただけで、「ジムの惑星」のリーダーである男、シン・シヨウイもそこに「敵対する脅威の排除」を最初から含めていない。

とはいえ、味方を犠牲にしても情報を持ち帰るといふチイの姿勢は、決して心証がいいものではないのだろう。

それを示すように、すれ違ったジムからポップした通信ウインドウに映る、黄色い連邦軍ヘルメットを被った男——そのシン・シヨウイ当人は露骨に舌打ちをしていた。

ビッグガンの情報を共有したことで、各個に散開しながら、近くの

機体と即席のツーマンセルを組んでは離れるといったことを繰り返して、道中で腕を失っていたシャルロットの機体や、チイにミサイルを放っていたガツシヤを排除していく。

だが、あくまでも最低限の脅威だけだ。

後ろから撃たれようと、前に立ちはだかられようと、極端に邪魔でなければ機動力で振り切る。

情報という最大のアドバンテージを得た「ジムの惑星」の正規メンバーたちが見据えているのはあくまで大将首だけなのだろう。

それが、彼らの選択だった。

『冷たいんだな』

「そーゆーあんたもお仲間っしょ？」

『違う』

だが、そこに黒いゼータプラス……チイと同じく傭兵として雇われていたダイバー、「ディーブ・ゼロ」と彼女の姿はない。

皮肉を込めて問いかけてくるディーブ・ゼロの言葉に皮肉で返しなから、チイは大きく欠伸をする。

ミツシヨンコンプリート。

コンソールがそれを伝えてくれるのはもう少し後だろうが、チイはコックピットの背にもたれかかり、物質化したIBCを指先で弾きながらそう呟くのがあった。

「……つてなわけでごめん、ちよつと傭兵やってさ」

「傭兵……」

アクティブ二千万人の玄関口であるロビーは、それ相応にフロア面積が広い。

Dランクへの昇格を果たしてすぐ、フレンドへのメッセージ機能で落ち合ったアキノと合流したアイカとエリイはとりあえずロビーにはいると言っていたチイを探し回って東奔西走していたのだが、いないのであれば見つけようもない。

ただまあ、チイにはチイの事情があるのだろう。

少し不満げに眉を潜めているアキノと、広いロビーを歩き回った感

覚のフィードバックに息を切らせるエリイを横目に、アイカは合流が遅れたことそのものに何かを問うことはせず、チイの口から飛び出してきた剣呑な単語に首を傾げた。

「おう、他のフォースに一時的に雇われんの。まあ正規ミッション受けるより報酬いいからさ」

Cランク相応のミッションともなればまとまった額を稼ぐこともそう難しくはなさそうだが、座右の銘が「誠意は言葉ではなく金額」である彼女がそう言った辺り、身入りはいい仕事なのだろう。

「全く、貴女という人は……それで、全員集まったわけですが、どうされるのですか?」

「どう、っていうのは?」

「名前です。アイカさん、貴女が代表者となっているのですから私はそれに従いますが、エリイやチイに案があるなら、それを聞くのもリーダーとしての役目です」

普段は猫背気味で目立たないものの、エリイのそれに勝るとも劣らない、きつと下を向いたら地面が見えないぐらい豊満なバストを支えるように腕を組み、背筋を伸ばしてアキノはアイカに凜と言い放つ。

リーダー。

飛んできた言葉に、アイカはしばらく思考が追いつかなかった。

単語の意味は理解しているが、リーダーという役割を紐解くなら、相応しいのは自分ではなくアキノの方だろう。

フレンド申請時に交換したプロフィールカードにも、アキノのランクはA——二千万人の中でも上位に位置することの証明が輝いているし、何より性格的にも物事を取り仕切るのに向いていると、アイカはそう思っている。

「ん? チイもアイカがリーダーっつーか代表者だと思ってたけど……ああ、名前なら何も浮かばねーから適当でいいよ」

フォース、ビルドコインってのは悪くねーかもしれないねえけどな。

いつものようにIBCを指先で弾きながら、少し意外そうに目を見開いてチイは言った。

「……わ、わたし、も……アイカ、さんに……その……誘って、いただ

いた、ので……あ、あと……名前も……特に、浮かばない、ので……」
もじもじと俯きながら頬を赤らめ、エリイもチイとアキノに追従する。

「うーん……まあ確かに言われてみれば」

アイカからしてみれば、GBNでフォースを組むまでにのめり込みきつかけとなったのはむしろエリイの方だったし、巻き込まれ事故のようなものではあったけれど、チイとの縁だつて彼女が運んできたもので、アキノとの縁は自分たちが手繰り寄せたのかもしれないが、そこに再会を願ったのはエリイの方だ。

とはいえ、人間関係なんてものは角度が変われば色も模様も変わる万華鏡だ。

アイカがそう思っていないなかつただけで、他の三人から見れば、この奇妙な縁はアイカを中心にして結ばれたものだったのだろう。

「リーダー、つて柄じゃないけど……」

アイカは少し諦めたように苦笑し、コンソールに改めてフォース結成申請を出しながら、今度はエラーメッセージではなくフォース名を入力するフェイズへと正式に移行したそれに、指先で文字を打ち込んでいく。

「フォース、リビルドガールズ……つて、どうかなっ☆」

リビルドガールズ。直感的にアイカの頭をよぎっていた言葉だったが、そんなに悪くないものではないだろうかと、これまでの縁を振り返ればそう思う。

GBNという場所で再構築されたエリイとの縁。チイの提案で再構築された自分にとつてのGBNという場所、そして、きつとアキノに助けてもらえなかつたら、再構築されることはなく崩れていたであろう、自分たち。

「まあ、悪くねーかな」

「リビルド……再構築ですか、確かに私にとつてもその言葉は当てはまりますね」

「……え、えつと……わたしも……アイカさんが、いって思う名前、なら……おんなじ、です……」

反応は三者三様。あまりいい名前ではなかったのかもしれないけれど、それでも三人とも、提案者であるアイカが精一杯考えた名前を否定することなく肯いて、フォースの加入申請を承諾する。

「うん、ありがとっ☆ それじゃ改めて……」

フォース・リビルドガールズ。

ようやく形となった、自分たちをこの仮想の海に繋ぎとめる名前を確かめ合って、アイカたちはそれぞれに笑う。

苦笑。微笑み。ニヒルな笑い。静かで穏やかな、どこか保護者のような笑み。

それさえきつとバラバラだったかもしれないけれど、間違い無くこの瞬間、アイカも、エリイも、チイも、アキノも、きつと向いている方向は同じだった。

「あの……」

そして、改めて一つとなった四人を呼び止める、折り目正しく遠慮がちな声が、アイカたちに新たな予感を運んでくるのだった。

第十三話「ネゴから始まる初陣宙域く確かに白けりやアルビオン」

「あの……」

「あん？」

今度は未遂ではなく、正式にフォースを結成した直後、四人を呼び止める声があった。

チイが半ばチンピラのような応答を返したのを皮切りに、アイカたちは声がした方へと踵を返して振り返る。

そこに立っていたのは、地球連邦軍——宇宙世紀0083年のものである——の制服に身を包んだ、どこか人の良さそうな青年と、その後ろに付き添う、浅黒い肌に、同じ年代のフライトジャケットを着用している壮年男性だった。

声をかけてきたのは制服の方なのだろう。二人を一瞥し、歴戦の軍人といった雰囲気を漂わせる、フライトジャケットの方が向けてきた視線に怯えてか、びくりと身を震わせるならアイカの背中に身を隠したエリイの髪の毛をそつと撫でる。

「大丈夫だよエリイちゃん、で……えっと」

「ああ、すみません。俺はハマモリ。こっちの方はナンブさんっていうんですけど」

「それで、そのハマモリさんとナンブさんが私たちにどのような御用件でしょうか？」

ハマモリと名乗った制服姿の青年が傍に佇むフライトジャケットの男を指し示すと、ナンブというらしい男は片目を瞑ってそれを挨拶に代える。

コミュニケーションが苦手なのかあえて喋らない理由があるのかはわからない。だが、どちらにせよナンブという男が纏っている空気がチイやアキノとよく似た歴戦のそれである以上、何か意図があつてハマモリに説明を一任しているのだろうか。

アイカは小さく首を傾げて、冷や汗をかきながらいかにもこちらの

出方を伺っている、という態度の彼を一瞥した。

「ええと……さつき聞いたんですけど、あなたたち、フォース作ったばかりなんですよね？」

「はい、そうですけど……それがどうか？」

「単刀直入に言うと、俺たちと練習試合をしてくれませんか？」

練習試合。

聞こえてきた言葉が空耳でなければ、このハマモリという男はわざわざ組んだばかりの、それも初心者か二人も所属しているフォースにわざわざそれを申し込んできたことになる。

じと、つと、ハマモリを見つめるアイカの瞳が微かに濁りを帯びる。

練習試合という言葉額面通りに信用するなら、彼のフォースとアイカたちリビルドガールズとの戦いはどのような形式であるにしろ、スコアや報酬、そして勝率と機体の損傷度に影響しないプラクティスモードで行われることになるのだろう。

だが、ただ練習試合をしたいというだけなら、そこにアイカたちを選ぶ必然性はどこにもない。

野良試合をしたいのなら練習だろうが本番だろうが、掲示板で募集をかけるなり、ロビーの真ん中にいるNPDに頼んでマッチングシステムを利用すれば一秒足らずで誰を相手にするか困るほど候補の名前がずらりと並ぶ程度に、GBNはフォースで溢れている。

となれば、目的は狩りか。

アイカが疑いの視線と共にハマモリの提案を蹴ろうとした時だった。

「ハマモリだっけ？ あんたら、なんでわざわざチイたちに声をかけたのさ」

「ちよつと、チイちゃん……！」

何かを考え込むように小首を傾げて押し黙っていたチイが親指で物質化したIBCを弾きながら、アイカの前に歩み出て、ジト目で見られ続けたことで怯んだのか、腰が引けているハマモリへと問いかける。

「落ち着きなよアイカ、ここはあの猿山じゃねーんだ、一応相手の話聞

いてやるぐらいはタダっしょ?」

その上で受けたくねーってんなら、チイはアイカに従うけど。

肩を竦めてアイカを制すと、チイは続きを促すように細い顎でハマモリを指して、再び唇を引き結ぶ。

確かに、相手に何か特別な事情がある、というケースはアイカの脳内から抜け落ちていた。

あのハードデイメンション・ヴァルガで鍛えられた猜疑心が悪い方向に働いた結果だろう。

視線でアキノとエリイにチイの意見に対する賛否を問えば、アキノは黙って頷いて、エリイもリアクションこそしなかったものの、警戒しつつもとりあえずは保留といった風情でアイカの両肩を握る指先に力を込める。

となれば、多数決で二対一の棄権一。民主主義の原理に従うなら、チイの提案を受け入れるのが筋、ということになるのだろう。

フォースを結成して数秒後にまさかリーダー、というよりは代表者としての責任を問われるような事態に見舞われるとは思わなかったが、思えばGBNに潜った時、トラブルや予想外の事態に見舞われなかったことの方が少ないのだ。

相変わらず自分の運がいいのか悪いのかわからないトラブル体質に嘆息しながらも、アイカはチイの意見を採用することを決める。

「さつきはすみません、ハマモリさん。それで改めて……なんであつしたちなんですか?」

「ありがとう、疑いを解いてくれて……いや、俺たちもフォースを組んでいるんだけど、実は最近メンバーの入れ替わりがあつたばかりなんだ」

ハマモリが語った経緯を要約するのであれば、彼の所属しているフォース、「名機アルビオン」には初心者一人とナンプの知り合いが二人加入することになったのだが、それと入れ替わる形でリーダーを務めていたナンプがある事情から脱退することになったため、彼に代わる形でリーダーとなったハマモリがメンバー間の連携を組む練習をすべく、アイカたちに声をかけた、ということだった。

「見た感じ、えつと……アキノさんとチハヤさんは経験者で、アキノさんはAですし、俺よりランクが上ですよ？　ならこっちは初心者一人と経験者二人と俺の計四人で、ちょうど釣り合いが取れるんじゃないかって思ったんです」

AどころかGぐらいありそーだけだな。

ハマモリが必死に説明している間、退屈だったのか、チハヤと呼ばれたことが不満だったからかチイがぼそりと呟いた小言に、無言でアキノがその頭に拳骨を落とす。

GBNのマツチングシステムは、完璧な精度であるとは言いがたい。アイカたちに声をかけるまでは実際に受付に話しかけていた旨を伝えて、ハマモリはがくりと肩を落とした。

フォース戦を野良で申し込む場合、所属しているダイバーのランクや、フォースポイントで絞り込みをかけることこそできるのだが、具体的にどのようなメンバー構成であるのか、またランクの分布がどうなっているのか、については一件一件表示されたリストから詳細を確かめなければ確認できない。

自分たちと釣り合いそうなフォースを探している間に、目星をつけたフォースが別なフォースと試合を始めてしまったり、かといって大雑把に平均ランクや保有フォースポイントだけで決めてしまうと、Sランクのダイバーが一人にそのリアルフレンドであるFからEランクのダイバーが数人、のような歪な構成に遭遇して、練習にならないようなことも決して珍しくはないのだ。

「……って訳で俺たちとしては渡りに船だったんですけど、アイカさんたちはどうですか？」

別に、ハマモリとしても試合を無理強いするつもりはない。

たまたま今が千載一遇のチャンスだったから、つい若気の至りでぐいぐい行ってしまっただけで、時間こそかかるがGBN内の掲示板で詳細な条件を指定して募集をかければ、需要に沿う相手と巡り合える可能性は高い。

この辺りがナンブさんならもつとスマートにできてたんでしょけど、と、彼に助けを求めるようにハマモリは振り返るが、依然とし

てナンブは黙したまま唇を真一文字に引き結んで、言葉を発することはない。

リーダーとしての素質を鍛えようとしているのだろうか。だとすれば見た目に違わず随分なスパルタだ、と、アイカは小さく呟くが、それさえ意に介した様子はなく、場末のラーメン屋の店主の如くナンブは腕を組んだまま黙り込み、ぴくりとも動く様子がない。

「うーん……それなら、別にあたしは断る理由はないんですけど……」
「アイカさん、貴女がリーダーなのですから私たちは貴女が決めたことに従うまでですよ」

「り、リーダー……重いなあ……じゃあ、ハマモリさんを助けると思っ
て、受けてもいいかなエリイちゃん、チイちゃん？」

なんだかリーダーというよりは中間管理職、というよりは自分とどこか似た匂いを感じ取ったのか、アイカは困ったように笑いながら、背中に隠れたまま震えているエリイと、しゃがみ込んで拳骨を落とされた頭を摩っていたチイへと問いかける。

「……わ、わたしは……アイカさんが、いいなら……」

「つてて……んー、まあアイカが決めたんならチイとしては異存はねーよ、でも」

「でもっ？」

まだ擬似感覚が痛みを訴えている頭を左手で抑えつつ、すつと立ち上がると、チイは何やらにやりと、子供がいたずらを企んでいる時のような笑みを浮かべて、空いた右手の親指と人差し指で輪っかを作る。

「ハマモリの旦那、こいつの話を忘れてますなあ」

「こいつ……っ？」

「鈍いなあ、金だよ金。報酬の話」

「報酬、つて……」

プラクティスモードでは報酬の獲得は不可能なように設定されている。相手が提案してきたのが練習試合である以上、どうあってもそこにチイが求めるものは見込めないはずなのだが。

困惑しているアイカをよそに、チイは視線をハマモリからナンブに

移して、両手を広げながらつらつらと長広舌をぶち撒ける。

「ナンブの旦那、あんたがどんだけの想いでこのフォースを抜けんのかはチイにやわかりやせん、けど、こんだけ厳しくハマモリを見守ってるってこたあ、こいつにかける期待は……『本物』ってことでしよう？」

「む……？」

沈黙を保っていたナンブが、少し驚いたように瞑っていた片目を見開き、にやりと微笑みながら右手の人差し指と親指で再び輪っかを作り上げて、それを自身へと突きつけてくるチイを睨む。

しかし、それに臆するチイではない。むしろ、釣れたとばかりに唇を歪めて、嬉々とした調子で言葉を紡ぎ続ける。

「チイはリーダーのアイカが決めたってんならそれに従いまさあな、でも、旦那がそこまで『本気』で……手塩にかけて育ててきたであろうフォースの新生に立ち会うとなりやあ、チイたちもそれ相応に仁義つてもんをもって、旦那の心意気に応えなきゃならんでしょ？」

「つまり、お前は何を言いたいんだ？」

大仰な、芝居がかった仕草で言葉をつらつらと並び立てるチイを訝しみながらも、自身の真意を見抜いてきた点を買って、ナンブはどうとう保っていた沈黙を破って応答を返す。

さらりとリーダーに全ての責任を押し付けようと保険をかけている辺り、このチイという女が相当な食わせ者であることぐらい、ナンブは見抜いている。

だが、嘘が本当かはともかくとしてナンブが「名機アルビオン」にかけてきた想いを汲んで、次代を担うに相応しいと認めて引退するその日まで徹底的に鍛え上げようとしたハマモリの門出を飾ってくれらるというのなら、話ぐらいいは聞いてやろうという気にはなるものだ。

明らかにリーダーであるアイカはチイを制御し切れていない様子だが、その様子もどこかハマモリと重なって見える。

運命とでもいうのだろうか。GBNというのは、いつだって予想外の偶然を自分たちに運んでくる。

現役時代を思い出してか、ふつ、とニヒルに笑うナンブに、チイは

しめたとばかりに手もみをしながら、交渉の「詰め」にかかる。

「いつの時代も人間、本気となりやあ……失うものがある時でしよう？　なら、プラクティスモードなんてぬるま湯じゃなくて、互いに失うものを、金と機体のダメージをかけた上で、正々堂々『本気』でやりましょうじゃあねえですか、そうですねあ……十万BC、なんていかがです、ハマモリの旦那？」

「え、ええ!?!　今の流れで僕に聞くのかい!?!」

「やだなあ旦那、チイはあくまでナンブの旦那と『お話』してただけで、受けるかどうか決めるのはハマモリの旦那ですぜ？」

——詐欺師だこれ。

流れるように相手の感情のツボを刺激しながら自身の利益へと誘導していくチイの話術にアイカはドン引きしながら、自分以上に困惑しているハマモリへと静かに同情を寄せる。

いや、よく考えたらこれフォースのリーダーってことで全部あたしの責任になるんだろうか。

試合後に訪れるかもしれないギスギスとした空気を想像して、仮想空間だというのに、アイカはどこか胃袋がきりきりと締め付けられるような錯覚を覚える。

「……はっはっは!?!」

「な、ナンブさん？」

「どうやら試合前の戦いは俺たちの負けみたいだな。いいだろうハマモリ、チイとかいう奴のいう条件で受けてやれ。金なら俺が出してやる」

どうせ引退したら腐るもんだし、プラクティスじゃ本気になれないってのはあの小娘の言う通りだろう。

寡黙に徹していたのが嘘のようにバシバシとハマモリの背中を叩きながらナンブは豪快な笑い声を上げて、チイの詐欺……もとい、提案を受け入れる。

まあ、相手を騙して一方的に金銭を巻き上げるのではなく戦いに敗ればそのBCは自分たちが払わなくてはいけない、という条件が天秤のもう片方に乗っているという意味では確かに対等な取引なのだ

ろうが。

「チイ」

「あん？　なんだよアキノ」

「プラクティスモードで試合を受けない、というところに私は異存はありません。それが相手にとつて為になる、というところもそうです。ですが……リーダーであるアイカさんを通さずに金銭のやり取りを条件に加えるというのは、些か出過ぎた行いではありませんか？」

じつと、チイを見下ろすアキノの視線は冷たい。

それはアキノの中で、「リビルドガールズ」の敗北によってチイが提示した金額を相手に支払うことになるという選択肢が現実的な可能性として織り込まれている、というのもある、言葉通りにフオーズという集団においての秩序である、リーダーの決定に従うという基本的な方針から逸脱した彼女の行いを咎める意味もある。

「ああ、それならごめん。ちよいと興奮しすぎたね。事後承諾になっちゃまうけど……負けたら金は全部チイが払うよ、それでいい、アイカ？」

チイという女はどこまでも食わせ者だ。

アキノの怒りを否定することなく、今度は自分が身を引く形で非礼を詫びて自らが取る責任を示すというその手口は、規律が厳格化していない集団においては事後承諾を通すのによく用いられる手法だ。

チイの厄介なところは数知れないが、一番は引き際を弁えていることだろう。

今回の場合は、アイカたちに自分が「金銭」に一番の価値であること及び、誠意の形であることを事前に知ってもらった上で、もし敗北した時は自身が提案した報酬の金額を全て負担して、相手に渡すという最大限の「誠意」を見せていることがそれだ。

しかも、相手の実力者からの同意を勝ち取った上でだ。

GBNよりいっそ営業でもやった方が稼げるんじゃないかと訝しみつつも、アイカはメリットとデメリットを頭の中で指折り数えた上で、チイの言葉に答えを返す。

「次からは一応あたしを通してっていうか、皆に訊いてねっ。てかあんまりガチガチに縛られるの、あたしもヤなんだけど……」

「ん、りよーかいりよーかい、だつてさアキノ」

「何故私に振るのですか」

「さあね……つとエリイ、ナンブの旦那ならもう行つたぜ」

未だにアイカの背に隠れて怯えているエリイにフォローをかけたつ、チイはアイカが承諾したフォース戦の通知から参戦を選択し、ロビーから解けてコックピットへと転送されていく。

「……釈然としませんがまあいいでしょう、私も参ります。アイカさん、エリイ、よろしくお願いしますね」

アキノもチイに続いて、コックピットへ解けて融ける。

「……アイカさん……」

「うん」

「……チイさん……凄かったですね……」

「なんていうか、あの子本当にお金が好きなんだなって……」

二人同時に、コンソールに浮かぶ参戦のメッセージを受諾すると、溜息混じりにアイカとエリイも先に行つた二人に続いて、アバターのテクスチャがさらさらと解けてロビーからコックピットへと意識が転送される感覚に身を委ねる。

確かにチイの行いは一方的で、今も釈然としないものを抱えているのは事実だ。

それでも、というよりはそれだから、とでもいうべきか。彼女の言葉が全て間違いであったかといえはそうではないことが、アイカ的心情をより複雑にする。

（まあ、あたしは別にエリイちゃんが嫌じゃなきゃ、なんでもいいんだけど）

チイの策略に巻き込まれて練習のつもりが金を賭けることになつたハマモリとナンブには同情するが、ナンブは快諾している以上不憫なのはハマモリだけだろう。

それに何より、自分は慣れているのだ。トラブルに巻き込まれるのもバカを見るのも火傷をするのも、責任を取らされるのも、全て。

だったら、エリイがよっぽど嫌だと言って傷付くようなこと以外は全部あってないようなものだ。

一秒に満たない間にそれだけの諦めを出力しながら、アイカの意識は完全に、ロビーから愛機のコックピットへと飛ばされていくのだった。

名機アルビオン。機動戦士ガンダム0083に登場する、主人公たちの陣営がその母艦としてしているペガサス級戦艦から名前を取ったと思しきフォースで、リーダーのハマモリと、今回の試合には関わらないナンブ以外の面子は見えていないものの、二人の格好から察するに、その0083に出てくる機体、それも連邦軍側のものをメインにした構成なのだろう。

出撃前に設けられたブリーフィングフェイズで、チイは自身の推察をメンバーたちに語った。

今回設定しているルールは、フォース戦としては標準的な、参戦するダイバーの名前とランクだけを開示した上で互いのどちらかが全滅するまで戦うというものだ。

もう少し時間があれば「名機アルビオン」というフォースについても調べられたが、何分中堅どころで少人数、しかもメンバーが入れ替わりを経ているのであればどの道得られる情報は今と大差ない。

誤差だよ誤差、と推察を締め括るチイに、それは死亡フラグなのでは、と懸念を抱きつつも、一応商品を扱う時に聞いたことがある0083という作品をアイカは思い返していた。

「確か、物騒なバズーカ持つてるガンダムは敵なんだよね？」

ジオニストと呼ばれるジオン公国軍及びその残党の愛好家が聞いたら怒り狂いそうな疑問を、アイカは出撃前のコックピットで投げかける。

「物騒なバズーカ……アトミック・バズーカですか。ええ、それを使用するガンダム試作2号機サイサリスは物語上ジオン残党、デラーズ・フリートの所属ですね」

「……で、でも……ガンダムって、味方なんじゃ……」

「はい。エリイの言う通り基本的に宇宙世紀作品で、ガンダムタイプは主人公の陣営として設定されることの多い地球連邦軍に所属するものです」

「なら、どうして？」

「奪われたのですよ、アイカ」

「そーいうこった。まあ元が連邦ってところがややこしいっつーか、アルビオンって戦艦に積まれる予定だったから向こうさんが使ってくることも一応警戒しとけよ！」

ブリーディングフェイズとして設けられた時間が終わり、特定のフォースネストとして戦艦を持たないアイカたちは、デフォルトで設定された格納庫のようなテクスチャで再現されたカタパルトにその両足を固定することになる。

「そんじゃあ先に……チイはグラスランナーで出るぜ！」

「アキノ・ベルナル……ミネルヴァガンダム、発進します！」

お約束の出撃シーケンスを慣れた振る舞いでこなしながら、チイとアキノが先行して出撃する。

「それじゃあ……アイカ、コメットコアガンダム、行っきまーす☆」

「え、あ……わ、ヘイズルⅡ、エリイ……出撃します……！」

アイカは右眼の前でピースサインを作る決めポーズをしながら、エリイはまだ慣れないのか困惑しつつ操縦桿を握りしめ、音声入力を認識したカタパルトが二人の機体を、今回の戦いの舞台として選ばれたステージ……地球、衛星軌道上へと投射する。

出撃時にかかるカタパルトからのGも、バージョン1.78は極めて忠実に、しかし人体に悪影響を及ぼさない絶妙な範囲で再現していた。

フィードバックされる感覚に歯を食いしばりつつも、アイカたちは無重力の戦場へとそのまま吐き出され、眼下に見下ろす地球と空を照らす星々のか細い明かり、そして背後に浮かぶ暗礁宙域が、フォース「リビルドガールズ」の初陣を出迎える。

「わあ……！」

エリイが思わずこみ上げてくる感嘆に声を上げたように、今が戦い

の場であることを忘れてしまいそうなほど、GBNのグラフィック班がきつと血反吐を吐きながら作り上げた仮想の宇宙は、現実の写真で見るとそう違わない美しさを誇っていた。

違いがあるとすればそこかしこにモビルスーツや戦艦の残骸など、スペースデブリが漂っていることだろうか。

とはいえ現実でも宇宙ゴミの存在が問題視されている以上、浮かんでいるものがシャトルやロケット、人工衛星の残骸でもモビルスーツの残骸でもそう大差はないのかもしれない。

アイカもこみ上げてくる感動を胸に押し留めながら、ぴしやりと自分の両頬を叩いて気合を入れ直す。

「おうエリイ、感動するなら勝つてからだぜ！ アキノはわかってっと思うけど、宇宙じや常に下からも攻撃が飛んで来っからな！」

ハードコアデイメンション・ヴァルガに救いがあるなら、それは主にユーザーが好んで利用して、デフォルトでのスポーン地点として設定されているのが重力下であることだ。

どこの誰が残したかはわからないが、絶界行をする者たちにとって、それらは実感を伴った名言として脈々と語り継がれている。

あの場所で迂闊に空を飛ばば、自分が食らう攻撃の方向が増える。それかどれほど過酷なものであるかは、ヴァルガにダイブしたことがあるダイバーであれば誰もが知っていることだ。

中にはFOEさんや獄炎のオーガのような、あの地獄で自由に空を飛び回る存在もいるがー彼らは例外だから割愛しよう。

とにかく、機体の上下というのは決まって死角になりやすい。初心者へのアドバースとして、先に飛ぶことは咎めながらも、相手を追い詰める時の手段として、あえてメインカメラが視認しきれない、或いは上を向くというワンアクションを挟まざるを得ないことを逆手に取って真上からの攻撃が推奨されることもその証だろう。

「鬼が出るか、蛇が出るか……っ!？」

その光が彼方に煌めいたのは、チイがミラージユコロイドを展開しつつ先行し、背部の武装コンテナから今回は無線の観測機を敵陣に飛ばそうとした時だった。

「全員全力で横に逃げろ！ 死ぬぞ！」

チイの叫びが焦りを伴っていた以上、その警告は本物なのだろう。脳が理屈を組み立てるより先に、アイカの指先は操縦桿を握り締め、その指示の通りに真横へと全力でブーストを蒸していた。

「あれは……」

『まさか、こいつを避けるなんて……間違いない、初心者だが、こいつらは、エースだ……！』

星の光を背にして、反対側から出撃してきたのであろうその機体から、0083の主人公であるコウ・ウラキが纏っていたのと寸分違わないヘルメットとノーマルスーツに身を包んだハマモリが、先程困惑していたのとは別人のように渋く顔をしかめる姿が通信ウインドウにポップする。

「……って、ユニコーンガンダムじゃねえか!!! アルビオンどこ行っただんだよ!!!」

『うるさい、ちゃんと白いしフルバーニアンだろ!!!』

先陣を切ったハマモリが開幕の狼煙とばかりにぶつ放してきた光の正体は、果たしてビーム・マグナムのものであった。

肩や胸元は青色にペイントされ、爪先も赤に、そして背中にはライトニングガンダムフルバーニアンが背負っていたと思しきユニバーサル・ブースト・ポッドが接続されたそのガンダムは、チイがブチ切れた通り、0083を出典にするものではなく。

「二応、UCにもトリントン基地が出てきますからね……」

呆れたように呟くアキノの愛機と出典を同じくする機動戦士ガンダムUC、その主役機であるユニコーンガンダムの改造機に、他ならなかった。

第十四話 「臆病勇者とNT―D」激突戦域・前編

ビーム・マグナム。

それは原作の読者、視聴者のみならず、初期のGBN、ひいてはその前身となるGPDを体験している者にとっては、ある種恐怖の代名詞として脳裏に浸透している。

標準的なビームライフル数発分のエネルギーをマグナム弾と呼ばれる専用カートリッジに圧縮することで、戦艦の主砲やメガ・バズーカ・ランチャーのような大型ビーム兵器に匹敵する出力の火砲を、標準的なビームライフルと同じサイズで取り回せるという設定のそれは、果たして造り込めば造り込むほど原作に近付くというこのゲームにおいて、極めて凶悪なシナジーを誇っていた。

端的に表現するなら掠っただけで死ぬ。造り込みが完璧なら掠めなくてもその余波が及ぶ範囲にいただけで死ぬ。

チイが早口で捲し立てたその言葉通り、ハマモリの「ユニコーンガンダム・フルバーニアン」が放った一撃をアイカたちは完璧に回避していたものの、一瞬モニターにノイズが走るなど、電装系にダメージが伝わったと思しき瞬間はあった。

ただ、GBNがオンラインゲームである都合上、初期に猛威を振るった威力がそのまま今も君臨しているわけではない。

何度も修正が重ねられた結果、多くのダイバーが「まあ妥当じゃないか」と思う程度には弱体化が施されているが、それは「余波でも死にかねない」「掠っただけでも死ぬ」部分へのテコ入れであって、まとも直撃すれば一撃で機体が消し飛ぶ本体部分の威力は据え置きだし、機体によつては今も掠めただけで一撃死という事態もありえるのだ。

要するにアイカとエリイ、そしてチイの機体はあのビーム・マグナムに掠っただけで死ぬから修正など関係ない。

今回は爆薬の入っていないダミーバルーンを慌てて投下してロツクを分散させながら、チイはハマモリの頼りない印象に騙されていた自分への怒りで舌打ちをする。

「この野郎、お坊ちゃん顔の割にやってくれるぜ……!」

ダミーをばら撒くついでに飛ばした無線観測機も、ユニコーンガンダム・フルバーニアンの頭部バルカンによって即座に叩き落とされて重力圏へと落ちていく星屑と化した。それでもあれらは確かにあの機体の腰部に、五発一組になったマグナム弾のカートリッジが二つマウントされていることを観測していた。

『褒め言葉と受け取っておくよ、チャッピーさん、ヨネヒトさん、今です!』

『へっ、テメエに言われるまでもねえ!』

『あいよ、狙いは……』

恐らく一直線に並んでいたのだろう。ユニコーンガンダム・フルバーニアンの背後から、ガルグレーとモンザレッドのツートンカラーに黄色の差し色をダクト部等に塗装した、ジム・カスタムの背中と脚部にガンダム試作1号機フルバーニアンのそれを丸々移植したような機体が飛び出し、先行するチイを無視する形で、アキノの後ろに二人で固まっていたアイカとエリイに狙いをつけて、牽制射撃を放つ。

「高機動型ジム・カスタム……!」

「高機動型……?」

「MSVと呼ばれる外伝群の機体です、まだキット化されていないのでミキシングで作り上げたのでしよう……アイカさん!」

——私が盾になってユニコーンを抑えます!

宣言するなりフレキシブル・スラスターの出力を全開にしたシナンジュが大剣を振りかぶり、ハマモリのユニコーンガンダム・フルバーニアンへと肉薄する。

「要するに、アキノさんの援護は期待できない、か……! エリイちゃん、絶対離れないでね!」

「……は、はい……!」

事前に開示されたダイバー情報を信用するなら、あのチャッピーと呼ばれた、髭面にリーゼントという名前に似合わない強面のダイバーと、ヨネヒトと呼ばれた金髪でこれまた強面のダイバーは、顔こそ歴戦の雰囲気を漂わせているものの、ダイバーランクとしてはチャッ

ピーがC、ヨネヒトがDと、自分たちとそう変わらない。

アイカとエリイは背中を合わせるように陣形を組んで、セオリー通り上下からの挟撃で自分たちを追い込もうとしている高機動型ジム・カスタムを迎撃しようと試みる。

『青いなあー!』

『そうだ……ウツキース、そこから叩いてくれ!』

だが、挟み撃ちと見せかけて、アイカとエリイへ肉薄しようとしていたチャップピーとヨネヒトは、突然各個に散開して左右に大きく分かれるマニューバを取った。

何かがある。アイカが予感を抱く、刹那。

「アイカさん!」

「アイカ、エリイ、避ける!」

二筋の閃光が、ジム・カスタム高機動型を目眩しにしてアイカのコメットコアガンダムと、エリイのヘイズルIIを呑み込まんとな彼方から飛来してくる。

そうだ。事前の情報では相手も四機。ダイバーランクこそEと低いものの、敵兵はもう一人いたのだ。

それを観測していたチイが指摘するより早く、エリイが叫んだことを根拠に、アイカはコメットコアガンダムをヘイズルIIから大きく引き離してしまうものの、飛来したビームを回避することには成功していた。

だが、それもハマモリは織り込み済みだったのだろうか。

アキノにクロスレンジまで肉薄されたことで、ビームマグナムという攻撃手段は事実上封じられたが、両腕に設けられたビーム・トンファーを巧みに操って、大剣による攻撃、そのベクトルを逸らすような形で受け止めながらハマモリは静かにほくそ笑む。

多分、してやられている。

アイカはエリイとチイの位置をレーダーで確認しつつ、まだ慣れない無重力空間で崩してしまった姿勢を立て直しながら、ハマモリが立っていたであろう作戦について、高速で脳内回路を駆動させながら考察を立てる。

(多分、あのビーム・マグナムとかいうのは釣り……あたしたちの中で一番上手くて火力があるアキノさんを盾にさせたんだ)

ウツキース、というなんだか機体がオーバーヒートするまで格闘攻撃を振り回していそうな名前のダイバーが何に乗っているかはわからない。

だが、遠距離から届く武装を持っていて、かつ自分たちよりも経験が浅いと見れば、恐らくは遠距離攻撃という役割だけをこなし、前線の連携を遠くから見届ける形で経験を積みませるといふ算段なのだろう。

そして、ハマモリの真の狙いは恐らく。

『悪いなアイドルっぽいお嬢さん、少しばかり俺と踊ってもらうぜ』

「アイドルは恋愛禁止だから、お断り……っ！」

気障な口説き文句を蹴り飛ばすように、ジム・ライフルと呼ばれる実弾銃をリズミカルな三点射撃で放ってくるヨネヒトを振り切ろうと、アイカもコアスプレーガンによる応戦射を放つが、彼も中々の食わせ者だ。

アイカの機体が大剣を背負っていると見るなり、肉薄してのドッグファイトではなくジム・カスタム高機動型の持ち味である足回りを活かして、付かず離れずの位置で散漫な射撃を繰り返しながら、当たらなくともコメントコアガンダムが先に進むことを許してくれない。

ツーマンセルによる連携攻撃をチラつかせたのもブラフで、ヨネヒトとチャッピーが真に狙っていたのは遊撃による各個撃破なのだろう。

そして、アイカの前に立ちはだかつたのがヨネヒトであるなら、フリーになってしまったエリイを狙うのはCランク、格上のチャッピーだということになる。

『弾がもったいねえんでな、悪いが片付けさせてもらうぜ泣き虫の嬢ちゃん!』

「……………う、ぐ……………っ……………」

攻撃の合間に、アイカがモニターを横目で見れば、そこにはビームサーベルを抜き放ったチャッピーのジム・カスタム高機動型が、同じ

くシールド裏からビームサーベルを引き抜いたエリイのヘイズルIと切り結ぶ光景がある。

エリイのヘイズルIが素組みであることも考えれば、切り結んでいられる時間にも限度があるだろう。そしてそれは、限りなく短い。彼女もそれを理解しているのか、チャップピーのマニューバを見定めつつ、奇しくもハマモリがアキノにそうしているように、なるべく強い力を逃すような形で鏝迫り合いを行なっているが、何度か押し負けそうになって一瞬体勢を崩したところを狙い、高機動型ジム・カスタムは強かに頭部バルカン砲を叩きつけている。

一発一発の威力は大したことのない牽制用の武器だ。

だが、例え一ダメージしか与えられない武器があつたとしても、百万回当てればHPが百万ある敵を倒し切れるように、蓄積するスリッブダメージのようなその攻撃は決してバカにできるようなものではない。

そして、その作戦に続きがあるなら――

「エリイを殺つてアイカを挟み撃ちにするってか？ 後手に回らされたがしやーねえ、させつかよ！」

ロックが外れてフリーになつていたチイのガンダムグラスランナーが、エリイのカバーに入るべくチャップピーの機体に向けて両手のビームマシンガンを連射しながらブーストを蒸す。

これで、ウツキースというダイバーがフリーになつてしまったのも恐らく相手の術中なのだろう。

のらりくらりと弾を避けて、消費を節約しながらも的確にアイカの動きを読んで偏差射撃を行なつてくるヨネヒトに舌打ちをしながらも、アイカは読み切つた中に見出した微かな希望に、唇の端を吊り上げる。

もしも相手の誤算を突けるのであれば、それは恐らくハマモリやチャップピー、ヨネヒトがチイの機体を過小評価していることだ。

確かにチイのガンダムグラスランナーは、陸戦型ガンダムを原型機にしているのもあつて、重力下で機能する武装を多く積み込んでいる傾向にある。

だが、多分ではあるが、多くのフォースに斥候として雇われた経験を持つているだろうチイが、宙間戦闘を全く想定していないということがあるだろうか。

もしもあつたなら彼女は自分たちにあんな警告を飛ばしていない。

アイカは、そう判断すると。

「チイちゃん！」

「おうよ任せな！」

ビームマシンガンで牽制射撃をかけて、チャツピーによるエリイへの攻勢を弱めながらも、チイは僅かに生まれる間隙一瞬チャツピーがエリイへと斬りかかるその瞬間に、機体を百八十度反転させて腰部ラッチから取り出した投擲弾を、ヨネヒトに向けて投げつける。

『宇宙空間で投擲弾なんてなあ！』

「ううん、違うよっ☆」

得意げに叫んだヨネヒトに、アイカは獰猛な笑みを浮かべて、トリガーを引くことでその返礼とした。

この状況下でアイカが求めていたものはなにか。そして、相手の意表を突けるものは何か。

投擲弾の持つ、地面への着弾という形で爆風を発生させるという使い方が宇宙空間で大きく制限されることは確かだ。

だが、チイがそのことをわかっていない、などということがあるだろうか。

念入りに進路のクリアリングを行い、自分が望んでいた導線へ丁寧に敵を誘導していく、ハードディメンション・ヴァルガにおける彼女の活躍を脳裏に描きながら、アイカはチイが投擲した弾を狙って、コアスプレーガンを撃つ。

『うおおおおおっ!?!』

瞬間、爆ぜた弾頭から朦々と立ち昇る黒煙がアイカとヨネヒトの間を覆い尽くす。

この状況下におけるアイカの課題は、ヨネヒトから離れてエリイのカバーに回るか、或いは距離を詰めて彼をしまいかだが、相手の足回りが易々と許してくれない。

ならば有効打になる一手は、相手の動揺を誘うことだろう。

スモークデイスチャージャー。発生させた煙に紛れることで機体を隠す古典的なステルス兵装だが、こうして目眩しに使うことも可能だ。

『落ち着けヨネヒトオ！ 宇宙なら振り切れんだろうが！』

エリイのヘイズルイーがとうとう右腕にかかる負荷に耐え切れずスパークを起こしているのを、限界が近づいているのを確認しながらも、チャッピーはクレバーにそう叫んでいた。

宇宙空間には高度の制限も、重力による影響もない。

GBNの宇宙が電子の海に浮かぶ架空のソラであるなら、正確にはシステム上設けられた「天井」は確かに存在するのだろう。

だが、アクティブ二千万人を抱えて、しかも高精細な機体や背景のグラフィックを再現してそこで様々な地域、国々からのアクセスを処理しているGBNのサーバーやCPUが作り上げたその限界に到達したという話は誰も聞いたことがない。ならば、ゲーム中は現実のそれとほぼ同じだと考えて差し支えはないだろう。

チャッピーに指摘された通り、舌打ちをしつつもヨネヒトは機体を上昇させて、スモークを振り切るが。

「宇宙は……底がないんだからあつー！」

『しまった、クソ、しくつちまった……！』

アイカのコメントコアガンダムが、その真下から姿を現して、手にしていたコアスプレーガンを連射する。

ジム・ライフルを持つ右腕。左のユニバーサル・ブーストポッド。そして左足の関節部。全弾を撃ち切った成果にしては命中率が芳しくない。アイカは自虐するが、足が自慢の相手から足を封じたのだ。ならばそれで十分仕事は果たしている。それに。

「あたしのコメントコアガンダムは……っ！」

『うおおおあああッ!』

マスコットではない。インファイターだ。

アイカの脳裏に浮かんだ言葉は分泌されるアドレナリンに上書きされて形を持つことはない。しかし、それは確かな殺意を形にして、

ワンアクションを挟むビルドボルトの展開ではなく、バックパック左側のビームトーチ、その刀身を伸長させるという判断をアイカの身体へ形にさせる。

懐に飛び込まれたヨネヒトのジム・カスタム高機動型は、頭部バルカン砲の斉射でアイカを迎撃しようと思足掻きをするが、コメットコアガンダムがいかに小柄であるとはいえ、バルカン砲で沈むほど装甲が薄いなどという道理はない。

ならばコックピットに突き立てられた光がもたらす仮想の死、その予感も必然のものだった。

「やるじゃん」

コメットコアガンダムがヨネヒトのジム・カスタム高機動型を撃破したのを確認して、チイは弾を全て撃ち切ったビームマシンガンを投げ捨てて、背部の武装コンテナからアーミーナイフを取り出してチャップリーの機体へと斬りかかる。

エリイはよく耐えてくれた。

ヨネヒトを抑える都合上、一瞬とはいえチャップリーとの疑似的な一対一を押し付ける形になってしまったが、果たしてチイの予測通り、スパークしていた右腕を脱落させ、左腕で構えたシールドもジム・ライフルによる攻撃で穴だらけになって使い物にならなくなってこそいても、エリイは確かに任せてしまった間、チャップリーとのタイマンを持ち堪えさせていた。

(索敵役のチイより先にあのウツキースとかいう奴の攻撃を読んだのは多分偶然じゃねえ)

エリイは、とにかく周りをよく「見て」いる。

それがチイが観察する中で見て取った彼女の長所だった。

確かにエリイは、普段は何が怖いのか知らないが四六時中びくびくと怯えてアイカの背中に隠れていて、口を開けばその意見はアイカと同じ、の繰り返しだし、戦闘中だって恐怖に負けてびーびーと泣いてしまうことがあるような、臆病な女だ。

だが、臆病であることは決して戦闘にマイナスだけをもたらすわけではない。

チイは確かに格上が相手だろうが強面のダイバーに交渉を持ちかけようが、基本的にはそこに物怖じなどしない。

だが、誰に語ることも決してないだろうが、戦場においては誰よりも臆病であることをこそ、その信念に置いていた。

勘違いするダイバーは後を絶たない上に、口だけで説明すれば何を言っているんだと笑い飛ばされそうなものだが、チイは、あの不動のチャンピオン、クジョウ・キョウヤも臆病だと、そう考えている。

それは決して、チャンピオンを勇気のない意気地なしだと罵っているのではない。むしろチイとしては、臆病だというのは最上の褒め言葉なのだ。

敵を恐れない勇者はいつだって格好良く民衆の目に映るだろう。

だが、なぜ勇者は敵を恐れないのか。

それを考えた時、自ずと答えは二つに分けられる。

一つは、そいつが単純にバカだからだ。

そして、同じ思考回路を持った一部の人間はその、文字通りに命知らずな、バカな行いをこそ勇氣だとかなんとか持て囃したりするのだが、それこそ「匹夫の勇」というものだろう。

そしてもう一つは、そいつが臆病だからだ。

臆病であるからこそ勇者は己の死を恐れ、どんな状況であろうと相対した敵がどのような実力であるかを適切に見定めて、自分にできることと照らし合わせた上で勝算を組み立ててから戦いを挑むからこそ、人々の目にはそれが死をも恐れない勇氣に見える。

エリイは恐らく本当の意味で臆病で、怖がりなのだろう。

だからこそ、本能的な部分で妄想とはいえ己や仲間の死を回避しようとする無意識に直感を働かせている。

そしてそれは、きつとチイを上回る天賦の才なのだろう。

「よくやったぜエリイ、後は任せな！」

「…………ち、チイ、さん……………」

あのチャッピーとかいう髭面が怖かったのだろう。眦に涙の粒を湛えながらも決して、格上相手に引くことなく戦いを凌ぎ切った泣き虫な勇者に称賛を送りながら、チイはアーミーナイフを振りかざし

て、高機動型ジム・カスタムと切り結んでいく。

『ちい……っ！ SD使いが生意気なんだよ！』

「へっ、泣き虫でか弱い女の子から狙うような変態のおっちゃんじゃあ旧キットそのまま組んだチイにも勝てねえだろうよ！」

『このアマ、言わせておけばア！』

『ダメです、チャッピーさん！ 挑発に乗らないで……！』

『うるせえぞハマモリ！ ナンブさんのオキニだからって俺に偉そうに命令してんじゃねえ！』

チイの見立て通り、このチャッピーというダイバーは見た目通りの単細胞だ。

リーダーであるハマモリの制止も張り切って、ビームサーベルの出力を最大まで引き上げた高機動型ジム・カスタムが、先程クレバーにエリイをじわり、じわりと削っていたのと同じ人物だとは思えないほどにがむしやらで無軌道な太刀筋で、意趣返しとばかりにのらりくらりと付かず離れずの距離を保っているチイを振り払おうとする。

（ありやあ長く持つても二、三分つてとこか？ それに……）

「エリイちゃん泣かせんな！ このヒゲオヤジいつ！」

無理をしてサーベルの出力を引き上げれば、その発振部分にかかる負荷も凄まじいことになる。それこそガンダム試作2号機サイサリスのように、最初からブーストアップとして出力調整機能を備えていないそのリミッターを外せばどうなるかなど自明の理だ。

だが、それさえ頭から抜け落ちるほど今のチャッピーは怒りに囚われている。

だからこそ、ヨネヒトの機体、そのコックピットを貫いていたアイカがクロスレンジにまで接近していたことにも気付かなかつたのだろう。

今度は十分な猶予を持って組み立てられたビルドボルクの刀身と、ホースの噴出口を握った時のような勢いで出力されるビームサーベルの刃がぶつかり合って、漆黒の宇宙に火花を散らす。

このままではまずい。

その様子を、なんとかアキノの猛攻を凌ぎつつもモニターから確認

していたハマモリの額に、脂汗がじわりと滲む。

元々彼が立てていた作戦は、アイカが読んだ通りで、初手のビームマグナムをDランクの二人が躲せるのであれば自分がAランクのアイカを引き付けて、随伴機のチャッピーとヨネヒトを目眩しに、後方で待機させていたウツキースの機体……ジム・キャノンIIのビームキャノンをザメルのカノン砲に匹敵するまでに延長させたもので狙撃し、それもダメなら分断した上でチャッピーとヨネヒトへ各個撃破を行わせるという算段であった。

だが、これは相手を褒めるべきなのだろう。そして自分を責めるべきなのだろう。

何度もミネルヴァガンダムが振るうIフィールドソードを受け流し続けてきたことで腕関節が悲鳴を上げ、注意を示す黄色に染まったコックピットでハマモリはぎり、と奥歯をきつく噛み合わせる。

アイカもエリイもハマモリの予想を超えて持ち堪えていた。

特に、チャッピーがエリイを落とすきれなかったというのはハマモリにとつての想定外であったし、軽く動揺もしている。

しかし、何よりハマモリが許せなかったのはあのSDCS陸戦型ガンダム改造機——チイのガンダムグラスランナーを過小評価していたことだった。

チャッピーのように、特定のグレードを見下していたわけではない。だが、火力に乏しくすばしっこいであろうその役割はあくまで斥候であり、しかも相手が作ったばかりのフォースであれば、連携も甘いのではないかと、そう思い込んでいたのが大きな間違いだった。

コンソールに指先を伸ばしつつ、ハマモリは己の選択を後悔する。実際には彼の予想を超えてアイカとチイは息の合った連携を見せつけたし、それでヨネヒトが撃墜されてしまったことで自分の描く勝利への方程式は破綻しかけ、そしてチャッピーが挑発に乗ってしまったことでそれは決定的に瓦解したといってもいいだろう。

だが。

『それでも……僕はナンブさんからリーダーを託されたんだ、負けられないんだああああっ！』

ハマモリは迷いなく、必殺技の発動を選択する。

「ぐ……っ！」

瞬間、ユニコーンガンダム・フルバーニアンを中心として不可視のサイコ・フィールドが展開され、脚部から順番に閉じていた各部のスリットが伸長、解放されていき、バイザー顔に覆われていたユニコーンガンダム、その証明であるガンダムフェイスを曝け出した。

NT-D。ニュータイプデストロイヤーと呼ばれるその時限強化こそが、ハマモリにとつての逆転へ一か八かの賭け金なのだ。

最後に閉じていた一本角が展開したことで、ユニコーンガンダム・フルバーニアンはその名の通り、「ガンダム」としての姿をアキノの眼前に現した。

『どいてくれ、チャップピーさんを助けるんだ！』

「その心意気やよし……しかし私も、シルバリー……いえ、今はフォー・ス・リビルドガールズの守護の盾！　そう易々と貫けるとは思わないことです！」

NT-Dが解放されたことで、ハマモリの機体はアキノのミネルヴァガンダムと互角に斬り結べるほどにその性能を引き上げている。

しかし、NT-Dシステムがもたらす恩恵は機体の強化、ただそれだけではない。

ビーム・トンファーとフィールドソードが斬り結ぶ最中、おもむろにユニコーンガンダム・フルバーニアンが左手をかざしたかと思うと、アキノの機体に——正確には今この瞬間まで剣戟を繰り広げていた武器に、拭い難い違和感が生じる。

「まさか……！」

『できたか、サイコミュジャック……！』

「く、抜かった……っ！」

アキノのフィールドソードには、それ自体が遠隔操作を可能とできるようにドラグーン・システムが組み込まれているのだが、それが裏目に出る形となった。

ユニコーンガンダム・フルバーニアンが掲げた左手から、展開されて露出した赤いサイコフレームと同じ色をした靄が放たれたと思

きや、Iフィールドソードは本来の持ち主であるアキノの手を離れて、ハマモリの手に渡ってしまったのだ。

GBNにおけるサイコミュジャックは、作品における垣根を超えている。

ドラグーンシステムであろうとGNフアングであろうと、オールレンジ兵装だと判断された瞬間に、問答無用でユニコーンガンダム系列の機体がサイコミュジャックを発動すれば造り込みに応じた時間限り、その制御下に置かれるという仕様は当然の如く賛否両論であった。

だが、このGBNがガンダム作品に囚われず多彩なガンプラがしのを削るゲームである以上、そういう遊び心を捨ててしまいたくはない、という運営の方針で今もその仕様は残されているのだ。

『俺はこのままで……終わるつもりなどない！そこをどけえッ！』アキノから奪ったIフィールドソードが、その斬撃を受け止めようとしたビーム・トンファアごとミネルヴァガンダムの左腕を、そしてその半身を強引に切り裂いていく。

そうしてハマモリはチャッピーに助け舟を出すべく、制御限界に達したIフィールドソードを放棄すると、機体のブーストを全力で蒸し、半身を失ったミネルヴァガンダム——原作でユニコーンのライバルだったシナンジュのカスタムモデルを振り切っていくのだった。

第十五話 「生きてる限り負けじやない」激突戦域・後編

ガンプラの仕様とガンダム仕様、そしてGBNの仕様はそれぞれ微妙に異なる。

それを聞いた時に大体のドライバーは何を言ってるんだ、と、首を傾げるが、慣れてきた者ほどああ、と渋い顔をしたり、首を傾げた者が自分たちの側に来るところを想像してにやりとほくそ笑んだりするのだが、このややこしい仕様の違いは紛れもなく存在している。

ユニコーンガンダムは、奇しくもその代表例だった。
何ということはない。

ユニコーンガンダムという機体が、原作においてその最大の特徴としているのは、ユニコーンモードからデストロイモードへの変身を可能にしていることだろう。

だが、GBNにおいてメジャーなHGブランドのガンプラにおいてのユニコーンガンダムは、主に組みやすさや安全基準の存在、強度的な懸念など様々な面からの制約があって、ユニコーンモードとデストロイモードが、それぞれ別のガンプラとして発売されることになったのだ。

そして、GBNの仕様というのがまた複雑で、それ故に検証班も日々手を焼いているのだが——極端な話、どこまでシステムがドライバーをアシストしてくれるのか、についての範囲は、極めてわかりづらいものとなっている。

例えば両肩のパーツが外れて、ナックルガードになる、というギミックを採用したとしよう。

ガンプラとして考えた場合、製作者——ビルダーがその武器をガンプラのハンドパーツに持たせたい時は、肩から指で取り外し、手持ち用のグリップを展開するなり別パーツとして持つてくるなりして装備させる必要があるが、ドライバーギアにそのガンプラとジョイントパーツをスキャンさせれば、その工程は概ね自動化される。

恐らく思考を読み取ってその補助としているのだろう。

GBNでは、わざわざマニピレータで肩のパーツを外して持たせる工程を踏まずとも、ダイバーが操縦桿での入力なり音声入力なりでその武装を起動すれば、両肩のパーツは自動的に外れて両の拳にぴったり収まってくれるのだ。

だが、その思考補助システムにも、システム的な制約は存在するらしい。

ユニコーンガンダムの場合は、変身をギミックとして実現したいと考えたのなら、HGを使用した場合エネルギーの総量を分割する形でユニコーンモードとデストロイモードの二体をダイバーギアにスキャンさせるか、もしくは。

デストロイモードへの変身を遂げたハマモリの機体が、目にも止まらない速さでビーム・マグナムを構えて、牽制射撃でチャップীর足を止めるチイと、その間隙を縫って、大剣をジム・カスタム高機動型に叩きつけんとするアイカをその視界に収める。

なんてことはない。ハマモリがそのジレンマを解決し、変身ギミックを実現させたのは、RG——HGと同スケールでより細かくパーツ分割され、最初から内部フレームによる変身機構を備えているそれを採用し、さらにCランクから解禁される必殺技という要素を「時限強化の更なる性能強化」という形に押し込めて、ユニコーンガンダム・フルバーニアンが発動したNT-Dは原作のそれに近いスペックを發揮することに成功したのだ。

ハマモリが構えたマグナムが、覗き込む照星が動揺で微かに揺れる。

確かに今マグナムを撃てば、チイとアイカ、そして事実上行動不能に陥っているエリイを一気に撃墜することは容易かもしれない。

そうなれば形勢は一気に自分たちの有利に傾く。

だが、間違いなくチャップীরはその余波に巻き込まれるだろう。

チャップীর機体は、通信ウィンドウにポップする彼の周囲にレットアラートが浮かんでいるように、どのみち撃墜されるのは時間の問題だ。

ここでハマモリが彼を巻き込んで撃つたとしても、その戦果が上回っているのであれば不問とする、とハマモリの肩を持つダイバーはいるだろう。

だが、ナンブから受け継いだフォースが、「名機アルビオン」の信念が、ハマモリが抱こうとしたその鉄心を揺らがせる。

一人は皆のために、皆は一人のために。隊は家族で兄弟、互いに助け合うことで戦場で生きていける。

或いはその信念は、猜疑に歪んだ暗い瞳にせせら笑われるものなのかもしれない。嘘を言うなど、心を鉄にして、自分のために死んでくれと味方を巻き込んででも勝利を手にかざることこそ至上の目的であると、誰かは言うのかもしれない。

だが、ハマモリにそれはできなかった。

潤沢に弾が残っているであろうビーム・マグナムを放り捨て、ビーム・トンファーを展開した上でユニコーンガンダム・フルバーニアンは、ジム・カスタム高機動型とコメットコアガンダムの間に割って入る形で、アイカへ格闘戦を仕掛けていく。

『負けられない……負けられないんだあつ!』

「何……っ!?!」

「ユニコーン……!?! クソっ、アキノが突破されたのか!」

体当たりで弾き飛ばされたチイが忌々しげに舌打ちをしながら、流星の如くバーニアの軌跡だけを残して漆黒の宇宙を駆け抜ける、ユニコーンガンダム・フルバーニアンを睨みつけた。

「RGなら、見たとこ五分つてとこか……?」

「五分つて!?!」

「あのNT-Dが持つ時間だ! クソ……アイカ、持ち堪えられるか!?!」

時限強化武装に対するシンプルな対策は、その時間が切れるまで逃げ続けることだ。

GBNにおいてその環境構築の一部であるとされるトランザムシステムも、完成度によってまちまちではあるものの制限時間が存在している。

一応、リミッターを解除するという形で無理やり稼働時間を延長することも可能だが、それを行えば機体はオーバーロードに耐えきれず自爆してしまうだろう。

そして、ハマモリが勝利を諦めていないのであれば、無理やりNT―Dの稼働時間を延長するという手段は選ばない。

手負いのチャッピーに挟み撃ちという選択肢を取らせないよう、執拗に攻撃を加えながら、チイはそう推察する。

だが、アイカにそれが可能なのか。

ビーム・トンファアの一撃をビルドボルグで受け止めたものの、大きく体勢を崩したコメットコアガンダムに、ユニコーンガンダム・フルバーニアンが追撃のバルカン砲を連射する。

アイカとしては、即座に無理だと答えたいところだった。

あのユニコーンガンダムががむしゃらに振り回しているビーム・トンファアの一撃はあまりにも重い。

加えて、大剣であるビルドボルグの性質上、いかに軽く取り回しの良いものであったとしても、腕そのものが一つの武器ユニットとして機能するビーム・トンファアと比較すれば、手数が多さという点においては大きく遅れをとっているといっていだろう。

五分。普段であれば何ということもなく過ぎていく時間が、どこまでも重く、薄く、引き延ばされていく感覚にアイカは冷や汗を流す。

膂力で鏝迫り合いを弾き飛ばし、アイカの体勢を崩したかと思えば、ハマモリはそこを追撃するのではなく、今度はチイへと襲いかかり、チャッピーへの攻撃を阻止せんと試みる。

まさしく獅子奮迅といった風情だ。

だがそれは、孤軍奮闘とも、目的が明確に見えていないとも言ええられる。

左半身を喪失していながらも、撃墜そのものは免れていたアキノのミネルヴァガンダムが、ユニコーンガンダム・フルバーニアンの支配から解放されたIフィールドソードをその手に携えて、接近してくるのをチイは機体のメインカメラをビームの刃に切り裂かれながらも確かに視認していた。

「先程はしてやられましたけど……！」

『こいつ、凝りもせず……もう一度ジャックを！』

「させつかよバーカ！」

『なにいつ?!』

瞬間、閃光がチイとアキノ、そしてハマモリの間で爆ぜる。

チイが最後の悪あがきとして腰部ラッチから取り外し、投擲したものはフラッシュグレネードだった。

原作ではNT-Dが発動していれば問答無用でファンネルはその支配下に置かれていたが、GBNにおいてはゲームバランスを考慮して、かざした掌から出るモヤのようなものが発生しなければ、サイコミュジャックはキャンセルされてしまう。

そして、チイの狙いは概ね果たされたと言ってもいいだろう。

左手を掲げようとしたユニコーンガンダム・フルバーニアンカメラを、閃光弾の白が一色に染め上げ、ハマモリもまたその光に目を灼かれ、操縦桿から手を離してしまった。

「おおおおおおおっ！」

『クソっ、こいつっ！』

光が晴れたその瞬間、ハマモリが視界に捉えたものはミネルヴァガンダムが右手で大きくIフィールドソードを振りかぶる光景であり、反射的に頭部バルカンでの迎撃を試みるものの、それらは全て撃ち尽くした後だ。

しかし、半身を失ったバランスの悪い状態で大剣を振るうというのは、さしものアキノとて難しかったのだろう。

Iフィールドソードは、ミネルヴァガンダムとは対照的にユニコーンガンダム・フルバーニアン、その右半身を確かに切り裂いていたものの、コックピットへの直撃には至っていない。

『ハマモリ……クソっ、遅せえが……俺あなあ！』

右腕と右足を喪失し、奇しくもユニコーンガンダム・フルバーニアンと似通った損壊状況となっていたチャップリーのジム・カスタム高機動型が、渾身の一撃を放つも僅かに届かず、大きく体勢を崩したミネルヴァガンダムに肉薄し、残存していた左側のビームサーベルを思い

切り振るう。

「アキノ！」

「……っ！」

チイの警告を受けて、アキノは反射的に操縦桿へ回避を入力していたものの、AMBA C—四肢を利用した慣性制動が効かなくなっている上、重量のある大剣を右手に握ったままのミネルヴァガンダムでは僅かに身を振ることしかできず、コックピットへの直撃こそ避けられたものの、ビームサーベルの刃は損傷していたアキノの機体を切り裂いて、右腕を脱落させていた。

だが。

「あたしが……まだあっ！」

「いい加減往生しやがれってんだこのヒゲオヤジ！」

有線式の観測機をコンテナから展開することでそれを奪われたメインカメラの代替としたチイがアーミーナイフを構えて、そしてハマモリが硬直していた隙を見逃さずにビルドボルグを突き出したアイカが、それぞれに狙いを定めた相手へと肉薄していく。

チャートが崩壊した時、重要になるのは復帰の道筋を立てるアドリブ力だ。

ハマモリがビーム・マグナムでの立て直しを選ばなかったことは、そういう意味では不正解であったのだろう。

もしも同じ立場にチイが立たされたのであれば、迷いなくその選択をしていた。後でアキノからお説教をされたとしても、アイカとエリイ、GBNに染まり切っていないお人好しから見捨てられたとしても、それでも手にする勝利——はいつでもいいが、金はチイにとってなによりも重い。

だが、チイにハマモリの選択を詰ることはできなかった。

チイが重きを置いているのが金であるなら、彼にとつてのそれは情であるのだろうか。

それを理解こそできなくても、踏みにじって中指を立てる正当性などこの世のどこにもなければ、チイにとってその必要性もない。

絆されてハマモリのカバーに回ったチャッピーがもう少し早く、

チイの挑発に乗っていないければ、もう少し違う結末もあったのだろう。

そんな世の無情を、人が考えてしまうもしもをニヒルに笑い飛ばしながら、チイは己の仕事であるチャップピーの始末を、その背後からコックピットへとアーミーナイフを突き立てるといふ形で完遂する。

「殺つちまえ、アイカあつ！」

「てやあああああッ！」

——討ち、貫け。あいつよりも早く。何よりも速く。

アイカは一心に、チイからの激励も置き去りにして、あのユニコーンガンダムを、その心臓であるコックピットを貫くことだけに思考回路の演算能力、その全てを回して、咆哮と共に全力でブーストを蒸す。

そんなアイカの想いに応えるかのように、コメットコアガンダムの翡翠の双眸が凜と一瞬の光を放って、クロスレンジを飛び越えたビルドボルクの先端は、確かに一角獣の心臓を、そのコックピットを食い破ることに成功していた。

フィードバックされる衝撃に、ハマモリはコックピットの背面へと強くその背中を打ち付ける。息が詰まり、予感した敗北が、彼の視界を絶望に染め上げようとしていたが。

『まだだ……まだだあつ！ ウツキイイイス！』

あのロングレンジ・ビームキャノンは冷却に時間がかかるという欠点を抱えているが、もう十分だろう。

そして、メインカメラを失ったチイの機体と、四肢を脱落させて事実上行動不能になったのに等しいアキノの機体とエリイの機体、そして今まさに自分のコックピットを食い破った、言い換えれば足を止めているの機体は、乱戦の影響でほとんど一箇所固まっている。

「……アイカさんっ！」

「……っ、エリイちゃん！」

アイカがこの時抱いていたものは、恐怖などでは決してなかった。

エリイが「見て」いた直感が、そして、ビルドボルクーあの時、凜音が譲ってくれた、その原型となるカレットヴルツフの性質が色濃く残されているという事実が、仮想の死を予感し、恐怖に震えかけたアイ

カの胸を掴み、勇気へ向かうようにとその背中を押してくれる。

ウツキースが放ったロングレンジ・ビームキャノンは、果たしてハマモリの狙い通りにフォース「リビルドガールズ」の四機を確かにその射程へと捉え、光の波へと呑み込んでいた。

だが、アイカはビルドボルクの先端となっているビルドナイフをコアユニットから切り離し、爆発を待たただけだったハマモリの機体を両足で蹴り飛ばすと、ビルドカッターだけが残ったビルドボルク、その刃の部分をビームの奔流へと向けて固唾を飲む。

陽電子リフレクターとは原理が微妙に異なるが、ガンダムSEE D、その外伝である「ASTRAY」においては、全身を鉄壁の光に包み込んだ機体が登場する。

その光の壁——アルミューレ・リュミエールに対抗する手段は作中でもいくつか披露されているが、そのうちの一つは対ビームコーティングが施されている実体刃でそれを貫く、というものだ。

アイカは「ASTRAY」を読んだことがない。だが、彼女が取っていた対抗手段は、押し寄せる絶望に抗う解答は、奇しくもそれと全く同じものであった。

照射ビームを受け止める衝撃に、コメットコアガンダムの関節が軋み、その擬似感覚がコックピットのアイカへとフィードバックされ、操縦桿を握る手を離してしまいそうになる。

だが、負けられない。

エリーの反応も、チイの反応も、アキノの反応もロストした。そうなれば、生き残りは自分だけということだ。

そして、エリーが最後に教えてくれたことが、自分の命をまだこの漆黒の宇宙へと繋ぎ止めているのなら。

「負けられないのは……あたしも同じだあっ！」

歯を食いしばり、アイカは咆哮する。

負けられない。それが何のためになるのかはわからない。

だけど、誰にその勝利を捧げたいかだけは、その物語は脳裏に描いている。

はらはらと涙をこぼし、教室の片隅で常に過去からの侵略に、消え

ることのない傷が生み出す幻影に苦しみ続けている絵理がいる。

自分が自分であることにさえ絶望して、保健室で一日中泣きじやくりながら「ごめんなさい」と繰り返していた絵理がいる。

それでも、ビルドボルグが、いくつもの縁を鎚として鍛え上げられたこの剣が手繰り寄せた勝利を掴んだ時、このGBNで「エリイ」は確かに笑っていた。

——だったら。

果たして閃光の矢が駆け抜けたその後に、残っていたものは。

「エリイちゃんのために……死ねええええっ！」

『な、なんだよ!? エリイって誰……うわあああっ!』

ビルドカッターの刃を融解させ、頭部と両足は脱落しながらも、コックピットと両手を残したコメットコアガンダムが、咆哮と共にロングレンジ・ビームキャノン以外の装備を持たないウツキースのジム・キャノンIIへと肉薄する。

メインカメラは潰された。サブカメラもほとんど機能していない。それでもーあのハードコアディメンション・ヴァルガで味わわされた地獄は、その射線から狙撃手の位置を割り出すという術を闘争における本能として、確かにアイカへと刻み付けていた。

ビルドボルグは、カレトヴルツフが持っていた銃としての運用を捨てた武装だ。

だが、それは完全に機能を潰してしまったというわけではなかった。

エリイが、絵理が閃いた、ビームトーチの基部をそのグリップとして転用するというアイデアは、偶然でこそあるが、トリガー機能を持つものをグリップにするという意味ではカレトヴルツフとその根幹を同じくしている。

そしてそれは、アイカがグリップの差し替えをオミットしたものの刃を組み替えてマウントするという道を選んだことで、カレトヴルツフが元々持っていた性質を中途半端に残してしまったことで、活用するには極めて角度を限定することになるものの、コアユニットからビームを出力させる機能もまた生き残っていた、ということに他なら

なかった。

アイカは剣を突き出すように向けたビルドボルグのトリガーを手当たり次第に引いて、恐らく空間戦闘に不慣れであることと長大な砲身が邪魔をしているのか、もたもたと身を振ることしかできないウツキースの機体からその関節を、武装を剥奪していく。

そして、そうこうしている内に損傷したジム・キャノンIIのコックピットへと、ゼロ距離まで飛び込んだコメットコアガンダムが構えていたビルドボルグのコアユニットが突き付けられ、無慈悲に殺意を込めてその引き金をアイカは引くのだった。

【Battle Ended!】

【Winner:リビルドガールズ】

ダイアログが見せる勝利の通知。限界を超えて出力が注がれていたことで、耐久値がゼロになったことで爆発したビルドボルグは、最早グリップしか手元に残っていない。

それでも、それはアイカが、アイカとエリイの危うくも脆く、このGBNという仮想の海で再構築された絆が、勝利を手にしたことの証明に他ならなかった。

仮想の身体が解けて、意識と共にロビーへと再構成されていく僅かな間、ノイズだらけのモニターから垣間見える架空の宇宙^{ソラ}、その中に浮かぶ青く美しい水の星へと手を伸ばしながら、アイカはその光景を焼き付けるかのように、ゆっくりと目蓋を閉じていくのだった。

「いやあ、お見事でした。負けちゃいましたけど……GGです」

「あはは……こつちこそグッドゲーム、お役に立てたなら嬉しいですっ☆」

さつきまでは互いに殺意を交えて戦い続けていたダイバーも、試合が終わればノーサイドの精神で握手を交わしてお互いの健闘を称え合う。

GBNによく見られる光景に倣って、アイカはハマモリから差し出された手を握って、かけられたその言葉へ惜しみない称賛で応える。

実際、どちらが負けてもおかしくはなかった。

ハマモリが味方を見捨てなかったというのは戦術上のミスだったのかもしれない。だが、彼はそのミスを認めた上でも尚諦めずに、今は朗らかに笑っているアイカを、どこか怯えたような目で見つめている、サンングラスをかけたフライトジャケット姿の青年——砲手として残っていたウツキースが握ることを把握し、彼にその勝利を託すというクレバーさでそのリカバリーを見事に凶っていた。

もしもビルドボルグを持っていなければ、負けていたのはアイカたちの方だっただろう。

確かにアイカたちは勝利した。ビルドボルグはその決め手となった。

だがそれは、ハマモリのように計算によって生み出したものではない。

様々な偶然が重なったことで、紙一重でこぼれ落ちてきたワンチャンスを掴み取っただけなのだから。

そういう意味では、ハマモリという男は、ダイバーとしては勿論、リーダーとしても自分より格上で、その戦いにおいて自分は負けたのだろうと、アイカは苦笑する。

「リプレイモニターで見ていたぞ、ハマモリ……負けこそしたが、お前はよくやった」

「ナンブさん……」

「……悪かったなハマモリ、俺がカツとならなきやあこの試合、勝てたもんだった」

「いえ、チャップピーさん。自分も未熟でした。まだまだリーダーとしてオムツは取れそうにないですが……これからもよろしくお願いします」

「へっ、言われるまでもねえ、お前も俺を上手く使えよ」

絆を確かめ合うその光景はきつと何物にも代え難い慶なのだろう。アイカとエリイはきらきらと輝く憧憬を、チイはなにかを考え込むような視線を、そしてアキノはちくりと心臓に針が突き立てられたような切なさを、互いにながちりと握手を交わしたハマモリとチャップピーへと向けていた。

「あー……感動の場面で悪いんですがね、旦那？」

「えつと……チハヤさん、じやなかった、チイさん？ あれ、でもダイバーネームはチハヤだし、どっちで……」

「チイでいいよ、てか次チハヤって呼んだらチイはキレっからね……つと、それはさておきハマモリの旦那。払うもん払ってもらいましよつか？」

——うわあ。

ここにいる誰もが、口にごそ出さなかったがそう思っていただろう。

端的に換言すればドン引きだ。にこやかな笑顔を浮かべ、右手の人差し指と親指で輪っかを作るチイに、アイカとエリイは露骨に目を丸くして、アキノはやれやれとばかりに頭を抱えて、そして「名機アルビオン」の屈強な男たちも、思わず後ずさっていた。

「クソガキ、てめえ面の皮ナノラミネートアーマーかよ!? どうして今の流れで金の話になるんだよ!？」

「誰がクソガキだヒゲオヤジ、ああん？ 元々そーゆー約束でチイたちはアイカの決定に従った上で、そしてあんたんとこのリーダーのハマモリと、オブザーバーのナンブの旦那に許可ももらった上で試合やっていたんだよ、それがグッドゲームだろうがバッドゲームだろうが終わったら契約破棄してとんずらしますってんなら面の皮VPS装甲なのはどっちだ？ んなこともわかんねえのかてめーは？」

「いやチイちゃん、さらつとあたしを巻き込もうとしないで……」

「その通りですチイ、貴女はどうも報酬が絡むと血の気が多すぎる……すみません、アイカさん。チャツピーさん」

完全にチンピラ同士の喧嘩といった風情で金銭を要求し、一触即発の雰囲気を漂わせていたチイだったが、とうとう痺れを切らして溜息をついたアイカの表情を不憫に思っただか、アキノに頭を掴まれてずると引きずられていく。

「はっはっは！ 何、構わん。元々そういう約束だったのは確かだ。それを破るのもらしくないだろうよ」

孫のいたずらを見守る祖父のような目でアキノに引きずられてい

くチイを見守りながら豪快に笑って、ナンブは報酬金譲渡の項目から約束通りの十万BCを、フォース「名機アルビオン」からという形でフォース「リビルドガールズ」の共有財産へと振り込んだ。

「うちのメンバーがすみません、ナンブさん……」

「何、リアルじゃ俺にも娘がいるからな、将来迎えるかもしれないやんちや盛りだと思えば可愛いもんさ、それに」

「それに？」

「最後に……いいもんを見せてもらった。これで俺も……心置きなく老兵としてGBNを去っていけるってもんだ」

ふっ、と、ニヒルに笑ったナンブの瞳に、後悔の欠片がなかったかと問われれば、その答えに代えてアイカは首を横に振るだろう。

ナンブがどんな事情を抱えて、どんな思いで自身がきつと愛していたフォースとこの世界をさっっていくのかはわからない。そしてそれは、踏み込んではいけないことなのだ。とアイカにも理解できる。

「ハマモリも見込み以上にやってけそうだ……負けるなっわけじゃあないが、立派なリーダーになれよ、お嬢ちゃん」

最後に、フォース「名機アルビオン」からの脱退申請をコンソールから選択し、涙を呑んでそれを承認したハマモリたちの敬礼に見送られて、ナンブの姿は現実世界へと解けて消えていく。

彼がアカウントを残すのかどうかはわからない。だけど、きつとこれだけ盛大に見送られるような人間が、潔くチイの条件を受け入れたような人間が、また二日、三日と経った後にしれつとこの電子の海へと戻ってくる姿は、アイカには想像できない。

アキノからお説教を受けているチイと、そして自身の半歩後ろに立ってナンブの別れを見送っていたエリイへ交互に視線を向けて、アイカは自身の中で生まれていた、どこかもやもやとしたような、血管を小さく針で突かれたような痛みを自覚しながら、そのままログアウトを選択する。

だが、意識が解けて現実へと引つ張られていく間に考えても、その感情の名前は、見つけられなかった。

「ねえ、絵理」

すっかり夜の帳が降りた街で、閉店時間を迎えたガンダムベース
シーサイド店を後にした愛香と絵理は、いつも通りに駅までの家路を
共にしていた。

自身の右腕に左腕を絡めて白杖を突く絵理に、愛香は眉根に深くし
わを刻みながら、静かに語りかける。

「……愛香さん……？」

「ナンブさん、幸せだったのかな」

出会えばあれば、いつかはそこに裏返しになる別れが訪れる。

自身のスマートフォンにインストールされたメッセージアプリに
残された、中学校時代の同級生の名前と、そして去年から更新されて
いないメッセージログを思い返ししながら、愛香は絵理に問いかける。

「……え、えっと……その……あの……」

「うん、続けて？」

「……あの……き、きつと……きつと、そうなのかな、つて……」

しどろもどろに、一語一語が間違っていないかどうかを確認しなが
ら言葉を発するような絵理だったが、そこにある答えは決してあやふ
やで、曖昧なものではなかった。

「……そっか、ありがと」

「いえ……わたしなんかの答えが……お役に、立つなら……」

絵理は、もじもじと顔を赤らめて俯いてしまう。

まだ、きつとあの電子の海のように笑うことはできないのかもしれ
ない。そして自分たちが前に向けて歩くごとに、それはいつか来るお
別れに向けてのカウントダウンを一つ減らしていることに等しいの
かもしれない。

それでも、あの電子の海と別れたナンブが、自身の愛していた
フォースとその後継者を残したように。

——あたしも、何かを残せるのかな。

あやふやで、曖昧で。今も絶え間なく前へ前へと凄まじいスピード
で進んでいく世界に押し流されるかのように、この世界でも、あの世
界でも、愛香は、アイカはその中を漂っている一雫の塵に等しいのか

もしれない。

それでも、積もった先に何かがあると、そう信じたい。

そして願わくば、それがイーエリイの、絵理の痛みに少しでも触れて、寄り添ってあげることのできるものならばいいと、理由こそ判然としないものの、確かにこの眠らない街とそれを見下ろす月明かりの下で、愛香はそう、強く願うのだった。

第十六話 「休暇はもう楽しんだでしょうくビギニング お嬢様！」

英雄とは何か。

古来、様々な戦場において武勲を挙げた存在を人々はその呼び名で称え、憧れ、時にはその本質から目を背かせる存在だと忌み嫌ってきた。

その問いに対する答えは明確には存在していない。ならば、英雄の存在とその条件を問い続けることは無意味なのか？ 無価値なのか？

否、断じて否だ。人が人であり続ける限り存在する多様性が答えを一つに収斂させようとするのを阻害したとしても、人はそこに、戦いがあったことも含めて向き合い続けなければならない。

しかしそんな人類における永遠の課題は横に置いておくとしても、この仮想の海に浮かんだテクスチャの世界、最早現実にはさえその影響力は滲み出してきた第四世界——GBNにおいて、英雄というのは概ね二千万人という膨大なアクティブユーザーの中で、その実力を番付として張り出したランキングの上位に位置する存在を意味することに違いはない。

例えばあの不動のチャンプ、決して相手に勝ち筋を与えず、負け筋を全て潰して勝利を手にするという、あらゆるダイバーが理想としながらも決して実現することのできないそれを八割から九割の割合で実践して、サービス開始以来その頂点を維持し続けているクジヨウ・キョウヤは、ダイバーたちが満場一致で認める英雄だろう。

だが、英雄であることは、決してアグニカであることとイコールではない。

デイメンション・シユバルツバルト——四季のない電子世界に現実の暦をプログラムとして組み込むことである程度その恵みを再現するデイメンションも数多い中で、永遠の夜と、その葉を豊かに湛えて鬱蒼と茂ってこそいるものの、色は夜のそれと同じくする木々が形成

する樹海に閉ざされた、中二病御用達区域の二つ名で呼ばれるデイメンションの一つだ。

そんな場所にひっそりと自身のフォースネストを構えた女性ダイバー、「アリア」は、自身の金髪ツインテールを指先で弄び、コンソールから呼び出したG—Tubeの画面に表示される動画を眺めながら、エナジードリンクが注がれたティーカップを優雅にその口元へと運んで物憂げに目を伏せる。

ダイバーとして、チャンピオンへのリスペクトをする心はある。

当たり前だろう。二千万人の頂点に君臨し続けるというのが、一体どれほどの実力を必要とするのかなど、このゲームを長くやっていれば嫌でも思い知らされる。

その上、必要なのはファイターとしての戦闘スキルだけでなく、ビルダーとしても狂ったレベルで自らのガンプラを、1/144というスケールに縮小こそするものの「本物」として作り込まなければいけないというハードルの高さは、クソデカ羅生門もかくやという勢いで天へと聳え立つものなのだ。

はつきり言ってしまうえば、ビルダーとファイター、双方の実力を兼ね備えた上でランキングの二桁以上に載っている面々は少なからず狂っている。

だが、狂気の沙汰こそ愉悦と紙一重。それは、アリアも認めるところだし、なんなら彼女もカテゴライズとしては狂人の二文字に分類されるような人種であることに違いはない。

それはさておくとしても、チャンピオンは英雄でこそあっても、「アグニカではない」というのが、アリアから彼へ向ける所感であった。

戯れに右手の指先をG—Tubeの新作おすすめ欄にスワイプさせながら、己の求める「アグニカ」を探すために、アリアは高速でスクロールするサムネイルの文字を判読する。

では、アグニカとは何か？

その答えは決まっている。

「セバスチャン」

「はい、お嬢様。それと僕はセバスチャンという名前ではありません」

セバスチャンと呼んだ少年、ダイバーネーム「ミツルギ」ヘエナジードリンクのおかわりを要求しつつ、目星をつけた動画を再生しながらアリアは懸想に耽る。

アグニカとは、アグニカ・カイエルの魂とは、逆境においてこそ輝く不屈の闘志と信念、そして純粋な力のみが見せつける真実の世界へと誘う輝きであることに他ならない。

原型機が何なのかわからないほどに改造を施された、辛うじてパーツの輪郭からディビニダドやMGEXユニコーンガンダムを使っているのだとわかる「怪物」に、画面の中ではかつて自身が喧嘩を売ったらアグニカ的にはまずあじ極まりない塩試合で完封された仇敵ーハードディメンション・ヴァルガに関する雑談スレの中でFOEさんのあだ名で呼ばれている個人ランク39位のダイバーが戦いを挑んでいる光景が、動画の中には映し出されている。

「あら……わたくし相手には随分と塩な試合をしてくれやがりましたのにこのFOE、中々アグニカみを感じる戦いを魅せてくれますわね」

「なんですかアグニカみのある戦いって、日本語喋ってくださいお嬢様」

「やかましいですわセバスチャン!!! アグニカはアグニカ、わたくしの敬愛するマクギリス・ファリド准将が示したように、逆境にその身を置いてこそ尚希望を失わず、己の荒れ狂う力で世界に対して真実を示す約千六百万八十色の輝きであることに他なりませんことよゲツホゲホツゲホツ!!!」

「お嬢様あああつ!!!」

思わず興奮して長広舌をぶちまけたことでむせ返ってしまったが、要するにアグニカみのある戦い、アリアが求めてやまないその戦いは、近接格闘機相手なら遠距離兵装を駆使して近付かせないことで完封する、というセオリーを完遂するような教科書通り、百点満点の戦いではなく、その例を取るのであれば、敢えて相手の得意な間合いで戦いを挑んだ上で「格闘に特化した機体を格闘で破壊する」という、セオリーを重視して戦う人間が正気を疑うような戦いをこそ指してい

うのだ。

かのメイジン・カワグチがその信条としているように、ベストの状態の相手と、そのベストな状態を發揮できる戦いで圧倒できてこそ真の勝利。

ただ単に遠距離から無線兵器を使って格闘機を完封したところでそれは確かに褒められるべき戦いかもしいないが、「アグニカ的」な戦いでは断じてない。

では、ただ一見無謀にも見えるセオリーへの逆張りこそがアグニカ・カイエルの魂なのかと訊かれれば、その答えはノーだ。

仮にそう答えるやつがいたならアリアはすぐに飛んでいって白手袋をその眼前でためらいなく叩きつけることだろう。

画面の中では「怪物」が誇る圧倒的な手数に押されながらも、F O Eさんの操るクアンタの改造機が、自身の背後から接近するフェザー・ファンネルを、槍として使っていた武装を二本の剣に分割することで振り向くことなく叩き落とし、更に「置かれた」攻撃であるメガ粒子砲の照射を読んで、敢えて正面に展開された第二のフェザー・ファンネルの中へと飛び込んでいく姿がある。

そう。これはアグニカ・カイエルの魂に溢れた行為だ。

アリアは思わず胸の奥が温かく、柔らかな綿で甘く締め付けられるような恍惚を覚える。

「死中に活を見出だし、白亜の龍を叩き落とさんとする二刀流の白きクアンタ……ああ……憎い、憎いですわ、アラームが iPhone の着信音になる呪いをかけたいくらいに恨めしいド畜生だというのに、どうしてわたくしの胸を恋に焦がらせるような、アグニカみのある行いをされるのでして……?」

「恋するのか呪いかけるのかどっちなんですかお嬢様」

「お黙りなさいセバスチャン、恋とは呪い、愛もまた憎しみ、裏を返せば呪いと憎しみは恋と愛、わたくしの焦がれてやまないアグニカへ、そして愛してやまないマクギリス・ファリド准将がわかっていて尚己の信念と憎しみに身を投じた心へと近づくものなのでゲツホゲホツツ!!!」

「すみませんでしたお嬢様、僕が悪かったので頼むからそれ以上喋らないでください」

まったく、何度も語っているのにセバスチャンはわかっていない。アグニカ・カイエルの魂……そしてその魂を手にしたマクギリス・フアリド准将がいかに気高く、孤高で、アグニカの遺志を継ぐにふさわしい、魂を手にした男であると、アリアは何度も、それこそ寝る間も惜しんで力説してきたというのに、暖簾に腕押し、糠に釘なのだから。

むせ返った気管の調子を整えるために仮想のエナジードリンクを舌に乗せて転がしつつ、アリアはいよいよクライマックスに近付いた戦いの様子を刮目して見んと、ミツルギに指摘されたようにきつく唇を引き結んで画面を注視する。

逆境。個人ランク39位という間違いなくこの世界の頂点に近い存在だというのに、あの白亜の巨龍、ジャバウォックの怪物の前ではかのFOEさんが振るう剣ですら、ヴォーパル・ブレードにはなり得ない。

アリアにまだその世界は程遠いのかも知れない。

だがきつと、FOEさんもまた、徒にあの猿山で災厄をばら撒き続けているのではなく、その逆境を打ち破って自らをアグニカ・カイエルの魂、その座へと導くために聳え立つために、己という剣を鍛え上げるためにこそ四方八方からの弾幕砲火が出迎える空を飛翔しているのだろう。

あれほどの頂に達しても、まだ壁がある。

その事実の、どれほど素晴らしいことか？

そして、その壁を撃ち破らんと、野に解き放たれた牙を持つ獣の如く闘争本能を剥き出しにして叫ぶダイバーの姿が、どれほど美しいことか？

更に、更に、更に。

「このわたくしには、打ち破るべき壁がまだ存在している……それは即ちそれを乗り越えた先にある輝かしい未来を保証してくれているも同然ゲツホゲホツツツ!!!」

「お嬢様あああつ!!!」

だから喋るなって言ったじゃないですかとばかりに、むせ返りながら盛大にエナジードリンクを噴き出したアリアの背中を、ミツルギが優しくさする。

動画に記録された戦いの決着といえはだが、残念なことにクアンタが携えていた剣は巨龍の翼をもぎ取って、その腕を切り裂きながらも、とうとうその喉元に、拍動する爆心に突き立てられることはなかった。

新たにバインダーへと増設されたブレイドファンネルと、バインダーを接続している自律支援機兼大型コンデンサーが形成するパワーゲートを通った全力の突撃を、あの巨体で見切っていたのは巨龍を操る主が、ランキングの中でFOEさんよりも上位に位置する実力と経験が故だろう。

生きている限り負けではない。要するに、死ななきや安い。

巨龍は確かにヴォーパル・ブレードならぬ「クアンタムストライク」なる必殺技で致命の傷をその身に受けた。

だが、HPが例え一メモリでも残っていれば、逆転の可能性などどこからでも導き出せるのがGBNだ。

多くの剣と無数のソードビットを自在に操るのも全ては相手に致命の一撃を叩き込むためとばかりに、逆境に置かれながらも決して心を乱すことなく千変万化の戦いを見せたFOEさんのアグニカ・カイエルの魂に溢れた健闘は、大いに讃えられるべきだろう。

だがーそれでも尚、敗れたのは「最上位の壁」たる所以。

全てのエネルギーを使い果たした勇者へと、巨龍は無情にその大爪を振り下ろす。

しかし、勇者は決して膝をつかなかった。堂々と仁王立ちの姿勢を維持したまま、恋人と抱擁するが如く仮想の死を受け入れてー電子の海に、その機体を散らすのだった。

ああ、なんと。

なんと無情なことか。しかしそのなんと、アグニカ・カイエルの魂に溢れていることか！

瞑目し、呪いたいほど憎く愛しい仇敵……一方的に付けた因縁だが、アリアの無念を想って、アリアは涙をこぼしながら動画を閉じる。

「ああ、セバスチャン……世界はかくも遠く、そして無情に溢れていましてよ、そのなんと残酷なこと」

「ええ、そうですね……わかりましたから興奮しないでくださいよお嬢様」

「何を言っているらして、セバスチャン？ 素晴らしきアグニカ・カイエルの魂を見届けた今のわたくしの心は、湖面のように凪いで……？」

アリアが動画を閉じたことで、G-Tubeの画面がデフォルトのトップ画面に切り替わった、その瞬間だった。

『まだだ、ウツキイイイス！』

ユニコーンガンダムの改造機と思しき機体はそのコックピットに大剣を突き立てられながらも、爆散するまでの僅かな間に、なんだかオーバーヒートになるまで格闘を延々と振っていきそうな名前を呼ぶ。

それに応えて、彼方から飛来する閃光が、改造機……ユニコーンガンダム・フルバーニアンの胸に剣を突き立てていた小柄な機体と、それぞれに力を使い果たし、その周囲を漂う仲間たちを飲み込まんと押し寄せてくる。

新着リプレイをランダムで再生する機能が映し出した戦闘記録だった。

ただそれを一瞥しただけのアリアとしてはそこに何の感慨が湧くわけでもない。試合は恐らくあの閃光にまともて飲み込まれる形で、小さなガンダムが撃破されて決するのだろう。

遠距離砲撃による一方的な蹂躪など、全くアグニカ的な行いではない——降り注ぐ鉄杭、ダインスレイヴの雨を思い返しながら、アリアはG-Tubeを閉じようとした。

アリアが。

『……アイカさんっ！』

『……っ、エリイちゃん！』

ユニコーンガンダム・フルバーニアンのコックピットに大剣を突き

立っていた機体はその先端を破却すると、爆発寸前のユニコーンを両足で真下に押し除けて、押し寄せる波濤に対して先端を失ったその剣を真つ直ぐに構えた。

——今、なんと言った？

ウインドウを閉じようとしたアリアの手が止まる。

そして見間違いでなければ、突き刺さった先端をそのままパージできる武装は限られているし、押し寄せる光の波に向けられた切っ先の形状は、間違いなくいくつか浮かんだ候補の中で一つしか該当しない。

カレトヴルツフ。そして、微かに聞こえた「アイカ」という名前。それはきつと、何かの偶然だったのだろう。

接点を結ぶことのない二つの言葉だが、アリアの記憶の引き出しに眠るその言葉たちは奇妙な繋がりのようなものを確かに保持している。

そして。

小さなガンダムは、果たしてその頭部と両足を失いながらも、照射ビームからコックピットと推進器を無事に守り通していた。

無謀な賭けだ。大多数のプレイヤーであれば、対ビームコーティングが施されているとはいえ剣でビームを受け止める、という無謀な発想にはまず至らないだろう。

細かな改良が加えられてこそいるものの、カレトヴルツフの面影を色濃く残したその武装に装備されたビルドナイフの切っ先は、光の奔流を受け止めきったことで、溶け落ちてしまっている。

普通のダイバーならば諦めている。

両手と推進器だけが残った機体で何ができるのか。せいぜい数秒、己の命を生きながらえさせるぐらいだろう。

だが、アイカと呼ばれた少女は、この絶望的な状況下においても諦めてなどいなかった。

『エリイちゃんのために……死ねええええっ！』

ウツキースなるダイバーがどんな装備をしているかなど、恐らくアイカは把握していなかっただろう。

だが、逆境の中で己の中に生まれた純粹なる力こそが生み出す衝動は、絶望の中にこそ確かに勝利を見出していた。

——これだ。

ぞくり、と、アリアの背筋が粟立って、押し寄せる興奮に身体が震える。

チャンピオンは英雄でこそあるが、アグニカではない。

ならば、その対極——完璧なる頂点という逆境に対して決して諦めることなく抗って、己の牙をその喉元に突きつけて食い破ったのは誰か。

答えは、「ビルドダイバーズのリク」だ。

あの日、病室の中で茫洋と、自身のスマートフォンで有料の公式チャンネルから配信される「鉄血のオルフェンズ」二期を見返しながら、マクギリスが決してなし得ることのなかった願いに涙をこぼし、自分も決して運命に争うことはできずに滅んでいく存在なのだと、アグニカ・カイエルの魂などこの世界に存在しないのだと絶望していた時に、病院の壁にかかったディスプレイに映し出されたのは、第二次有志連合戦の映像だった。

完璧な攻撃で決して得意距離であるクロスレンジにリクが操る「ダブルオー اسکイ」を、オーガが操る「GP―羅刹」を寄せ付けず、クロスレンジに飛び込んだとしてもスカイブレイザーによる攻撃を読み切ってFファンネルで潰す、という選択肢を冷静に突きつけたチャンピオンに対して、それでもリクは諦めなかった。

そしてとうとうオーガと共同で放った必殺技は、不敗のチャンプがカウンターとして放った必殺の剣の矛先を逸らして、喉笛を噛みちぎったのだ。

——アグニカ・カイエルの魂はここにあった。

その時、アリアは——桜宮凜音は確信した。確かにこの世界で、自分は宙を舞うひとひらの塵にすぎないのかもしれない。

父親は病弱な自分をとうに見捨てて、事業の後継者には自身の腹心たる部下を据えることを決めていた。

そんな父が株を持っているゲームなど断じてやりたくはないと、大

好きな「鉄血のオルフェンズ」の世界にこもりながら、凜音はそこに描かれた絶望に祈りの涙を流す日々ばかりを送っていた。

だが、それはもう終わりだ。

マクギリス・フアリドが叶えられなかった夢は、万人がガンプラを組み立てればそのスタートラインに立つことができる電子の海で、この桜宮凜音が——いや、その弱い名前などもういらぬ。

アルミリア。恐れ多いかもしれないが、マクギリスが最期まで敬愛していた、そしてその死後も戦犯となった夫を決して見捨てることはなく、罪を背負うとわかつていてもその伴侶であり続ける道を選んだ幼き妻から名前を頂こう。

そして、桜宮凜音は、ダイバー「アリア」として、仮想にして理想の世界へと飛翔するためのG線上に立ったのだ。

奇しくも、「アイカ」が見せつけた敢闘は、逆境の中でもぎ取った勝利はアリアに己の思い出と、その原点をオーバーラップさせていた。

「…………お嬢様?」

「…………ミツルギ、確かあのフォースは…………リビルドガールズと、そう言っておりますわね」

「はい、確かに聞きました」

リビルドガールズ。アリアは口には出さず、脳裏で何度もその単語を、刻み付けるように繰り返し返す。

カレトヴルツフを改造した剣を振るうその「アイカ」というダイバーが、以前戯れにガンダムベースを訪れた時、叶う見込みもない曖昧な再会を約束した人物が、電子の海を泳ぐ姿なのかどうかはわからない。

だが、そんなことは関係ない。彼女がああ、カレトヴルツフを託した少女であるか否かをこの世界で問うことは無粋。

彼女は、アグニカだ。

それだけで、アリアにとっては十分だった。

「ふふ…………生きていて良かったと思うことが、こうも…………こうも、己の生に絶望しきったその後には待ち受けていようとは…………」

しかもそのどちらも、GBNという仮想の世界がもたらしてくれた

絵理は極端な弱視で、包帯と、そして誰にも見せていないがその下にある眼帯に覆われた右眼は完全に失明し、左眼も板書がギリギリ見えるか見えないか、見えていたとしてもほとんど文字の輪郭だけという状態であるため、聴覚でそれを補っているものの、触覚に頼っている部分も非常に大きい。

「……ご、ごめんなさい……わたし、わた、し……」

「ごめんじゃなくていいよ。絵理は悪くないんだからさ」

まるで罪深い行いをしているように、その懺悔をするように左眼から涙をこぼしながら、絵理は愛香の許しを得て触れられたその輪郭を、ゆつくりと、ゆつくりと指先でなぞっていく。

優しい、優しい顔だった。

今も、こんなに近くにいるのに目が映し出してくれるのはぼやけた輪郭ばかりで、それがどうにも寂しくて仕方なかったけれど。

絵理は、GBNという仮想の海で見た「アイカ」のそれではなく、初めて触れる「愛香」の温かさに、痛みに溢れる無色透明な血液ではなく、ずっと忘れていた、涙を溢し続ける。

きつとこれも、今も前は前へと押し流されていく時間の中で、何かはどこかで進んだのか、それとも、自分から前に進んだのか。

まだその答えは愛香には見えない。だが、「ごめんなさい」ではなく、「ありがとう」を繰り返しながらぺたぺたと、自身の顔に触れている絵理の姿に、どこか胸の奥に熱が込み上げてくるのを感じる。

そうして愛香はまた午後の授業をサボって、絵理が満足するまで、そして今浮き出てきた心の膿を洗い流し終えるまで、されるがままに触れられているのだった。

かのお嬢様とびつきりやべーやっに目をつけられていたとは、露とも知らずに。

第十七話 「魂を手にした女」ガンプラの民は修羅の民」

あなたは何のためにゲームをしますか。

そんな問いに対する回答が多かれ少なかれ「自分が気持ち良くなるため」に収束するとしても、その「気持ち良くなる」ものが何であるのかは千差万別だ。

曰く、誰もがダイブ用のヘッドギアを叩きつけて破壊したくなるようなゲームをこそ憎み、苦しみながらも踏破することでその復讐と愛を証明することをその回答にする者がいる。

また曰く、仮想の世界であれば自分は平凡な人間から世界を救う勇者になれることを、かつてコントローラを握りしめて夢中でプレイしていたゲームのフルダイブリメイクによって、その世界に文字通り入り込めることをその回答にする者がいる。

GBNは変わった。

ロビーの中心に設置されているライブモニターには、「機動戦士ガンダムSEED DESTINY」の中でラクス・クラインーその影武者であるミア・キャンベルが歌い上げていた、劇中歌のアップテンポアレンジを、今日もダイバーネーム「ノゾミ」たちが率いるバーチャルアイドルユニット、「アルス・ノヴァ」が歌い、踊る映像が浮かんでいる。

GTubeをある程度探し回れば、有名配信者であるキャプテン・ジオンがそうしていたように、第二次有志連合戦以降、大人の事情その他諸々が絡んだことで増設されたサーバー群を中心に生まれた、未知なるディメンションの探訪——戦いではなく、仮想の海に浮かべられたその景色をこそ視聴者に見せつける映像がある。

或いは、不動のチャンピオン、クジヨウ・キヨウヤもそうしていたように自身の持っているモデリング技術を伝授すべく製作講座を開く者も、それこそ何気なく、ガンプラに乗らずによく知られたディメンションの中でフレンドたちと駄弁っている姿を思い出として記録

する者もいる。

だが、あえてこのGBNに限って先述した、「何のためにGBNをしているのか？」という問いかけを無作為にダイバーたちへと問いかけたなら、有名無名を問わずして、およそ八割ほどの人間がこう答えるだろう。

——強くなりたいから。

ガン普拉バトルを俺が、僕が、私が、あたしが一番上手いんだと証明してやりたいから。自分の作ったガン普拉が、この世界で一番格好いい、可愛い、クールであると証明したいから。

忘れがちではあるが、GBNは基本的に強いんだ星人、負けず嫌いにしてクソゲーと罵りながらも己を省みて次の勝利を手にすべく貪欲に機体の整備、改良に励むような、そこにバトルが絡まなくとも聖地・ペリシアと呼ばれるガン普拉を展示するための非戦闘区域でも一番の注目を集めるべく退屈なヤスリがけに惜しみなく時間を費やす、狂人もとい修羅の民の巣窟である。

確かに、その辺の電気屋で買って爪切りだけで組み立てたプチツガイを一応ログインのためにスキャンし、友人たちと戦いではなく放課後の延長線上にある時間としてGBNを満喫する新たな層も増えてきた。

それはもしかするなら、「ビルドダイバーズのリック」が語ったように、「好き」の形を誰もが否定することなく「好き」だけをぶつけ合ってきた結果として生まれた一つの奇跡だったのかもしれない。

しかし、それで旧来、果てはGPDの時代がその幕を閉じた時、それと運命を共にするのではなく、電子の海に新たな戦いの場所を求めた古豪たち、そして「ビルドダイバーズのリック」が見せた、不可能と呼ばれていたジャイアントキリングの実現に心打たれて新たに飛び込んできた修羅候補生の心根が変わるはずはない。

そう、今まさに、放課後の延長線上としてロビーで適当なミッシュンを受けようとしていたアイカたちの前に立ちはだかってきた、高笑いをあげながら盛大にむせかえっている女性狂人の振る舞いは、典型的な強いんだ星人のそれであった。

「ゲホツゲホツ……失礼、貴女たちが、フォーヌ『リビルドガールズ』で間違いありませんわね？」

同じ金髪であるアキノと比較しても赤みが濃い、ストロベリーブロンドと呼ばれるそれを見事なツインテールに結え、「鉄血のオルフェンズ」に登場するキラクターである「アルミリア・ボードウィン」が着ていた服装をその、エリイとアキノにも勝るとも劣らない豊満な身体つきに合わせる形でアレンジした衣装に身を包んでいる女性―ダイバーネーム「アリア」は、燕尾服を着た青髪の少年―ダイバーネーム「ミツルギ」に背中を摩られながら、いきなりの高笑いと共に登場したのにドン引きしていたアイカたちへ問いかける。

（こいつ、胸に栄養吸われてるか頭のネジが二、三本足りてねえんじやねーのか？）

（やめなさい、チイ）

（うおお、いってえ!?!）

いつものように小言をぼそりと呟いたチイの頭を小突きつつ、アキノがそれを小突いて静止する。

ちらりと横目でその様子を伺って苦笑するアイカはぎこちない動きで正面に視線を戻せば、ひゅうひゅうと乱れた呼吸を整えながら、何事もなかったかのように背筋をピンと伸ばすアリアの姿があった。

（聞こえてないのか気にしてないのか……いやあたしとしては前者であってほしいんだけど……）

どっちにしろ、チイの小言の前半はスルーしておくとしても、変なのに絡まれた、というのはアイカに限らず、その背中に隠れているエリイも、頭を抱えてうずくまるチイも、呆れたように溜息を吐いているアキノも同意するところだ。

いや、忘れていた。

ハマモリと彼が率いる「名機アルビオン」との戦いからしばらくして、大破一つに撃墜が三つという有様であった「リビルドガールズ」のガンプラがゲーム内で完全修復されるまで、チイが何をしていたのかはわからないが、少なくともアイカとエリイ、そしてアキノは採集ミッションを受けたりロビー外の街区を散歩したりと平和なGBN

ライフを謳歌していたのは確かだった。

そこで出会う人々も、戦いに赴く前の戦士、といった雰囲気のパバーこそ少なくなかったが、朗らかに会話を交わした同じ年頃と思しきダイバーたちの言葉にはガンプラバトルのガの字も含まれていなかったし、そもそも自分はこういうGBNに憧れていたんだっけ、とアイカが初心に戻るかのごとく感慨に耽っていたことを思い出す。

だが、それがGBNのライトサイド、「光」の側面であるとするなら、それが強まれば強まるほど「影」たる修羅はその眼光を、闇を鋭くすることを忘れてしまっていたのだ。

モヒカンとこの女性を同一視するのは失礼にも程があるからやめておくとしても、なんだかしんみりした雰囲気になっていたのと彼が折り目正しいせいで誤魔化されていたが、ハマモリもまた初手でビーム・マグナムを挨拶がわりにする程度にはGBNの民だ。

それが標準的なダイバーの姿だったのだ。
安穩に身を置いて、緩み切っていたアイカに、この女性の高笑いはそれを思い出させるのに十分だった。

だが、それはすぐに思い上がりであったと、アイカは知ることになる。

「アリアさん……ですよね？　一応あたしたちは『リビルドガールズ』ですけど……何かご用ですか？」

一応訊いてはみたものの、相手がフォースの名前を尋ねるときはガンプラバトルの申し込みだと相場が決まっている。

それかもしくは運営のブラックリスト入りしている相手を通報してGBN―ガードフレームへと突き出す時ぐらいだろう。

「チィ、また何かやったのですか？」

「やってねえよ!!　つーかチィは確かに金が欲しいけど運営に目えつけられるようなこととしてまでじゃねーし！」

「……………」

「あん、何さエリィ」

「……………あ、いえ、なんでも……………ないです……………ごめんなさい……………」

「な？　チィは悪くねえだろ？」

明らかにエリイの向けた視線は「どの辺りが？」とでも言いたげだったが、確かに事実としてチイは違法な行為、規約に反する行為で報酬を獲得してきたのでないことはアキノもよく知っている。

交渉の語り口こそ明らかに詐欺師か悪徳営業の類だが、一方的に相手に支払いを要求するのではなく自身が相応のリスクを負った上での対等な条件を提示しているだけだし、傭兵稼業や、アリアと出会う前にアキノが何をしていたのか問いただした「情報屋」という回答も、恐らくはモラルに則ったものだろう。

運悪くアイカとエリイは悪質な情報屋に引つかかってしまったが、基本的にこのロビーで怪しいことをすれば、初心者番人にしてGBNにおける皆のお姐さん、マギーに直接見つかるかその情報が伝わって、彼女とフォースを同じくする漢女おとめたちにしよっぴかれ、いずことも知れない場所へと連れて行かれるのだが、それは置いておこう。

とにかくここに無事に現れた時点でチイは潔白だ。そういうことだった。そういうことになった。

「あはは……うちのメンバーが騒がしくてすみません」

「いえ、賑やかであるというのは決して悪いことはありませんわ。多くの犠牲にその花卉を散らしながらも、止まることなく明日へと咲き誇り続けた鉄の華……かの鉄華団も、平時は和やかに笑い合っておりましたもの」

「鉄華団……？」

一応、リアルではガンダムベースでバイトをしている都合上、アイカもその名前は知らないわけではない。

だが、恍惚と自らの細い身体を抱き寄せ、身を震わせながらその名前を口にするアリアの様子は明らかに何かがおかしい。

「わたくしの敬愛するマクギリス・ファリド准将……その協力者にして物語上は主人公として描かれた三日月・オーガスが所属していた民間武装組織にしてオルガ・イツカの率いる居場所！ ああ、ああ……！ 三日月・オーガスはマクギリス・ファリド准将が見込んだ通りアグニカ・カイエルの魂に溢れた殿方でしたわ、准将のお言葉を受けて、彼の手をもしも取っていたならばあの逆境を、ラスタル・エリオンを

撃ち破り!!! 世界に純粋な力のみが示す、アグニカ・カイエルの魂！
その真実の輝きをもたらしていたに違いありませんわゲホツゲ
ホツゴホツガハツツツ!!!」

「お嬢様あああああつ!!!」

訂正しよう。

確かにGBNのプレイヤーは修羅の民だ。強いんだ星人だ。

仮に——ありえない話ではあるが、もしも「ガンプラを操る者」、つまりダイバーをこの世から消し去ろうとしている電子宇宙人か何かが侵略にやってきたとしても待ち構えているのはあのチャンピオンやロンメル、獄炎のオーガ、マギーさんに、そしてジャバウオックの怪物、ヴアルガに棲まうFOEさんらを始めとする、錚々たる面子に加えて果てはあの「ビルドダイバーズのリク」が雁首揃えて出待ちしているのだ。

もしも自分がその宇宙人であったなら、侵略する気も起きないだろう。大多数のダイバーはそう答えることになるが、その大多数だって三桁ランカーまで及ばずとも二千万人の中で日々凌ぎを削り続けている修羅の一員であることには違いない。

だが、そんな修羅の民であることとは無関係に、この女性は明らかに何か常軌を逸している。

朗らかな笑顔でフリーズしたまま、アイカはこめかみの辺りに冷や汗が滲んでくるのを感じていた。

そして、そこにある想いは一つだ。

——あつやべえ地雷踏んだ。

端的に換言すればそういうことにして、リアルでもよくあることだ。良かれと思って振った話題が心の奥深くに埋め立てられたランドマインに触れて爆発する。

厄介なのはそれがマイナスの感情だけではなく、プラスの感情にも適応されるということだ。

チイはぺたぺたと自分の僅かに膨らんだ胸元を触りながら、まーこのルックで生まれてよかったな、なんてことを呟いていたが、それは流石に関係ないと思う。

つられて、自分もチイよりは膨らんでいるものの、エリイやアキノ
のそれと比べると悲しくなってくる胸元を左手で触りながら静かに
アイカは涙を流す。

(成長期だもん……まだ成人してないもん……)

人はそれを、二重の意味で現実逃避と呼ぶ。

むせ返つてくずおれては傍に立つミツルギの介抱を受けて立ち上
がる、という、七転び八起きを無駄に短時間で無意味に体现している
アリアはようやく落ち着いたのか、こほん、と小さく咳払いをすると、
薄くルージュを引いたような質感に彩られたアバターの唇から言葉
を紡ぐ。

「失礼いたしましたわ。ごめんあそばせ……わたくし、貴女たちの戦
いを見ておりましたのよ」

「と、言う……」

「ええ、生憎名前は忘れてしまいましたが、貴女たちがあのユニコーン
ガンダムと戦っていた記録ですわ」

確かナンブが言っていたように、あの戦いはモニターを通して中継
されていたものであるらしい。

アイカは面倒だからとデフォルトの設定をいじっていないどころ
かコンフィグ画面すら見ていないので戦闘中の映像が自動配信され
るように設定したままになっているが、仮に切っていたとしてもハマ
モリがナンブの引退に花を添えるための試合だとして配信設定をオ
ンにしていたのだろうから、遅かれ早かれこのアリアめちやくちやべーやつという女性に目
をつけられるのは確定事項だった。

そんな事情は露とも知らず、アイカはドン引きしているのを悟られ
ないようににこやかな笑顔を浮かべて、アリアが続く言葉を紡ぐのを
待つ。

「こほん……時に、アイカさん」

「はい」

「貴女……アグニカでしよう?」

言葉はいらない、と、明らかに同好の士を見つめるようなつり気味
の赤い瞳が、ハイライトに星が浮かんでいるアイカの青い瞳を撃ち落

とさんばかりの「圧」を持って、その問いを叩きつけてくる。

いや、やつぱバカだろこいつ。

反射的に小声で呟いていたチィだったが、アキノはそれを止めることはしなかった。と、いうよりも右手で目を覆って、手の施しようがない患者と出会ってしまった薬師の如く月へと向けて匙を盛大にぶん投げんばかりの呆れを示している。

しかし、アリアにはアイカ以外最初からその目に映っていないため、さしたる問題ではなかった。

輝く目に映るのはいつもアグニカという輝く一等星。その魂を胸に秘める熱き逆境をこそ我が身の置き場とばかりに不可能の絶海を渡りきり、その掌の中に勝利という秘宝を、アグニカ・カイエルの魂という太陽を収める勇者こそ、アリアにとっては覚えるに値する相手であってそれ以外の人間がいくら無礼な行いをしようが銭ゲバだろうが自治厨だろうがメンヘラだろうが、記憶に留めないのだから関係ないのだ。

「アグニ……カ……？」

「……あ、あの……す、すみません……差し出がましい、かも……しれません……けど。けど……その……アグニカって、なんですか……？」

おいバカやめろ。

鸚鵡返しにその単語を呟いてフリーズしているアイカと、ガンダムシリーズをほとんど知らないからこそ、どこまでも純粋な疑問でエリイは言葉を返してしまっただが、本来であればこの辺でそうですか本日はお日柄もよく散歩日和でフレ逃に呼ばれたからげ抜けるますねだとしておくのが正解なのだ。

そんなチィの静止も遅く、よくぞ訊いてくれたとばかりに赤い瞳をきらきらと輝かせながら、アリアはエリイの両手を取って、傍に立つミツルギが手を伸ばすよりも早く、小さく息を吸い込むと。

「エリイさん、でしたわね……？ よくぞ！ よくぞ訊いてくれましたわ！ その様子ですと恐らくガンダムについてもあまり詳しくないとお見受けしますわ、ですからそのような方にネタバレを語ってし

まうのはあまりにも無粋！　ですので事実だけを抜き出して語るの
であれば、勇気ある戦い……それも！　誰もが勝利を諦める！　逆境
に置かれてこそ尚希望を失うことなく勝利を掴み取り、あるいは敢え
て相手の攻撃に飛び込みながら肉を切らせて骨を断つがごとく、魂と
魂が叫ぶ戦いをこそ行う、そんな戦いを世界を相手に挑みかかったわ
たくしの敬愛するマクギリス・ファリド准将が手にしていた永遠にし
て至高、そして黄金の輝き!!!　それこそが……アイカさんがあの状況
下に置いて己の剣一本で照射攻撃を防ぎ切って満身創痍の機体で勝
利を掴み取ったその姿こそアグニカ・カイエルの魂に他ならないので
すわアゲツホゲホゴホツゲハツガハツゴホツツツツツ!!!」
「……ひ、ひう……!?!」
「お、お嬢様ああああッ?!」

今まで聞いたことのないレベルの長広舌だった。

その反動なのか、血を吐きかねない勢いでむせ返ってロビーの床に
膝を突き、ひゅうひゅうと大分危険な音の呼吸をしているアリアの背
中を、ミツルギがこれまた先ほどよりも深刻に慌てた様子で優しく、
宥めるように摩っている。

「覚えときなエリイ」

「……は、はい、チイさん……」

「ああいうのを……手遅れっていうんだぜ……」

「流石にそれは……いえ、今回ばかりは私も何も言いません……」

——なんだこれ。

アイカの思考回路はドン引きしたままクラッシュを起こしてフ
リーズしてしまっていたが、フォーサライダーとしての責任感がそう
させるのか、生来の好奇心がそうさせるのかはともかくとして、アリ
アがぶちまけていた長広舌の断片を拾い上げながら強制的に脳を再
起動させる。

要するにアグニカとやらがなんなのかはわからないが、アリアは自
分たちと「名機アルビオン」の戦いを見た上で、恐らくは戦いを申し
込むために話しかけてきた。

そしてやっぱりアグニカ・カイエルの魂とやらがなんなのかは理解

できないが、その決め手となったのはアイカがあの時無我夢中で行っていた、対ビームコーティングが施されたビルドボルクの刃で、ウツキースの放った照射ビームを受け止めきったこと、ということになるのだろう。

明らかに切羽詰まった、仮想空間だというのに過呼吸を起こして今も蹲っているアリアを横目に、アイカはそう考察する。

「……………これ、事故だよね……………」

「おう、完全に巻き込まれ事故だからアイカは悪かねえよ……………」

ぽん、と、優しく、チイの右手がアイカの肩に乗せられる。

なんだろう。ありがとうって言いたいのこのいたたまれなくなるといふ悲しさは。構ってもらったのは嬉しいけど、そつとしておいてくれと、せめて明日の橋掛けとなる今日ぐらいはと答えたくなるような気持ちは。

再び曖昧な笑顔とも泣き顔ともつかない表情を浮かべて、アイカはとりあえず、チイにそつとお礼だけは告げておくのだった。

「ひゆう、はあ……………つ……………ごめんあそばせ、同じアグニカ・カイエルの魂を持つ者同士であれば言葉は不要。アイカさん、わたくしが何を口にかけているのかは……………お尋ねするまでもありませんでしょう?」

「ええ、悲しいことに……………いや本当……………」

「ならば! この『リビルドガールズ』に向けたアリア・ファリドの挑戦……………いえ! 貴女の持つアグニカの魂、その甘美なる叫びを聞かせていただけるということ、よろしいのです!」

トウ・ビー・オア・ノット・トウ・ビー。

使い方こそ致命的に間違っているが、それを決め台詞にして凜と背筋を伸ばし、その肩にかかったツイントールの片方をさりと手の甲で優雅にかき上げながら、アリアはアイカへ問いかける。

これで蹴つたらどうなるんだろう。

なんとなく純粹な好奇心でそれを試してみたくなるが、恐らく今より最悪な目に遭うことは容易に想像できる。

曖昧に笑いつつ、助けを求めないように背後を振り返れば、頼れる仲間たちは皆一様に同情を浮かべながらも、とりあえずは付き合っ

れとばかりに首を縦に振る。

「えつと、皆異存はないみたいだから挑戦自体は受けますけど……
チィちゃん？」

「ん、ああ……こほん。それで、アリアのお嬢様。とりあえずリーダー
のアイカから許可ももらったんで、一つ提案させていただいてもよろし
いですかい？」

アイカとしては別に報酬があろうがなかろうが、もうさっさと戦い
を終わらせてこのアリアとかいう暴走お嬢様の気を晴らしてやりた
いところではあったが、チィがまさかタダ働きでこんな厄介な案件を
引き受けてくれるとも思わなかったために話を振ってみれば、案の定嫌そ
うな顔こそしたものの、チィは割り切った上で手もみをしながら、腰
を低くして自身の最重要課題をアリアへと持ちかけるのだが。

「そうですわね……一人当たり100万BC」

「なッ……!?!」

「もちろん、ランク補正を考えれば正規のフォー스戦で支払えるよう
な額ではありませんわ。ましてやできたとしても貴女たちが敗北す
れば、その負債は貴女たちへと押しつけられる……です。で、わたく
しがクリエイトミッションを作るという形で、その挑戦に勝利すれば
譲渡する、わたくしの報酬といたしましては、勝ち負けに関わらず、貴
女たちが……アイカさんが持っているアグニカ・カイエルの魂。その
輝きを見せていただくことこそ何よりの喜び」

——チィといいましたね。貴女は金銭をこそその喜びとしている
のでしょ？

先ほどまでおかしい様子を見せていた人物とは思えないほど冷徹
に、チィを通してアイカたちへとアリアはその「挑戦」を突きつける。

本物だ、こいつ。

チィは口にこそ出さなかったものの脳裏でそう呟いていた。

人が何を最上の価値とするかについて、チィは理解できなくともそ
れを否定はしない。

このアリアが正気だろうがそうでなかろうが、アグニカ・カイエルの
魂とやらをGBNにおける最上の価値として見出しているのは確

かなことなのだろう。

だが、金銭感覚に関しては異常だと言わざるを得ない。

いかにチイとアキノが場慣れしているとはいえ、アイカとエリイという初心者——からはちよつと成長して初級者が二人混じったフォー스에、成功次第とはいえ計四百万BCの支払いを約束し、その対価は事実上タダであることを確約するなど、正気の沙汰ではない。

だが、クリエイトミッションという形に押し込めた辺り狂気の沙汰に金を払うのではなく、あくまでも正気で、そして。

「ミッションは申請が通るまで三日かかりますわ。ですので三日後にまたあいまみえましょう……それと、これはわたくしからのフレンド申請ですわ。蹴っていただけでも構いませんことよ。では……貴女たちがわたくしという逆境を乗り越え、アグニカ・カイエルの魂を見せていただけることを、わたくしに敗北の剣先を突きつけていただけると、楽しみにしておりますわ。参りますわ、セバスチャン」

「はっ、お嬢様……それと僕はセバスチャンという名前では」

「ふふ……心が躍りますわね……魂が叫ぶ……ふふふ……あはは……あーっはっはゲホッゴホッゴホッツツ!!」

「お嬢様あああっ！」

きつと無駄に高笑いをしなければ、優雅に踵を返してきつていく姿はまさに気高く美しい令嬢のそれであったのだろう。

ミツルギに介抱され、その肩を借りながらロビーを後にするアリアを横目に、あくまでも嫌悪ではなくポリシーとしてフレンド申請を蹴り付けながらチイはそう考える。

だが。

「アリア・ファリド……S、ランク……?」

アイカが受けたフレンド申請と、そこに伴っていたプロフィールカードに記載されていたランクは、開いた口が塞がらなくなるほどに驚異的なものだった。

Sランク。この場で一番上手いアキノですら、まだその手前だ。

そして、勝率こそ四割と低く止まっているものの、フレンドのミッションや戦闘履歴とその内訳を見れば、その殆どが格上のダイバーで

あるSSランクやSSSランクを相手にしたもので埋め尽くされ、ちらほらと勝利の文字まで見えている。

「こいつは……もつと要求しとくべきだったか」

「……あ、あわわわわ……うう……」

「……なるほど、確かにこれは試練でしょう」

反応は三者三様だが、それでも受けてしまったことに対する後悔は少なからずそこに留まっっていて、アリアのプロフィールカードを開いたまま固まっているアイカもそれは同様だった。

「……どうして……」

「あん？ どしたのきアイカ」

「どうして、こうなったああああっ!!!」

そして、すっかりハイライトの星が消えてしまった瞳に涙を浮かべ、アイカは声の限りに、そう絶叫するのだった。

第十八話 「予習・復習・祈りの慣習くもしも、勝てないとして」

予習復習。小学校から高校まで、概ねどんな教師も口を酸っぱくして「やっておけ」と生徒たちに伝える言葉だ。

だがそれは概ね彼らの魂に届かない。よしんばその言いつけを守ってこなすよくてきた児童、生徒は確かに存在するのだろうが、愛香の周辺ではごく標準的な、「そんなことよりサッカーしようぜー」と放課後の遊びを大事にする子供たちで溢れていた。

愛香の場合、本来そこに割かれるべき時間は小学校の頃は走り込み、中学校の頃は吹奏楽の練習へと注ぎ込まれた。

——それだけの時間を費やした努力が、ついに何かを得ることはなかったのだが。

それは置いておくとしても、では何故予習と復習が必要になるのか、と問われればその模範解答は「将来、どのような形であれ学んだ内容を使うにしろ使わないにしろ、知識を得ようという姿勢とそれを実行する習慣は無駄にならない」ということになるだろう。

だがそれは多くの場合、放課後にボールを蹴ったり打ったりしていた子供たちが大人になってから気付いて自らの子供たちへと伝えようとすると、いわば「大人」の回答だ。

それが中々伝わらないのも世の無情というべきなのだろうが。

では、訪れた未来に苦しんで、後の未来に託すその言葉が大人の答えなら、自分たち子供の答えはなんなのか。

それはシンプルだ。

近い未来にテストが待っているからだ。

昨今の世の中で、試験の成績だけを見て子供を評価する向きは見直されつつあるもののそれはあくまで大人の話で、子供にとって赤点を回避するというのはテストという近い未来の先にあるちよつと遠くの未来、夏休みや冬休みを誰の横槍も入れられずに謳歌するために、或いは親の小言を回避するために必要不可欠な存在であることに変

わりはない。

厳しいと評判の歴史教師が、「ここ来週の小テストに出るからな」とチョークで赤線を引いた板書をぼんやりと写し取りながらも、愛香の頭の中にあるのは来週の小テストではなく、二日後に待ち構えている無理ゲーの方だった。

DランクのダイバーがSランクのダイバーと戦って、勝てる可能性はありますか？

仮にそんな問いかけをGBNの掲示板に書き込んだとしよう。

返ってくる答えは含まれた感情に違いはあれど概ね同じものだ。

——可能である。そのDランクがGPデュエルで何千戦やった上で勝率六割以上を維持しているのなら。

要するに無理か、極々少数の例外に当たる存在でなければ見込みがない、つまりはそういうことだ。

終業の鐘を聞いて日直が終礼を済ませるなり、歴史教師がドアを潜るより先にロッカー側のドアから、我先にと生徒たちが購買の菓子パン争奪戦に赴くべく一挙に駆け出していく。

廊下は走るなど言ってるだろうが、と声をかける歴史教師の言葉も馬耳東風、油断していれば味のしないコッペパンを手にする事になってしまう生徒たちの耳にその言葉は届かない。

世の中にはコッペパンを求めるあまり発砲沙汰まで起こした高校生がいるらしいが、そんなものは都市伝説の類だろう——珍しく昨日の夜ご飯の余り物を詰めた弁当箱を持って、椅子を絵理の机に移動させながら、愛香は嘆息する。

「お弁当作るのもめんどくさいけどあれに巻き込まれるのも大概嫌だよね」

「……た、確かに……」

ちらりと、開けっぱなしになっているドアから購買目がけて全力疾走する生徒たちで溢れる廊下を見れば、その勢いに押しやられた窓際で微かに眉を潜めているクガ・ヒロトと、その右腕に両腕を絡めて苦笑しているムカイ・ヒナタの姿があった。

「あのクガって人もGBNやってるんだっけ……」

「……そ、そうなんですか……?」

「ああうん、あたしガンダムベースでバイトしてるから最近よく見るんだよね」

もつとも、彼がどんなガンプラを使っている、どの辺りのランクで、などという細かい事情は把握していないしするつもりもないから、恐らく懇意にしているであろうマツムラ店長にさえ訊くことはなかったのだが。

今日はメロンパンではなくメロンクリームパンをもそもそと齧っている絵理と、人の波に挫けているのかどうかは知らないが、とりあえずそれが去るのを待つことに決めたのか、ヒナタと何事か短い会話をしているヒロトを交互に見遣って、愛香は少し考え込む。

餅は餅屋、というのが良くも悪くも愛香の信条だ。

正直なところ、愛香は自分一人で考えてわからないことを延々と考え続けて答えが出せるほど、頭の回転が速いと思っていない。

もしもその答えが出せたのであれば、徒競走で自分は三位などという順位に甘んじることもなかったであろうし、吹奏楽では。

頭をよぎる苦い思い出に、少し顔をしかめながらも愛香は迷い続ける。

以前、放課後にヒロトをカラオケに誘っていた男子たちを見たことがあった。

中学校時代から一緒だったと思いきその同級生男子はヒロトを気にかけてかその誘いを持ちかけたのだが、彼の返事は素っ気なく、結果としてそれに応じることはなかった。

ぶつきらぼうだという訳ではない。

ヒナタと話している間は四六時中、どこか宙を見ているような彼の視線が落ち着きを取り戻したような印象を受けるのだが、そこに何かしらを問うのも詮索をするのも野暮というものだし、何よりそんな、他人の心に踏み入る資格を自分は持ち合わせていないと愛香は諦めている。

やがて人の波が落ち着いて、どこかでヒナタと昼食を共にするのだろうか。何事もなかったかのように去っていくヒロトの背中を茫洋と

見送りながらも、愛香はついに、それを呼び止めることはしなかった。

「……あ、あの……愛香さん……その……」
「ん、いいの……多分、あたしが訊いていい空気じゃないから」
「……？」

絵理は小首を傾げるが、俯いてパンを齧っていたし、何より顔を上げていたとしても距離が遠くてわからなかったはずだ。

しかし、もし間近でヒロトの目を見たのなら、彼女も察することができただろう。

そこにあるものの正体は、詳細はわからない。だが、きつと、拭い難い蹉跌と絶望を抱えていなければ、そしてまだ——ほんの僅かな希望を諦めていないのであれば、あんな哀しくも優しい光をその瞳に宿すことなど出来はしない。

何より中学校からの、直接の知り合いの誘いすら蹴っているのだ。知り合いでもなんでもない、この学校にもきつと掃いて捨てるほどのGBNのプレイヤーというだけの繋がりだけで彼の瞳を繋ぎ止めることなど、それこそ今回突きつけられた無理難題のようなものだ。

愛香は全体的に茶色い感じの弁当を摘みながら静かに苦笑する。人には、触れられたくないことがある。

考えてみればわかることだ。わかることだった。

すつかり冷えて硬くなってしまった焼売と共に、愛香は喉元まで出かかった、過去の古傷が開いた痛みを呑み下す。

「それより本当どうしよつかこれ……」

「……わ、わたしも……これは……」

直前まで条件を伏せておくのはアグニカ・カイエルの魂に反するという相変わらずよくわからない理由と共にフレンドメッセージ経由で送られてきたクリエイトミッションの内容はシンプルだった。

【クリエイトミッション：目覚めし魂の剣（現在承認申請中）】

【推奨ダイバランク：A】

【報酬：400万BC、バエル・ソード×1】

【ステージ：ギャラルホルン本部「ヴィーンゴルヴ」】

【勝利条件：ヴィーンゴルヴ内バエル神殿の台座に突き立ったバエ

ル・ソードの奪還】

【敗北条件：味方機の全滅】

【予想敵性戦力：MS 2機】

【製作者コメント：きあ、フォース・リビルドガールズ。GBNの平穩はもう楽しんでしよう。幾星霜……「ビルドダイバーズのリク」を見て以来、わたくしの心を震わせたアグニカ・カイエルの魂を持つ者であるのならばそこに言葉は不要。見事にわたくしと、バエルという逆境を乗り越えて、黄金の剣を、栄光の証を、アグニカ・カイエルの魂を！ その手に収めてみせなさい！】

コメントがやたらと長い上に相変わらず愛香にはよく理解できない言葉が羅列されているが、要するにあのエリアとミツルギという二人を突破した上でバエル宮殿と呼ばれる場所に侵入し、そこに安置されているのであろうバエル・ソードを手に入れば「リビルドガールズ」の勝利、それまでに全員が撃破されれば敗北、ということだ。

ミツルギというダイバーが何に乗っているかはわからないが、恐らくあのエリアというダイバーはガンダム・バエルを使用してくるのだろう。

わざわざ製作者コメントにそれを記してくれているのはありがたいのだが、わかったところでどうしようもないこともある。

一応エリアたちと別れたあと、予行演習という形でBランク推奨の人質救出作戦という、Dランクのアイカとエリイにとっては高難度に当たるミッションを受けたのだが、これがまあ難しかった、というか、チイとアキノがいなければ間違いなくクリアはできなかっただろう。

それに加えて、成功したのは相手がCPUである以上、思考ルーチンに隙が明確に設定されているからだ。

人間はミスをしたくない、などということはあり得ない。

例えば目の前に夢中で画面全体を見ていなかったから、置かれていた照射ビームに自ら突っ込んでしまうなどという凡ミスは割と普通に起こり得ることであり、置く側もそれを意識していやらしい場所やタイミングに攻撃をセットしているのだから仕方あるまい。

たまにわかってても手元が狂って、明らかに迂闊な照射ビームに

突っ込むことを古来、滝行と呼んで、それがGBNでもあるあるとして語り継がれているのだが——まあそれは割愛しよう。

ただ、CPUが見せる隙と、人間が見せる隙は、どれだけGBNのAIが進化したとしても、直感的に「違う」とわからせるように設計されている。

神ゲーと称えられるフルダイブMMOにおいてはその高度なAIを完全に「そのエネミーが考えること」として生物学的かつ有機的に活用していると聞いたが、それでもGBNがCPUにそれを適用するのは極めて限定的な高難度ミッションだけで、全体の九割近くに特有の「癖」を残しているのは、対人コンテンツこそが本領であるという宣言に他ならない。

一応、愛香たちはGBN内でその残り一割に当たる超絶高難度ミッションの攻略動画も見てみたのだが、はつきり言って参考にならないかった。

上手すぎて、何をやっているのかわからない。いや、何をやっているのかはわかるのだが、どうしてそのタイミングでその適切な判断が下せているのかわからない。

つまりは、そういうことになる。

原作キャラに比肩する高難度AIの判断、その針の穴を通すようなごく僅かな隙をつく形で華麗にソロ攻略を遂げているいつぞやお世話になったのか一方的にお世話を押し付けたのかわからないFOEさん、彼が操る白亜のクアンタの姿を思い返して愛香は溜息をつく。

「あれ絶対人間じゃないよね、脳みそに機械かなんか入ってるよね」

「……う、うーん……でも、わたしには……できそうもないですし……」

なんであんな先読みをしてビットを置いた上でその先行政撃さえ当てて、しかも生まれた隙を一秒足らずで見抜いてコックピットに剣を突き立てる一連の動作は、弾幕砲火飛び交う戦場で下せるとは愛香には到底思えないほどクレバーでクールだ。

「……で、でも……」

「おっ」

もじもじと、六割近く体積を残したメロンクリームパンで顔を覆いながらも、絵理は蚊の鳴くような声で言葉を続ける。

こういう時、絵理の、そして「エリィ」の直感は信用できる。

何度か死線を共にした上で愛香は、絵理の強さでありその本質は類稀なる観察力にあると確信していた。

ただ絵理がめそめそと泣いているだけの女の子であれば、全塗装、改修まで加えている格上と素組みのガンプラでタイムマンを張ったとしても五秒足らずで切り捨てられて終わっていただろう。

リプレイで見返した、その「不可能を可能にした」勇姿を、タイムマンを持ち堪えさせてチィへとタスキを繋ぎ切った活躍を思い返しなから、愛香は絵理に続きを促す。

「……そ、その……怒らないで、くれますか……？」

「大丈夫、ほら。あたしの顔触ってみて？」

絵理は齧っていたメロンクリームパンを机に置くと、もじもじと人差し指を合わせて俯いてしまうが、愛香はそれを掬い上げるように絵理の手を取って、すっかりいつも通りに「確認」を促す。

愛香の声を頼りにして緩慢に上げられた、絵理の焦点を結ばない瞳が、時間をかけつつも愛香の視線と交錯し、恐る恐るといった調子で伸ばされた絵理の右手が、愛香の頬にそつと触れる。

「あ……っ……」

「あたしは、絵理の味方だよ」

自分にその資格があるかどうか、愛香にはわからない。

もしも絵理が抱えているその痛みを話してくれた時に、背負い切ることができなければ、自分はいつもと同じように逃げ出してしまうのではないかと怯えた夜もあった。

それでも。

それでも、愛香は、絵理の味方でありたいと思っていた。

四月、入学式を終えても埋まらなかったその席に、愛香は何か思いを馳せることはなかった。

入学式の時に、近くでなんだかびくびくと震えている女の子がいるな、と今にして思えばそれこそが絵理だったというのに、そこを省み

ることもなく欠伸を噛み殺しながら校長先生の死ぬほど長くてどうでもいい話を聞き流していた。

きつと。ずつと。

絵理は、その時だつて「助けて」と、周りに言葉はなくても訴えかけていたのかもしれないのに。

(……多分、損な性分なんだろうな)

わかっている。絵理は救おうとしているのに、じゃああの悲しそうな目をしていたクガ・ヒロトに寄り添おうとは思わないのか、と、誰かに問いかけられたのなら、不本意ながら愛香は首を縦に振らざるを得ない。

中途半端。愛香の歩んできた人生を象徴するような言葉だ。

善にも悪にも馴染みきれず、中途半端にそのどちらにも足を突っ込んで、その中途半端さ故に火傷をする。

それでも。

わかってしまった、そして、決めてしまったことに、目を背けようとは、思わなかった。

例えその理由が説明できなくても。わからなくても。絵理に向けたその言葉だけは、愛香にとって精一杯の「本当」だったのだ。

絵理の掌がぺたぺたと愛香の頬に触れる。少しくすぐったいその感触にむず痒さを覚えながらも笑つて、愛香は言葉なき問いかけへの答えとする。

「……よ、よかった……よかった、です……ありがとうございます……」

ぽたぽたと眈を伝つて、絵理の左眼から涙がこぼれ落ちていく。

それが、少しでも。少しでも、少なくなってくれるなら。

愛香は祈るように、大丈夫だよ、と、言葉を繰り返す。

「じゃあ、聞かせてもらつていいかな、絵理の思つたこと」

「……は、はい……あの……その、勝てなくても……」

「うん」

「……負けなければ、いいのかな、つて……」

「勝てなくても、負けない……?」

「……あ、あの……バエル、つて機体を……倒すことが……ミツシヨ
ンじゃ、ないので……その……」

「……そっかー」

やっぱり、絵理の閃きは頼りになる。

自身の頬に触れた絵理の右手に頬をすり寄せて、やっぱりこの子は
天才だと愛香は確信する。

もちろん、相手が全力で妨害してくる以上交戦は避けられないのか
もしれない。

だが、極端な話逃げるだけ逃げて、誰か一人でも生き残つてバエル・
ソードを手にとればミツシヨン自体はコンプリートされる。

恐らく相手はそれを想定していて、易々とは許してくれないだろ
う。

それでも、四人であるのSランク暴走お嬢様を撃墜しない限り勝利は
認めない、と言われるよりは幾分か希望がある。

そして、お誂え向きとばかりにフォース「リビルドガールズ」には、
スニークミツシヨンを得意とするチイがいる。

例えば相手がチイを全力で警戒してそこにリソースを注ぐのであれ
ば、どうしても人間の性質上「隙」が生まれ得る。

加えてアキノは一步及ばないとはいえ歴戦のダイバーだ。

そのアキノをフリーにしておく危険を、Sランクまで上がったダイ
バーが認識していないはずがない。

獅子は兎を狩るのにも全力を尽くす。

だが、二兎を追う者は一兎をも得ずという言葉もまた、同時に存在
するのだ。

不確定要素になるのはミツルギのランクと機体だろう。

もしも同じSランクかそれに準ずるランクで、バエルと同じ高機動
型であったなら、そこに愛香たちの勝利はあり得ないと断言してもい
い。

だが、そうでなかった場合、最低でもCランクぐらいでかつ鈍重な、
装甲に防御を頼っているパワー型であったのなら。

絵理が提示した勝利への方程式は、小数点以下の確率ではあるが、

具体的には単発無料ガチャでピックアップ外のSSRを一点狙いする程度には存在するはずだ。

そう。チャートを組む時に百パーセントを実現できるのは、「します、させます、させません」を信条とするどこぞのロシア系金髪幼女と噂される——というかそういうミームで皆がわかった上で楽しんでる、アルファベット三文字さんかそれに近い存在しかないのだろう。

だからこそ、チャートの祈りは必修科目。

例えそれがどれほど忌み嫌われるとしても避けては通れない運ゲーだとしても、そこさえ突破すればなんとかなるケースがあるから人は日々コントローラを叩きつけながらも、たった一つの正解を引き寄せるべく乱数の神様に祈り続けるのだ。

「なんだ、そう考えたら定期テストと変わらないじゃん」

「……え、えっと……」

「最後に物を言うのはお祈りってことだよ……!」

ヤマが当たっていれば勝ち。そうじゃなければ負け。

聴覚と輪郭による判別によってほとんど失われた視力の代替として、真面目に授業を受けながら常に九割近くをいつもキープし続けている絵理に、愛香の言葉はわからなかった。

だが。

(良かった、愛香さん……きつと、楽しくて笑ってる……)

笑ってくれているのは、確かにありがたいと思っている。

右手へとすり寄せられる愛香の頬の感触に、今度は絵理が少しのくすぐったさを覚えながらも、愛香には気付かれないように、絵理は内心でほっと胸を撫で下ろす。

でも、やっぱり。

自分なんか、愛香に気を遣わせていいのだろうかと思ってしまうから。

そして、その笑顔は掌に伝わるだけで、輪郭はぼやけてしまっているから。

絵理はそこに、静かに涙を零すのだ。

きつと愛香が持っている勇気を自分が持ち得ないことに。そして愛香の笑顔を、仮想の浜辺から打ち上げられたこの世界ではきつと永遠に見られないことに。

それでも——嬉しさと悲しさ、絶望と希望。背反するそれを濁った碧眼に宿しながら、奇しくも彼女が見ることのなかったクガ・ヒロトと同じ目をしながら——絵理は、すり寄せられる頬の、愛香の勇気の温かさに、小さく一つの決意を、まだ言葉にはできないそれを、静かに固めていくのだった。

第十九話 「銭ゲバ、その心はどこにくチイとアキノの決戦前夜」

「ふむ……んつと」

アイカはバイトでログインできない。エリイは連絡こそないが、恐らくアイカがログインしないから自分もそうしている。

アリアとかいうアグニカ頭バエつてる奴愛好家から受けた挑戦までの時間は残り一日。チイはコンソールに複数のタブを開いてそれら全てに目を通しながら、静かに唸り声を上げた。

エリイのリアルがどんな人間か、チイは全く気にしていないしなんならGBNでの振る舞いも気にしていない。

報連相は確かに大事だが、フォース・リビルドガールズはこの修羅の巷を生き抜くために生まれた一個の戦タスクフォース隊ではなく、それこそアイカとエリイが作り上げた、放課後の延長線上の寄り合いだ。

だからこそ、規律という名前のローカルルールにガチガチに縛られないし、それ故にチイの奔放な外部での生業、金稼ぎについてもとかく言うメンバーがいけないというのはなんだかんだで居心地がいいのだから、その辺りは各々が好き勝手にすればいいし、チイ自身も好き勝手にする。

だからまあエリイからの連絡がないのも別にいいかと、チイが割り切ってフォース用の連絡網を開いていたタブを閉じようとしたその時だった。

「ん？ お……つと、なんだエリイ、やつぱいいやつじゃん」

通知がポップする音と共に、「ごめんなさい今日はログインできません」という簡素な文面がスレッドに浮かぶ。

多分エリイのガワと中身が同じなら、この文字を打つのに死ぬほど苦労して悩んだ末に送ってきたのだろう。

そんなエリイの姿を想像しつつ、チイは苦笑しながら了解だよんと短い返事連絡用スレッドに書き込んで、そのタブを閉じた。

GBNにおけるスレッド、というのは二つの意味がある。

一つはフォースやフレンドといった身内での連絡網として使える、名前とプロフィールカードのアイコンが表示されるもの。

そして、もう一つは、今チイが複数のタブを開いてそこに表示している画面に並んだ無機質な文字の羅列——名前を一樣に隠しながらGBNにおける悲喜こもごもを主題に掲げたスレッドで各々好き勝手に語り合う、古い時代の匿名掲示板を再現したものだ。

GBNにおける匿名スレッドは、運営が厳格に監視の目を光らせている。

そのためPKやチートツールの使用といった明らかに利用規約に違反する話題を持ち出すなら、その古い外部掲示板を始めとした各種メディアを利用しなければならぬのだが、そんなものに興味が無いチイには関係ない話だった。

付け加えるならどいつが、頭アグニカとかそういう意味ではなく、真性の、危険なという意味でやべーやつなのかという話題については、晒しと特定に当たらない範囲で共有されている。

そんな共通認識を抱かれている時点でそのアカウントが運営から降り注ぐ^垢ダインスレイヴ^Aに焼かれるまでは時間の問題だ。

どうせ新規アカウントでまた復活してくるのかもしれないが、GBNがVRMMOである以上、複数アカウントを所持するには主に金銭的な面で厳しい制約がかかる。

だからこそ悪質PKやチーターとのいたちごっこをしなければならぬ、という前時代のMMOに付き物だったトラブルは飛躍的に改善されているのだが、そこはそれ。

どこにでも例外というものは存在するのだから、チイは常に掲示板を眺めることでGBNの情勢を監視するのを日課にしていた。

「ほうほう、フォースネストを改修した巨大電脳迷宮ねえい……」

パートスレと呼ばれる、長期に渡って同じ話題を扱う雑談スレッド群において半ば定形化されて数字だけが更新されるタイトルが並ぶ中、見慣れない文字があったのに目をつけて、チイは指先でコンソールを操作しながらそのスレッドを拡大する。

曰く、これでGBNを引退するらしい古豪が、己の全財産の半分を

使つてあるデイメンションの土地を八割ほど買い占めた上で巨大なフォースネストを設営し、それを迷宮として改修した。

そして、その巨大迷宮を踏破した者に、残りの全財産を報酬として譲渡する、という趣旨のクリエイトミッションを作つたらしい。

そこに記されていた成功報酬の額は膨大だ。

なんと破格の3000億BC。正気を疑うその額にチイは本能的にごくり、と生唾を飲み込むものの、話題をよく読んでみればそのスレッドに溢れているものは前向きな攻略情報などではなく、ミッションのギミックに対する怨嗟とクリエイトミッションを作つたダイバーに対する愚痴がほとんどを占めている。

それもそうだろう。己の全ての財産を使い果たして、デイメンションの八割という想像もできないような領域を買い占めて作つた巨大迷宮なのだ。

易々と攻略された上であつさり3000億BCを誰かに譲渡するほど、このゲームにのめり込み、最前線を走り続けた古豪の性格がいははずもない。

とはいえ、剣呑な話題にも愚痴にも「情報」は含まれている。

最前線組と呼ばれる探索の凄腕たちが未だ第三層で止まっている、という魔境の情報と第一層、第二層におけるダイバーの死因を記憶の片隅に刻みつけながら、チイはそつとスレッドを閉じる。

こういうデカイヤマは出遅れた時点で、得てしてアドバンテージなど失っているようなものだ。

それに巨大迷宮型のミッションは、お約束として後から追いかける者にも公平なよう、必ず最前線組が「詰まる」ボトルネックをそのギミックとして準備している。

だったら、焦ることはない。

アドバンテージを取れるタイミングを絶妙に見極めて、横からかつさらつていくのが後発組の常道なのだから。

物質化したIBCを指先で弾き飛ばしつつ、チイはニヒルに唇を歪める。

「貴女はそこに赴かないのですか」

「うお、びびった……なんだアキノか、あの巨大迷宮の話ならまだチイは行かぬーよ」

「と、いうと？」

「ふつーの迷宮探索ミッションから考えて、多分序盤の……そうだな、第六層ぐらいに最初のボトルネックが作られてるんじゃないかな、なら最速でもその情報が出てきてからだね」

「ふむ……」

予想外にドライだったチイの受け答えに、やることもなく惰性で口グインしながらロビーを歩いていたところで彼女を見つけたアキノは小首を傾げる。

普段であれば傭兵なり、またハードディメンション・ヴァルガに飛び込んでマナー違反の不届き者に銀の鉄槌を下しているところであつたが、生憎明日に決戦を控えている以上、機体の調子は万全を保っておきたい。

それでも、アキノの見立てでは勝てるかどうかを考えれば、残念ながらその可能性は著しく低い、と断言せざるをえなかつた。

あのアリアというダイバーがどれほどの実力を持っているか、チイほど器用ではないにしろ、アキノもまたGBNに偏在する情報網を活用する形で下調べを行なっていたが、案の定というかなんというか、アリアは良くも悪くも有名な人物だつた。

曰く猿山の猿。頭マクギリス。バエルに魂まで捧げ尽くした結果まともな人間性を喪失した女。SAN値ゼロお嬢様。

散々な罵倒ではあるが、ハードディメンション・ヴァルガスレでバエルの三文字か飛び出てくる時は、概ね彼女のことを指していると思しき話題がほとんどだ。

恐ろしいことに、というよりはアクティブ二千万人を抱えている以上の必然というべきか、バエルとそのパイロット、マクギリスの熱烈な愛好家はどうかやら彼女だけではなく複数人いるらしいが、その中でもアリアはとりわけ有名な存在であるらしい。

「あのアリアってやつのもも考えてんの？」

「……やはりわかるものですか」

「アキノはわかりやすいからねえい、まあチイはそーゆーところも嫌いじゃねえけどさ……つと、あの頭マクギリスについてなら残念なことには実力は本物だよ」

FOEさんと呼ばれる存在がいる。

以前にチイが200BCというあまりにも割に合わない報酬で請け負った絶界行で生存するためにMPKに利用した彼は、ダイバーランク世界39位……から更なる昇格を果たして、今は28位にいらしいがあの辺りの順位は魔境中の魔境ゆえの水物だ。またすぐに39位に逆戻りすることもあるだろう。

とはいえ、彼がサービス開始以来その二桁上位から転落したことがない、と語ればその実力こそチャンピオンや「ビルドダイバーズのリク」、獄炎のオーガといった「二桁の現人神」たちに敵わずとも、「二桁の魔物」に相応しい存在であることは伺い知れる。

「あのFOEさんに何回も懲りずに挑みかかっては塩試合で完封されてっけど、逆に言うならそりゃあ、あのFOEさんに完封するって選択肢を選ばせてるってことだ」

「……なるほど、鋭いですね貴女は」

「わりーけど、アキノが鈍いだけだよ。その分アキノはどんな敵でも恐れねーから、本質的にやあのお嬢様に近けーのかもな」

「それは私を馬鹿にしてるのですか?」

「違えよ、褒めてんだよ。そう聞こえなかったらチイが悪かったけどさ……」

勇気と蛮勇は違う、というのがチイにとっては座右の銘だが、それらは複雑なことに紙一重、背中合わせの存在であることは確かだ。

露骨にむくれて頬を膨らませ、目を逸らすアキノに謝りつつも、チイはその蛮勇と勇気の違い、何をもって「匹夫の勇」から脱するこができるのかについて思いを馳せる。

この世に百パーセントは存在しない。

例えばあのFOEさんが始めたあの初心者に、そしてそのFOEさんとタイマンを張った上で堂々たる勝利を収めた二桁の壁、ジャバ

ウオックの怪物と呼ばれる巨龍が負ける可能性があるかと問われれば、多くの人間はないと答えるだろう。

だがもしその初心者が偶然死ぬほど作り込まれたダインスレイヴやアトミック・バズーカといった戦略兵器をどこかで拾って、それを偶然あの二桁の魔物たちのコックピットに直撃させたなら？

答えは勝ちだ。このゲームにはコックピット判定が存在し、装甲値によって直撃かどうかの判定はブレるものの、SSランククラスが丹精を込めて作り込んだ戦略兵器の直撃をコックピットに受ければ、例え二桁の魔物だろうが一桁の現人神だろうが、そしてあの不動のチャンプ、クジヨウ・キヨウヤですら撃墜される。

そんなことがあるわけないだろうと、天から降り注ぐ隕石に当たって死ぬより確率が低いことだろうとそれを言葉にして人々に聞かせたならその多くは笑い飛ばすだろうが、上位の魔物たちは本気でそれを恐れている。

チイが以前、チャンプをいい意味で臆病だと評したのはこの辺りだ。

そして、それほど無謀ではないにしろ、蛮勇と罵られてもその逆境を跳ね返し、見事にチャンピオンを屠るという偉業を成し遂げたのが「ビルドダイバーズのリク」なのだ。

だがもし、チイがあくまで純粋なプレイヤーとして「リク」の立場であつたなら、まずチイは挑戦を選ばない。

当たり前だ。ありえなくはないとはいえ、実現の可能性が著しく低い賭けに打って出るほどチイにその蛮勇と紙一重の勇氣はない。

だが、アキノはそうするだろう。そして、あの暴走お嬢様はその逆転劇を実現させるために日々二桁の魔物たちに喧嘩を売っている、それこそが答えに他ならない。

それは、純粋にチイが持つていないものだ。だからこそ褒めたつもりだったのだが、生来の口の悪さが邪魔をしたらしい。

少しの気まずさに肩を竦めて、弾き飛ばしたIBCを、チイは手の甲で受け止める。

「……まあ、いいでしょう。チイ、貴女はクレバーな方です。私は秩序

と安寧をこそ、このGBNに求めている……だから、今私を拾っていただいた恩義のあるリーダー、アイカさんが受けると決めたのであれば、私は無謀な任務であろうと喜んで引き受けましょう。ですがチイ、貴女はそうではないのでしょうか？」

アキノが言っているのは、今回の報酬がいかに破格であれ、それより更に破格な迷宮探索に対して一步引いた目線で見ていた通り、いかに銭ゲバであろうとも無謀な賭けを嫌うはずのチイがわざわざ勝ち目の薄い戦いに首を突っ込む心理が理解できない、ということになるのだろう。

「アキノはさ」

「はい」

「今チイが手の甲に隠しているコインが表か裏か当てたら1000BC貰える、って賭けを持ちかけたら受ける？ 勿論外れても何も無いよ」

「……それなら、受けますが」

「……つと、裏か。縁起わりーな……まあ、あくまで例え話だからやらないけどね。次の質問。今ここに、押すと1%の確率で100万BC貰える代わりに、外れたら残り全部の確率で50万BC持つてかれるボタンがあるとすると、ならアキノは押す？」

「いえ、押しません」

「そういうことだよ。今回のミッションがあのお嬢様と執事の撃破つて形のフォース戦だったら、チイはいかにアイカが決めようが、エリイが泣き喚きようが、アキノにぶん殴られようが断固として拒否してたよ」

恐らく、エリイは同じ結論に達しているんじゃないだろうか。

1BCの物質化を解いてストレージに戻すと、困惑するアキノに、チイはその鈍感さをどこかもどかしく思いながらも、胸の辺りに何か温かな綿を詰められていくような感覚を覚えながら答える。

「今回のクリエイトミッションをきつきのボタンに例えんなら、押すと1%かそれ以下の確率で400万BC貰えるけど、外れてもチイたちは何にも損しない……ただ悔しいだけ。それなら丸儲けだ。押すつきやないっしょ？」

それに、あの頭マクギリスお嬢様の撃破は必須条件じゃない。

フォースの連絡網に表示されているクリエイトミツシヨンの概要を提示しながら、チイは肩を竦める。

「なるほど、わかりました……ならば今回の作戦、想定されるバエルの足止めを私が行って、その隙に三人の内どなたかが宮殿に侵入すると」

「まあ、そうならあな……ただ向こうさんもただのバカじゃねえ。それを警戒してんなら、ミツルギってやつがどんなダイバーかは知らねえ……というかどこ探しても情報がなかったからわかんねえけど、恐らく奴さんらにはチイがミラコ口持ってんのと、アキノが強えことは筒抜けだ」

まず、上手くはいかねえだろうな。

溜息と共に連絡網のタブを閉じて、チイは厳しく顔をしかめる。

「ならば……」

「しよーじき言っちゃえば、アイカとエリイに戦力としてチイは期待してねえ」

ミツルギとやらがどれぐらいなのか、によってはあの二人も戦力として数えられるのだろうか、不確定要素があるなら常に最悪を想定した上でチャートは立てるべきだと、安定重視こそ絶対の正義だとチイは考えている。

暴走お嬢様のバエルだけを考えたとしても、残念ながら、戦闘経験が少ないだけで機体の完成度は高い方なアイカはともかく、臆病でかつ、素組みのガンプラを使用しているエリイは、チャツピーの時のような罅迫り合いすらできないだろう。

「けど……この戦い、案外鍵になんのはあの二人かもしれねえぜ」

「と、いうと？」

「アイカはアキノに似てて、エリイはチイに似てる。まだ何もかも足りてねえかもしれねえが……あいつらはニコイチだろ」

だったら、アキノの勇気と合算して、ひよっとしたらこの無謀な賭けを覆してくれるかもしれない。

結局最後はお祈りに収束することに苦笑しつつも、チイは全ての

ウインドウを閉じてくるりと踵を返す。

どんな奴にもいいところがあつて、どんな奴にも悪いところがある。

例えばチイたちを散々な目に遭わせてくれたあのモヒカン共、その親玉のモヒー・カーンは満場一致でダイバーのクスだと烙印を押されるような人物だが、初心者狩りに特化しているとはいえガンプラの製作技術もそれなりにあつて、それなりに知恵も働く。

ろくでもない使い方ではあるが、それは紛れもなく彼の長所といつていいだろう。

誰に決して語ることもないが、それはチイのもう一つのポリシーだった。

「……チイ、最後に一つ聞いていいですか」

「残念だけどもものによるね」

金くれんなら考えなくもないけど。

アキノに背中を向けたまま答えるチイの声はどこまでもドライだった。

「……貴女は、どうして報酬に……金銭に、そこまで執着するのですか」

きつとアキノの問いかけには、「そこさえなければ頭が切れる参謀として、口こそ悪いがいやつだ」という含意があるのだろう。

その不器用さも含めて、誰かを慮って秩序的な正しさに引き込もうとするのはアキノの長所なのかもしれないが、それは裏を返せば、自分が正しいと思つたことは相手にとつても正しいという、危うい思い込みを抱いている短所に他ならない。

そして、人の心には多かれ少なかれ触れられない部分が、答えたくない理由が深く埋没して根を張っている。

「……わりーけどアキノとチイは同じフォースでこそあれ、フレンドじゃねえからな。そこんとこ覚えとけよ。まあ……100万BC払ってくれるってんなら、あることないこと交えて面白おかしく語つてやつけど?」

「チイ……」

「……アキノこそ、なんでそんな、チイからしたらくだんねー、秩序とかルールとかに拘ってんだ？」

ああ、答えなくていいからね。

それだけ返して、チイは雑踏に紛れて消えていく。

「……私は……チイをもっと信じたいのです。仲間のことを深く知りたいと思うのは、いけないことなのですか……？」

ぽつりとこぼれ落ちたアキノの言葉は、誰に届くこともなく、電子の海に溶けて霧散していく。

きつとアキノの思いは正しかった。だが、チイの拒絶も間違っただけじゃなかった。

だからこそすれ違ふ。正しさと過ちが、正解だけが常に正しいとは限らないこの世の、人の在り方から、電子の海にその意識を泳がせたとしても人の肉体が縛り付けて、傷つけあってしまうのだ。

そんな、どこにでもありふれた、それゆえに流れることのできない痛みは、今日はアキノとチイに降り注いだ。

ただ、それだけの話だった。

第二十話 「バエル・ラプチャー」再臨する悪魔の王

ガンダム・バエル。

現実を揺蕩う「愛香」の身体と意識が解け、電子の岸边へと押し流されて、「アイカ」へと姿を変えていくその刹那、愛香は昨日のバイトが終わった後に予習として調べていた白亜の悪魔——ソロモン七十二柱、その序列第一位に陣取る悪魔の王たるその名を冠するガンダムに想いを馳せていた。

ガンダム・バエルは特殊な兵装も、目立った射撃武器も搭載していない。

良くも悪くも、バエルについて調べた時、電子の海を漂う文字列は高頻度でその話題を出力している。

曰く、「豆鉄砲のような電磁砲と折れないといってるのに実際は折れたレプリカの剣しか持たない情けない機体。

曰く、乗っている奴の頭が致命的にバエっていたのが悪かった。

また曰く、トランザムシステムのような特殊兵装を積んでいないのが悪かった。

あれやこれやと、その極端な仕様と劇中におけるパイロットが滅びの定めを背負っていたからこそあまり芳しくなかった戦績を「自分ならどう改善したか」という話題について、バエルというガンダムは良くも悪くも事欠かない。

では愛香がそれを眺めた時、額面通りに彼女は「ガンダム・バエル」という機体を、弱くて情けないモビルスーツだと捉えたのか。

答えは、否だ。

愛香にとって、ガンダム・バエルとは悪魔の王たるその名に違わず、恐るべき存在に他ならなかった。

それを証明するように、愛香の意識が仮想の海に辿り着き、「アイカ」へと変じた今この瞬間も、アイカはいつものようにロールプレイを開始する、という意味でのセットアップたるルーティーン、「ノゾミ」と同じ決めポーズを取ることなく、バエルという機体の恐ろしさについて考え続けている。

バエルという機体にトランザムを搭載しようという試みは、このGBNにおいてもまたありふれていた。

それは、GNドライブというパーツがこのGBNにおける環境構築の一部として、何度も下方修正を受けて尚君臨し続けているというのもある。古い時代の動画サイトにおいてそのifを実現させた動画を見ていた人間が予想以上に多い、というのもある。

何故トランザムが強いのか、と考えた時、人は恐らく様々な理由を挙げるだろうが、アイカにとつてのそれは「機動力」の一言に尽きた。鈍足の機体がGBNという仮想の海において弱いなどという理屈はどこにもない。

アイカは知らないものの、全身を鈍重な特殊装甲で覆って敵へその印象を植え付けながらもおもむろに特殊装甲全体を一つの武器に変化させることによつて、ジャイアント・キリングを実現させるダイバーがいる。

だが、身も蓋もないが、足が速いというのはそれだけで、ハイスピードで様々な情報が画面上を移り変わっていく戦場において大きなアドバンテージとなる。

そして——バエルが恐ろしいのは、ブーストアップを行う特殊システムに決して頼ることなく、シンプルに「足が速く、力が強く、そして硬い」というその性質を持ち合わせていることに他ならない。

多彩な武装と阿頼耶識Type Eという特殊システムを搭載していたガンダム・キマリスヴィダールの喉元まで食らいつかんとしていたその姿は情けないどころか、もしも自分がマクギリスであったなら確実に諦めている、もいいうのが、実際にガンプラを動かしてきたアイカの所感だった。

キマリスヴィダールもキマリスヴィダールで多彩な兵装と時限強化、その手札の多さ故に扱いにはまた違った難しさが要求されるのだが——

「……あ、アイカさん……?」

「ねえ、エリイちゃん」

——勝てるかな。

震える唇でアイカは傍のエリイにそう零す。

バエルという機体は乗り手の腕とセンスを著しく要求する。まさしく悪魔と契約するが如く、その魂を髓まで捧げ切らなければ乗りこなすことはできないだろう。

だが、悪魔はその契約を何よりも誠実に履行する。

あのアリアが言っていたように、アグニカ・カイエルの魂を手にしたその時に、黄金の切っ先は「二桁の魔物」の喉元にも、果ては「一桁の現人神」へと届きうる可能性を、その力を操縦者へと与えるのだ。

エリイは、アイカに返す言葉が見当たらなかった。

アイカは自分なんかより遥かに勇気がある。

彼方より飛来したロングレンジ・ビームキャノンの一撃に、エリイは自身の機体が飲み込まれていくのをただ見ていることしかできなかったが、アイカは剣の切っ先でそれを受け止めるという、一か八かの賭けへと咄嗟に打って出た。

もちろん、分泌されるアドレナリンがそうさせていたというのもあるだろう。だが、あのモヒカンたちに怒りこそすれ恐れることをしなかったアイカが、明らかにあの悪魔の王に怯えている。

それがどれほど、恐ろしいことなのか。

重い沈黙が二人の両肩にのしかかった、その時だった。

「おうアイカ、エリイ。何辛気くせー顔してんだよ」

「こんにちは、アイカさん。エリイ。定刻通りですね」

フォース用のダイアログからアイカたちのログインを検知したのだろう。人波の中から、チイとアキノがその姿を現す。

バレエ・ダンサーのような格好をした幼い子供のような背丈のチイと、軍服を思わせる衣装をぴっちりと着こなした、アイカよりも頭一つ分背が高いアキノのコンビはまさしくデコボココンビといった風情だが、今はそんな冗談を飛ばせるほど、アイカの心に余裕などない。

別に、負けて損をするような試合じゃない。

むしろ負けて当然だと見るべきだろう。それで莫大な負債を背負うこともないのだから、それこそ気さくに話しかけてきたチイのように、フラットな気持ちで受ければいいのだろう。

それでも——何かを賭けた勝負事というのは、アイカの中で特別な意味を持っている。

思い出すのは、三年生の先輩が最後だからと棒を譲ってくれと暗に圧力をかけてきても、一年生の身でそのパートメンバーたる棒を奪い取った吹奏楽コンクールと、その結果。

二年生になっても、三年生になっても——アイカは、いや、「愛香」はその魂を燃やして、それこそ悪魔と契約を交わすが如く己の全てを捧げるつもりで努力を重ねてきたのだが、果たしてそれは全国への切符に届くことは一度としてなかった。

その悪夢が、生々しく今もアイカの中で諦めの棺に押し込められて眠っていたはずの「愛香」に滂沱の血涙を流させる。

「……なあアイカ」

「……ん、ごめん。ちよつと考え事してた。どしたのかなつ、チイチヤん☆」

「お前もしかして、あの暴走お嬢様に負けると思ってたここに立ってんのか？」

ロールプレイを思い出しながら極めて明るい声を作って答えるアイカに対して、チイの声は極めて冷ややかだ。

「えっ……」

「わりーけど、それなら降りろや。あのお嬢様は怒り狂うだろうが腹壊したとかそういうことにしてチイがなんとかしてやるし、アイカの分の金だつて分捕つてきてやる」

言葉こそ厳しいが、溜息混じりに唇を動かすチイの言葉を要約するなら、「別に嫌ならやめてもいい、その分他の三人でなんとかするし、それで勝つてもアイカの報酬に自分が手をつけることはしない」ということになる。

相変わらずの口の悪さと、そしてドライで遠慮しないチイの態度にアキノは少し呆れ返りながらも、それを咎めることはしない。

フォースリーダーが降りるというなら、それがメンバー全員であるうがリーダー自身であろうが、手足でありその一員にすぎない自分はそこに異論を挟まない。

それが、アキノの信条だった。

「言つとくけどな、チイはおめーが何に怯えてんのかとか、何があつてそうなったとか、そーゆーことには全然興味ないから訊くつもりもねえ、ただーチイはな、勝てると思つたからこの賭けに乗つたんだ」
「チイちゃん……」

「チイ一人であの暴走お嬢様とタイマン張れつつわれたらお断りだけどな、生憎こっちは四人いるんだ、三人寄つたら……まあなんやかんやあるって人間言うんだ、だつたら四人いりやなんとかなんだろ」

「……チイの言う通りです。私は……少なくとも、なんとかするつもりでここに来ました」

チイの言葉に全て本心が含まれているわけではない。だが、チイはそれを押し隠して、少なくとも嘘ではない、本気の含まれている叱咤激励をアイカへと飛ばし、アキノもその言葉に追従する。

「……アイカさん」

「エリイちゃんも……」

「……わたし……何もできないかもしれないかもしれませんが、役に立たないと思います、でも……でも」

アイカさんを信じています。

例えアイカがその挑戦を受けた理由があの場合を収めるためにとりあえず流されたからでも、そして今更になつて事の重大さに気付いて、過去のトラウマと重ね合わせていたのだとしてもーそこにどんな理由があろうと、自分は無償にアイカを肯定する。

相変わらずぼそぼそと小さな声ではあつたものの、エリイの言葉は確かな力を持つて、アイカの胸にその一矢を突き立てていた。

「……そっか、そうだよね、ごめん。あたしらしくなかつた」

「けっ、手間かけさせやがって……それでアイカ、何秒打ち合える?」
「……十秒」

「オツケーだ、聞いたなアキノ?」

「わかりました、以前は不覚を取りましたが……この『リビルドガールズ』の盾として、死力を尽くして護り通しましょう」

やれやれと苦笑しつつも、冷静に確認を取つたチイはその猶予を頭

の中に刻みつける。

アイカの答えは最大限の希望的観測だろう。何も考えずにあの暴走お嬢様が真正面から飛び込んできて、鏝迫り合いを挑んできたという前提でも、十秒持てば上出来。

だがそれは彼女が十分に自分を客観視できていることの証だろう。長くもなく短くもなく、今までの戦いとバエルという機体の特性から予測していたそれと一秒たりとも誤差がないその見立てに感心しながら、チイは脳裏で勝利への方程式ではなく、敗北の条件を組み立て始める。

「……この戦い、アイカがやられたら負けだよ」

「どうして？ アキノさんじゃなくて？」

「アキノについてはもうそういう話じゃねえ、例え死んでもやられてもらっちゃ困るんだ、ならアキノが死なない前提で話をした上で、完全に勝ちの目が消える条件があるならーアイカ、おめーの持つてるビルドボルグが潰されるこった」

チイの見立てでは、恐らくアイカの作ったコメットコアガンダムとビルドボルグはAランクか、もしかすればそれ以上に行けるポテンシャルを秘めている。

だが、それにはまだ色々なものが足りてないというのも事実で、それを埋めるのも簡単じゃないということだ。また事実だ。

それでも、例えば作り込まれた戦略級装備を持った初心者ジャイアント・キリングを起こせる確率などというものが天文学的とはいえ存在しているのなら、Aランク以上に届きうる可能性を秘めたその剣は、アキノのIフィールドソードを除けば「リビルドガールズ」で唯一、あのバエルに有効打になりうることに他ならないのだ。

「鉄血に出てくるナノラミネートアーマーはビーム兵器に耐性を持つてやがるから、エリイのビームはわりーけど当てにできねえ。そんでまた……チイのグラスランナーも色々あって、バエルと直接タイマン張れるような武器は積めねーんだ」

一応、アーミーナイフはコンテナの中にしまっているが、ナノラミネートアーマーの厄介なところはビーム兵器に耐性を持っているこ

とそれだけではなく、純粹に装甲として硬く、射撃属性、斬撃属性の武器に対しても軽減効果をパッシブスキルとして備えているところだ。

だからこそ、鉄血の機体はクセの強いトランザムの制動が課題となる太陽炉搭載機と異なり素組みでも扱い易く、またデフォルトで硬いという性質から初心者に好まれる傾向にあるのだが——それは割愛しよう。

要するにチイが棒立ちのバエルを相手にしてナイフを振り回したとしても、ダメージはそれこそたったの一桁程度しか見込めないということだ。

「……あ、あの……チイ、さん……その……この戦い、バエルを……撃破する必要は、ない、んですよね……？」

「おうよ、だからエリイ。お前は戦場を見て美味しいところをかつさらってくんた」

エリイやチイが考えていた筋書き通り、ステルスや目眩しを駆使して逃げ回ることとで宮殿に侵入し、そのままバエル・ソードを奪ってしまえるならそれに越したことはない。

だから、想定するのは最悪の中でも自分たちでなんとかできそうなコースとリカバリ案。三人がどうにか囿になつてあの暴走お嬢様とその執事を引き付けている間に、戦場の情勢を観察する力に一番優れているエリイがフィニッシャーになる。

頼むぜ、信じてっからよ。

ぶつきらぼうに背伸びをしながらエリイの肩に手を置いて、チイはかつかつと、高い踵を持つ靴がロビーの床を打ち鳴らす音が聞こえる方へと振り向いた。

「ごきげんよう、『リビルドガールズ』、そしてアイカさん……貴女に会えることをわたくし、一日千秋の想いで待ちわびておりましたのよ」

「あ、あはは……光栄です、アリアさん」

「あまり喋りすぎるとセバスチャンが怒り狂って胃袋に穴を空けてしまいますのと、何より同じアグニカ・カイエルの魂を持つ者同士無粋な言葉は不要……あのヴィーンゴールヴで、わたくしのヴァルハラ

で、貴女たちをお待ちしておりますわ」

参りますわよ、セバスチャン。

アイカたちが、アリアから提示されたクリエイティブミッションを承認したのを確認すると、マスター権限を発動させたアリアと彼女に付き従うミツルギの姿は「リビルドガールズ」より一足先に、ロビーから解けて戦場へと送り出されていく。

アリアは、笑わなかった。

それは取りも直さず、彼女が「本気」であることに他ならない。

じつと、アリアが一足先に解けていくそのテクスチャを見送りながら、アイカはごくりと押し寄せる緊張に生唾を呑み込みながらも、チイとアキノ、そしてエリイの激励を受けたことで大分クールダウンしてきた思考回路を再起動させる。

アリアは、確かに本気で自分たちに挑みかかってくるのだろう。

あの昼休みにエリイと……「絵理」と一緒に描いた勝利への方程式は十中八九崩されて、チイが提案した最後の勝ち筋ですら恐らくアリアは何一つ容赦せずに潰しにかかってくるはずだ。

だが、そこに絶対はない。そして、絶対の不可能に思えるそれを突き崩せる糸口があるのなら。

少し遅れて、アイカたちの意識と仮想の身体もまた戦場たる場所へと再構成されていく。

——あの人は、あたしの名前しか呼ばなかった。

仮想だというのに乾いた感覚のある唇を舌でしめらせて、アイカは己の内側で泣き喚こうとする「愛香」を黙らせるように拳を固める。

それは確かに、小さくとも、微かであっても、人が勇気と、希望と呼ぶものに、他ならなかった。

ヴィーンゴールヴ。北欧神話からその名を戴いたギャラルホルンの本部基地、その中心にミッションの勝利条件であるバエル宮殿は鎮座している。

原作のシチュエーションであれば多くの「グレイズ」やその派生型が侵入者たる「リビルドガールズ」を出迎えるのだろうが、黄昏に包

まれたその空は不気味なほどに静まり返っていて、グラフィック班が渾身の力で表現した美しさよりも、むしろおどろおどろしさのようなものを、アイカたちの胸に感じさせていた。

「無線観測機は……なる、撃ち落とさねえってか」

戦場に立つなり、チイはコンテナから展開した無線観測機をバエル宮殿のある方角へと真っ直ぐに飛ばしたが、相手はジャミングをかけるでもなくそれを撃ち落とすでもなく、見たいのであれば見せてやるとばかりにチイの偵察行動を容認していた。

舐めている、という訳ではないのだろう。

恐らくあのアリアの性格から考えれば、対等な条件を提示した上で、最悪不利を背負った上で、それでも勝利することを至上命題にしてあるのだろうか、単純にその非対称性を解消したかった、というだけの話なのかもしれない。

「……舐められたものですね」

「ありがてえこった、まあ舐めプだろうが真性だろうが……見なきやよかつたなんてことだつてあるんだぜ？」

いつもはその手に携えているIフィールドソードを背中にマウントする形で、両手にはシナンジュが持っているビーム・アックスーではなく、白銀に輝く日本刀のような武器を握りしめているミネルヴァガンダムからの通信ウィンドウに、アキノの少し不満げな顔が映し出される。

「えっと……なんて読むのこれ」

「ターンエーだ。あのミツルギつてやつ、ダイバーランクこそDだけど……まあなんつーか、そこはヘルムヴィーゲ・リンカーじやねえのかよって感じ」

アルファベットのAをそのままひっくり返した数学の記号をその名に冠する、チイから転送されてきたもう一機の敵機、その読み方に困惑するアイカへと冗談めかしてチイは返すが、冗談にでもしないとやってられない、というのが本音だった。

恐らくあの褐色肌の少年、その姿を形作ったアバターはそのガンダムが登場する作品の主人公、ロラン・セアックを意識していたのだら

う。

バエルの隣にいるのは、原作から考えればヘルムヴィーゲ・リンカー。その思い込みがチイの中にあつたのは確かだった。

だがここはGBNだ。内心で舌打ちをしながら、チイは己の甘さに憤る。

初代ガンダムがネオ・ジオングにラストシューティングを決めて、ジム・スナイパーイーが狙撃銃の代わりにバスターライフルを持てる世界で、ガンダムを知っているが故の先入観はほとんど通用しない。

実際それで先日「名機アルビオン」相手に大火傷をってしまったわけだが、いかにアリアのキャラがマクギリスになりきっている頭アグニカなものだったとしても、ミツルギについてはその例外だと考えておくべきだったのだ。

アイカは、そのガンダムを知らなかった。

ただ、度々「扱いが難しい機体」として、ガンダムベースシーサイド店におけるフードコート……G-Cafeにおいて、来客がGBNについて語り合うときはよくその話が引き合いに出されたことは覚えてる。

曰く、設定的には最強になれる機体かもしれないけれどこれを最強にできるのはGMの垢かそれこそチャンプ、もしくはシャフリヤールが数ヶ月、下手をするなら数年以上の作り込みをした時ぐらいだろう、とのことだ。

シャフリヤールとやらがどこの誰かは知らないが、チャンピオンと並び立てられる名前であるなら凄腕のビルダーであることに違いない。それほどの人物が時間をかけて、魂を削って作り込まなければその設定通りの力を振るえないガンプラであるなら、付け入る隙自体はあるのかもしれない。

一向に迎撃の気配がないまま、「リビルドガールズ」の四機はバエル宮殿のある区画まで侵入していたが、その時だった。

コンソールが開かれて、通信ウインドウがポップする。そして——『お聴きなさい、「リビルドガールズ」の諸姉！ 三日ぶりの眠りから……このアリア・ファリドの手によって、バエルは蘇りましたわ！！！！』

うるせえ。

反射的にコンソールの音量を低くしつつ、アイカはやたらとハイテンションな演説と共に、バエル宮殿の天井を突き破って上空へと飛び出し、原作では三百年、現実では三日ぶりに仮想の海で再現されたヴィーンゴールヴへと再臨した悪魔の王を睨み付ける。

『わたくしがこのモビルスーツを持つということがどのようなことであるのか……アグニカ・カイエルの魂を持つ同志であるならば最早言葉がなくなるともわかるでしょう!!! ランク、全塗装、ミキシング、素組み……その全てに関係なく、このわたくしにアグニカ・カイエルの魂、その輝きを見せつけなければならぬと!!!』

今アイカがコメットコアガンダムに持たせていたものがバイト帰りに駆け込みで購入したHGUC陸戦型ジムに付属していた100mmマシンガンではなく、それこそHG鉄血のオルフェンズオプションパーツトシリーズに付属する大型レールガンであったなら、今の瞬間に即座にぶっ放していたところだろう。

「敵影確認……なるほど、あのターンエーは最後の門番って風情か」
『さあ、もう平穩は楽しんだでしょう！ アリア・ファリド、ガンダム・バエル——』

「さつきから一々声がうっせえんだよバカ!!!」
ハイテンションにクソデカ音量で名乗り口上を述べようとしたアリアの言葉を遮るように、チイはコンテナからありったけのスモークデイスチャージャーを取り出して、周辺へと一気にばらまいた。

朦々と立ち昇る煙の中にはビーム攪乱幕として高濃度のミノフスキー粒子が封じ込められており、ビーム軽減については役に立たないものの、相手のレーザーを封じ込めるといふステルス効果についてはその力を遺憾なく発揮する。

『ほう、攪乱幕……弱者が生き残るために手を尽くす、それもまた戦いの真理』

アリアは朦々と立ち上り、視界を灰一色に染め上げる煙に巻かれても尚、その余裕を崩さず、静かにそう呟いた。

リビルドガールズの斥候にして銭ゲバ、チイという女が搦手を得意

としていることは、アイカがビームをビルドボルクで受け止めて果敢に突撃していくシーンをが空くほど見返し、一応全てには一回だけ目を通した「名機アルビオン」との戦いで把握している。

——しかし、哀しいかな。

弱者の兵法。それは強大な壁を打ち破るといふ条件下において卑怯などと罵るのではなく、最大限に称賛されなければならない。己の知恵を尽くし、絶望を切り開いていく姿は美しいものなのだから。

だが、アグニカ的ではない。

アリアは言葉には出さず舌の上でその言葉を転がすと、何一つ原作における姿に手を加えず、逆に言えば有名アニメーターが全力を尽くして描き上げた、その「バエル」の悪魔の王たる全身に鋭くエツジの立った勇姿を、HGという安全基準が課されたガンプラを芯に徹底的な改修を加えることで寸分の狂いもなく再現していた。

そしてその造り込みは、並のトランザムシステムを置き去りにする「速度」をバエルへと与えている。

煙幕の中を、一筋の閃光、その一矢となって翼を広げたバエルが駆け抜けていく。

アリアが最初に狙いを付けたのは——

『心が躍る……！』

『ひうつ……！?』

「エリィ！ クソつ、てめえ、弱い奴から狙うとかアグニカはどこ行きやがったんだよ！」

煙が覆い尽くす前に立っていた位置から進撃地点を割り出したアリアのバエルは、まずその標的をエリィのヘイズルIIとしていた。

チィは咆哮し、煙幕を張ったことが逆効果になったのを後悔しながらも、自身へとヘイトを向けるためにありつただけの侮蔑を込めてアリアを挑発する。

『勘違いしないでいただきたいことですわね。確かに弱者を一方的な暴力で捻じ伏せるのはアグニカ的な戦いではありませんわ、ですが！』

バエル・ソードの一撃が、盾による防御を試みたヘイズルIIの左

腕をそのシールドごと一刀の下に撥ね飛ばす。

暴力。吹き荒れる嵐のように圧倒的なその力は、例え相対したのがエリイでなかったとしても同じ結果をもたらしていたことは想像に難くない。

エリイは咄嗟に残された右腕が保持していたビームライフルでの反撃を試みるも、左手の剣はそれを許さずにビームライフルを切り裂いて、大きく体勢を崩したヘイズルIIを無慈悲にバエルは蹴り飛ばす。

「……………か、はっ……………こほっ……………!」

「エリイちゃん!」

『そう、勘違いをしないでいただきたい。この戦いは……………わたくしがアグニカ・カイエルの魂を見せる戦いではありませんわ、貴女たちが! わたくしに!!! その魂の輝きを、純粋な力のみが示す可能性とその真実を見せるための戦いでしてよ!!!』

自身の方に吹き飛ばされてきたエリイの機体を気遣っている余裕もなく、反射的に構えたアイカのビルドボルグと、アリアが勢いを殺さぬままその両手でX字状に交差させる形で構えたバエル・ソードが交錯する。

——受け止めることはできた。だが、受け止めきれない。

アイカの予感の外れることなく、バエルが誇るその翼状のスラスターから叩きつけられる推進力が、そして強靱な構造のガンダム・フレームが生み出す脅力へと上乘せされて、コメットコアガンダムを弾き飛ばす。

悪魔の王はここに目覚めた。

そう主張するかの如く、立ち昇る黒煙の中で、ガンダム・バエルの双眸が妖しく、その赤い煌めきを放つ。

己に立ちはだかる全ての奇跡を拒絶するように、そして全ての可能性を踏みにじるように、アリアはミラーージュ・コロイドを起動して距離を取ろうとしていたガンダムグラスランナーに電磁砲による一撃を加えると、吹き飛ばされて膝をついたアイカの元へと悠然と歩み寄っていく。

『さあ……本当の暴力というものを教えて差し上げましょう……そして……』

「っ、ああああッ！」

『見事にこのわたくしを打ち破り、黄金の剣をその手にして見せなさい！』

アドレナリンが導き出す本能が赴くままに牙を剥き、アイカが立ち上がると共に振るったビルドボルクの一撃を受け止め、アリアはいつになく己の中で高ぶる恍惚に身を震わせながら、凜としつつもどこか愉悦の艶を帯びた声で、そう宣言するのだった。

第二十一話 「燃える誇りが奏でる調べ、執事、アグニ力ならずとも」

バツッかじゃねーの。ウツッだろお前。

ステルスさえ咎めて、牽制というにはあまりにも重いダメージを受けたチイは操縦桿に頭をぶつけながら、そんなことを呟いていた。

獅子は兎を狩るのにも全力を尽くす。

気高い志を抱く者たちが少なからず座右の銘としている言葉だが、それに対して二兎を追う者は一兎をも得ないんだぜ、とニヒルに返してきたチイだが、走馬灯のように脳裏をよぎっていたのはある掲示板でのやり取りだった。

『二機を撃破しようと思えば追いかけてたら一機も撃破できずにやられました、自分はどうすれば良かったんでしょ』

『二機に追いつける足回りや範囲攻撃を持ってなかったことが悪い』
いや何の冗談だと、片追いかそがGBN、ひいてはそのルーツとなるGPD、それより遙か昔のゲームセンターに並べられた、100円を入れてレバーをガチャガチャするタイプのゲームにおいても定石だった^世が、その^末質問と^カ回答が出てきたのがハードコア^世デ^末イメン^カシ^カン^カ・^カヴ^カアル^カカ^カス^カレ^カであつたことを鑑みるなら、ある意味その狂った回答は妥当なものだといえる。

それが実現できたら苦労はしない。

誰もが異口同音に叫ぶその言葉を実現してこそ修羅の中の修羅であるヴァルガの住人、そしてその修羅たちすら裸足で逃げ出す三桁の魔物や三桁の英傑たちなのだ。

駆け抜ける嵐の如く振るわれるアリアの「暴力」に戦慄しながらも、四対一という不幸中の幸いが僅かに作り出してくれている時間の中で、チイは考える。

(……ブチ切れて周りこそ見えなくなってるけど思った以上にアイカはやるな、アキノも多分すぐに合流する……んで、隠れても咎めてくるってんなら役立たずはチイの方が……クソっ)

トランザムシステムを始めとした特殊兵装は、当たり前だが使用後の再使用に多かれ少なかれリキャストまでの時間、クールタイムを必要としている。

その仕様は非常に複雑で、例えば三分間トランザムを発動できるガンプラがいたとして、その機体が二分でトランザムを一旦止めた場合、リキャストは発生しない。

残り一分という時間に関しては「一回の発動」に含まれているため、内部的には「使い切った」という判定が下されていないためだ。

では、その三分間トランザムをできるガンプラが、トランザムを発動した瞬間に大きくよろけを取られるなりダウンを取られた場合、残り二分数十秒は即座に発動できるか。

その答えは否だ。発動モーションが相手の攻撃によってキャンセルされた場合、システムは無慈悲にもそれを「一回の発動」と判定し、非常に長いクールタイムと、トランザムの場合は性能低下というデバフを背負わされることになる。

GNの環境構築に、確かにトランザムを使えるGNドライヴの存在は長くその名を刻んでいる。なればこそ、その対策として効果時間が切れるのを待つのではなく、初手でトランザムをキャンセルしてしまえばいい、という選択肢が挙げられるのだから、太陽炉は単純に積み得なパーツだというわけではない。

チイが発動しようとしたミラーージュ・コロイドは何かキャンセルによる後遺症となるデメリットを背負う訳ではないが、発動中に被弾した場合受けるダメージが1.5倍になるという弱点はしっかりと設定されている。

だが、その間は全ての攻撃の持つ誘導効果を、発動したその瞬間に切るように設定されているのだ。

それに対して強引に発動のタイミングを見計らって軸合わせと弾速で当ててきたエリアの技量はSランクに相応しい驚異的なものであったといっていいだろう。

膝を突きながらもダミーバルーンをばら撒きつつ、チイは煙幕の中を駆け抜ける。そして。

「アイカさん、スイッチを！」

「……ッ、はい、アキノさんっ！」

『なんと無粋な……！』

アイカはブチ切れていた。

シンプルに彼女の心境を表すのであればこうなるのだろう。しかし、その怒りをこそ待っていたというように、がむしやらに叩きつけられるアイカの太刀筋を全ていなしながら、社交ダンスでも踊っているかのような至福のひと時を過ごしていたアリアの恍惚は、乱入してきた二刀流のシナンジュ——の顔とアンテナをユニコーンガンダムのそれに置き換えたアキノの機体、ミネルヴァガンダムによって中断される。

しかし、Aランクまで上り詰めているというのなら彼女もまたアグニカみがある存在だといえるのだろう。

ドス黒い怒りに染まりかけた心を落ち着かせるように、しかし無慈悲にバエル・ソードを振るいながら、アリアは乱入者へと荒ぶる太刀筋を叩きつけていく。

無茶苦茶な勢いで繰り出されているその斬撃は、しかして無軌道なものではない。

受け止めるたびにガリガリと耐久値のゲージが削れていく自身の愛刀——もとい、かつてそうであったもののステータスが映し出されるコンソールを一瞥し、アキノはこめかみの辺りにじわり、と脂汗を滲ませる。

暴力とは闇雲に振りかざすだけでは三流、振りかざすべき時を見極めてようやく二流、そして怒りを仮面の下に押し込めて理路整然と振るえてこそ初めて一流。

アキノとの打ち合いに怒りを覚えながらも、敬愛するマクギリス・ファリドの姿を脳裏に描き、それを落ち着かせながらあくまでアリアは、その刀をへし折ることを目的とした、あえて刃と刃をぶつけるといふ愚策にも取れる行為へと走る。

バエル・ソードは不壊不朽の剣である。

それがもちろんインストに描かれたフレーバー、物の例えであるこ

とはアリアとしては百も承知だが、それでも設定的に強靱なレアアロイで鍛えられたその剣は、並の実体剣よりも遥かに耐久値の値が高く、そして摩耗しづらいという特性を持っているのもまた事実だ。

『良き太刀筋です、誇りある……貴女の気高き信念をこそ感じさせる真つ直ぐさ、称賛に値します』

「貴女のそれも……無軌道で奔放に見えながら、理路整然と振るわれる。そこに私は恐ろしさすら覚えます」

『あら……光栄ですわね。ですが』

——より強き、怒りでなくてはわたくしには届かない！

目を見開き、犬歯を剥き出しにして笑うアリアの姿は、本当に口ビーで高笑いと共にむせ返っていた人物と同一のそれであるかが疑わしくなるほどに狂氣的な、殺意に満ち溢れたものだった。

純粹な怒りが、荒れ狂う暴力が黄金の刀身と共に、アキノが携える二本の白銀——かつて誇りに包まれた、その証であった刀をへし折つて、その刃は無惨にも地面へと突き刺さる。

「アキノおッ！」

『セバスチャン！』

『はっ、お嬢様！』

チイがコンテナからアーミーナイフを取り出し、時間稼ぎのカバーに入ろうとしたその瞬間を見計らって、アリアはバエル宮殿に待機させていたミツルギの▽ガンダムを呼び寄せる。

流石に、瞬間移動までは再現されていない。

スラストーベーンに光を灯し、重力に逆らうかのようにふわりと浮き上がって空を飛ぶそのターンエーは、本来持っている得物の一切を捨てて、ヘルムヴィーゲ・リンカーの大剣だけをその手に携え、機体の色も剣の持ち主を意識したものに塗り替えられていた。

——訂正しよう、やっぱりこいつはバエルに、マクギリスに狂っている。

チイは即座に得物を腰部ラッチのビームマシンガンに切り替えて、煙幕の展開時間が切れた戦場へと乱入してきたターンエーへと牽制射撃を放った。

だが、放たれたその全てを悠然と装甲厚で受け止めながら、乱入者はずしん、と、鈍くも他の機体のそれよりは軽い印象を受ける響きを立てながら何事もなかったかのようにその両足を地面へと着ける。はつきりいつてしまえば、状況は最悪の一言に尽きた。

「エリイ、使え！」

「……は、はい……！」

「アキノとアイカが足止めされてる以上、こいつはチイたちで殺るつきやねえんだ！」

二挺あるビームマシンガンの片方を、まだ右腕が生きているエリイへと譲渡して、自身が放棄したアーミーナイフを回収しながら、チイはミツルギの機体に牽制射撃を加え続ける。

それならヘルムヴィーゲ・リンカーでもいいんじゃないかと問いたくなるほど力任せに攻撃を受け止めながら、地面を深く穿ってクレターを作るほどの膂力で大剣を振るうターンエーは、チイとエリイにとっては脅威以外の何物でもなかった。

だが敢えてターンエーをヘルムヴィーゲ・リンカーと同じ色に塗って、同じ武装を持たせるところにあのミツルギという男のこだわりがあるのだろう。

厄介だし今でも対面にいることが嫌で仕方ないものの、そういうことだわりは——恐らく、理論上最強のガンダムを主人の盾としたい、というガンプラに込められた想いに関しては、チイは嫌うことなどできないし、むしろ好ましいとさえ感じていた。

それはそれとしてそのバカ力とチンパンムーヴで叩きつけられる大剣は紙装甲を地で行っているチイとエリイにとっては掠つただけでもほぼアウトであるが故に、厄介で厄介でしょうがないのだが。

「こんちくしょう、チイは生まれの不幸を呪うぜ……！」

「……あ、諦めないで、ください……！」

「へっ、エリイのお説教とはね……だがその通りだ、悪いが400万B Cきっちり取り立てるまでチイはぜってえ死なねえからな！」

幸いなことに、ミツルギはランク通りあまり戦いに慣れていない。力任せに大きくて分厚くて大雑把な剣を振るうだけだし、恐らくそ

れを理解した上で、主人の言いつけ通りにチイをアキノとアイカに合流させまいとしているのだろう。

——だが、脳筋を嵌めて殺すのはチイの十八番だ。

あくまで、エリイを最後まで生かすことを頭に置きながらも、チイは即興で勝利への方程式・アドリブパフォーマンスを組み立てながら、のらりくらりと、あくまでも付かず離れず、アキノとアイカが持ち堪えてくれることを祈りながら、ミツルギの判断力を鈍らせるように回避重視の立ち回りを見せるのだった。

「スイッチですー！」

「はいー！」

輪舞、輪舞、輪舞。

めくるめく斬撃の嵐の中で、得物をIフィールドソードに持ち替えたアキノとアイカは、バエルが振るう攻撃を交互に受け止めるように、各々が逃げる方向と、攻撃を弾く角度、そして攻撃を与える時のモーションをオーバーヒートを起こしかけている思考回路で瞬時に計算しながら、なんとかアリアの猛攻を凌いでいた。

スイッチ、という単語を合図にして、バエルと五秒ほど打ち合っていたコメットコアガンダムがバックブーストを蒸して全力で退避し、そこにアキノの機体が大振りな一撃で割って入る。

不器用ながらもテンポを保った連携は、できて間もないフォー스としては上出来であるといえ、それはアキノの性格と経歴がそうさせているからこそ自分が生きながらえているのを、アイカは自覚していた。

だが、このままでは輪舞というより円舞曲だ。

戦争、平和、革命を終わらない円舞曲と題したガンダム作品がガンダムベースの特撮コーナーに設置されたモニターに時折流されるが、今のアイカたちはさながら防御、回避、攻撃の三拍子を目まぐるしく繰り返している。

だが、それは決して終わらないワルツなどではない。

アイカは、憔悴していた。あまりにも集中力を要求されるこのス
イツチ戦法による千日手だが、その延命は恐らくあと二から三セット
が限界だろう。

アキノもそれをわかっていて、自身が請け負う時間を意図的に増や
しているのだが、大剣と双剣、それぞれが得意とする得物の性質とそ
の違いが、今は不利に働いていることでそれも数十秒が限界だ。

『ふふふ……あはは……あーっはっは！ 愛おしい、愛おしいですわ、
そして狂おしいですわ、憎いですわアキノ・ベルナル！ 遅延行為
などアグニカからは程遠い！ わたくしを失望させないでください
ませ、「リビルドガールズ」！』

何時間も打ち合いを続けているような疲労感がアキノたちを包み
込んでいたものの、時間に換算すれば物の数分、疲労など全く感じさ
せないハイテンションな叫びを上げながら、今度はそのＩフィールド
ソードをへし折ることで絶望の証明とせんと、アリアは口が裂けんば
かりに口角を釣り上げた狂気的な笑みを浮かべながら、バエルの赤い
双眸に怒りの輝きを灯す。

「……っは、はあ、っ……あ、っ……」

ちらりと横目で一瞥したコンソール、通信ウインドウの中に映って
いるアイカは明らかに肩で息をしていて、その呼吸も苦しそうだ。

過度な集中を短時間に強いられるからこそだろう。実際アキ
ノもその時は五感のフィールドバックこそ実装されていなかったもの
の、過去に似たような感覚に陥ったことがある。

ならば、このまま千日手を続けたところで全滅だ。負ければ何の意
味もない。

決戦前夜に、チィから贈られた言葉を思い返ししながら、アキノは素
早くコンソールを操作して、「その項目」を呼び出した。

——勇氣。

そんなものが、今の自分に残っているのかどうかなどわからない。
かつての自分はチィが評したように何も恐れなかった。銀の誇り
が、その誇りが証明してくれる正義が背中を押してくれたからこそ、
アキノは何者をも、それがブレイクデカールと呼ばれる、機体を大き

くパワーアップさせるチートツールを使用して、数を頼みに立ちほだかつてくるような輩——マスダイバーの集団であつても恐れずに戦い続けることができた。

——自治厨。気持ち悪い。なんでそんなことに拘つてるんだ。

そこに賞賛などありはしなかった。それでも尊厳があつたから、正義を信じていたから、戦つてこられた。

敗北を喫したマスダイバーが吐き捨てるように言った。そんな連中に嬉々として喧嘩を売りに行く自分たちを見て、ロビーを歩く名前も知らないダイバーが言った。

それでも。

「……アリア・ファリド」

『いかがいたしましたか、アキノ・ベルナル？』

「貴女のご期待に添えるかどうかはわかりません。ですが……：退屈な輪舞にも飽きたでしょう。なれば……：アイカさん、申し訳ありません。私は……：賭けに出ますッ！」

アキノはそう宣言して、迷いなく「必殺技」の発動を選ぶ。

必殺技というのは、Cランクから解禁されるものであり、主に戦ってきたダイバーの思考パターンや感情データを分析することで、ガンブラの完成度と照らし合わせてバランスこそ取るものの、ある程度思い描く形の技を自由に習得することのできる、端的に言えばVRMMOにおけるユニークスキルのようなものだ。

アキノが以前、「名機アルビオン」と共に戦った際、その発動を渋っていたのには当然理由がある。

必殺技の発動と共に、手に持っていたIフィールドソードが解けて、シナンジュが持つサイコ・フレームの光に共鳴する形で、炎のようなエフェクトへと変わり、その全身を包み込んでいく。

強力な力には当然、その反動が存在する。

例えば武器を強化する必殺技があつたとしよう。それはわかりやすく強力な一撃を放ち、攻撃が通用しないような格上にも当たればワンチャンスをもぎ取れる可能性をガンブラに与えてくれるが、その代償は武器の喪失という形で現れる。

必殺技中に倒れてしまったものの、ハマモリのユニコーンガンダム・フルバーニアンが抱えていた代償は、機体性能の九割にデバフがかかった上でその試合中は二度とNT-Dを発動できなくなる、というものだった。

そして、アキノは。

アキノのミネルヴァガンダム、その全身がIフィールドソードが還元されて出来上がった炎に包まれる。

「——モード・ブリューナク……私の、銀の誇りにかけて！」

『素晴らしい……さながら太陽の鎧、守護の女神アテナがごとき勇壮さですわね。ですが……言葉など、戦場では何の意味もありませんわ、貴女がもしも己の誇りを懸けるなら——』

「わかっていきますッ！ この剣で示す！」

燃え盛るミネルヴァガンダムが、炎を纏う形で強化されたビーム・トンファーを展開して、振り下ろされたバエル・ソードを受け止める。

「せいやあああッ！」

『なんと……ッ！』

挟み込むようにして受け止めた、バエルの右手が持っていた黄金の剣をアキノはそのまま力任せに引きちぎり、刀身を破壊した。

必殺技によるブーストアップもあるものの、炎上効果を持つそれ以外のビーム属性から一時的に脱却したことで、「不定形の物理攻撃」とでも呼ぶべき、ビームと炎の両方の性質を持つものに、変化を遂げていた。

モニターに表示される時間は、百八十秒から何もせずとも刻々と、そしてアキノがビーム・トンファー改めミネルヴァ・トンファーを振るうたびに浮かぶ数字は大幅に削られていく。

原理的には、サイコ・フレームがオーバーロードを起こしたことでアクシズ・ショック時における高熱を、シナンジュとそのサイコフレームに宿る彗星の残滓が思い返し、サイコ・シャードと同様の効果によってその、あり得ざる炎を実現させたという設定をアキノは描いているのだが、GBNがそれをどこまで拾ってくれたのかはわからない。

だが、威力という面においては確実に、システムもその、きっと将来思い返した時に枕に顔を埋めて足をバタバタとさせたくなる、だからこそ魅力に溢れているロマンを理解してくれたのだろう。

同時にシステムは残酷だ。

その夢を思い描ける時間は何もせずとも三分間、何かをすれば当然のごとく刻限までの時間は大幅に削られて、まともに稼働できるのは概ね一分が限界だと、アキノは確信していた。

ならばこそ、その一分にこそ乾坤を賭し、一擲と成す。

空中に飛び上がる形で一時退避したバエルを、ミネルヴァガンダム・ブリューナクは猛追し、その拳を目にも止まらぬ速さで叩きつける。

なれど、アリアはクレバーだった。

バエル・ソードは残り一本。迂闊に潰すわけにはいかず、そしてこのバエルは徹底的な改修と作り込みを得ていることで、ナノラミネートアーマーのビーム攻撃——熱を伴うそれに対して、大きな耐久性を得ている。

しかしながらあの赤きガンダムは、このバエルの肉を焦がして骨まで絶たんとする驚異的な力を見せてつけてくれた。

——ああ。

僅かな焦りに、額へ汗を浮かべながらも、ぞくぞくと下腹部から脊髄を伝って、甘く脳を焦がすような興奮にアリアは打ち震える。

間違いない。この輝きこそが、乾坤一擲を為そうとするその姿こそがアグニカだ。

悔っていた。チイという女は最初から論外で、エリイについてはまだよくわからないが、アキノを「アグニカではない」と評したのはあまりに早計だった！

じぐざぐとその軌跡を焼き付けるように燃え盛り、空を駆けるミネルヴァガンダム・ブリューナクと、その炎に身を焦がしながらも機動力では互角以上に食らいつき、徒手空拳を武器としてバエルは互角に殴り合う。

『あ、ああ……嗚呼……ッ！』

「何を……っ!」

『最高ですわ、嗚呼! なんと! 生きていることの素晴らしき! わたくしは先ほどの非礼を詫びましょう、アキノ・ベルナール! 貴女もまた……素晴らしきアグニカ・カイエルの魂を持つ者おッ!』

波濤のごとく押し寄せてくる愉悦に、とろりとその目を熱に浮かせ、まるで愛しい恋人と深いベールを交わしているかのように、艶を帯びた声でアリアは叫ぶ。

劣勢だった。頭部のアンテナは片方がへし折れ、左の翼もあの焰の剣に焼き払われた。

敗北への予感がアリアの脊髄を伝う。だが、この瞬間こそが、希望と絶望が曖昧になって融け合っていく感覚が、アグニカ・カイエルの魂が自らの心臓と完全に癒着して、マクギリス・フアリドのそれと同じ血液を身体の中へと送り出しているその至福の錯覚こそが、アリアに何よりも深く生きている喜びを与えるのだ。

ああ、なんと。そのなんと素晴らしいことか!

声にならない叫びを上げて、アリアはその身を灼かれ、骨を焦がされながらもミネルヴァガンダム・ブリューナクへと渾身の正拳突きを放つ。

残り時間は、三十秒を切った。

故にこそ、今が好機。今しかない。

閃光のように、駆け抜ける光のように、この一瞬にこそ全てを燃やし尽くす!

アキノは放たれた正拳突きを下から払い退け、バエルの体勢が大きく崩れたことを見計らって、左足での回し蹴りを入れた。

そして、今ミネルヴァガンダムを燃やし尽くしている彗星の残滓が、サイコ・シャードが作り出す炎の結晶を足場に全力で機体を加速させて、赤い彗星がそうしていたように、炎を纏った全力の蹴りを――否、機体そのものを燃え盛る一つの槍として、体勢を崩し、距離を離れた悪魔の王、その心臓を穿つべくスロットルを全開にする。

「ブリューナク! これでええええええッ!!」

『ああ、何という至福……ッ!』

『お嬢様あああッ！』

だが、その幻の炎を纏うあり得ざる槍が導き出そうとした答えは、乱入者の咆哮によって無情にも棄却された。

すばしっこく逃げ回り続けていたガンダムグラスランナーの半身をもぎ取り、ヘイズルイーの両脚を奪い取るという戦果を挙げたミツルギのターンエーガンダムが、直撃の寸前にアリアのバエルを弾き飛ばして、自身をその生贄とする。

『ミツルギ、何を……！』

『……お嬢様、差し出がましい真似をいたしました。しかし、僕は……いえ、わたくしは、貴女が敗ける姿など見たくはないのです……』

衝撃のフィードバックによってコックピットの背面へと思いつき叩きつけられながらも、ターンエーが爆散する僅かまでの間に、ミツルギはそう言葉を残して儂く笑った。

アリアが、凜音が歪んでしまったのは自分のせいだ。ミツルギは、いつもその後悔を抱いて、主人と共に電子の海を彷徨っていた。

良かれと思つて、ハッピーエンド故にその入り口としてミツルギー石動が、劇場版機動戦士ガンダム00を、いつも退屈に涙を流し、枯れていく木をスケッチブックに写し取るばかりだった凜音へ、娯楽として勧めたのが、彼女がここまでガンダムにのめり込む原因だった。

だが、凜音はハッピーエンドを好まなかった。

過酷な生まれで、無学の身であるが故に破滅していく鉄華団や、友情や愛情を理解しながらも己の過去と、払い続けた犠牲のためにそれを拒み、力によって世界を変えようとしたマクギリス・ファリドの生き様にこそ深く共感し、結果として枯れ木を描くのが「鉄血のオルフェンズ」で描かれた悲劇に祈りを寄せるだけが変わってしまったのだ。

それでも、GBNと出会った時に、初めて凜音は笑っていた。

あの「ビルドダイバーズのリク」が見せてくれた奇跡は、確かに彼女を救っていたのだ。

なればこそ、そんな救われた世界でも凜音が敗北に悔しさを覚える

姿など見たくないと思ってしまふのは、執事故のわがままか——言葉にする間もなく、ミツルギとターンエーのテクスチャは消滅し、そのシグナルはロストする。

そして、それはアキノも同様だった。

ミネルヴァガンダムを包み込んでいたあり得ざる焔が焼くのは敵機だけではない。

必殺技の代償——サイコ・シャードの暴走と機体のオーバーロードによって、ミネルヴァガンダムとアキノは電子の海にその姿を散らしていく。

「すみません、アイカさん……仕留め、切れませんでした……」

「アキノさん……っ！」

ああ。なんと自分は無力なのだろう。

アバターのテクスチャが崩れていく中で、レッドアラートの中心に黒帯が浮かぶ、撃墜状態のコックピットで、アキノは深く傷つけどまだ健在であるバエルへと手を伸ばし、それを戦闘における最後の言葉にするのだった。

第二十二話 「キズアト／キズナ／或いは、あたしの蹉 跌と再生のこと」

アキノが斃れた。

それは取りもせず、アイカたちに勝利の女神が福音をもたらす可能性が閉ざされたことと直結していた。

アキノが稼いでくれた——本来はバエルを仕留めるつもりだった——時間で乱れた息を整えながら、アイカは空中で静止するバエルを睨みつける。

『ふ、ふふ……ふふふ……』

「な、なに？」

『ミツルギ、困った人ですわ……しかしッ！』

コックピットにポップする通信ウィンドウの中で、アリアはどこか呆然と放心していたように笑っていたが、それも束の間。

バエルの双眸が今までよりも一段と強く、鋭く輝きを放つ。そして瞳が尾を引く残光はまさしく、バエルではなく——ガンダム・バルバトスルプスレクスがその限界を超えた姿を想起させるものだった。

『バエルに追加する武器など無用！ ただこのわたくしの……アリア・ファリドの魂をこそ吸い取って燃え上がりなさい、そしてわたくしに……もつと力を寄越すのですわ!!』

彗星が走った。

そうでなければ、流星が駆け抜けたか。

一瞬、アイカには目の前に映る光景が、そうとしか見えなかった。

片翼を潰され、スパークしていた左腕はどうとうそのリミッター解除に耐え切れず炸裂し、堅牢であるはずの極めて完璧に作られたナノラミネートアーマーは溶け落ち、所々に覗くガンダム・フレームを露出させていながらも、相対するバエルの全盛期は今、この瞬間だった。

瞬く間に、右手に構えたバエル・ソードが繰り出した音越えの刺突は、辛うじて僅かに操縦桿を傾けることで頭部の全損という事態こそ避けられたものの、コメットコアガンダムの頭部、その右側は無残に

砕け散り、首との接続部が見えるほどの損傷を負っていた。

——掠めただけで、これか。

アイカの中で、ぷつりと何かが切れるような音がした。
わかっていた。

自分に才能なんてものがないことぐらい、ただ言われた通りに目の前に出されたものをなぞるだけで、そこに何か「自分」があったことが、誰よりも一生懸命に練習したとしても、それは「要領のいい」練習だったことが、あっただろうか。

心の棺に押し込めて埋葬したはずの「愛香」が鎌首をもたげて、血の涙で濡れた冷たい手を「アイカ」の頬に触れ合わせる。

——ねえ、だからもう、わかってたんでしょう？

この「アイカ」という姿も、コメットコアガンダムも、ゼロベースで「愛香」が考えて生み出したものじゃない。

ただ弾かれるように、青春という一時の過ちが許容してくれる全能感や情動に酔って生み出した、あの値段もつけられずに出品期限を終えた手芸品たちと、譜面通りに演奏しているだけで何の面白味も思いも感じられないと評されたソロパートと、自分より遙かに走り込む時間が少なかつた人間にかっさらわれた一位と、おんなじなんだよ。

棺を飛び出た「愛香」は血の涙を零しながら、「アイカ」の耳元へ優しく、どこまでも優しく——その心に寄り添って撫で回すような声音で囁きかける。

あのハマモリという人に偶然勝ったから勘違いをしてしまっただけで、自分なんてこんなものだ。

そうして、GBNも捨ててしまえばいい。

だって今まで、そうやって捨ててきたんだから。まだあと二年と大進に進むつもりならあと少し、そうやって意味もなく捨っては捨ててを繰り返すことを、時間は許してくれるんだから。

どこまでも甘く、優しく、「愛香」は「アイカ」に語りかける。

中学三年の卒業式、高校に進んでも連絡を取ると言って以来一度も更新されたことのないメッセージアプリが鳴動し、震える腕でそれを掴めば、タイムラインに「諦めたら？」という文字が浮かび上がる。

ああ、そうだ。

一秒がどこまでも、薄く、長く、刹那が永遠に引き延ばされていくような錯覚の中で、アイカはまた、果てしない海に溺れていくような感覚と共に、血の涙を流しながら自分を抱きしめる「愛香」の言葉に耳を傾けようとしていた。

——どうせ、無理なんだよ。

何時間もかけてアイドルみたいなアバターを作って、何時間もかけてアイドルみたいな衣装を、バイト代をBCに変換して作り上げて。それでやっていることは何？

あの「ノゾミ」みたいに歌って、踊って。それすらしないで流されてガン普拉バトルをやっているだけなのに、最初から期待することが間違っていたのに、何を今更期待しようとしていたの？

段々と、アイカは「愛香」の声が自分のそれと重なっていくのを感じる。

ああ——そうなんだ。そうだよ。だって、「愛香」は。

愛香は、あたしだもん。あたしが言ってるんだから、きつと間違いないんだ。

そんなこと、理解しなくなかった。

微かに残った「アイカ」が、必死に血塗れですがりつく「愛香」を引き剥がそうとするけれど、アイカの指は、操縦桿から離れかけていた。

——じゃあ、何のために？

ふと、心に囁きかける声が聞こえた。凧いだ湖面に雫が落ちるように、その、どこかで聞いたことがあるけれど思い出せない声が続ける。

何のために、捨ててきたの？ 誰のために、捨ててきたの？

決まっている。全部自分だ。

もうこれ以上傷つきたくないから。もうこれ以上自分が何をすることも、何の資格だって持ち合わせていない人間だってわかりたくないから。

だって、痛いのはもう嫌なんだもん。誰もあたしにどうすればいいか、何をするのが正しかったのか、教えてくれないんだもん。

引き延ばされていく時間の中で、ゆつくりと涙の雫が、無色透明な血液が、アイカの眦に滲み、重力に引かれてこぼれ落ちていく擬似感覚がフィードバックされる。

——違うよ。

その「声」は、静かに首を横に振った気がした。

そして、その「声」が、段々にその輪郭を、形を、記憶を取り戻していくような錯覚が、血塗れになったアイカの心を洗い流すように、今も血の涙を流している「愛香」を引っ張り上げるように、そつと囁きかける。

——だって、GBNを始めたきっかけはあの「ノゾミ」かもしれないけど、その機体を作ったのは、あの昼飯の人がきっかけかもしれないけど、でも、今、ここにいるのは。でも今、自分で「可愛い」と思ってた機体で戦い続けているのは。

「……しだ……」

『何を？』

「あたしだ、あたしなんだ!!」

引き延ばされた一秒がぷつりと切れ落ちて、アイカは涙に顔を歪めながらも、バエルへとカウンターの一撃を叩き込んだ。

速度が早ければ、何かにぶつかった時のダメージも大きくなる。

アイカが滅茶苦茶に振るったビルドボルグはバエル・ソードに貫かれて砕け散り、コメットコアガンダムの手は破壊されたかもしれない。

だが、ビルドボルグが砕けた欠片もまた、決死の覚悟でアキノがダメージを刻んだバエルの装甲に細かく突き刺さって、傷を負った状態では決して無視することのできないダメージを追加していく。

「憧れることは間違ってる！ 追いかけるのは間違ってる！ あたしがここにいるのは、あたしのためかもしれないけど！ あたしのためだけじゃない！ 例え間違ってたって、本物と偽物なんて、誰が決めるって言うんだあああッ！」

『よくぞ……よくぞ言いました、アイカ！ 幸せに本物と偽物などない！ 憧れに、リスペクトに、貴女の抱く好きに！ そしてわたくし

の抱く敬愛は！ 仮想の海でも本物なのですわああッ！』

最早、アイカには目の前のバエルも見えていなければ、アリアの言葉も聞こえてはいない。裂けんばかりに唇を吊り上げて狂気の炎に身を焦がしながら、アリアは一旦着地を挟むと叫びを上げて、今度こそアイカを葬り去らんとバエル・ソードを突き出して、腰を深く落とす。

それは偶然だった。

例えば、この惑星の裏側で一匹の蝶が羽ばたいたことが巡り巡ってこの世のどこかに大嵐を起こすような、些細な——因果と因果を繋ぎ合わせることに困難なほどに、小さな、宙を舞うひとひらの塵たちが戯れにその手を取り合ったような、神の気紛れがもたらしたものだ。

「……アイカさんは！」

『ッ!』

「……ずっと、気持ち悪いつて……ずっと、いじめられてた……わたしを……ずっと、哀しくて、痛くて！ 泣いてた、わたしを……ッ！ わたしに……っ！」

それは、バエルが、機体を操るアリアが、着地を挟んで臂力を加えた一撃での決着を試みなければ起きなかったことだった。そしてアリアがその狂気に身を焦がし、アイカだけを見据えていなければ起きなかったことだった。

それは、ミツルギが自身の持ち場を離れてアリアを庇おうとしなければ起きなかったことだった。そして、バエルが着地した先が——脚を失いながらも右腕とスラストを残していたエリーのヘイズルIが全力でブーストを蒸せば推力だけで辿り着ける場所でなければ、起きないことだった。

連鎖していく。些細なこと、降り積もる塵のように、今も不安定に電子の海を泳ぎ続ける「リビルドガールズ」と、そこに宿るアグニカ・カイエルの魂を追い求めていたアリアの、そしてアリアが笑う姿に夢を見続けてきたミツルギの戦いが辿った軌跡が連なって、奇跡を引き寄せる一糸を織り成していく。

エリイは全力でブーストを噴かすと、ヘイズルIIの細い右腕だけでも尚抱き寄せられるほどに細い、装甲というものが存在していない、初めからフレームが剥き出しとなっているバエルの腰にしがみついた。

無駄な抵抗なのはわかっている。

何の意味もないことはわかっている。それでも、エリイは泣いているアイカの姿が通信ウィンドウに映し出された瞬間に、メインモニターに映る全てを見定めた上で、その選択をしたのだ。

確かにエリイの行動には何の意味もない。あれほどまでに完成されたバエルの推力と臂力であれば、いかに損傷しているとはいえ、同じく損傷している素組みのガンプラを振り切ることなど造作もないだろう。

エリイが何をしようとしてアイカが斃れることは確定事項で、それを数秒間延命しただけに過ぎないのかもしれない。

だが、その数秒こそが、最後に「リビルドガールズ」へと与えられた塵の一欠片、そして嵐を巻き起こすべく、蝶が起こした羽ばたきに他ならなかったのだ。

そうだ。それは、巡り巡って——GBNの仕様が噛み合わなければ、絶対に起こり得ない、裏を返せば、ここがGBNでなければ、そしてアイカが、エリイが、チイが、アキノが、この電子の海に飛び込むことを選ばなければ、決して起き得ないことだった。

通常、取り落とした武器をタイムラグなく利用できるのはパーティーやフォースといったアライアンスを組んでいるユーザー間での話だ。

相手が取り落とした武器を拾って利用しようとしても、通常のレギュレーションの範囲であれば、バランス調整という名の仕様によって物によっては一秒ないし数秒、アトミック・バズーカやツイン・バスターライフルといった強力なものであれば十数秒という、短くとも戦場では致命的となる時間の待機を強いられる。

ユニコーンガンダムのサイコミュ・ジャックが恐れられるのは、その制約を例外的に逃れることができる特殊兵装であるからに他なら

ない。

だが、例外というのはどこにでも存在する。

そう、アイカは短く見据えたモニターの片隅に、アキノが叩き折った、というよりは力任せに柄から引きちぎった、アリアの機体が左手に持っていたバエル・ソードの刃が突き立っているのを確認すると、迷いなく生まれた数秒をその確保に費やした。

——破壊された武装は、通常消失するまでの時間は武装ではなくオブリエクトとして扱われる。

その他諸々複雑怪奇な仕様は今日もGBN攻略班の頭を悩ませているのだが、少なくとも検証を重ねた結果、それはバグではなく紛れもない仕様であることは判明していた。

自身にしがみついていたエリーの機体を振り払い、そのコックピットにバエル・ソードを突き立てると、アリアは再び狂気に、そして恍惚が生み出す狂喜にその表情を歪めながら、今度こそコメットコアガンダムを屠ってやろうと、ガンダム・フレームが生み出す強靱な膂力で地面を蹴って、残されたスラスター・ウイングのスロットルを全開にしてアイカへと突撃していく。

『おおおおおッ!!!』

「っ、あああああッ!!!」

それは最早、獣の咆哮[!]だった。プリミティブな本能が、闘争に身を置き続けたことで際限なく分泌されるアドレナリンが、或いはアリアとアイカの中に眠るアグニカ・カイエルの魂が、叫ばせたのかもしれない。

言葉などそこにいらなかった。アイカもまたスラスターを全開にして、右手に持ったバエル・ソードの刃を、コックピットに突き立てる形で相手に返却してやるべく、魂が叫ぶままに突撃する。

——果たして。

巻き起こる土煙が、そしてレッドアラートに埋め尽くされ、ノイズが走るメインモニターが、その結果を無情に告げる。

アイカのコメットコアガンダムは、確かにその小柄な体軀を生かしてバエルの懐に潜り込み、そのコックピットへと確かにバエル・ソ

ドの刃を突き立てていた。

だが、それは直撃ではなかった。直撃判定を僅かに逸れて、レアアロイの刃を突き立てられながらも、アリアは決して止まることはなく、その狙い通りにコメットコアガンダムのコックピットへとバエル・ソードを突き立てていた。

レッドアラートの中心に黒帯が走り、【Signal losted】の文字が、コメットコアガンダムのコックピットに浮き上がるのを、アイカはどこか冷めていく瞳に涙を湛えて、茫洋と見つめていた。「負け、た……う？」

届かなかった。ほんの数ミリ、誤差の範囲で済まされるような僅かなズレが、アイカへと冷酷に敗北を突きつける。

——だが。

「……いいや。勝ちだぜ、アイカ」

その声が聞こえると共に、ノイズを放ち沈黙していたコンソールに光が灯って、ダイアログを立ち上げる。

【Mission Success!】

【Winner:リビルドガールズ】

声の主であるチイは、満身創痕の機体を引きずりながらも確かにバエル宮殿へと侵入し、そこに突き立てられていた剣を抜き放つていった。

このミッションの勝利条件は、アリア及びミツルギの撃破ではない。

あくまでもバエル宮殿に安置されたバエル・ソードを手を取れば、それで勝利は決定するのだ。

そして、チイはアキノが、アイカが、エリイが作り出してくれた時間と、アリアが「のめり込みすぎると前が見えなくなる」人種であることに賭けた上でリキャストの完了したミラージュ・コロイドを展開し、その勝利条件を密かに、そして強かに達成していたのだ。

「アイカ……お前たちが繋いでくれたおかげで、拾った勝ちだぜ」

勝ち誇り、右手の親指と人差し指で輪っかを作っていつものように悪戯っぽく笑うチイに、アイカは涙をこぼしながらも「ありがとう」と

返すことしかできなかった。

いくら言葉を紡ごうとしても、嗚咽に遮られてそれは形にならない。

——ああ。

なんだ。あたしは——あたしだけじゃ、なかったんだ。

ねえ、そうでしょう？

あの時アイカに「何のために」と問いかけたその声、「アイカ」の聲がその心に重なり合って、膿が溜まったままになっていた心を洗い流すように、透明で色のない血液をその瞳から押し出し続けるのだった。

「見事でしたわ、リビルドガールズ……貴女がたはまさしくアグニカ・カイエルの魂を持つ者。わたくしはそれを見られたことが何より喜ばしく、またその場に立ち会えたことを誇りに思いますわ」

ロビーに帰還したアイカたちへと惜しみのない称賛を贈りながら、約束通りに計400万BCという報酬を、アリアはフォース「リビルドガールズ」の共有財産ストレージへと振り込んだ。

あたしも、いい試合ができました。

普段であればなんなく紡げたであろうその言葉も、今は嗚咽に詰まって出てこない。

泣きじやくりながらもなんとか頭を下げ、アイカはそのままロビーの床にへたり込んでしまう。

「あー……うちのリーダーがちよいとなんかあつたみてーだからチイが代わりにお礼言つとくわ。ありがとさん、アリアお嬢様」

「ええ、グッドゲームでしたわ、チイ。貴女には少々アグニカみが足りなかったですが」

「へっ、そりやすいませぬね、チイは逃げも隠れもするからねい」

皮肉っぽく答えたが、チイは別にアリアを責めるつもりはなかったし、アリアもまたあのような形でミッションが決着したことに恨みを抱いているわけではない。

そして、アリアがアグニカ・カイエルの魂を求め続けるのもまた、変

わからないのだ。

言葉は不要。勝者にはそれを誇る義務があるなら、敗者にはそれを語らず、黙してただ去っていくことこそをその義務とするのだ。

踵を返してかつかつと優雅にロビーから去っていくアリアの背中には、微かな悔しさが滲んでいた。

それもそうだろう。誰だって、どんな形だって、敗北を喫するというのは多かれ少なかれ悔しいことなのだから。

そしてそれは、アイカも同じで、きつとアイカもいくつも敗北を、蹉跌をその足元に積み上げてこの場所に迷い込んできたのだろう。

チイは予め彼女に伝えた通り、そのことについて詮索するつもりなどない。それは別にチイの中で利益を生み出すわけではないし、きつと触れられたくないことなのだろうし、触れてほしければ自分から切り出すだろうと、そう考えているからだ。

エリイのように泣きじゃくるアイカをエリイが宥めている構図に物珍しきとなんだかむず痒いものを感じながらも、物質化したIBCを指先で弾き飛ばしながら、勝利の美酒という名の金勘定を味わうためにチイもまたロビーを後にする。

「……チイ」

「あん？　なんだよアキノ」

「……貴女がどう思っているかはわかりません。ですが私は、貴女を、そしてアイカさんをエリイを、仲間だと思っています」

「……そうかい」

「ええ」

「話はそれだけ？」

「ええ、それ以上は貴女の気に障るでしょう」

こいつはどうしてこう、一言多いのか。

とはいえ根に持つような性格の人間に根に持たれるようなことを言ってしまったのは自分の方だ。いくら地雷を踏まれたからとはいえそれは軽率だったと、チイも少しは反省している。

「……チイもおんなじだよ、それじゃーね」

ありがと、アキノも。

その背中に表情は窺えなかったが、きつと苦笑しているのだろう。アキノも同じように笑って、現実世界へと解けていく。

(……私も、ありがとうございます)

アイカが抱えている痛みについてはわからない。

そしてそこに触れる資格を自分は持ち合わせていない。だが、彼女がアキノを仲間だと呼んでくれたことは、身内として受け入れてくれたのは、アイカが思う以上に大きな意味を、持ち合わせているのだった。

「……なんか、カッコ悪いところ見せちゃったね」

随分長い時間ダイブしていたように感じられるが、よくよく考えたらあの戦いは短期決戦だった。

長くなって来た陽が照らす埠頭は、黄昏に染まっている。

リアルとGBNは切り分けるつもりで、ロールプレイをしていた。そしてきつと、あの時「愛香」が自分に語りかけたように、きつとエリイに、絵理たちに出会わなければ、愛香は今までそうしていたようにきつと少しだけ電子の海を揺蕩って、諦めと共にこの陽が照らす岸辺へと打ち上げられていたことだろう。

いつものように、絵理は愛香の右腕に自身の左腕を絡めて、その右手で白杖を突いて道を歩いている。

知らなかった。と、いうよりも、今まではそもそも誰かのことについて考えられるほどに余裕がなかった。

それでも、考えてみれば当たり前のことだった。

自分以外の誰かも多かれ少なかれ、痛みを抱えて歩いている。

それでも、自身の痛みに苦しみ続けながらも、愛香は自分と向き合ってくれた。

——ならば。

「……絵理？」

絵理は足を止めて、白杖のストラップが手首にかかっていることを確かめると、愛香の腕に絡めていた自分のそれを離して、頭に巻いて

いた包帯をするすると解いていく。

「……決めてたんです」

包帯が解かれた絵理の右眼は、真っ白な眼帯に覆われていた。だが、その額にも頭部にも本人が語った通り、何の傷もない。

「……わたし……今回のミッションに、勝ったら、その……ちよつと、ちよつとだけ、ですけど……愛香さんに、貰った……勇氣、返そう、つて……」

いつものようにくしゃりとすぐに歪んでしまうものではなく、あの仮想郷で二人の、そして他でもない愛香自身が紡ぎあげた剣が手繰り寄せたのと寸分違わない、穏やかな笑顔を浮かべてみせる。

「絵理……」

「まだ、全部は……全部は、無理かも、しれません……でも……愛香さんは、愛香さんが、いてくれたから、わたし……きつと、今日まで……生きて、これたんです……」

えへへ、と、不器用に、色付かずに透き通った血液ではなく、熱のこもった涙をこぼしながら絵理はその声を頼りに、何よりも愛しい、自分の名前を呼んでくれる声を頼りに、ぎこちなくも愛香の方をまっすぐに向いて微笑みかけた。

「……ねえ、絵理」

「……な、なんですか、愛香さん……?」

「……あたしも、きつと絵理がいなかったら、いつもみたいに……諦めて、逃げて、そんで……捨ててた」

だから、ありがとね。

絵理の涙を指先で掬って、何かの儀式のように自らの唇に運ぶ愛香もまた、その眦に涙を滲ませているのが、無意識に触れさせていた絵理の指先に伝わってくる。

愛香が何を諦めて、何を捨てたかについて、絵理はきつと問いかける資格などないと思っている。

それでも、愛香がずつと蹲って泣いているだけだった自分を掬い上げてくれたことには、返し切れないほどの恩を感じている。

だから。

愛香がしたように、絵理もその透き通る血液と痛みの味にそつと、唇を寄せる。

しょっぱくて、痛くて。でも、どこことなく、名前のわからない温かさが胸の奥に湧いてくるようなその味に、二人は薄く瑞々しい唇を寄り合わせる。

人生は、朝に生まれて夜へと向かう旅路だと誰かが言った。

それは確かに正しいのだろう。

何もかもが曖昧で、正解以外が切り捨てられて、それでもなんとか漂い続けるしかないのがやるせないこの世界だ。

そしてその片隅で、それが大人になるまでの黄昏の時間であることを噛みしめながらも、愛香と絵理は、いつものように、そしていつもより少しだけ歩く速度を遅くして、黄昏へと留まるように、その家路を共にするのだった。

289：以下、名無しのダイバーがお送りいたします
連中雇う金を作るために宝探しミッション血眼で受けてる中堅
フォースは星の数ほどいるからな

290：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>285

偵察特化の奴ら二人雇ったんだけどそのうち一人が仕事したのは
いいんだけど追っ手の攻撃からこっち盾にしてきたんだよなあ

291：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

え、そいつ普通に有能じゃん

292：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

それ要するに情報生きて持って帰って護衛も釣ってきたんだろ？
盾にされて腹立つ気持ちはわかるけど偵察特化の奴らなんて大体
ブーメラン戦隊よ

293：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

まあ傭兵連中の性格いって話はあるま聞かないな、「セルピエン
テ・クー」の奴らも最低限のことしか喋らんしなんか怖い

294：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

逆にベラベラ喋る傭兵信用できりゅ？

295：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ムリダナ

296：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ソロ専のダイバーは気が向くと傭兵してくれるからそういう奴は
性格いいっぽい

297：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ユウちゃんだっけ、あの子クツソ可愛いミステリアス和装美人なの
にえげつないぐらい上手くてドン引きしたわ

298：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>297

ユウちゃん雇ったとかマジかよ、俺100万BC積んで土下座して
頼みんだけどあの子見向きもしてくれなかったぞ

299：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

あの子本当何考えてつかわかんねえからなあ……お前どう？

300：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

(FOEさんの妹であることぐらいしかわから)ないです

301：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

マ？

302：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

マ、ロールか中身もそうなのか知らんけど「お兄様」って呼んでた

303：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

兄妹揃って二桁の魔物とかどんな家系なんですかね……(戦慄)

304：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

(…ω…)(ユユちゃんに蔑んだ目をされながら踏まれたいわね

305：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>>304

(…ω…)(出荷よー

306：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

獣を仕留めるには相応しい作法というものがある

307：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

これ以上は専スレ行くかやめとけよお前ら、てかFOEさんも金積
んだら雇える時までには言わなくても猿山で見逃してくれんのかな
……

308：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

(目を付けられた時点で逃れられ)ないです

309：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ああ逃れられない！(クソ速蒼色トランザム)

310：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

【速報】猿山の頭マクギリスお嬢様敗北

311：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

またFOEさんかオーガにでも喧嘩売ったんだろ定期

312：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

いや、なんか無名のフォースに負けたっぽいぞ

313：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

無名（GPD同好会勝率平均8割）

314：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

リビルドガールズ？ GPDそれなりにやってたけど聞いたことねえな

315：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

へー、マジで無名なのか……でもたまにこういうジャイアントキリングがあるからこのゲーム見てるだけでも面白いんだよな

※※※

「あらあら、随分と好き勝手に言われてますね、お兄様……？」

デイメンション・シユバルツバルト。奇しくもアリアが拠点としているのと同じデイメンションの片隅にひっそりと佇む、廃城のような個人用フォースネストに、そのスレッドを観測する大多数の中の二人は居を構えていた。

黒い和装に身を包みながらもその濡れ羽色の長髪を同じ色のリボンで飾った黒尽くめの少女——今まさにコンソールに開いていた雑談スレの中で話題になっていた、ソロを専業とするダイバー、「ユユ」は「お兄様」と呼ぶ同じように黒いスーツに黒いトレンチコート、そして黒髪の散切り頭というこれまた黒塗りの出で立ちをした青年——よくFOEさんの通称で親しまれているダイバーの耳元に囁きかける。

「ユユが色々と問題を起こしてるからだろう」

「まあ、いけずですお兄様。ユユはただGBNを健全に楽しんでいるだけ、それを言うならあのハードコアデイメンション・ヴァルガに籠って災厄を振りまいておられるからFOEなんてあだ名がつけられるのではないですか？」

くすくすと、小悪魔のような笑みを浮かべながら相変わらず甘ったるい声音でささやき続けるユユの頭をどけながら、FOEさんと呼ばれている青年は静かに溜息をつく。

「それに関しては返す言葉がないが……ソロ専の練習場所なんてあそこか高難度クリエイトミッションかレイド戦ぐらいしかないよ。あ

のジャバウオックの怪物や、10位にもフリーバトルを申し込んでるんだが、どうにも振られてばかりさ」

「二桁ともなれば有名配信者と二足の草鞋を履いている方が多いですからねえ……ですが安心してくださいお兄様。ユユはいつでも、お兄様の味方ですから」

「やめてくれないかユユ……ここでは別に構わないけど、僕が外に出た時も同じようなノリでやられると色々困るんだ」

「あら、ユユは何も困りませんよ……？」

「僕が困ると言ってるだろう」

話を聞かない妹に嘆息しながら、懲りずにすり寄せてくる頬を退かして、青年はスレットの続きを観測する。

「あのアリアをクリエイトミッションとはいえジャイアントキリングしたのか……見込みはあるな」

「あら、あの毎度毎度お兄様に突っかかってきては完封されている頭マクギリスな女ですか？ 別に珍しくもないでしょう……？」

「いいや、彼女にマグレでも……その運を掴み取るスタートラインに立てるだけでも素質があるというものだよ、ユユ。僕が毎度奴を完封してるのは、近づかれてマグレを引き当てたくないからさ」

あのバエルとサシでやり合っても恐らく負けることはないと言青年は確信している。だが、万が一ということが頻繁に起きるのが、魔境である二桁では日常茶飯事だ。

ならばその可能性を徹底的に摘み取るほかに勝利し続ける方法はない。敢えて火中の栗を拾うような真似をすることこそあれど、それは自分がチャレンジャーである時の話で、タイトルマッチの防衛戦となれば戦い方というのは自ずと異なってくる、というのが青年の自論だった。

「ユユのG―イデアも完封負けにしてくれましたからね、お兄様は……全く、大人気なくて、臆病です」

「臆病であるぐらいが丁度いいのさ」

「ええ……ですがユユは、敢えて火中の栗を拾うのが楽しいのです。まあ、お兄様とこうしてお話して、剣を交えている瞬間には及びませ

んが」

「……最近リアルで色々ごたついでいてね。それじゃあユユ、三日ぶりのGBNだ」

「はい、お兄様……存分に、楽しみましょう……」

確か、リビルドガールズといったか。

アリアに対してジャイアントキリングを収めた、ひよつとしてこれから自らの領域に踏み込んでくるかもしれないフォースの名前を記憶の片隅に刻みながら、青年はユユへとフリーバトルを申し込み、その開始地点を躊躇いなくハードコアデイメンション・ヴァルガに設定した。

そしてユユもまた兄からの挑戦状を恍惚とした表情で受け取りながら、魔境へとその身を溶け込ませていくのだった。

二人ともそこに、「獄炎のオーガ」や「ジャバウオックの怪物」のような至上にして至福の戦いをもたらしてくれるイレギュラーが乱入してくることを、心のどこかで期待しながら。

第二十三話「はじめての聖地へくその質問はあたしに効く」

ガンプラ作りたいですけどなんかおすすりめありますか。

GBNの普及によって第四次ガンプラブームとでも呼べる一大ムーブメントが巷を賑わせている昨今に限らず古くはGPD全盛の時代、いや、それすらなかった十字キーとボタンないしジョイスティックとボタンのゲームが前世だった時代にもその質問はネットの海で、あるいは親戚同士の集まりで甥っ子や姪っ子がその親族に目を輝かせながら問いかけてきた。

だが、その答えはいつも困惑に彩られている。

——どのガンプラ？

なんでもいいからガンプラを作りたい、という質問をぶつけてきた人間の中で、本当に「なんでもいい」と思っている人間は少数派だ。つまりはそういうことだった。あとは純粹にガンプラというカテゴリーも時代と共に扱う商品が膨らんできたことで、細分化されているグレードの数も結構多いと、ユーザーとしては喜ばしい限りのことだが入り口に立ったビギナーには極めてややこしい限りなのだ。

加えて喜ばしいが同時にめんどくさいのが、プラモデルという性質上、楽しみ方が無数にあつて、その選択肢にGPDやGBNが加わったこともあり、「どの作品の何を、わからないならどんな感じのものを、どのように、どういうスキルの範囲で作るのか」ということを明確にしてくれないと、大体がすれ違う悲劇に終わってしまう。

そして更に追加するなら、ガンプラビギナーに対して中級者や上級者もアドバイスこそ持ち合わせているが、ガンプラには正解など存在しないため、その持論が噛み合わない、というのもすれ違う要因だろう。

曰く、スキルアップをしたいなら合わせ目消しと後ハメ加工とクリアパーツのマスキング処理やモールドの市販パーツへの置き換えといったことが一気に学べて、おまけに値段が安い、最近リメイクされ

た前の方のHGUCジムを買うといいと、善意で勧めるベテランがいる。

曰く、自分が格好いいと思ったキットから買って説明書読んでりや作れるからそれでいいよと善意で促すベテランもいる。

そして、そのどちらの間違いではないのだが、「格好悪いからやだ」とか「じゃあこの『MG FAZZ ver. ka』っていうの買います」だとか、ビギナー側もまた持論があることがややこしいのだ。

一応補足するなら、ニッパーがあつて説明書を読めば、パーツが複雑で細分化されているとはいえ、「MG FAZZ ver. ka」というキットは初心者でもちゃんと組み立てられるように財団B、ガンブラの版元は丹精込めて設計している。

だが、ガンブラ作りというのはどの段階においても熱意と集中力との戦いだ。

ベテランに片足を突っ込んだモデラーさえ「なんでガンダムって足が二本あるんだろうな」だとか、「レガンダムの本体とライフルとシールドまで作ったけどファンネル組むのがめんどくさい」といった些細な挫折と嘆きは聞こえてくるのだ。

ならば安く、早く、そしてシール頼りの部分が少ない最新のHGクラスはスタンダードにお勧めしていいはずだ。それでも人型である以上手足は二本あるが。

実際、何度かガンダムベースを訪れた客から同様の質問をされた際に愛香は販促の兼ね合いもあつて新商品を勧めていたが、それでもやはり需要と噛み合わなかつたとはいえ「格好悪い」「なんか違う」の一言で片付けられることが何度かあつたし、善意を蹴り付けられるというのはそれなりにストレスが溜まる。

だからこそ、昼休みの最中に、親友の口からその質問が飛び出てきたとき、愛香は反射的に頭を抱えそうになつてしまったのだ。

「……あ、あの……愛香さん……」

いつも通りにメロンパンをもそもそと控えめに齧りながら、いつもと違って包帯を解いた絵理は、おずおずといった調子で、今朝は寝坊しかけてしまったため、購買争奪戦に参加してボロ雑巾のようになり

かけながらもなんとか勝ち取った焼きそばパンを口に運んでいた愛香へと呼びかける。

「ん……どしたの絵理ちゃん」

最悪家からジャムだけを持ち出してきて売れ残りのコッペパンをあえて安全に確保することでこの狂ったイベントに参加しないというクレバーな選択肢もあるにはあるのだがそこはそれ、祭りとならばなんとなく参加したくなってしまうのが人の性というものだ。

満身創痍といった体で絵理の机に突っ伏してもそもそと焼きそばパンを齧りながら、どことなく気の抜けた声で愛香は答える。

その質問が投げかけられたのは、そもそも焼きそばを挟んでるだけでこれも分類的にはあんまりコッペパンと大差ないのでは、と正気に戻りかけていた時だった。

「え、えつと……その……お、おすすめのガンプラとかって、何か、その……あつたり、しません、か……?」

六割ほど体積を残したメロンパンで顔の半分を隠しつつ、透き通るように白い頬を朱に染めて、絵理は愛香へとそう、無邪気に問いかけたのだ。

どーしてくれんだエリイちゃん。

口の中がパッサパサになりそうな緊張感が、ピキーン、という音を立てて愛香の脳裏を駆け抜けていく。

ああ、昨日のバイトもそうだった。

GBNを始めたいというクソガキもといお子様があれこれと、最近ようやくテレビ放送されていたガンダムシリーズの主演機、その顔と名前が一致しはじめてきたばかりの愛香へと問いかけてきて、愛香はにこやかにHGCEステイニーガンダムを勧めたのだが、「これはいいかな」の一言で切り捨てられてしまったのだ。

いやいいじゃんステイニーガンダム。確かに可愛くはないけどあたしは最近覚えてきたガンダムの中で一番格好いいって思うしG—Cafeのお客さんたちだって「名キットとは何か」って話になったらほぼ必ずその名前をあげるぐらいお客様満足度だって高い逸品なのに！

「……あ、愛香さん……!?!」

昨日のトラウマが蘇り、笑顔でぺしよりと頰れていく愛香に、絵理は左目を丸くし、その眦に涙を浮かべながら恐る恐るといった風情でその背中に触れたのだが。

「ふ、ふふ……大丈夫だよ、絵理……ちよつと昨日のバイトの古傷が……」

「……が、ガンダムベースのアルバイトって……命懸けなんですか……?」

「大丈夫……解釈違いはどこにでもあるものだから……」

なんだか店長が聞いたら風評被害を生むのはやめなさいと怒りそうな受け答えをしつつも、実際その、多くのガンプラに関わる者を悩ませてきた、絵理からの問いかけに愛香は返す。

「えつと、絵理。質問に質問で返すのはテスト零点だけどちよつと三つ訊かせてね。どうして、何を、どんな感じに?」

恐らく絵理が持ちかけてきたのはGBNに関わる相談だろう。

突然ビルダー方面に目覚めて、あのシャフリヤール……とかいうらしい凄腕の人を目指しているんですと言われるたら流石の愛香も頑張ってるね、ぐらいいしか答えようがないが、ある程度範囲を絞り込んだ質問であれば、なんとか答えられるぐらいの知識は蓄えられた。

なにより絵理は親友だ。できることなら全力で力になってあげたいからこそ、その精度を高めるために、愛香は問い返すのだ。

「……その、わたし……フォースの足を、引っ張ってるんじゃないか、つて……」

「へ?」

愛香は返ってきた言葉に思わず目を丸くする。

足を引っ張るところか、絵理が、「エリイ」がいなければ、先日受けたクリエイトミッションでチイがバエル宮殿まで侵入する時間は稼げなかっただろう。

それをいうならむしろ自分が——コメントコアガンダム、その源流となったコアガンダムのポテンシャルを完全には引き出せていないのではないかと密かに愛香は悩んでいたぐらいだ。

「……その、わたしの……わたしの、ガンプラ……近所の、中古屋さんで……組み立てた、まま……売れ残って、たんです……」

エリイのハイズルIIには、本来あるべきパーツが存在しない。それは腰部のドラム・フレームへと接続される二枚のコンポジット・シールドブラスターと呼ばれる盾と剣と銃と有線クロウの機能を一つにした欲張りセットが如き複合兵装であり、ハイズルIIを「ハイズルII」たらしめているパーツだ。

GBNが盛んになった昨今、必要だった一部をミキシングの素材に利用して、余った部分のキットを二束三文で売り飛ばしてしまうビルダーは後を絶たない。

その行為の是非については正直なところ、愛香にはわからない。例えば複数個のガンプラを利用したミキシングビルドでオリジナルのガンプラを作り上げたはいいけれど住居や飾る場所の問題で複数個を飾っておく余裕がない、といった場合古物店へと売ってしまうのも、選択肢としてはあり得ることだろう。

そして、誰かが必要ないといったパーツが誰かにとっては必要になる、ということも往々にしてあることだ。

だからこそ完品の状態よりも割安に販売されているそうした欠品、組み立て済みのキットを敢えて買い求めるビルダーが存在することもある、確かなのだ。

「……だから……なんだか、わたしみたいだな、って……そう、思ったんです、え、えへへ……」

絵理は無理やり笑顔を作ろうとしたが、それは過去からの痛みに歪んで、眦に滲んだ涙を押し流し、泣き顔へと変わってしまう。

必要なパーツを抜き取られて、袋に入れて吊るされていたのである。あのハイズルIIがどんな気持ちでいたかなど、愛香にはわからない。

二月十四日に合わせてコンビニやスーパーが大量に入荷して、その翌日にはワゴンへと叩き込まれるチョコレートがある。同じように十二月二十四日を過ぎて、半額のシールと共に叩き売られて、購入が叶わなければ廃棄の運命を辿るケーキがある。

考えてみれば、それはとても悲しいことなのかもしれない。

だが、それは巷にありふれたものだ。痛みと悲しみ、それを資本と眠らない電気の明かりで覆い隠しながら世界は回り続けている。

そして、もしもそこにある悲しみを一つ一つ拾い上げて歩き続けたならば、人はパンクして潰れてしまうだろう。

愛香は思い出す。

ある日偶然遭遇した、通学路にあるデイサービスセンターが、運営資金に少しでも足しになればと売り出している花の鉢植えを、なんだか祈りを捧げるように哀しそうな目で見つめて買っていく、別な学校の女子生徒のことを。

光をなくした絵理の左眼は、そんな祈りに溢れていた。

「……でも、わ、わたし……ガンダム、知らなくて……それに……それに……こんな、目ですから……愛香さんみたいに、すごいガンプラ、作れなくて……」

はらはらと涙を流して、絵理は噛み殺した唇をすり抜けた嗚咽を漏らす。

「……ねえ、絵理」

「……あ、愛香、さん……?」

「悪いんだけど多分その問題、あたし一人じゃ解決できない」

愛香はばつが悪そうに顔をしかめながら、導き出された結論を出力する。

絵理にそういう言葉を投げかけるのはよくないとは思っているものの、現状として判断材料に「絵理の価値観」という深刻な問題が関わるのなら、安易に「じゃあ強そうなガンダム探そうか」なんてことを気楽に答えられることなどできるはずもない。

きつと、マギーというあのダイバーなら、もっとうまくやれたのかもしれないけれど。

愛香は胸に差し込んでくる後悔に、心臓に針を突き立てられたような痛みを覚える。

「……え……っ……」

案の定、絵理は絶望もあらわに、ただでさえ白い肌から血の気が引

いていくように顔色を悪くして、持っていたメロンパンを机に取り落としてしまう。

——嫌われた。

嫌われた。嫌われた。嫌われた。嫌われた。ごめんなさい。わたしなんかごめんなさい生意気なことを言つてごめんなさいこんな目でごめんなさい生まれてきてごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい。

開く傷口から噴き出す痛み、色のない血液をその左眼から流して、絵理は何度も心の中で愛香へと罪を詫びる言葉を繰り返す。

「だから、仲間を頼ろう」

「……………えっ……………？」

「大丈夫。あたしもまだまだガンプラについては半端だから、つてだけで……………あたしは、どんな理由があつたつて、絵理がどんなだつて、絵理を嫌いになんかならないよ。だから……………」

餅は餅屋。チイちゃんやアキノさんにも頼ろうよ。

ぎゅつと、優しく、包み込むように絵理の両手を取つて、涙に濡れる瞳を見据えながら、愛香は自分にできうる全ての誠意を込めて、凍りついた痛み、閉ざされかけていく絵理の心へと、三十六度の熱を、その底に込められた自身の魂を届けるように、じつと答えが返ってくるのを待つ。

「……………わ、わたし……………その……………あ、愛香さんに、め、迷惑……………」

「迷惑じゃないよ」

「……………だ、だつて……………わたし、わ、わたし……………気持ち、悪いつて……………」

「どこが？ 絵理は可愛いよ、あたしはそう思う」

「……………あ、ああっ……………ああ……………あいか、さ……………」

「あたしは、絵理の味方だから」

それに絵理だつて、自分なんか、つていつもそう言つてるけど。

あたしは、絵理に助けられたんだ。絵理がいなかったらきつとあたしだつておんなじように自分のことが大っ嫌いで、死んでしまったたかもしれないんだ。

脳裏に中学三年生の冬を、吹き荒ぶ風が吹き込む音楽室の窓枠に足

をかけたことを、そして、今もまだきつと心臓に埋め込まれた棺の中で血の涙を流しながら眠り続ける「愛香」のことを思い返しながら、愛香は自身の頬に絵理の右手を運んで触れさせる。

大丈夫。あたしは心から笑ってるよ。心から、絵理と話すことが楽しいから、一緒にいることが楽しいから。

そう言い聞かせるように、何度も不安から頬に指先を這わせ続ける絵理の心まで届けと、そんな祈りを込めながら優しく額を触れ合わせて、愛香は精一杯に微笑みかける。

「あいか、さ……ああつ、う、ああああ……っ……」

「よしよし、それじゃ今日もガンダムベースいこっか、絵理」

泣き虫で、気弱で、だけどきつとあたしよりも、ううん、この教室にいる誰よりも優しい親友のことを誇りに思いながら、愛香は頬に触れる絵理の指先に自分のそれを重ね合わせて、指を切らずに約束を結ぶのだった。

「なるほどねえい」

アイカを通してチイへと伝えられたエリイの疑問に、首を傾げつつもコンソールを操作する指を止めずにチイは返事をした。

自身の機体を乗り換えるにしろなんにしろ普段であればビルド構築相談スレに行くことを勧める定番の疑問でこそあるものの、ビルド構築スレはある程度方針が固まっていないとまず相手にしてくれない以上、「何を、どのように」が見えないエリイの課題は結構な難問だ。「チイ、人と話しているのですから手は止めた方がいいですよ。しかし……私の場合は以前に使っていたのがシナンジュ・スタインだったのと、乗っている間にどのような構築が自分に適しているかを判断できたので、それがわからないとなると、難しいですね」

アキノの構築は一言で表すならタンク兼DPSといったところだ。その根幹であるIフィールドソードが、キャプテン・ジオンが使用するジオニックソードによる影響を受けたことは否定できない、というよりアキノは元より彼をリスペクトしてその武装を製作したのだから当然だった。

しかし、アキノのビルド方針はキャプテン・ジオンの存在に関わらず、あのハードコアディメンション・ヴァルガで生き残り、不屈き者を成敗するという道を選ぶのであれば、そのようなタンクアタッカースタイルに収斂するのは半ば必然であるともいえる。

どこから攻撃が飛んでくるかわからず、そして乱数の神様の機嫌次第ではあのF O Eさんがぶっ放してくる拡散波動砲じみた一撃やら、高速での奇襲を耐えて「見込みがある」と判断されたらその豪放磊落な性格に反することなく荒ぶるオーガの太刀筋が浴びせられるような世界で生き残る方法は、避けるか耐えるかの二択だ。

当たり前だと言われればそれまでだろう。

しかし、その次元が違うのだ。

化物には化物をぶつけるが如く、「二桁の魔物」たちと渡り合う実力を備えていないのであれば、極端化した防御力か極端化した隠密、回避力のどちらかを備えていなければまずあの場所では生き残れない。

実際、フォース「リビルドガールズ」結成のきっかけとなったアイカたちの第二回絶界行において、アキノは明確にF O Eさんからのマルチロツクの対象となったが、遮蔽物と周辺の敵機という二つの壁に助けられたところもあるものの、Iフィールドソードがあったからこそ、ぎりぎり致命傷で済ませることができたのだ。

「ん……ならば、ペリシア行ってみんなのつてどうよ」

チイはアキノに咎められたのもどこ吹く風といった様子で指先を慌ただしく動かしながら、新たに開いていたコンソールのタブ、そこに表示されていた、GBNまとめwikiにおける「ペリシア・エリア」の概要ページをアイカとエリイに提示する。

「……へ、ペリシア……?」

「確か、シャフリヤールって人がいるとこだっけ?」

「おうよ、シャフリヤールに会えるかどうかは乱数の神様の機嫌次第だけどビルダーの聖地だ、そういう曖昧な相談にも乗ってくれるやつはいるだろうよ。許可がなきゃガンプラは使えねえが……まあ金あるんだし地図買って乗り物借りてから行けよ」

でない、砂漠でラクダに逃げられた商人の気分を味わうことにな

るからな。

チイはニヒルに笑ってペリシア・エリアの記事が表示されているタブを閉じると、本来自身が受けようとしていた宝探しミッションと思しきそれを承認して、己の戦場へと解けて消えていく。

「ペリシアに行くのであればロビーから受付ができますよ、それに……アイカもエリイもCランクに上がったのですし、ガンプラの展示権も購入できるはずですよ。では、ご武運を」

お役に立たず申し訳ありません。

少し気まずそうにペこりと頭を下げて、アキノは何か予定があったのか、ログアウトのボタンを押して現実へと解けていく。

「聖地ペリシア、か……」

「……お、お話、聞いて……くれる、でしょうか……」

「きつと大丈夫だよ、それじゃ行こっか、エリイちゃん！」

「は、はい……よろしく、お願いします……」

先程チイが表示していたWikiには非戦闘区域に設定されている、と書いていたため、モヒカンの襲撃を受ける心配も、マクギリスに頭と魂を捧げたお嬢様に絡まれる心配もないだろう。

本来自分がプレイスタイルとして想定していた、仮想の世界を旅するという体験への予感にアイカもどこか心を躍らせながら、エリイの手を引いて、「ビルダーの聖地」へと向かうべく、受付に向かうのだった。

第二十四話 「クロス・ユニーク・エンカウンター」聖地の王とFOE」

あー、一面の砂だらけ。

ペリシア・エリアに通じるゲートを、受付からレンタルしたオフロード対応のジープで潜り抜け、同時に購入した一帯の地図に表示された目標地点の遠さに辟易しながらアイカは声には出さず、げっそりとそう呟いていた。

見渡す限りの砂、砂、砂。地方都市から数駅離れた辺りで見かける一面のクソミドリ田園地帯かの如く、茫漠たる砂漠に覆われたペリシア・エリアは恐らくシルクロードや中東といった場所の雰囲気を参考にして作られたのだろう。

GBNにおける世界の縮尺は、現実世界のそれと比べれば遙かに縮小されているが、それでも量子コンピュータの普及でCPUの処理能力が飛躍的に上昇し、またサーバー技術も大幅な革新を迎えたことで、現実と比べれば狭いもののゲームとしては極めて広大な世界を仮想の海へ浮かべて尚、二千万人のアクティブを養い切ることに成功している。

アイカたちが生まれる遙か昔、今よりコンピュータがローテクだった頃にもそうした「限りなくリアルに近い」戦場を作ろうと試みてオーストラリア大陸を実際の縮尺に限りなく近い形で再現したガンダムゲームも存在したが、巻き起こったのは興奮ではなく悲劇だった。

まず敵と出会えない。理由は単純に広すぎるからだ。

そして、プレイ人口が少なすぎたのもあるが、ジムに乗って当てもなく荒野を彷徨うこと何時間、ようやく向こう側から接近するザクの機影を視界に収めた時、果たして巻き起こるものが殺意や敵意であったのならその古豪はハードコアディメンション・ヴァルガを存分に楽しむ才能があることだろう。

だが実際は、それこそ果てのない砂漠でオアシスを見つけたが如

く、「そもそもこのゲームをプレイしている同志」という貴重な存在に
対して向けるものは銃口などではなく、純然たる友好だった。

　　荒漠の大地で連邦とジオンの垣根を越えて手を取り合う者がいる。
それは運営が目指していたものと遥か遠かったのかもしれないが、
ガンダムとして見るなら極めて美しい光景だった。

　　しかし、ゲームとして見れば極めて屈辱的な反省点に他ならない。
リアルとリアリティは別物だ。そしてリアルに作ったことが面白
さに直結するわけではない。

　　だからこそGBNのグラフィック班は、広大な世界を絶妙な縮尺に
押し込めて、より解像度が高い世界のテクスチャを貼り付けることで
旅路を苦しめないようにと最大限の配慮をしていたのだが、モチーフ
が砂漠となれば流石に限度はある。

「なんていうか砂しかないね、エリイちゃん……」

「……あ、あはは……砂漠、ですから……」

　　砂漠から砂を輸入することになる、なんてオチが付けられたブラッ
クジョークが存在する程度に砂漠というのは不毛にして過酷な存在
だ。

　　だからこそそんなものに地球が飲み込まれていくことへシヤア・ア
ズナブルは怒りを示したのだろうし、ハサウエイ・ノア——マフ
ティー・ナビユ・エリンもまたそれに追従したのだろう。

　　そんなガンダム作品の事情は知らないが、アクセルをベタ踏みしな
がらなんとか、地図上のビーコンを頼りに目的地へと向かえているこ
とがわかる、それだけが救いな旅路をアイカとエリイは言葉少なく歩
んでいく。

　　一説によれば「ビルドダイバーズのリク」は、駆け出しの頃に聖地
ペリシアへと向かうこの不毛の大地を徒歩で踏破したなどという噂
がGBNではまことしやかに囁かれているが、流石にそれは嘘だろう
と、車を使っても前に進んでいるのかわからず、正直挫けそうな
砂塗れの景色を一瞥して愛香は溜息をつく。

「……夜……?」

　　エリイが呟いた言葉に返事をする前に、何やらかんかん二人を照

らしていた擬似太陽の光が遮られ、視界が暗くなっていくのをアイカは視認する。

まさかそんなに時間が経過していたのだろうか、と疑うが、遠くに見据える砂にその闇が落ちていないのなら。

アイカは咄嗟に上を見上げる。

そこにあつたのは、関節にシーリングと呼ばれるカバーのようなものを被せる処理を施した、白と青、白と黒というHiiraggandamとRgandamを思わせる色に染められたカスタムモデルのガンプラが二機、轡を並べて悠然とペリシアの空を舞う姿だった。

そして二人はその内の片方に見覚えがあつた。

「あのクアンタ、あの時の……」

「え、ええ……」

すぐにその姿は視界から消え、影が落としていた光は形を取り戻したものの、あの粒子のマントを翻すクアンタのカスタムモデルは以前にチイがハードコアデイメンション・ヴァルガで、MPKに利用した、確かFOEさんとか呼ばれている歩く災害みたいなダイバーが駆つていたものであつたはずだ。

もう片方、Gセルフを改造したと思しきものについては残念ながらアイカもエリイも知らないものの、魔物と一緒に行動するのは大体が魔物だと相場が決まっている。

多分、凄い人なのだろう。色んな意味で。

屑運なのか剛運なのかわからない、太古から生きる龍が空を舞う姿と遭遇したがごとく二人は顔を見合わせて。

「ぷっ……あははははは！」

「……ふっ……えへへ、わたしたち……」

「うん、運が良いんだか悪いんだかわかんないねっ☆」

とはいえその出会い、乱数の神様が引き起こした気紛れは、一面のクソサンドブラウンに辟易した二人にとって旅路の清涼剤となりうるものだった。

地図を見れば、現在地に対してペリシアの位置が表示されるビーコンは丁度折り返しといったところだ。

「飛ばしていくよ、エリイちゃん。しつかり捕まってるねっ☆」

「は、はい……!」

多分、自分は免許取れないのかもしれない。

アクセルベタ踏みで加速していくジープの足元が、対策をしているとはいえオフロードに絡め取られるのを巧みに制御しながら、アイカは一心に聖地を目指して爆走するのだった。

ペリシアがビルダーの聖地と呼ばれるのにはそれ相応の理由がある。

荒寥たる砂漠を渡り切り、駐車場にジープを停めて見上げる中東風の街並みと、聳え立つ宮殿のような建物の美しさもさながら、その景色には決して現実であり得ることのないものが同居している。

ガンダム。正確には、ガンプラ。

アイカたちのようなごく普通のビルダーが聖地へその愛機を並べるには通常、極めて高いお値段の展示権を購入する必要こそあるものの、ここにその愛機を並べているビルダーのほとんどはこのペリシアを舞台にしたビルダーコンテストの常連であり、その上位報酬として与えられるフリーパスによって、渾身の作品を展示しているのだ。

そして何よりも訪れる者たちが異口同音に言葉にする面白さは、そのガンプラたちが、バトルを前提にしたものとは限らない、ということだ。

ペリシアの街に降り立って、お上りさんのようにきよろきよると忙しなく周囲を見渡しながら、アイカとエリイはその超絶技巧をもって創り上げられた愛の結晶のどれから見ようかと悩み始める。

だが、アイカたちの目に真っ先に留まったのは。

「むむむ……なんか見てるだけで上手くなりそうって勘違いしちゃうぐらいよくできてるね、このガンプラ……」

「……これ、絵じゃないんですか……?」

「ううん、絵だったらダイバーギアにスキャンできないし、これ多分ガンプラを二次元の絵みたい塗ったやつだよ」

二人が見上げる視線の先にあるものは、保護カバーを取り払って立

ち上がろうとするRX-78-1、プロトタイプガンダムだが、そこにはいわゆる「ワカメ影」やハイライトなどが描き込まれることで、まるで騙し絵のごとくアニメのワンシーンを切り抜いてきたような錯覚を与える技法で作り返されたものだった。

「それにこれ、多分旧キットを徹底的に改造してるやつだ……スキヤンできてるってことはこの布っぱいのもプラ板で作ったんだろうし、え、え……? マジで……?」

「アイカさん……?」

「いや、凄すぎて言葉にならない……」

アイカは確かに四苦八苦しながらコメントコアガンダムを作り上げたが、旧キットと呼ばれるモデル群を当時のプロポーシオンから大胆に改修するには技術もさながら、極めて高いセンスが必要になる。

アニメ「機動戦士ガンダム」に、プロトタイプガンダムという機体は登場しない。だが、目の前にあるガンプラはまるでそんなシーンが存在したかのごとく、「動」の中の一部を切り取ることに特化して、どこか昭和特有の手描きに宿る柔らかな雰囲気を与えつつも、メカとしては勇壮で鋭角的な印象を持たせるようにプロポーシオンの調整が行われている。

アニメ塗りの技法も、確かに素晴らしい超絶技巧であることに他ならない。だが、その真骨頂は塗りを活かすために入念に調整されたそのプロポーシオン調整にあるといっても過言ではない。

「……わたしは、ガンプラのこと……わかりません……」

「エリイちゃん」

「わたしがガンプラを見れるの、この世界の中だけですから……でも……このガンダムを見てると、なんだか、心があったかくなってる……」

エリイはきゅつと胸元に腕を寄せて、その「今にも立ち上がらんとする」プロトタイプガンダムの姿を目蓋の裏へ焼き付けるようにそつと目を伏せる。

そこに、どんな祈りがあるのだろうか。

アイカはほわほわとした柔らかく温かな雰囲気で、しかしながら敬

度な信徒のごとく祈りを捧げるエリイと、魂を尽くして作り上げられたプロトタイプガンダムとを交互に見遣れば、自然に口元が緩んでいくのを感じていた。

「ええ、それが愛……あのお爺様は、このプロトタイプガンダムにそれだけの愛を込めて制作しているのです」

そしてそんなアイカたちに、言葉をかける存在があったことに気付いたのは、鼓膜を甘く、小指の先でなぞるように甘い声が聞こえて数秒後のことだった。

声が出た方に振り返れば、アラビアンな街並みにはなんだかミスマツチな、夜の帳を生地にして縫い上げられたような和服に身を包み、その長い黒髪を同じ色のリボンで飾った少女と、その半歩後ろでこれまたクソ暑そうな黒スーツに黒いトレンチコートという出で立ちの青年が静かに瞑目している姿がある。

「お爺様？」

「ええ、プロトタイプガンダムの足元にあるパラソルに座っている、あちらの御仁です……ふふ、ビルダーとしては極めて高名な方なので、こうして見ているだけでも励みになりますね……？」

全体的に甘美な眠気を誘う、飴玉でできた鈴を叩いたような声で和服の少女——ダイバーネーム「ユユ」はアイカの耳元に囁きかけ、掌で指し示した方角を振り返れば、そんなやり取りを交わしている二人とエリイ、そして瞑目する青年を、まるで孫を見るかのように穏やかな目で見つめる老紳士の姿があった。

彼が何を思っているかは、アイカにもエリイにもわからなかった。だが、彼の作り上げた渾身の作品と、その瞳がどこまでも奥深く、果てのない光を湛えていることから、きつとそのダイバールックに違わず、どこまでも長い時間をかけてガンプラと寄り添い続け、ユユが口にしたように、我が子や孫を可愛がるがごとく「愛」を注ぎ続けてきたことだけはわかる。

「お久しぶりです。ご健勝で何よりです、そして……また一段と腕を上げられた」

黙り込んでいた青年は老人に歩み寄り、先ほどまでのどこか威圧さ

れているような雰囲気さえ感じさせる仏頂面を緩めてそう言った。

あのクソ暑そうな格好の人は知り合いの元を尋ねてきたのだろうか。どこかハイライトのない死んだ目をしてこそいるが、その瞳に宿る熱意やリスペクト、そして——この聖地にはおよそ似つかわしくない、隠しきることのできない、果てのない闘争心にアイカとエリイは思わず身震いする。

「なんの……人生百年、それを考えれば儂もまだまだ未熟な身よ。だが、こうして孫のような若者たちに喜んでもらえたのであれば未熟千万なれどこの儂も……プロトタイプガンダムも、本望というもの」

「ご謙遜を。旧キット……その奥深さを貴方は追求し続けた、その愛が為せる業を見て、何も感じないビルダーなどいませんよ」

「ほっほ……精進なされよ、君たちに与えられた時間はまだまだ長い。そして儂もまだまだ長く生きるつもりだ、うかうかして抜かれてはかなわんからの……日々是精進、千里の道も一歩から。常に忘れず、挑戦者でありたいものよ」

完成とは絶望のことだと誰かが言った。

アイカには、まだその感覚がわからない。あのご老人が口にした言葉だつて謙遜にしか聞こえないのだが、恐らくそれが本気で、自らを挑戦者と定義した言葉であることぐらい、その細められた目を見ていればわかる。

あれほどまでに登り詰めても、まだまだ先がある。あれほどまでに技術の奥底まで潜り、その手に収めてもまだまだ深く、ガンプラの可能性は広がっている。

それのなんと、途方もないことだろう。

今にも立ち上がらんとするプロトタイプガンダムと、ガンダムベースの店頭でサンプルとして展示されていたそれからほぼ完全に外装を作り直したのであろう、別物な姿をしていたアリアのガンダム・バエルを思い出してアイカは、そしてエリイは息を呑む。

「お兄様」

「ああ、ユユ……今日は君と付き合う約束だからね。それではお元気で、そして」

青年は老紳士と固い握手を交わすと、踵を返して振り返り。

「リビルドガールズのアイカとエリイだったか。君たちもまた……未
来であいまみえることを楽しみにしているよ」

「ふふ……ユユも、いつか刃を交えることをお兄様と共に待っていま
す。この電子の海で……そしてお兄様、今日はユユ以外を見ないでく
ださいと言ったはずですが……？」

「青田買いくらいは許してもらいたいな」

「いいえ、ダメです。ユユは傷つきました……なので、埋め合わせは相
応にしていたいただきますからね？」

「……そのノリを外でもやらなければ、って約束はどこに行つたんだ」
要約すると、いっつか殺す
色んな意味で衝撃的な宣言を発して、自身の左腕にしなだれかかる
ユユの甘えぶりに辟易したように溜息をつきつつも僅かにその口元
を緩めながら、青年「ダイバーネーム「キョウスケ」はユユが頬を
膨らませて囁きかけるわがままに従う形で、ペリシアの雑踏へと溶け
て消えていく。

——名前が売れるのもいいことばつかじゃないんだけどねい。

アリアとのクリエイトミッションでの勝利とその難易度が丁度昇
格ラインを満たしていたことでBランクに上がったチィが、どこか複
雑そうにそう溢していたことを思い出す。

キョウスケとユユがこの誰で、このGBNにおいてどんな位階に
いるのかはフレンド申請をしたわけでも、プロフィールカードを交換
した訳でもないからアイカにはわからない。

だがあの二人の目はアリアが向けてきたそれと同じ、穏やかに振る
舞おうと決して隠しきれない、ギラつく闘争心に満ち溢れていた。

どこで何をきっかけに自分たち、放課後の部活の代わりみたいな
フォースの名前が知れたのかはわからない。

だが、アリアは色んな意味で有名な存在だとチィから聞いているこ
とから察するに、彼女に関するルートからどこかに流れていったのだ
ろう。

「……あたし、お祓いとか受けてきた方がいい？」

「……え、あ、その……えっと……じゃあ、わたしも……」

げっそりとしながら肩を落としてとぼとぼとペリシアの街を歩くアイカに、エリイはわたわたと身振り手振りを交えてフォローを入れようとしたのだが、これではフォローになっていない。

慌てて自分の両手で口を塞いで涙を浮かべるエリイに大丈夫、と囁きかけると、アイカは現実逃避とばかりに街中に所狭しと並んだガンブラたちを眺めながら、喉元まで出かかった溜息を呑み下す。

(まあ、別にあたしたち戦闘狂ってわけでもないしいいか……)

一応エリイが後継機を探している、という悩みでこの聖地ペリシアを訪れているのだが、アイカもエリイも流石にあの二人みたいに立っているだけで並のダイバーを恐れさせるような闘争心を持って、このGBNにログインしているわけではない。

もし何かの間違いであの二人に再会することがあったなら、それこそ乱数の神様が気まぐれに投げた百面、いや、一両面かそれ以上のサイコロが、盛大にピンゾロを出した時ぐらいいしかあり得ないだろう。苦笑しつつもエリイと共に、先程のキョウスケとユユがそうしていたように腕を絡めて歩きながら、アイカは立ち並ぶガンブラの中からエリイに似合いそうなものや何か参考になりそうなものを探し続ける。

「エリイちゃんはなんか見つかった？」

「え、えっと……どれも凄くて、なんだか目移りしちやつて……」

「だよね、焦らなくていいからじっくり行こっか」

露店を営んでいるNPDにメロンジュースとイチゴジュースを注文し、メロンの方をエリイに渡しながらアイカは言った。

聖地というだけあって、ペリシアに並び立つガンブラはいろんな意味で凄まじいものばかりだ。

先程のプロトタイプガンダムがそうであったように、芸術作品として特化したものから、三桁の英傑と称される上位ランカーが組み上げた戦闘用のミキシングビルドまで、多種多様なガンブラが集うこの場所は確かに聖地の呼び名に相応しい、ビルダーにとっての理想郷だといえるだろう。

だが、そこには一つ問題があった。

「……す、すごすぎて……」

「うん、一周回って参考になんないよね……」

あのご老人のプロトタイプガンダムを最初に見たときは、あの不毛極まりない砂漠を抜け出せた高揚感でランナーズハイのような状態になっていたから、見ているだけで上手くなりそう、なんて錯覚を抱いたものだが、見れば見るほどどの作品も凄まじく完成度が高いため、何かを参考にしようにも何を取っ掛かりにすればいいのかよくわからない、という風情なのだ。

——ここにそんなこと書き込む暇があるならヤスリがけでもしろ。

特定のパーツが強すぎる、といった類の文句や不満で、愚痴スレ以外のスレッドを埋め尽くそうとする荒らしが出没したときに、ビルド構築スレで無慈悲に放たれたその一言は、ある種の金言として今も語り継がれている。

あのご老人が口にしていたように、千里の道も一歩から、ということとはわかつているのだが、その一歩が果たして千里の道に続いているのかを考えたときに、アイカも、エリイもまた暗澹たる気持ちを抱いてしまうのだ。

イチゴジュースを啜りながら、「二桁の魔物」が作り上げたと思しき、内部フレームから何まで全スクラッチしました！ と機体説明に狂気の一文が記された105ダガーを一瞥して、アイカが溜息をついていると。

「わあ……！」

「ん、どしたのエリイちゃん」

「アイカさん、あれ……！」

エリイがいつになく目を輝かせて指さしたのは、ペリシアにそびえる宮殿前に展開されていた一つのジオラマだった。

シン・アスカとマユ・アスカ。本編ではあまりにも凄絶な死別という結末を遂げてしまった兄妹が、怒りとは遠い無垢な、なくしていくばかりの幼い瞳で、マユがその頭にシンが作ったと思しき花冠を載せているのを見つめている姿と、そして、その花畑に膝をついて、ボロ

ポロになりながらも血涙を流したようなフェイスエクステリアにさらなる憎悪を滲ませたようなステイニーガンダムが、兄妹を優しくその掌で包み込んでいる——そんな、慈しみと哀しみが、悲劇と祈り、シンが本当に欲しがっていた世界とそれが叶わずに戦い、傷付き続けるステイニーという景色が、宮殿の前には広がっている。

何故だかはわからない。

だが、アイカもエリイも、血涙を流し、憎悪に身を焦がしながらも花畑の後ろで燃え上がり、フェイスソフトダウンを起こしたフリーダムガンダムの残骸に背を向け、楽園で戯れる兄妹を優しくその掌に包み込むステイニーの姿が、そしてその掌にはパルマ・フィオキーナという武器が搭載されている事実が無性に哀しく、胸を締め付けてくるように錯覚するのだ。

「……アイカさん、泣いて……?」

「エリイちゃんだって……」

アイカはガンダムのことをよく知らない。エリイもそれは同じだ。だが、仮想の世界の中で展開されたそのジオラマはそこにある悲劇と果たされるべきだった祈り、そしてそれが叶わずに戦火へと飲み込まれていく運命がまざまざと表現されている。

技術的な面から見れば、元が1/144というスケールであるものをGBNの中では元のスケールに拡大しているのだから、あの表情と所作まで伝わってくるようなシンとマユは、小指の先ほどの大きさのフィギュアで作り上げたという、執念さえ感じさせるレベルの超絶技巧がそこにはあって、そしてジオラマの肝となる損傷したステイニーもより慚愧にその身を焦がした印象を与えるようなダメージ加工と、フェイス部の改修などが行われていることをアイカは直感的に理解していた。

だが、肝要なのはその超絶技巧それ自体ではない。

——ええ、それが愛。

先程エンカウントした、ユユの言葉が脳裏を過ぎる。

そうだ。技術はあくまでも手段、どんな形であれ、己の中に滾る「愛」を表現することこそが、きつとガンプラの本質なのだ。

アイカは、胸に手を当てながら静かに目を伏せる。

愛。あたしにも、あるんだろうか。あたしは、どんな愛を。

「惑っているね、その愛に」

声が二人の耳朵を震わせたのは、エリイも同様に涙を滲ませながら、ジオラマが見せつける愛の眩しさを理解して目を逸らしてしまつた、その時だつた。

声のする方向にいたのは、薄い紫色の長髪を結び上げて、ペリシアのモデルとなつたどこかアラビアンな服装をその細くしなやかながらも均整の取れた筋肉が浮かぶ身体に纏つた、獣人姿のダイバーだつた。

「……あ、貴方は……し、シャ……シャフリヤール、さん……？」

「ああ、そうとも。私がシャフリヤールだよ」

乱数の神様が振つたサイコロが、ファンブルを出したのか六ゾロを出したのかはわからない。

だが、アイカたちの目の前に現れたのは、間違いなく、世界一のビルダーと人々から畏敬の念を集める、シャフリヤール本人に他ならなかつた。

第二十五話「あたしにできること〜ニブンノイチの愛香と絵理」

シャフリヤール。

ビルダーとしての実力はあのチャンピオン、クジヨウ・キョウヤをも超えて世界で一番の存在であると讃える声は非常に多い。

技術だけを見ても、彼の「基本を丁寧に突き詰めて画竜点睛を欠くことなく作品を仕上げる」という誰もが理想としながらもどこかで妥協をしてしまうところにそれを一切許さず、米粒のようなパーツすら筆を巧みに使い分けてムラなく、はみ出しなく綺麗に塗り分けていく様は以前に取材を試みた、模型誌の記者がメモを取ることさえ忘れるほどに流麗なものだったという逸話が語り継がれている。

本来彼はあまり人前に出ることをせず、その作品だけで己を語るスタイルであったのだがそこはそれ、二年前、ちょうど「ブレイクデカル」なるチートツールが蔓延していた頃に彼の名を騙る偽物が、不屈き千万にもほどがあるのだがこのペリシア・エリアに現れて悪事を働いたことから、今は割と積極的に人前に出ているのだ。

とはいえ、彼の姿勢は変わっていない。

愛だ。

一言で彼について記すのであれば、その言葉以外にふさわしいものは何もない。

そして彼もそこに多くを語らない。もし迂闊にも、シャフリヤールに対して「今のガンプラじや満足できないから後継機とか考えてくれますか」などと口にしたのなら、それは龍の逆鱗に触れるが如き行いであり、冷たく突き返されてしまうことだろう。

愛とは、己の内に溢れる想いだ。そして同時に他者を、他のところにあるものを想うことで、そして想われることで成立する相互方向の感情であると、シャフリヤールはそう定義している。

もちろん、愛の形は様々だ。それが他人を傷つけるものであったのなら彼は決して愛を暴力に変えることを容赦せず、愛機である「セラ

ヴイーガンダム・シエヘラザード」によつて、GBN最上位ランカーたるその所以を見せつけることだろう。

しかし、そんな彼が何故アイカたちの目の前に現れたのかは、彼女たちすらも理解が及んでいない。

名前しか聞いたことのないような有名人とのエンカウントに戦慄し、硬直しているアイカとエリイを他所にシャフリヤールは小首を傾げて、エリイの瞳をじつと覗き込んだ。

「君は……恐らく自分のガンプラについて惑っているね」

「……えっ……？　は、はい……そ、その、わたし……」

「だが同時に、君は君のガンプラを愛している。それ故に、君は今深い迷路の中でもがき続けているのだらう。そして、君も」

「……あ、あたし、ですか？」

「愛とは、時に人を悩ませ、狂わせてしまうこともある。しかし……そこに、その愛に物語を、心からの想いを与えたいからこそ、君……アイカも、そしてエリイも、悩み続けているのだね」

自身が作り上げたジオラマと二人の顔を交互に見て、シャフリヤールはそう断言する。

アイカは、確かに悩んでいた。

だがそれはコメットコアガンダムそのものに対する悩みではない。Cランクという、GBNにおいてある種のスタートラインとされている位置に立ったことで解禁された必殺技という要素についてのことだ。

アキノが披露した必殺技は、終了時に自壊するという弱点を抱えた時限強化だった。そして一番最初に見たハマモリのユニコーンガンダム・フルバーニアンもまた、NT-Dの強化という時限強化に関するものであった。

だが、必殺技もGBNにおいては多様だ。武器を強化して必殺の一撃を叩き込むものもあれば、最大出力によるビーム砲であるFOEさんがやっていたような広域殲滅や超絶的な破壊力を実現するようなものもあり、そしてそれが砲撃ではなく徒手空拳から放たれる、というものも存在している。

変わったところでは、ミラーージュ・コロイドを応用して一定時間自機のテクスチャを戦場にいた機体のそれに貼り替えるだけではなく、リーダーさえ「敵の味方」と誤認させるものの存在も確認されている。なればこそ、アイカはコメットコアガンダムにどんな物語を望むのか。どんな必殺技が、自分とガンプラを繋ぎ止めるために必要になるのか。

それがわからないからこそ悶々としていたのだ。

「申し訳ないが、私は決して答えを語ることはしないよ。それは愛を……心の中に踏み入って暴き出して曝け出すという暴力にも等しいからね。だがもしも君たちが深い愛によって惑っているのなら、その霧を晴らす手伝いはできる」

シャフリヤールは穏やかにエリイの鳶色の瞳と、その中心に星が輝くアイカの碧眼を見据えて静かに、そして厳かに語った。

愛。投げかけられた言葉に、エリイは正直なところ困惑している。確かにあのヘイズルイーにはどこか自分を重ね合わせている部分があつて、例えば知らない人から「もつと強い他の機体に乗換えたらいい」というアドバイスをされたとしても、それを素直に受け入れられたかどうかについて考えれば、他人に遠慮しているからこそ迷うのであつて、ヘイズルイーを捨てる、というチョイスは最初からエリイの中には存在しなかったのだ。

だけど、そのままヘイズルイーを使い続けていけばきつとアイカたちの迷惑になることぐらいはわかっている。せめてコンポジット・シールドブースターなる武装が揃っていれば、アリアとの戦いで、あの程度の時間稼ぎぐらいはできたのかもしれないが、説明書すら欠品していた以上、それを部品注文することも叶わない。

「……しゃ、シャフリヤール、さん……！」

「なんだい、エリイ？」

だからこそ、エリイは勇気を振り絞ってその名前を呼んだ。

ちらりと横目に見たアイカもまた、シャフリヤールから贈られた言葉に悩んで、小首を傾げている。

アイカが、助けてくれなければ、きつと自分はGBNにも嫌気がさ

してやめて、きつと——きつと、この世界の全てに絶望して死を選んでいたかもしれない。

左手で、現実で「絵理」が前髪を留めているものとよく似たそれを探し当てて「エリイ」の髪にも装着したバレッタに触れながら、エリイは己の過去と、売れ残ったヘイズルIIと、そして、きつと廃棄されていく二月十五日のチョコレート、十二月二十五日のクリスマスケーキを重ね合わせる。

——だいじょうぶ。しんじやだめだよ、いきてたら、きつと。きつといつか、いいことあるから！

幼い頃に聞いたその声の主が誰なのかはわからない。ただ、絵理が——右眼を、片目を失ったことで、元から眼の色で迫害されていたのに追い討ちをかけるようにいじめられていた時、石を投げつけるガキ大将の前に立ちはだかつて彼と殴り合いの喧嘩を繰り広げた女の子が、自分の髪を留めていたバレッタを外して、その言葉と共に贈ってくれたからこそ、今日までエリイは、「絵理」は歯を食いしばりながら生きてこられたのだ。

なら、きつと売れ残って劣化したらワゴンに叩き込まれて、それでも売れなかったら捨てられてしまったかもしれないこの子を、ヘイズルIIを見捨てないで、アイカさんたちの役に立つためのヒントがあるのなら、わたしはそれが欲しい！

エリイは、眦に涙を浮かべながらも真っ直ぐにシャフリヤールを見つめ返して、その言葉を口にした。

「……少し前に、君たちと同じアドバイスをしたことがある」

「……同じ……？」

「このGBNなら、いつか彼と君たちが巡り会うこともあるのかもしれないね。さて……話が逸れてしまったね、すまない。本題に移るとしよう」

「……」

「エリイ。アイカ。君たちは……足元を、そして隣を見ているかい？」

どこか愛おしそうに、何かをそこに思い返しながらシャフリヤールは問いかける。

足元。下を一瞥しても見えるのは靴と自分の影だけかもしれないが、彼が言っているのはそういうことではないのだろう。

一瞬だけ下に向けた視線を戻して、アイカはシャフリヤールが言った通りに横を見れば、そこには決意にあふれた表情で凜として——と、まではいかなくとも、涙を堪えながら、必死に彼と向き合っているエリーの姿があつて、その鳶色の瞳は、同じように自分を覗き込んでいて。

——ニコイチ。

そんな言葉が、はたとアイカの脳裏に溢れて落ちる。

遙か昔、二個のプラモデルからそれぞれ好みの形状のパーツをミキシングすることで一つのプラモデルを作り上げる技法をそう呼んでいた時代があつた。

しかし、プラモデルやガンプラ自体が多様化したことでサンコイチヨンコイチ、といった手間と暇と金がかかる改造が主流化していく中でその言葉はいつしか廃れてゆき、複数のキットをつなぎ合わせて一つのガンプラを作り上げるそれは「ミキシングビルド」ないし「ミキシング」という言葉に置き換えられていったのだ。

正確にはミキシングという言葉にもコンパチブル、という別種の定義があるのだがそれは割愛しておこう。なるべく共通規格が採用されるようになってきた昨今、コンパチもミキシングもそのハードルを引き下げたのは間違いなくガンプラの版元の企業努力に他ならないからだ。

ならば何故、遙か昔に廃れたはずの言葉をアイカが知っていたのか。

その答えは簡単だ、女子高生たちの間で、「二人で一つ」を意味する言葉として、「ニコイチ」という単語は現代に蘇った。

ニコイチ。ミキシング。二人で一つ。

脳裏に浮かぶ三つの点は、それぞれに震えて微かに線を成そうとしていた。

——グリップが、ビームサーベルと同じだったら。

瞬間、何かが鋭く閃き、空間を裂くような音がアイカの脳裏に響き

渡った。

そうだ。考えてみれば、簡単なことだったのだ。

「……ヘイズルIIと……」

「何かを……」

『ニコイチにする！』

正確にはニコイチではなく複数を利用したミキシングになるのだろうか。

アイカとエリイは互いに手を取って、全く同時に浮かんだ結論に表情を明るく輝かせる。

そうだ。何も乗り換える必要などどこにもないのだ。

組み立て済みだからとゲート処理が甘い部分は再処理すればいいし、幸いなことに四肢は万全の状態で揃っていて、元となったTR―6ウインドウォート自体が拡張性に優れているから、候補には事欠かないだろう。

「晴れたようだね、エリイ、そしてアイカ」

「はい！　ありがとうございます、シャフリヤールさん！」

「……ありがとうございます……！」

「それは何よりだ。愛ある者の旅路に幸多きことを願うよ」

一刻も惜しいとばかりに現実へと解けていく二人を見送りながら、シャフリヤールはそこに、かつて遭遇して己にヒントを問いただし、同じように凄まじい速度で解答を見つけてしまったELダイバー……「リゼ」の姿を重ね合わせながらひっそりと苦笑する。

必殺技についての悩みもどうやら解けたようだし、それを使うのに迷ったなら自ずと彼女たちならあれのところに通り着くだろう。

久しぶりに、技術を称賛するのではなく込められた想いに涙まで流してくれる者が現れてくれた幸運と、そしてその誰かの心を揺さぶることができた自身の愛の結晶として生まれてくれた作品に感謝をして、シャフリヤールは宮殿の中に引き返していく。

少し、ファンサービスをしすぎてしまったかな。

そう呟く彼の言葉に応えるものはない。だが、いっだって、自分の生み出したものが、心が、誰かのそれと触れ合って繋がっていく感

覚は。

有名無名を問わずして、ビルダーにとっては何物にも代え難い、至上の喜びに他ならないのだ。

GBNからのログアウトをするなり、愛香は絵理と家路を共にしながら、スマートフォンでヘイズルIIとその系列機について調べ上げる。

ハイザックIIだとかダンディライアンだとかガンダム・インレだとか、画面の中に出力される複雑怪奇なAOZ——アドバンス・オブ・ゼータ、ヘイズルIIの出典となる外伝の情報量に頭はパンクしそうだったが、どうやらヘイズルIIという機体、というよりコンポジット・シールドブラスターを失っている絵理のガンプラは、その中でも「素体」に近い位置付けであることは理解できた。

「絵理はさ」

「……は、はい……」

「どんな感じのガンプラを……ううん、絵理はあのGBNで、どんな風に飛んでみたい？」

弱視の絵理には、愛香が差し出してくるスマートフォンの画面に表示されている画像もぼやけて映る。

だからそこにどんな文字列が並んでいて、どの機体が、どんな特徴を備えているのか、その精細なディテールもまた判然としない。

だが、愛香が問いかけてきたのは「どの機体を選びたいか」というものではない。

すう、と、小さく息を吸い込んで、絵理はシャフリヤールと言葉を交わしていた時からずっと温め続けていたその答えを、形にする。

「……わたし、目になりたいです。愛香さんの……チイさんの、アキノさんの……皆の、目になって、あの世界を……見たい、です……」
「オツケー、わかった」

ほとんど目が見えない絵理にとって、GBNの世界は救いだった。最初こそ救いを感じる暇もなくモヒカンに襲撃されたりと散々

だったが、愛香に助けられて、いつの間にか自分がきつと一生作る
ことができないうと思ひ込んでいた、仲間と呼べる存在ができて、そして
今日は、普通の高校生みたいに、その景色こそ仮想だったけれど、風
景を楽しみながら何気なくジュースを頼んで、一緒に散歩をするとい
う、ずっと憧れていたことが、憧れている愛香と一緒にできたのだ。
きつとこれに勝る幸せはない。

GBNと同じ位置にあるバレツタに触れながら、幼い頃に贈られた
言葉を思い返して、そつと絵理は涙ぐむ。

嘘だと、生きていたって何もいいことなんてないと、ずっと、心
どこかでは疑っていた。

だけど、その言葉を捨てることはできなかつた。だってそれが本当
に嘘だったら、わたしは何のために辛い思いに泣いてきて、何のため
にそんな思いを背負いながら生きてきたのか、わからなくなるから。
でも、本当だった。

——わたし、生きててよかつたって、報われたって、ちゃんと見え
たんです。

左眼からはらはらと涙を零しながら、絵理はその幸せを噛み締めつ
つ、名前も顔もわからないバレツタの少女に感謝を捧げる。

「ねえ、絵理」

「…………ぐすつ…………あ、愛香、さん…………？」

「あたし、集中しすぎると周り見えなくなるんだ」

それはずっと、愛香の悪癖として人生につきまといてきたものだっ
た。

陸上も、吹奏楽も、手芸も、全て一人の力で何とかしようとして一人
で死力を尽くしていたものの、それは空回りするばかりで、何一つ身を
結ぶことなどなかった。

当然だと、今ならばそう思える。それはGBNと、絵理と、そして
チイとアキノに出会えたからこそ振り返れることで、アリアとの戦い
をその出会いが生んだ絆がきっかけとなって乗り越えられたからこ
そ、こうして俯瞰することができて、当時の愛香にとつて自分の努
力が身を結ばなかつたというのは人生さえも否定されたのに等し

かったのだ。

誰の助言も、聞き入れてこなかったにもかかわらずだ。

小さく苦笑しつつも、愛香は絵理の両手を包み込むようにそっと握って、彼女が振り絞った精一杯の勇氣に、そして彼女が捧げ続けてきた厳かな祈りに少しでも寄り添えるよう、真つ直ぐにその瞳を覗き込んで愛香は宣言する。

「GBNで、絵理があたしの……あたしたちの目になってくれるなら、あたしは現実で絵理の目になるよ」

「……っ、あいか、さ……」

「だから物は一つ提案なんだけど……明日、あたしの家に泊まらない？」

一応愛香の家にも古いタイプで、バトルをするのには堪えないスベックでこそあるものの、ログインしてモデリングを確認するだけなら十分なVR端末と、正月だったかにお年玉でそれを買換えた新型の二台がある。

自分は古い方を使えばいいとして、端末が二台あるなら絵理にダイバーギアを持ってきてもらうことで改造途中のガンプラをスキャンして、格納庫で姿を確認してもらおうといったことも可能になるだろう。

ガンダムベースで製作ブースを借りながら時折ゲームブースでその作業を挟む、ということもできなくはないのだがそこはそれ、出費が凄まじいため、ミキシングの材料として絵理が口にした「目」という言葉から連想したキットを幾つも買い込む必要がある以上、避けられるものは避けておくに越したことはない。

「……え、あ、その……いい、いいんですか……?」

「何が?」

「……え、えっと、その……ガンプラの、お金とか……って、いうか、その……そもそも、わたしが……愛香さんの家に、お泊まりすることも……」

「どっちもオツケー、言ったでしょ? あたしが絵理の目になるって、それにさ」

——あたしは、絵理の味方だから。

絵理の身体を抱き締めて、愛香は耳元でそつと、しかし何よりも力強くそう囁いた。

「……………あいか、さ……………あいか、さん……………つ……………ぐすつ……………うええええ……………んっ……………」

「よしよし、それじゃ明日、学校終わったら一緒に帰ろっか」

「……………ぐすつ……………えぐつ……………」

嗚咽に塗れて言葉にこそなっていなかったが、絵理は何度も首を縦に振って、愛香の言葉を肯定するのだった。

さて、今日は大分札束が飛んでいくことになりそうだ。

また日が高いうちにガンダムベースを出てしまったが、ガンプラは色んなところで買えるのだ、そのAOZとやらのガンプラが具体的にどの辺まで商品化されてるのかわからないけれど、スマホで調べて店をローラー作戦で片っ端から探していけば見つかるだろう。

絵理と分かれて、家とは反対方向の、電気街を目指してその方面へと向かうための電車に乗りながら、愛香は一人苦笑しながら、諭吉が飛んでいく覚悟と、改めて絵理のために、親友のために全力を尽くす覚悟を固めるのだった。

第二十六話 「黒兎は夢を見る」はじめてのお泊まり・前編」

統合整備計画、というものがある。

簡単に言ってしまうえば、規格が複雑化しすぎて整備班が死ぬほど大変だから共通化してしまおうぜ、という話で、兵器の種類が多様化しすぎた一年戦争期ジオン公国軍において提唱された計画なのだが、まあ、その話が出るのが遅すぎた。

一応の理屈づけとしてはOVA「ポケットの中の戦争」で登場するモビルスーツ群は当初、アレックスやケンプファーといったオリジナルのものを除けば「一年戦争期におけるザクやリック・ドムやゲルグを高い解像度で描いたデザイン」という、今でいうところのガンダムWにおけるテレビ版とEW版の違いがあつたため、それを別機体として再設定するに当たって考案された設定なのだが——その経緯も不明瞭であるため今は割愛しよう。

ただ、この「多様化しすぎた規格の整備」というのは、現実世界においてもガンプラに導入される運びとなつた。

より組み立てやすく、そしてよりミキシングしやすくすることで今までは高い擦り合わせの精度や真鍮線による軸打ち、なんなら関節の新造ないし市販パーツへの置き換えという極めてハードルの高い工作を簡略化し、「自分だけのガンプラ」を作りやすくしようという版元の試みだ。

採用された当初こそ共通化による関節部デザインの變更などで批判あつたものの、それが成熟してきた頃には「機体の特徴を出来る限り再現しながら、出来る限り共通規格を取り入れる」という方向性へと変化したことで、ユーザーにこの試みは広く受け入れられることとなつた。

だがそれは、新たな沼への呼び声に他ならなかつたのだ。

——ミキシングというのは、複数のキットをミキシングするからミキシングというんですね。

当たり前のような言葉だが、ビルド構築スレに書き込まれたそのビギナーの言葉は迷言として構文化されつつも、ビルダーたちに自分たちがどのような行いをしているのかを直視させた恐怖の言葉として、茶化さなければやっていけない、ということでもミームとなった側面を持ち合わせている。

要するに、金がかかるのだ。

ガンプラは、他社の著作権ものキットと比べれば驚異的なまでに安価に抑えられ、そして異常なまでのパーツ精度と、恐怖さえ覚える成形色による色分けと、組み立てやすさの実現という一見二律背反とも取れる要素を両取りした狂気の産物だ。

全てはユーザーのために。その声に応える形で版元は日々努力を重ねることでガンプラをプラモデルにおける一つのジャンルとして確立するまでに至らしめた。

だが——当たり前だが、複数のキットを買えば、いかに単価がお安かろうとキットの数だけ財布にかかる負担は増していく。

一つキットを買えば沼に浸かるように財布を差し出し、二つ買えば更に倍、三つ買えばそのまた倍、そしてビルダーは今日も積みプラの塔を作りながら、版元にお布施をするように財布を差し出す。

故にガンプラ。故にミキシング。愛香もそれは覚悟していた。

覚悟こそしていたが、まとまった額の金が一気に飛んでいくというのは小市民としては胃袋が削られるような感じを覚えてしまうのがどうしても悲しいところなのだ。

絵理と分かれたあと、「AOZ」そして「チームの目」というコンセプトから、可愛さではなくあくまでも彼女の願いを叶えるためのガンプラは何かと電気街を駆けずり回っていた愛香だが、一つだけ誤算があった。

この「AOZ」のガンプラ、いわゆるレアモノ揃いなのである。

以前、受注販売限定という形で扱われていたそれらは通常の家電量販店や模型店に並ぶことは少なく、時期を逃せば大体が古物店でプレミア価格を付けられた状態で見かけることになる。

しかし、版元はGBNという追い風を得たことで強気の攻勢に出

た。

そう、ガンダムベースのサテライト化である。

各種地方都市及び主要な都市にガンダムベースの分店を設立することで、本店であるお台場には及ばずとも直販店故の強みである限定品を扱える、という性質から、クリア成形や色変えなど、多彩な形がかつて通販サイトで購入した人間の面子を極力潰さない手段を選んで、自ら限定キットの供給体制を切り開いたのだ。

そして、今の時代でなければ愛香の財布は更に悲惨なことになっていたといつてもいいだろう。

ガンダムベース、アキハバラサテライト分店。そこで奇跡的に見つけた、HGUCガンダムTR-6「キハールII（グリーンダイバーズ・イメージカラー）」の最後の一つ以外、「AOZ」に関するガンプラは狩り尽くされていて、一応覗いてみた古物店に並んでいた「ハイゼンスレイII・ラー」のお値段など、学生としてはとても手が出ないレベルのものであった。

だが、「キハールII」が残っていたことは、愛香にとって幸いだっ

た。
幾つかのミキシング素材は必要なツールとともに家電量販店で購入し、薄くなった財布と厚くなった紙袋を抱えて家路につく中、スマートフォンで調べてみたところ、この機体はどうも「ヘイズルII」、その派生元となる「ウインドウォート」に通じるものようだ。ミキシングをするコツとして、まず同じデザイナーであったり同じ作品、陣営の機体を素材に選ぶというビギナー向けのポイントを、図らずも愛香は抑えていたことになる。

そして更に嬉しい誤算だが、ウインドウォートは愛香にとっても「可愛い」と思える、どこか絵理とよく似た、フードで目を隠しながら走り回るウサギのようなデザインであることが、モチベーションを高める要因となったのだ。

家に着くなり食事と風呂を済ませて、愛香は寝る間も惜しんで「キハールII」の組み立てと、そして「目」というイメージから連想した各種キットの武装及び個人的な目的で購入したキットを組み立て

ていた。

「……で、こんなになつてゐるわけよ……」

「……あ、あの、愛香さん……む、無理は……しないでください……」
絵理にはぼんやりとしてよく見えなかったが、校門前で落ち合った愛香は輪郭的に、制服ではなく私服でおめかししているような気がするものの、その全身からはどんよりとしたオーラを漂わせていて、本気で自分のためにガンブラを組んでくれていたんだな、と察することはできたし、それ自体は嬉しかったものの、それ以上に痛ましい、というのが率直な感想だった。

絵理も、気合いを入れた服を母に選んでもらった。

夏の香りを漂わせる風が吹き抜ける、新緑のざわめきに釣られて、ふわりと白にアクセントとして所々水色が取り入れられたワンピースと、罌の大きい、同じ色使いの帽子がはためく。

——絵理、美少女だよ。絶世のそれだよ。

徹夜でオーバーヒートしかけていた愛香の脳は、一段と気合を入れたきた絵理の姿を見たことで焼け切つて、完全に宗教画を見るような、というよりはなんか負のオーラの漂う怪しげな信仰を抱いている者のような目で絵理を見つめることしかできなかった。

「あ、あの……似合つて……ます、か……？」

自分では、見えないので。

絵理はおずおずと帽子を目深に被りながら愛香に問いかける。

「モデルかなんかって言われたら今のあたしは、ううん、今じゃなくても信じると思う。大丈夫、絵理はめっちゃ可愛いよ」

愛香もボケた頭をフル回転させてそれなりに気合いを入れた服装で絵理を迎えに来たのだが、なんとというか素材が違うというか雰囲気が違うというか、透き通るように白い絵理の肌对白ワンピースと大きな帽子なんて、こんな排ガスに汚れた都会の空じゃなくて向日葵畑とかそういう場所の方が遥かに似合うんじゃないかと、そんな早口での感想を脳裏に抱くが、徹夜明けの舌がついてきてくれない。

「あ、あの……」

「ん、いいよ」

「は、はい……失礼します……」

ぺたぺたと、声を頼りに距離を詰めてきた絵理の両手が自身の頬に触れる感触に、すっかり慣れたくすぐったさを感じながらも、なんだかこれもいつも通りになってきたな、と、愛香はそんなことを思うのだ。

絵理の指先は、滑らかで嫌いじゃない。

きつと目が見えない彼女からすればそれは目の代替とすべき切実な行為なのだろう。だが、愛香はそこに罪悪感を抱きながらも、どうしてか絵理に触れられることを好ましいと思ってしまうのだ。

「……ありがとうございます……よかったです……」

「ううん、あたしの方が変なカツコしてないか心配だから……」

「……大丈夫、ですよ」

「ほえ？」

即答で返された予想外の答えに、愛香は素っ頓狂な声を上げる。

「……そ、その……愛香さんは、可愛いものが、好き、ですよね……？」

だから、その……愛香さんが好きなら、それを好きな愛香さんも、可愛くて……あれ、わたし、何を……」

ぐるぐると焦点の合わない左目を回しながら、絵理は混乱しつつもそう言い切った。

途中で何が言いたかったのか、自分でもわからなくなっているような風情だったが、愛香には、それだけでも、いや、他でもない絵理の口からその言葉が出てきたことが、何よりも嬉しかったのだ。

(……そっういや、あたしがあたしの好きなもの、ううん、あたし自身を好きだって思ったこと、なかったな)

愛香の「可愛い」に対する渴望は、根源的な飢えのようなものだった。

いつも満たされなかった。いつも満足できなかった。

三位で終わった徒競走。ダメ金で終わった三年間。そして、いつも「クラスで三番目ぐらいに可愛い」と言われてきた自分の容姿。

だからこそ、愛香は三という数字が大嫌いだった。

そして、無意識でこそあるもののその永遠に付き纏う「三」から逃

げ回るために、可愛いものを学んで、可愛いもので自らを飾るために、「可愛い」という価値に対していつも、砕け散った思い出を裸足で踏みつけながらその足元に積み上げて、血塗られた手を伸ばし続けてきたのだ。

両親との折り合いが悪いわけじゃない。

愛香には、人並みには愛されて育ってきたという自覚がある。

小学校の折に「自分の名前の由来を調べて作文にしましょう」という課題が出たときは、両親に緊張しながらその由来を尋ねたものの、帰ってきたのは真摯な、「誰かに愛される、ちょうど初夏に吹き抜けていく香る風に似た子になってほしい」というもので、心の底から安心したことを覚えていた。

だが、それは家庭の中での話だ。

家庭から出ればいつも愛香は三番目だった。家庭科の調理実習も、図工のコンペも三番目と銅賞で、中学校の時のダメ金だって金賞の中で最下位だったから、三番目だったから下された烙印なのだ。

「……ありがとね、絵理」

「……愛香さん……？」

思わず涙ぐんでしまったのと、声に嗚咽が混じっていたのはきつと徹夜明けで脳がおかしくなっているからだ。

きつとそうに違いはない。

こみ上げる暖かさとむず痒さと少しの罪悪感と切なさに俯きながら、愛香は絵理の手を引いて、いつもよりちよつとだけ足早に通い慣れた家路を歩んでいく。

その想いの名前を愛香はまだ知らない。

けれど、吹き抜ける夏の香りを乗せて頬を撫ぜる微風は、そして、繋いだ手を交互に巡る体温と鼓動は、確かにその答えを知っていた。

アルフ・ライラ・ワ・ライラ。

シャフリヤールが必殺技とするその言葉の出典と由来こそ愛香は知らないが、名付けがもしも魂に在り方を刻む儀式であるのなら。

愛香は、間違いなくその答えに辿り着ける。

そう告げるかのように、絵理と愛香に吹く風は、言葉こそなくとも

そう語りかけて、彼方へと吹き抜けていくのだった。

「なんもないけどとりあえずゆっくりしてね、絵理」

「わ……えっと、お、お邪魔します……」

愛香の家は割と大きなマンションだった。

そしてかつての帝都、摩天楼がひしめく東京でその家を持つということは両親の仕事の大きさにも比例するということであり、銀行員の父は海外出張で長いこと留守にしているし、大手のゲーム会社でグラフィックデザインを務めている母もまた家を空けることが多い。

だから、絵理が泊まりに来ることに関して母も反対はしなかったし、いつも通り新宿のホテルで缶詰になっているという連絡が悲しみの絵文字と共にメッセーアプリに添えられただけだった。

絵理が指先で壁をなぞる時間を、自身の家の構造を刻み込むだけの時間を確保しながら、ゆっくりとその手を引いて自室へと愛香は招き入れる。

「絵理、ヘイズルII持ってきてくれた？」

「は、はい……ちゃんと……」

鞆の中から緩衝剤が詰められたタッパー——愛香と同様の保管方法を選んでいたそれを「そごと取り出して、絵理は愛香へと自身の愛機を、想いのこもったガンプラを託す。

「思ったより共通部分多くて助かった……あ、絵理。これ、ログイン用のゴーグルだから今のうちに着けといて。着け方は大丈夫？」

愛香は受け取ったタッパーを机に置くと、同じく引き出しから取り出していたフルダイブ用のデバイス——標準的なモデルであるゴーグル型のそれを、絵理へと差し出す。

絵理は形状を把握するためにぺたぺたと入念に触れて確かめるが、それは確かに普段、絵理が使っているものと同じモデルだった。

「……は、はい……家にあるものと、同じです……」

「あれ、絵理デバイス持ってたの？」

「……え、えっと……はい……小さい頃からわたし、目が見えないので……母が、買ってきてくれるんですけど……どんなゲームでも、毎回

いじめられるので……」

「……参考までに聞くけど、何買ったの？」

流石にVRMMOが全盛の時代で、絵理のような純朴な性格をした人間が何らかのカモにされやすいという傾向こそあっても、出会ってきたその全てで極端な話あのモヒカン共と同じような連中に囲まれるのはよっぽど運が悪いか、ゲームの方に問題があるかの二択だ。

そして大体の場合確率が高いのは後者である。

フルダイブゲームは発展途上のジャンルであるが故に玉石混交、巷で聞いた話では「筆舌に尽くしがたいバグの数々と破綻しきったメイシナリオがMMO要素によって更にクソゲーとしての完成度を高め、メインヒロインであるはずのキャラクターを躊躇なくぶん殴れるシナリオクリア時の数分間が最大のご褒美」という、何の冗談だと疑いたくなるようなクソゲーが存在して、そしてそのようなクソゲーは決して珍しいものではないというホラーなオチまでついてくる修羅の巷なのだ。

誰が呼んだか、神ゲーの中にあるだけハードコアディメンション・ヴァルガの方がマシ。

神ゲーの中にクソ要素が存在するのと最初からクソゲーなのでは天と地ほどの違いがある。

とうかそもそもVRMMO市場自体がハードコアディメンション・ヴァルガみたいなもの。

散々な言われようだが、事実なのだから仕方ない。

そして、絵理の口から飛び出てきたラインナップは、そんな黄金時代が落とした影、夢追い人が半ばで力尽きたがごとく、死屍累々たる有様だった。

「……えつと、なんだか……お侍さんになって、皆で戦うゲームと……あとは、よくわからないですけど、いっぱい敵が出てきて、気付いたら360度包囲されてたりとか……ダンジョンを歩いてたら、床が抜けて……透明な敵に後ろから……」

「オツケーわかった。それは絵理が悪いんじゃないでゲームが悪い」

さながらクソゲーの宝石箱だ。ナチュラルボーンクソゲーハン

ターとして生まれたのかと問いたくなるラインナップの数々だったが、泣きながらもそれらと向き合って、クリアこそできなくともそれなりに遊んできたからこそ、控えめな性格や、生来の視力に代替する感覚と併せて絵理はあの観察力を手に入れたのだろう。

とはいえクソゲーに遭遇できるのは大体ワゴンの中だと相場が決まっている。安物に手を出して大火傷、というのは黄金律だ。

実際愛香が古いデバイスを買って替える原因になったのは単純に古くなったというのもあればその、序盤のダンジョンで床が抜けて透明なラスダンの敵に殴り殺されるゲームで理不尽を死ぬほど味わった結果、デバイスを床に叩きつけてしまったからである。

「……………」

「絵理、幸せには本物と偽物の区別なんてないかもしれないけど、ゲームには神ゲーとクソゲーがあるんだよ……………」

「……………そ、そうなん、ですか……………」

「………いつそ、知らない方が幸せだったのかもしれない。」

絵理は自身のゲーム体験を振り返り、そこに微かな後悔を抱きながらも新しい方の端末で、予備機としてアイカからデバイスと共に渡されたプチツガイをダイバーギアにセットして、GBNへのログインを試みるのだった。

愛香はというと親友の惨憺たるクソゲー遍歴を哀れみながらも、渡されたハイズルIIの頭部や四肢、そしてブーストポッドを分解して、自身が組み立てたキハールIIへと組み付けていく。

派生機ということもあり、元が同じ金型を使っているため、ハイズルIIの組み込み自体は極めて順調に進んだ。

共通規格の恩恵である。元々バリエーションキットは組換えやすいとして定評こそあったものの、バリエーションキットが豊富に生まれたのも、ひとえにガンプラを多くのユーザーが買い支えてきたからに他ならない。

愛香は基本的な組み込みを済ませたキハールIIに、ハイズルIIのブーストポッドを移植したことで3mm軸穴が解放されたことを確認すると、そこに自身のイメージする「目」と、その鍵となるパー

ツを組み込んで、それをダイバーギアに乗せた上で古い端末でログインする。

未完の黒兎は、跳ねるその時を台座の上で静かに待っていた。

絵理から譲り受けた心と、愛香から授けられた翼を得た機体がシステムの光に包まれてゆき、そこに愛香の意識を背に乗せて、兎は仮想の海へと跳躍する。

愛香の意識が降下して、その身体もまた電腦世界への門を潜ることで、校則に引つかからない範囲で茶色く染めたシヨートボブではなく、派手なピンク色をしたふわふわとカールのかかった長髪に、お団子状のツインテールを結え、瞳は鳶色から、そのハイライトに星を輝かせ、絵理と同じ青に染まった「アイカ」へと再構築されていく。

きつと今までは、「愛香」と「アイカ」はどこかで切り分けられていた。

アイカの両脚が、確かに愛香の意識を乗せて、ロビーへと着地する。

「よしっ☆」

古い端末で、ぶっ壊しかけてしまったものだがなんとか動いてくれた。

アイカはいつもの癖で右目の近くでピースサインを作る決めポーズをしてしまったが、それも含めて今は愛香でありアイカなのだ。

一足先にログインを終えて、現実と同じ髪型でありながらその色を白銀に、瞳を鳶色に染めて眼帯を解いた——この仮想の海では両眼が焦点を確かに結んでいる「絵理」を、「エリイ」を視認しながら、アイカは小さく苦笑する。

「……アイカさん、なんだか楽しそう……」

「そっかな、だとしたらエリイちゃんのおかげだよっ☆」

その言葉に偽りはない。

格納庫への転移を二人で選択しながら、アイカとエリイは顔を突き合わせて二人で、理由もわからずに笑い合う。

そして。

「これが……あたしの考えたエリイちゃんの眼だよ」

「わあ……っ！」

格納庫に聳え立つ黒兎は、見た目だけを見れば白基調に染められた、グリーンダイバースイメージカラーで成形されたキハールIIの頭部と四肢をハイズルIIのそれに換装したことで、頭部を覆うセンサーこそないものの、概ねキハールIIと同じように見える。

だが、その手に握られているのはコンポジット・シールドブラスターではなく、エリイが使い続けてきたハイズルIIのビームライフルであり、腰部のドラム・フレームに接続された、愛機のブーストポッドから伸びているその兵装は。

「フィン・ファンネル……まだポン付けだから違和感あるかもしれないけど、ちゃんと形に合わせた設計図も作ってあるよ」

アイカにとって、戦場を見通す眼とは、ニュータイプが行う空間把握とオールレンジ攻撃だった。

戦場を俯瞰して空間をその手に握りしめるが如く、オールレンジ攻撃とはいっただって戦場の花形であり、そして自分で使うと非常に難しいものとして有名だ。

キハールIIについて調べる傍で、アイカが見ていたのは、チャンピオン、クジヨウ・キョウヤと「ビルドダイバースのリク」が凌ぎを削った、このGBNの命運を懸けた第二次有志連合戦の映像だった。

チャンプは現に第二次有志連合戦においては必殺技を撃たれるその瞬間まで、トランザム・インフィニティを発動したダブルオースカイと鬼トランザムを発動させたGP―羅刹を寄せ付けることなく、巧みなオールレンジ攻撃によって無力化している。

それは、チャンピオンが、クジヨウ・キョウヤが、画面の正面だけではなく戦場という空間を立体的に把握することでFファンネルとシグマシスファンネルという二つの無線兵装を操っていた証左に他ならない。

エリイは、確かにチャンプと比べればまだ未熟かもしれない。

しかし、スペックの劣る機体で格上との戦いを凌ぎ切り、勝利へのワン・チャンスをもぎ取ってきたその観察力は、空間把握力は本物だ。

「……あ、ああ……あああ……っ……！」

エリイは、生まれ変わった自身の機体、そこに「ハイズルII」の

魂が——エリイ自身には聞こえなかったものの、売れ残っていたガンブラの、強くなりたいと、主人のために役に立ちたいという願いを無意識に感じ取ったのか、そこにアイカが込めた魂と情熱を感じ取ったのか——いや、両方だろう。

感極まつて、涙をこぼしながら電子の海に凜と蘇った黒兎の姿を見上げるのだった。

「……リビルドウォート……」

「うん？」

「……この子の……アイカさんが……わたしにくれた、思いの……名前です……」

まだ、細部まで詰め切れてはいないかもしれない。

だが、絵理は感涙に咽びながらも心からの笑顔を満面に咲かせて、高く跳ぶ日を夢を見続けていたその魂に名前をつける。

「リビルドウォート……うん、いい名前。あたしも……頑張らなきゃ」

未だそれは完成していない。このGBNの世界で戦うのであれば武装案の更なるブラッシュアップや重量バランスの調整、そして実戦試験という工程を最低限経なければ、机の上に描いた夢物語と同じなのだから。

——しかし。

しかしそれは、確かにこの瞬間、アイカとエリイ、二人の愛を一身に背負ってこの電子の世界に産声を上げたのだった。

第二十七話 「ウサギ再生産くはじめてのお泊まり・中編」

GBNにおけるキャラメイクの幅は、他の追隨を許さないほどに幅広いものであることは周知の事実だ。

同じオンラインゲームでも現実から乖離したキャラクターを操作する際に生じる「違和感」という課題——例えば身長190cmほどもある筋骨隆々とした大男が、二頭身のピキリエンタポースにアバターを設定したとしても脳がそれに対して違和感を覚えることなく、仮想の身体を最初から「そう」であったかのように操れるのは革新的で、この仕様で肩を並べられるのは稀代の神ゲーと称えられる、数世代先の技術を独自に搭載したVRMMOぐらいのものだった。

そして、GBNにおけるキャラメイクの多様さは、ゲーム内においてのアバターだけではなく、ガンプラにも適用される。

十字キーとボタンで遊ぶゲームが流行っていた時代、奇しくもGBNと同じように、ゲーム内に用意されたガンプラのデータを組み換えて、色を変えたりしてオリジナルのガンプラを使って戦うゲームが存在したのだが、それと同じく「ガレージモード」において、ダイバーはスキャンしたガンプラに対する配色を自由に設定することができる。

実物を塗装するのに、ぶつつけ本番でやってみたら思ったより色味が違ったからなくなりシンナーに漬けて塗装を剥がす羽目になる、というビルダーは思いの外に多い。

そして、プラスチックを溶剤に浸すというのは劣化やクラックの原因になるため、可能であるならば避けたいというのが、ビルダーたちの本音であった。

だからこそユーザーからの根強い要望を受けて、「現実世界で塗るための案を試行錯誤するための機能」として、ガレージモードは、格納庫内限定で様々なカラーパターンを試せて、そのスクショを持ち帰ることが可能だという形で実装される運びとなったのだ。

エリイに名付けられた「リビルドウォート」のカラーパターンを、アイカは事前にいくつか考察していた。

一つはそのままヘイズルイーや、グリーンダイバースイメーজカラーではないキハールイーと同じく「ティターンズカラー」として親しまれている濃紺を基調とした塗装。

そしてもう一つは、白を中心としたトリコロールカラー、ガンダムタイプによく見られるそれに、エリイっぽい色だと思った水色寄りのコバルトブルーを入れて、さらに差し色としてオレンジ色に近い黄色を使っていくというパターンだ。

単純にアイカの好みだけで塗るのであれば、自身がコメットコアガンダムにそうしているように、温かみが強いホワイトにピンク色とオレンジイエロー、というパターンで塗るのだが、これはあくまでもエリイの機体だからそうもいかない。

コンソールを慌ただしく操作して、取り敢えずは色がバラバラになっていた部分をヘイズルイーに合わせる形で「ティターンズカラー」に染め上げながら、アイカは問いかける。

「この色はどう？ あたしは強そうだと思うんだけど……」

ティターンズカラーは何にでも合う。

ビルダーたちが残っていた格言であり、実際に機動戦士Ζガンダムにおいても「強そうな色」という理由で設定されたそのコンセプトは、例え武装がビームナイフ一本しかないという極端な機体であっても、ただならぬ雰囲気を漂わせ、逆に主人公機をティターンズカラーに染め上げれば、ヒロイックなその姿はダークヒーローとでも呼ぶべき外連味を漂わせながらも決して王道から外れることのない格好よさを保証してくれる。

まあ、その言葉を残したのは何にでもバーザムの頭を付けようとする、アリアの同類というかバーザムに魂までも捧げ切ったビルダーなのだが——それはアイカが知る由もないことなので置いておこう。

エリイはティターンズカラーに染め上がったリビルドウォートを見上げて、確かにアイカと同じく「強そう」という感覚を真っ先に抱くこととなった。

ヘイズルIIと同じ色であることもポイントが高い。

そして実際に塗装をしてもらう作業をアイカに任せる以上、あれこれと自分が口を挟むのも迷惑になるだろう。

エリイは意を決して、そのプランを採用しようと思った時だった。

——絵理は、あの世界をどう飛びたい？

先日の帰り道に投げかけられた「愛香」の言葉が不意にエリイの脳裏をよぎる。

リビルドウオートは、この世界を飛びたがっている。今もその夢を見て格納庫に佇んでいる。

だがそれは、主人であるエリイがいなければ叶うことはない。

そして、そこに必要なものはエリイの心だ。

シャフリヤールが口にしたように、「愛」という思いは少なからずガンプラに対して影響を、そしてこのGBNという世界においても何かしらの変革をもたらすことは、ELダイバーの誕生によって証明されている。

乗り手の想いと、決して言葉を語れない愛機の心が一致したその時、ガンプラは時に検証班が頭を抱え、GMが胃薬を噛み砕きながらも、確かにあり得ざる奇跡への一矢をその手に手繰り寄せて限界を超えた力を発揮するケースは、確かに存在するのだ。

生まれたい。生まれ変わりたい。

エリイがGBNへとダイブする理由は、その一心だった。

現実では満足に目が見えなくても、フルダイブの世界であれば自分の目はその光を取り戻し、仮装とはいえ広がる世界を、そして人々をこの、光を失った、光を奪われた瞳で見つめることができる。

だから、「絵理」は、「エリイ」になった。

いくつものクソゲーを掴んでその中でも現実と同じように迫害される弱者の側になって、何度もしスキルされながら、理不尽に透明化したボスに殴られながら、テクスチャが崩壊したグラフィックに何故か当たり判定等々が残っている壊滅的なバグを仕様としてリングに上がり続けるカリギュラの剣闘士たちに五体を刻まれながら、そしてようやく辿り着いたのが、このGBNという世界なのだ。

そしてこの世界も、アイカと出会わなければ、あの日ロビーで自称情報屋に絡まれているところを助けてもらわなければ、例えその奥深さが他のゲームと一線を画するような神ゲーであったとしても、エリイはやっぱりいつものことだと諦めて、泣きながら去っていったことだろう。

飛びたい。生まれたい。この世界をこの目で見たい。

エリイにはわからないが、それは確かに今、リビルドウォートが願っていることと同じだった。

——この世界なら、目が見えないわたしは、物を見られる。そうして世界がどんなものなのかを見られて、いろんな出会いがあつて、そして今も、大好きなアイカさんがどんな顔をしているのかを、ちゃんと確かめることができる。

——この世界とご主人に出会ったから、売れ残り、捨てられるか、またパーツだけをもぎ取られて売り捌かれるか、ゴミ箱に捨てられるだけだったぼくは、歩き出すことができた。

ならば。

心と心が確かに触れ合い、重なり合ったその瞬間は現実であろうが、仮想であろうが、人の目に見ることはできない。

二十一グラム、信じられているその重さが人の心のどこにあるのかなど、誰も知らないし見つけられないのであれば当然のことだ。

だが、二人の間ならその不可視の存在は確かに輪郭を持っていることを信じられる。

決意を固めて、エリイは口を開いた。

「……白に」

「うん」

「……白に……塗ってもらって、いいですか……？」

それは憧れているアイカと、自分に勇気をくれた彼女と同じ色。

どんな風に、電子の海に浮かべられた仮想の空を飛びたいかと問いかけられたのなら、エリイの答えは最初から決まっていた。

アイカさんと一緒に、飛びたい。その隣に立てる色に染まりたい。

おどおどと、頬を染めてどこか気恥ずかしさと申し訳なさが同居し

て目を逸らしてしまったエリイに、いつも通り「大丈夫だよ」と繰り返しながら、アイカは指先で忙しなくコンソールを操作して、もう一つ用意してきたカラーパターンに、エリイをイメージしたトリコロールにリビルドウォートを染め上げていく。

「ねえ、エリイちゃん」

「……は、はい……その、差し出がましいことを、わたし……」

「ううん、大丈夫。それより見てもらっていいかな。エリイちゃんをイメージした色で塗ってみただけ……」

眦に涙を浮かべながら俯く絵理の手を取って、アイカは黒兎がガマの穂綿に包まれ、白く染め上がったリビルドウォートをその指先で指し示す。

「わあ……」

目の見えない自分では考えようもなかった。

だが、アイカが提示してくれたカラーパターンは、確かに絵理が脳裏で思い描いていた、「アイカの隣に立つ」という願いと合致するような配色となっている。

これを奇跡というのだろう。今までの軌跡が織り成した、小さな縦糸。エリイとアイカという繋がりあった横糸と編み込まれて、リビルドウォートから伸びるそれは確かに、エリイが伸ばしていたその先端と触れ合って結びつく。

「……う、うう……ぐすっ……うええええ……っ、あ、ありがとう、ありがと、ごさい、ます……アイ、カ……さ……」

「泣かないでっば。あたしも……徹夜で考えた色だから、褒めてもらって嬉しい……その、なんかごめん……あたしも泣きそう……」
誰かに喜んでもらうということは、きつと何物にも代えがたい喜びだ。

シャフリヤールやあのプロトタイプガンダムを作り出した老紳士といったビルダーは、確かに己の魂を形にするためにその叫びを心火の焔にくべて、指先を動かす力と、その果てにある作品を作り上げる力となしたのだろう。

それでも——どこかで人は、誰かを求めている。

それは決して悪いことではない。誰かのためにありたいと願うことが、誰かのためを思つて手を差し伸ばすことが、例え偽善だと罵られたとしてもその行いは、それでも善だ。

劇場版機動戦士ガンダム00という作品の中で、アレルヤ・ハプティズムとハレルヤが交わっていたそのやり取りをアイカとエリイはまだ知らない。だが、「ガンプラ」が繋いだ二人の絆は、まだ遠いところにあるものの、確かにその言葉と、「ガンダム」と縁を結んでいる。

二人は、理由もわからず格納庫で一頻り泣いた。

それはきつと、リビルドウォートが上げた二度目の産声だったのかもしれない。

この世界に生まれることの喜びと、そして傷だらけになっていく心と心がその傷口を、まるでベレーゼを優しく交わすかのように触れ合わせたことで生まれた涙。

未来に誓いの旗を立てるように二人はその涙を、互いに傷だらけの心をより深く寄り添わせるように、仮想の海でその身体を抱き合わせて、ぼろぼろと瞳から溢れ出す涙を、その先に来る日が照る朝を待ち望むように、溢れるがままに流し続けるのだった。

「……なんか、カッコ悪いところばっか見せちゃったね」

「……いい、いえ、そんなこと、は……」

ログアウトして現実へと帰還した愛香と絵理は互いに頬を染めて、こみ上げる気まぐささに正座で向き合うという極めてシユールな光景を展開していた。

なんというか、あたしは泣き虫になっちゃったんだろうか。

絵理といると、現実でもあの仮想郷でも、どうしてか泣きたくなるようなことが増える。

でも、それはきつと今まで自分の奥に、心臓の棺に埋め込んだ「愛香」がずっと流し続けてきた涙で、誰かにそれを言うこともなかったのが、親友という、文字通り互いの心を曝け出して話し合える相手を得たからこそのことだから、きつと喜ぶべきなのだ。

愛香はそう結論付けて、ぐしぐしと現実の身体にも滲んでいた涙の残滓を右手の甲で拭いとる。

ちらりと窓の外を一瞥すれば、街は夕暮れの気配を漂わせていた。いかにコンソール操作で塗り替えられるとはいえ、ブロックごとに分けられたパーツにそれぞれ色を指定していくという行動は、結構な時間を消費する。

GBNではなるべく、学生のプレイヤーにも配慮して多くのデイモンシオンやエリアで暦を現実の時間と同期させ、昼夜や四季を再現しているが、何事にも例外というものはある。

そうした例外の代表であるデイモンシオン・シュバルツバルト、デイモンシオン・トワイライトといった、いつも夜であったりいつも昼であったりする地帯や、そもそも窓がない格納庫では、時間の感覚が曖昧になりやすい。

そして愛香たちが籠っていたのが格納庫で、そこで一心不乱に作業をしていたとあつては二、三時間といった時間など、あつという間に飛んでいったということだろう。

なんだかんだでGBNにどっぷり漬かり始めている自分に苦笑しながら、愛香は絵理にそつと呼びかける。

「ねえ絵理、先にご飯食べる？　って言っても簡単なサンドイッチぐらいしか作れないけど」

「……は、はい……お、お世話になります……」
「気にしないで、そんなじゃないっか」

絵理の手を取り、愛香はゆっくりと、彼女が壁に手をそわせていくのに合わせて、自室からリビングの食卓へと案内していく。

この食卓を数人で囲むのも、何日ぶりだろう。

愛香は母の仕事について詳しくはわからない。そして母も厳重な守秘義務が課せられている仕事についているからこそ、娘に多くを語ることはできない。

だからこそ娘としては、母の仕事について納得したかった。

母はきつと凄いゲームを作っている。もしかしたら、GBNと並んで稀代の神ゲーと呼ばれているあの理想郷と開拓地の名を同時に冠

するあのゲームに関わっているのかもしれない。

だったら娘としてこれほど誇らしいことがあるものか。だってあのゲームは、VRMMOとしては極めて独自性の強いGBNと並んで、一番の神ゲーと色んな人から言われている。三番目じゃないんだ。

そこに誇りを感じながらも、やはりというか、どこかで寂しさは拭えなかったのだろう。

愛香はまだ子供だ。人のいない食卓で自炊して、一人で食事を摂るという行為はやはり悲しく、虚しいものだったのだ。

ガンπραを買い込んでいたせいでほとんど中身がなくなってしまった冷蔵庫から、夕食の材料を見繕いつつ、猫背気味になって食卓に腰掛けている絵理を一瞥し、愛香は再び眦に滲んできた涙を拭う。気合を入れてサンドイッチを作るのなんていつ以来だろう。

賞味期限が近いパンから耳を丁寧に包丁で切り出して、切り出した耳は事前にボウルに用意していた砂糖と牛乳と卵黄の混合液に浸しておいて、今度はまな板の上にレタスとトマト、そして塊になったベーコンを並べて適当な厚さに切り揃えていく。

ベーコンレタスサンド。

普段なら面倒くさくて作らないものだが、今できる最高のもてなしとして、愛香はコンソールを操作していた時のような鮮やかな手際でその具材を調理し、トースターに放り込んでいたパンが焼けるのに合わせる形で、ベーコンをカリカリの少し手前ぐらいに焼き上げるという一連の動作を流れるようにこなしていた。

トマトとレタスの水気をパンが吸ってしまわないように、マヨネーズを天面にコーティング剤代わりに塗ったところに一つ一つ具材を丁寧に敷き詰めて、今度は底面にマヨネーズを塗ったパンで挟んで、長いプラスチックの楊枝を留めピン代わりに利用して固定したところを斜めに切る。

「我ながら上出来……かなあ」

とりあえずはこれでベーコンレタスサンドは完成した。

後はミルクセーキに近い比率の、しかし砂糖を多めにした混合液に

浸けていたパンの耳を油の中に丁寧にに入れて、ちょうど熱々のベーコンとパンで舌を火傷してしまわない範囲まで程よく冷める時間を利用して即興の節約お菓子を作り上げる。

それらを二人分の皿に盛り付け、両手に持って愛香は、絵理の待つ食卓へと運んでいった。

「ごめん、待たせちゃったかな」

「……………いいえ……………なんだか、とつても美味しそうな香りで……………」

遠慮がちに絵理は首を横に振ったが、嘘をつくなどばかりにくう、と、なんとか我慢して抑えていた腹の虫がとうとう癩癩を起こして鳴き喚く。

「あはは、待つてたんじゃん」

耳まで真っ赤になりながら俯く絵理に可愛らしさを感じながら、頬を染めたまま蚊の鳴くような声で発された、彼女のいただきます、という何年ぶりに聞いたかわからない言葉を噛み締めるように、小さく口元にベーコンレタスサンドを運んでいく姿を見つめていた。

多分、ガンプラも、料理も。

きつと同じなんじゃないかな、と、愛香はそれを言葉にしたらビルダーにも料理人にもなんだか怒られそうだと思いつながらも、いつになく、一口こそ小さいもののもくもくと凄いい勢いでベーコンレタスサンドを飾る絵理をどこか満足げに眺めながら、自身も作ったそれにかぶりつく。

なんとというか、まあ、及第点みたいな味だ。

やっぱりここでもクラスで三番目なのかな、と少しだけ凹みそうになったものの、それでも一心にサンドイツチを啄んでいる絵理を見れば、どこかでそれもいいかな、と思ってしまう。

そう思えることが幸せに他ならないことを、愛香はまだ理解できない。

それでも、胸の内側を温かな綿で覆われていくようなこの感覚が何物にも代え難いものであることぐらいは、わかっていた。

「……………おいしい、です……………」

「そっか、なら良かった。あんまり自信ないから」

「……そ、そんな……わ、わたしは……愛香さんのお料理なら……毎日、食べても……」

「光栄だけど、それじゃ絵理のお母さん泣いちゃうよ」

「あ、あう……」

なんだかプロポーズみたいだな、と背筋に少しのむず痒さと、脊髄を伝っていく温かな電流が駆け抜けるような感覚を覚えて、頬が自然に緩んでいくのを引き締めながら、愛香は平静を装って絵理の言葉に答える。

絵理はとにかく、食べるのが遅い。

昼休みでメロンパンを一個食べ切るのがやっとというほどなのだが、それもこうして次の授業みたいな予定に追われない、時間に余裕のある時なら、あれでも急いで食べていたのに無理をする必要もないだろう。

肩の力を抜いて夕飯を食べる絵理をそっと見つめながら、愛香はサンドイッチを食べ終えて、揚げたパンの耳を少しずつ口元に運んでいく。

——なんだか、ずっと、こういうちよつとだけ気怠い時間が続けばいいのにな。

青春という、ビルとビルの隙間に落ちた影のような時間。

誰も彼も教えてくれることのない正解に惑い続けることから逃れて、そんなすみっこでそつと過ごしているモラトリウムなのは、愛香にもわかってる。

だけど、好きな子と、大事な親友と一緒にいつまでも過ごしたい、と思うことのどこが間違っているというのだろう。

——幸せに、本物と偽物などない！

トラウマこそ穿り返される結果となったものの、アリアが叫んでいた言葉を思い出しながら、愛香はそつと、苦笑し続けるのだった。

その問題が発生したのは、当然女子であろうが男子であろうが欠かすことのできない入浴という時間だった。

絵理はいつも自分が住んでいる家であれば、構造を完全に把握して

いるために一人でも入浴することができたのだが、違う家となれば勝手が異なるのはよく考えてみたら当たり前のことだ。

絵理は鞆の中から、愛香はクローゼットの中から取り出したバスタオルと着替えを膝に乗せて、正座をするという形で改めて向き合っていた。

そしてそれは——最後に残された絵理の心の問題と、今彼女の右眼を覆っている眼帯のことと関係していた。

「……」

「……」

重い沈黙が、二人の肩にのしかかる。当たり前だ。今も眼帯を外していないということは、まだそこに隠されている何かにきつと絵理は重い傷を抱えているということなのだから。

気まずさが臨界を突破して、張り詰めた空気が二人の間で静かにとぐろを巻いていく。

だが。

今まで愛香にもらってきた勇氣と、助けてもらった恩義と、そして、リビルドウォートを見た時、いや、違う。きつとぶつかって落としてしまったハイズルイーを拾ってもらった時から、「絵理」と「エリイ」が同一人物だと知っても普通に話しかけてもらった時から自身の胸の内に生まれていた情動に従って、絵理は決意と共に口火を切る。

「……あ、あの……あ、あ……愛香、さん……」

「うん、どしたの絵理」

「……そ、その……えつと……不躰で、勝手なお願いなのは、わかってます……で、でも……その……」

「うん」

「……き、嫌わないで……い、今から……今から見るものは、気持ち悪いかも、しれませんが……そのっ……嫌わないで、くれ、ますか……？」

切実な絵理の願いに含まれている痛みが、悲しみが、血管を刺す細い針のように、愛香の血液に溶け込んでちくりと、ずきずきと痛みを訴える。

けどそれも、きっとその全部には届かない、一部だけであることはわかっていても、そこにある痛みへ想いを馳せることしか、祈ることしかできないのなら、それが少しでも、絵理の助けになるのなら。

あたしは、そう決めたんだ。

絵理の決意が打ち立てた旗の下に、愛香もまた決意をもってそつと歩んで寄り添うように、答えを返す。

「言ったじゃん。あたしはどんなことがあっても、絵理の味方だって」
例えそれが世界に生きる全てから後ろ指を刺されるような行いだったとしても、愛香は迷いなく絵理の肩を持つと、そう決めていた。

そうして絵理は抱え続けてきた痛みを愛香に零すと決めた。

彼女なら、と、そこに一縷の望みと、人が信頼と、親愛と呼ぶ感情に懸けて、精一杯に言葉を形にしようと、小さく息を整えるのだった。

第二十八話「わたしの蹉跌が作る塔くはじめのお泊まり・後編」

「……見て、くれますか……」

絵理は意を決してその一言を愛香へと投げかけると共に、右眼を覆っていた眼帯をするりと解いた。

そこにあつた右目は、有り体に言えば義眼、ということになるのだろう。

「……わたし、小さい頃……いじめられてたんです……目の……目の色が、違うからって……気持ち悪い、からって……それで……石、ぶつけられて……その、え、えへへ……う……ぐすつ、う、うええええ……っ……」

そしてまぶたの上から小さく、眼帯で隠し切れる範囲とはいえそこには傷跡が痛々しく刻まれていて、愛香は何より先に、左眼に涙を滲えながら傷痕を曝け出したその勇気を称えるよりも、味方だと宣言した通りに絵理を抱きしめるよりも、ただ、哀しみと怒りが堰を切って噴き出してくるのを感じていた。

——許せない。

どうして絵理にこんなことができるのか。絵理の目の色が他と違うことが一体石をぶつけていた連中の人生に何の影響を与えたというんだらうか。

とうとう堪えきれずに、絵理は滂沱の涙を流して両手で顔を覆ってしまう。醜い自分の傷痕を見せてしまった。義眼を曝け出してしまう。

きつと嫌われたに違いない。だってそうでもなければ、包帯を巻いていなければこんな傷ができて毎日同じように物を隠されたり、給食を捨てられたり、今度はきつと学習したのだから。顔ではなく身体を狙って石をぶつけてきたりしないのだから。

人が人に対してこんなことをするのは、自分が嫌われ者だからだ。だって嫌いな人じゃないと、憎んでないと、視力を奪うまで石を投げ

ても尚まだ自分から色んなものを奪い続けることなんてできないから。

石と共に投げつけられてきたいくつもの言葉が脳裏に蘇って、かさぶたで何とか塞がれていた絵理の心をずたずたに引き裂いて、そこから無色透明な血液を、残された左眼から流させる。

ただ生きていたいと願うのは、そんなに許されないことなのだろうか。

嗚咽を漏らし、噴き出す色のない血液を止める術も知らないままに、絵理はただ、叶わなかった願いについて思いを馳せる。

確かに自分は他の誰かと目の色が違ったかもしれない。でも、それは普通に生きていくのが許されない理由なのだろうか。視力を失ってもまだ、奪われ続けることを贖いとしなければいけないぐらいに重い罪なのだろうか。

皆と同じように、誰かと仲良くなつて一緒に遊びたかった。

皆と同じように、色んなところを歩いて、色んな景色を見て、そして友達と一緒にお弁当を食べたり、他愛もないお話をしたり、少しの罪悪感に胸を痛めながらも流行りの飲み物を買って食いたり。

その願いは、あまりにも傲慢なものだったのだろうか。

「……わ、わたし……なに、か……なにか、っ、わるい、こと……し、したんでしようか……？　だつて……だつて、わるい、こと……しないと、そんな……そんな……めが、みえなくなつて……つらく、て……かなし、くつ……て、っ……！　そ、それでもっ……！　それでも、いし……ぶ、ぶつけられて……っ……」

絵理は懺悔をするように、天の上で自分たちを見下ろしている神様へと問いかけるように、声を涙で潤らしながら必死にそう叫んだ。

目の色が違うことは、そんなに悪いことなんだろうか。自分は石をぶつけてきた男子や女子に何か悪口を言ったわけでも、されてきたようにお気に入りの鉛筆を折ったり、スケッチブックを捨てたりしてきたわけじゃない。

ただ幼稚園の片隅で、静かに絵を描いていただけだった。

休み時間になると皆が外に出るから、園庭の隅っこでじつと座つ

て、休み時間が終わるのを待っていただけだった。

なのに目の色が違うと、そうやっていつも一人で蹲っていることが気に入らないと、無抵抗に困惑していた顔にぶつけられた大きな石は絵理の右眼に深く食い込んで傷痕を残し、そして左眼からも殆どの視力を奪っていったのだ。

その話を聞いた時、愛香の心の中にあつたのはそいつらをぶん殴りたいという思いだった。

なんで、こんなにも苦しみ続けて絵理は生きていかなきゃいけないんだろうか。そしてその原因を作った奴らがどうなったのかは知らないけれど、子供のやったことだからと罪を問われることもせずいきつと今もこの世界でのうのうと生きているのだろう。

それが哀しくて、悔しくて、どうしてもつと早くに絵理のことを助けられなかったのかと、許されないことだと、暴力の連鎖だとわかっていてもこの大人に近付いた身体で過去に戻って、絵理をいじめていた奴らを同じ目に遭わせてやりたいと、未熟な子供故の義侠心が、愛香の心にくべられて、怒りと哀しみの炎を吹き上げる。

「……つらかったね、絵理……痛かったね、絵理……っ……！」

左眼から絶え間なく涙を零し続けても尚、その右半分から涙が流れてくれないことのどれだけ辛いことか。顔という場所に消えない傷を刻まれただけでも許し難いのに、それからも奪われ続けてきたことのなんと理不尽なことか。

どうして絵理が、誰よりも優しくして、いつつも泣いてばかりいるかもしれないけど、いつだって周りをよく見ている、周りが見えなかったばかりに過ちを繰り返して続けたきたあたしのことを助けてくれた絵理が、こんな目に遭わなきゃ、こんな辛い傷を抱えなきゃいけないんだ。

愛香も言葉にならない嗚咽と共に涙を零しながら、震える絵理の身体を、そこにある蹉跌と傷を包み込むように、あるいは己の心と触れ合わせて同じ痛みの百万分の一でも転写するように、力強く彼女を抱きしめて、大丈夫だよ、と、何度も、何度も、祈りに赦しを与えるように囁き続けた。

「……っ、あいか、さ……ん、き、きらわらないで……き、きもちわるい、つて……っ……！」

「思うもんか！ 絵理は……絵理はっ……！ 誰よりも優しくて、誰よりも可愛くて……っ、だつて、あたしの……大好きな、親友なんだもん！ 顔の傷が何？ 目が見えないから何!? 今度絵理におんなじことしようとする奴がいたら、あたしがぶっ殺してやる！」

愛香は本気だった。その結果として罪に問われようがなんだろうが、もしもまた絵理に石を投げる人間が現れたなら、愛香は躊躇いなく包丁を握ってそれを調理ではなく制裁の道具に、正当性を認められない私刑の糧にすることだろう。

そしてそれは、その危うく許されざる殺意だけではなく、彼女を肯定する言葉も同じだった。

右眼に深く刻まれた傷痕も、失った眼球の代わりにその眼窩に収まったプラスチックの義眼も、何一つ気持ち悪いとは思わない。

例え傷痕があつたとして、それが悠陽絵理という個人の持つている優しく慈しみ深いという美点に、何の影響があるというのか。

いつもハムスターのようにメロンパンをもそもそと齧っている彼女の可愛さに、そしてさらさらで、真っ直ぐな長い黒髪の夜を纏っているかのような美しさに、焦点こそ結べないものの、残された左眼が湛える空よりも深い蒼に、その麗しさになんの傷をつけられようか。

絵理を抱きしめながら、愛香は言葉にならない声で何度も、何度も繰り返す。

絵理は悪くない。絵理は可愛い。あたしはいつだつて絵理の味方で、世界が敵に回つたとしたら、世界中の人間を皆殺しにしても絵理と共に居続けることを選ぶと。

それはあまりにも危うい赦しだった。愛香もまた、言葉にこそ出していないが心に相応の傷を負っているが故に、過剰に防衛反応と共感が走ってしまったことに疑いの余地はない。

それでも、愛香は、絵理を。

そつと抱き寄せた身体を離すと、愛香はその赦しに祈りを与えるように、溢れ続ける絵理の、色を失った血を止めようとその頬に、そつ

と唇を寄せた。

理由や理屈などない情動が、身体を突き動かしている。その痛みに寄り添って、少しでも抱えている重荷を軽くしたいという願いが、愛香を突き動かしている。

そして絵理は、頬にそつと寄せられたその赦しに、愛香から託された祈りに、透明な血を流すことをやめて、その代わりに左眼から、温かく滲み出す涙を零す。

——ああ。

こんなにも、わたしを悪くないと言ってくれる人がいる。わたしなんかを、親友だと、大好きだと、そんな、ずつと、ずつと欲しがっていただけれど遂に貰えることなんて今になるまでなかったものを、本気でその手に握りしめて差し伸べてくれる人がいる。

そう思うのが傲慢なのだと、絵理の心に刻まれた傷は疑いたくなくなってしまう。

それでも、絵理は寄せられた唇に言葉を返すように、声だけを頼りに、ぼやけていつもよりも輪郭が滲んでいる愛香の顔を見据えてそつと、小さく息を吐いた。

何かの合図か、そうでなければ二人だけに許された原初の言葉であるかのように、愛香は涙を零しながら小さく頷いて、絵理の薄く柔らかな唇が自身の頬に添えられるのを、そして遠慮がちな舌先が小さく輪郭をなぞるのを受け入れる。

重ね続けた蹉跌が作り上げた塔を上るかのように、二人は過去という刃にその手足を切り裂かれながら電子の海で出会って、そして今、この現実で再び痛みの塔を上り切った。

曝け出した、そこに上るまでに流し続けてきた血の量を数えて、二人はそつと、互いの頬に触れ合わせた唇を重ね合わせる。

「……あはは……ちよつとしよっぱいけど」

「……は、はい……あ、甘い……ですね、え、えへへ……」

ファースト・キスがレモンの味だとか、そんなふざけたことを言っていたのは一体どこの誰だったのか愛香も絵理も覚えていない。

ただ、二人が初めて交わしたキスは痛みの味が舌先を刺す、そんな

危うさを夕飯の砂糖菓子がその甘美な名残のオブラートに包み込んだものだった。

勢いだけでやってしまったことに二人は頬を染めて気まずそうに互いから目を逸らしてこそいたが、そこに抱えていた痛みは消えずとも、どこか少しだけ軽くなったような錯覚を覚える。

ならば、ファースト・キスは痛み止めの味だ。

モラトリウムが、黄昏の時間が許してくれる麻薬のような、そんな危うさと、それ故に全てを忘れさせてくれるような甘美な舌触りと、脊髄を伝って脳に響き渡る、ケミカルでプリミティブな刺激。

それらを全て括って、ファースト・キスの味とする。

だからこそ、今は痛みも忘れて、互いに顔を逸らしながらも愛香と絵理は同じように、耳まで茹で蛸のように真っ赤に染め上げながら。そつと、指先でその名残が残る唇に触れるのだった。

わかつてはいたが、GBNにおけるアバターを絵理はほとんどメイクしていなかった。

勝手が違うということと愛香と絵理は泣き止んだ後に予定通り、二人で一緒に入浴する運びとなったのだが、布に包まれていない絵理の身体はなんとというか普段から制服の下にそんな凶悪なものを押し込めていたのかと問いたくなるぐらいにはグラマラスで、しかしながら細くくびれたウエストが、決して彼女は寸胴体型などではないと高らかに謳い上げている。

正直に言ってしまうえば愛香はそれが羨ましかった。

やましい気持ちなど一切ないが、絵理の身体を洗い流すためにタオル越しに触れた柔肌にはなんとというか敗北感というか、正直に言ってしまうえばGBNにおける仮想の躯体である「アイカ」を作るときにちよつと盛ってしまったという現実を否応なく視認させられることとなつて、乙女心的にそれは複雑極まりなかったのだ。

(いや、そういうところも含めて絵理は可愛いんだけどさ、いや……あたしまだ成人してないから成長期だよね?)

狭い湯船に二人で浸かる都合上、何かあったときにすぐ絵理の手を

とれるように向かい合う形で愛香は絵理と風呂を共にしていたのだが、やはり視界に映る絵理の身体は、完成された美とでもいうべきものを誇っているプロポーシオンに他ならず、比べたところで何か意味があるわけではないとわかっている。自分のそれが悲しくなってくるのもまた事実だったのだ。

風呂から上がって、持ってきたパジャマに着替えた絵理の黒髪を丁寧にならぬながら、現実逃避のように、せめて「アイカ」と同じぐらいにはならないかなあなどということをお愛香は考えるのだった。

「……そ、その……お愛香さん……」

「ん、どしたの絵理？」

「……あ、あの……さっきは……」

「……ああうん、そうだね」

勢いとはいえ、とんでもないことをしてしまったんじゃないかと思っただけで顔を赤くしてしまいそうだが、それでもしてしまっただけは仕方ない。

蘇る熱と砂糖菓子の残り香と、舌を刺す痛みの残滓に唇をむずむずと動かしながら、絵理の髪をブローする手を止めずに愛香は考える。

恵美がいうには、女子校とかそういうところでは別にそういうことをするのは珍しくなくて、実際お愛香たちが通っている学校でもふざけてポッキーゲームに興じてそのままの勢いでベレーを交わす女子の先輩は珍しくないらしい。

まあ、それはそれとして、これはこれとして考えなければなるまい。

ドライヤーの熱を当て終わった髪を丁寧に櫛で梳き通しながら、お愛香は溜息混じりに小さく苦笑を返す。

正直なところ、満更ではなかった。

別にこのご時世、何がニュートラルでノーマルだとか考えること自体がナンセンスだし、個人がしたいようにすればいいとお愛香は思っているのだが、それはそれ、これはこれ。見切り発車で進んで暴走してしまったこの黄昏の中にありふれた過ちに頭を抱えなくなってしまうのもまた、ありふれた青春であるわけだ。

ぐるぐると渦を巻いている感情の名前が見つけられないままに絵

理の髪の毛を乾かし終えて、自身の癖つ毛にドライヤーを当てながら、頬を赤らめてもじもじと俯いている絵理に合わせる顔がない、と同じように頬を染めてため息をつくことを愛香は繰り返す。

これはもう一種の病気かなんかじゃないだろうか。

櫛を通して毛先が明後日の方向に跳ね回るから、ショートボブに仕方なくまとめている自身の髪質にも、透き通るシルクのような絵理のそれとの手触りを重ね合わせて、愛香はまた一つ溜息を増やしたくなってしまう。

「……愛香さん、その……綺麗……でした……」
「ほえ？」

もじもじと黙り込んでいた絵理が発した予想外の言葉に、愛香はドライヤーを動かす手を止めてしまった。

熱つ、と、小さく叫びを上げると共に頭皮を焦がす熱風を一旦切つて、愛香は絵理に問いかける。

「……いや、えつとほら、あたし、絵理と比べたら寸胴だし……」

「あ、あの……いい、いえ！　そ、そういう話じゃなくて……」
「？」

「……今まで、誰かに触れたことなんて……家族以外、なかったんです。でも……愛香さんの顔は、優しくて……いっつも、背筋が伸びて……だから、綺麗だなあ、って……お風呂で一緒になったとき、思っただんです……」

絵理は基本的に猫背なのもあってあまり姿勢が良くない。

だからこそ、凜と背筋を伸ばして世界という理不尽に争い続けている愛香の姿は美しいと思っただし、身体を密着させることで触れた無駄のないプロポーションだって、肩凝りとそこからくる頭痛の原因になる自分のそれと比べたらきつとバランスが取れたものなんじゃないかと、GBNにおける「アイカ」の姿と「愛香」に触れた感覚を重ね合わせながら絵理は小さくそう零す。

実際絵理のそれが並外れているだけで愛香は同年代の女子と比べれば遥かに整った、すらりとしたプロポーションをしているし、容姿だって童顔な絵理と傾向こそ違うものの美人顔で、勝るとも劣らない

ものなのだ。競うことに意味などないが。

視点が変われば見方が変わる。そして自分が持っていないものに気付くことがある。そして、自分が取り落としてしまったものに気付くこともある。

愛香と絵理は互いの蹉跌が作り上げた塔の頂上で、電子の海で出会って以来、互いが取り落としていたものをその掌に握りしめて、血塗れになりながらもそれを交換したということだ。

だからこそ、あのベーズは、そういう祈りに、そういう赦しに他ならなかった。

「……そっか、ありがとう。あたしあんまり褒められたことないから、その……ちよつとむず痒いけど。絵理も綺麗で、可愛いから」

「……あ、いえ、そんな……で、でも……」

「でも？」

「……わたしの右眼、見ても……嫌わないうでしてくれたの、愛香さんが初めてなんです……そもそも、眼帯を……人前で取ろうと思ったのも……」

「……そっか、色んな意味で絵理の初めて、もらっちゃったね」

「……わたしも、愛香さんのはじめて……もらっちゃい、ました……えへへ……」

さつきまであれこれ悩んでいたのがバカらしくなるぐらいに、二人は顔突き合わせて一頻り笑った。

なんだ。別に悩むことでも考えることでもないじゃないか。

愛香はやめようと思っていたはずなのにまた一人相撲をとつていた滑稽さに腹を抱えて笑いながらも、いつだってその「眼」で見通して、そこから自分を掬い上げてくれる絵理に感謝する。

そして絵理は、ずっと大嫌いで仕方がなかった自分を好きだと言ってくれる愛香に感謝をして、生きてきて良かったというその初めての喜びを噛み締める。

二人が夜の支度を終えたとき、同じベッドで眠ることを選んだのは半ば必然だったのかもしれない。

クーラーの温度を下げて、ぎゅつと互いをきつく抱きしめながら、

絵理は右眼を失って以来初めて、そして久しぶりに訪れた安穩たる眠りの淵に落ちていく。

愛香もまた、あの時——中学三年生の冬に、音楽室の窓から飛び降りていればきつとこの温もりを知ることなどなかったという事実を、生きているが故に、傷付きながらもその手に収めた輝きを慈しむように、そして少しだけ甘えるように絵理の頬に自分のそれを擦り寄せて、静かに眠りへと落ちてゆくのだった。

それが、黄昏の見せる一時のときめきなのかどうかは、いつかは覚めてしまう夢であるのかどうかは、愛香にも絵理にもわからない。

だから眼を閉じて、眠りが訪れるまでにそつと願うのだ。時間を止めてと。時計の針を、今動かさないでと。明くる夜を告げる声を、目蓋を開いたその時に、聞かせないでと。

第二十九話 「モデラーズ・ハイ」暴徒と鴨とエリイと 兔」

「さて、と……」

色々とありすぎて今も割り切れない、絵理とのお泊まり会を終えた翌日、日曜日であることを利用して愛香は自ら設計した、リビルドウォートのサイズに合わせたフィン・ファンネルを作るために、これまた結構な出費で揃えたHi-ルガンダムの可動式フィン・ファンネル計六基とプラ板をカッターマットの上に展開しながら、愛香は充電器に繋いでいるスマートフォンでGBNに簡易ログインをして、作業用BGMとしてチャンピオン、クジヨウ・キョウヤによるプラ板削り出し耐久配信を再生する。

確かに自分の技術は、チャンピオンには及ばない。

プラスチック用ノコギリでパーツを切断し、その断面を削ることで敢えてサイズを縮小する「幅詰め」と呼ばれる工作。

画面の中に映るチャンピオンの手際は凄まじく、ヤスリがけという同じ作業を行うのにも一回一回の面に対する影響、エッジを潰してしまわないような力加減と当て木の使い方、それら全てを丁寧に行った上で遥かに早く工作を済ませていく彼と比較すれば、手探りで、しかしながら一步一步歩むように丁寧に工程を進める愛香の進捗は遅い。

合わせ目消し、幅詰め、パテ盛り、ジョイントの置き換え、この後に待ち受けている各種工程を思い返すだけでも、心が折れてしまいうになる。

それでも。

「絵理の魂を預かってるんだ……だったらやるっきゃない！」

休日一日で終わらなくなたって、幸いなことに放課後という時間が自分には残されている。

愛香は落ち着け、と自分に言い聞かせながら、六基あるフィン・ファンネルの内、幅詰めが終わった一枚の大きさをノギスで測定し、それに合わせる形で残りのものにも同じ工作を丁寧に施していく。

ルガンダム系列のキットを組むときに、なぜこのフィン・ファンネルという武器を組む工程で人は心が折れそうになるのか。

その答えは簡単だ。

フィン・ファンネルという武器は、一基のコアユニットに二つのヒンジで、二枚の放熱板状のパーツを接続する形で構成されている。

ならば六基のフィン・ファンネルを仕上げるために必要な板状ユニットの枚数は十二枚で済むかと思いきや、色分けのためにユニットは天面と底面でそれぞれ別パーツになっているために、実に二十四枚という同じパーツとヒンジが十二個、コアユニットもHGUCヒールガンダムの可動式ファンネルの場合は二パーツ構成で作られているため十二個と、六基の武装を作るためにこれだけ多くのパーツを必要としているからだ。

改めて、自分の出した案ながら途方もないことをしていると愛香は苦笑するが、それでもこの一枚一枚の工程を一つ終わらせることに絵理が、エリイが望んだりビルドウォートに近づいていくと思えば、この苦行じみた工作にも耐えられる。

要するに、やっつてることこそ明確に違えど、作業を行う目的とそのベクトルは吹奏楽におけるバズィングでマウスピースを吹き鳴らす練習や肺活量と体力を鍛える為の走り込みと同じなのだ。

時間を忘れてファンネルを作り込んでいく傍で、まだ未完成のリビルドウォートに施さなければいけない改造の内、短時間で済みそうな工程を愛香は脳内でリストアップしていく。

(GBNで機体を使うなら、課題になってくるのは重量バランスと機動性、考えなきやいけないのは役割に対して、それを果たすために必要なパーツ)

一つ一つを仕上げて少し大きさを余し気味にしたノギスを当て、誤差があればそれを慎重に修正していく、という工程を辿りながら、愛香はチイのガンダムグラスランナーと、アキノのミネルヴァガンダムのことを思い返す。

チイの愛機とアキノの愛機を比べた時に、総火力で優っているのはどちらかと問われれば、その答えは間違いなくアキノのミネルヴァガ

ンダム、ということになる。

ならば、チイのグラスランナーはアキノのミネルヴァガンダムと比較して劣った機体であるのか？

答えは否だ。何故なら、戦いの中で背負う役割がまるで違うからだ。

例えばアキノの機体を、絶対に見つかってはいけないという条件のある偵察行動に出した場合、それを達成する確率は、ステルス兵装や観測機などを搭載し、機体を標準的なSDよりは遥かに大柄としながらも、十八メートル級の機体と比較すれば小柄なグラスランナーと比べて著しく低いと断言せざるを得ない。

ならば、チームの「眼」となるエリーの役割とは何か。

それは後方支援と遊撃、両面を兼ね備えたいいわゆる「後衛」としての立ち回りを可能にしつつも「前衛」へのシフトも場合によっては必要となる、「射撃寄り万能機」というカテゴリのそれだ。

後方で戦場を俯瞰しつつオールレンジ攻撃を行い、もしアキノとアイカという前衛が何かしらの要因で崩れそうになったらそのリカバリーとして前線を立て直す。

そのために必要なものは、機動力だ。

一旦作業を停止して、朝五時に起きて済ませていた「簡単な工作」が施された、リビルドウォートの両肩を愛香は一瞥する。

太陽炉。それが求める条件に合致した、愛香の答えだった。

原型機であるキハールイーにおいてはジェットエンジンという大気圏内で効力を発揮する特化型のパーツを敢えてGNドライブに置き換えることで、汎用性を確保しながら、いざという時はトランザムで前線に急行する。

最悪、トランザムシステムの性質上高速での近接戦も可能となるのだが、エリーの性格上恐らくそれは本当に最後の手段であろうから、あくまでも加速装置兼出力向上装置と割り切った上でGNドライブ、というトランザムを搭載する運用は、機体というよりはソレスタルビーイングの母艦、プトレマイオスIIのそれに近い。

愛香が額に浮かんだ汗を拭っているうちにも、チャンピオンは流麗

な手つきで凶面をもとにクリアプラ板を見事なカッター捌きで切り出して、自身が愛用しているAGEIIマグナムの「Fファンネル」と寸分違わぬ形状のものを四枚切り出し終えている。

「遠いなあ」

愛香は、思わず苦笑していた。

作業工程を録画して、それを編集することで手元だけを映し、GBN内のアバターが後付けで何をやっているかを解説するというのがいわゆる「作業耐久配信」の趣旨なのだが、あまりにもチャンピオンの手つきは流麗で美しさすら覚えるために、画面の中のチャット欄には愛香と同じように「何言ってるのかも何やってるのかもわかるけどなんでそのスピードでその作業ができてるのがわからない」という旨のコメントが溢れかえっている。

きつと何年も何年も、下手したら十年以上ガンプラと真剣に付き合いつづけてきたからこそ、チャンピオンはチャンピオンたる製作技術をその手に収めることに成功したのだろう。

ならば、自分はまだまだスタートラインに立つたばかりだ。

愛香は新しいタブを開いて、並行して作業配信を行なっていたダイバーの「デビニダドの翼を作り直す」なる旨がサムネイルに記された動画を再生する。

画面の中に映っていたのは、何やら世界の終末とかそういうシチュエーションが似合いそうな儂い雰囲気を漂わせるダイバーであり、「クオン」というらしい彼女はチャンピオンと比較しても決して劣ることのない手際で一枚一枚プラ板を切り出していくその作業に、「翼のどこを作っているのか」という解説を添えているのだが、やはり愛香はそれを理解できても、なぜそれができているのかという点においては納得がいかなかった。

それでも、GBNという世界に懸けて、自分と同じ工作を色々なアプローチで試みるダイバーが、あの仮想郷には溢れている。

今はまだ遠くて、比べるのも失礼かもしれないけれど。

それでも、いつかはきつと。そして、同じ世界を、電子の海を泳ぐ者の端くれとして、遥かなる頂点はどこことなく、自分の背中を押しして

くれているような、そんな気がしたのだ。

エナジードリンクは健康に悪い。

繰り返し問題になってきたことで、規制ラインだとか何やらが今でも有識者間では熱心に議論され続けているのだが、それは横道に逸れる話だからどうでもいい。

だが美味しいものなど大体健康に悪いし、明けぬ夜を過ごすために一緒に踊り続けてくれるケミカルな死神の手は、愛香が作業を続けることを後押しし、暴徒の如く滾る血潮を心臓から送り出しながらも、一種のランナーズハイのように頭の中はクリアな状態を保ってくれる。

だからこそ愛香は実に一週間という期間で、リビルドウォートに組み込んだパーツの調整及びエポキシパテで作り上げた部分の完全な表面処理、そして全塗装という工程を完遂するという狂気を実行できたのだ。

「ふ、ふふふ……すごいね、あの破城槌……」

「あ、あの……アイカさん、目、目が……」

「アイカも暴徒の暗黒面に飲まれちゃったか……」

「ごつめーん、何言ってるかわつかんない、でもなんか楽しくなってきた、あっはははは☆」

「アイカ、お労しや……」

なんだか最近全世界で一番強い格ゲーと互角に渡り合ったらしいアマチュアがその大会の場で宣伝したエナジードリンクを眉唾物だと思いつつながら服用してリビルドウォートを作り上げた愛香だったが、アキノはその「ヤバさ」を知っていたため、目をぐるぐるさせながらハイになっている愛香の姿にそつと目を伏せて溜息をつくのだった。

一応、そのエナジードリンクの名誉のために擁護しておくとその「ヤバい」というのは「危ない」という意味ではなく、何か怪しいものが入っているというわけでもなく、外国由来のそれは日本の同業他社が生産している類似商品と比較して、遥かに「美味しい」という意味で

あることは明記しておきたい。

ぐるぐる目でGBNにログインしてきたアイカだったが、彼女の熱意がこもったリビルドウォートを学校で託された時、血走った目に不安は覚えつつも、エリイはそこに込められた想いの大きさに思わず涙してしまった。

まだ、GBNでその姿を見たわけではないから愛機との対面は果たしていないのだが、指先で触れた、艶消しトップコートを噴かれたガンプラ特有の少しざらざらとした感じが均一に全体を覆っている感触は、とりもせず塗膜を吹きすぎなどで垂らすこともなく、そして、軽く関節を動かした時に返ってきたちょうどいい抵抗感は、塗膜の厚みも計算に入れた上でクリアランス調整を完璧に施したという証だった。

アイカは謙遜して否定するが、そもそも製作講座があったとはいえ、原型機の存在しない「コアガンダム」の改造機を作っている時点で既にビルダーとしての技量は一定のラインを突破しているのだ。

「そんなじゃあ慣らし運転かねい、せっかくエリイの新しい機体……いや、後継機のお披露目だろ？　なんか派手にやりたいもんだがいいミッションとかねーかな……」

「あつはははは☆ この『終末を喚ぶ竜』ってクリエイトミッションとかどうかな、チイちゃん、エリイちゃん、アキノさん☆」

「アイカお前、もしかして自殺願望とかねーだろうな？」

「早まらないで下さい、アイカ……ああそこの方、ちよつと水を貸していただけませんか。我々のリーダーの頭を冷やしたいので」

「だ、ダメですつ、アキノさん……！　あ、アイカさん、正気に戻って……！」

ランナーズハイが続いているせいでまだぐるぐると目を回している愛香が受けようとしていたそのクリエイトミッションは推奨ランクこそC、実際に受けられるラインはBランクからとなっていて、チイとアキノの二人が条件を満たしている以上「リビルドガールズ」も受注できたのだが、しかしてその実態は、Sランクダイバーですら苦戦を強いられる超絶高難度ミッションなのだ。

報酬こそ何百万単位で破格なもの、チイが数秒も経たずに却下した時点でその無謀さが知れるというものだろう。

噂によればあの不動のチャンピオン、クジヨウ・キョウヤが「終末を喚ぶ竜」Any%RTAなる狂気のレギュレーションを突っ走ってワールドレコードを独占していたり、FOEさんが「中身」の入った「ジャバウオックの怪物」を倒すために何度もクリアして、チャンプの持つ記録と競り合いを続けていたりと上を見たら相変わらず頭がおかしい話が際限なく出てくるのだが、それでも今のアイカたちには早すぎる、というのは確か事実であった。

「……なあ、この放課後に駄弁ってるような連中が『リビルドガールズ』なのか？ あの女マクギリスを敗った？」

「事前の情報だとアイドルっぽい女と泣き虫な女と銭ゲバと元シルバリイって話よ、アイドルっぽいかどうかはともかくそこにいる女の制服はシルバリイのやつじゃない」

「……銭ゲバがいるって話だが、訊くだけなら金取られねえだろ」

チイがその声を聞いたのは、暴走するアイカを宥めようと腰に縋り付いて涙を流しているエリイと、頭を抱えて本当にインベントリから飲料水を取り出してアイカの頭にぶっかけようかとアキノが検討している最中だった。

「そーゆーラガーマンのーちゃんたちは何者なのさ？ 言つとくけど事と次第によっちゃ質問だけでもチイは金取っかんね」

「その言い草……間違いないな、あんたが『リビルドガールズ』のチハヤか」

「……質問してんのはこっちだぜ、疑問文に疑問文で答えろって学校で教わったのか？ 教わってねーならさっさと帰って宿題でもやるとけや」

ラガーマンのような白と赤の横縞のダイバールックに統一し、男二人はフェイスシールドを装備し、「リビルドガールズ」のボロクソな前評判を語っていた女性はそれをつけていないものの、服装は男どものそれに準じたデザインである辺り、フォースと見るのが妥当だろう。

大嫌いな名前と呼ばれたことに怒りを覚えつつも、チイはこのラ

ガーマンの格好をしていながらラーマンの気高い精神とは程遠い連中を三下だと踏んで、敢えて煽るような口調で問いを返す。

「んだと、このガキ……！」

「やめろ、すまんなチハヤとかいうの。俺たちは『ボルケーノ』ってフォースを組んでるんだが、どうも掲示板であのマクギリスが異世界転生して生まれ変わったみたいなのを倒したフォースがいるって訊いて、探してたんだ」

「ふーん、じゃあ人違いじゃないっすかね、あと次チイのことをチハヤって呼んだらキレんぞ」

「あら、ザ・シルバリー……あの自治厨フォースの服を未だに着てる女と仲良くしておきながらシラを切り通そうとするのは無理じゃないの？ チイちゃん」

「シルバリーの残党なんて探しやどこにでもいんだろ」

柄の悪い連中だ。和氣藹々と雑談に興じる者が多いロビーでも煽り合う険悪な空気を持ち込んでくるその厚かましさに辟易しつつも、チイは後ろ手にコンソールを操作し、「ボルケーノ」の三人に見えないように最小サイズでタブを開きながら、三人組の情報を収集する。

(……)いつらマジモンの三下か、まあ……)

あまり芳しくない評判に違わず、「ボルケーノ」の三人を見るなら露骨に距離を取るダイバーも何人か見られる辺り札付きなのだろう。

とはいえ、相手が三下なら話は早い。

「おいアイカ、寝ぼけてんだか起きてボケてんだかわかんねえけどそろそろシャキツとしやがれ、エリイの鳴がネギ試し背斬り負つて相手がやってきたぞ？」

「はい？ あ、あたしたちが『リビルドガールズ』であたしはリーダー……ってか代表者みたいなもんのアイカですけど、何か用ですかっ☆」

とうとう痺れを切らしたアキノに、彼女がインベントリから取り出した飲料水を頭から注がれたことでもいいぶ正気を取り戻してきたアイカが、「ボルケーノ」のリーダーと思しき、プロフィールカードには「ヨシキ」というダイバーネームが表示されている男に話を持ちかけ

る。

「単刀直入に言うぜ、俺たちは新進気鋭のフォースで、ビルドダイバーズへの挑戦を目指してるんだが……練習試合の相手になっちゃくれないか？ その名前、ビルドダイバーズをリスペクトしてるんだろ？」

「ビルドダイバーズ？」

その名前こそアイカは知っていたが、別に「リビルドガールズ」という名付けに彼ら、伝説の英雄のような扱いを受けているフォースに肖ろうだとかそういう意図を込めたつもりは何一つとしてない。

「ビルドダイバーズを知らないの？」

「知ってますけど……別にあたしたち、あの人たちのこと知りませんし、なんなら戦うために集まったわけでもないんですけど」

「……過度な謙遜は煽りと同じだぜ、アイカちゃん。それで練習試合の件だが、受けてくれるのか？」

なんとというか話に通じていない。

ぐいぐいと距離を詰めてくるヨシキに辟易しつつも、アイカはチイに目配せして、いつものあれは任せたとばかりに一步後ろに下がる。

「50万」

「は？」

「チイたちが負けたらそんだけ払ってやんよ、その代わりにてめーらもおんなじ額払えよ、それ以外の条件で試合なんざ呑むつもりもねえしアイカからの許可も今貰ったばっかだ、どうする？」

「こいつら、言わせておけば……！ いいわヨシキ、受けましょう。あいつに払った金がペイできると思えば儲け物よ！」

「ああ……後悔するなよ、『リビルドガールズ』……！」

「はいはいっ☆」

いかにも三下とばかりの捨て台詞を吐いて、「ボルケーノ」の三人組は練習試合ではなく、チイを経由してアイカに伝えられた条件で正式に申し込まれたフォース戦の申請を受諾し、戦場へと解けて消えていく。

「それで、勝てるのでしょっ？」

「おう、舐めてるわけじゃねーが連中……多分今のエリイと最高に相性がわりーぜ」

「……わ、わたし、ですか……?」

アキノがやれやれとばかりに溜息混じりで問いかけた言葉をチイは首肯して、威圧感を放っていた「ボルケーノ」の三人に怯えてか、いつの間にかアイカの後ろに隠れていたエリイに、いつも通り不敵な笑みを浮かべながらそう断言した。

「アイカが起きてもボケるぐらい頑張つて、そんでアイカはチイとアキノよりエリイのことをよく知ってる……ま、エリイのガンプラがそう言つてんのかもしれねーぜ」

一足先に、とばかりに戦場へ解けていくチイの後を追つて、アキノも肅々とミツシヨンへの移行を選択する。

「……アイカさん、わたし……」

「うん、エリイちゃんとリビルドウォート……生まれ変わった二人の戦場だよ」

互いの手をキュツと繋ぎ合わせて、アイカはエリイの目を真つ直ぐに見据えて激励の意思をその言葉と共に送る。

リビルドウォートには、今全部自分ができる技術や思いと、エリイの魂が込められている。ならば、そうそう簡単に負けたりはしないはずだ。

しれっとフォース用の連絡掲示板に、煽り合っている時間でチイが収集していた「ボルケーノ」の情報が書き込まれているのを確認して、アイカもまた戦場へと一足先に旅立っていく。

勝てるかどうかは、正直なところわからない。Bランク三人という、エリイとアイカと比較すれば格上な戦力に加えて、傭兵として項目が追加されているダイバーのランクもAと、アキノに匹敵する存在を雇い入れているのなら、不利なのはこちらの方だ。

エリイも格納庫への転移を選択しながら、チイから送られてきた情報を読み込みつつ、ごくりと固唾を呑み込む。

だが、仮想の躯体が解け切つて、格納庫に再構成された時、エリイのそんな憂いは、遙か彼方に消え去ってしまった。

「わあ……！ ああ……っ……」

——やつと、会えたね。

エリイはどこかでそんな声を聞いた気がした。それはエリイ自身の心がそうさせていたのかもしれないし、或いは本当に、格納庫にその威容を示すリビルドウォートの声だったのかもしれない。

かつての黒兎は、アイカの手によって塗料という名のガマの穂綿を纏ったことで白く、その姿を生まれ変わらせていた。

そしてエリイをイメージした色である水色に近いコバルトブルーが添えられて、アクセントとして差し込まれたオレンジイエローが全体を引き締めているその姿は、仮の姿としてお泊まりをした日に見た時と比べて明らかに全体がブラッシュアップされている。

ビームライフルは肩のGNドライブユニットと干渉しない程度に幅詰めされて、フィン・ファンネルも全体的に小型化され、天面に当たる部分はエポキシパテによって、キハールII由来の全体像とミスマッチを起こさないよう、曲面の目立つデザインに変化を遂げていた。

——負ける気がしない。

気が弱いエリイにしては珍しく、内心に湧き上がる言葉には自信に満ち溢れていた。

そのことに、エリイ自身もどこかで困惑しながら、きつとあの日にアイカの唇から貰った勇気がそうさせたのだろうと、自身の中に芽生えた思いを手放してしまわないように、胸をきゅつと握りしめ、そして操縦桿にその手を添える。

『いいかエリイ、伝えた通りだぜ！ お前のデビューにチイたちは花を添えてやっから頑張れよ！』

『チイの作戦に私も従います。エリイ、貴女に銀翼の加護があらんことを』

『エリイちゃん、エリイちゃんとりビルドウォートの本気……あいつらに見せてやろっ☆』

ああ。その声があること、なんと心強いことか。

エリイは仲間たちからの激励を抱きしめて、一人じゃないと、もう、

何があつたとしてもきつと——アイカたちは、傍にいてくれるからと、まだ心のどこかで震え、怯え、泣いている子供の自分をそつと抱きしめるように操縦桿を握りしめて。

「……エリイ、リビルドウオート……出撃しますっ……！」

今までのようにただ時間を稼ぐ役割ではなく、純然たる戦士の輝きを、フード状のパーツに隠れた、ガンダム・フェイス。そのツインアイに確かに光る。

そうして生まれ変わった白兔は、少しだけれどきつと大きな勇気を抱く主人を乗せて、夢見ていた戦場へと飛び立っていくのだった。

第三十話 「白兔の舞う空くエリイ、戦場をその手に」

——なんだ、これは？

フォース、「ボルケーノ」を率いるリーダーである男、ヨシキは目の前に展開された光景に愕然としていた。

コックピットに浮かんでいるのは撃墜を示す、レッドアラートの中心に【Signal Losted】という黒帯が走る電幕と、ノイズだらけのメインモニター。

確かに、「ボルケーノ」は「ビルドダイバーズ」への挑戦に当たって、一度慢心によって「ガリユウ」というCランクダイバーが操るデステイニーガンダムのカスタムモデル、「ガンダムデステイニースカイ」に敗北を喫するという手痛い経験をしている。

だからこそ、ヨシキたちは慢心を捨て去り、自らを鍛え上げようと、あのモヒカンの巣、戦闘狂のラスト・リゾート、チンパン博覧会会場と悪名高いハードコアデイメンション・ヴァルガへの挑戦——ダイバーたちが絶界行と読んで憚らない苦行に何度も身を投じて、「三分の壁」を乗り越えて生存することに何度も成功できる程度には腕を上げていた。

勿論、スポーン地点で屑運を引き当てたことでFOEさんとその妹である「ユユ」が繰り広げる死闘の余波に巻き込まれて僅か二十秒で三人とも撃墜されたり、「獄炎のオーガ」と遭遇したはいいが「喰う価値もねエ」と蹴り飛ばされて地面に落下したところを漁夫の利天誅されるという屈辱的な体験も何度か果たしているが、客観的に見てもヨシキたちの腕は「ガリユウ」に挑んだ頃より上がっていると見てもいい。

そして、外部から傭兵を招集することでその戦力は万全を期して、「ビルドダイバーズ」へ挑む予行演習だとしても、決して気を抜かずに「リビルドガールズ」へと挑戦したはずだった。

だが、目の前にあるこれは、なんだ。

ヨシキは突きつけられた現実を認めることができず、わなわなと操縦桿から離れた手を震わせる。

——敗けた。

一言で表すのならば、そういうことになる。

だが、ヨシキの描いていた負け筋は、あの元シルバリー——アキノという女が必殺技を発動して戦況をめちやくちやに引つ掻き回すというもので、それさえ耐えきれば腕の差と連携によって圧殺できるはずだった。

だが。

ヨシキたちが敗れたのは、他でもない、あのフォースの中で一番弱いと目していた、泣き虫の少女——エリイにしてやられたからに、他ならなかったのだ。

フォース「ボルケーノ」は、連携戦術をパターン化して使い分けることで、個人の技量だけに頼るのではなく必ずツーマンセルないしスリーマンセルの状況を作り出して、相手を圧殺する戦い方を好む。

チイから提供された情報を、エリイはコンソール上で確認した上で、戦場となった市街地——恐らくは「機動戦士ガンダムZZ」におけるダブリンがモチーフとなっているであろうその空を駆け抜ける。

GNドライブを組み込んだ「リビルドウォート」の挙動は「ヘイズルII」を使っていた時と比較してかなり軽く、そこに違和感を覚えこそしたものの、乗って数秒も飛んでいればその違和感は霧散して、エリイの手に操縦桿がびったりと馴染んだような錯覚を与える。

——相手は恐らく開幕に範囲攻撃をぶっ放してくる。

それが、チイの立てた予測だった。

ボルケーノの三人組がハードコアディメンション・ヴァルガに何度か顔を見せていると思しき書き込みは、該当スレの進み方が比較的ゆっくりしていることもあってすぐに発見された。

そして、ヴァルガ上がりが勘違い、というよりは見積もりを外しているのが、開幕ぶっぱという戦術の有用性だ。

開幕に事故狙いで強力なビーム砲や戦略兵器を放つ戦術は、確かにハードコアディメンション・ヴァルガにおいては生存しつつダイバー

ポイントを一挙に稼ぐ戦術として有効だとされている。

だがそれは、あの場所が例外中の例外だという前提からなるものだ。

端的に換言するならばカミカゼアタック、「どうせ数十秒で殺されるから乱戦エリアみたいな敵が固まるところにぶっぱすること、自分が撃墜された時のダイバーポイントのマイナスよりもキル数で稼いだダイバーポイントを上回らせることで収支を黒字にする」という、狂気的な発想の元に成り立っている。

以前にアイカたちが「名機アルビオン」と戦った時もハマモリはウツキースに砲手を任せて、開幕ぶっぱに近い戦術を用いてきたが、あれは「ハマモリのビーム・マグナム」、「チャッピーとヨネヒトの偽装ツーマンセル」という二つのブラフを用いていたからこそ、有効に作用したのだ。

早い話が、通常のフォース戦において開幕ぶっぱというのはよっぱどランクが低い帯域でなければ、エネルギーとブーストと照射時間、その他諸々を無駄にする行いでしかない。

そして、チイの予想は滞りなく現実となった。

アキノを先頭にアイカとチイを後方の両翼に、そこから離れた最後尾にエリイを配置するという菱形陣形で戦場を突き進んでいた「リビルドガールズ」に向けて、一筋の閃光が押し寄せてくる。

「来ましたか。防楯展開……アイギス、護りなさい！」

アキノの叫びを合図に、ドラグーン・システムを搭載したIフィールドソードが全員を庇うように前へと躍り出て、大剣から大楯へとその姿を変える。

そして、ミネルヴァガンダム胸部が蒼色の光を放つと同時に展開された、不可視の盾は、果たして飛来した閃光——戦術核の一撃を見事に食い止めて、アイギスの名に恥じることなく、長い攻撃時間の間で一ミリたりとも、味方に些細な傷をもたらすことなく守り切っていた。

『嘘でしょ!? Iフィールドが核を防ぐなんてチートよ! シルバリイにいた癖にチートを使うなんて……恥ずかしくないの!?!』

戦術核を開幕でぶっ放したと思しき女が搭乗しているウイングダムが、その背中から二発同時にしか撃つことのできない核ミサイルを搭載したマルチランチャーパックをパージしながら、爆炎が晴れた中心で両手を広げていたアキノとミネルヴァガンダムを睨みつけて吠える。

「いえ、これはサイコ・フィールドですが……」

『はあ!? 何よそれ! チートの名前!』

——こいつ、UC見てねえな。

チイはここまで見事に自分の予想が当たってくれたことにほくそ笑みながらも、チーターとアキノのことを罵る女に不快感を隠せなかった。

チーター、というのは、チートという言葉が現代においては一種の褒め言葉として作用するジャンルが存在するために罵倒としてのハードルも同時に低まってしまったのだが、本来であればゲームを嗜むものにとっては目の前で中指を立てて家族や親族を侮辱されるのにも等しい罵倒だ。

アイカはそれを知らなかった。だが、逆ギレしてアキノを罵倒する女の行いは許せないものだった。

「ふっざけんな! チーターだかライオンだか知らないけど、アキノさんの実力も知らないで好き勝手なこと言わないでよ!」

『ふん! 事実を指摘されたら逆ギレ? 最悪ね!』

「いやどの口がほざいてんだ……まあいい、チイの仕事は一旦終わったら、後は手筈通りにやっちゃまってくれや」

アイカがブチ切れたことで少し溜飲が下がったのか、冷静さを取り戻してチイはパラシュート・パックを展開して、アイカの放ったコアスプレーガンによる牽制弾がウイングダムを遠ざけたのを一瞥して、その建物の殆どが消し炭と化した市街地に降り立つ。

『落ち着け! いつも通り連携戦術パターンBであるアイドル女から仕留めるぞ!』

『……っ、了解!』

『了解つと……恨みはねえがやられてくれや!』

ウインダムは両翼に控えていたズゴックEによる号令を合図に、市街地跡へと降下したアイカを追いかける形で、ガンダムAGE-1タキタスが先行し、その進路を確保するように、立ち塞がったアキノを牽制する形で、ズゴックEとウインダムがそれぞれメガ粒子砲とビームライフルによる十字砲火を試みる。

エリイにはそれらが全て「視」えていた。

ランナーズハイならぬダイバーハイが与える全能感に酔いしれているのではなく、機体スペックが向上したことで後手に回り続けるという恐れがなくなったために、エリイは持ち前の観察眼を万全に発揮していた。

その手に戦場を掌握したかのように、リビルドウォートは空中から戦場を俯瞰し、エリイは主人の指示を待つ白兔に号令をかけるが如く、音声入力を起動する。

「……お願い……飛んで、フィン・ファンネル！」

『何だと!？』

事前情報では、無線兵器を持っているのは偵察機みたいなSDを使っている銭ゲバだけだった筈だ。

二基のフィン・ファンネルが閃光の網を描くように、アイカへと接近するタイタスの足元を穿ち、そしてまた残った四基は十字砲火を試みたウインダムとズゴックEを逆に取り囲むように単発射撃を細かく刻む形で繰り返す。

GBNにおいて、ファンネル系統の武装は手動操作と自動操作の両方が存在する。

そのどちらにも利点があり欠点があるのだが、主流となっているのは今のところ後者だった。

理由は単純だ。

ただでさえクソ忙しい戦場で機体进行操作するのですら手一杯だというのに、思考補助によるアシストこそあれど無線兵器のマニュアル操作まで手を焼いていられない。つまりはそういうことだった。

だが、エリイは六基のフィン・ファンネルを全てマニュアルで操作して、その掌で「ボルケーノ」の三人組を踊らせるかのように閃光の

糸を描いて、望む形に三人組を誘導する。

「貫ったあつー！」

『しまっ……い！』

足元を穿たれたことで体勢を崩したタイタスの左腕を、ビルドボルグを展開したアイカがすかさず切り落とす。

フィン・ファンネルによる包囲から逃れるために連携を崩してでも左右に分かれることを選んだウインダムとズゴックEに対して、アキノは主力武装である核ミサイルを失ったウインダムから早々に無力化すべく、手数を優先してビーム・トンファアを展開して斬りかかる。

「……先程、私をチーターと罵ってくれましたね」

『な、何よー。事実じゃない！　Iフィールドが防げるのはビームだけで、あんたのそのキャプテン・ジオンからパクってきた剣はIフィールドソードって名前なんですよ!?!』

「……いいでしょう。百歩譲って無知による間違いは看過するとしましよう。ですが貴女は今、もっとも軽率なことを言った……い！」

あの、狂気に身を焦がしながら、下手をしていれば自身の必殺技すら打ち破ろうとしていた白亜の悪魔にしてその王たるバエルの、アリアの足元にも及ばない太刀筋を一蹴し、アキノはウインダムの四肢を瞬く間に解体し、残ったコックピットを踏みつける。

『ひっ……』

「……パクリとリスペクトには大いなる差があります。そしてキャプテン・ジオンは……己を目指す全てを許容するとして、自身の動画をジオニックソードの作り方を公開しています、そして！」

『あつ、あたしは、あ、あああああーっ!!』

「……この剣の名前はIフィールドソード、ジオニックソードを発想の原点としつつも防御力を高めるカスタマイズを施した、私だけの剣です」

そうして無慈悲な宣言と共に抜き放ったIフィールドソードを、四肢を喪失して地面に転がっているウインダムの頭部バルカンによる悪あがきも物ともせず、アキノはそのコックピットへとゆつくりとゆつくりと、己の罪を後悔させるがごとく突き立てるのだった。

「……ありやおつかねえな、マジでキレてんぜ」

『余所見をしたなあ、偵察機!』

「あ? よそ見してんのはあんただろ、ヨシキのにーちゃんよ」

足を止めて何やら大掛かりな装置を展開しようとしているチイに、フィン・ファンネルによる弾幕砲火を逃れたヨシキのズゴックEがそのアイアン・ネイルで襲い掛からんとするが、刹那。

ズゴックEの両腕が、どこからか飛んできたビームによってその関節を射抜かれて爆散し、勢い余ったヨシキとその機体は顔面から破壊されたコンクリートにダイブして、地面と熱いベーゼを交わす羽目となった。

『クソっ、どこから……フィン・ファンネル!? なんでファンネルがあんなに持つんだ!』

ヨシキは舌を噛んだ痛みに悶えながらも、自身の背後に浮遊していたエリイのフィン・ファンネルを視認するなり、困惑に目を見開いてそう叫ぶ。

確かにファンネル系の武装は展開できる時間は基本的に短く、再使用のためのクールタイムも長く設定される傾向にある。

だが、GBNの仕様としてファンネル系武装がリキャストを必要としている、と判断するのは「射出したファンネルに設定されたエネルギーが完全に尽きた場合」だけだ。

そしてエリイは、六基のファンネルの内、最初にタイタスへと送ったそれとウインダムに放ったそれを即座に回収して本体からエネルギーを供給し、そして最初にズゴックEに送っていたものを今は回収して、その代わりに単射の繰り返しで消耗が少なかった、最初にウインダムを標的とした二基をヨシキへと差し向けた。

それが、「ファンネルがあんなに持つ」絡繰であった。

そして、エネルギーをチャージしているファンネルを今どこに送っているのか。

無慈悲に、気が動転していたことで、最後までその接近に気づくことのなかったヨシキのズゴックEを、エリイはヘイズルIIから受け継いだビームライフルで撃ち抜きつつ、最初に照射ビームを放ったそ

れをタイタスの直上へと放ち、ヨシキに差し向けたファンネルを回収する。

『クツソ……！　もういい、やってくれ！』

『こんな雑魚相手に手は借りないんじゃないかなかったのか？』

『うるせえ、傭兵なら傭兵らしく50万BC払ったんだから仕事しやがれ！』

一人残され、ファンネルとコメットコアガンダムの小柄な体軀を生かしたすばしっこさに翻弄されているタイタスのパイロットは、秘匿回線でそれを「傭兵」へと伝えたつもりだった。

だが、チイが放っていた有線観測機は確かにその無線を傍受して、エリイを、アイカを、アキノを信頼してわざわざ足を止めてまで準備していたその装置は、確かに——開幕からずつと姿を見せずにどこかに潜んでいた、「傭兵」の手口を暴いていた。

「つしやビンゴ！　アキノ、もう一仕事頼むぜ！」

「任されました、チイ！　……アイギス！　再び我等を護る盾となりなさい！」

剣を突き立てて沈黙していたウインダムの残骸を蹴り飛ばし、アキノはアイカの援護に向かうのではなく、チイから転送されてきた予測座標に向けて機体を加速させ、再び「アイギス」を展開する。

『なっ……！』

そしてその機体は、攻撃判定を持つ武装を使用したことで、戦場にその巨体を現すこととなった。

「ミラージュコロイドデテクター……サイコブリッツガンダムとは旦那も面白い趣味してっけど、次からフォース勧誘スレで傭兵の相談受けんのやめた方がいいと思うよ？」

——戦う前から最早勝敗は決していた。それが、チイの見立てだった。

チイは自身の機体からミラージュ・コロイドを取り外す代わりに、その逆探知が可能となるシステムを搭載することで、「傭兵」が隠していた一発逆転の切り札を確実に無効化すべく、その探知と射線の予測に全てのリソースを割いていたのだ。

しかし、傭兵とて腐ってもAランクダイバーだし、態度こそ最悪だがあのウインダムを使っていた女だつて腐つてもBランクダイバーだ。

サイコ・フィールドを展開していたとはいえ、Iフィールドソードは核爆発から味方を守りきつたことで少なからずダメージを受けていたし、サイコ・フィールドをIフィールドに重ねるのにも長大なりキャストを必要とする以上、頼れるのは純粋なIフィールドによる力だけだ。

アキノは歯を食いしばり、「サイコブリッツガンダム」がその腹部に搭載した巨大スキュラと、指先に搭載された五連装ビーム砲計十門の一斉射を受け止める。

「おおおおおっ！ シルバリーの……銀の誇りにかけてえッ！」

確かに、Iフィールドソードはサイコブリッツガンダムによる照射攻撃でその刀身を完全に崩壊させて、内部に仕込まれていたIフィールドジェネレーターもビームの熱に耐えきれず融解し、爆散した。

そして、アキノのミネルヴァガンダムも、短時間に多大なエネルギーを損耗した影響で、傷こそつかずとも地面に膝を突いてしまった。

——これは、ワンチャンあるんじゃないか？

タイタスを駆っていた男はそう錯覚し、一瞬気を緩めてしまった。だが。

「エリイちゃんトリビルドウォートのデビュー戦……悪いけど、エリイちゃんのために……」

『う、うわあつ、なんだよこの女、目が——』

「死ねえええッ！」

その一瞬は、ヴァルガであれば命取りとなる。

ヴァルガに潜っていたのにも関わらず、皮算用で舌舐めずりをした三流の兵士をアイカは慈悲なく一刀の元に切り捨てて、その残骸を踏み台にして空高く跳躍し、フライトシステムを起動する。

『雑魚どもは死んだか……だが俺も傭兵なんでな、金の分の仕事はさせてもらう……！』

「いいや、あんたは50万BC、チイたちに払う羽目になんのか」

『何……？』

「決め手はあるんだろ!? アイカ、エリイ! 殺つちまえ!」

チイはニヒルに笑い、膝を突いていたミネルヴァガンダムを担ぎながら、サイコブリッツガンダムが形成する弾幕砲火から核攻撃の余波を免れた建物を利用してしながら巧みに逃れつつ、アイカとエリイの仲良しコンビへと呼びかける。

「うん! チイちゃん! エリイちゃん!」

「……はい! アイカさん、受け取って、下さい……っ!」

仲間からの声に応えて、アイカとエリイは迷いなく、コンソールに表示された必殺技の発動ボタンへとその指をかける。

そして、アイカは。

「これが……あたしの選んだ、あたしの描くフェアリー・テイル!」

その叫びに呼応するように、必殺技を発動したコメットコアガンダムのフライトユニットと、サイドアーマーに増加装甲として追加していたガンダムAGE―FXの肩アーマー、その天面に設けられたスリットから緑色の光が噴き出し、妖精の羽のようなものと、Cファンネルのような形状をしたエネルギーの塊を展開する。

そして、エリイが発動した必殺技は、四基のファンネルがそのエネルギーを切らしていなければ無条件で発動できるものの、単体では攻撃力を持たないという極めて特殊なものだった。しかし。

傭兵の男は、四基が集まって菱形に展開されたフィン・ファンネルの姿に、あのハードコアデイモンション・ヴァルガで遭遇した人間災害――FOEさんが使用していた【デイバインダブルオークアンタ】が用いていた武装を想起して、チイとアキノに向けていた射線を咄嗟にファンネルへと変更した。

だが、結論からいえばそれは無駄な行いだった。

サイコブリッツガンダムが放つ砲撃を吸収したエリイの必殺技――「リビルド・パワーゲート」に、アイカは「システム・フェアリー・テイル」を展開したコメットコアガンダムを全力で突っ込ませる。

「これが、あたしの!」

「……わたしの……っ！」

『私たちの描くフェアリー・テイルとその結末！』

フェアリー・ストライク。奇しくもアイカとエリイが共同で作り上げた必殺技は個人ランク39位——あの人間災害が使用していた、「二桁の魔物」とよく似た一撃を織り成していた。

パワーゲートを通過して、戦場を駆け抜ける光の矢と化したコメツトコアガンダムは、照射ビームをビルドボルグで切り裂きながら、鈍重さゆえに小回りの利かないサイコブリッツガンダムのコックピットを確かに貫き。

『うおおおっ!?!』

「爆散っ☆」

その巨体を地に墮とし、四散せしめていた。

アイカとエリイの視線が、通信ウインドウ越しに交錯する。

勝った。夜ご飯にカツ丼を食べても許される、文句なしの大勝だ。

そしてそれはその「眼」によって戦場を支配して、その掌にエリイが戦局を掌握せしめていたところが大きい。

「やったね、エリイちゃん」

「……はい……っ！ わたし、勝てました……アイカさん……っ！」

「やれやれ、一週間ぐらい見ねー間に随分仲良くなっただみてえじゃねーの」

「いいではないですか、チィ。仲良きことは美しきことかな、です」

勝利を画面越しに称え合って満面の笑みを浮かべているアイカとエリイをニヒルな笑みで一瞥するチィもまた、笑っていたことには変わりないし、それを少し呆れ気味に叱るアキノもまた苦笑とはいえず笑っていた。

リビルドウオート。アイカとエリイの魂が織り成した、再構築の白兔。

差し込む日差しに浮き上がる、フードのような装甲に隠れたそのツインアイが、勝鬨を上げるかのように光を浴びて勇ましく煌めく。

その初戦は、そして「リビルドガールズ」が各々その力を万全に発揮した初めての戦いは。

完膚なきまでの勝利という形で、決着を迎えたのだった。

幕間其の三「ワンダリング・シルバリイ・ドリーム」

かつて、重い誇りにその身を包み、猛き歌と共に戦場へと赴く騎士たちがいた。

かつて、その機体のどこかに「銀」の意匠を取り込むことで己の忠誠と秩序の番人たらんという覚悟を示し、GBNを破壊せんと試みていた悪党を撃ち破る破邪の聖銀とならんとしていた騎士たちがいた。

ブレイクデカール。

それは二年前にGBNで流行した、忌々しいチートツールの名前だ。

使用した痕跡をバックログに残すことなく、一度発動すれば素組みの旧キットですら丹念に作り込まれたガンプラを一撃の元に屠るほどの力を使用者に与えるその禁忌の力は、忌避されて然るべきものなのだが、広くダイバーたちに受け入れられてしまった。

その理由は様々だ。

例えば自分の弱さがフォースの足を引っ張っていることを自覚して、お荷物にはなりたくないという理由でブレイクデカールに手を出し、かの「ビルドダイバーズのリク」との戦闘中による説得で改心し、運営に自らブレイクデカールを使用していたことを自白した女性がいた。

例えば、別にガンプラを愛してなどいないし雇われたから適当に組み立て済みのキットをオークションで購入し、それにブレイクデカールを貼り付けることで売人からの意向を達成しつつチートによる全能感に酔いしれようとした者がいた。

例えば、どうしても勝てない——「三桁の英傑」、「二桁の魔物」、そして「一桁の現人神」たちという強大な壁がすぐ目の前にあって、それらを自らのガンプラと操縦技術では撃ち破ることができずに苦悩していたところで、売人からブレイクデカールを購入し、愛を持ちながらも苦悩ゆえに禁忌の力に手を出してしまった者がいた。

確かにチートツールの使用は利用規約に反している。その事実を知られれば石を投げつけられても文句が言えない、という程度に「同

じ土俵でゲームをしない」という行為はゲームを嗜む者にとって最大の侮辱であり、だからこそ「チート」という言葉を褒め言葉として利用する昨今の風潮に異を唱える者も多いのだが、それは割愛しよう。

だが、チーターに石を投げながらも、人々は心の奥底ではその気持ちにわずかな理解を示していた者たちが大半だったと言っているだろう。

——楽をして勝ちたい。圧倒的に勝利したい。気持ちよくなりたくない。

それはPvPを前提としたゲームにおいて、逃れることのできない欲求だといってもいい。

楽をして勝ちたい、については賛否が分かれるだろうが、「圧倒的に勝利したい」「気持ちよくなりたい」という言葉は、「俺の愛するガンプラで立ちはだかる壁を打ち破り、俺が世界で一番ガンプラバトルが上手いんだと、俺のガンプラは世界一なんだと証明したい」という、ダイバーの根源的な欲求に通じるものである。

だからこそその「壁」との差を埋められるブレイクデカールは、「愛」を確かにその心に持ったダイバーですら、罪悪感を抱きながらも、自らの行いが間違いであることを認めながらも、手を出してしまうほどに魅力的だったのだろう。

だが、彼らはそれを許さなかった。

銀色のメタリック塗装が施され、両手には日本刀のような武器——Cランク高難度ミッション報酬である「ビルダーズカタナブレード」を、ガンダムベース本店の製作スペースにある高速成型射出機で出力して制作したそれを両手に持ったシナンジュ・スタインが、F91の頭をジェムズガンの物に換装し、ヴェスバーの代わりにジャベリンのショットランサーを、そして脚部をガンダムエアマスターのものに変更した「GMF91」三機との連携で、氷海に浮かぶ白銀の大地に朦々と黒いオーラを立ちこめさせるガンプラを追い込んでいく。

黒いオーラ——ブレイクデカールを使用したガンプラは、高い精度を誇って完成されていた。

プロモデラーの作品をリスペクトし、原型機では「セブンスード」の如く格闘武器が多かったところを自分好みの射撃兵装に差し替える形で製作された、リバーシブルガンダムをルーツとするその機体、「リヴァーサルガンダム」を駆るダイバーは禁忌の力を振りかざし、自身の後方から接近するGMF91、その三個小隊を瞬く間に壊滅させ、更に左右に潜んでいた狙撃型のGMF91をも両手に装備したGNツインバスターライフルで撃滅したが、そこには隙が生まれてしまった。

『今です、全機突貫！ 不埒なマスダイバーに……銀の鉄槌を今こそ下すのです！』

『了解！ 我らが銀の誇りとその翼に懸けて！』

『アイ・アイ・ママ！ マスダイバーには銀の鉄槌を！』

『GBNに秩序と安寧を！ 我らはその剣となる！』

銀色のシナンジュ・スタインによる号令を受けて、後方に控えていたGMF91の三機は互いのビームシールドを連結し、弾切れと見るやGNフィン・ファンングを正面に展開しての迎撃を試みるリヴァーサルガンダムへと突撃していく。

『クソっ！ なんて倒しても倒しても湧いてきやがるんだ！ 消えちまえよ、お前ら！』

マスダイバーは忌々しげにそう叫び、ブレイクデカールによって強化されたGNフィン・ファンングを躊躇いなく最大出力で発射する。

ブレイクデカールによる強化と、その効果は甚大だ。

だったらこの一撃ならば、あの「二桁の魔物」さえ、忌々しくもFOEなどという渾名を頂戴して「ジャバウオックの怪物」をその手にかけんとし、俺のことなど見向きもしなくなった憎きあいつを倒せるんだ！

リヴァーサルガンダムを駆るマスダイバー、「アクセル」は暗い笑みをその顔に描き、引きつる唇を三日月型に歪める。

だが。

『すまないアキノ、手間取った！』

『遅いですよりヒト、では参りましょう！』

『サイコ・フィールド!』

もう一機、アクセルの仲間を倒したと思しき銀色のシナンジュ・ス
タイン——こちらはナラティブバージョンだった——が、アキノと呼
ばれた女性ダイバーが狩るユニコーンバージョンのそれと手を取り
合って叫ぶと、不可視の力場が突貫するGMF91三機を包み込み、
その連結ビームシールドをより強固に補強していく。

サイコ・フレームの共振。二人が選んだ必殺技により鉄壁の盾を得
た銀の騎士団、その先鋒はマスダイバーのビームを見事にはじき返し
ながら、その機体を壁に叩きつける。

そして。

『あんたにどんな事情があるのかはわからない、だが——ブレイクデ
カールなんてチートに手を染めたことは恥じるべきだ!』

上空から、光の翼を広げて急接近してくる銀色のクロスボーン・ガ
ンダム——クロスボーンガンダムにV2アサルトとM91をミキシ
ングした、「クロスボーンガンダムX0 アサルトゴースト」を狩る男
はアクセルに哀れみを寄せながらも決してそれを許さないと、毅然と
言い放って展開した「クジャク」と「バタフライ・バスター」による
二刀流で、ブレイクデカールによって強化されていた筈のその腕関節
を一撃の下に斬り伏せた。

アサルトゴースト。その機体こそ、同じくマスダイバー狩りを生業
とするダイバー「アインソフ」と並んで恐れられている、銀の騎士団^{ザシナルバライ}
を率いる主、ダイバーネーム「ビーティス」が駆る愛機であり、ブレ
イクデカールを使用したガンプラとも常に対等以上に渡り合う猛者
であることの証明だった。

『クソっ……畜生、畜生っ! お前もあいつみたいに、キョウスケみた
いに俺を否定するのか! わかっているさ、あの二桁の魔物になれる才
能がないやつはGBNをやめちまえってことなんだから!? お前だつ
てそう言いたいんだろ、ビーティス!』

アクセルは、個人ランキング124位という、一千万人以上いると
も噂されるアクティブユーザーの中でも最上位に位置する男だ。

彼は断じて弱いわけではない。今こうして追い詰められているの

は、ザ・シルバリーが得意とする人海戦術、そして死をも恐れずに突撃する、GMF91を駆る、その魂と命さえシルバリーに捧げ切った勇敢な騎士たち——早い話が下っ端たちの犠牲を積み上げることでも成り立っている状況だ。

『アクセル、あんたほどの男までこんなものに手を出すなんてな』
『うるさい！ 二桁にいるお前にはわからないんだ、二桁に上がれない苦しみが！ 同じ時期にGBNを始めたのに、もう39位なんて場所に行った奴を知ってる苦しみが！』

ビーティスの個人ランキングは94位、二桁の中でも下位の方に位置しているが、アクセルが嘆いているように、まず下位であろうが上位であろうが、「三桁の英傑」と「二桁の魔物」の間には、天まで聳え立つほど大きな壁が存在しているのだ。

故に魔物。三桁こそが人間に行ける限界範囲。

だからこそ、ダイバーたちは怖れと畏れ、そして羨望と少しの嫉妬を込めて、二桁のダイバーを「英雄」ではなく「魔物」と呼んでいるのだ。

『……どんな事情があっても、銀の騎士団は……ザ・シルバリーはこのGBNの秩序を守るために作ったフォースだ。お前の気持ちはわかってやれるかもしれない、だが、許すわけにはいかない！』

『畜生おおおおッ!!』

滂沱の涙を流し、憎悪に染まった咆哮をあげながら残り少ないエネルギーで散漫な迎撃を繰り返すアクセルの攻撃を全てその光の翼が生み出す機動力で回避して、ビーティスは介錯とばかりにリヴァーサルガンダムのコックピットにはクジャクを突き立てて、バタフライ・バスターでその首を跳ね飛ばした。

『凄いな、流石はビーティスさんだ』

『ええ……私たちも、秩序の番人として恥じることがないように、彼に追いつきたいものですね』

二年前のアキノは、その光景を見て湧き上がった感慨を確かにリヒトと分かち合っていた。

そして、マスダイバーやマナー違反を駆逐しければ、自分たちの望

む理想のGBNが訪れるのだと、信じて疑わなかったのだ。

※※※

「……っ、夢……」

地毛で赤みを帯びた長い髪の毛で、GBNで使っているアバターと同じお下げを作った女性は、自分が机の上に突っ伏していたのだと気付いた。

どうやら課題のレポートをやっている内に眠気が限界に達してしまっただけらしい。

自らの未熟さを恥じつつも、女性——涼月秋乃は立ち上がって、冷蔵庫に保管してあるエナジードリンクを取り出すと、寝ぼけ眼でそのプルタブを持ち上げる。

かしゆ、という小気味の良い音と共に、炭酸が弾けるそのケミカルな液体を迷うことなく喉に流し込んでいき、これのどこが美味しいのだろう、と訝りながらも確かに眠気覚ましとしては格別に「効く」それを、秋乃は一息に飲み干した。

夢を見ていた。二年前、黄金の時間を過ごしていた、そんな夢だ。

机の上には今更手書き以外は認めないと古臭い頭をアツプデートできていない教授から課された課題と、その隣には「今」アキノが愛機としているミネルヴァガンダムが佇んでいる。

結論から言ってしまうえば、チイが言っていたようにザ・シルバリーは解散した。

第一次有志連合戦——アキノたちも参加した、マスダイバーにブレイクデカールを供給していた黒幕の潜むディメンションを、チャンピオンが率いる「AVOLON」、そして「智将」ロンメルがその辣腕を振るう「第七機甲師団」を中心に組まれた有志たちが強襲する作戦によって、そしてあの「ビルドダイバーズのリク」が奇跡を起こしたことによって、ブレイクデカールは確かにGBNから根絶された。

——狡兎死して走狗煮らる。

そんな古い諺がある。戦いが終わった時、役目を終えた英雄は用済みとばかりに処分されることを示すものだ。

そして、ザ・シルバリーはその通りになった。

マスダイバーの根絶という目的を果たしたことで、ビーティスは自らフォースの解散を宣言し、メンバーはそれぞれに道を歩むこととなった。

ある者はGBNから去っていった。またある者はGMF91から新たな自分だけの愛機に乗り換えて、GBNを続けていた。

そして、秋乃は乗っていた機体こそ違えど後者だった。だが。

「……シルバリイは……私は、間違っていたのでしょうか……」

ポケットの中で震えていたスマートフォンを取り出し、メッセージアプリに新着のそれがあることを確認すると、秋乃はそれに既読をつけつつも、返信する気力もないためそつと電源を切った。

あの日ビーティスとアサルトゴーストが見せてくれた銀の夢は、例え軍団ならずとも、マスダイバーが去って尚GBNという仮想郷を乱し続ける不屈き者たちにその鉄槌を下すキャプテン・ジオンへと引き継がれて、そして今も秋乃の中に息衝いている。

「……ビーティスさん、リヒト、私は……」

だがそれは——「リビルドガールズ」にその籍を置きながらも、秋乃という個人が未だに銀の夢を追いかけ、その夢に惑い続けていること、その証左に他ならないのだった。

第三十一話「翔るワン・ナイト・パーティー」今日もGBNは平和です」

GBN総合スレpart. 834

1：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ここはガンプラバトル・ネクサス・オンライン、通称GBNに関する総合雑談スレッドです。

各種ミッションについてはwikiを参照した上で専門スレへ、フオース勧誘、ビルド構築、クリエイトミッションの攻略に関する相談も専用スレでお願いします。

【GBNまとめwiki】<https://www.gbn.jp/wiki/>

【ミッション攻略スレ】<https://www.gbn.jp/boards/mission/>

【ビルド構築スレ】<https://www.gbn.jp/boards/build/>

【フオースメンバー募集スレ】<https://www.gbn.jp/boards/foos/>

※※※

324：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

例の「ボルケーノ」三人組、「噂のリビルドガールズ」に敗北してて

草

325：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

うみみ……（既知）

326：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

このスレ必ず325番に変な鳴き声のやつ出てくるよな

327：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

サニー○兄貴はアロー○の海に帰って、どうぞ

328：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

天敵がいる海に送り出すとか抹殺する気満々で草、お前ヴァルガ民かよお!?

329：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

まあこういう事言うのもあんま良くないんだらうけど正直ざ

まあって感じ

330：以下、名無しのダイバーがお送りいたします
イキりたくなる気持ちはわかるけど他人のガンプラそのものには
難癖付けないだけ「ダーク☆アヴァロン」とかいう連中の方がマシ
だったな

331：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

あの「チャンプ以外のAVALONは寄せ集めに過ぎない」とかイ
キってた奴らだっけ、懐かしいな

332：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

大体の連中はそのまま雲隠れしたけど副リーダーの奴はガチで反
省して三日三晩チャンプと「AVALON」のメンバーに土下座参り
してから真つ当にやってるんだっけ

333：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

元々「AVALON」所属の奴らで問題起こした奴が立てたフォー
スだからなー、チャンプはそういうところ甘いと思うけどあの人が許し
たんならもういいんじゃないやねえかな

334：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

「遙か遠きCAMELOT」だっけ改心した連中が立てたフォース、ま
あ今は普通にやってるしいいんじゃないやねえの

335：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ボルケーノの連中、「リビルドガールズ」相手に負けたら50万払う
約束して試合したから傭兵代丸々損してんのほんと草生えますよ

336：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

(・・ω・・) ぼるけいのうwww ぼるけいのうwww

337：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>>336

(・・ω・・) 出荷よー

338：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

で、案の定傭兵がそもそもルール違反でフォース勧誘スレで暴れて
たのが原因だからって当たり前だけど支払い断って揉めたのをあの
チハヤって銭ゲバ女に仲裁されて結局25万ずつの折半になったの

が一番笑える

339：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>>338

揉めて支払いがうやむやになるより納得できる形で支払わせる銭ゲバの鑑、それとあの女の子その名前で呼ぶとキレるみたいだからやめてやった方がいいぞ

340：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

(・ω・) まあ「リビルドガールズ」も随分このスレの噂の種になったわね

341：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

俺は最初からエリイちゃんの可愛さを見抜いてたから……

342：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>>341

夜道には気を付けろよ

343：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

アイカちゃんの「エリイちゃんのために死ねー」が本気で殺意こもってマジで怖い

344：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

(・ω・) アイカちゃんにあの狂気的な目を浮かべてもらいながら病んだ高笑いと共に踏まれたいわね

345：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>>344

(・ω・) あきらめて？ 出荷よー

346：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

(・ω・) そんなー

347：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

まああんまり有名になんのも考えものだよな、あの「ビルドダイバーズ」も「ボルケーノ」にELダイバーがどうこうとかそれでチートしてるとか言いがかりつけられてたっぼいし

348：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

有名税っていうけどあんまりいい考え方じゃないよな

349：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

まあそのせいで「リビルドガールズ」もあの連中に目え付けられたっぽいしな……

350：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

どの「あの連中」だよ

351：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

鳥

352：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

把握した

※※※

「んぎゃああああっ！」

「チー！」

「クツソ、なんだよこいつら！ 百歩譲って見た目が独特なのはいいけど首回しながら変形ゲロビなんか撃ってくんじゃねえええ！」

仮想郷が夜の帳に包まれても、現実のそれと変わらないメガロポリスは電気の灯りを地上に瞬く星々に代えて瞬き続ける。

眠らない街と呼ばれた世界の主要都市をモチーフとしたそのエリアは、「走り屋たちのペリシア」という二つ名で呼ばれて憚らない。

デイメンション・シユバルツバルトの中に存在するそのエリア——「ハイウインド・エリア」は、首都高速とニューヨークの街並みが悪魔合体したかのような、ただふらふらと街を歩くのであれば見事にバエる……ガンダム・バエルという意味ではなく花の学生たちが使う意味であるその言葉を体現する夜景に一日中包まれている。

しかしてその実態は、都市が見せる幻想と、メガロポリスを生かしながら続ける大動脈、十八メートル級に拡大されたガンプラが複数機集まったも余裕を持つ巨大高速道路たる「ストレイ・ハイウェイ」の漂わせる「高速」の夢が覚めないことを願いながら電子の海の走り屋たちが、誰に咎められることもなく日々都市の血管で「最速」を賭けたデッドヒートを繰り返す、ある意味では理想郷で。

アイカたちのような一般人が、軽率に踏み込むような場所ではな

かった。

マジョーラカラーを見事に活かしきったことで、都市の明かりを取り込んで七色を通り越して約千六百八十万色に輝く、ホットスクランブルガンダム改造機と思しき四機のガンプラが編隊を組み、敢えて先行させている「リビルドガールズ」の四機を追跡する。

『フハハハハ！ 少女たちよ、これこそがバンデッド・ルール！ これこそが「ガンプラバトル」と「レース」が融合した究極の遊戯、バンデッド・レースに他ならぬのだ！ その魅力はわかってもらえただろう!?!』

「わかってたまるかああ!!!」

そのホットスクランブル——というか、ホットスクランブルガンダムの変形時に機首となる部分と武装だけを流用し、フィン・ファンネルを元のスクランブルガンダムに戻した四機のカスタマイズモデルは、スピードを重視したこのバンデッド・レースにおいては標準的なカスタマイズであり、その方向性も極めて真つ当なものだといえた。

機種先端に、鳩だかオウムだかカカポだか知らないが、デフォルメされた鳥の頭部、プチツガイの頭を改造したパーツを搭載し、極彩色の輝きを放ちながら迫ってくること以外は。

アイカはグルグルと首を回しながら、その目に当たる部分から連続して放たれるビームを死にそうな思いで回避しつつ、反射的にそう返していた。

仮にバンデッド・レースが魅力的な競技であったとしても、「ダイバルックがその機種部分と同じようなデフォルメされた鳥の頭に全身タイツで」「どこことなくゲーミングな輝きを放ちながら首を回して襲いかかってくる」紛れもない変態の編隊に追いかけられているような状況で、その魅力を理解できるような人間は頭のネジが一本か二本外れているか、このフォース……「パロツツ・パーティー」のような鳥頭ぐらいしかいないだろう。

厄介なのはこの「パロツツ・パーティー」、先日戦った「ボルケーノ」三人組と違ってその態度は極めて紳士的で、見た目以外はまともなところだ。

（勿論、嫌がる少女たちに無理強いをしてまで吾輩は戦いたいと思わない。だが……リビルドガールズ、吾輩も憧れるあのスピードを誇るアリアとガンダム・バエルを破った、超スピードで成長する君たちに……このめくるめく高速の世界を見てもらいたいのだ）

現在、ホットスクランブルもとい【パロットスクランブルガンダム】四機編隊の中でも三機を後ろに従えてアローヘッド・フォーメーション、その先頭となって首を回している男……ダイバーネーム「ハート」は、極めて温厚に、そして紳士的に、チイからの金銭要求にも嫌な顔一つせず、むしろ自分たちが負けた時は倍額を支払うとまで言っていた、極めて度量の大きい人物だ。

その度量に反比例して、格好が突き抜けていることさえ除けば。

アイカは宿命的に変なのに絡まれる己の体質を呪って涙しながらも、「パロット・パーティー」が見せようとしている最速の景色に乗せられて、メガロポリスを一周する大動脈を、愛機の名の如く流星のように駆け抜けていた。

『ムツハハハハ！ 少女たちよ、最速のチュートリアルは堪能しただろう……ならばここからが本番だ！』

通信ウィンドウが開かれて、デフォルメされたペリカンの被り物にやはり白い全身タイツという奇妙奇天烈な出立をしたダイバー、「ペリー」が叫ぶと、チイが予め察知していた通り、攻撃判定を持つ武装を一切行使しなかったことで夜の闇に溶け遂せていたそのモビルアーマーが、ハイウェイに全容を現す。

「うおおおおきめええええ!?!」

『キモいとはなんだ！ きもちわるい、と言いなさい！』

「……あ、あの……あんまり……変わらないんじゃない?」

チイが思わず反射的に「キモい」と叫んでいた通り、姿を現したモビルアーマーは明らかに異形と呼んで差し支えない姿をしていた。

元になったのはおそらく「グラブロ」だろう。だが、水中でこそその本領を発揮するものの、陸上では丘人魚なそれが何故、帝都を駆け巡るハイウェイに降り立っているのか。

その答えはシンプルだ。本来グラブロが備えている巨大クロー・

アームがあるべき場所にはゲルズゲーの下半身が移植されていて、その天面からは無数のテンタクラーロッドと、モノアイシールドがあった場所からはパロットスクランブルと同じデザインながらベアツガイⅢのそれで作られた鳥頭が、グラブプロのクロー、そのアーム部分を首の代わりにする形で接続されている。

反射的に答えたエリイのリビルドウォートに対して、「違うのだ！」とばかりにテンタクラーロッドによる猛攻を仕掛けるそれは、百歩譲ってキモいではなくきもちわるい、だったとしても、ギリギリとはいえ鳥と言い張れなくもないパロットスクランブルの範囲からは明らかに逸脱している。

「エリイ！ 私に盾に……！ それと！」

『ムツハハハハ！ なんだねアキノ女史！』

「……それは、鳥なのですか？」

バンデッド・レースは直接攻撃やトラップの設置など、「場外から行われるものを除いて」妨害行為の全てを認めただでゴールを目指す荒々しい競技であり、確かにその魅力に取り憑かれる人間が出てくるのもわからなくはないと、生真面目なアキノは本気でそう思っていた。

だからこそ「パロツツ・パーティー」は鳥をモチーフとしたカスタマイズをフォースメンバーのガンプラのみならず、ダイバーのアバターにさえ適用しているのだが、目の前にいるモビルアーマーは明らかに翼を持つ鳥のそれからは逸脱している。

「……それ、今聞くことかなあアキノさん……」

「ええ、今聞くべきことです、アイカ」

ミネルヴァガンダムはスピードという面でも「リビルドガールズ」で随一だ。

そして、この競技が純粋にヨイドンでゴールを目指すものでないのなら、極端な話全員が潰し合うのを待ってから、歩きで悠々とゴールしたってルール上は構わない。

なんてことはない。普段のガンプラバトルにレース要素が加わったものがバンデッド・レースならば、自分はいつも通りチームの盾に

なるべきだと判断を下して、アキノは異形のモビルアーマーと対峙することを選んだのだ。

アイカは開いた口が塞がらない、とかフレーメン反応を起こした猫とかそういう類の顔をして呆れていたが、対峙する相手が相応にこだわりを持つているなら、それから外れたものを運用しているのはよほど切実な理由があるか、或いはその解釈をこちらが誤っているかのどちらかだ。

だからこそ、戦う相手については知っておきたい。

巧みに伸ばされるテンタクラードをビーム・トンファアの乱舞で切り刻みながらバックブーストで前進するという奇妙な光景を展開しながら、アキノとペリーは互角に渡り合う。

『感動した……』

「はい？」

『俺は今、猛烈に感動しているのだアキノ女史！ この「ドードラブロズゲー」をキモいと評するダイバーは数知れず！ しかし！ 貴女は敢えて理由を問うてきた！ なれば答えねばなるまい……このドードラブロズゲーは……翼を持たぬ鳥、ドードー鳥なのだ！』

「ドードー鳥に触手は生えてないよね!？」

『何を言うかアイカ女史！ ここはGBN、そしてガンプラは……自由だっ……!』

自由にも程があんだろ。

思わずもう既に崩壊寸前のロールプレイを叩き壊してアイカは叫びたくなつたが、なんとも言えない微妙な顔で眦に涙を浮かべているエリイと、もうどうにでもなれとばかりに逆に満面の笑顔を浮かべているチイを通信ウィンドウ越しに視認することで、幾分か冷静になる。

しかし。

『然りっ……! 我らは自由にこのGBNの空を飛ぶ!』

『高速の世界……ハート殿が我等に見せてくれた夢をこの翼に乗せるために!』

『そしてその夢を我らで独り占めするのではなく、他者にも分け与え

るために!』

『吾輩たちは、自由なのだ!』

上からハシビロコウの被り物をしている「ハッシー」、カラスの被り物をしている「カーラ」、ハクチョウの被り物をしている「チョウ」、そして当然の権利のように全身タイツ姿の彼らをまとめ上げるリーダーであるハートが、力強く宣言する。

うわーいこいつら努力の方向音痴だ。

確かに彼らの理念は立派なものだ。そしてダイバーとしても、人間としても非常に器が大きく、尊敬に値する人物でさえあると、アイカもそこは認めている。

だけど、どうしてその熱意を主にダイバールックの面でまともに活かせなかったんですか？

アイカは電話をかけている猫の如く頭を抱えなくなったのを堪えて、戦況を冷静に分析する。

あのキモいモバイルアーマー、ドードラブロズゲーはいつも通りにタック役を引き受けてくれているアキノが抑えている。

そしておそらくあの構成は妨害に特化したものだ。ならば、敵が次にやってくることは何か。

奇しくも、アイカとエリイは同じことを考えて、そして。

『チュートリアルは終わりだと宣言した……! チョウ!』

『了解しましたリーダー! 少し本気を出す……さあ、ついてこれるか少女たちよ!』

——膠着した戦況を打破することだ。

失念していた。あの主に独特すぎるダイバールックやガンプラの姿に気圧されて忘れかけていたが、このゲームの本質はバトルではない。

あくまでもレースだ。それを見せつけるように、ゲーミングな輝きを放っていたパロットスクランブルの一機、チョウが駆っている機体の全身が赤みを浴びたかと思えば、そして。

「……流星……っ……!?!」

『ファッハハハ! 違うなエリイ殿! これは……彗星だッ!』

エリイが誤認しかけたのも無理はない。トランザムと見紛う速度で飛び出していくチヨウのパロットスクランブルは、現在先頭を走っていたアイカを早々にぶち抜いて、このストレートでレースを決めようとしたのだろう。

「ちっ！」

アイカは舌打ちと共にコンソールを忙しなく操作すると、レースの舞台となっているこの「ストレイ・ハイウェイ」の全体図を映し出して、残りの区間を確認する。

——まずい。

そこに表示された事実アイカは当惑し、操縦桿を握る手を緩めかけたが。

「アイカ、おめーの考えてる通りだ、止めなきややべえ！ 飛べるか!?!」

「勿論、チイちゃん！」

チイの一言がアイカを現実に戻す。

迷いなく「フェアリー・テイル」の発動を選んで、アイカは先行したチヨウのパロットスクランブルを叩き落とすべく、膠着した集団から離脱しようとするが。

『それは読んでいた！』

「ぐ……っ!?!」

ハートのパロットスクランブルもまた、そのトランザムと極めてよく似た必殺の加速ギミック、「紅の彗星」を発動すると、フェアリー・テイルの発現によって飛び出したアイカに一瞬で追い付き、その喉元を啄まんとクチバシから伸ばしたビームサーベルで襲いかかる。

それでもモビルスーツ形態に変形しないのは、「パロツツ・パーティー」の意地が故だろう。

エリイは混乱と当惑に頭を支配されながらも、この長いストレートを抜けた先にあるものがヘアピンカーブの連続であることを確認すると、躊躇いなくトランザムシステムを発動させて、この乱戦を切り崩そうと全てのフィン・ファンネルを一斉に射出する。

『イエツハハハハ！ エリイちゃん！ ファンネルとはまだ若いな

！』

『ハハハハハハ！ 我らとて百戦錬磨のレーザーよ、ファンネルによる妨害など、お手の物おっ！』

混戦の様を増してきた後方集団で、一齐に「紅の彗星」を発動した。パロットスクランブルたちは、エリイが戦場を掌握し、完全な起き撃ちを行っているにも関わらず強引なブーストによる推力の暴力と、繊細な機体捌きでメガ粒子砲にも匹敵する、トランザムで強化されたフィン・ファンネルが形作る光の網を華麗にくぐり抜けていく。

「……………う、ああっ……………」

「弱気になんじゃねえ、エリイ！」

リビルドウオートを得ても変わらないのかと、エリイが絶望に沈みかけていたところへ、チイの鋭い叱咤が投げつけられる。

「いいかエリイ、今一番役に立ってねえのはチイだ！ アキノがあのかモいのを抑えてくれてるから妨害は何とかなる！ お前はサポートじゃなくてレーザーになれ！」

『フハハハハハ！ チイよ！ ならばどうする！』

「こうすんだ……………よつと！」

大きく馬身を開けられたチイは、フェアリイ・テイルとトランザムによつて三機のパロットスクランブルに食らいついている二人から離れた位置にいる。

そして、このゲームはコースに立っている限り、どんな妨害も許可される。

チイは迷うことなくコンテナから折り畳まれたロングバレルを取り出すと、ストレートが幅を狭くし始める、コーナーまでの折り返し地点の壁を狙って、そのバレルを持っていたビームマシンガンと接続することで、一発の出力を絞り込み、弾速を極限まで高めた一撃を発射した。

『ヌヴオオオオオオ！』

『ヌウン！』

『ヌアアアアアッ！！』

「うわ……………っ!？」

「わわ……っ!?」

機体の純粋なスピードなら、当たり前だがそれを追求してきた「パロツトスクランブル」の方がコメットコアガンダム、そしてリビルドウォートよりも上回っている。

だが、機体が加速すればするほど、何かにぶつかった時のダメージもまたそのスピードに比例して大きくなる。

爆発を起こして吹き飛んだ瓦礫は、敵味方の区別なく先頭であるチョウに追いつかんとしていた五機にへと一斉に降り注いだ。だが、その被害を甚大に被ったのはやはりというか、並び立って集団を抜けようとしていたアイカとエリイを包囲する形で陣形を組んでいたパロツトスクランブルたちの方だった。

「……もうチイのグラスランナーじゃ追いつけねーな、悪い、アイカ、エリイ。これしかなかったんだ、後は頼んだわ」

瓦礫と爆発の中から姿を現したコメットコアガンダムとリビルドウォートは著しく損傷していた。

そして、化け物のようなモビルアーマーであるドードラブロズゲイを一人で相手していたアキノはどうとう必殺技を解禁し、その巨体をハイウェイに伏せさせることに成功していたが、その代償としてミネルヴァガンダムからのシグナルはロストしている。

ぺたん、と座り込んだグラスランナーのコックピットの中で、チイは自分が機体やダイバーの見た目に惑わされて、戦術の本質を見失っていた事実を唇を強く噛み締める。

「クソッ……何が偵察だ、斥候だ……チイは、調子に乗ってたのかよ……!」

そんなチイの嘆きは、ハイウェイを駆け抜ける機体が全力で噴かしているスラストターの残響にかき消されて霧散する。

それはまるで、一夜の夢を見ているかのようだ。

なんでもありだからこそ戦術を見誤る悔しさも悲しさもまた、バンデッド・レースの一部なのだ。

シグナルを喪失しながらも通信は傍受できるコックピットの中で、ハートはチイの嘆きに対して静かに腕を組み、泣くなどばかりに、そ

れを乗り越えた先に最速の見せる夢があるとばかりに、後方保護者面で静かに頷くのだった。

結論から言えば、損傷したコメットコアガンダムとリビルドウォードでは、無傷で見事にストレートを抜けて、ヘアピンカーブを華麗に、最低限のブレーキとアクセルを使い分けて駆け抜けていくチョウに追いつくことはできなかった。

アイカは焦りからフェアリー・テイルを切らずにヘアピンカーブへと突入したことで壁に激突して盛大にコースアウトとなったことで失格となり、エリイはトランザムを切ってヘアピンカーブへと突入したが、瓦礫の余波で片肺を失っていたリビルドウォードでは、万全かつ走り慣れているパロットスクランブルに追いつけるはずもない。

それでも、もたもたと機体を慌ただしく立て直しながらも完走したのは、エリイが見せた意地と言うべきか。

そうして「リビルドガールズ」が敗北を喫してロビーに帰還したその時、勝てなかったことを悔やんで泣いているエリイに、そつと全身タイツに包まれた白い手が伸ばされる。

「エリイ、悲しむことはない……このレース、本当にグッドゲームだった」

「……あ……っ……!？」

ハートの被り物越しに見える目はどこまでも慈しみに溢れていたが、その異様な姿、端的に換言すれば変態そのものな様相に恐れをなして、エリイはびくりと身を震わせるといつも通りにアイカの後ろに隠れてしまった。

「ごめんなさい、エリイちゃん、シャイな子なので……」

「フハハハハハ！ 吾輩にも同じような年頃の娘がいる、何、気にすることはないさアイカ！ 改めてグッドゲームであったぞ！」

いやその情報はちよつと聞きたくなかったです。

そう言いたくなるのを堪えて、アイカはハートが差し伸べてきた手をがっちり握り返して言葉を紡ぐ。

「GGでした、ハートさんっ☆」

「うむ！ 最速の世界がまた見たくなかったなら吾輩たちをいつでも呼んでくれ！ GBNは……純粋なバトルだけがその全てではない。そう、全ては自由、ガンブラもこの世界も、自由なのだからな！ フハハハハハ！」

そう言い放って、仏頂面のチイから報酬である10万BCを受け取ると、次なる対戦相手を探してか、ハートはロビーから再びディメンション・シユバルツバルトへと解けて消えていく。

「……なんつーかごめん、チイが調子乗ってたわ」

「いいえ、チイ、貴女は悪くありません」

「アキノ……」

「これは、私たちチームの敗北です。私も……どこかで浮かれていたところがありました。だから、皆で反省会を開きましょう」

「……わ、わたし、も……それが、いいかな、って……」

「完全にあの見た目にやられてたよね……それも作戦だったのかな」

「おめーら……」

途方に暮れていたチイに、一様に苦笑を浮かべながらも己の失敗を頭に浮かべて、アイカたちはその手を差し伸べる。

「よっしゃ、反省会だ！ 次は勝って……そうだな、30万は貰ってくぞー！」

「さんせーいっ☆、それじゃカフェに集まろっか！」

「……はい……っ……！」

「ええ、それがいいでしょう」

確かに、「リビルドガールズ」は敗北を喫した。

だが、その蹉跌を受けてもアイカは、エリイは、チイは、アキノは、決して涙に暮れて己を責め続けるのではなく、前を向いて笑っていた。

それはきつと、「リビルドガールズ」が「リビルドガールズ」にならなければそれは実現できなかった光景なのだろう。

アイカも、エリイも、チイも、アキノも。それぞれに理由を抱えてこの電子の海へと潜っているが、四人でいる内は少しでも互いに抱えた理由を支え合っているような、そんな感覚がする。

四人は一様にそう思っていたが、誰一人、野暮なことだと、その言葉を口には出さず、カフェで何を頼むかについての雑談に興じていた。

きっとこれが、GBNだった。そして。

かつて——ある少女の犠牲と、ある少年……クガ・ヒロトの覚悟と最後の意地が、そしてある少年、ミカミ・リクの勇気が奇跡への一矢となつて守り通した、仮想故の理想郷の日常、その一幕だった。

第三十二話「GBNの木漏れ日くあたしに何か足りてない」

GBNは、戦うばかりが全てではない。

ここ最近、どうにも自分たちの名前が知れていたのと単純にエリイのリビルドウォートを調整する兼ね合いで積極的にフォース戦を引き受けてきたことでアイカ自身忘れそうになっていたが、そもそもこの世界を放課後の延長線上として利用するユーザーだってアクティブ二千万の中に含まれているし、かくいうアイカもそうなるつもりだったのだ。

しかし気付けば戦いに明け暮れ、Cランクという、GBNにおいては「ここからがPVPのスタートライン」、要するに飽くなき闘争に身を投じる一種の意思表示みたいなランクに到達してしまっている。

別に、ガンプラバトルを忌避している訳ではない。

極めて珍妙な出で立ちの「パロツツ・パーティー」を率いるリーダーである「ハート」と、以前にアイカたちと死闘を繰り広げた、マクギリス・フアリドの生まれ変わりとも噂される暴走お嬢様、「アリア」がかのバンデッド・レースで鎬を削る生配信を、ロビーの外に点在しているカフェの一角で眺めながら、手に汗握る思いでアイカは見守っていた。

バンデッド・レースは競技人口が少ない、マイナーな種目である。勿論、アクティブが二千万人いれば、競技人口が少ないジャンルであったとしても対戦に困らない程度に愛好家は存在するが、新規を取り込めず身内だけで完結するコンテンツはいずれ廃れていく。

だからこそ、それを布教したいという理由でハートが自分たちに頼み込んできたために、なんとか協力してあげたいと思ったからあの戦いを引き受けたのだが、やはりネームバリューという点に関しては、ポツと出の自分たちよりも、ハイランカー殺し、ジャイアント・キラーと名高いアリアの方が上というわけだ。

試合の後に送られてきたメッセージで、バンデッド・レースに自分

たちはフォースの性格上あまり参加できないが、アリアとのマツチアップを組んで配信したらどうか、というアイカの提案を愚直に受け入れ、そしてアイカの頼みとあらば、とアリアがそれを快諾したことで、実に同接人数14万人というその配信は成り立ったのである。

「……アリアさん、やっぱり凄いです……」

「うん、チイちゃんがいなかったらあたしたち、負けて当然だったわけだよ」

画面の中に映る「パロッツ・パーティー」五機の猛攻を恐るべき反射神経と、そして徹底的に作り込まれたことで原作の勢いに迫る機動性を確保したガンダム・バエルは全て回避し、「紅の彗星」を発動して直線で勝負をかけてきた「チヨウ」のパロツトスクランブルすら引き離し、その隙を見て自身を奇襲しようと背後に陣取った「ハッシー」へ、ノールックでバエル・ソードを投げつけて撃破するという人間離れした技の数々を、アリアは繰り出していた。

『最速を求める戦い……アグニカ的ではありませんね、ですが……未だ眠りの中にいる民衆を目覚めさせるのもバエリストたるわたくしの役割。さあ、さあ、さあ！ このバエルの機動性に平伏すのです！ そして、バエルを操るわたくしが五機を一人で葬りゴールする！ その行いこそが、世界を変えるのですわぁッ!!』

相変わらずのハイテンションで叫びながら、アリアはバエルと更なる同調を試みるべく、その双眸に妖しくも強く輝く光を宿し、残光がウイング・スラスターの軌跡と重なって、メガロポリスのハイウェイに流星の足跡を刻んでいく。

『バエルだ！ アグニカ・カイエルの魂！』

『嘘だろ、バエルってあんな強いのか？』

『HGのキット組んだけどあのバエル、関節以外ほぼ別物じゃね？』

『相変わらずアグニカに狂ってんなこいつ……』

『でもこのバーリ・トウードなレースは中々クールだぜ！』

画面を流れるコメントの数々を流し読みしながら、アイカとエリイは苦笑する。

全身タイツに鳥の被り物の軍団と、バエルに、マクギリス・フェアリ

ドにその魂の全てを捧げ切ったお嬢様の戦いというだけあって、最初
はイロモノ配信だと思つて観に来ていた視聴者たちは、いつの間にか
画面の中で繰り広げられる、アリアと「パロツツ・パーティー」のぶ
つかり合い……純粋な力のみが示すその魅力に圧倒されているのだ
から、企画者としてはどこかそれが誇らしくもあり、そして変わらな
いアリアの姿と、「パロツツ・パーティー」のゲテモノっぷりにちよつと
ドン引きしていたりで、アイカの胸中は複雑だった。

「ん……なんか複雑だけど、でも、悪くないかな」

「……ん、っ……そう、ですね……」

窄めた唇から、クリームが溶け込んだココアの濃厚な、現実と比較
しても遜色のない味わいがアイカとエリイの舌を刺激する。

主にチイの交渉のおかげでビルドコインは腐るほど持っているの
だが、キングサイズのアイスココアに二つストローを刺すという形
で、アイカとエリイは同じ飲み物を二人でシェアしていた。

端的にいつてしまえばデートである。

それを提案してきたのはチイだった。

どういうわけか、というよりは今までは待機に徹していたデカイヤ
マに当たりがついた、とのことではしばらく休暇をもらうついでにと、
二人が今までよりも仲を深めていたことを見抜いていたのか、「まあ
この世界、戦うだけじゃねーしアイカとエリイも、アキノも休んでみ
たら？」との言葉を残して、本人は予想通り第六層が最初のボトル
ネックとなっていた超巨大電脳迷宮に潜っていったのだ。

チイは直接的にデートをしろ、と言つてきたわけではないが、アキ
ノもなぜか妙に気を利かせてくれたのかそうでないのか、「私もリア
ルがしばらく立て込んでいるのと諸事情があつてお暇を頂きます」と
いう言葉とともにログアウトしたので、今日の「リビルドガールズ」
は、アイカとエリイの二人で開店休業状態だった。

——だったら、デートでもしよっか。

アイカがそれを提案したのは、半ば勢いに任せたといいのもあつ
た。

現実で「絵理」とデートをするときはいつもどちらかの家に泊まっ

て一日中GBNの話題で盛り上がったたり、持ち寄ったデバイスでログインしたりしているのだが、それはひとえに「絵理」の視力の問題ゆえだ。

あとは、「愛香」の前では眼帯を外して傷痕の残る右眼を曝け出すことに抵抗こそなくなった「絵理」だったが、やはり他人の前では眼帯が外せないのと、単純に人が多く集まるところが苦手ということもあって、それなら「絵理」であり、エリイをいじめるような人がいないし景色の見えるこの世界でデートをしよう、といった具合で誘いをかけたのだ。

——ふ、ふ……ふつつか、もの、でしゅがっ！ よ、よろしく、お願い……しますっ。

デートの誘いを受けた絵理が取り乱しながら顔を真っ赤に染めて、何度も首をぶんぶん縦に振っていた姿を脳裏に思い描きながら、微かに目を伏せてココアを啜るエリイも可愛いな、と、アイカはすっかり緩み切った頬を無理やり引き締めつつ眺めるのだった。

「……あ、あの……アイカ、さん？ わたし、なにか……」

「ううん、エリイちゃんは今日も美少女だなんて☆」

「……び、びしょ……びしょう……じよ……あう……」

褒められることに慣れていないのか、頭から煙を噴き出しそうになっっているのもまた可愛い。

やっぱりエリイちゃんは可愛いし、勿論現実の「絵理」も可愛い。

道行く人々を一瞥すると、アイカはすぐにその視線をエリイへと引き戻し、あうあうと顔を真っ赤にして眦に恥ずかしさから来る涙を浮かべているエリイに微笑みかける。

ああ、そうだ。

このデイメンションにいる連中は、エリイちゃんのこととは知ってるけど、「絵理」のことは知らないんだ。

アイカは己の中に湧き上がってくるよくわからない感覚が、ぞくりと脊髄を伝って脳を痺れさせていくのを感じていた。

愉悦。あのとき、そして今、開きっぱなしにしている画面の中で最後は純粹なコーナリング技術と、ヘアピンカーブを抜けた先にウイニ

ングランにして最後のチャンス用として設けられた直線を見事に、残ったハートに追いつかれることなく走り切って、バエル・ソードを掲げているアリアが感じているのと、お腹の下からぞくりとくる辺り、きつとよく似た感覚だ。

ぶるりとなれない恍惚と愉悦に身を震わせながら、アイカは開いていた画面から流れる、アリアが剣を掲げると共に宣言する勝利を聞く。

『GBNにおける最速……それを求める真理はここですわ！ この配信を見ていただいた皆様！ さあ!!! バエルの元に集うのです!!!』
恐らく、この世界にマクギリス・ファリドがいたのなら、そんな彼女の完璧なアグニカム・ヴを称賛しつつも、自身の「バエル」を懸けて彼女と戦いを挑んでいたのだろう。

それほどまでに、口調こそ違えどアリアが見せる「ファリド」の名を継ぐ者としての立ち居振る舞いはマクギリスのそれに近い。

販促も兼ねてガンダムベースの店内、そのプラモデルコーナーのモニターから流されている映像で「鉄血のオルフェンズ」二期を見たアイカは、そんなことを思いながら「バエルだ！」と、勝利したアリアを、そして「クールな奴らじゃねえか」「パーティーの会場は決まりだな」と、敗北を喫しながらも検討したハートたちを称えるコメントが流れるのを見送りながら、そつと開いていた画面を閉じるのだった。

「……そ、そ、その……アイカ、さん……」

「なあに、エリイちゃん？」

さつきまで処理落ちしていたエリイが意識を取り戻したのか、俯いていた顔を上げてもしもじと指先を弄ばせ、耳まで真っ赤になりながらもその目で確かにアイカの瞳を見据えて、唇から言葉を紡ぐ。

「……あ、アイカさんも……美少女、ですっ！ から……っ……！ 凜と、してて……いつつも、目に、星が輝いてて……そのっ、だから、わたし……そういう、かわいいアイカさんが、大好きです……えへへ……」

「……あはは、してやられちゃった」

エリイはしどろもどろになりながらもはつきりとそう言い切って、

とろけるような夕陽とよく似た、穏やかで優しい、そうでなければ窓から差し込む木漏れ日のような笑顔を満面に浮かべる。

なんだかねだで、直球で褒められるのに弱いのは、アイカも同じなのだ。

エリイと同じく顔を耳まで真っ赤にしながら、アイカは倫理コードの関係上GBNでは触れ合わせることのできない唇の寂しさを埋めるようにストローを噛んで、彼女にもそれを促すようにそっと目を伏せた。

そして、アイカの意図を理解したエリイもおずおずと頬を染めたまま目を伏せて、まだまだ中身が残っている仮想のココアを舌先の触れ合いに替えて、二人は一緒にすり減らしていく。

電子の海を旅すれば、きつと色んな景色をエリイは見る事ができる。

今回はアリアの配信を二人で見ながら、アバターのアクセサリ類を販売している店をウインドウショッピングしようという約束でデートをしているが、GBNにはあのメガロポリスが存在する常闇のデイメンションもあれば、一日中黄昏が続く極圏を再現した白夜のデイメンションもあると聞くと、聖地・ペリシアのみならず、日本の街並みを再現した「ジパング・エリア」や、天国に一番近い島と噂される南海の島国を再現したと思われる「アイランド・エリア」など、電子の観光名所には事欠かない。

なんだか自分が戦闘狂になったんじゃないかとアイカは心配していたが、目を細めて必死にココアを啜っているエリイを薄目で見つめてみれば、その心配は揺らぎと共にどこかに消えていき、心配していたことがバカバカしく感じられるほどに別な温かさで満たされていくような気がした。

「……………つぶあ、ねえ、エリイちゃん」

「……………つ、ふ……………どうしたんですか、アイカさん？」

「エリイちゃんは、GBNのこと、好き？」

「……………はいっ。目の、見えない……………わたしでも……………この世界では、アイカさんの顔を……………ちゃんと、見られますから……………」

「……そっか。ありがと。あたしも好きだよ、GBNも、エリイちゃんも」

エリイはきつと、GBNに深く感謝しているのだろう。アイカはそれを否定するつもりはないし、何よりその権利も持ち合わせていない。

見えていたはずの視力を奪われて絶望していた絵理に、エリイとして再び光を与えてくれたのがこの世界なら、アイカだってそれに感謝するのが筋というものだし、実際にそういう感情は持ち合わせている。

それでも、心のどこかで思ってしまうのだ。

ちよつとだけ、エリイからそれだけ想われているGBNがずるいと、そして。

——この、限りなく理想に近い仮想の海では、大好きなひととキスができないことが、とてつもなくもどかしいと。

そしてその仮と理の一字の間に横たわる断絶が永遠に埋まることがないであろうことがとてつもなく恨めしいと、そう思っ、しまうのだった。

エリイとのデートを終えて、現実——日曜日の自宅に解けて帰還した愛香は、-google型のデバイスを取り外すと、充電器に繋ぎっぱなしにしていたスマートフォンを手にとって、ベッドにその身を横たえる。

エリイであり絵理と仮想の海で濃密なひと時を過ごしていた間は忘れかけていたが、一人になるとそれは途端に押し寄せてくる。

愛香はスマートフォンからGBNに簡易ログインして、自身のローカルデータに保存されている戦いのリプレイを再生する。

相手の視点から愛香の立ち回りを見れば、確かに始めたての頃よりは明らかに無駄なブーストを使うことが減ったし、後の先を取るように大胆なモーションでビルドボルグを振り回すコメットコアガンダムの立ち回りは、自分のものか疑わしいぐらいに上手くいっているものもある。

だが。

「……あたし、この子を上手く使えてるのかな」

視点を変えて、アキノやチイ、そしてエリイの立ち回りを見れば、役割こそ違えど、勝った試合であれ負けた試合であれ、各々が果たそうとしている役目はできたできない、そしてできたか、させてもらったかどうかという細かい違いはあれど、概ね努力目標は達成しているように見えた。

フォース「リビルドガールズ」において、愛香とコメットコアガンダムが背負っている役割は純粋なアタッカーで、他のゲームでいうならAGIとSTR、素早さと力に振った遊撃型DPSという構成が妥当なのだろう。

コメットコアガンダムは、靴を履かせているとはいえ他のガンプラより遥かに小柄だ。

だからこそ愛香は、その体躯を活かして敵の懐に飛び込んで、意識の隙間をつくような太刀筋を刻めるように考えて立ち回ってきたつもりだった。

それでも。

「……ねえ、あたし……君の使い手として、本当に上手くやれてるのかな……？」

あと一歩及ばずに負けた試合があった。勝ったけれど、それは他の三人の力によって成し遂げられて、愛香自身はアタッカーとして警戒されたことで立ち回りを封じられて、撃破されてしまった試合があった。

だけど、それは確実にコメットコアガンダムの、ひいてはそのルーツとなる「コアガンダム」の特性である、「他の機体よりも小さい分、パワーの総量ではどうしても劣る」という特性ゆえに負けたり活躍できなかつたりした試合ではないと、愛香は考えているのだ。

小さいから弱い。プラネッツシステムという特性を活かすための前座。

コアガンダムは決して、そのような存在ではないとキャプテン・ジオンは自身の紹介動画の中で力説していたし、今なら彼がやったよう

にコアジムを作ったり、スーパーコアガンダムのようなてんこ盛りカスタマイズにも挑戦できるだけのスキルを、愛香は身につけているかもしれない。

だが。

「……可愛くて、それで勝ちたい。そして……君を負けさせちゃったのは、きっとあたしに何か足りないんだよ」

アイカは机の上で足を投げ出し、寛いでいるような姿勢でダイバーギアに乗っていたコメットコアガンダムを一瞥して静かに呟く。

キャプテン・ジオンの言葉を、そして、自身の抱いている期待と可能性を信じるのなら。

「……あたしに、何が足りてないんだろう」

愛香はその逃れえない課題を口にしながらも、そこから目を背けるように目蓋を閉じて、眠りの淵に落ちていく。

エリイのために。絵理のために。戦うためにGBNに来たわけじゃないけれど。

——あたしは、あたしが可愛いと思った君のことだって、絵理とおんなじくらい大好きなんだよ。

自分の中に芽生えた、「ビルドダイバー」としての飽くなき欲求を持って余しながら、愛香はその意識を、暗闇の中に手放すのだった。

第三十三話「チイの迷宮遠征録」ご注文は14ですか？」

電腦迷宮「アキバ・ラビリンス」。

それは往年の電気街をモチーフとしながらも、入り口である第一層を抜ければ次第にその街並みは崩れてゆき、第三層ともなればポストアポカリプスが訪れたこの国の姿を思い描いたのではないかと錯覚するほど退廃的なものに景色は変わっていく。

さるダイバーがあるディメンションの実に八割という面積を買収し、そこに打ち立てたフォースネストを実に二年という歳月で巨大な電腦迷宮として仕立て上げたこの「アキバ・ラビリンス」はそのダイバーが自らの引退を彩る花道として作り上げたものであり、難解な迷宮をクリアされたその時こそ残り全ての財産を譲渡し、自身はリアルに戻っていくという覚悟の表れだった。

しかし、事情は知らんが金が欲しい、金はいらんが名誉が欲しい、そこにダンジョンがあるから潜りたい——それぞれに考えを持ってこの迷宮に挑んだダイバーたちは、入り口に等しい第一層から迷宮の主たる者の想いが伊達ではないということを感じ知らされる。

特殊なミラーージュ・コロイドによる絶え間ない風景の欺瞞。

それが、実に3000億BCという黄金の輝きに目を眩ませて、この迷宮へと足を踏み入れた者を出迎える最初の洗礼だった。

さつき通ったはずの道に戻ってきて、違うルートを選んだのにまた同じ場所に戻される。

なんとなく散策目的で歩行者天国を歩いていたら、それが遙か昔の風景にいつの間にか変わっていた。

リアルにおけるアキハバラの地理をよく知っているからこそ踏破は容易だと踏んでいたら、地理的に絶対接続されるはずのない地点が接続されるという不可思議な状況に遭遇する。

こうした、シンプルながらも凶悪なトラップは盗掘者たちのマッピング作業を遅延させるのに極めて効果的に作用した。

だが、得てして不可能を可能にし、見えないデータを白日の元に曝け出すのが検証班と呼ばれる熱心なプレイヤーだ。

チイはWikiにアップロードされた第一層のマップを元に迷うことなく白昼の霧とでも呼ぶべき入り口を突破して、第二層へと突入していた。

「この辺はズルだろうがなんだろうが後発組の強みだよねい」

先駆者に与えられる、初見で難解なギミックを読み解く名誉などチイは必要としていない。

チイはただ、報酬が欲しいだけだ。ダイバーポイントもダイバーランクも関係ない。増えて嬉しいのは持っているビルドコイン、減って悲しいのもまた持っているビルドコインなのだから。

そんな銭ゲバだからこそ、チイは誇りや栄誉など犬にでも食わせた上で先駆者たちが血反吐を吐いて攻略した情報を頼りにして、今最前線組がこぞって足を止められているボトルネットワーク——第六層を目指しているのだ。

誰が呼んだか、この「アキバ・ラビリンス」は迷宮ならぬ天廊、いや、電廊である。

入る度に景色が違い、なんなら入っていても目まぐるしく景色を変え、この迷宮は、確かになるほど不思議なダンジョンであり、かつて一世を風靡したオンラインゲームにも存在したコンテンツとよく似ていた。

それは恐らく、作成主が初心者でも挑戦できるように、とした配慮なのだろう。

千変万化の景色という霧に惑わされるだけでなく、そこに凶悪なトラップが混じり始める第二層から現れるものは、単なる危険だけではない。

完了したマップピングを頭の中にインストールして、チイは第二層を一気に駆け抜けるのではなく、ジグザグに、敢えて二者択一のうち、ハズレのルートを選んでから正解のルートに復帰する、という道筋を辿って第二層を攻略している。

その理由は極めて単純かつプリミティブなものだ。

第二層からは、宝箱が迷宮の中にスポーンし始める。

ハズレの道にぼつんと置かれていたそのコンテナを開封し、中身として封入されていた3500BCを懐に収めながら、チイは儲けたもんだとほくそ笑んだ。

どうやったらこんなクソでかい迷宮を作って、しかも入る度に報酬が復活する宝箱の設置なんて、運営からすれば迷惑極まりない仕様のクリエイトミッションを通したのかはわからないが、そこはそれ、蛇の道は蛇というやつなのだろう。

恐らく引退するというこの電廊の主が運営と懇意な人間か、運営サイドの重役スタッフだという推測を立てながらも、チイは懐に収めたビルドコインが現在の数値に加算されたのを確認すると、すぐさま浮かんだ考えを破却して、トラップを回避しながら迷宮攻略へと復帰する。

「別にこれ作ったのが運営だろうがその仲良しだかお気に入りだか知らんけど、そんなのでも別にチイにや関係ねーしな」

この第二層までなら、初心者もトラップの配置とその対処さえ覚えていけば簡単にクリアできる。

金策として、宝箱を取りつくしたら自らデストラップにダイブしてミッションをリタイアし、何度も挑戦するのも悪くはないだろう。

もつとも、金が入っているかどうかは乱数の神様の機嫌次第なのだ——二層で全て開けた宝箱の中に入っていたランクの低い武装データやパーツデータという無用の長物を数えながら、割と渋い稼ぎにチイは顔をしかめる。

だが、焦ることはない。

この手の迷宮攻略ミッションは、奥へ行けば行くほど戦利品のうまあじもその難易度に比例して上昇していくのだ。

ラスボスに匹敵するような敵を倒して得られるものは、伝説の剣でなくてはならない。

嫌がらせのごとく150BCと銅の剣をそんな、苦勞して追い詰めた強いボスから渡されたらプレイヤーは何と思うのか？

シンプルにクソゲーだ。

努力は必ず報われるとは限らなくとも、費やした時間に見合った副産物があれば、人はまたいつか挑戦に向かおうという気持ちになれるが、その副産物すら見込めずに、ただ必然としてお祈りを伴う苦行じみた作業を何時間も何時間も続けられるのなら、そのプレイヤーには悟りを開いて現世から解脱できる素質がある。

第三層のテクスチャに描かれた電脳のアキハバラは、その前評判に違わず荒廃しきっていた。

ビルは崩れ、アスファルトにはヒビが入り、現実の駅周辺に伸びている高架橋は真っ二つになって、風化した電車の残骸が野ざらしになっている。

痛ましい光景だ。だが、ゲームであるなら風景と理由は必ず直結する。

ガンダムグラスランナーの背部コンテナから無線観測機を飛ばして、チイはミラーージュ・コロイドを展開しながら慎重に、慎重に、第三層から現れ始める「壁」を警戒しつつ、第二層では二者択一となっていた分かれ道が四者択一に増えた中で、宝箱がある「当たりのハズレ」であるルートを丁寧になぞっていく。

『なんだこいつ……黒い……ダブルオーライザー!? うわああああ!』

『こっちはレガンダムとF91だ! 畜生、どうなってんだ!』

同じく金に目が絡んで引退予定者の遺産をその手に取ろうとしていたお仲間の断末魔が、無線観測機を通して、グラスランナーのコックピットへと雪崩れ込んでくる。

そう、第三層から現れ始める「壁」は、徘徊ボスとも呼ぶべき強力なNPDの存在だ。

そして、四択の中から正解と宝箱以外の道を選べば即座にその徘徊敵の中からランダムで選ばれた機体との強制戦闘に突入し、退路は光の壁で封鎖される。

光の壁は通過不可能オブジェクトではなく、「機動武闘伝Gガンダム」の地球を覆うビームロープがその正体であるため、恐らくIフィールドを搭載したガンダム・グシオン辺りならば重傷を負いなが

らも無理やり逃走することは可能だろう。

だが、鈍重な機体が満身創痍でステルスもなしに歩いていればどうなるかなど、容易に想像がつく。

たった今、不幸にも徘徊敵と遭遇してしまった「お仲間」のシグナルが途絶えてしまったように、黒く染まった各種ガンダムの主役機、そのいずれかの餌食になって電海の藻屑と消えるだけだ。

「16800BC……三層から万単位の額が出るってこたあ、四層以降で足を止めてた連中の気持ちもわかるってもんだな」

忘れがちではあるが、万単位の金額というのは駆け出しのダイバーからすれば何度もミッションをクリアしなければ稼げないレベルのものだ。

拾えるものなら、シケてやがると文句こそいうもののIBCだってストレージに加算されるのは嬉しいチイだが、それはそれとして、三層という、「初心者でも頑張れば突入できる」エリアで拾える額が莫大であるというのはとりも直さず、「この先はもつとヤバい敵が出てくる」ことの証明に他ならない。

確かにストレージに金が増えるのは嬉しい。そしてこのクリエイトミッションは受注料金も必要としない以上、失敗しても持つていかれるのは機体の損傷を修理する時間と、せいぜい悔しいといったぐらいの話だ。

だが、それと警戒を怠ることは全く別の話だ。

チイが宝箱を開けた音を感じたのか、徘徊していた、黒と赤のツートンカラーに染められた「ガンダムバルバトス・ルプスレクス」がキョロキョロと周辺を警戒し、五分ほど分岐路に佇んでいたが、チイはじつと、ミラージュ・コロイドの展開限界と睨めっこをしながらそれをやり過ごす。

果たして幸運だったのは、ルプスレクスが諦めてくれたことから三十秒の猶予をもって、一度目のミラージュ・コロイド展開が終わったことだろうか。

ダクトから排熱を行いながら、展開していたガラスランナーの肩が元の形を取り戻していく。

(……こりゃあ、悠長に宝箱を漁ってる時間はねえな)

平時であればもつと粘っていたのだろうが、あくまでも今回の目標は第六層の偵察だし、何より。

「いくら死んでも損がないからって、無駄に死ぬのはナンセンスなんだよな……つと」

無線観測機の一機が撃ち落とされたのを確認すると、チイは躊躇いなくレーダーで徘徊敵との距離を確認しながら、一目散に第三層の出口を目指して機体を走らせる。

そうだ。犬死というのは、そこに一文も得がない。

あくまでもチイが価値判断の基準としているのは、儲かるか儲からないかというシンプルなものだ。

だからこそ無謀な挑戦は受けないし、挑まない。

勝算があつてかつ負けても損をしないチャレンジ以外はしなないに越したことがない。

まごついている他の盗掘者——恐らく、幸運にも第三層までは辿り着くことのできたであろう初心者を尻目に、チイは出口へと向かうために、それとなく困惑した様子のパイルライダーへと呼びかける。

「出口探してんならこつちだぜ、あとついでに、多分にはーちゃんが逃げてきた敵だけど、出口探してるチイを追っかけてきてるからどうすつかはにはーちゃんが決めな！」

『ええっ!? 急にそんな……ってマジだ、クソツッ! 黒いクアンタとかカッコいいけど敵に回すのは絶対嫌だ!』

どうするかは初心者であるペイルライダーの主……ダイバーネーム「ローエ」に任せるとして、とりあえず警告だけは残すような形でチイは出口へと疾駆する。

これで彼が着いてきたとしてもよし、徘徊敵とのエンカウントを嫌って逃げてくれることで、「より近くの目標を優先して叩く」という第三層独特の救済措置である思考ルーチンに引っかかってチイにとっての時間稼ぎ役になってくれてもよしと、WIN—WINの関係だ。

にやりと唇をニヒルに、三日月の形へと歪めたチイは、果たして狙

い通りにゴールへ向かうのではなくエンカウントを嫌って逃亡したことで相対距離が「近く」なったことでローエが徘徊敵に目をつけられたことを、リーダー上に蠢く赤い点の動きで把握すると、迷いなく第三層を突破した。

「一緒に逃げてたら助かったのにね……つと、まあ別にチイは悪くねーからいいや」

ローエという初心者に対して同情するところもあるが、判断を下したのはあくまでも彼だし、チイは包み隠さずに出口の存在とそこに向かって伝えていることを伝えたのだ。

そして、一緒に来るというならそれを拒むつもりだって毛頭なかった。

今までのアキハバラを再現した景色と打って変わってメカニカルな、例えるなら格納庫がどこまでも続いているような第四層に、チイは足を踏み入れる。

恐らくこの迷宮は、第六層までの現段階の情報を総合して考えるのなら、基本的には三層構成で出来たそれをつなぎ合わせているのだろう。

第四層の攻略所感として、掲示板のダイバーたちが「三層より楽」「相変わらずハズレルート多くてクソギミック満載だけど徘徊敵も迷ってる分死ぬ確率は低い」という言葉を残している辺り、第四層は第五層への登竜門でありチュートリアル、つまりとところ第一層と同じ役割を持っているのだと、チイはそう判断を下した。

そして、その予感はずし良かった。

先駆者によるマップピングがなければ、どこを歩いても代わり映えのない、無機質な壁にぼんやりと薄緑色の照明が浮かんでいる以外は明かりすらもない、迷宮のストロングスタイルとでもいうべきシンプルな構成は、それ故にチイをも惑わせていただろう。

一応、検証班の調査によればこの層も「ハズレ」のルートとなる迷路の四隅には宝箱が配置されていて、Cランク相当の装備やパーツデータ、3万から5万ちよつとのビルドコインがその中身として封入されている旨が記されていたが、回収している余裕はない。

ランダムエンカウントする敵は大型化したダナジンで、両手にハルバードと大楯を持っているその機体に設定された思考ルーチンはBランク上位からAランクぐらいのものでこそあるものの、パワーはSランク、そしてなによりも「出口近くにいる敵から攻撃する」性質を備えているという厄介な仕様だ。

——しかし。

「腐ってもまだ序盤、ってことなんだよな」

迷路に引つかかって遭遇することは少ないと記されていたそれと、屑運を引き当てたことによりエンカウントしてしまったチイだったが、即座にダミーバルーンを展開すると、竜人の騎士とでも呼ぶべき出で立ちをしたダナジンはチイではなく、ダミーバルーンを狙ってその槍斧を振り回し始める。

要するに、まだまだ仕様の裏をかく攻略法は使えるということだ。

ダミーの中に仕込まれていた爆弾でダメージを負ったダナジンを尻目に悠々と、そして最速で第四層を突破したチイは第五層への扉に手をかけ、一気に滑り込んだ。

「さて……いつが『帰らずの霧』か」

電廊第五層、その景色は果てが見えないどころか、三メートル先の視界すら確保できないほどに濃い霧に覆われて、無機質な壁から放たれている緑色の光が霧へと怪しく溶け込んでいるというものであった。

視界が最悪、そしてランダム徘徊敵がいる中で四層よりも複雑化した迷路を潜り抜ける、というのであれば「まだ救いがあった」。

この第五層が「帰らずの霧」なる渾名を頂戴していて、長い間検証班の連中からもここがボトルネックだと勘違いされていたこの層が持つ役割は極めて単純だ。

覚えゲー。第四層が「全て」のチュートリアルだと勘違いしたダイバーほど、この霧の中に惑って、何度もスタート地点に戻された上で疲弊したところをランダムエンカウントした先程のダナジンの改造機——【ダナジンリザード】に首を刎ね飛ばされる、という末路を辿ることになる。

慎重に、有線観測機を展開して、レーダーすらも欺瞞するこの霧の中で気休め程度であろうとも周辺の視界や情報を確保しつつ、チイは「それ」が安置されている、地図上では入口から真つ直ぐ進んだところに位置しているその部屋にたどり着く。

そして、その中心で壁と異なる赤い光をぼんやりと放っている、ランプが埋め込まれたモノリスとでもいうべきそのオブジェクトを調べ上げた。

〔V W T Q T K I K V C V V 2 C P F I Q U V T C K I
K V C P F N G H V V I 2 N K T T Q V T C V ↑,
C P F …… I Q U V T C K I K V C I C K P I Q C J G
C F 〕

文字化けか何かと見間違いそうな文字列だが、書いてあることは落書きでもなんでもなくそのまま直球にこの階層の攻略手順だ。

めんどくさいのはV2とVI2の部分と矢印が示す暗号の部分だが、単純だからこそ欺瞞される情報もある。

あとは単純に攻略班がここに到達するまで、第三層で足止めを食らって、第四層のマップングにも時間がかかっていたということか。

チイはそう推察し、「一番簡単な条件」で霧の中を通過して、第五層も迷うことなく、そして今回は屑運を引き当てることもなく見事に通過してみせた。

ゴールにも何やら同じようなモノリスが配置されているが、クリアした以上調べる価値はないし、チイはその内容もWikiに事細かく書かれていたものを覚えている。それに――

厄介な仕様は、あの文字化けのようなアルファベットの羅列は「指示に従わなかった場合表記が変わり、十回表記に書かれた指示を間違えるとダナジンリザードが十機編隊で降ってくる部屋に飛ばされる」という仕様で、それがスマートにその条件を解く頭脳派の前に手当たり次第に選択肢を探す脳筋式攻略班を葬り去ってきた要因なのだろう。

とはいえこの手の暗号ネタは、タネが割ればただのおやつだ。

損耗を無線観測機一つの消耗に留めて、ほぼ理想的な形でチイは第

六層——検証班が匙を投げ、そしてあのゴール前モノリスを読み解いた人間が「確かにヒントかもしれないけどなんの気休めにもならない」と評した階層、正真正銘のボトルネックへと辿り着く。

そこにあつたのは、同じく無機質な合金の地金が丸出しになっている三つの扉だった。

こういう場合、三つのどれかが当たりで、外れた場合はリソースを消耗させる強制戦闘が待っているのがセオリーというものなのだが。

「……まさか、どれもハズレなんてクソギミック突きつけてくるたあね」

まあ、ボトルネックがボトルネックとして機能するためのギミックなのだから仕方あるまい。

クリエイトミッションスレに書かれていた第六層の内容はどれもバラバラで、曰く左の扉を開けたらまた第五層みたいな場所に飛ばされて、五層と同じやり方で進んだらクソみたいなNPDとエンカウントした、という報告があれば、右の扉を選んだら槍が降ってきたり落とし穴があるだけで通過できた、でもその先にまた三枚の扉があつて真ん中を選んだらクソみたいなNPDとエンカウントした、という報告がある。

じゃあ真ん中を選べば当たりなのかと思いきや、扉を開けた瞬間にダインスレイヴ隊が攻撃してきて死んだという報告もあれば、同じように五層と似た迷宮に飛ばされたり、なんかヤバげな、「凍りついた扉」のある部屋に飛ばされて、その部屋の前では撤退を促されたから怖くなって逃げたなど、死屍累々の報告が積み重なっていることに変わりはない。

「まーどうせどれもハズレなんだ、せつかくだからチイはこの真ん中の扉を選ばせつ、と……!?」

チイが扉を開けた瞬間、その視界に映ったものは。

——何もなかった。

文字通りの空き部屋で、コンテナがぼつんと置いてあるのと、その奥に更にもう一枚の扉がある以外は何もない、そんな部屋にチイは足を踏み入れていたのだ。

「赤外線センサ駆動、熱量感知、ミラージュ・コロイド展開後に観測機は対象物への攻撃……！」

チイは最大限に警戒した上でリキャストの完了したミラージュ・コロイドを展開して透明化し、センサー類には宝箱から何の異常も感知できなかったことを確認した上で、無線観測機の下部に備えられた、申し訳程度の対人火器である機銃をぶっ放した。

しかしその全弾がコンテナに命中しても、何かがある気配はない。「開けた時に反応するタイプか……？ まあどうせボトルネットワークだ、トラップだろうがなんだろうがここまで辿り着いたんなら損は……悔しいだけだッ！」

チイはミラージュ・コロイドによる欺瞞を解くと、覚悟と共にそのコンテナを蹴り飛ばす形で中身を開封したが、そこに納められていたものは警戒に対してはあまりにもあつさりした、言ってしまうえば拍子抜けなものであり、そしてチイが求めてやまないものだった。

「15万BC……!? ウソだろ、あの鳥どもに負けてスツた金がおつりまで持つて戻ってきてくれやがった！」

どうやら屑運の揺り戻しが来てくれたらしい。

そして、嬉々として15万BCをストレージに収めると、チイは意気揚々と部屋の奥にある扉に手をかける。

大金を手にしたことで浮かれてこそいたものの、しかしチイはどこかで疑うことを忘れていなかった。

——この階層のコンセプトは、お祈りあみだくじなのか？

確かに運任せのあみだくじをセットしてその確率を小数点以下まで弄れば、簡単にボトルネットワークを作ることとは可能だ。

なんせ文字通り運がなければ突破できないのだ。ハズレを引いたことで遭遇した「クソみたいなNPD」を倒したとしてまた運ゲーを強いられるようなクソゲーを、「このゲームを味わい尽くして満足したことで引退し、そのセレモニーとしてこんな宝探しを作った」ような人間が果たして作ることがあるだろうか？

チイの脳裏に浮かんだ疑問は、果たして出口たる扉を開いたことで現実となる。

「……あーうん、完つ全に理解した。そーゆーことね」

その先に現れたのは三択の選択肢ではなく、「凍りついた一枚の扉」のみであった。

先行報告にあった通り、システムメッセージが強制的に開かれて、ポップしたウィンドウにダイアログを表示する。

【警告：この先に進む場合はSランク以上のダイバーランクが推奨されます。もしくはAランク、Bランクのダイバーが四人以上集まっている場合も可としますが、そうでない場合は撤退を推奨します。あなたは本当にこの扉を開きますか？】

とはいえ、表示されたのは警告だけで、扉を開くかどうかの選択肢についてや撤退に関してのボタンがない以上、あれを開けるかどうか、そして撤退するかどうか、システムが決まるのではなくダイバーが決めるという形を取らせているのだろう。

やはり、このゲームを味わい尽くしたような人間はクソギミックこそ作れどクソゲーは作らない。

チイはその悪意と善意が絶妙に入り混じったメッセージログを一瞥すると、ニヒルに笑ってウィンドウを閉じて、迷うことなく凍りついた扉に手をかける。

「この先に進む場合は……なんて懇切丁寧に書いてくれたってこたあ、この『凍りついた扉』が当たりなんだろ？ だったらまあ……勝てるたあ思わなくなつてチイも今日から検証班の仲間入りだ！ やってやんよ！」

そして、ガンダムグラスランナーの指先が、凍てつきながらも力任せに「凍りついた扉」を開いたその先にあつたものとは。

強制転移と似た感覚と共に、チイはその部屋へと誘われる。

「……なにこれ？」

絶対零度。もしくはそれすら下回る、水晶の如く透き通った氷に覆われた、一周回って美しさすら感じる光景の中に、その「怪物」は静かに佇んでいた。

——ジャバウオックの怪物。

二桁の魔物がそう呼んで、二桁上位へ上がるための壁として恐れら

れているダイバーである「クオン」が駆るその、魔物すらも喰らい尽くす終末の竜がいる。

FOEさんと呼ばれ続けて恐れられる、聖騎士のようなクアンタが何度も挑み続けて、その度に、喉元まではその刃を届かせながらも爆心を貫くことができずに敗れ続けているその怪物が、GBNにはいる。

ならば、あれは、なんだ。

チイは部屋と同様に凍りついた思考で、目の前でそのウェイガン系の頭部センサーに赤く走る光を灯した、「ジャバウオックの怪物」とよく似た巨龍の如き、異形のモビルスーツなのか、モビルアーマーなのかもわからないNPDと、「ボトルネックの門番」と対峙する。

(あつ死んだわこれ)

相手は化物で、加えて立っているだけで、ガンダムグラスランナーの各部関節は凍りついてゆく絶対零度の中だ。稼働限界時間は戦闘機動で発生する熱を考えてもおおよそ三十分といったところだろう。

製作者が想定したクリア条件は、断じて運ゲーのあみだくじを突破する剛運を持つことではない。

この怪物と、門番と三十分以内に最悪の条件下で渡り合った上で倒して、先に進めと、そう言っているのだ。

——第六層は力を試す。勇氣ある者よ、第一の関門を乗り越えて先に進むが良い。さすれば求める道へと汝は近づく。

第五層のゴールに置かれているモノリスに書かれた暗号を解いて得られたメッセージが、撃墜までの数秒間にチイの脳裏を閃いて消えていく。

確かに、わかつたとしても何の気休めにもならない。

「クソゲー!!!」

強制的に魔法の数字「十四」を引かされて、ロビーに強制送還されるチイの頭の中に、確かにその言葉と恐るべき「ボトルネックの門番」の姿は刻まれ、製作者への敬意と憎悪が同時に募っていくのだった。

第三十四話 「星追いのアイカく邂逅する宿星たち」

「……ってわけでき、推奨ランクCとか書いてあんのにチイは散々な目に遭ったんだよ畜生、ありや詐欺だ詐欺！　しかもあれで第一関門とかどうなつてんだよもう！」

チイは自身が取っていた「休暇」中に挑んだ迷宮探索クリエイトミツシヨンにおける顛末を一息にぶちまけながら、不貞腐れて頬を膨らませながら注文していたアイスコーヒー——水を除けばカフェで一番値段が安い飲み物だ——を啜って、その苦みに顔をしかめる。

チイから聞かされたクリエイトミツシヨンの内容は確かに凄絶なもので、そんな危険極まりない門番が最初のボトルネックになつていふのだからCランクから受けられる、というのは確かに難易度詐欺に当たるのかもしれないと、アイカはぼんやりとレモンスカッシュを啜りながら、そんなことを考える。

「落ち着きなさいチイ、貴女らしくない……恐らくCランク推奨というのは、第一層から第三層の話で、攻略法もエネミーを避けるのではなく対峙して何度も倒れることが前提だと、貴女もわかっているのでしょうか？」

何より、戦果だけ見れば丸儲けではないですか。

珍しく不貞腐れているチイに、ロイヤルミルクティーをかき混ぜながらアキノがフォローを入れる。

「……わーつてるよ、でもいざボトルネック！　つてヤバげな扉開いたら予想の数段上行くぐらいヤバいのが出てくるのはなんつーかこう……大人気ねーだろうが」

「……それもそうでしょう、あのクリエイトミツシヨンのテストプレイヤーを見ましたが、クジヨウ・キョウヤをはじめとした錚々たる面子が並んでいるのです、恐らく作成者はGBNにハイエンドコンテンツを残したかったでしょう」

「マジで？　うわ、マジだ……つてことはあの怪物作ったのにチャンプが一枚噛んでたつて訳かよ、しかもパーテイメンバーにいるのFOEさんじゃねーか！　あの時MPKに使った天罰かよう……」

なんで最上位の奴らは人間災害みてーな奴しかいねえんだ。

恐らくGBNプレイヤーの七割ぐらいが同じことを考えているであろう捨て台詞を吐いて、チイはがくりと肩を落とす。

クリエイトミッシヨンのテストプレイヤーを確認するなり涙目になってペしよりと机に突っ伏したチイの頭を、苦笑を浮かべたアキノの掌がそつと優しく撫でる。

「あん？ 何のつもりだよアキノ、哀れんでんのか？」

「いいえ、つい……貴女も歳に違わぬところがあるのだなと、そう思っ
てしまいました」

「歳ねえ……まあいいや、それ以上チイの頭撫でたいなら友情価格で
100BCもらうかんね」

無理やり撫でまわされたのを嫌がる猫のように顔を起こしてアキノの手をやんわりと振り払うと、いつものようにチイはニヒルな笑みを口元に浮かべて、右手の親指と人差し指で輪っかを作ってみせる。

「それでこそ貴女というものです」

「けっ、アキノもいい性格になりやがって……そんでアイカはなんで
さつきから上の空なんだ？」

すっかりいつもの調子を取り戻したチイに指摘された通り、上の空になってストローで溶けることのない、オブジェクトとしてグラスの中を漂っている氷をひたすら掻き回すことに終始していたアイカの表情はまさに「無」だった。

さながら呼吸を楽しむが如く全ての考えを放棄して氷をかき回しながら、気が向いた時にレモンスカッシュを啜っているアイカは、いつそのことbotか何かかと勘違いしそうになってしまっただけに無をその全身に充満させている。

実際、そんなアイカを心配してかあわあわと控えめな身振り手振りを交えて何か現実に取り戻す話題はないかと探しているエリイがそばにいないければ、不正ログインを疑って運営に通報しかねないレベルで、今のアイカは虚無だ。

虚無虚無プリン、などというミームがあるが、ちょうどこんな顔が見その言葉にふさわしいのではないかと、正直なところかける言葉が見

当たらないアキノはロイヤルミルクティーを啜りつつ、エリイがぺたぺたとその頬を触るまで、全手動氷かき混ぜbotとなっていたアイカを見つめていた。

「……わっ、あ、エリイちゃん？ ごめん、ブーツとして……チイちゃんもごめんね」

「……なんか随分深刻みてーだけどエナドリキメすぎた反動でも来たのか？ それともガチで自殺願望でも拗らせてんの？ わりーけどチイはそっち方面の相談は乗ってやれねーから医者行った方がいいぜ」

口こそ悪いものの、チイは何か信じられないものを見たような目でアイカを見ており、その眼差しには明らかに彼女を心配する意図が含まれている。

実際それほどに今のアイカは、他の三人からは深刻な状態に見えた。

何より、大好きなアイカに長いことぼーっとしていたとはいえ構ってもらえていなかったところを気付いてもらったエリイが、「良かった」とかそういう類の台詞を口にしないで、まだ心配そうに眦に涙を浮かべながらアイカをじっと眺めているのがその証拠だろう。

チイは訝るように、そして一度現実に引き戻したアイカの視線を明後日の方向へと逃さないように、じっと見据えて離さない。

「……うーん、いや、そういうガチな案件じゃないんだけど、実はちよつと悩んでることがあって」

「ガチじゃないってーと……」

「……GBNに、関わること……ですか……？」

問い返すチイとエリイの言葉を首肯して、アイカは別に隠すこともないかと、自身がずつと悩み続けていたこと——コメントコアガンダムとそのルーツとなるコアガンダム、そのポテンシャルについての話を静かに切り出す。

「うん、あたしが使ってるコメントコアガンダム、キャプテン・ジオンのチャンネルで紹介されたガンプラだっことは知ってるよね？」
「ええ、確かにそのような放送がありましたね」

「それで、キャプテン・ジオンはコアガンダムを、プラネッツシステムという合体機構の前座に当たる形態じゃない、って言ってたんだけど……ねえ、エリイちゃん、チイちゃん、アキノさん。率直に訊かせてほしいんだけど、あたし、ちゃんとコメットコアガンダムを使えてる？ アタッカーとして『リビルドガールズ』に貢献できてる？」

ここ数日、エリイとGBNでデートしては現実に戻れば穴が空くほど自身のリプレイと、キャプテン・ジオンの制作講座を見直すという生活を送っていたアイカの状態は、チイが心配するほどではないにしろ、明らかに危ういもので、危険水域にあると行ってよかった。

どれほどリプレイを見返しても、正しい動きが何で、そしてどこまで自分の腕で、どこまでが機体の性能なのかがわからない。

というよりも、リプレイを見れば見るほどわからなくなってくるのだ。

コアガンダムは前座なんかじゃない。キャプテン・ジオンの言葉と、自分が抱いた思いを忘れないように、機体の限界か、と思ったらすぐにリプレイを止めて彼の制作講座を見返す、というルーチンを繰り返していたのだが、不安は収まることはなく、むしろどんどんその言葉を疑うようになっていった、そんな自分に対して、アイカは嫌悪を抱いていたからこそ、考えることを放棄して虚無になっていたのである。

また氷をかき混ぜる全自動botに戻りかけているアイカにエリイがぎゅつと抱きついて、大丈夫です、と耳元で囁くことを繰り返しているおかげでアイカの意識はなんとかこの仮想の海に繋ぎ止められていたが、心はどこかに行方不明になっていることに変わりはない。

——こりや思ったより重症だな。

チイも中々かける言葉が見つからず、とりあえずこの中では一番、堅物ではあるが相談とかの類では頼りになると判断したアキノへと助け舟を求めるように視線を向ける。

しかしながら彼女も彼女でどこか上の空というか、アイカを助けようとはしているのだが、他のことに意識を持っていかれているような

風情で、どうやらこつちもこつちで何かがありそうだと、チイは気分が重くなつていく。

なんだかんだでこのフォースは、アイカを中心にした縁で組み上がっている、というよりはアイカを中心に、エリイとアキノ、そして自身のGBNにおける関係を再構築したものだ。とチイは捉えている。

だからこそ、その中心であるアイカが機能不全になつてしまうと色々回らなくなるのは必然ともいえた。

チイは柄じやない役割が回ってきたことに首を傾げつつも、アイカにこのまま虚無になられていても困るため、後ろ手に隠したコンソールから様々なタブを開き、アイカとよく似た悩みを持つ人間の相談を、各種スレツドから絞り込んでいく。

(……別にチイはアイカのママでもなんでもねえ)

そこまでする義理はあるのか、と、無料でそんなことをする意味はあるのか、と、チイの中にある意識がそう問いかけてくるのを感じつつも、チイはエリイがアイカをつなぎとめてくれている内に、超高速で縮小されたログをたどり続ける。

確かにチイはアイカの母親でもなければこのフォースの相談役でもない。ネゴシエーターは引き受けているが、それは金銭絡みの時だし、アイカの精神状態がヤバイなら、なんだかんだでエリイが繋ぎ止めてくれるだろうとそれなりに、信頼もしているし、なんなら今はちよつと心ここにあらずだが、アキノだって相談役としては十分素質はある。

だが、それでもエリイは自分のことで手一杯な性格だ。それでもアキノは、どうしても自分が正しいと思つたことは正しいと思ひ込んでしまう危うさがある。

ならば、消去法で残されたのは自分しかいないだろう。

チイは自分の口が悪いことも、相談には向いてない性格で、根本的に捻くれていることも、歪んでいることも自覚している。

だがそれは生まれ持った性なのだ。

チイがそのように生まれたのなら、どう思つても、どう抗つても変えることのできない呪いのようなものだともいえる。

だが、意味はなくとも義理はある。

問いかける意識をねじ伏せるように、答えを見つけたチイは、ボーツとしたまま虚空を見つめているアイカに向けて口火を切った。

「おい、アイカ」

「……ん、ごめん、チイちゃん……今日のあたし、なんかおかしくて」「んなこと知ってらあな、知らなくても見りやわかる。チイはお前のママでも姉貴でもねえけどな、それでもお前は『リビルドガールズ』のリーダーだし、チイはそのメンバーだ。お前は立派に役割果たしてる、つてチイが今言つても、多分信じられねえだろ？」

「……っ、それは……」

「だから向き合うのは自分つてことよ、つてなわけでチイから出せる処方箋はこいつだ」

そう言つて、チイがコンソールに表示してみせたのはある公式ミッションの概要だった。

ミラーミッション。見出しにはそう書かれているその内容を斜め読みしてみれば、どうもダイバーの感情データを参照した上で、本人の考えている課題と対応したミッションが二つのウェーブに分かれて提示され、それをクリアすると今の自分の行動パターンなどをほぼ完全に参照した自分自身のAIと戦うことになる、とある。

その代わり、月に一度しか受けられないために失敗したら再挑戦は来月に持ち越されるといふその厳しい制約は、今のアイカにとっては劇薬となるかもしれない。

だが、チイはエリイにそうしたように、アキノにそうしたように、アイカにも確かな、人が信頼と呼ぶ、親愛と呼ぶ感情を寄せてその瞳をじっと見据えていた。

戦うのは自分自身。

チイからの言葉と、ミラーミッションの概要を見たアイカは、それを一息に飲み込むことのできなかつたが、きっとそれは正しいのだと、心のどこかでは理解していた。

悩みがあるとはいえエリイをおざなりにしてしまうなんて、自分らしくないし自分失格だ。だからこそそれでより自分を責めて、傷つけ

ているのが今のアイカであるのなら、必要なのは慰めではなく、その恐れを踏み倒す勇氣に他ならない。

「……ありがとう、チィちゃん。考えとくね」

「おう、三日ぐらいで元に戻つとけよ、チィはその間また上手い話を探してGBNを彷徨つてるからよ」

少し気の抜けた、アイカからの返事に苦笑しつつもチィはいつも通りに右手の指先で輪っかを作り、ニヒルな笑みを浮かべながらそう返した。

「……アイカさん……」

「エリィちゃん、ごめん……」

「……いいんです、わたしは……アイカさんが苦しんだり……アイカさんが、悲しんでることが……自分のことより、悲しいから……だから……」

エリィは立ち上がると、茫洋とした瞳を彷徨わせるアイカへとその豊満な身体を押し付けるように力を込めてぎゅっと、その心に自分の熱が届くようにと、今も小さく震える彼女を抱きしめた。

小さなものかもしれない。自分では足りないかもしれない。

それでも、届いて欲しい。

叶わなかった願いの全てが叶った仮想郷にして理想の海だけれど、言葉に代えて唇を触れ合わせることができないという事実の、なんともどかしいことだろう。

そのジレンマに涙を零しながらもエリィは笑顔を浮かべて、そっとその背中に絆創膏を貼るように、傷口に痛み止めを塗るように頬をすり寄せる。

——ああ。願いが叶ったはずなのに、そこで叶わない願いが生まれるこの世界は、なんていじわるなんだろう。

立ち上がり、ふらふらとロビーに向かつていくアイカを見送りながら、とうとう浮かべていた笑顔を崩して、エリィはそっと、静かに涙をこぼし続けるのだった。

その背中に、アキノからの慰めと、チィからの激励と、そして。

(……ありがとう、ごめんね、エリィちゃん)

今は届かない、アイカからの証明を受け取りながら。

現実と連動して時間や四季が変動するデイメンションは、仮想の海に浮かんだ世界であるGBNの中にありながらも折々の彩をその季節や時に合わせて、ダイブする者へと誇示している。

噂では、企業戦士たちが結成したフォース「タスクフォース・MN」がデイメンション・シユバルツバルトにその拠点を構えているのは夜の十時から明くる三時の間だけ活動できる都合で、いつも夜なのと事実上変わらないから、四季の変化で悲しくなることがないようにという哀愁漂う事情を抱えているかららしいが、裏を返せばそれほどまでにGBNはリアルと密接しているということだ。

午前三時となれば、アクティブが二千万人もいるのに、日本サーバーのロビーを行き交う人々は少ないし、アイカがふらふらとコマットコアガンダムに乗ってデイメンションを旅していても、機影とすれ違うことはおろか、レーダーに反応があることも少ない。

草原地帯の丘に機体を着陸させると、アイカはコマットコアガンダムに寄り添うように体育座りをして、電子の世界に浮かぶ夜空に漂う星々の数を数え始めた。

こんな時間にアイカがGBNにログインしている理由は単純だった。

眠れないのだ。

ミラーミツシヨン。月に一度しか巡ってこないチャンス。

別に失敗したって、何かがあるわけじゃない。

あの時失敗した運動会や陸上競技会の予選みたいに。吹奏楽のコンクールみたいに。ただ、一ヶ月待てばいいだけだ。

だが、そこで失敗すればまた自分は何かをとりこぼしてしまうのではないかと、エリイと結びつくことで心臓の奥底で眠りについていたはずの「愛香」が金切り声を上げて泣き叫ぶ。

だがそれは、徒競走の時ともコンクールの時とも微妙に性質が違っていた。

それを失敗することで失うと、アイカが恐れているのは、個人とし

てのアタッカーとしての才能がないと突きつけられることではなく、『リビルドガールズ』の面々に対してそのリーダーという立場についている自分」が、アタッカーとしての才能がないと突きつけられるところそが、一番怖いのだ。

そして。

「……あたしは、君のことが好きだよ。エリイちゃんとおんなじぐらい大好きだよ、だから……吹部の時みたいに、君のせいにしたくないんだ……」

コメットコアガンダムの装甲を指先でなぞるアイカの瞳から、はらはらと涙の滴がこぼれて落ちる。

仮想に作られた重力に従って地面に落ちていくそれは、夜空に瞬く星々になることはない。

さながら落ちては燃え尽きる流星のように、星が浮かんだアイカの瞳からは絶え間なく涙がこぼれ落ち続けるのだ。

機体が悪いだなんて言いたくない。でも、自分はどこかで機体のせいにしてしまうことを恐れている。

だって、実例があるから。

愛しているはずのコメットコアガンダムに、何度も過去の罪を詫びながら、それを償うかのようにアイカはせめて俯くことがないようにと歯を食いしばって顔を上げながら、夜空の星を数え続けていた。

そうすれば、眠れるのだろうか。

——でも、GBNの中で眠ってしまったらどうなるのだろうか。

強制ログアウト措置が働くのか、それとも意識が脳空間に閉じ込められてしまうのか。

その声が聞こえたのは現実逃避をするように、アイカがそんなことを考え始めた時だった。

「……コアガンダム、ですね」

「えっ……？」

いつからそこにいたのか、黒いコートに青髪、その内側には赤いメッシュが入ったそれで片目を覆い隠しているという出で立ちの少年はコメットコアガンダムとアイカを交互に見ると、ぼそりとそんな

言葉を口にする。

「確かにこの機体はコアガンダムだけど……あなたもキャプテン・ジオンの動画見たの?」

「……キャプテン・ジオン? すみません、それは知らない……でも、僕もコアガンダムです」

「僕も……?」

不思議な子だ。

深夜だから独特な子がログインしているのかと、てつきりアイカはそう思ったのだが、アイカが涙が浮かんでいる眦を擦っている間に少年の姿は解けて、眼前にはアイカのそれと細部こそ違えど、確かに「コアガンダム」の系譜である機体が姿を現していた。

「えっ……?」

『モビルドール……ELダイバーとしての、僕の姿です。なりたいたい思った』

ELダイバー。GBNの中に発生した余剰データから生まれた、電子生命体。

あまりGBNにもガンプラにも詳しくないアイカでも、ニュースで大騒ぎになっていたのでその存在はガンダムやガンプラに触れるよりも早く知っていたし、ガンダムベースの本店ではその第一号である「サラ」が特別店員としていつも来客を出迎えていることもよく知っているが、こうしてGBNの中で実例と出会うのは初めてだ。

それに、通常のELダイバーであれば、「サラ」がそうしているように、自身のアバターを模した姿である「モビルドール」という人型に極めて近いフルスクラッチビルドの身体にその魂を宿しているはずなのだが、目の前にいる少年はその赤いコアガンダムが自らのモビルドールだと宣言している。

赤いコアガンダムの姿が解けて少年のそれに変わっていく一部始終を目を見開きながら見届ける頃には、アイカの涙はすっかり引っ込んでいた。

「キャプテン・ジオンを知らないのに、コアガンダムを作る……? うん、なろうとしたの?」

「はい、キャプテン・ジオンという方は知りませんが、僕はコアガンダムと出会ったので。そして」

すつ、と静かにコメットコアガンダムを、アイカのすぐそばで途方に暮れたような顔をしている桃色の星屑を指差すと、その少年は無邪気に首を傾げて、アイカへと問いかける。

「あなたは、アイカは……上手く言えないけど、コアガンダムが好きだと、そう思いました。違いますか?」

「……っ、あたしは……」

「僕には、アイカの気持ちはわかりません。でも、アイカのコアガンダムは……そう言ってると思うんです」

まだ、そつちも上手くわからないですが。

ぶつきらぼうだが優しさの感じられる声音で少年は告げると、どことなく誇らしげに、原型機よりも柔らかな目つきとなったコメットコアガンダムに視線を合わせて、そつと微笑んだ。

「あたしのコアガンダムが……? あなたは……?」

「僕はリゼ。僕だけのコアガンダムに、そして僕だけのコアガンダムで、チャンピオンを目指しています。だから……どこかでまたきつと会うかもしれません」

——その時は、アイカも、コアガンダムも悲しくなくなってると思います。

同じ仲間を見つけたよしみとでも言いたいのか、リゼと名乗ったその少年はアイカへと不器用に、それでも優しくその言葉を残すと、現実へと解けるようにログアウトの光に包まれて消えていく。

「……彼は生まれたばかりのELダイバーでね、少し言葉が拙いのは勘弁してあげてほしい」

困惑していたアイカに追い討ちをかけるように、新たな声が耳朶を震わせる。

リゼの純朴さとは違って、人当たりの良い優しげな雰囲気漂わせるその声にアイカが振り向けば、そこにいるのは黒を基調とした制服に身を包んだ、すらりとした長身に金髪という、美青年という言葉が似つかわしい男性だった。

そして、アイカはその青年を知っていた。青年はアイカを知らずとも、この電子の海に足を踏み入れて泳ぎ出したのであれば、その顔と名前を知らずにいることの方が難しい、GBNの頂点。

今、アイカの目の前にいるその青年こそが、二千万人の頂上に君臨する、不動のチャンプたる男、クジヨウ・キヨウヤ本人に他ならなかった。

第三十五話 「瞬くは導きの星くあたしが選んだあたしへと」

「……えつと、その……あたし、何が何だかわからないんですけど……チャンピオン……?」

「混乱させてしまって済まない。僕もいつも通りGBNの見回りをしていたんだが、その途中で懐かしい機体を見かけたからつい、寄り道をしてしまったんだ」

「懐かしい、機体……?」

アイカには優しく笑いかけながらも、どこか、研ぎ澄まされた刃を思わせる厳しきの宿った瞳で、今その隣に鎮座しているコメツトコアガンダムを見上げると、チャンピオン——キョウヤは、その視線を崩すことなくアイカの瞳へと真っ直ぐに向ける。

「キャプテン・ジオンのガンプラ好きにも困ったものだが……この機体の原型になるコアガンダムは元々僕のフォースに所属していたメンバーが使っていたものでね。さて、確か君は……『リビルドガールズ』のアイカくんだったね」

「は、はい……」

有無を言わさないチャンプの厳粛な雰囲気気圧に気圧されながらも、アイカは何とかその問いを肯定する言葉を必死に絞り出す。

チャンピオンに名前を覚えてもらっている時点で最早それは、GBNのプレイヤーとしては至上の喜びに近いのだろうが、そんな喜びを覚えるよりも先に、険しく向けられるチャンピオンの資産は極めて鋭利で冷たい鋼の刃を喉元に突きつけられてるような錯覚をアイカに与えている。

「二つだけ問わせてもらいたい。君はこのガンプラを……コアガンダムを、そしてGBNを愛しているかい?」

そうでなければ今ここで、PKの汚名を被ろうともアイカを撃つことも厭わないとも言いたそうに、チャンピオン、キョウヤから突きつけられた問いかけは冷たい。

——コアガンダムを、GBNを愛しているのか。

死を予期したときのような走馬灯が、その言葉と共にアイカの脳裏に反響する。

アイカは思い出す。あの日、「ノゾミ」に憧れたことを。あの日、キャプテン・ジオンが紹介していたコアガンダムを「可愛い」と思ったことを。

そして今、その忘れえぬ日々の中で共に過ごす仲間たちと、エリイの控えめで優しい野花のような笑顔と、「絵理」の涙の奥に隠された傷痕とそこにある痛み、そして初めて触れ合わせた唇と舌尖に感じた脳髓を痺れさせる甘さを。

それは、いつだつてGBNと共にあった。いつだつてこの電腦世界であれこれとドタバタに巻き込まれながらも、アイカといつも背中合わせで、時にはその心臓に迎え入れ、ここまで導いてくれたのは。

見上げた視線の先には、俯くコメットコアガンダムの姿がある。

コメットコアガンダムは泣いているように見えたし、何かを待っているようにも見えた。言葉は聞こえずとも、錯覚かもしれないとも、アイカはそのツインアイから確かに声にならない声をその瞬間に聞いていたのだ。

「……い」

「うん？」

「はい、あたし……GBNが大好きです。エリイちゃんと出会わせてくれた、エリイちゃんやチイちゃん、アキノさんと一緒に過ごせるこの世界が、大好きです。そして……この世界にあたしを導いてくれた憧れが、そしてこの世界でいつも一緒にいてくれる、コメットコアガンダムが……コアガンダムが、エリイちゃんとおんなじぐらい大好きなんです！」

アイカの言葉に偽りはなかった。

がくがくと座り込んでいる膝を揺らし、有無を言わさないチャンピオンの圧力に涙を浮かべながらも、決して目を逸らすことなく彼を見据えて、アイカは強く、何かを宣言するようにその答えを返す。

そうだ。コアガンダムが、コメットコアガンダムが好きだからこそ

機体のせいにしたくなくて悩んでいて、皆のせいにもしたくなくて、だからあたしのせいだと自分を責め続けて、それを何とかするチャンスが来たのに、失敗が怖くて震えていて。

ぼろぼろと、再びアイカの瞳から星屑が流れ落ちるように涙が溢れてくる。

あたしは、何をやってるんだろう。

そんな言葉さえ形にならない程度に、アイカの心はパンクしそうだった。

絶え間なく自責と他責と過去と今と、全てが混濁した情報が一気に脳から脊髄を伝って、血管の中を血液よりも早く駆け抜けて心臓に詰め込まれていくような錯覚と、処理限界で溢れそうになった感情はよく慣れ親しんだ自己嫌悪を選択して、アイカは吐きそうになってしまう。

「……………うっ、ぐ……………えぐっ、うぷっ……………」

「す、すまない！ 君を責めるつもりはなかったんだ！」

口元に手を当てて顔を真っ青にしたアイカを見て、キョウヤは先ほどまでに向けていた視線が嘘のように慌ただしく駆け寄って、その背中をそっとさするのであった。

「……………君の愛はよくわかった。愛ゆえにリスペクトを持って……………この機体を選んだことも」

「……………つく、ぐすっ、えぐっ……………つぶ……………」

「僕も……………この世界を、GBNを愛している。だからこそ、それ故に去って行かなければならなかった者のことも、愛を持たずに姿形だけを真似て暴れ回る者のこともよく知っている……………この機体に、コアガンダムに乗っていた彼が今、どこにいるかは僕にもわからない。だが、どうか……………もしも会ったなら、彼に、君のコアガンダムへの愛を伝えてあげてほしいな」

「……………ううっ……………ぐすっ……………はい……………」

「……………どうやら、本当に怖がらしてしまったみたいだね、申し訳ない。だから、一つだけアドバイスを送らせてもらえないかな」

チャンピオンは、キョウヤはただの一ダイバーでしかないアイカに

も真摯に頭を下げて、その非礼を心から詫びていた。

元々彼が言った通りに、チャンピオンはアイカを怖がらせるつもりはなかった。

ただ、もしもアイカから返ってきた答えが、あの時ブレイクデカールを貼り付けたプロヴィデンスガンダムを駆っていたマスダイバーと同じものであったなら、それ相応にチャンプとしての対応をしなければいけないと気を張っていたのだ。

端的に換言するなら、チャンピオン故にあふれるGBNへの愛が先走り過ぎていたということになる。

そしてチャンピオン故にその威厳を無意識に放っていたことに気付かなかった、ということでもある。ならばそれは自分の落ち度に他ならないと、キョウヤはアイカが泣き止み、吐き気が治るまで頭を下げ続けていた。

「…………ごめんなさい、あたしなんかが、チャンピオンに…………頭まで下げさせちゃって」

「いいや、悪いのは僕の方だ。本当にすまなかつた、アイカくん…………そして、僕のことキョウヤでいい。あまり畏まられすぎると、さつきみたいについ気を張ってしまうからね」

人間災害と、吹き荒れる愛の嵐を人の形に押し込めた別な生物だとダイバーたちからは表される出鱈目な強さを持つチャンピオンだったが、それはクジヨウ・キョウヤという男が持つ「チャンピオン」としての側面だけを切り取った評価に他ならず、個人としての彼は極めて温厚で人当たりが良く、慈しみが深い男なのだ。

それはガンプラに対しても、人に対しても。

プロフィールカードを開いて、フレンド申請を飛ばすと、闇の中でもがき続けていたその手を取るようにキョウヤはそつとアイカにその手を差し伸べるのだった。

「…………いいんですか?」

「構わないよ。キョウスケ…………僕と名前が似てて紛らわしいけど、友人の宿敵みたいな相手を破ったフォースのリーダーとして、一度個人として話したいと思っていたんだ」

お世辞かもしれないと、アイカの猜疑心は笑顔と共にかけられるキョウヤからの言葉を疑ってしまいそうになるが、彼の声音に含まれる、それこそ「愛」とでもいうべきものが、過去の古傷から這い出そうとする「愛香」を押し込めて、まだ緊張で震える指先に申請の受諾と、自身からの申請を選ばせる。

「……その、なんていうか恐縮ですけど……」

「ありがとう、しかしフレンド枠はいくらあっても足りないね……君のフォースのメンバーとも、できれば話をしてみたいんだが」

「あはは……エリイちゃん、気絶しちゃうかも」

「あのリビルドウォートを駆るシャイな子か……君は本当に、エリイくんが好きなんだね」

「はい、あたしは……あの子と、そしてコアガンダムに、人生救われたみたいなのでから」

エリイがいなければ、「絵理」がいなければ、きっと自分は今まで捨ててきたものの数ばかり数えて、意味もなくなんのためにと問いかけて続けながら、生きていく方法すらわからなくなっていたかもしれない。

それは冗談でもなんでもなく。その時々で「何か」を拾って、衝動が尽きるまで続けては壁に当たっては捨ててと、歪なパッチワークを作り続けるような道を歩んできたのがアイカの人生だった。

上手く言葉にすることはできない。

それでも、エリイとの出会いは、GBNとの出会いは、コメットコアガンダムを作り上げたのは、確かにきっかけこそその衝動だったのかもかもしれないが、今までに出会って、衝動に任せ続けてきただけの何かとは一線を画するものがあるような気がするのだ。

アイカは中学三年生の冬を、自殺を試みていたあの時を思い出しながら、チャンピオンへと力強くそう答える。

もしもあの時窓の外へと落ちていくことを選んでいたら、きっとここまで這い上がることはできなかった。

普通という、どこまで行っても付き纏う「三番目」の呪いに雁字搦めにされて、自分をその「三番目」どころか世界で一番価値のない存

在へと貶めていた、いや、きつとどこかで今も貶め続けて涙を流している「愛香」に、アイカとして、そして愛香として勝たなければ、きつと先に進むことなんて、エリイに、「絵理」にだけそうさせてしまったように、自分の醜い心の傷を曝け出して、おんなじになることなんてできない。

だからこそ怖かった。だからこそ、失敗して自分には愛がないのだと、その資格がないのだと突きつけられることこそが、怖かったのだ。

アイカは拳を胸に抱き寄せて、今も血涙を流し続ける「愛香」を宥めるようにキョウウヤの言葉を、問いかけてきた愛とその答えを抱きしめる。

「……僕も、自分に惑うことがある。その時は……いや、僕は今も惑い続けていることを振り返るために、毎月ミラーミツシオンを受けることにしているんだ」

「えっ……」

「意外に思ったかい？ だけど、この世界は底知れない……確かに僕はその頂に登り詰めた者としての誇りと、それに相応しくあろうとする気持ちは持っている。それでも僕は、まだまだ挑戦者なんだ。そして頂点であることに驕りそうになった時、自分を見つめ直すのにあのミツシオンはちようどいい」

なんせ、文字通り自分との戦いだからね。

キョウウヤは惜しむこともなく自分の情けない部分も曝け出しながら、静かに苦笑した。

「そして、僕から送るアドバイスは一つだ。弱さは……決して、無理をして変えなくてもいいものだ。けれど自分がそれと向き合いたいと願って踏み出した時点で、君は既に一歩、強くなっている。それでは……またどこかで会おう、アイカくん」

僕はいつでも、この電子の海でどんな形であれ君達を待ち続けている。

その言葉だけを残すと、それ以上は無粋だとばかりにキョウウヤは立ち上がり、新たな愛機である【ガンダムTRYAGEマグナム】に搭乗し、中断していたのであろうデイメンシオンの巡回へと戻ってい

く。

「……あたしが、強く……」

その言葉がどこまで本当なのかはわからない。

キョウヤと話したことで、胸の奥につかえていたものが少しだけ軽くなつたような気はするが、それでも気を抜けば心臓に埋め込まれた過去の棺に眠る「愛香」は目を覚まして泣き喚こうとする。

だが、もしも。

もしも、その言葉を信じるのなら——踏み出した、踏み出そうとした、それだけで、少しでも自分を認めていいのなら。

アイカが見上げた視線の先に、仮想の星々は瞬かない。

しかして、仮想の海でその駆体を得た「コメットコアガンダム」のツインアイが映し出しているアイカの瞳には、今も燦然とその二連星が輝いている。

きっと、それが全ての答えだった。そう認めるように、アイカはそつと、愛機である——文字通りに愛を込め、愛と共にこの世界を旅してきたコメットコアガンダムに、これからもよろしくね、と、そう微笑みかけた。

もしも、この機体のオリジナルを駆る相手と出会った時、キョウヤに言われた通り、感謝と尊敬を伝えられるように。その時、その言葉に恥じない自分であるように。

そう願いを込めながら、アイカは静かに、今も自らの傍で導くように瞬き続ける星屑に、祈り続けるのだった。

ミラーミッションの難易度は、当たり前だがダイバー次第で変動する。

休日ということもあり、家から一人でGBNにログインしたアイカはロビーの受付を担当しているNPDにそれを受注する旨を伝えながら、Wikiで調べたその概要を頭の中でなぞっていた。

その性質上、ミラーミッションは極めて攻略班泣かせな代物だ。

なんせ、個人によって出される内容が異なる第一ウエーブと第二ウエーブについては書き記しようがないし、精々第三ウエーブの攻略

も、自分自身と遜色のない強さの相手が、というより自分そのものが相手となるのだから、精々「後の先」を取り続けられるかどうか、という曖昧なアドバイスしかできない。

勿論機体の性質上、「先の先」を取り続けることが優位につながるダイバーも存在するし、チャンピオンの、キョウヤのように全方位に渡って隙のないダイバーであるなら最早その状況に合わせた最適解を常に叩き出し続けられるかという、人力TASじみた操作が要求されるのだから無理もないといったところだ。

ミラーミッションの舞台となるステージへと、アイカの躯体が解けて意識が転送されていく僅かな感覚に身を委ねて、今もでたらめに拍動し続ける心臓を宥めながら、アイカはその両足を戦地に降り立たせる。

「よしっ、ミッション開始……っつて、なにこれ？」

アイカの眼前にあった光景は、事前の予想と遥かに乖離する衝撃的なものだった。

ミラーミッションというのだから、こう何か鏡のようなものと向き合って禅問答だとか、そういうものをさせられるのかと思いきや、目の前にあるのは鏡などではなく、バッティングセンターの片隅でよく見られるストラックアウトそのものだった。

【WAVE：1 百球入魂！】

【勝利条件：ボール百球を投げ切り、その内一球でも真ん中に当てる】
【敗北条件：ボールを百球投げ切る間にリタイアする、投げ切っても一球も真ん中に当てられない】

ダイアログに表示されるそれも、緩い条件こそ課せられているがストラックアウトそのものだ。

アイカは困惑しつつ、ご丁寧にも筐体の脇に置いてあったグローブを左手に嵌めると、それを合図に飛んできた一球目を右手に収める。元々アイカの運動神経は悪くない。

万年三位だったとはいえ、陸上の経験者で吹奏楽部でも走り込みを毎日行っていたのだから当然だ。

それを考慮してか、マウンドは約十二メートルと少し遠目になって

いるが、ストラックアウトの的そのものは大目に枠が取られ、的を囲んでいる枠も細く設定されているため、条件そのものはなんとかできるかできないか、ぐらいの難易度だ。

「……これが何になるかわからないけど……あたしに必要なだってんならやるしかない！」

エリイちゃんのために。「絵理」のために。

——そして、その隣に立つのにふさわしい「あたし」になるために。アイカは決意と共に、初心者には中々様になっている投球姿勢で、持っていた軟球を放り投げる。

『Strike!』

的には命中した。だがそれは中心を僅かに逸れた、四番のものだ。要するに失敗だった。

もしくは蜂蜜が好きな黄色い熊が打つヒットのようなもので、残念感を出さないようにしているがゲームシステム的には完全な損失という一周回って微妙な嫌がらせに感じる演出だろうか。

アイカは微妙に苦い顔をしつつも、即座に二球目を受け取って、先ほども少しだけ体軸の運び方を意識した、ゆつくりとしたフォームで玉を放る。

失敗。今度は確かに五番近くまで球は飛んで行ったが、惜しくも枠に弾かれてしまったのだ。

「まだまだ！　どんどん来いっ☆」

自分を鼓舞するように、あの日憧れをくれた、今も熱を持ち続ける感情の原点となった「ノゾミ」と同じ、右目の脇でピースサインを浮かべる決めポーズを取って、今度はグローブで軟球を受け取りながら、アイカはこの謎のミッションに困惑を抱きながらも、しかし真剣に挑みかかるのだった。

結論からいえば、アイカがど真ん中を射抜けたのはこれまた三十二球目という、自身のジnkス的には微妙な結果に終わってしまったのだが、ミッションはド真ん中ストライクを取ればそれで終わりというわけではなく、残り六十八球を投げ続けなければいけない。

現実で考えればいきなり素人が百球も球を放らされれば、肩に悪影響の一つでも及ぼしそうなものだが、幸いなことにここは脳空間だ。

脳に対する過負荷で強制ログアウト措置が取られるまではそれこそ千球だろうが一万球だろうか、投げようと思えば投げ続けられる。だが、それは投球という行為に極度の喜びを覚えているか、前世で何か大罪を犯したとかそういう理由で仕方なく強いられているか以外ではあり得ないシチュエーションだといっていいだろう。

そして、アイカも決して投球という行為に人生の喜びを見出すような人種ではなく、実際六十七球目辺りまでは半ば、ながら作業のような感覚でこなしていた。

しかし、ランナーズハイというものは、或いは天啓というものは突然に訪れる。

真ん中近くに当たればいいや、ぐらいに思っていたアイカの脳内にその「声」が閃いたのは、六十八球目を右手で受け取ったその時だった。

——あ、これから全部真ん中に当てよう。

理由はわからない。だが、どうしてかアイカの心はながら作業でこの「百球入魂」を終わらせるのではなく、残された時間の全てに全力を注ぐことを選択していた。

しかし、現実是非情なものだ。

覚悟一つで投球が変わるのであれば、スポーツ理論は必要ない。勿論脳空間と現実では厳密には「身体の動かし方」から根本的に異なるのだがそれはそれ、結果的にアイカが放った全力投球の中で真ん中を射抜いたのは十球だけ、それ以外のところに飛んでいった軌道は、気を抜いていた時と大差なかった。

しかし、そのミツシヨンを終えた時、アイカの中にあつたのは奇妙な高揚感とでも呼ぶべきものだった。

人はなぜ、約四十二キロもの道のりを走り続けるのか？

人はなぜ、天を衝くように聳え立つ険しい山々を登り続けるのか？

答えはいつもシンプルだ。そこに使命が、己の見出した「ミツシヨ

ン」があるからこそ、人はいつだって艱難辛苦に立ち向かえる。

そうしてアイカが次に挑むことになったミッションは、巨大なトランポリンに乗って、遙か高い場所に安置された、手のひらサイズの「ハロ」をその手に取るというものだった。

「ぐぬぬ……っ！」

現実と電腦空間とでは身体の動かし方が微妙に違う、と前述したが、アイカはその「ズレ」が極めて少ないタイプの人種だ。

極端な話、電腦空間でパルクールを華麗に決められる人種が、現実では階段を上るだけで息を切らしていたり、或いはその逆で、現実では己の身体一つを武器にしてエクストリームスポーツに挑む人種が、電腦空間では些細な「ズレ」に苦しんで、思うように動けないということもありえる。

細かい理屈は割愛するとしても、GBNはその「ズレ」を極めて少なくできるようにシステムを構築しているのだが、それを差し引いてもアイカは「VR適性のある」人種だった。

人生で初めて乗るトランポリンの感覚に多少の苦しみこそ覚えたものの、アイカの中での課題は即座に「身体をどう動かすか」から、「トランポリンの影響をこの身体でどう制動するか」というものに切り替わって、天高く飛び上がりながらも落下した時のことを恐れることなく、狭い一点に安置されたハロをその手にしようと四苦八苦している。

勿論それは、百球を投げ切った時点から継続しているランナーズハイがそうさせているのかもしれない。

だが、「どうしてこんなことを」という疑問は、一つ目の波を乗りこなしたその瞬間からアイカの中で霧散して、今はその「どうしてこんなことを」と思えるようなものが、己の「ミッション」に切り替わっている。

あと少しだ。さつき、指先がリングに掠ったのは確かだ。

跳躍を繰り返し、崩れた姿勢を整えながら、目減りしていく制限時間にも焦ることなくアイカは持ち前の集中力を十全に発揮して、狭いリングに座しているハロ、その一点を見据え、そこに至るまでの己の体

捌きをその脳裏に描く。

「…………よし…………！ 飛、べええええッ！」

——飛べ、あたし。

自分を鼓舞するように心中で呟いたその言葉に背中を押されたかのように、アイカの身体は思い描いた軌道と重なり合って、そして。

「っし！ 獲ったあつ！」

見事に、安置されていた「ハロ」を、残り時間三十秒というギリギリの範囲でこそあったものの、その手に納めていた。

【WAVE CLEARED!】

【NEXT WAVE:; Mirror Mirror】

そして、ダイアログにはここからが本番だと言わんばかりに、文字通り「自分との戦い」へと臨める切符をアイカが手にしたことを通知する。

ミラーミラー。鏡や鏡。

手にしたハロが霧散して、戦場へと意識が飛ばされていく短い感覚の中で、アイカは次のウェーブに名付けられた言葉を諳んじる。

——あたしは、鏡に映るあたしになれますか。いや。

「…………なるんだ」

そうして拳を小さく固め、大きな決意をその胸に刻みながら、アイカはミラーミッションの本領となる、ミラーマッチ……脱落者の実に四割がそこで敗北しているという最後の壁に、挑みかからんとするのだった。

第三十六話 「ミラー・ミラー」あたしの目線で見えるもの」

ミラー・ミラー。

それはミラーミッションにおける最大の関門であり試練であると多くのユーザーから認識されているが、その意図を読み解ける人間は意外と少ない。

自分相手の腕試し、ということ受注する人間がいるこのミラーミッションだが、開発陣は相当な気合を入れて作り上げたのだが残念なことに不人気ミッションの一つに数えられるほど、受注するダイバーの数は極めて低い水準に留まっている。

曰くまずあじ。

難解な第一ウェーブと第二ウェーブの課題を乗り越えて、第三ウェーブに辿り着くだけでも難しいのに、その第三ウェーブで待ち構えているであろうものが文字通り自分と同じ思考回路と腕前を備えた相手なのだから、必然的にミラーマッチとなる以上難易度は高いのだが、それに見合った報酬が受け取れるかどうかと問われれば、その答えは残念なことにノーなのだ。

自分だけのガンプラを使ってバトルするのが主流なGBNにおいては、同キャラ戦が発生するのは珍しくなっているが、それでもカジュアル層の間では例えば広く人気を博しているレガンダム、ストライクフリーダム、ダブルオークアンタ、キマリスヴィダール辺りの機体であればミラーマッチが起こるのはそうそう珍しくないことである。

だが、その性質上ミラーマッチを苦手とするダイバーは多い。

知っているキャラだからこそやられて嫌なことともわかっているため、どちらかが後手に回らされた時点で、どのような形であれ先を、アドバンテージを相手に取られた時点での巻き返しが中々難しいという問題もあれば、アドバンテージを取った側も取った側で一つのミスで捲られる選択肢を持っていることをよく知っているから気が抜け

ない、というゲーム的な面での話がまずその理由の一つとして挙げられる。

もう一つ付け加えるのであれば、アイカと同じような心理的ハードルだろうか。

同じキャラを使っている敗北するのは、実際には色々な要因があったとしても勝ち負けが発生した時、負けた側に「腕負け」という印象を強く植え付けるために、自分の腕が足りないことと自分そのもののレゾンデートルは関係ないものの、そこを切り離すことができず苦悩するダイバーは多い。

いわゆる「わからされた」というやつだ。

だからこそ、そういう事態に陥ることを嫌ってミラーミッションを受けないというダイバーをアイカは責めることはできないし、それは月一で受けているキャンプや「ビルドダイバーズのリク」といった一桁の神々やF O Eさんや「ユユ」といった二桁の魔物たちも同じだ。

自分と戦うというのには、それ相応の覚悟が必要になるのだから。

だが、フー・デアーズ・ウィンズ敢えて行く者が勝つ。

それは誰の言葉であるかはわからない。しかしながらどのランク帯であったとしても金言のように語り継がれるその言葉は今まで不可能だと言われていた「ロータス・チャレンジ」を突破した「ビルドダイバーズ」の勇気が、「終末を喚ぶ竜」を制限時間の半分で討伐したチャンプの華麗にして人間離れた技量が、初めてSSS級レイドボスをソロで全て削り切るといふ偉業を達成したF O Eさんの執念が、それを証明している。

臆病であることと勇気を出すことは矛盾する行いなのかもしれない。

だが、矛盾を抱えてこそ人間であるなら、弱さを持っていてもそれを否定せず、弱いままでも前に行こうと踏み出した時点で、それは小さくとも大きな、偉大な一歩であることに違いはない。

第三ウェーブのステージである、天井が開けている洞窟の最深部。

アイカは事前情報通りに出現していた自身と同じ、いわば鏡の中の自分とでもいうべき、黒と赤という影を意識した色に染まったコメツ

トコアガンダムと対峙していた。

自分であつたならまずどうするか？

それを考えるよりも先に黒いコメットコアガンダムは横つ飛びに跳躍し、牽制射撃としてコアスプレーガンの三点バーストを、反応が遅れたアイカの機体へと叩き込んでくる。

「ぐっ……い！」

確かにこの行動の癖はあたしそのものだ。

コアスプレーガンの一撃により先手を取られたことに少しばかり焦りを覚えながらも、よく慣れ親しんだ黒いコメットコアガンダムの戦闘機動からアイカは目を離さずに、次の攻撃を予測する。

コアスプレーガンの威力は、手持ち火器としては低い方に分類される。

キャプテン・ジオンの制作動画を、気が狂うほどの頻度で再生していたのだ。そこで彼が熱をこめて語っていたコアガンダム、その特性はアイカの頭の中に徹底して刻み付けられていた。

本来、銃口先端のアタッチメントに別なユニットを接続することでその火力を補強するためのコアユニットとしての性質を持つのがコアスプレーガンだが、やはりキャプテン・ジオンが評した通り、その前座ではないなら、コアスプレーガンにはコアスプレーガンとしての強みがあることに他ならない。

アイカの場合、それは機動力を活用して懐に飛び込むための布石、というのがその答えだった。

咄嗟に引き抜いたビームトーチを保持する左手首を高速回転させることで、即席のビームシールドを作り上げながらアイカは黒いコメットコアガンダムが接近戦のレンジに飛び込んでこられないように、コアスプレーガンを応射する。

自分のコピーが相手なら、やることにも予想がつく。

そして自分が今距離を詰められることを嫌って、スプレーガンによる応射と即席ビームシールドによる防御を選んだ——バックブーストを噴かして、壁との距離を詰めてしまったのであれば相手は何を選ぶか。

アイカが自問する脳裏に閃いた解答を、黒いコメットコアガンダムはノータイムで実践する。

手に持っていたコアスプレーガンを思い切りアイカに向けて投擲すると、反射的にアイカがそれを頭部バルカンで撃ち落とすことを確認するなり、ビームトーチをビームサーベルへと出力増強させた上で、敵機は爆炎の中からクロスレンジに躍り出てくる。

こういうレンジこそコアスプレーガンが生きる場所だ。

だが、壁を背負っている以上無闇に射撃での迎撃を試みるよりは、距離を取りつつ格闘をいなすことがベターな選択肢だろう。

初撃を回避するなりアイカは大きく後方に跳躍し、コアスプレーガンによる牽制射撃を加えながら、黒いコメットコアガンダムから徹底的に距離を取る。

「……クロスレンジに飛び込みたがる傾向が強い？」

あのコメットコアガンダムは、アイカの目にはクロスレンジに飛び込むことをどこか焦っているように映っていた。

確かに、コアスプレーガンの爆風を目眩しにして飛び込むのは悪くない。だが、残弾は潤沢だったはずだ。

そしてそれは奇しくも、というよりは必然的にアイカの悪い癖と一致していた。

コアスプレーガンはあくまでビルドボルグという必殺武器を叩き込むための布石。それが、無意識に作りあげていた、いわばルーティーンと化していた一種のパターンとでも呼ぶべきものだ。

試合慣れしてきたからこそ、自分の中にパターンと呼ぶべきものが確立されてきたのは決して悪いことではない。

勝ち筋を自分の中で構築することが、初級者から中級者へのステツプアップとされている以上、そういう意味ではアイカは確実に腕を上げたといつていいだろう。

だが、パターンが発生するのは、決していいことばかりではない。

中級者から上級者が初心者と戦った時に意外と苦戦するケースが発生するのは、初心者の戦い方が無軌道だから、という理由があるためだ。

つまるところ、確立されたパターンを読み合って試合をするのが中級者以降の戦いであり、その精度を詰めていくことがステツプアップの道であるのなら、今のアイカが敗北を喫したり、活躍できていないと判断した試合で搦んだ負け筋は、「自分が無意識に相手へと押し付けようとした勝ち筋を読まれて、相手の勝ち筋を叩きつけられた」ことに他ならない。

そういうことか、と、アイカは合点する。

このミラーミッション、相手が常に「自分にとっての最適解」を叩きつけてくる以上その難易度は極めて高い。

だが、そこにこそ本質はある。

アイカはコアスプレーガンの残弾を確認しつつ、焦ってビルドボルグへと手を伸ばし始めた黒いコメットコアガンダム影を縫いとめるように足元へと全弾を撃ち込みながら飛び込むと、左手に持っていたビームサーベルでの斬り上げで、敵機の右手を跳ね飛ばす。

ビルドボルグは確かに強力な武装だ。

だが、展開に僅かなタイムラグと、そして両手を必要とすることが欠点であり、アイカが撃墜されたり、今まで活躍できなかった気がしていた試合は、必ず敵はコメットコアガンダムの右腕ないし左腕を、肩ごと破壊していた。

見事に「後の先」を取ることに成功したアイカは、敵のコメットコアガンダムがビルドボルグを展開できないことに動揺して動きを止めたのを見計らい、そのコックピットに躊躇なくビームサーベルを突き立てる。

——こういう時、スプレーガン持っていればよかったのかなあ。

コアスプレーガンが真価を發揮するのは、射程的にクロスレンジだ。

もしも目眩しとして早々に投棄せず、弾数を残したまま左手に保持していたのなら、黒いコメットコアガンダムは延命に成功していたはずだし、その黒いコメットコアガンダムこそが、今まで敗北し、活躍できなかったアイカの姿に他ならなかった。

そうしてチャンプから受けた言葉の意味と、自身が抱いていた疑問

への回答がぼつりと脳裏に浮かんで、凧いだ湖面に落ちて波紋を広げる雫のようにぱたりと落ちる。

ああ、そうだ。

コメットコアガンダムは——コアガンダムは、決して前座なんかじゃない。

そして、自分はまだコメットコアガンダムを、いや、違う。コアガンダムを、その可能性を十全に扱えていない。

そうして——ダイアログに通知されたのは、ミッションをクリアする通知ではなく、第四のウエーブへと、「冬」に当たるその場所へとアイカを導くものだった。

ミラーミッションは、受けたダイバーによってその姿を変える。

第三ウエーブとして認識されている自分自身とのミラーマツチがアイカの知らなかった第四のウエーブに配置されることもあれば、今、自身がそうしているように、第四のウエーブには何か別な、ダイバーの感情データから読み取ったことで最適解として導き出された何かが配置されることもある。

地に倒れ伏しながらも、その顔は最後まで光の差す天を真つ直ぐに見据えていた黒いコメットコアガンダム。その姿もまた、アイカと、コメットコアガンダムの写し鏡に他ならない。

「……ありがとう、昨日までのあたし。ありがとう、昨日までのコメットコアガンダム」

敗北してきたからこそ、無意識に重ね続けてきた勝利に慢心していたからこそ見えてきたものがある。

そうしてそんな無様な戦いを重ねていても、決して自身の主人であるアイカを見捨てずに、膝をついても、星々の浮かぶ天を見上げることをやめなかった、星追いのガンダムはいつもアイカの傍にいてくれた。

乗機から降りて、アイカは次のウエーブへの入り口となる扉へと手をかけて、意識を実り多き黄金の「秋」から「冬」の戦場へと転送していく。

そうしてアイカが踏み込んだ戦場は、奇しくもあの——自殺未遂を

起こした冬の音楽室を再現した空間だった。

しかしそこにはあるべき楽器も何もなく、ぽつりと一つの机と椅子が置いてあって、コメットコアガンダムと同じような黒髪と赤い瞳に染まった「アイカ」のアバターがそこに腰掛けている姿がある。

「あたしは……あたしの未熟さを認められなかった、何が未熟なのかもわからないで、頑張ればなんとかなるって、いつつも思い続けてた」
独白するアイカに、机に座っているアイカは答えない。ただ静かに、あの日と同じような茫洋とした瞳で、窓の外で重苦しい曇天に染まった鉛色の空を見つめているだけだ。

「……あたしが見たくなかったのは、あたしだったんだね」

頑張っても上手くなれない自分をこれ以上見続けるのが嫌だから、陸上を捨てた。

頑張っても上手くなれない自分をまた見せつけられたから、いや、違う。自分は頑張ってるのに周りがダメダメだから自分までダメにされたんだと逆恨みをして、吹奏楽を捨てた。

アイカは、「愛香」は他人に頓着していないつもりだった。だがそれは、全頭も優しきでもなんでもなく、他人に期待したところで自分の役に立たないからと、自分の足を引っ張ってきた吹部の連中と同じだから何をしたらって無駄だと思いつけてきたからだ。

どこまでも、自分中心で、自分勝手。

アイカはそんな泣き喚いて床を叩きつけるような子供じみた自分に苦笑しながら、茫洋と鉛色の空を見つめている「アイカ」に語り続ける。

「……でもね、そんなあたしでも、初めて誰かの為に頑張りたいと思っただ。そのおかげで、あたしは……頑張っても誰かの足を引っ張っちゃう人と頑張りもしないで誰かの足を引っ張ってる人を一緒にくたに見下してて、自分がそうなることが怖くて怖くて仕方なかったんだよ」
「……」

「……それでも、あたしは……そこから、前に進みたい。未熟で、馬鹿で、行動をパターン化していることになって気付かなくて、今も心のどこかで誰かを馬鹿にしているのかもしれないけどさ」

「……」

「そんなあたしのことを、きつと心から好きだつて言ってくれて、自分が一番傷ついて、今も傷つき続けている心を曝け出してくれた女の子がいるんだ。うん……あたしが大好きな子。だからね、あたしは……」

——エリイちゃんの隣に、絵理の隣に立った時に恥ずかしくない自分になりたいんだ。もらっていたはずのものを取りこぼして、何にもないって嘆き続けてきた自分を、もうやめたいんだ。

エリイとコメットコアガンダムに背中を押されたような感覚と共に、アイカははつきりと「アイカ」の目を見据えて、そこに眠つても血の涙を流し続けている「愛香」を心臓の棺に押し込むのではなく引つ張り上げた上でその目を見て、力強く断言する。

「……汝、鏡に映る顔を見よ。道は開かれた」

無機質な機械音声でアイカの声を再現したような抑揚のなさで茫洋としていた「アイカ」はそう告げると、鏡の中を巡る春夏秋冬から、アイカの意識をロビーに向けて解き放っていく。

「ありがとう。帰ったら……ううん、ごめん。見るより先にやることあるから、そのあとね」

「汝のなしたいことをなすがよい、挑戦者……鏡を乗り越えたあなたに、祝福と賛辞を。そして迷った時はまた、この鏡をのぞきこむとい——」

黒い「アイカ」がそう告げると同時に、ミッションクリアの通知がダイアログへとポップする。

見えてきた課題はある。自分の立ち回りの癖と、そして、「コアガンダムは前座じゃない」という言葉に囚われ続けてきたことで見失ってきた、「コメットコアガンダム」の弱点。

アイカは解けてゆく意識の中で、それらを切り分けて考えを巡らせる。

一つは自分がこの世界で、一つは……やっぱり自分が、あの世界で。そして指折り数えた二つを畳んで、アイカは意識が解け切るその瞬間に、もう一つだけ指を立てる。

——でも、それより先に一つ、何より先に一つ、やらなきゃいけない

いことがある。

それこそがきつと、アイカの目線で見えたもの。

そしてきつと、一昨日、いや、それより前からきつと、やり残してきたアイカの、「愛香」の宿題に、他ならなかった。

机の上が段々汚くなっていくのに女子としては複雑な心を感じるけれど、指先に巻く絆創膏の数が増える度にやっぱりおんなじことを考えるけれど、それも含めて今の自分は、GBNを、ガンプラを楽しんでいる。

いつかのお泊まり会の時と同じように、よそ行きの中でも一番気合を入れた服を見繕って、メイクを丁寧に施して、愛香はそんな、すっかり汚くなってしまった机以外はぴっちりと整頓されたのだが、ガンプラの箱がその隅に並んでいる事実を一瞥して苦笑した。

『絵理、ごめん。今から会える?』

時刻はもう夜の九時だ。絵理にも彼女の事情があるから、断られた場合は明日に回そうと思っていたが、高鳴る思いを抑えきれずに、愛香はそんな文言をメッセージアプリに打ち込んだのだ。

まあ、返事はこないだろう。

そう思っただけの整頓でもしようかと思っていたら、『ぜひ、よろしくお願いします』と、絵理らしく肩の力が入った文面が即座にレスポンスを返してきたのだから、慌てて休日全開だった身嗜みを整えて、こうして愛香は家から出かけようとしていたわけだった。

誰の帰りも待っていない訳ではないけど、一人ぼっちの家だ。

海外で銀行員としてその辣腕を振るっているであろう父と、きつと世界で一番の神ゲーと称されるゲームを支えるアイテムやモンスター、武器や素材のグラフィックを今も必死に作り続けているのである。母の姿を脳裏に描きながら、そこに一抹の寂しさを感じつつ、愛香は部屋の鍵を閉めて、いつも通りの学校へと向かった。

母の使っている自転車は、勝手に使っていていいと言われていた。

鍵を差し込んで、長らく駐輪場で放置されていたことでほとんど空気が抜けていたけれどまだ乗れなくもないそれを全力で、それこそ汗

をかくのも厭わずに愛香は走らせていく。

夜の街が漂わせる、ネオンと、東京が不夜城たる証であるビル群によって瞬き続ける地上における灯火の星が作り出す退廃的な空気は嫌いじゃない。

だけど、それを満喫している余裕なんてどこにもない。

ペダルを漕いで、漕いで、漕いで。

愛香は一心に、学校へ向けて自転車を走らせた。

そして。

「……絵理？」

「……あ、愛香さん……えへへ、来てくれる、って……信じて、ました、から……」

「もう、絵理！」

遅れてくるかと思いきや、絵理は自分が着く頃にはもう校門にその背を預けて、あの日と同じ服装で愛香のことを待っていたのだ。

夜の街が危険なのは言わずもなだ。なのに、近くに交番があるとはいえずつと、きつと何時間も待ち続けるなんてどれだけ怖かっただろう。

相変わらず義理堅く、そしてちよつと冷や冷やするほどの勇氣に満ち溢れた大好きな親友を抱きしめながら、愛香はその思いに寄り添うように、眦に滲んだ一雫の涙を零す。

待つてくれている人がいる。そこに、きつと何を差し置いてでも大好きだといえるひとがいる。

こんなに嬉しいことがあるだろうか。

愛香は自転車を放り出して駆け出すなり、待つていてくれた絵理に抱きつくなりしばらく、その温もりを互いに確かめ合うように抱きしめ合っていた。

夏の足音が近づくと季節ではあったが、触れ合った互いの体温やしつとりと濡れた肌が不快感を覚えさせることはない。むしろこのままずっとこうして溶け合っていたいような、そんな甘美で幸せな、そしてどこか胸を刺すようなちくりとした痛みのようなものを、二人に感じさせる。

「……あ、あの……愛香、さん……」

「ん、何、絵理？」

「……その……クリア、しましたか？」

愛香さんの、ミツシヨンを。

眼帯を解いてそこにある傷痕と義眼を曝け出しながら、絵理は静かに、GBNで見せたのと同じ柔らかな微笑みを満面に浮かべて、控えめにそう問いかけてくる。

あたしのミツシヨン。

絵理から問われた言葉を噛みしめるように心の中で繰り返すと、愛香は二つ、そして今は何より優先すべき現実に残された課題の内の一つをクリアすべくして、小さく息を呑むと、真っ直ぐに絵理の瞳を見据えて言葉を紡ぎ始めた。

「……うん。あっちのミツシヨンはクリアしたけどさ、こっちのミツシヨンはクリアしてないんだ」

「……こっちの、ミツシヨン……？」

「……まずはごめんね、絵理。ブーツとしててさ、馬鹿みたいなことになって、絵理のことをおぎなりにしてた」

「……い、いえ！ そんな……だって、わたし……」

「ううん、悪いのはあたし。それとね、一つだけ……伝えたいことがあるんだ」

「……伝えたい、こと……ですか……？」

「うん。絵理……あたしね、一回自殺未遂してるんだ」

夜とはいえ、街の灯が照らす人通りがそれなりにある高校近くで眼帯を解いた絵理の勇気を見習って、愛香もそこに、胸の奥が引き裂かれるような思いを、痛みを覚えながらも、己が立てた誓いに恥じることがないように、あの鏡を覗き込んで見えてきたものを見失わないように、一語一語を噛みしめながらそう言った。

「……じ、自殺……？ 愛香さん、まさか……！」

「ううん、今は全然。でもね、あたし……中学の頃吹奏楽やっててさ。一人で死に物狂いで頑張ってたけど全国行けなくて、皆使えないって、クズだって……だからあたしもクズなんだって死のうとしたん

だ。そう思ってたから……きつと最初の頃は絵理のことを気にしないフリして見下してたんだと思う。だから、ごめんね」

自分のことを好きになれない人間が、どうして他人を好きになれるのか。

多くの作品で問いかけられ続けてきたその言葉は、「機動戦士クロスボーンガンダム」の劇中で文面こそ微妙に違えどキンケドゥ・ナウが叫んだその言葉は、奇妙な縁で過去の愛香にそのまま突き刺さっていた。

これで、絵理から嫌われても文句は言えない。そこに伴う痛みに怯えながらも、凜と背筋を伸ばして愛香は、その裁定が下るのを待つ。

「……しも……」

「うん？」

「……わたしも、最初は……愛香さんのこと、怖い、って思っていました……GBNに行くのも、だから、その……おあいこに……できませんか……?」

「絵理……」

「……だってわたし……今は、愛香さんが、大好きですから……えへへ……あ、でも、その！ もし……愛香さんがわたしのこと、今も……きらい、なら……」

「……ううん！ あたしは……今のあたしは絵理が大好き！ だから、ごめんね……それと、ありがとう……あたし、きつと……絵理がいなかったら、どっかで死んでたから……」

絵理と愛香は再び抱き合って、互いが曝け出した過去の傷と今の恐れが杞憂だったことに、悲しみと喜びが入り混じった涙を溢し続ける。

それらは等価交換じゃない。悲しみも喜びも常に人と共にあって、途切れて消えてしまった足跡だって、間違いなく辿ってきた旅路であって。

愛香と絵理は、引き寄せられるように、双子星が回り続けるかのようには涙に濡れた互いの顔を見つめると、夜が見せる醜態に吞まれたことにして、互いに何度目かの、それでも初めての時と同じ味がするキ

スを交わした。

視線で促した愛香の問いを、距離を近づけようと右足の踵がコンクリートに擦れる音で聞き取って、絵理は深く息を吸い込むと、慎重に、それでも大胆に唇を割って差し込まれた愛香の舌先が自身の輪郭をなぞるのを、そして引つ込めた自身の舌と絡み合っっていく甘美な感覚にぞくりと背筋を震わせる。

そうして、愛香も同じように押し寄せる感覚に脳髓を痺れさせながらも、灼けつくような甘さに二人は身を任せ、二つの意識が溶け合っ
て曖昧になっっていく錯覚と共に、同じことをその脳裏に描くのだ。

——ああ。

このひとを、大好きでいて。このひとを、好きになって。

本当に、心の底から幸せだったと。

絵理は、いつか自身にそのバレツタをくれた少女の言葉を、愛香はいつかどこかで放っていた、自分自身にも向けられていたその言葉を脳裏に浮かべながら、深く結んでいたベーゼを解いた時につう、と重
力に惹かれて落ちる銀の糸を熱のこもった瞳で見届ける。

——生きていれば、きつといつかいいことがあるから。

それは、その言葉は放った時こそ一時の気休めだったのかもしれない。
い。

それでも言霊というものが存在するなら、それは確かに二人の間に、愛という形で、恋という言葉で、帰ってきてくれたことに他ならない。

「ねえ絵理、今から家来る？」

「……実は……少し、期待してて……えへへ、着替え……持ってるんです……」

「あはは、そっか」

二人は一頻り笑うと、愛香は自転車の後部座席ではないのだが、後部座席みたいに扱われているそこに絵理を乗せて、しっかりと自身の腰に腕を回させながら、今度はゆっくりと、絵理を振り落とさないように、そして夜の酩酊に身を任せるように。

鏡の中から課せられた問いを乗り越えて得た幸せに包まれながら、

今は自分だけではなく、絵理の帰りをも待っている家を目指して、
ゆつくりとペダルを漕ぎ出すのだった。

第三十七話「あたしリスタート〜砂糖の返礼にとびきりのコーヒーを」

「その様子だとチイの処方箋は効いたみてーだな、何よりだ」

いつも通りロビーの壁にもたれかかって何か金銭的に旨い話はないものかと掲示板に目を光らせていたチイは、自身に向かってくる二つの足音を聞くなり顔を上げて、いつも通りニヒルにほくそ笑む。

視線の先にある愛香の姿は先日会った時は虚無かなの申し子なになって、手動氷かき混ぜbotとかしていたとは思えないほど、今のアイカは生き生きとした表情をしている。

何よりもエリイが嬉しそうに、まるで親鳥を見つけた雛鳥のような笑みを浮かべてアイカの左手に自身の腕を絡めて頬をすり寄せているのがその証拠だろう。

そこに何があつたのかを聞くほどチイは野暮ではないし、何があつたとしても基本的に興味はないのだからどうでもいい。

とりあえず適当に見繕つたクリエイトミッションや、Bランク推奨の中でも報奨金がラインより高めなミッションをメモに追加しつつ、復活を遂げたアイカたちをチイは、そしてその横で彼女が皮算用をしていたのを呆れ顔で見守っていたアキノは出迎える。

「あはは……ごめんね、心配かけちゃったけどこの通り復活したから、チイちゃん」

「……わ、わたしも……元気……いっぱい、です……えへへ……」

ねー、とでも言わんばかりに視線を合わせて二人ではにかむアイカとエリイの様子に、なるほどこりや本当になんかあつたかと先ほどまでアキノが浮かべていたのとよく似ていた呆れを表情に滲ませつつも、自身が送ったアドバイスがそれほどの外れではなかったことに、チイは静かに安堵する。

「不躰な質問ですが……アイカさん、エリイ。何かあつたのですか？

以前よりも仲が深まったように見えますが」

「バツ、アキノおまつ……」

復活を喜ぶより先に小首を傾げて自身の疑問を優先させる辺りアキノらしいが、なんというかそれは明らかに地雷だ。

見えてるし看板も立ってるしなんなら有刺鉄線に囲まれてるそれをあえて踏みに行くが如き行いだ。

チイが止めるよりも早く、アキノは質問を完遂して、いつもと変わらないどこか緊張感を漂わせる仏頂面で二人を見つめている。

そーゆーとこだぞ。

チイはつい叫びたくなったものの、そもそも自分はアイカとエリイのママでもなければアキノのそれでもないのだ、だからもうどうにでもなれと、これから起こる惨事を予想して肩を竦めつつそっぽを向く。

「何か……って特別なことは何もありませんけど」

精々、ずつとつつかえていた想いと不公平が是正されて、やっと二人で一緒のスタートラインに立てただけだ。

ミラーミッションを終えた夜に突発的に開かれたお泊まり会の出来事を指折り数えながら、アイカは逆に小首を傾げて、一体なんぞそんなことを訊くんですかと言わんばかりにアキノを見つめ返す。

実際何もないといえば何もないのだ。

エリイが、「絵理」が泊まりにきた時は食事を自分が用意して一緒にお風呂に入って一緒のベッドで眠る。ただ、眠る時と起きて朝の支度を整えたあとにキスを交わす習慣ができたぐらいだが、恵美曰く女子校じゃ珍しくもなんともないことらしいからさしたる問題でもないだろう。

アイカはそんなことを考えていたし、エリイもエリイで今の今まで色恋沙汰に縁のない人生を送ってきたものだから、それが普通なのだと、自分がアイカから、「愛香」から必要とされている事実がそれ以上に嬉しいから、自分の生活に劇的な変化があったとすれば自分の要因だけだから二人の間に変わったことはない、そう考えていた。

「ほんとに？　ほんとに何もなかったのかおめーらそれで？」

「やめなさいチイ、二人が特に変わったことがないと言ったのだから日常を過ごすうちに仲が深まったのでしよう……それはいいことで

す」

「しみじみしてつとこ悪いけど、その話題積極的に踏みに行ったアキノには言われたかねーよ!？」

「なんですか全く、ああいえばこういう、貴女の悪いところですよ」

「ぐぬぬ……クツソ、釈然としねえ……」

漫才のようなやり取りだ。夫婦というよりは親子ほどの身長差がある二人がコメディチックな会話を繰り広げているのがなんだがおかしくて、アイカとエリイは再び顔を突き合わせて笑い合う。

——いやまあ、ごめん。一個だけ嘘ついたんだけど。

アキノに理不尽な説教をくらって渋い顔をしているチイにバレないようにウインクをして、アイカはちろりと心の中で赤い舌を覗かせる。

ただ、その嘘をこの電子の海に正直にさらけ出す度胸を通り越した蛮勇か、もしくは拗れに拗れた生まれ持った性とかそういうものをアイカは持ち合わせていないし、あの夜のことについては二人の心臓に埋め込まれて、外に出ないし出さないからこそいいのだ。

そして、アイカにも増してシャイなエリイからすれば、たとえアイカに許可を出されたとしても、誰かに語るなど言語道断で、初めてではないお泊まり会で遭遇した初めての夜についてのできごとは、二人の間に交わされた秘密として墓場に持っていくつもりだった。

「でも、チイちゃんの言った通りミラーミッションって自分を見つめ直すのにちょうどいいかもねっ☆」

「……釈然としねーけどまあいいや、そんでどうよ」

「はいこれ、なんかウエーブは四つあつたけど、ちゃんと『卒業の証』ばっちりゲットしてきたよっ☆」

アイカはインベントリからミラーミッション唯一の報酬であるその証を選択して物質化すると、空いている右の掌にそれを乗せて、チイへと提示する。

「おうおめつとさん、アイカ。しかしウエーブ四つ……? うわマジだ、検証スレでは四つって書いてあんのにWikiだと三つって表記されてんじゃねーか、どんだけ人気ねーんだよあのミッション……」

「チャンピオンは毎月受けられていると聞きますが……彼は辞典の編集などには手を出していないのでしょうか？」

「さあね、とはいえそれこそ処方箋なんだ、ミッションとしちやまずあじ極まりねーミッションだからチイは受けたくねえけどな、っと」

加筆依頼をWikiに提示しながら、チイはその「卒業の証」以外報酬がないという、当たり前ではあるが一種狂ったともいえるミラーミッションの達成条件に思いを馳せる。

恐らく、ダイバーの思考データを一番読み取って活用しているのはあのミッションだろう。

ガンプラを操作するのにも思考入力と思考の補助というVRMMOお馴染みの技術は使われているが、「ダイバーの精神状態に合わせてミッションが姿を変えて提示される」というのは中々にぶっ飛んだものだ。

下手に人気が出て不平屋の目に留まる、というのも運営としてはあまり面白くないのだろう。

だからこそ受けたい人は受けてね、ぐらいの自己満足しか報酬として提示しない、というのは銭ゲバの短期的視点では納得できないが、銭を稼ぐ場であるこの世界を維持するため、という長期的視点に立てば合点がいく。

アイカが「卒業の証」をインベントリに仕舞い込んだのを確認すると、チイはぐるりと一望した視界の中で三人が戦いに備えた目をしていることを確認し、今日の稼ぎは店じまいかと、小さくため息を隠すように肩を竦めて笑ってみせる。

「……で、アイカ。ご注文は？ チイとしちやあ宝探しミッションで金稼ぎたいんだけど……今のアイカを見りやあ戦いたがってるのはわかるし、リーダーがそう言うんならチイは涙を吞んでそれに従いませあな」

アイカにはたっぷり旨い思いさせてもらってるしな、と照れ隠しのような一言を添えて、チイはウィンドウに戦い、ということを目星をつけたミッションを提示してみせる。

「ありがとつ、チイちゃん。えーつと……またヴァルガに行くのは勘

弁だけど、なんか自分の操縦技術とか振り返りながら長く戦えるミッションとかない？」

とりあえず、コメットコアガンダムの特徴を自分の指先に完全に馴染ませる。

それがアイカの掲げた短期的な目標だったし、学校の昼休みにもリプレイを見返すことで自分の「クセ」が出ている部分はメモに書き出して頭の中に入れてきた。

代償として午後の授業の中身はほとんど吹っ飛んだが、板書自体はちゃんとしてるしセーフだろうと頭の中で勝手に結論づけて、アイカはチィへと問いかける。

「長く、色んな奴と戦えるミッションねえ……ならこの耐久ミッションか、バトルロワイヤルミッションのどっちかだな」

耐久ミッション。それは読んで字の如く、制限時間いっぱいまで無限湧きする敵から拠点を守るものもあれば、逆に千体のNPDを全て倒すか自身が倒されるまではやめることができないというものの二種類に分割される。

そしてアイカの目的が操縦技術の検証とクセの修正であるなら、防衛よりは精神的に余裕を持てる攻略の方がちょうどいいだろう。

「デスアーミーを武装なしで千機倒せとか、リーオーNPDを一万機倒してその後に出てくるボスつばいの倒せとかそういうのなら耐久ミッションは色々あるけど、どうよアイカ？」

「うーん……なら、バトルロワイヤルミッションの方は？」

「ああ、そっちは簡単だよ、同時に受注してるフォースとか個人とかがランダムに一個の戦場に詰められて、最後の一人つてか最後の一人フォースになるまで戦い抜けば勝ちつてやつだけど、NPDと違って中身入ってる分ピンキリだよ」

バトルロワイヤルミッション。かつて流行ったデスゲームもの名前をそのまま戴いたそれはそのルール通り、基本的にはソロで参加した上で最後の一人になるまでランダムな相手と戦い抜くという、ハードコアデイモンション・ヴァルガのそれに近い内容のミッションだ。

だが、ヴァルガと違うのはいくつかの抜け道と、いくつかの規則的な制約が存在していることだ。

例えばヴァルガではログイン後の無敵時間が切れた直後を狙ってのスポーンキルは容認されているが、例え屑運を引き当てて敵の近くにスポーンしたり、有利な、ゲートから出てくる敵を狙撃できる地点にスポーンしたとしても、無敵時間が切れて三十秒が経過してからでないで攻撃行動は認められない。

言ってしまうえば、無敵時間に三十秒を足した準備時間がある簡易ヴァルガ、といったところだ。

そして抜け道というのは、もう一つの規則的な制約とよく似ているのだが、このミツション、参加こそソロで推奨されているものの、フォースでの参加を禁止しているわけではない。

勿論、同じフォースメンバーとも参加してしまえば戦う必要があるのだが、問題はその「戦わなければいけない」という部分に関して何の制約もないことだ。

極端な話、例えばこのGBNにおいて最も巨大かつ多数のメンバーを抱え込んでいるフォース連盟、「GHC」……「グローリー・ホーク・カンパニー」やそれに次ぐ有名な大所帯の「第七機甲師団」辺りが一個大隊単位のメンバーをバトルロワイヤルミッションに口裏を合わせた上で送り込んで、自分たちのフォース以外に所属する敵を撃滅した後最後に最後の一人になるまで自爆する、という外道極まりない戦術も、ルールには何も違反していない。

だからこそ、ソロ推奨と公式は銘打っているもののその実態は複数フォースによる乱戦、というのが、バトルロワイヤルミッションの現場だった。

「ふむ……確か、バトルロワイヤルミッションは口裏合わせが前提となった事実上の複数フォース戦でしたね、そうになると、防衛戦と攻撃戦を巧みに切り替える必要がありますが……今のアイカさんにはちよūdいいいのでは？」

どちらか一方を取るのが耐久ミッションなら、臨機応変にスイッチするのがバトルロワイヤルミッションだ。

そして、これからのフォース戦を想定するなら、より実戦に近いのは後者といつていい。

ならば予行演習としてはちょうどいいだろう、とばかりに提案したアキノの言葉を首肯して、アイカはエリイに目配せをする。

「エリイちゃんはそれでいい?」

「……わ、わたしは……アイカさんと一緒なら、なんでも、どこでも……ヴァルガでも……えへへ……」

「この野郎すっかりボケちまいやがって……まあいいや、とりあえず戦うときにはシャキツとしてくれよ、エリイ? んじゃアイカ受注よろしく」

「はいはい、いつ、エリイちゃん、行ってくるね☆」

「い、行ってらっしゃい……です、えへへ……」

相変わらず色ボケしてんなこいつら。

とはいえ戦いになればボケてる余裕はないだろうしキレたアイカと冷静になったエリイはニコイチで互いの弱点を補って戦えるのだから、別に問題はないだろう。

ただ単に、カフェで出されるクソ苦いブラックコーヒーが無性に飲みたくなるだけで。

チイは渋い顔になりつつも、インベントリを開いて所持金の端数を確認する。

「何をしているのですか、チイ?」

「あのクソ苦いコーヒーが飲みたくなったただけだよ……つと、10B C足りねえ」

「……いっぱいあるでしょうに。仕方ありません、この戦いを終えたら私の奢りで差し上げましょう」

「錢ゲバ的には喜ぶとこだけけどその台詞、なんか死亡フラグっぽくね」

いや、貰えるもんはありがたく貰うけどさ。照れ隠しをするようにチイはアイカが受注を終えたミッションをコンソールに浮かぶフォースメンバーの受けているミッション、の欄から受注して、足早に去っていくが如く、一足先に戦場へ解けて消えていく。

——マスダイバーがこのGBNからいなくなったら、一緒に旨い飯

でも食べようぜ、アキノ」

「リヒト……」

自らの言葉に、過去の残響がまだ染み付いていたことに顔をしかめつつ、アキノもまた、アイカとエリイが戦場へと赴いたのを確認して同じ場所へと解けていく。

優しい日々だった。

今でもアキノが見ることがある、白銀の夢。道半ばで途絶えて、そのまま誇りだけを身体に纏って今日の今日も彷徨い続けている己の、切り離すことのできない過去。

刹那のうちに蘇った、そんな感傷を掻き消すように、アキノの躯体は即座に解けて、意識は数秒も立たずに戦場で再構築されていくのだった。

ロワイヤルのフィールドに選ばれたのは、ごく平均的な森林地帯だった。

先が見えないほど鬱蒼と茂った森の中には「はじめの三十秒」を活かして斥候型構築——チイと同類のカスタマイズを施したガンプラを狩るダイバーが至る所にトラップを仕掛け、視界不良をいいことに、十八メートルにまで拡大されたガンプラを隠すほどに大きな木々の陰に潜んで、虎視眈々と迂闊に通過した鴨へとヘッドショットならぬコックピットへのワンショットキルを決めるための狙撃手が牙を研ぐ。

全身をビリビリと覆うような緊張感は確かになるほどハードコアデイメンション・ヴァルガで見せられた地獄をアイカに想起させる。

だが、隠れ潜むシーカーたちにとつての誤算は、アイカたちが口裏を合わせた相手に、よりにもよって燃烧属性を持つ武装を備えたアキノがいたことだろうか。

『……気は進みませんが私としても望むのは真つ向勝負！ ミネルヴァ・ブラスト！』

Iフィールドソードをボウガン型に展開したアキノのミネルヴァガンダムが「はじめの三十秒」が終わった後に選んだのはこの森を躊

踏なく焼き払うことだった。

当然、空中にいるアキノは狙撃手たちからは絶好のカモだったが、Iフィールドソードを変形させた時の副産物として展開されるフィールドと持ち前の作り込まれた装甲によりそれらを耐え切ると、コーションが鳴り響く領域まで体力を低下させながらも狙い通りに森林地帯を炎上させることに成功していた。

『嘘だろお前……うわあっ!? 誰だこんなところにトラップ置いたの、って俺か——』

『クソっ、頭ヴァルガ民かよあいつ!?』

『チンパンは収容所に帰れ!』

隠れる場所やトラップの多くを焼き払われた、恐らくデビューして大分こなれてきたのであろう、シーカー、スナイパー構築のダイバーたちは口々に文句を言いながらパッション属性のピンク髪アイドルの如く炎上する森林地帯をでたために駆け抜けては熟練のシーカーやスナイパー、そして乱戦をこそ望んでいたアイカたちのようなアタッカーに切り捨てられていく。

(必要なのはリソースの管理……!)

アイカの癖の根本的な問題は、端的に表現するのなら短期決戦を焦るあまり、持っている手持ちの札を捨ててでも決着にこだわる傾向がある、ということに尽きる。

勿論、短期決戦を狙うのが正解な試合もある。だが試合というのは得てして生き物で、短期決戦を狙ったアタッカーが全て手札を消耗し切ったのを確認した上で後の先を取るカウンターも成立する以上、あまり長く様子見をし続けるのもまた良くないが、使えるものは使うの精神を持っておくに越したことはない。

炎上した倒木から逃れて飛び出してきた、バスターライフル装備のジム・スナイパーIIへとアイカは、足止めの一点、武器を破壊する二点、そして体制を崩したところに叩き込む三点のリズムで、牽制ではなく撃破目的でコアスプレーガンによるお見舞いを叩き込んだ。

「よっし、行ける……っ!?!」

「アイカさんっ!」

だが、誰かが攻撃をしたということは、他の誰かにとってはその背後を取るチャンスとなるわけだ。

そう言わねばかりに炎上する密林と同化していたファイアーターンのモンテローロがビームジャベリンを構えてアイカに飛びかかってくるが、アイカは武器を捨てての迎撃ではなく、その大振りなモーションが行き着く先を読んだ上での回避を選択した。

反射神経が為せる一秒未満の選択。コメットコアガンダムは、バレエ・ダンスでも踊るような体勢に移行して、しかし体軸は一本の線を通すように意識した動きでモンテローロの圧力を躲しきる。

そして、攻撃を外したモンテローロの背中には、容赦なくそれを「視」ていたエリイのリビルドウォートが放つビームライフルの一撃が叩きつけられ、その機体は哀れにも爆散していった。

「ナイスエリイちゃん、そして——」

今、コメットコアガンダムは左足を軸にしつつも体勢そのものは不安定だ。だからこそ、襲撃者が狙うには絶好の機会。

事前に攻撃が「置かれる」方向を予測してアイカは機体をぐるりと回転させながらコアスプレーガンによる一矢を放った。

『嘘だろ、こいつもしかしてヴァルガ民——うわあああつ！』

果たしてアイカの読み通り、ミラージュ・コロイドを展開して、ラッサーダートを突き出すことで背後からの襲撃を試みていたブリッツガンダム——ではなく、その肩を移植した黒いエールストライクガンダムが、置き撃ちのビームにコックピットを焼かれて爆発四散する。

勿論ガードに回す余裕がなかったため、爆風と破片はアイカのコメットコアガンダムへと降り注ぐが、致命傷にはならないような位置を予測しての起き撃ちだったのだから問題ない。

とはいえそれは結果論だ。

なるべく危ないことはしないに越したことはない。エリイに背中を預けながらも、アイカは自身と、そしてエリイの背後を、エリイはアイカの背後と自身と戦場全体を俯瞰しての把握を試みる。

コンソールに飛び込んでくる断末魔は恐らくシーカーたちのもの

だろう。

チイ曰く漁夫の利天誅、混乱して乱戦に巻き込まれたところから離脱して立て直しを図る機体を、背後からさつくりといたただくのが彼女の立てた作戦であった。

そして、一際目立つ行いをしたアキノはそのヘイトを見事に買うことで、自ら乱戦の中心となることで襲い掛かる機体を狙撃手からの盾にししながら、このバトルロワイアルを生き抜いていた。

「……来ます、アイカさん」

「オツケー、右ね！」

チイがいないということ、斥候がわりに飛ばしていたフィン・ファンネルが、エリーのリーダーにそれぞれ四機だった敵機がその攻撃を受けたことで二手に分かれてアイカと自分を挟撃しようとしていることを教えてくれる。

エリーの予想は正しいなら、今回のレッスンは十字砲火への対処ということだろう。

ならば今度はこちらが動いて、「先の後からの後の先」を取る番だ。アイカは狙撃手や伏兵が潜んでいそうな地点にコアスプレーガンの残弾を撃ち込んで、クリアリングを行ってから、弾を使い切ったそれを腰のラツチにマウントして、ビルドボルグを組み立てながら戦線へと合流する。

『あの機体、「リビルドガールズ」のアイカちゃんか!?!』

『おほー、ツイてるわね、蔑んだ目で踏んでもらいたいわ』

『馬鹿野郎、出荷されたくないやとりあえず撃て！ ファンでも今のアイカちゃんは敵だ!』

——いや、あたしは最高にツイてねえんだが？

どこで噂になっているのか自身の体質がそうさせるのか、またも変なのと遭遇したアイカはげっそりとした感覚を抱きながらも、二機に分隊、その構成を確認する。

恐らくはグフ・カスタムを射撃寄りに改造した、ギラ・ドーガの盾にユニコーンのビームガトリングを隠し、その右手にはヒートサーベルの代わりにギラ・ズールのビームマシンガンを装備し、全身に「袖

付き」所属であることを示すエンブレブが裝飾されたその機体——
【グフカスタムNZC】と、その相方となるZガンダム、そのウェイブ
シューター仕様の武器をギラ・ドーガのビームマシンガンに変更し、
グフカスタムNZCと同様のエンブレブが施された【ZガンダムNZC】
は教科書通りに、弾切れと踏んだアイカのコメットコアガンダムを、
L字を描くような陣形で取り囲む。

恐らくここで今までの自分ならスプレーガンがないことに慌てて、
ビルドボルグを振り回すかとりあえず距離を取るかの二択を取って
いただろう、だが。

アイカは弾切れのスプレーガンを敢えて左手で構えて、Zガンダム
NZCのコックピットをロックオンする。

『おほーっ、素直な攻撃ね、でもさせないわよ』

アイカの狙い通り、ブラフに引つかかって足を止めてくれたZガン
ダムNZCはウェイブシューターの機種となるシールドに埋め込ん
だ、バウのメガ粒子砲でアイカへの迎撃を試みたが。

アイカはノールックで弾切れのコアスプレーガンを後方から狙い
をつけてくるグフカスタムNZCへと牽制で投擲すると大きくスラ
イディングの体制をとって拡散ビームを潜り抜け、ZガンダムNZC
にそのまま足払いをかける。

「……踏まれたいとかなんとか言ってたけど」

『あっあっ』

「あたしはそんなサービスしてないからね……？」

そうして、グフカスタムNZCからの追撃にZガンダムNZCを盾
としてそれを防ぎきると、容赦なく左手で引き抜いたビームトーチを
そのコックピットへと突き立てて爆発をグフカスタムNZCへの目
眩しとする。

『そんなー』

『ポオオオオク！ クソツ、本当に出荷されるバカがいるか！』

爆発の目眩しに動揺しつつも、恐らくは射撃偏重のカスタムを施し
たことを読んで自身へ迫ってくるであろうアイカへと牽制をかける
つもりで、グフカスタムNZCを狩るダイバー、「アオヤギ」はビーム

ガトリングで散発的な弾幕を張る。

——すごい。コアガンダムが、ちゃんとあたしについてきてくれる。違う。

「あたしが……コアガンダムと、この子と息を合わせられてる！」

小柄な体躯であることを利用して迎撃の弾幕を回避しながら、アイカはアラートを読んで狙撃が接近していることを確認すると咄嗟に身を伏せ、回避と同時にハンドスプリングの要領で前転、狙撃手の潜んでいた射線へとビームトーチを投げつける。

『うおおおっ!?!』

狙撃に気づかなかったアオヤギは、見事にガトリング・シールドの爆発によってグフカスタムNZCの左手を脱落させ、そこに意識を持っていかれてしまう。

そして、それを見逃すアイカではなかった。

身を屈めて、反射神経だけで高い位置から放たれるビームマシンガンの弾幕をすり抜けると、ビルドボルクの一閃でグフカスタムNZCの胴体を上半身と下半身に二分割してそのまま、まだ潜んでいるであろう狙撃手を警戒し、爆発しなかったグフカスタムNZCの脚に装備されている動力パイプを握って、ジャイアントスイングの要領で軸をずらしながら、狙撃の飛んできた方向へとぶん投げる。

「射線は左斜め上……奥まで逃げたか、ならあたしは距離を取る……」

『ま、待ってくれ、せめて介錯を——』

「嫌です☆ あとこの武器いいからちよつと借りてくね」

多分バトルが終わったら返ってくるよ。

上半身だけになったことで介錯を頼み込んできたアオヤギのグフカスタムNZCからその願いを却下してビームマシンガンを剥ぎ取ると、アジャストまでの数秒間、ジグザグに軸をずらして逃げ回りながら、アイカはエリイとの合流を図る。

だが、その時だった。

「んっふっふ……隙有りだぜ、アイカ」

「なっ……!?!」

ミラージュ・コロイドで姿を隠していたらしいチイのガンダムグラ

スランナーが現れて、コメットコアガンダムの横っ腹にアーミーナイフを突き立てる。

「少しは周りも見えてきて動きも良くなったけどまだまだ突っ走ろうとする癖は変わらないねい、ま、チイからの処方箋第二弾だよ、エリイと散タイチャつかれた分も込めてるからクツソ苦いだろうけど飲み込んでね」

「ぞ、そんなーっ……」

確かにバトルロワイアルミッションは味方殺しも容認される。

だが、まさか本当に憎まれ役を買ってまで暗殺者の脅威をチイが物理的に教えてくれるなんて思わなかった。

奇しくも「踏んでほしい」などと宣ったダイバーと同じ断末魔と共に、モニターにはノイズが走り、レッドアラートに黒帯での「Signal Lost」の表示がコックピットを埋め尽くす。

やってしまった。

とはいえ、アイカの心には後悔はなかった。

「二回で物にできる、なんて……あたしまた暴走してたのかな。だから……次も一緒に頑張ろうね」

——コメットコアガンダム。

愛機の名を呼びながら、アイカは愛すべき仲間から渡された処方箋を飲み込んで、嘔み締め、そのほろ苦さにそっと苦笑を浮かべたのだ。

第三十八話 「舞い降りる黒銀の剣くアイカ、その巡礼へ」

結論からいえば、バトルロワイアルミッションは今のアイカという剣を鍛えるのに打つてつかけの鎚と金床であった。

ヴァルガほどに理不尽が降りかかってくるわけではないが、「はじめの三十秒」が終わった後の緊張感は勝るとも劣らない。

そして何よりも、勝ち抜き戦という性質とフォースによる談合が合わさったことで、アタッカーだけでなくサポーター、シーカー、スナイパー、アサシンなど多様なビルドが一つの戦場に集まるのは、「尖った」構築が極めて多いヴァルガと違って、ある種健全なGBNの縮図ともいえる。

大体八回目ぐらいいまで、アイカは油断したところにチイから刺殺、爆殺、狙撃手や暗殺者、奇襲攻撃を利用した間接的なプレイヤーキルという「鬼」の指導を見せつけてくれたが、そのおかげもあって、通算四十回のチャレンジでアイカの動体視力とコメントコアガンダムという機体及び、戦場への「慣れ」は飛躍的に向上していった。

懲りずにミラージュ・コロイドを展開しての奇襲を試みる暗殺者たるブリッツガンダムの肩を装備したエールストライクを、その挙動で発生した土埃から位置を割り出すことで先行確殺しながら、アイカは狙撃手による攻撃と上空からの奇襲を警戒して即座に仕留めた機体から距離を取る。

そして、その予感ほ程なくして現実となった。

アイカがブリッツストライクとでも呼ぶべきその複合機を撃破したことを視認していたのか、ウェイブシューター形態に変形したZガンダムNZCが、シールドから拡散ビーム砲をアイカの周囲へと撃ち下ろす。

『おほーっ、また会ったわねアイカちゃん』

「……あたしは会いたくなかったけど」

『その養豚場の豚を見るような目、たまらないわね』

機体のセンスは極めて真つ当なのに性癖と言動が壊滅的な長い赤毛の女性ダイバー……ZガンダムNZCを操る、顔のアクセサリーにディスプレイ状のものを装備し、そこにしよぼーんとした感じの顔文字を浮かべている「ポーク」は奇襲が通用しないと見るや先に飛んだことを咎める、どこかから飛んできたバスターライフルの一撃を急速変形解除で回避し、ビームサーベルを振りかぶってアイカへと斬りかかる。

『今のも避けるなんて、出荷されても構わないわね』
「淡々と変なこと宣うのやめてくれませんか？」

ポークからの飛びかかり攻撃を回避した隙を狙ったと思しきシーカーが背後のレーダーに映ったのを確認すると、アイカはコアスプレーガン最後の残弾を使ってノールックでそのジム・スナイパーIを撃ち抜くと、弾切れしたスプレーガンを捨てずにブラフとして保持したまま、ZガンダムNZCとの相対距離を取る。

距離をとっている間にも漁夫の利を狙ったの長距離射撃が飛んできたかと思えばそこから射線を割り出されてエリイに撃墜された後にジャミングがかかったのかレーダーの光が点いては消えて、という、慌ただしく戦場の情勢が移行していく中で、アイカはとりあえずこのポークを全力で撃墜^{出荷}すべく、なんとか勝利の方程式を考える。

(戦場の割合でシーカーとスナイパーは意外と少ない)

確たる理屈があるわけではないが、それは通算四十回のダイブで、アイカが得た戦場の肌感覚だった。

そしてそれは、概ね間違っていない。

狙撃手は確かに乱戦から身を引いて、漁夫の利を狙うことが可能な、一見バトルロワイアルというルールにおいては最も有利に思える構成だ。

しかし、射線が割り出されたり、そもそも乱戦エリアが絶え間なく移動し続けるバトルロワイアルの性質故に、撃てば自らの姿を曝け出すのに等しいというジレンマが付き纏うため、スナイパーでこの戦いを生き残るのは、純粹な特化構成ではなく他に隠し球を持った、射撃寄り万能機とでもいべき存在か、リアルでそういうお仕事をされて

いるような凄腕しかない。

ならばシーカーとして最後の一人になるまで隠れ潜めばそれで勝つのかと言われればそれも難しい。

アキノが初手でやらかしたように、ステージジギミックの破壊も三十秒が過ぎれば公然と認められているし、何よりもステージが毎回同じ森林エリアに固定されるわけではないため、密林迷彩を施した機体で逃げ隠れしようと思ったら要塞内部が戦場でした、なんてことも往々にしてあり得るのだ。

そしてシーカーというのは、このゲームの本質であるキルポイントを稼ぐのには極めて向いていない。

このバトルロワイアルミッションでなぜ談合が発生したのか、という根本的な問題なのだが、それは一重に「ダイバーポイントの大量獲得が見込める」、俗にいうまあじなミッションであるためだ。

だからこそ談合で口裏を合わせてそれとなく協力し、敵がいなくなればさつきまで味方だったフォースメンバーと凄絶な足の引っ張り合いをするというギスギスオンラインが展開されることも珍しくはなく、むしろチイのような荒っぽい「指導」を受けても仲良くしていただける、「リビルドガールズ」のようなフォースの方が少数なのである。

まあ、「リビルドガールズ」はそもそもアイカの認識ではそんなポイントに一喜一憂するガチフォースなどではなく、放課後に集まって駄弁りながら部活をするような感覚なのだが——それは今は置いておこう。

ならばソロ専は余程な腕がない限りシーカーとしてまずあじを受け入れてでも夕飯にカツ丼を食うのか、それともヴァルガスタイルな神風アタックで収支を黒字にして死んでいくしかないのか、という疑問に対する回答が、暗殺者、アサシンスタイルだった。

シーカーのように隠れ潜み、狙撃手のように位置をバラすのではなく迷い込んできたカモを確実にキルしてポイントを稼ぎつつ生き残る。

それはソロ専の最適解として一時は確かにバトルロワイアルミッ

シヨンの環境を席卷したものの、あまりにも警戒されすぎて、ハイパージャマーやミラーージュ・コロイドで隠れる相手はむしろわかりやすい、とまで上位までいつも生き残っているダイバーは評しているほど、タネが割れてしまっているのだ。

とはいえ、アサシン構築がこのミッションにおいて未だ強力なスタイルであることは変わらない。

抜け目なくアイカとポークの両獲り天誅を狙った、ハイパージャマーを発動して切りかかってくるガンダムデスサイズヘルの攻撃を、アイカが「どこから狙ってくるか」を考えて先行入力したスライディングで回避したことで、体勢を崩して姿を現したデスサイズヘルを、ポークのシールドに埋め込まれたメガ粒子砲が収束モードで焼き払う。

『ば、バカな……リビルドガールズ、やっぱお前らチンパンの巢なんじゃ——』

「あ?」

爆散寸前のデスサイズヘルに黙れとばかりに頭部バルカンで追い討ちをかけてしれつとポークのキルポイントを搔つ攫いながら、アイカはおよそアイドルっぽいロールプレイをしている人間が浮かべてはいけないような目で、爆散するデスサイズヘルのダイバーを睨みつけた。

『おほーっ、その目よ、その目が好き』

「……ああそう、とりあえず……」

『やんやん?』

「……エリイちゃんの為とか関係なく死ねえツ!」

アイカはブラフとして用いていたスプレーガンを敢えて取り落とす真似を見せて、ZガンダムNZCが一瞬動きを止めたのを確認すると、そこに躊躇いなく飛び蹴りを放ち、組み伏せたコックピットに左手で引き抜いたビームトーチを突き立てる。

『そんなー』

「……アオヤギとかいう相方がいない以上どこ行ったかが問題、潜んでる……?」

『奴さん開幕で死んだよ、ミネルヴァブラストとかいうのに巻き込まれる事故で……改めてそんなー』

話を聞いていないアイカに妙に親切な遺言を残して、ポークの機体は爆散した。

戦場に残っている機体は残り十五機だ。

始めたときに何機いたかは数えていないが、すぐ近くにいたのでろうエリイからのデータリンクで送られてきた戦場の概況を一瞬だけ確認して頭に刻むと、アイカは上がってきた息を整えながら、まだ恐らく隠れ潜んでいるベテランの狙撃手や暗殺者を警戒する。

リビルドウォートは魔改造を施されている為わかりづらいが、元々が哨戒機としての性質を持っているキハールイーで、顔を覆うセンサーユニットは撤去されたものの、残された通信用アンテナはサイコミュの制御アンテナとしてのプラグインを埋め込みこそしたものの、その機能もまた生き残っている。

むしろ、サイコミュとGN粒子の親和性もあって、そこにエリイの観察眼が加わることでその性質をより強固にしたといってもいい。

複数の敵機に囲まれながらも、決して怯むことなく、相対距離を維持しているエリイと思しきリーダーの点を確認して安堵しつつ、アイカが思考を切り替えようとしたその時だった。

『——貰ったぞ』

「しまっ……」

その一瞬こそ、一流の暗殺者にとっては何よりも甘美な蜜。

ただ闇雲に鴨を狙って姿を現したのでは三流、キル数よりも隠れ切ることを優先し、自衛のためにキル数を稼いで初めて二流、そして一流はキルポイントをたらふく稼いだアタッカーの一瞬の隙を狙って漁夫の利を獲得してこそだ。

そう言わんばかりに、密林に溶け込んでいたNダガーN——絶妙なタイミングでミラーージュ・コロイドを起動することでアイカが数えた「十五」の中から外れることで欺瞞を成功させていた——がコールドブレードを構えて、コメントコアガンダムのコックピットへと飛びかかった、刹那。

『弱い者から狙う暗殺者か……卑怯者め、恥を知れ!』

『何っ……!?!』

『銀の誇りと翼にかけて——天誅!』

突如として高速で飛来してきたその機体は、乱入者に驚いて動きを止めてしまったNダガーNを、両手に携えた、グレイズリッターのナイトブレード鉄血のオルフェンズシリーズオプションセットに収録されているバトルブレードをグラフィットブラックで塗装した双剣を振るって、文字通り、暗殺者に対して上空からの攻撃で天から誅伐を下した。

その行動は、見る者が見れば極めてヒロイックなものに映るだろう。

だが、砂埃が晴れて視界に現れたその、シナンジュ・スタイン——ナラティブバージョンだ——に、Hiiragganダムヴレイヴとプロヴィデンスガンダムをミキシングしたその機体に対して、アイカは感謝よりも先に嫌悪のようなものを抱いていた。

「……弱い?」

別に、アイカは自分が強いなどとは思っていない。

世間的には「アリアに勝った」とされているが純粋な力のぶつけ合いという意味では完敗だったし、今もアリアとプラクティスモードで何度か剣を交えたことはあったが、その全てで敗北を喫している。

単純に気に入らないのは目の前にいる人間を初手から不躰に弱者と呼ぶその態度だ。

黒と銀を基調とした、アキノが着ているそれとよく似た軍装のような衣装をその身に纏う黒髪のダイバー……「リヒト」は、アイカが反射的に呟いていた反駁に対して何か気を悪くすることもなく、当然のように言葉を返す。

『君は弱っているだろう、疲れているからだ。だから弱者だ。そしてそういう奴から先に付け狙うアサシンやシーカーのような卑怯な存在を、俺はこの銀の誇りに——ガンダムエリクションに懸けて絶対に許さない』

——なんとというか、絶望的に言葉が足りない人だった。

弱い奴には興味がない、と自覚しているバトルジャンキーのような性格かと思いきや、意外と「弱者」の定義はしっかりとしていて、見る人間が見ればやっぱり好漢に映るのだろうとアイカは思ったが、それでも、どうしてかこの「リヒト」なるダイバーに対しての嫌悪感が拭えないのは。

『GBNには秩序と安寧が必要だ……俺はこのバトルロワイアルミッションを談合で醜く染めた奴らも許さない、アイカだったか、君はまだ、君の機体はまだ強くなれるかもしれない。だが、フォースによる談合のような不正に手を染めているなら、そして最後の一人になったのなら俺とガンダムエリクションが斬り捨てる』

そんな捨て台詞を残して、リヒトは六人ほどが固まっている、恐らくフォースの談合により生き残った連中に彼の言う「誅伐」を下すべく、猛スピードでアイカの元から飛び去っていく。

「……なんなんだろう、この人」

「……えっと、ごめんなさい、アイカさん」

「……エリイちゃん、もしかして？」

「……えっと、その……フィン・ファンネルです……っ、えいつ」

嫌な奴、と吐き捨てる程度の奴に意識を持っていかれていたのが敗因だった。

アイカはいつの間にか頭上を取り囲んでいたエリイのリビルドウォートが飛ばしたフィン・ファンネルに焼き払われて、地獄の戦場から一足先に自由にさせられる。

(ああ、エリイちゃんもすつかりたくましくなって……)

——協力してもいいけど互いに遠慮は無しな。

バトルロワイアルミッションを受けるとき、事前にチイが残していた言葉に従って、エリイはアイカを撃墜すると次の戦場へと向かっていく。

最初は味方を撃つことを遠慮して、逆にチイに暗殺されたりアキノの大技に巻き込まれたり、アイカに撃たれたりしてフラストレーションが溜まっていたのかそれとも順調にGBNに染まっていたのか、十五回ぐらい目の挑戦からはメンバーが多い内は協力するものの、少

なくなったら容赦はしない、という普段のおどおどした感じからは想像もできない苛烈さを見せるようになっていたのだ。

今やられたのは完全にアイカの失策だったが、それでもエリイが、「絵理」が、ゲームの中とはいえ立ちはだかる敵に対して「抵抗」という選択肢を、「涙を流すことなく選べるようになったのは大きな成長かもしれない。

そんな親友の成長をしみじみと噛みしめながら喜びに浸るアイカだったが、それでも、リヒトの残した言葉は奥歯に挟まったかのようには、残響を脳裏に響かせていた。

——君は、君の機体はもつと強くなれる。

四十回の挑戦を経て、アイカは確かにコメットコアガンダムの小柄な体躯と大剣を使う戦い方をものにしてきた。

だが、ビルドボルグの展開に一手間かかる性質や、そもそも上半身の装甲が薄いことで不意の被弾からビルドボルグが使えなくなった、装甲が分厚い相手にはコアスプレーガンが効かないといった事態にも遭遇している。

——ならば、あのムカつく奴の言葉が意味しているところとは。

エリイが程なくして撃墜され、ヘイトを買ったことで序盤に退場したアキノ、そしてそれに巻き込まれて気付いたら死んでいたチイと、四十回の挑戦を経ても尚、「リビルドガールズ」は最後の一人になれなかった。

それほどまでにGBNはまだ奥深い。

噂の「リビルドガールズ」などと呼ばれていても、アイカたちはようやく立ち上がって歩き始めた子供のようなものだ。

だが裏を返せば、それは無限の未来があるということでもある。そしてそれは、大いなる喜びに他ならないのだろう。

ただ、アイカにはそんな喜びが自分たちに残されていることよりも、リヒトの奥歯に挟まったような言葉が脳裏から離れてくれないことの方が気がかりで仕方なく、それを気にしてしまう自分に対して、嫌悪が拭えないのだった。

「うーん……」

購買争奪戦に巻き込まれるのを嫌って、通学路の途中にあるコンビニで購入した、食パンの白い部分だけを切り出したものにブルーベリージャムを挟んだ簡易サンドイッチのようなものを頬張りつつ、先日のバトルロワイアルミツシヨンのリプレイを見て、愛香は気怠い唸り声を上げる。

「……ど、どうしたんですか、愛香さん……？　ま、まさか……わたし、撃っちやったこと……」

「ううん、そっちは嬉しいんだけど」

「う、嬉しい、ですか……？」

「だって、絵理にとってガン普拉バトルがようやく楽しくなってきたってことだしよ？　あれって撃つのも撃たれるのも醍醐味みたいなもんだからね」

「……は、はあ……」

すっかり戦闘狂な感じの思考回路に染まっていることに気付いていない愛香と、自分がガン普拉バトルを楽しみ始めている、という言葉に困惑しつつも、絵理は確かに、今まで泣いてばかりだった自分があの戦場で涙を流すことは少なくなっただと、感慨のようなものを夕張メロンクリームパンと共に噛み締める。

なら、何をもって愛香の機嫌は斜めに傾いてしまっているのだろう。

絵理は眼帯をそっと触りながら、ぼんやりと滲んでしか見えない現実の「愛香」がどんな表情をしているのかわからないことにもどかしさを覚えながら、食べかけの夕張メロンクリームパンを机に置くと、その頬にそっと両手で触れた。

「……ん……」

「……あ、愛香さん……なんだか、困った……困ってる顔、してます……」

「うん、実際困ってるんだよね」

絵理にぺたぺたと頬を触られながらもそれを気にせず、愛香は慣れなくてもちよつとくすぐったい感じにどこか安心を覚えながら、自身の悩

みを吐露する共に溜息をつく。

「…………え、えつと…………わたしで、よければ、その…………わたし、愛香さんの…………その…………」

もじもじと頬に触れていた手を離して、瞬間湯沸かし器のごとく耳まで真っ赤になった絵理はごによごによと口ごもるが、最後の方は吐息と同化しつつも、確かに「彼女」と呟いていたように、愛香には感じられた。

——そっか、彼女か。

愛香は初心に頬を染めて、頭から湯気を噴き出している絵理のことを可愛いと思いつながらも、予想外の言葉に苦笑する。

ずっと普通だと思ってたけど、確かにもうあたしたちは親友の延長線からはもう確かにはみ出てしまっているのかもしれない。

何度も重ねているお泊まり会や、逆に絵理の家に泊まったとき、絵理のお母さんらしい金髪碧眼の女性から「絵理を末長くよろしくお願ひします」と言われたり、必要もないのに絵理の家でも入浴や寝床を共にしていたのだから、確かにもうそれは普通じゃない。

普通じゃない、といわれるとなんだか悪いことのような気がするが、愛香にとつてそれは不思議とあのリヒトに言われた「強くなれる」という嫌味に聞こえる激励よりもはるかに甘美で、むしろ、悪いことだったとしても絵理と共犯者になれることが嬉しいとさえ感じるのだ。

ならば、恋人に悩み事の一つも隠しておく必要はない。

苦笑と共に自分たちの再構築された定義を噛みしめながら、愛香はその唇から何事もなかったかのように、いつも通りに言葉を紡いでいく。

「いや、なんかバトロワミッションで会ったダイバーからお前は弱いとかもつと強くなれるみたいなこと言われたんだけど、あたしが限界なのか、それともこの子がもつと飛びたいって言ってるのかわからないんだよな」

コメットコアガンダムが梱包されたタッパーが入っている学生鞆を指差して、愛香はお手上げだとばかりに溜息とともに肩を竦めて片

目を瞑る。

「……愛香さんは、今でも……十分、強いです……」

「そうなのかな……」

「で、でも……」

「でも？」

「……わたしのリビルドウォートみたい……愛香さんのガンプラが、何かを思っているなら、そうなのかなあ……うう、その……役に立たないアドバイスで……」

——迷った時は、足元を見るといい。

いつか、シヤフリヤールから贈られた言葉が、エリイの控えめなアドバースと重なり合う。

「そっか……」

「……へ……？」

「ありがとね、絵理。なんか見えてきた気がする」

さすが頼りになる、あたしの彼女。

小さく絵理の耳元でそう囁きかけると、愛香は早速もくもくと簡易サンドイッチを牛乳で流し込みながら、再び瞬間湯沸かし器になって処理落ちしている絵理の姿に目を細めながら、脳裏に浮かんだその言葉を何度も繰り返す。

足元。どっちが足りてないとか、どっちが足りてるとか、もしもそれを知りたいのなら、やっぱりこの子に聞くしかない。

部屋の片隅に積み上がったガンプラの箱と、コメットコアガンダムの姿を脳裏に描きながら、アイカは一つの考えを立てる。

確か、アジアン・エリアに、タイガーウルフ道場と呼ばれる、フォース「虎舞龍」のフォースネストがあったはずだ。

己のガンプラ道に迷った時、多くのダイバーは彼の元を訪れて、言葉ではなく対話（物理）でぶつかり合うことでガンプラの声を聞いたという逸話が、スレッドには多く残されていた。

なら、旅をしよう。

コメットコアガンダムが、本来生まれた目的のために。それを果たすために、戦いから離れて旅をして、もう一度見つめ直そう。

噂によればアジアン・エリアのインドを模したエリアはアクセサリー屋と売れないパーツ屋、その店主である二人のSSSランクダイバーが事あるごとに些細な因縁から災害級のフリーバトルを始めるという噂があるが、そんなのはただの都市伝説だろう。

問題は、絵理の家に泊まった時、一緒に参加することを約束してた、はじめてのフェスイベントがあることだけど、それには間に合わせるとしても、自分探しの旅という都合上、絵理を巻き込むのもコメントコアガンダムが妬いてしまう気がして。

愛香はフェスまでの期日を逆算しながら考えを立てて、一つ、稲妻のようなものが脳裏に閃いた勢いに乗せて、静かに、周りには聞こえないように真っ赤になった絵理の耳元に囁きかける。

「ねえ、絵理」

「は、はい、愛香、さん……」

「あたし、GBNを回ってこようと思う。だから……フェスには間に合うと思うけど、しばらく絵理とあっちで会えなくなるからさ」

——しばらく、うちに泊まってかない？

そんな、どこか寂しさを埋め合わせるように、それを感じさせないように苦笑のオブラートに包んだ恋人からのラブコールを、絵理は二つ返事で、というよりは顔を真っ赤にしたまま何度もぶんぶんと首を縦に振ることで、承諾するのだった。

第三十九話 「可能性の心核」レイズ・ユア・ハンズ」

自分探しの旅に出るといって、自分を見つけて帰ってきたという話は聞いたことがない。

大学生の間で、特に就活を控えて自己分析やら企業研究やらとてんてこまいになって、虚無カの申し子ナと化した学生がある日思い立ったかのようにヒッチハイカーになってヒマラヤ近郊に旅立ったり、或いは変わってる人が単位を取り切ったその瞬間海外に自分を探して、東京駅で買った銘菓ひ〇子を手土産にして帰ってくる、という事態は愛香の周辺でも珍しい話ではなく、中学の頃の友人の兄はいつも旅に出ては自分ではなく〇よ子を持って帰ってくると、愚痴を聞かされたことがあった。

しかし、愛香が旅立った電子の海の巡礼は、非常に実り多きものだったといっても過言ではない。

自室のベッドで絵理がすやすやと寝静まっている夜、リビルドウォートを作る時に幾つか予備やもしもの用途で考えていたガン普拉と、いつもの一ミリプラ板、そして工具と粘土板を持って食卓に移動しながら、愛香は電子の海のピルグリムとなった二日間の旅路を振り返る。

タイガーウルフ道場。まず最初に立ち寄ったその場所で見たいものは、狼をイメージしたダイバルツクに身を包んだ道場主たる男、「タイガーウルフ」が、弟子たちを相手に修行をつけている、いつも見られるような光景ではなく、偶然にも愛香と同じ目的でか、道場での稽古のために訪れたダイバーと道場主が戦う姿だった。

——上位ランカーの奴らは災害みてえなやつしかいねーのか。

以前にチイがそう溢していた通り、タイガーウルフと来訪者の戦いは正に災害と形容するのが正しいほどに凄絶なものであった。

プラクティスモードに設定されていたため、弟子の一人に案内されて観客席に着座した愛香や、タイガーウルフの弟子たちがその余波に巻き込まれることそなかったが、あれがフリーバトルであったなら恐らく、タイガーウルフの道場はどちらが勝ったとしても完膚なきま

でに破壊し尽くされていたことだろう。

『次元霸王流……旋風・竜巻蹴り!』

『大技と見せかけてその本質は回転を活かしたラッシュへの移行も可能としていることか! 噂には聞いてるが中々やるぜ、次元霸王流!』

『今のが、次への布石だと見切ったタイガさんこそ流石です、オレも胸を借りに来て、本当に良かった!』

赤髪を逆立て、胴着に身を包んだダイバー、「ワールド」が操る、極限まで作り込まれたカミキバーニングガンダムと、タイガーウルフが操る「ガンダムジーエンアルトロン」は、愛香が間近で見ても何をしているのか、その全てを見切ることができないほどに千変万化の拳を打ち合っていた。

ある時はカミキバーニングが次元霸王流なる聞いたこともない格闘技で、果敢に攻めかかったかと思えばタイガーウルフは「柔」の動きで、その「剛」の拳を制して、流れるように反撃へと移った彼のラッシュを、動体視力を活かした回し受けやカウンターで真っ向から受け止めるワールド、という奇しくも対極的な格闘スタイルにしてトップランカーの二人が拳を交えるという光景は中々見られるものではない。

数少なく、愛香が見切ることができたのは、タイガーウルフがその剛毅な見た目に反して、戦い方は柔らかく、一枚の枯れ葉が宙に舞うような回避をしたかと思えばそれを大胆かつ精密な攻撃に繋げる、正に虎の大胆さと狼の慎重さをその身に宿したダイバーであるということと。

「……聞いたことない格闘技だけど、あれの本質は技じゃなかったなあ」

切り出したパーツに対するやすりがけという苦行を淡々と、しかし丁寧にこなしながら愛香は、ワールドが用いていたなんだか強そうな字面の格闘技が繰り出す大技の数々を思い出す。

例えば、空高く飛び上がって相手を蹴りつける「次元霸王流・聖槍蹴り」という技は一撃必殺を目的とした、後に隙を生み出す大技だと

愛香は思っていたのだが、ワールドは敢えて相手の回避を読んだ上で着地点をずらし、蹴った足を軸足にしてのラッシュコンボへの移行へと繋げてみせたのだ。

タイガーウルフの本質が「柔」であるならば、ワールドとその次元霸王流の本質は「剛」だ。

現実においても東京、具体的には葛飾区の下町辺りに道場を構える、一発一発が必殺に匹敵する型を持つその流派には、奥義と呼べるものは存在しない。

その派手な名前と動きに惑わされるが、次元霸王流の真髄とは鍛え上げた己の肉体と精神こそにあり、だからこそワールドは必殺の型を当てることを意識するのではなく、それをブラフとした上で基本的な空手に近い技術による攻撃で、タイガーウルフへのアプローチを試みていたのだ。

カミキバーニングガンダムとガンダムジーエンアルトロンの一進一退の攻防は実に一時間以上にも及び、トップランカーがトップランカーとして二千万人の天辺を維持し続けているその所以である集中力は決して、その試合中に二人とも切らすことはなかった。

だが、それでも勝負を決めた者がタイガーウルフであったのは、「敢えて行くものが勝つ」という、GBNに残された詠人知らずの格言がそうさせたのだろう。

小足からの蹴り技でタイガーウルフの体勢を崩すことに成功したワールドが放った「自分だけの奥義」である、「カミキガン普拉流・鳳凰霸王拳」は確かに膝をついたジーエンアルトロンを、そしてタイガーウルフを飲み込もうとしていた。

だが。

『決着を焦ったな、ワールド！』

『まさか！』

『タイガー！ ウルフ！ あの鳳凰を……食らい尽くしやがれえッ！』

その両手に、肩から分離した虎と狼をモチーフにしたのであろう武装——ナックルガードを携えると、狼の牙はその身を焼かれながらも

鳳凰の首へと食らいつき、炎上効果を持つ鳳凰霸王拳に肉を焼かれながらもその骨は真つ直ぐに立ち上がり、中心の当たり判定という致命の一撃となる部分を虎のその身が受け止めて、タイガーウルフは満身創痕になりながらも、確かに必殺を受け切って立っていた。

『龍虎……道！』

そして呑み込んだ炎のお返しだとばかりに、明鏡止水の境地に達して全身が黄金に光ったジーエンアルトロンは、狼と虎の拳から照射ビームにも匹敵する拳圧——その必殺技を放つと、必殺の代償としてそのエネルギーをほとんど損耗していたカミキバーニングを呑み込みまんと咆哮する。

だが、ワールドもまた猛者であることに違いはなかった。

放たれた龍虎道を真つ向から受け止めるという選択肢をしつつも、基本の型となる「三戦」の姿勢で衝撃による反動を軽減し、そしてタイガーウルフへの意趣返しとばかりに、二つの拳圧が交差する中心点を粒子を纏った掌底で弾き返すことでその必殺を無力化したのだ。

しかし——それが、タイガーウルフのトップランカーたる所以なのだろう。

ワールドへ更なる意趣返しとばかりに彼が選んだのは、「必殺技をブラフとすることであり、龍虎道を打ち終えた硬直が解けたその瞬間にタイガーウルフは機体を大きく前に進めて、そのニークラッシュャーで満身創痕のカミキバーニングを見事、打ち砕いてみせたのだ。

感動していた。

愛香がその時見た光景に対する心情を表すのであればその一語に尽きる。

「ガンプラって、あそこまで動かせるものなんだね」

作業を見守る主として、リラックスした姿勢で食卓の反対側に座しているコメットコアガンダムに、苦笑まじりに語りかけながら、拳と拳で語り合っていたタイガーウルフとワールド、その戦いであり対話の一部始終を思い返して愛香はそつと笑った。

確かに格闘特化で装飾も少ないカスタマイズが施された二機では

あったが、その関節は近年レベルの標準的なHGにおける稼働範囲に準じており、それをカスタマイズなどで拡張した結果としてあの千変万化の格闘術は実現できているのだが、元が同じならきつといつかは愛香も、コメットコアガンダムも辿り着けると、愛香はそう信じている。

そのいつかは五年後かもしれない。もしかしたら十年、それ以上先かもしれない。

その先の自分の姿は思い描かないけれど、それでも愛香はそのサービスが終わるまで、GBNを続けるつもりだったし、絵理が嫌でなければ、ずっと彼女の「彼女」として相応しい存在であるべく努力を重ねていきたいと、そう思っている。

明日にまた希望があるなら、努力だって厭わないし惜しまない。

積み重ねた蹉跎に足元を切り裂かれて、心にそれを纏いながらも少しずつ、少しずつ、愛香は前に進んでいく。

そしてワールドとタイガーウルフが握手と共に再戦の約束を交わし、ワールドが修行の旅路へと戻っていったのと入れ替わりで、道場主に胸を借りる番が訪れた愛香だったが、やはりというか、当然の如くワールドと比較すればその試合内容は拙いものであった。

『俺はアイツみたいに回りくどいことは言わねえ、だからこの拳でお前に全てを教えてやるつもりだ、だが、あー……』

『どうしたんですか、タイガーウルフ師範?』

『師範、か……いやなんか悪くねえなそれ、じゃなくてだ! ゴホン!

前にもコアガンダム使ってた奴に色々教えてたことがあったんだが、まさか他にもコアガンダム使いがいたとはな』

『リゼ君……ですか?』

『知ってたのか。まあ変わった奴だったが……お前も中々一筋縄じゃないか女と見た! だが立ちはだかるなら俺は男も女も老いも若きも区別しねえ! これ以上は拳で語るぜ、アイカアッ!』

そんなやり取りを交わすと共に、その武闘と舞踏を融合させたような華麗な体捌きでタイガーウルフが襲いかかってきたのを思い返して、彼の思わぬ初心な一面と、リゼという自分と似た空気を感じる少

年の足跡がここにもあったことに苦笑しながら、愛香は丁寧にパーツの「面」を出しつつ、その戦いを振り返る。

手加減はしない、とばかりのテンションだったが、タイガーウルフは決して己が指南役であることを忘れなかった。

初撃を回避しての戦闘機動から愛香の癖を見抜くと、それを咎めるような形で、致命の一撃に繋がりがねない小技を当てて、今のが実戦だったら死んでいたぞとばかりに警告するのだ。

そしてあの戦いで最終的に撃墜されるまでに愛香が「死」を迎えた回数は合計で三十九回と、惨憺たるものだったが、それ故に自分の課題が見えてきたし、なによりもタイガーウルフというトップランカーに胸を借りることでまた、「コメットコアガンダム」が抱えていた悩みとでもいふべきものが見えてきたのは大きな収穫だった。

愛香がコメットコアガンダムを作るときにこだわったのは「可愛い」だったし、それを捨てるつもりはない。

だが、「可愛い」は決して一ヶ所にとどまるものではない。

子供が大人になるように、大人もいつだって同じ顔をしているのではなく時と場合によって装いを変えるように、「こうだったらいいのにな」と、そう思ってしまった場面が愛香の独りよがりではなく、自分に合わせてくれたとはいえ、今の自分にできるベストな動きで挑戦した相手がトップランカーだったといったことで、コメットコアガンダムも同じだったのだと、そう理解したのだ。

愛香の脳裏によぎるのは、ミラーミッションにおけるガンプラと、自身と関係ないように見えたストラックアウトとトランポリンだった。

あれは本当に苦行をやらせるためだけに、そしてランナーズハイのような集中力を持たせた上で、愛香の場合は第三ウェーブに待ち構えていた「自分との戦い」への布石とするものだったのか？

答えは否だ。

なればこそミラーミッション、ダイバーの感情データを読み込んでミッションを、やるべき「使命」を精製するその鏡は、必要な情報しかダイバーに与えることはない。

装甲と干渉するダボピンを丁寧に切り飛ばし、その跡をやすりで均しながら、愛香はそれぞれのウェーブのモチーフとなっていたものを思い返す。

『あー……アイカだったな、お前の動きは悪くねえ。俺が教えた通りの癖を直していけば多分、すぐSランクぐらいまでは上がれるだろうよ』

『S、ですか……師範、それはどういう？』

『……だが、厳しいことを言っちゃまうようだが、その先はキツイぜ。そしてその機体はもつと……お前に応えたくて、高く飛び上がって、強い鎧を身に纏いたがってんじやねえか？』

クールなテンションを装いつつも、尻尾が左右に揺れるのを隠せない辺り、微妙に締まらなかったものの、タイガーウルフは確かに愛香へと、いや、違う。愛香が分析していたプラクティスモードにおけるダメージログにおいて両肩とスプレーガン、そしてビルドボルトという損傷が特に激しい部分を指してそう言ったのだ。

確かに彼はシャフリヤールと違って、戦いの中から導き出した答えを直球で伝えるスタイルだ。だからこそアイカには分かり易かったのだが、その鎧、という言葉はどうにも自分の中で引っ掛かりがあったために頭を冷やすべく、翌日はインディア・エリアへと旅立ったのだが。

「……なんていうかすごかったよね、あれ」

愛香は基本的なGBNの仕様をあまり覚えていない。

というか、そういうチュートリアルを受ける前に地獄へと放り出されてその後もなんやかんやあって調べる機会がなかったため仕方ないとはいえるのだが、その超絶基本的なことも知らない、というのはいつぞ致命的でさえあった。

『君、プラグインも覚えてないの？ それで……へえ、Bランクまで来れたんだ。機体も自分でスクラッチしたみたいだし、結構やれるのかな』

噂に聞いていた、「売れないパーツ屋」を営んでいた店主は愛香の無知に対してあまりにもド直球が過ぎる言葉をぶつけてきたのだが、恐

らく彼としてはそれを知らないで、バトルロワイアルミッションに籠っていたせいもあっていつの間にかBランクまで昇格していた自分を褒めたのだろうか、それにしたってトゲが生えたドツジボールを初手で顔面に投げつけてくるようなコミュニケーションだ。

恥ずかしいやら微妙にイラつと来るやらで愛香の内心は複雑だったが、それでもこの売れないパーツ屋を営む店主はSSSランクの凄腕らしいのだから、餅は餅屋の精神で問い返したのだ。

『あはは、あたし始めたばっかの初心者なので……それてその、プラグインって……なんですか？』

『初心者で？へえ……確かにカード見たらログイン日数も浅いし嘘じゃないんだ。じゃあ近いうちに僕と同じ所まで来れそうだね、うん。見込みがある子は嫌いじゃないから教えるけど、プラグインってというのはGBNの内部でガンプラに施すカスタマイズ要素だよ』

彼の説明で曰く、通常ミッションの報酬で稀に獲得できたり、高難度ミッションや期間限定イベントの報酬となるそのパーツは、例えば「ビームライフルの威力+10%」のように、GBN内においてのデータに様々な補正を与えたり、「サイコミュ・システム」など、特定の能力を付加するための代物を指すそうだった。

勿論、強力なものほど必要スロット数を食う、というこの手の要素のお約束もついてくる。

ただし、プラグインを最も有効に、というより大量に詰めるのは素組みのガンプラで、そのカスタマイズ具合をスキャンした上で、プラグイン搭載容量の限界は漸減していく。

とはいえ、あまり減らされても面白くはない、ということ、実際にやる意味があるかどうかはともかく「ナノラミネートアーマーとフェイズシフト装甲とEXAMシステムとトランザムシステムとNTDとサイコミュシステムと妖刀システムを」搭載するような無茶苦茶なカスタマイズを施すことができなくもない素組みのガンプラと、最大容量こそ素組みと比べて少ないものの、ちゃんと取捨選択をすればプラグインを有効活用できるカスタムモデル、という差別化と、強力なプラグインほど入手難度が高い、というバランス調整が施

されているのだ。

『君は見込みあるみたいだし、うちでなんかパーツ買つてく？ どういうわけか全然売れないんだけど、性能は保証するよ』

主にその接客態度とかのせいだと思います、と言いたくなるのを堪えて、もしもの時に必要だと考えていた「ドラグリーン・システム」……「ファクトリー・カスタム」なる名前が後ろにつくが——プラグインを実に120万BCという大金を叩く形で購入し、小市民的な喪失感を抱えながら、愛香はそのパーツ屋を後にしたのだ。

だが、思えばそこでやめておけばよかったのだ。

この先の橋では死ぬほど重いコインを持ってしていると落っこちてしまふから売りに戻る必要があったように、愛香が小市民的な痛みにふらふらと街を歩こうとして引き寄せられた隣のアクセサリー屋で、出来がいいのにやたらと安い、青い星型のアクセサリーを買ったその時だった。

『やめてよね、その子には僕が目をかけたんだから』

『パーツやアクセサリーを購入する自由はダイバーにある、君は少しライバルに飢えているからといってがつつきすぎだ』

『そっちこそ言いがかりはやめてください。彼女は見込みあるダイバーなんだから、僕が手塩にかけようとする気持ちには間違っていないでしょう……それでも、育てたいライバルがいるんだ』

『いいだろう。私は今の自分を器だと規定してアクセサリーを売っているがその本領はあくまでもファイター……ならば、わかるだろう？』

『言葉はいらない……僕たちは！』

『私は！』

『戦う！』

どうやら愛香が事前に聞いた話は都市伝説でもなんでもなかったらしい。

街中では街が壊れるからと、即座にフリーバトルを選んで二人は愛機であるストライクガンダムの改造機とシヤア専用ザクの改造機を呼び出すと、それこそ瞬きをしている間に市街地から遠ざかり、決戦

の舞台となる戦場へと飛び立っていった。

そして、二人の戦いが「災害」と形容される理由を、愛香は市街地という遠く離れた位置からも観測することになる。

青と赤、二つの残光が流星となつて切り結ぶその衝撃波は遠く離れた愛香の肌にもビリビリと伝わってきたし、白昼の蒼天をかけるスラストアの軌道は直角に曲がりくねる流星同士の衝突とでもいうべき、正直近くで見ても何をやってるのかわからないレベルのものだ。

『これで千二百四十九勝千二百四十九敗……キリのいい数字は僕が貰う！』

『できるかな？ ……今日は趣向を変えて私から仕掛けるとしよう！』

そのあとは何がなんだかわからなかった。

出鱈目な軌道を描いて青く光る、エールストライカーの翼が変形したユニットから放たれる光の翼の軌跡と、通常の三倍の三倍の三倍……何倍になつてるかわからないほどに早いシャア専用ザクの描く光がただ超スピードで空を駆け抜けていることしか、愛香には視認できな

きない。ただ、それを茫洋と眺めてあの二人は仲がいいんだなあと現実逃避をするのが精一杯だった。

本当に、GBNの最上位クラスは人間の形をした災害であふれている。

「……とはいえ、ちょっとはあたしもそれに憧れちやつたりするんだよね」

予め蓋を開けていたことで大分気が抜けたエナジードリンクを胃袋に流し込んでから、愛香は肉抜き穴へと盛り付けるエポキシパテを調整する。

エポパテは少なすぎるとまた盛る羽目になるし、多すぎると今度は削る時にめんどくさいという厄介な代物だが、プラ板と共に使いこなせばなんだって作ることのできる万能な素材だ。

こういう地味でめんどくさい作業の加減とか、そういうのを何回もこなして指先に馴染ませた果てに、多大な余波を齎しながらインディ

ア・エリアの空を駆け抜けた流星と彗星の世界があるのだろう。

そして、その空へと駆け抜けるのも、そして、その空がある世界を歩いて、一緒に旅をするのも。

机に腰掛けたコメントコアガンダムを一瞥して、愛香は新たに箱組みで作り上げた同じ肩アーマーと、エポパテを肉抜きに充填したSD CSウイングガンダムゼロ（EW版）のツインバスターライフルを切り出したものと、同じキットから幅詰めを行ったアームを一瞥して一息つくくと、図面を描いたプラ板と、定規とPカッターに手をつけて新たなパーツの製作にかかる。

「待っててね、コアガンダム。待っててね、エリイちゃん、絵理」

——何もかもダメダメだったあたしが、もう一度。もう一度、あの仮想郷でそのソラを飛んで、一緒に「楽しい」と笑える未来で。

愛香は続きを言葉に出さず、ただ一心に集中してプラ板を切り出して、複雑な形状の基部となるその骨組みを作り上げていく。

明日また、希望があるなら努力だって惜しまないと、厭わないとどこかで誰かが歌っていたように、その言葉を信じて、いくつもの蹉跌を、今日だった時間の死骸を積み上げて歩くその足が、破片に切り裂かれようと愛香は歯を食いしばって前に進み続ける。

見つけた「あたし」をこの手に掴むために。たとえ今は届かなくとも、星追いの少女は、その手を高く掲げて天へと伸ばし続ける。

その先に、己の見つけた星があると、そう信じながら。

第四十話 「仮想の岸边でヴァカンスをくヤンデレ・サマーバケーション！」

フォースフェス。

それはGBNにおいて、初心者と上級者の垣根を取り払い、更には普段ガン普拉バトルに触れず、デイメンションを散歩しているユーザーも気軽に参加できるイベントとして運営が考案した、「ガンプラと関わりつつもガン普拉バトルとは一線を画する戦い」に他ならない。

ただ、戦い、とは銘打たれているものの、その実態は極めてゆるく、上級者からライトユーザーまでがバチバチに火花を散らして競い合う、といった光景を期待しているのならそれは残念ながらあまり叶わないといっているだろう。

優勝者や上位に入ったダイバーに配布される限定報酬も、プラグインやパーツデータといった有用なものではなく、配布家具やアバター衣装の色違い、称号といったフレージャー要素が強いことから察せられるように、このイベントはとにかくカジュアルに楽しむためだけのものであり、ぼちぼちに気合を入れて臨むのは精々アイテムや称号のコレクターといった、GBNでは珍しい層がほとんどだ。

そしてフォースフェス、というイベント名からフォースに所属していなければ参加できないのかと思いきや、個人でも、なんならアカウント作りたてのフランクダイバーも気軽に参加できるほどその門戸は広く開かれていることが、このイベントの最大の特徴といっているだろう。

他に開かれるイベント——例としてはバトルトーナメントの「メガ粒子杯」などはそれこそガン普拉バトルでバチバチに競い合うイベントだし、そうしたガチ層向けのイベントとフェスのようなライト層向けのイベントをバランス良く開催していることも、様々な層がGBNを愛好し続けていることの理由に他ならない。

そんな、Wikiや専用スレの最初に書いてあることを頭の中で誦

じて、今度は徹夜明けでもエナドリ漬けではなくお茶とコーヒーと絵理からの愛情でなんとか乗り切った愛香はそのダイバールックを、胸元を敢えて見せるのではなく覆い隠す紫色のビキニという水着姿に変更して、人で賑わう電子の岸辺を歩いていた。

「こ、これが……フェス……わあ、楽しそうです……アイカさん……」
「ん、そうだねエリイちゃん。本当に海水浴場、つて感じ」

そして例の如くアイカの左腕には、大胆にも蒼いビキニで豊かな胸元を覆い、色合いを統一した下の水着にパレオを巻くことでどこことなく上品で、神聖さを感じさせる夏の装いにそのダイバールックを変えたエリイがしなだれかかっている。

フォースフェスへの参加を提案してきたのは、エリイだった。

たまには戦い以外のイベントにも参加してみたい、というのが彼女の提案理由で、案の定報酬がまずあじという理由でチイが拒否したものの、アキノとアイカが賛成に票を投じることで、極めて民主主義的な方法で可決されたフェスへの参加だが、実際はエリイがリアルでは海を見られない、という部分が大きいのだろう。

それを裏付けるようにはしゃいで、お上りさんのように周囲を見渡しているエリイはそれはそれで可愛いし、アイカとしても参加した意義はあったと思うのだが、何より安心したのはあれほど憎んでいた倫理コードが、この仮想の浜辺には適用されていることだ。

例えばチャラチャラとした男が「へい、そこのお姉ちゃん、今から俺たちといいところ行かない？」などと女性ダイバーに声をかければ一秒未満で「GBN―ガードフレーム」が飛んできて、不埒なナンパ男には強制ログアウトと程度に応じたアカウント停止措置が取られるのは、間違いなく現実より安心できる。

そういう意味では仮想の岸辺とはいえ、変なものに絡まれずに大いなるヴァカンスを楽しめるという意味では、戦いばかりでカロリー過多な自分にもちようど良いのかもしれない。

頬をすり寄せるエリイの頭を優しく撫でながら、アイカは目を細めて、電子の夏を満喫する彼女の姿を脳内に焼き付けるように注視する。

最初の出会いは、あんまりお互い印象がよくなかったとわかったのはつい最近で、それでも今こうして離れることが考えられないぐらいお互い寄り添いあっていられるのは、縁がなせる奇妙な業、とでもいうのだろうか。

露店を出している店でかき氷を二つ購入したアイカは、現実と違っていたまでも溶けることなくしゃりしゃりとした感覚を味わえるそれをぐるぐるとかき混ぜてシャーベット状にしなごらばんやりと考える。

「お、アイカとエリイじゃん。やけに気合入ってんね今日は」

「おはようございます、アイカさん。エリイ。睡眠は十分に取れましたか？」

待ち合わせ場所に指定していた、「シーサイド・エリア東部海岸、露店通り近く」に、同じく夏の装いに身を包んだチイとアキノも合流してきたようだ。

大胆な赤い、面積こそ多いものの、下から伸びるX字状の布で胸を覆い隠すタイプの水着を身にまとっているアキノのずば抜けたスタイルに、ちよつと盛つても尚敵わない己のダイバルック及びそれよりもアレな現実に複雑な涙を浮かべながらも、その傍らで水ヨーヨーを振り回して、浮き輪を腰に着けたいわゆるスクール水着のチイを横目に見ることでアイカはその感情を中和するが、それ自体がある種敗北を認めていることに他ならないのはわかっていた。

だが、わかっているけどわかるわけにはいかないのだ。

別にこんなものジオングの足と同じ飾りだとわかってるし、あまり無闇に大きくても全体のバランスが崩れるからエリイのそれは奇跡的なのだと、それも理解しているのだが、エリイの為により魅力的になりたいと願う心が理解を拒むのだ。

——いや、エリイちゃん好みの好きな体型なのかわかんないけど。

中々聞きづらいうし聞いたら聞いたで自分と外れてたら凹みそうだから未だに聞く勇気のない問いかけと共にその煩惱を胸の奥に仕舞い込みながら、アイカはフェスも始まったばかりなのにフルアーマー

な出で立ちになつてゐるチイに問いかける。

「チイちゃん、今日は散財してゐるんだ？」

「ん？ おうよ、まあ祭りだし金落ときないのも野暮だしね、払うべきものには払って取り立てるべき時には全身の毛を筆つてでも取り立てるのがチイのやり方よ」

「地味に凶悪だね……そういえばこの屋台つて」

「ええ、全て『GHC』——グローリーホークスカンパニーの傘下の方々が運営しているようですね」

あのフォース連合は運営との結びつきも強いので。

チイに負けず劣らず、小脇には焼きそばを五つ抱えて、イカ焼きをもしやもしやと頬張りながら語る彼女に、アイカはさしものアキノとて夏の空気に当てられてゐるんだと、ちよつとだけ親近感を覚える。「えつと……『GHC』つて、その……」

アイカの左腕に自身の身体を預けたまま、おずおずとアキノに向けてそう問いかける。

確かに聞いたことのないフォース名だ。一応バトルロワイアルミッションを受けるときにいわゆる「談合」を行えば極めて有利に戦える大所帯だとチイからその名前だけは聞いていたが、ミッションに参加した中でその「GHC」とマツチングしたことはないから、その手の作戦には無縁のフォースなのだろうか、アイカは推察した。

実際、「GHC」が新人訓練の場としてバトルロワイアルミッションを利用することはままあるが、それは教官役——奇しくもチイがアイカたちにそうしていたように、「味方が味方になるとも限らない」「ありとあらゆる殺し方と殺され方を叩き込む」鬼の指導を行うダイバーと新人のツーマンセルでしか参加しない、というのが系譜図を書くのに数時間かかる大所帯を統べる「総帥」たる男、「アトミラル」の方針であつた。

更にもつというなら彼は新人研修をあのハードコアディメンション・ヴァルガで行うこともあるのだが、アイカたちはそれを知らないので割愛しよう。

「ん、クソデカフォースだよ、マジでデカイ。多分人数だけなら第七機

甲師団もぶつちぎってこのGBNでトップだし、今日のイベントも午前の部は多分総なめしてんじゃねーかな」

左手に持っていた綿飴を飾りながら、チイは「シーサイド・エリア」における露店街を抜けた先、「グラン・リゾート・ビーチ」に並んでいる特設ステージ群を顎で指しながら、エリイの問いにそう答えた。

今回「リビルドガールズ」が参加を決めたフォースフェス、「グラン・シーサイド・コンテスト」は午前の部と午後の部の二部に分けられて構成されている。

午前の部は巨大な仮想の浜辺にいくつも立てられたステージに、思いのガンプラと共に水着姿の男性や女性が並び立つことで自らを被写体とし、GBN内の写真共有サービス、「ガンスタグラム」に投稿された被写体の「いいね！」数でミスター・シーサイド、ミス・シーサイドをそれぞれ男女一名ずつ選考するというものだ。

わかりやすくいえばミスコンというやつだろう。だが、このライトユーザーもヘビーユーザーもこぞって参加するお祭りイベントは、ユーザーにフォースの名前を覚えてもらうには絶好の機会であり、だからこそ、リアルな企業がプライベートにも進出してきた「GHC」は本気を出してミスター・アンド・ミス・シーサイドの称号獲得に臨んでいる。

アキノが瞬く間に焼きそばを胃袋に収めていく様を横目に見つつ、一応アイカたちも投票こそしなくともフェスの空気を味わうべく、露店街を抜けてビーチの中心に向かっていたのだが、なるほど確かにどの屋台にもくまなくGHCのフォースエンブレムが刻印されている。

ここまで来ると運営との癒着を疑われそうなものだが、露店の出品にもステージの出演にも金がかかるのはしっかりとチイの調査で判明済みだし、そうなれば、彼らは仮想郷の中でしか使えない通貨とはいえ想像を絶する札束ビンタを繰り出しているということになる。

「……大人買い、って……こういうことを、いうんでしようか……」
「うーん、それを言うなら大人気ない、かな、エリイちゃん」

まあ、遊びだからこそ本気になれるというのがゲームというものの良いところであり悪いところだ。

混ぜ切ったかき氷をストローで啜りながら、アイカはその、自分の手で混ぜないと溶けた状態を再現できないことは現実よりもどかしいなと思いつつ、器用にも腕を絡めたままかき氷を控えめに口元に運んでいるエリイの控えめなんだか欲張りなんだかわからない姿に苦笑する。

「百合カップルだ……」

「あれって『リビルドガールズ』の?」

「来ましたわね……」

「あら〜」

それが見えたのは、がやがやと騒ぎ立てる外野を睨みつけつつ、ステージの並ぶビーチの中心にアイカが足を踏み入れた時だった。

——バエル。

いわゆる「映え」るイベントの主役こそこの「バエル」であるとはかりに一番いい席に陣取って、スプリンクラーから放出されている霧にスラストーエフェクトが反射して、光の翼のような虹を作り出している悪魔の王の掌には、果たしてアイカたちと無関係ではない人物が、どこかしつとりとした妖艶な表情を浮かべて寝そべっている姿があった。

「何してるんですかアリアさん……」

「……アリアさん、参加してたんですね……」

「バエるイベントにバエルで出るってか、まあ3BCぐらいにはおもしろいのかもな」

「しかし彼女、撮られ慣れていませんね」

思い思いの言葉を口にする「リビルドガールズ」も、大量のアクティブユーザーが詰めかける仮想の浜辺では残念なことに有象無象だ。

見事にスクショの嵐をその身に浴びながら、バエルの掌で「バエ」ているアリアは一定時間ごとにポーズを変えて、どの角度からも最高の自分を撮らせるように観客を誘導している。

やはりというかその夏の装いは大胆な、バエルを意識したのであるう白と青のツートンカラーが交差するビキニスタイルであり、「俺、これからアグニカ・カイエルに魂捧げてくるんだ……」「バエるだ! ガ

ンスタグラムの魂！」などと騒ぎ立てている観衆を見ればその反応も上々であることが窺える。

「確かに攻めたポーズはしてっけど、絶妙に下品じゃねえどころかむしろ宗教画じみた雰囲気出してんのはお嬢様、って感じだな」

「うん……正直モデルさんがアリアさんの本業でも驚かないかも」

アリアのポーズは異性受けを露骨に狙ったものではなく、むしろ「自らの存在を夏という季節の中で最大限に際立たせる」という覚悟のもと、それこそシャープ化を施しすぎて折れる寸前まで攻めるかのような大胆なポーズを取っているのだが、その覚悟と、伶俐な表情は異性のみならず、その気はなかったのにスクショを撮ってしまったというアイカのような同性すらも惹きつけてやまない。

だが、百花繚乱と銘打たれて、仕事でこのフェスに参加できないのが嫌だから辞めたなどと嘘かまことか、そんなことを言うダイバーまでいるのがこのフォースフェス、「グラン・シーサイド・コンテスト」だ。

「ああ、お兄様……お兄様……素敵です、もつとこちらに物憂げな視線を……！」

「……この角度で何回撮れば気が済むんだい、ユユ」

左を向けば、細身ながら筋肉質な身体を、羽織ったパーカーとハーフパンツで包んだサマースタイルの青年——キョウスケがどこか物憂げに腕を組んで、オブジェクトと思しき大剣と共に、白亜のダブルオークアンタに寄りかかっているところを主に、和装をそのままビキニにしたような黒髪ロングの少女、ユユにスクショを撮られまくっている光景がある。

——というかあのクアンタ、見間違いじゃなければ。

アイカはペリシアで出会ったブラコンとシスコンの兄妹に自身のトラウマが重なり合うのを無意識に避けるべく、即座にそれを見なかつたことにして視線を他の場所に移した。

「へい、Show your GUTS, Guys! この夏がワタシの全盛期、つまり……GHCの比翼連理として全ての魅力を曝け出す機会なのデース！」

『副総帥！ 副総帥！ 司令官代行殿！』

そんな具合に右を向けば、惜しくも一番いい場所は資本同士の殴り合いを大人の事情で決着するという結果で敗れたものの、最上位のステージに陣取った、巫女服をモチーフにした水着を纏う茶髪の女性が、わき起こるシユプレヒコールに担がれながら、大量のスクシヨ音にその夏の装いを刻む姿がある。

まさしく夏の祭典、といった浮かれた空気を盛り立てるように、アップテンポなナンバーが浜辺にかかり出したかと思えば、真ん中から少し離れたところではあるものの決して悪くない場所に陣取った「アルス・マグナ」の少女たちが歌い、踊り、ポーズを決める。

夏だった。文句のつけようがないほど、ぐうの音も出ないほどに、この仮想空間に夏が訪れていた。

アリアのスクシヨを撮り終わったあとはきつちり、エリイとのツーショットを、バエルを背景に撮影して、アイカはなんとなくその光景を「大好きな子と」という言葉にハートマークを添えてガンスタグラムにアップロードする。

普段なら絶対やらないことだが、やはり夏の空気は人々の脳を弛緩させる。

アイカもまた、このお祭りに浮かれていたのだ。

「……あの、アイカさん……」

「ん、どったのエリイちゃん」

「……えと、その……『アルス・マグナ』の皆さんのところには、行かなくとも……？」

「うん、いいんだ」

ステージのセンターではあの憧れの「ノゾミ」が沸き起こるコールに対してレスポンスを返している姿があり、二曲目からはそのレスポンスを貰えるかもしれない機会だったが、アイカはやんわりとエリイからの提案を拒絶する。

「……どうして、ですか……？ アイカさんは、ノゾミさんに……憧れてるんじゃない……」

「うん。今でもノゾミさんは凄いつて思うし、尊敬してる」

「じゃあ、どうして……？」

「……あたしは、ノゾミさんじゃないから」

ロールプレイに入るルーティーンも、ロールプレイも彼女のものを真似てきたからこそ、そしてエリイと本音をぶつけ合って、付き合い出したからこそ、そして——自分がコメットコアガンダムに向けている感情と、ノゾミに向けている感情は違うから。

アイカは、エリイの疑問に淡々とそう答えた。

もしも、自分がガンプラバトルではなく歌い、踊る道を選んでいたらそれは逆になっていたのだろう。

だが、そのもしもに、エリイはいない。

だから、今ここにエリイがいることと、彼女とこうして腕を組んでフェスに参加していることに、アイカは心から感謝しているのだ。

「それに、あたしにはエリイちゃんがいるから。エリイちゃんが……もし、その……嫌じゃなかったら、だけど。あたしの一番は、エリイちゃんだから……」

僅かな予防線に照れを隠しながら、少し歯切れの悪い言葉でアイカはもじもじと顔を赤らめて、俯きながらそう呟いた。

心の底からド直球に褒めたら褒められたりするのには苦手なのだ。自分がそうされた経験も少ないしそうした経験だって思い返してみればほとんどないから。

いつもと違って逆に真っ赤になっているアイカに、微かな新鮮さと胸の奥が柔らかいものにきゅっと締め付けられるような感覚を覚えつつ、エリイはいつも自分にしてきているように、アイカの耳元で、飴玉の鈴を鳴らしたような声で囁くのだ。

「……わたしも、アイカさんがいちばんのひとですっ……!」

だって、彼女ですから。

電子の海と仮想の夏の空気に当てられたのか、いつもより大胆に小悪魔的な笑みを浮かべて、エリイはアイカにそう宣言する。

——だから、一生わたしを離さないでくださいとそばにいてくださいなんでもあげますなんでもしますわたしはアイカさんがいなかったらいきいていけないんですだからどうかおねがいしますこれか

らもてをとりつづけてください。

そんな感情を、砂糖菓子のような声音のオブラートに包んで、エリイはアイカに甘く愛おしく、それ故に身を切り裂くような祈りであり呪いを託すのだ。

「……うん、エリイちゃん！ これからも、ずっと、ずーっと、よろしくね！」

そしてアイカも、どことなく蕩けたその瞳に重く暗い枷のような感情が混ざっていることを察知しながらも、自ら進んでその枷を足首に、そして手首と心臓につなぐように微笑むエリイに身体を寄せて二人で頬をすり寄せたスクショを撮って、「ずっと一緒にふたり」と題名をつけた上でそれを見せつけるようにガンスタグラムへとアップロードする。

「……なんか気のせいならいいんだけど今日は妙に冷えねえか、アキノ」

「感覚は確かにバージョン1.78からフィードバックされるようになりましたが、夏でも体感温度は二十六度に設定されていますよ
チイ」

「いやそういうことじゃねえよ畜生……こええよあのメンヘラズツ友
コンビ……」

「？ よくわかりませんね」

——こいつもこいつでここまで鈍感でいられるのが怖い。

互いに歪んで病んだ愛情を向けあっているアイカとエリイ、それを何事もなかったかのようにいつも通り「仲良きことは美しきことかな」で済ませているアキノに軽い恐怖を覚えながら、チイは体感的には快適な夏の肌触りなのにも関わらず押し寄せてくる寒気に、ぞくりと背筋を震わせるのだった。

第四十一話「轟け真夏のキャノンボール」邂逅は戦鐘と共に」

フォースフェス「グラン・サマー・コンテスト」、その午前の部が大いなる歓声と共に迎えられたのならば、午後はまた違う熱狂が参加者たちを待ち受けている。

午前の部終了を告げるアナウンスと同時にステージが撤去され、ガンプラが格納庫へと転送されると、ビーチの中央には表彰台が、そしてその右側には解説者と実況者を招く席が現れる。

一応アイカたちにとっては午前の部の結果発表は聞いても聞かなくてもいいのだが、そこはそれ、それはこれ、祭りであるのだから最後まで波に乗らねば無粋というものだ。

いつの間にか出現したパイプ椅子を四つ、慣れた手つきで確保しながらアイカはそれぞれ買い出しに向かっていたエリイとチイ、アキノを手招きして着座を促す。

「おーい、皆ー！ 席取つてたよっ☆」

「おっ、特等席じゃーん？ やるねアイカも」

「私は食糧を確保しました、仮想世界であるとはいえやはり食という行為は人に戦の前の高揚感を与えてくれます」

「……あ、アキノさん……さつきも、焼きそば……食べてたような……」

相変わらず焼きそばを全員分に加えてもう二パック買ってきたアキノと、かき氷を人数分買ってきたチイと、ラムネを、全員分買ってきたエリイはアイカに促される形でそれぞれ席につくと、運営スタッフと、おそらく「GHC」のフォースメンバーと思しき人間があれこれと人員の手配についてと思しき言葉を交わしながら走っていく姿が横目に見えた。

「やるねえ『GHC』の連中も……確かりアル企業ベースだからフェスの手伝いでも給料出るんだっけ？」

「……ならばチイはそちらの方がちょうど良かったのでは？」

「かもね。でもまあハムスターみてえに焼きそば口に詰め込んでるアキノとかいう何万BC分かかんねーもん見れたからチイは『リビルドガールズ』でよかったよ」

チイが指摘した通り、焼きそばを頬袋を作ってまで猛スピードで消化しているアキノの姿はさながらハムスターで、エリイのちまちまと削っていくような食べ方とは別な面でその生き物を連想させる。

普段が普段四角四面な性格をしているだけに、アキノのこういう一面は確かに希少かもしれないと、アイカもエリイも言葉に出さず同意をして、エリイが買ってきてくれたラムネを開封する。

「GBNだと溢れなくていいよねっ☆」

「……はい……わたし、リアルだと……上手く開けられないので……」
「手もベタベタになっちゃやし、そう考えるとラムネってあんまりいいものじゃないのかもしれないけど……つい買っちゃうんだよね」

祭りというのはとにかく人の財布の紐を緩めるのに適している。

そう考えれば、リアルタイムで放映されて画面の中で活躍をしているガンダムがプラモデルとして発売されるというサイクルを繰り返すのは、毎週お祭りが開かれているようなものなのかもしれない。

熱心な趣味を持つが故の充実感と苦勞、そして現実に嵌められた枷を脱して、手をベタつかせることもなく、こぼれることもなくビー玉を押し込む爽快感だけをフィードバックしてくれたそれをアイカは、苦笑と共に飲み下した。

——ああ、夏の味だ。

電気信号が想起させる擬似的な味覚なのはわかっている。だが、語らずとも脳裏をよぎるそのラムネの甘さ是否が応でもそこに夏の小さな思い出とノスタルジーを連れてくる。

「……これが、ラムネの味……けぶっ……」

ちよつと炭酸が苦手だからかむせて喉に空気を詰まらせていたエリイも可愛いな、などと思う傍で、アイカは、これが彼女にとって初めての「夏の味」になるんだろうかと、そんなことを考えてしまう。

リアルできつと行きたくても行けなかった分、エリイは電子の海のヴァカンスを恐らく人一倍楽しんでいる。

——幸せに、本物と偽物などない。

鉄血のオルフェンズ本編ではガエリオ・ボードウィンによって否定された言葉だが、マクギリスの遺志を継ぐように、アリアが高らかにそう謳いあげたことを思い出す。

ならばきつと、エリイの脳裏に刻まれた夏の味も、ラムネがきつとこれから連れてきてくれる思い出も、本物に他ならない。

「けほっ、けほっ……どうしたんですか、アイカさん……？」

「ううん、今日もエリイちゃんは可愛いなあつて、そして今日は特別気合入つて可愛いなあつて思つてただけ。水着もめっちゃ似合つてるし」

「……か、かわいい……わ、わたし……そう、見えて……えへへ……一人で……頑張つて、アイカさんが旅、してる時……水着を……探してよかつた……」

てれてれと頬を染める絵理はやっぱり可愛い。というかあの二日間をずっと水着選びに費やしていたのかと思うと自慢の彼女の愛しい姿に、アイカは胸の奥がきゅんと、柔らかいものに締め付けられるような感触を、紛れもなく恋がそうさせる甘い窒息感を覚えた。

ああ、本当にあたしの彼女は世界で一番可愛い——

焼きそばを頬張り終えたら大量のトルネードポテトを瞬く間に消化していくアキノのスクショを悪い笑顔を浮かべながら撮つているチイと、いまだにラムネに苦戦してけけぷと小さく空気を吐き出しているエリイを一瞥しながら、そんな余韻にアイカが浸っていた時だった。

『さあ始まりましたフォースフェス、「グラン・サマー・コンテスト」午前の部表彰会！ 灼熱の浜辺で咲き乱れる百花繚乱、花々の中から選ぶのが惜しまれるほどに、せやけど選ばなきやあかんその一本……ミスターアンドミスシーサイドの栄光を掴み取るのは誰なのかア！ 司会のご存知窓辺のモクシユンギク、ミスターMSとオ！ 解説は皆ご存知ハードデイメンション・ヴァルガの主にして、「ジャバウオツクの怪物」をその手で屠るヴォーパル・ブレードたらんとする愛称FOEさん、キョウスケの解説でお送りいたしまつせ！ そんじやFOE

「はんからも何か一言！」

『僕の通称はFOEさんで固定なのか……？ まあいい、ごほん。この度縁あって解説に呼ばれたキョウスケと申します。皆様、今日という夢の一日を精一杯に彩るべく善処する所存なので、何卒よろしくお願いたします』

『堅い！ 堅いってFOEはん！ いやしかし、あの戦闘狂のラスト・リゾートの主たらんとする男も戦場を離ればひとかどの紳士、それもまたGBN！ そいじゃあ本日の心形……もとい、浜辺に咲き誇る百花の中から計六棒、ガンスタグラムのデータを元に三位から発表していきませ！』

やけにハイテンションな、ミスターMSと名乗る男の冴え渡る弁舌が余韻をかき消すように会場へと響き渡り、対照的に冷静沈着なFOEさんの対応すらもそのボルテージを引き上げる材料として、ミスターMSは会場のバイブスを一撃で最高潮まで引き上げてみせた。

余韻をかき消されたのは納得いかないし、あの手のタイプはアイカとしても苦手極まりなかったが、それでもかのミスターMSなる男がやり手である、ということは前後左右から巻き起こるシユプレヒコールの嵐から容易に想像できる。

『まず映えある3位は……ミスター・シーサイド、「キョウスケ」はん！ つてこれ解説の人ですよんかーい！ どないなつとんねんこのイベント！ 気を取り直してミス・シーサイドの第三位は……おっと？ これまた奇妙な縁っちゅーもんですな！ 個人ランク第十三位にしてFOEはんの終生のライバル！ 「終末を喚ぶ竜」の端末系G―Tuber、「クオン」はんでっせ！ 三位とはいえ激戦を勝ち抜いた勇者、FOEはん……は解説やから表彰台に行けへんですが、クオンはん、表彰台へどうぞ！ そしてFOEはんからも何か一言！』

『……どうして僕が選ばれてるんだ……？ いや、その理由はわからないが……ありがたい限りです。そして僕がいつか乗り越えるべき壁として挑み続けている竜人の彼女と同じ場所に……土俵が違えど立ったのは光栄だと感じます』

二人の解説を背に受けて、翼や尻尾を生やした、竜と人のハーフを

思わせる少女がゴシックな夏の装いにこれまたゴシックな日傘という出で立ちで、優雅に表彰台へと登っていく。

なんだか慣れてるなあ、などとラムネとかき氷を交互に摂取しながら、作業配信の折にはお世話になった「クオン」をアイカは見送りつつ、交互にFOEさんと呼ばれている青年に視線を送る。

確か、記憶が正しければあのクオンという女の子は巨龍のようなガンプラを使っている、FOEさんはクアンタを聖騎士のように改造した機体を使っているはずだ。

きつと、「インディア・エリア」で見かけた二人のように死闘を繰り広げる友と書いてライバルと読む間柄なのかそれとも単なる好敵手なのかはわからないが、二桁同士の戦いともなればそれはもう災害どころかデイメンションがひっくり返る勢いなのだろう。

あんまり想像したくないその人外同士のガチバトルを、かぶりを振ることで脳内からかき消しつつ、優雅に日傘を構えて表彰台へと登った第三位のミス・シーサイドに、アイカは仲間たちと同様の声援を送る。

『さあて飛ばしてきましょか！ 輝く第二位は……ミスター・シーサイド！ ご存知先進気鋭のダイバーにして、E.Lダイバーの救世主としても名高い先駆けの英雄！ あの「ビルドダイバーズ」のリックはん！ そしてミス・シーサイドは……資本こそ力！ せやけど使いどころでは惜しまない！ GBNきつての大所帯をまとめ上げる男の愛妻にして、真夏に煌めくダイヤモンドダスト、「コンゴウ」はんでっせ！』

『夫婦で広告塔とビジネス担当に分かれているのはシビアなビジネスマンとしての顔を感じさせますね、そして……リック君に関してはもはや僕の言葉など不要でしょう、栄光ある皆様は表彰台へお願いします』

湧き起こるシュプレヒコールを受けながら、GBNきつての有名人である二人は堂々と表彰台へ登っていく。

その中でもリックに一際強い声援を送る青紫色の髪をした少女——サラは控えめな夏の出で立ちにその身を包んでいて、おそらく彼女の

代わりに彼が出たんじゃないかと、チイは溢れる耳年増精神を發揮しながらそう推察した。

「へー、あれがビルドダイバーズのリクねえい、まあいい男なんじゃねーの？」

「穏やかな物腰ですが、その目に溢れる闘争心は本物……私も見習いたいものですねもぐもぐ」

「食うのかしやべんのかどっちかにしろやアキノ」

「……」

「食う方優先かよ……」

漫才じみたやりとりだが、なんだか妙に息のあっている二人にアイカは苦笑しつつ、かつて「ボルケーノ」の連中に因縁をふっかけられた間接的な原因である「ビルドダイバーズ」を統べる、今もつともチャンピオンに近い男と資本主義の化身にして太陽のように無邪気な笑顔を浮かべる巫女装束モチーフの水着に身を包んだ人妻の登壇を見送る。

目を見ればわかる、というのは誰が残した言葉だったか知らないが、それがBランクに上がることでアイカにもわかるようにはなってきた。

あの「ビルドダイバーズのリク」も、「GHCの比翼連理」も、「ジャバウォックの怪物」も「FOEさん」も、この束の間のヴァカンスにあって尚一人の戦士だ。

どんなに笑顔を浮かべ、振りまいていてもその目からは滾る闘志が灯す炎が消えることはない。

むしろこれが終わったらフリーバトルしませんか、と今にも持ちかけそうな、一触即発の雰囲気さえ、表彰台へと並んでいる面子と解説の席に座っている青年からははつきりと感じ取れる。

そこまで自分が行けるようになるのかはわからない。

密かに拳を固めながら、アイカは先駆けの英雄たちを静かに、目を離してしまわないように、瞳へとその姿を焼き付けていく。

「あはは……遠いなあ」

「……遠い、です……でも……」

「でも？」

「……アイカさんなら……ううん、アイカさんと、わたし……チイさんと、アキノさん……四人なら、いつかは……」

「……そっか。ありがとね、エリイちゃん」

「えへへ……アイカさんに撫でてもらえるの、だいすき……です……」
彼女からの激励に、アイカが感謝と共にその銀髪をそつと撫でれば、エリイはまるで猫のように目を細めて頬をアイカの肩にすり寄せてくる。

ずつと寂しかったのもあるのだろうけれど、きつとそれがずつとできなかつたから、今精一杯に甘えているのだろう。

それでも微かな不安を残しているエリイの控えめな頬擦りにアイカは大丈夫だよ、と、差し出された手にかけていた錠を自らの手首にも進んでかけるかのように、耳元でそう囁くのだ。

『そんじゃあ……名残惜しいんやけど、午前の部を締め括る栄光の第一位を発表させていただきまっせ！ 皆はん！ 心の準備をよろしゅうな！ それでは……おほん、咲き乱れる夏の花々、そのどれもが綺麗で目移りしてしまう中で、まずはシーサイドの頂点に立った漢から！ もはやワイも何も語りません！ 説明不要！ 「AVALO」のリーダーにして解説不要のチャンピオン、「クジヨウ・キョウヤ」やあああッ！ そして！ そして！ 何とミス・シーサイドは奇跡が起こった！ 運営委員と議論もさせてもらたんやけど、そこはそれ、繰り下げなんて無粋なことほしないで栄冠を分かち合うという決定をしてくれたGMはんには頭が上がりませんわ！ そんな特例中の特例……同率一位になったのは、ご存知ジャイアントキラ、アグニカ・カイエルの魂を継ぐ女！ マクギリスの生まれ変わりのこと「アリア」はんと、先進気鋭、別な大会でも活躍中のダイバー……「フユ」はんやあああッ！ 栄光の一位を手にした三人に、盛大な拍手をお願いしまあああすッ！』

解説も、言葉は不要だとばかりに拍手を打って、それを皮切りに万雷の拍手が人で埋め尽くされたビーチに轟き渡る。

信じてこそいたが、こうして知った名前が一位の栄光を手にする

いうのは複雑ながらもやはり嬉しい。

だからこそ、アイカもまたアリアの名前を呼ぶ無数の声援の一つとなって、彼女が手にした「バエル」にして「バエる」の栄光へと惜しめない祝福と声援を飛ばすのだ。

チャンピオンは相変わらずチャンピオンだなあと、すっかりGBNに染まってきた思考で当然の如くフォースフェスにも参加して、きつちり新たな愛機と共にその爽やかな笑顔を振りまいていた強いんだ星人に苦笑を浮かべながら、アイカはいつまでも鳴り止まない拍手を、その熱が引いていくまで続けるのだった。

隣で控えめに手を叩く、最愛の彼女と共に。

「午前が終わったってこたあチイたちの本番はこっからってわけだな、気合い入れてくぞアキノ！」

「ええ、どのような競技であろうと全力を尽くす……それが私のポリシーです」

チイは肩をほぐすような仕草を見せながら、同じように仮想空間だというのに律儀にストレッチをしていたアキノへと呼びかける。

午前の部を終えたフォースフェス「グラン・サマー・コンテスト」はその様相をガラリと変えて、観客席があつた辺りのパイプ椅子は撤去され、代わりに十八メートル級MSに合わせたビーチバレーのコートが展開されていた。

キャノンボール・バリボー、サマービーチ・エディション。

それが午後に行われる競技の名前であり、平たくいえばガンプラに乗ってビーチバレーをするというゆるい感じの競技なのだが、ガンプラを使う以上ガチで勝とうと思う人間は決して少なくはなく、「リビルドガールズ」を代表して出場したチイとアキノの周りにもそういう人種が集まって、その瞳から火花を散らしている。

この「キャノンボール・バリボー」のルールは単純だ。

普通のツーマンセルで行うビーチバレーのそれをガンプラに当て嵌めただけなのだが、当然ガンプラは人にはできない機動ができる以上、通常の試合と比べてブーストゲージがかなりの制限を受けるとい

う特殊なルールが適用されていることこそ、真髓だといっていだらう。

無限に対空して超機動でスマッシュを打ち返すなどという無粋な行為は通用しない。

あくまでも鍵となるのは浜辺という足場が悪い条件で自由に駆け回る機動力、そしてブーストゲージをいつ、どのように使うかという判断力こそがこのゲームの醍醐味なのだ。

そういう意味では常時滞空するタイプのリビルドウォートが着陸脚だけで走り回るのは難しいし、アイカは「諸々の事情で」今は愛機が使えないということで白羽の矢が立ったのがチイとアキノのコンビというわけだった。

「称号の『ビッグバンズ・ビーチボーラー』には興味ねえが……賞金の10万BCはもらって行きたいよなあ？　しかも出すのは運営じゃなくて「GHC」の協賛金なんだ、金持ちの懐からそんなはした金抜いたって痛まねえだろうよ、けけけ」

「チイ、笑い方が完全に悪党のそれですよ……しかしフォースの名を背負って出場したのなら私とて金銭や称号に興味がなくとも勝ち上がりたいと願うのは必然」

インベントリから取り出したハチマキを額に締めて、アキノもまた闘志を燃やして、コックピットへと乗り込んでいく。

Aブロックの第一試合という文字通りの先陣を切ることになったチイとアキノだが、相手にとって不足はない。

対戦相手となった「宇宙水泳部」が操るのはゾノとアツガイという、浜辺での戦いでは鉄板となる水陸両用機だ。

『いきなり噂の「リビルドガールズ」に当たるとは運が悪いのかいいのか……』

『弱気になるな、シモムラ。我らとてマイヨール殿には及ばなくとも水泳部を愛する者の端くれだ、浜辺での戦いでは負けられん』

「おーおー気合い十分だねい……それじゃあチイの懐をあっためでもらうために……ここでご退場願おうか、アキノおっ！」

「任せました！」

審判役のGBN―ガードフレームが投げるジャンプボールによるサーブ権を、敵の二機より高い背を生かして当然の如くもぎ取ると、アキノはミネルヴァガンダムサイコ・フレームを起動して、その右手に力を込める。

「最初から……全力で飛ばさせていただきます！ はあああッ！」

キャノンボールの名に恥じることなき、全力で放たれた必殺のサーブが相手コート左端、ラインギリギリを狙って放たれるが、見た目に似合わず機敏な動きを發揮した、シモムラの操るゾノが滑り込んでそれを受け止めようとした――の、だが。

『うおおおっ!? う、腕が……』

『これがキャノンボールの怖いところよ……だが球は拾った、後は俺に任せるんだ!』

文字通り決死の覚悟で骨を折って拾い上げ、空中に浮き上がったボールを、お返しだとはかりにアキノたちからすれば右端の方に狙いをつけて、腕を伸ばしたアツガイが全力で打ち下ろす。

それは直線的な軌道を描き、アキノのブロックによつて阻まれようとしていたはずだった。

だが、ブロックのために飛び上がったミネルヴァガンダムを嘲笑うかのようにその両手を迂回する軌道を取ると、当初の予測落下点からはかけ離れた、しかしアウトにはならない際どいラインを目掛けてボールは飛んでいく。

『どうだ！ 我ら水泳部秘伝の陸戦泣かせスマッシュ！ 後衛がすばしっこいSDとは考えたが、その手足の短さでは届くまい!』

アツガイを操る男、ダイバーネーム「ブリッツェン」は追いかけて始めたチイの機体を一瞥して、勝利を確信した高笑いを浮かべた。

しかし、通信ウィンドウに映っているチイの表情は決して暗いものではなく、むしろ何かを企んでいるかのようにニヒルな笑みを崩していない。

「そうだな、これがただのバレーボールならチイは諦めてらあ、だが……こいつはキャノンボール・バリボー！ 球が地面に落ちなきやなんだっていいんだぜ！」

チイはコンテナの中から咄嗟にビームマシンガンと接続するためのロングバレルを取り出して展開すると、ブリッツェン自慢の陸戦泣かせスマッシュを、それをバットにする形で高く打ち上げる。

そう、キャノンボール・バリポーはブーストに制限こそかかり、球を破壊すればその時点で失格となるが、それ以外は何をやつてもいい。

バンデッド・レースと奇しくもよく似通ったバーリ・トワードぶりにアキノは苦笑しながらも、チイが打ち返したトスを、今度こそ相手を葬るために高く跳躍し、ブーストを使つての全力スマッシュを打ち下ろした。

『うおおおお!? や、やらせはせん、やらせは……ウボアアアアッ!!!』

『ブ、ブリッツェーン!?!』

強いて敗因を挙げるなら、それをレシーブで返そうとしたのが間違이었다ということになるのだろう。

伸ばした腕ごとアキノのスマッシュは勢い余つてアツガイのコックピットを撃ち抜いて爆散せしめていた。

勿論これもルール違反ではない。故意にコックピットを狙えば失格だが、ブロックやレシーブに失敗しての機体の破損は相手の責任だ。

そして、コートに立てる者がいなくなったと判断された瞬間に、このゲームは問答無用で決着する。

「……相変わらず狂ったルールしてやがるぜ」

「まさかコックピットを撃ち抜いてしまうとは……」

【Winner:リビルドガールズ】

無機質な機械音声の通知と共に、アキノとチイは順風満帆かどうかはともかく、次の試合に駒を進めるのだった。

アイカたちが「それ」と遭遇したのは、ちょうどAブロックの試合が全て終了して、Bブロックへのインターバルに入っていた時だった。

長い金髪を、額をあえて出すような髪型にセットした、黒い布テー

プを全身に巻いているといった風情の奇妙な夏の出で立ちをした男が、アイカを名指してコンタクトを取ってきたのだ。

「失礼、キミたちが『リビルドガールズ』で……キミがリーダーのアイカちゃんではないのかな」

「確かにあたしたちは『リビルドガールズ』で、あたしはアイカですけど……ナンパとかエリイちゃんにちよっつかいかけに来たとかなら通報しますよ」

「おっと、こいつは手厳しい……まあ、ステージ衣装のままだったからね。誤解を解いてくれると助かるんだが」

「……す、ステージ、衣装……ですか……？」

「ああそうさ。オレはグラウカツツエ。流しの歌歌いにして……ファイターさ。オマエはこれだけで要件が分かる目をしてるだろ、アイカ？」

「ああはい、バトルの申し込みですね……」

グラウカツツエと名乗った自称歌手はその衣装のアレな感じと噛み合わない、爽やかで気障でこそあるものの、嫌味のない言葉でアイカへと単刀直入にフォース戦を申し入れてきたが、彼が評する通りそれを目だけで察することができるようになった辺り、自分がこのゲームに染まってきたことを自覚して、アイカは複雑な表情を浮かべてしまう。

「今はチイちゃんがないから条件の相談とかは後日メッセージで送ることになるとは思いますけど……どうしてあたしたちなんですか？」

噂のだから、とかそういう理由で絡まれるのにはそろそろうんざりしてきたので、相手がそれを口にしたなら即座に棄却するつもりで、アイカはグラウカツツエへと問いかける。

「そうだな……パトスを感じた、これじゃあダメかい？」

「……パトス、ですか……？」

「オマエたちがガンスタグラムに上げたスクショ、魂が込もってたぜ。噂のってだけじゃあオレは、オレたちの『イグナイターズ』は戦う気なんて起こしやしねえ。噂にはいいのも悪いのもあるからな。『ボルケーノ』とか知ってるだろ？ ああいうのはノンノン、ってこった」

あれ見られてたのか。

アイカはどうせ見る人なんて自分ぐらいしかいないだろうと、エリイとのツーショットや、チイが撮ったアキノのスクショなどを思い出代わりにアップロードしていたのだが、やはりアクティブ二千万は侮れないというべきなのだろう。

それが、グラウカツツエの呼び水となったのだから。自らの軽率さを深く反省しつつ、アイカは問い返す。

「じゃあ、あたしたちのどこにその……パトスが？」

「オマエたち、この世界が大好きだろ？」

「っ……………」

「オレも仲間もこの世界を、ガンプラを愛している。だからさ、ランクだの順位だの勝率だのにこだわる奴のことも悪くねえとは思うが、オレたちはそういう奴らとパトスをぶつけ合うことを最上の喜びにしてるんだ」

それじゃあいい返事、期待してるぜ。リビルドガールズ。

そう言い残してひらひらと気障に手を振りながら、グラウカツツエの姿は雑踏に溶け込んで……も尚、どこか異彩を放っている。

「パトス、か……………」

彼の言っていることはアイカにはよくわからなかったが、それでもこの世界が、エリイが色んなものを見て笑えることのできるこの仮想郷がアイカは大好きだと迷いなくいえるし、愛してもいる。

「…………アイカさん？」

「エリイちゃんは、どう？」

「…………わたしも、大好きです…………それに、きつと…………この世界を好きな人に、悪い人は…………いませんから…………」

「そうだよね、それじゃ…………あとでチイちゃんたちに相談しようか」
アイカは記憶の引き出しを、玩具箱をぶちまけるようにひっくり返して思い返す。いくつもの出会いと、そこにあった想いのことを。

エリイとの出会い。チイとの出会い。アキノのとの——仲間との出会い。

ハマモリ、アリア——好敵手たちとの出会い。

シャフリヤール、リゼ、ユユ、キョウスケ、ワールド、タイガーウルフ、そしてあのアクセサリー屋とパーツ屋の果てに待つ、クジヨウ・キョウヤという、天高く聳え立つ、いつかはきつと目の前に立ちほだかる壁たちとの出会い。

いいことばかりじゃなかったかもしれない。だけど悪いことばかりでもなかった。

そして、まだ見ぬもう一つの、未来の出会いを脳裏に描きながらアイカは静かにそれを噛みしめるように目を伏せる。

なら、自分と同じようにこの世界を好きな人たちとの戦いで出会うのは悪くない。

「待っててね——」

そうして、アイカはその出会いに名付けた、未完の可能性へと込めた想いの名前を、そっと、静かに呟くのだった。

318：名無しのお祭りダイバーさん

でもあのお嬢様ガチでマクギリスが好きか本人の基準でアグニカじゃない奴は相手にしてくれないから……

319：名無しのお祭りダイバーさん

FOEさんとオーガとクオンちゃんにボロ負けしてるの勘違いして挑んでった「ボルケーノ」の連中が初手リミッター解除からの20秒で3タテされたのはおハーブが生えますわ

320：名無しのお祭りダイバーさん

あの子実力だけなら三桁の英傑と同レベルあるからな、無謀な喧嘩売ってるせいで勝率四割なだけで

321：名無しのお祭りダイバーさん

何がそこまで彼女をアグニカに狂わせたのか

322：名無しのお祭りダイバーさん

でもすげえわかるわ、原作でイマイチ活躍できなかったからバカにされたりネタにされてる機体全力で作り込んでミキシングを粉碎した時の快感は異常

323：名無しのお祭りダイバーさん

そろそろ総合スレ行くか自重しような、午後の部も水着回の消化試合かと思ったらクソ熱くて面白かった

324：名無しのお祭りダイバーさん

>>>323

お前さん水着フェスは初めてか？ あのものでもありなバレールールもどきもクツソ熱いのよ、「リビルドガールズ」が初手でレシブ返しコックピット天誅したのはクソ笑ったけど

325：名無しのお祭りダイバーさん

うみみ……（戦慄）

326：名無しのお祭りダイバーさん

サ〇ーゴ兄貴このスレにもいて草

327：名無しのお祭りダイバーさん

そりや海の話だし……

328：名無しのお祭りダイバーさん

「リビルドガールズ」といやあいつら決勝まで進んで優勝したんだっけ

329：名無しのお祭りダイバーさん

どんな球も拾って殺人スマッシュに繋げるあのSDのサポーターっぷりがMVPだな、シナンジュ改造したやつスマッシュもやべーけど

330：名無しのお祭りダイバーさん

乗ってる奴の性格は正反対なのになんか噛み合ってたよなあいつら

331：名無しのお祭りダイバーさん

傭兵やってるブーメラン戦隊な銭ゲバと元シルバリーの自治厨だっけ？ よく空中分解しないよなあいつら

332：名無しのお祭りダイバーさん

「リビルドガールズ」といえばアイカちゃんとエリイちゃんがかちっぽい写真ガンスタグラムに上げてて、めっちゃ可愛いんだけどなんていうか目が死んでるっていうかホラーな感じでヒエツ……つてなっただ

333：名無しのお祭りダイバーさん

あの子たちは最初からガチよ、アタシは見抜いてたわ

334：名無しのお祭りダイバーさん

ワイトもそう思います

335：名無しのお祭りダイバーさん

(・ω・) アイ×エリが王道の激重感情百合つぷるならチイ×アキはおねロリかつバディものの爽やかさであるのフオースは百合好きには天国よね

336：名無しのお祭りダイバーさん

>>>333

>>>334

気持ちはわかるがダインスレイヴが落ちて来ない内にカップリングスレに戻るんだ、それと>>>335、俺もそう思うけどそれはそれとして出荷な

337：名無しのお祭りダイバーさん

（・・ω・・） そんなー

338：名無しのお祭りダイバーさん

このご時世別に珍しいもんでもないしな

339：名無しのお祭りダイバーさん

それはそれとして「リビルドガールズ」もすっかり名前聞く常連だな

340：名無しのお祭りダイバーさん

フェススレでも見かけるようになるとは思わなかったわ

341：名無しのお祭りダイバーさん

なんか「ビルドダイバーズ」みたいだよなあいつら

342：名無しのお祭りダイバーさん

メンツの性格は全然似てないけどな

※※※

「……つてなわけで分捕ってきたぜ10万BC、なんでもありで狭いコートだつてんならまあお手のもんよ、アキノありきだけけどな」

「いえ、チイ。貴女がいなければ私はスマツシユに専念できなかったでしょう。この手の戦いは得てして後方支援役が軽視されるものですが、私は貴女こそこのフォースの屋台骨だと思っています」

「そりゃどーも、なんか素直に褒められると背筋がむずむずすらあな」
表彰式での、ミスターMSとFOEさんによるインタビューを終えて帰ってきたチイは優勝の証である金メダルを、特に興味もなさそうにインベントリに仕舞い込みながら、アキノからの激励を受けて少し照れ臭そうに、明後日の方向へ顔を背けた。

その頬は灰かに紅潮していて、チイもなんだかんだで年相応なんだな、と思いつつながら四分割された10万BCをストレージにストックしつつアイカは苦笑する。

フォースフェスは全てのプログラムを終えて、宴もたけなわといった風情でこそあったが、ある意味本番といえるのはここからであり、この夕方から夜九時にかけての時間に行われる、有志たちによる「夏

祭り」だった。

有志といつても出資してるのはほとんどGHCだが、テクスチャ上にそれっぽい発光パターンを浮かべるのではなく、物理演算を利用したプログラムでわざわざ火薬から何からを書き起こして花火の仕組みを一から実現するその狂気の実装と、それを大量のアクティブユーザーを抱えているサーバーで走らせても処理落ち一つすら起こさないGBNの高性能っぷりも中々イカれている。

屋台の味を再現したイカ焼きをもごもごと頬張りながら、黄昏の間にそれぞれの夏を過ごしているダイバーたちを見送りつつ、アイカは傍らで苦戦しつつもまたラムネを飲んでいるエリイの姿に苦笑する。

「ラムネ、気に入ったの?」

「……は、はい……けぷっ、その……ごめんなさい……はしたなくて……でも、飲むの大変ですけど、美味しくて……」

「あはは。なら良かった。フォースフェスに参加した甲斐があったね。リアルに戻ったらあたしの家でご馳走してあげるよ」

「……本当、ですか……!? けぷっ……あ、あの、ごめんなさい、恥ずかしいところも……見せちゃうかも……しれませんが……」

「気にしないって、あたしとエリイちゃんでしょ?」

多分気道で持て余した空気をけぷけぷと吐き出している仕草がそうなのだろうけれど、正直なところそのなんだか小さな子供みたいな仕草も含めてエリイのことを可愛いとアイカは思っているし、何よりも一緒に入浴して一緒に寝床を共にしたのだ。

寝癖のついたすっぴんだってお互いに見せ合ってるわけだし恥ずかしいがることなんてほとんどない。

リアルではセミロングとショートの中間程度ではあるが、短く切りそろえているのに尚寝癖がひどい自身の髪の毛を指先で弄びながら、アイカはエリイの背中をそっつと摩った。

「わりーけどもうチイは突っ込まねーからな、そんでアイカ、用件あるだろ? 花火始まつちまう前にとつと済ませとこうぜ」

「貴女も花火を楽しみにしているのですね、チイ」

「うるさいやい、茶化すなよアキノ……まったく、それで今度のフォース戦を申し込んできた奴らは……『イグナイターズ』か、まあ、正面から殴り合ったらチイたちがちよい不利ぐらいの相手だね、そんなじゃあ……50万賭けようか」

チイはアキノからの悪意の全くない指摘に頬を染めながらも即座に元に戻って、金勘定をするときの悪い笑顔を浮かべると共にいつもの右手の親指と人差し指で輪っかを作る仕草を見せながら、アイカたちにもそう提案する。

50万BC。それはめいめいに買い物をしていたフォースの共有財産から考えれば結構痛い出費ではあるのだが、チイが強気の条件を出すときは大体が勝てるかと踏んだ時だ。

アイカはにやりと唇に三日月を描くチイを見据えて問いかける。

「その心は？」

「アイカ、お前なんか隠してんだろ？」

——それもチイたちにも秘密にしときたい、とっておきの切り札だ。

嚴重に施錠した鍵を開け放ち、胸の扉から心を覗き見たかのようにチイはアイカからの問いにそう答えた。

秘密にしておきたい、というわけではなかったのだけど、確かに何かサプライズっぽいことはしたくて、それで色々と考えた結果次のフォース戦前のブリーフィングでお披露目するつもりで。

あわあわと両手を振りながら頬を赤らめるアイカに、キャノンボール・バリボーにエリイと出なかつた時点でバレバレだぜ、と追撃をかけたつ、チイは手にしていたリングゴ飴を一息に噛み砕く。

「まあ怒ってるわけじゃねーよ、ただそんだけ気合込めて作ったってことなんだから、その隠し球は？　だったら勝とうが負けようが派手にいこうじゃねえか、誠意は言葉じゃなくて金額……いわばこいつはチイがお前の可能性に出せるご祝儀みてーなもんだぜ、アイカ」

「あはは……やっぱりチイちゃんには敵わない☆」

「へっ、伊達に銭ゲバやってねえからな……つと、とりあえずその『イグナイターズ』の兄ちゃんには伝えとけよ、チイが代理やつても構わ

ねえけど、あいつら仁義を重んじるタイプだかな」

それだけ残すと、チイはひらひらと手を振りながら踵を返して、大量の水ヨーヨーを左手にぶら下げ、噛み砕いたリング飴の代わりに綿飴をインベントリから取り出すと、それに豪快にかぶりつく。

「チイ、どこに行くのですか?」

「んあ、食べ歩きとか射的とか? アキノも来る?」

チイはとりあえずアイカとエリイのズツ友コンビの邪魔にならないように「夏祭り」を巡るつもりでいただけで、特に行き先は決めていないし、やることも花火を見るまでは時間潰しだとさえ思っている。

そういうこともあり、チイは何の気無しに問いかけるアキノへとフルアーマーな左手を差し伸べたのだ。

差し伸べられた手に対する反応は、困惑だった。

早速エリイと二人きりの世界に入ってラムネを飲んだり、「インディア・エリア」から出張してきたSSSランクダイバーが営むアクセサリー屋の露天で彼女に似合いそうなものをアイカは決めているし、アキノは別にそれについても、チイの行動についても何か咎める意図があつたわけではなく、ただ純粹な疑問として問いかけたただけだ。

結論からいってしまうと、アキノが仮想の海での出来事とはいえ、誰かに夏祭りを一緒に巡ろうかと誘われるのは、生まれて初めてだったのである。

だからこそ、差し伸べられた手にいつかのアイカから、そして他ならぬチイが提案したことで寄り合ったあの日の、フォース結成未遂の日を思い出して、アキノは小さく涙ぐんだ。

「……つく、ぐすつ……申し訳ありません、チイ」

「え、何? そんなにイヤ? チイと夏祭り行くの泣くほどヤなことなの?」

「……いえ、違います……こういったお祭りに誰かから誘われたのは、生まれて初めてなので……感極まってしまったのです……」

アキノは右手で顔の下半分を覆って涙を堪えるが、あまりの出来事

に閾値を超えたそれはぼろぼろと絶え間なく碧眼から溢れて止まらず、仮装の浜辺をそつと静かに濡らしていく。

——まあ、そうだろうな。

そんなことを思っても言わなかったのは優しさなのか甘さなのか。金勘定以外での行動なんて損得ぐらいいしか考えていなかったからこそ、チイもまた己の中に芽生えた感情に、少しばかり複雑な思いを抱くのだ。

「……ああ、そういう……それこそ、生まれて初めての相手がチイみたいな銭ゲバで良かったわけ？」

「……いえ、でしたらそれこそ私のような……」

「あーもうまどろっこしい！ ほら行くぜアキノ！ 景品はどうでもいいけど射的のおつちゃんカモってキャノンボール・バリボアの延長戦と洒落込もうぜったく！」

——だから、チイはこいつのママでもなんでもねえ。

自分の中にそういう鬱陶しさだとか諦めにも似た感情があることを認めながらも、どうしてか落涙するアキノを放っておけず、中途半端に伸ばされた手を強引に取って、チイは露店街のある方向へアキノを引っ張っていく。

「あつ、ちよつと、チイ……！」

「たこ焼き」

「は……？」

「チイは水ヨーヨーで左手塞がってっからアキノの奢りな、それでいいだろ？」

誠意は言葉じゃなくて金額だからな、友情料金だ。

チイの唇が紡いでいたその言葉だって紛れもない本心で、涙ぐんで本当に嬉しそうにはにかむアキノを見てみると、なんだかチイの中にも穏やかな仮装の春にも似た、今まで抱いたことのない感情が顔を出してきて、そのやり場に困ってしまう。

それでも、チイはその思いが嫌いじゃなかった。

例え、嫌おうとしても反応がそれを拒むことを理解していた。

誰かがガンプラに懸ける思いがあるように、魂があるように、それ

はきつと人と人の間にも介在するのだろう。

繋いだ手が伝えてくれる仮想の温もりを胸に仕舞い込みたいようにチイはいつも通りニヒルに笑いながら、三人前の食事を買って、二人前を頼張っていくアキノの健啖っぷりと、そこに笑顔があることを受け止める。

ぶつちやけ、GBNの中でも海の家や屋台で出てくる料理なんて四十点かそこらが限界で、現実同様に特別に美味しいわけではない。

チイは記録でしか知らないが、二年前の第一次有志連合戦においてチャンピオンであるクジョウ・キョウヤがその主人を務めるフォース、「AVALON」のフォースネストで振る舞われた料理は、味覚フィードバック機能がベータ版と呼べるようなお粗末な出来だった時でも、一流シェフが作った味がしたらしい。

それでも、仮にチイがその有志連合戦とやらにいて、チャンプから一流の料理を直々に振る舞われたとしても。

「ん、たこ焼きうめえな中々」

「そうですか？」

「少なくとも今までチイがGBNで食ってきた飯の中では一番うまい」

「……水やアイスコーヒー、果ては氷を食べてまで粘っているからでは？」

「こんにやろう」

せつかく人が言うところ、風情のあることを言ってみせようとしたのに台無しだ。

アキノの鈍感っぷりに呆れながらもチイはその言葉を疑似感覚が伝える安っぽいソースと小麦粉と蛸の味と共に呑み下して、代わりに一つ、心の中で言葉を紡ぐ。

——例えチャンプに呼ばれて飯を奢ってもらおう機会があっても、迷わずチイは今アキノから奢ってもらったたこ焼きを選ぶだろうよ。

言ってもきつとアキノは首を傾げるだけだからこそ、言葉に代えてチイはアキノの手を引いて、屋台を巡り続ける。

そこにある想いに、本物と偽物、現実と仮想の国境線は引かれてい

ないと、ここにある全ては紛れもなく仮想でありながら本物だと、「はじめの夏祭り」をリードするように、いつの間にか浴衣に着替えていたチイは慌てて水着から浴衣にダイバールックを切り替えるアキノの手を引いて、電海に浮かぶ黄昏の浜辺を走り続けるのだった。

「オレたちからの挑戦、受けてくれて感謝するよ」

フォースフェスの翌日、ロビーに集まった「リビルドガールズ」に向けて、ザフトの赤服に身を包んだ明るい茶髪の男、グラウカツツエは手を差し伸べながらそう言った。

「いえ、あたしたちもあんな条件でしたけど……大丈夫でしたか？」

「何、博打は嫌いじゃないんでね。放課後の部活みたいだと思ったオマエたちが思ったよりスリルを求めていることには驚いたが……いいじゃないの、そういう若さ、嫌いじゃないぜ」

「あはは……それじゃ今日はよろしくお願いしますっ☆」

「互いに勝った負けたに拘らず、いい試合にしようぜ」

がちちりと握手と言葉を交わしたグラウカツツエとアイカは、それぞれフォースメンバーの元へと戻って、戦場として指定された、「機動戦士ガンダムSEED DESTINY」に登場する工業コロニー、アーモリーワン内部へと向かうべくフォース戦を承諾し、決戦の場へと解けていく。

事前の情報共有では、相手の「イグナイターズ」はリーダーであるグラウカツツエがガンダムタイプを、そして残りの三人がグフの系譜にある機体を使う、ということがチイから伝えられていた。

『グフタイプってのが何かわかんねーけど……想定されんのはグフカスタム、フライトタイプ、重装型、もしくはイグナイテッド辺りだな、外れたらわりーけどイグナイテッドは確実に、派生機のクラッシュヤーかもしれないけどいと思うよ』

グフ。ガンダムベースでも広く人気を誇っている、初代ガンダムにおいて「ランバ・ラル」大尉が乗っていた機体であり、その各種バリエーションも含めて売れ行きがいい商品だと店長が太鼓判を押していたことをアイカは思い出す。

『やっぱヒートロッド、あれと格闘戦特化でアムロを追い詰めたのが人気の秘訣なのかねえ』

ノリスだって事実上シローに勝ったようなもんだし、ハイネだって印象に残るキャラだった、作り手にもグフが好きな人が多いんだろかねえ。

しみじみと語りながら、サンプルとして展示された「HGCEグフイグナイテッド（一般機）のポーズをいじるときに、赤色のクリアパーツで掲載されていた鞭のようなものを店長は持たせていた。

確か、触れた相手に電撃を流し込むスタン系武装だったはずだ。

どんなグフであれ、基本的にはそれを持つていていると思つて警戒しなければいけない。

仲間たちが次々と戦場へ飛び立っていく中、アイカは自身の手で作りに上げた新たな剣を振るうべく、その操縦桿をキツく握りしめる。

『え、エリィ……リビルドウォート、発進します！ アイカさん、ご武運を……！』

一足先に、昼休みに「それ」を見ていたエリィが、戦場に飛び立つたのを確認して、アイカは少し変わった重量バランスを手に馴染ませるように、カタパルトへと愛機の足を下ろした。

——君は、GBNを、そのガンプラを愛しているのかい？

いつかチャンプが問いかけてきた言葉が脳裏をよぎる。

しかし、今のアイカであればそこに惑うことなく答えられる。

「コメントコアガンダム……ううん、違うー！」

カタパルトから戦場へ飛び出していく愛機の姿は確かにコメントコアガンダムを原型としていたが、その装備は大きく様変わりしていた。

アンテナはユニコーンガンダム3号機フェネクスのパーツを利用することで「精霊の冠」と呼べるほど荘厳な形状に、しかしその向きは原型機と同じであり、剥き出しだった肩にはSDCSウイングガンダムゼロ（EW版）からコンバートされた装甲が施され、そして。

「コアチェンジ……コメントトウフェアリィ、エボリューション！」

これがあたしの上に進むための翼、どこまでもこの世界を旅するあた

しの……『フェアライズガンダム』だッ！」

その背には、幅詰めや肉抜き埋めなどの工作が施された同キットからコンバートした真っ白な翼と、原型機から引き継いだ縁であり魂であるビルドボルグが接続されていた。

アイカが叫んだ、明日への翼。

主人の想いに応えるべく——【コメットコアガンダム】を核とした、【フェアライズガンダム】は雄々しくも可愛らしく、その翼を広げて戦場に白い羽のエフェクトを振りまいていく。

星屑から、願いを運ぶ妖精へ。そして、与えられたその力は戦場を切り裂く「妖星」たるべく、アイカは新造したアタッチメントである「コアバスターライフル・フェアライズ」を構えて、その号砲を戦鐘の代わりに、生まれ変わった愛機と共に戦場の空を羽ばたくのだった。

第四十三話 「架空の星の御伽噺」新たに描くフェアリー・テイル」

飛来した閃光をバックラーから展開したビームシールドで防ぎながら、直撃を受ければコックピットに穴が空いていたその威力にグラウカツツエは戦慄する。

『なんだ？ 事前の情報じゃ大火力砲はあのミネルヴァガンダムって機体が持ってたはずだが——サプライズってわけか！ オツケイ、ノってきた！ いくぜ！』

相対距離はかなり開いているだけでなく、直撃を受ければコロニーに大穴が空いていたことからわかるように、あれはブラフだ。

燃烧属性を伴っていない以上、ミネルヴァガンダムではなく残り三機のうちのどれかが撃ってきたはずだが、と、グラウカツツエが思案する間もなく、矢継ぎ早に飛んできた第二撃が、自分たちを絡めとらんと光の網を描くのを見る。

グラウカツツエの機体は、アメイジングストライクフリーダムをベースに、スラッシュウイザードやブレイズウイザード、そしてグフイグナイトッドの要素を組み込むためにモニター口の肩をそのメインスラスタ―としてドラグーンの代わりに取り付けた「イグナイトフリーダムガンダム」だ。

原型機と比較して、光の翼こそ失ったものの、瞬間的な超高速を制御するのではなく安定した高速と高い旋回性を維持しつつ弾幕を張り、味方を支援するカスタマイズは確かに「遅い」わけではない。

そして彼が従える三機のグフ、グフ・カスタム、グフイグナイトッド、そしてグフ・フライトタイプもそれは徹底的な作り込みによって同様であったが、地上を走るタイプの機体にオールレンジ攻撃は滅法効く。

辛うじて盾をその光に舐め取られるだけで済ませたものの先制パンチの被害を受けたグフ・カスタムを駆るダイバー……普段はベースを担当している「ギガンツ」はその圧倒的な長距離攻撃に思わず武者

震いをする。

『これが若さか……しかし、グラウカツツエ』

『ああ、ギガンツさん。近付けばオレたちの本領！ さあ、ギグはこれからだ！ こっから魅せてくぜ！』

オールレンジ攻撃の怖いところは意識の隙間をつくことであり、マニュアル操作のそれはまさに常時死角から狙いをつける無音の狙撃手だが、その代償として展開の限界時間と、防御陣形による一点突破を苦手とするという弱点は存在している。

そして、「イグナイターズ」のグフたちはグラウカツツエの近接援護を前提に機動力と装甲、双方を強化した代償として旋回性を失っているため、必然的にフアランクス陣形の陣形を組むスパルタのような密集隊形での突撃が主戦術となる。

エリイのフィン・ファンネルに紛れ込ませて、無線偵察機からグラウカツツエたちの通信を傍受していたチイが、筒抜けの会話を他の三人に中継しつつ、アキノのすぐ後ろに着く形でアイカとエリイから機体を先行させていた。

「つてなわけだ！ 今回の作戦、アキノ一人にタンクやらせんのは重いからチイも回避盾になる！ そこでだ……アイカ！ お前の秘密兵器とエリイ！ お前の連携を見せつけてやんな！」

恐らく敵のグフ・カスタムはグフ・フライトタイプと挟み撃ちにする形でアキノを足止めしつつ、グファイグナイトとイグナイトフリーダムが空中のアイカとエリイを分断、そのまま各個撃破に移るか、エリイにオールレンジ攻撃やトランザムを吐かせた上で彼女を撃破してツーマンセルの状況を作り出すのが勝ち筋だろう。

「了解チイちゃん！ 空中は任せて！」

チイの分析を聞きながら、アイカは再び出力を切り替えたコアバスターライフル・フェアリイを構え直し、エリイを守るように先行する。

今までのコメントコアガンダムの弱点は、味方を守るための広い視野をアイカが持っていなかったこと、そのための武器をコメントコアガンダムが持っていなかったことの二点が挙げられる。

だからこそ、アタッチメントを活かす形で出力可変式の武器をアイ

力は作成し、レンジを広げることで後衛のエリイとあまり距離を離さず十字砲火を狙うことをまず考えた。

予想通り、グラスランナーを空中からの「ハイドラ6ビームガトリング」による掃射で牽制しながら接近するグラウカツツエに、いつも通りメインカメラ、武器、そしてコックピットを狙った三点バーストでアイカはコアバスターライフル・フェアリーの単射モードを見舞う。

『なるほど、そいつがオマエたちの……いや、オマエの秘密兵器って訳か、アイカ！ 中タイカしてるじゃないの……！ アツキー！』
『了解した、グラウカツツエ！』

アツキーと呼ばれた普段はドラムを担当しているダイバーが駆るグファイグナイテッドは腕部のドラウプニルを連射しながら、アイカとエリイの射線から外れた「下」から潜り込む道を選んだようだ。

それを察知したエリイはフィン・ファンネルを射出してアツキーを足止めしつつ、遊撃に移りたいグラウカツツエをアイカと共に十字砲火で敢えてガードを誘発することでその足を止める、という戦術を選択した。

アイカが放ったコアバスターライフル・フェアリーの一撃はグラウカツツエが構えていたビーム突撃機銃を破壊し、コックピットとメインモニターへの直撃こそバックラーからのビームシールド展開で防いだが、これで射角の狭いバックパックのガトリングと腰部のレールガン以外にグラウカツツエは攻め手を喪失したことになる。

だが、アイカはそれを勝ちに繋がる一手だとは思っていない。そして、それはエリイも同様だ。

——グラウカツツエは、動揺していない。

相手が攻めを焦っているかどうか、それを悟らせないことこそがBからAへ上がる壁だと言われているように、とにかくセオリーを重視して自分の役割だけを完遂していれば自然と上がれるのがCからBへのラインなら、Bランク以上のランク帯は自分の役割を果たした上で、全ての戦場を常にとは言わずとも俯瞰して、相手がどの手札をどのタイミングで切ってきたかを図る必要がある。

そして、グラウカツツエは固められてもいい、という手札を切り、敢えて足を止めたエリーの元——と、見せかけてファンネルを掻い潜り、背後から羽根で視界が制限されやすいフェアライズガンダムを襲撃させたのだ。

『これでえっ！　へアーツ！』

だが、アツキーも中々のやり手だ。

単なる突撃ではなく、牽制としてかつ当たった時のリターンが大きいスレイヤーウィップをフェアライズガンダムに差し向けて、回避された時はテンペストによるクロスレンジへの飛び込みを裏括としてセツトした上で攻撃を行なったのだから。

それでも、敢えて彼の失策を挙げるとするならば、相手が悪かったことぐらいだろうか。

「信じてます、アイカさん……！」

エリーはアイカを援護するのではなく、動きを止めたグラウカツツエを金縛りにするように、ファンネルとビームライフルによる攻撃で更なる足止めを選択して、自衛はアイカに任せるといふ大胆な賭けに出たのだが、これももしコメントコアガンダムにアイカが乗ったままであったなら、失策として終わっていただろう。

しかし、アツキーが伸ばしたスレイヤーウィップは着弾の直前に細切れになり、ロックオンしていたはずのフェアライズガンダムは一瞬にして視界から見え失せている。

『何……!?!　いや、後ろか！』

「遅いっ！」

咄嗟に反撃を繰り出そうとするも、フェアライズガンダムがいつの間にか構えていたビルドボルグはテンペストビームソードごとグフイグナイテッドの右腕を切り裂いて、その姿勢を大きく突き崩す。

『一体どんなカラクリが……まさか、ドラグーン!?!』

「……SEED好きな人にはバレちゃうか」

アイカがフェアライズガンダムの「妖精の冠」に隠した機能、それはあの胡散臭い態度が悪い災害みたいの三拍子揃ったパーツ屋から購入したプラグイン、「ドラグーンシステム・ファクトリーカスタム」

を運用するためのサイコミュー機能だった。

ドラグーンシステム・ファクトリーカスタム。このプラグインの説明文を見た時、アイカは思わず頭を抱えそうになったことを覚えている。

確かストライクフリーダムのインストに書いてあった、「第二世代相当の性能で第一世代と同じく空間認識能力を必要とする」というその設定を忠実に再現したかの如く、そのプラグインは機体にドラグーンシステムを与えるものの、「ドラグーン化した武装における一切のオート操作が不可能になる」という致命的な制約を抱えていたのだ。どうしたものかと悩んだ末にアイカが出した結論は単純だった。

展開を簡略化するだけでいい。

ついでに自身に接近する敵弾があつたらビルドナイフとビルドカッターを飛ばして切り刻んでからコアユニットにリモートで接続し、コアユニットも出力の増強に伴ってビームサーベルとしての運用も可能となったのだから万一実体刃ドラグーン二種が打ち落とされても最低限の近接戦能力は確保できる。

そして今、体制を崩したアツキーに向けて、ウイングゼロを組み込むことで獲得した凄まじい空中機動力で斬りかかるフェアライズガンダムだったが、エリーの攻撃によるダメージを負いながらもアツキーを庇うことを選んだグラウカツツエの構えるビームジャベリンによってそれは阻まれた。

『いいパトスだぜ、アイカ……だがオレのダチはやらせねえ！』

『グラウカツツエ……！ すまない……！』

「……いいや、それは叶わない」

『何?』

「フェアリー・テイル！ リミテッドブースト！」

グラウカツツエはその瞬間、何が起こっていたのか理解できなかった。

確かにイグナイトフリーダムとフェアライズガンダムはビームジャベリンとビルドボルグによる罅迫り合いを行っていて、瞬きをするまではモニターにその閃光が走っていたはずだ。

だがそれは一瞬で消え失せて、体制を崩した自分と、背後に急降下する形で回り込み、ビルドボルグの先端からビームサーベルを発振するフェアライズガンダムと、接続状態から分離した刃が自身を包囲する光景がある。

『グラウカツツエーッ!!』

『アツキー!? オマエ……っ!』

『ヌヴオオオオオ!!』

だが、すんでのところアツキーは最後の力を振り絞ってグラウカツツエを吹き飛ばし、ビルドボルグ・ビームサーベルモードによるバックパックの一部損傷という形にイグナイトフリーダムの被害を食い止めて、自身はビルドカタターとビルドナイフ改め、ビルドドラグーンA、Bに片腕と頭部を、そしてエリイからの追撃でコックピットを撃ち抜かれて、アーモリーワンの空にその笑顔を浮かべながらやたらうるさい断末魔と共に爆散する。

『は、はは……スゲエゼ! アツいな、「リビルドガールズ」! どんな手品を……使った!』

ビームジャベリンの先端からビーム・ワイヤーを射出し、フェアライズガンダムの翼を絡めとうとするグラウカツツエが叫ぶ。

アイカが使った手段は単純だった。

システム・フェアリイ・テイルを部分的に、具体的には腰部スラストとメインスラストから点火するにとどめて、ウイングゼロの優れた上昇能力と合わせて、敵機の眼前で急上昇して直上を取り、あたかも姿を消したかのように見せかけただけだ。

そして、真上という死角を取られた敵は本能的に動揺し、対応が遅れる。そこに急降下攻撃を仕掛けられればたまったものではないし、よしんば回避されたとしてもドラグーンとの連携やビルドボルグによるラツシユに繋がられると、あの「ワールド」が使っていた「次元霸王流・聖槍蹴り」の理屈を自身の機体に応用しただけの話だ。

上位の戦いは、いかに有利を取れるかに限られる。

もちろん、取った有利が簡単にひっくり返されて逆転という劇的な結末もあり得る話だ。だからこそ、「三桁の英傑」「二桁の魔物」「一桁

の現人神」はそれらを嫌って、自身が防衛者となる時は徹底的に「負け筋を潰す」戦いをするし、挑戦者になつたとしても基本は変わらない。

だからこそ、ガードさせてなお有利であるエリイとの連携、そして急襲からのラッシュユコンボと、全て有利を取れる、無駄のない動きをアイカとフェアライズガンダムは選択していたし、エリイはそれを後衛として固める立ち回りに専念していたのだ。

地上での戦いは、上手く二体一を取ろうとする「ギガンツ」ともう一人、キーボード担当にしてグフ・フライトタイプを駆る「パツカー」に対してチイがビームマシンガンによる牽制を行い、ギガンツが引き付けている間にパツカーが直上を取ってタンクを狩る、という奇しくもアイカとよく似通った戦法を巧みに封じていた。

言うまでもない。自分たちは追い込まれている。

初めてそれを自覚したグラウカツツエのこめかみにじわりと脂汗が滲み、恐れではなく高揚感が心臓に早鐘を打たせている。

そうだ。このブラストビート。

「アイカさん！」

「わかった、エリイちゃん！」

味方同士で罵り合ってキルステイルも辞さないような、勝ちしか見えてない奴らじゃなく、この世界と互いの絆を愛しているからこそ最適解を導き出せる、強敵と書いて友と呼べるダイバー。

このギグをこそ、オレは待っていたのだ！

内心で咆哮すると、グラウカツツエは躊躇うことなくその切り札を切った。

『わりのいが……死中に活、見出させてもらうぜ！ イグナイトフリーダム、レボリユーシオンだ！』

その叫びと共にグラウカツツエは必殺技の発動を選択し、灰色に落ち着いていたイグナイトフリーダムの関節がオレンジメタリックに発光、片肺を失っているとは思えない速さで、光の翼にも似たスラストターエフェクトを噴き出しながらフィン・ファンネルの包囲を掻い潜って、トランザムを咄嗟に発動して距離を取ったエリイにビーム・

ワイヤーによる奇襲を仕掛ける。

『もらったアーっ！』

「……きやあっ……い！」

その一撃は確かにリビルドウォートのビームライフルを絡め取って破壊し、発生した爆炎からモニターやコックピットを守るために盾を構えていたエリイをそこに釘付けにすることに成功していたはずだった。

「エリイちゃんを……いじめんなあっ！」

『何、速いぞ?!』

だが、フェアライズガンダムの機動性はもはやその名に冠した通り、ソラを自在に飛び回る妖精のそれだ。

コメットコアガンダム時の陸戦能力を少し削る形で、アイカは空中での機体性能を伸ばすカスタマイズにビルドの方針を変えたのは、ひとえにエリイの孤立しやすさゆえだ。

遊撃手は戦場を自由に駆け回れるが、それ故に孤立しやすい。

そして、後衛という都合上味方から距離を取り、場合によっては壁を背負うという危険と隣り合わせの選択肢を取ることも辞さないのがエリイの立場である。

ならば、遊撃前衛として自分にかけていたものは何か？

架空の空、そしてその中に描かれたコロニーという虚構の大地に浮かぶ空を二つの流星が、否、妖精の羽が描く奇跡と革命の光が描く翼が己の誇りをかけて、直角軌道を描きながら激しくぶつかり合う。

「これが……あたしの描く新しいフェアリー・テイル！ 翼を広げて空を飛ぶ、あたしの……エリイちゃんのために描く物語！」

何のために。ずっとそれを問い掛け続けてきて、捨て続けてその度に涙を流して泣き続けた人生だったが、電子の海に掲げたそれこそがアイカの最終解答だった。

グラウカツツエは最早自身の不利、否、詰みを悟っていた。

相手が必殺技らしきものを起動したのは「消えた」一瞬だけで、それ以降は全て素の機動力と小柄な体軀を巧みに活かした接近戦に持ち込んで、その小さな身体からは信じられないパワーで、イグナイト

フリーダムに悲鳴を上げさせている。

あれはメイヴだ。妖精の女王だ。

だが、グラウカツツエの心は悔しさよりもむしろ高揚感で満たされていた。

誰かのために描く物語。そんな、綺麗事に聞こえるかもしれないことを本気で信じて実行してる奴がいる。

このGBNを愛して、その空を、その世界を旅するためだけに妖精の羽をくり上げた奴がいる。

そしてそんな愛と自分の愛をぶつけ合う戦いが今なのだ。

喜びこそしても悲しむ道理はどこにある。グラウカツツエは高らかに笑いながら、自身の首にその大鎌を突きつける死神の手を取って一緒に踊りたい気分ですえあつた。

『サイコーだ……サイコーだぜ、アイカ！ エリイ！ オマエたちの愛は、そのパトスは剣から、ファンネルから！ 何より目から、ビンビンに伝わってきやがる……！ だがなあっ！』

だからといってここで黙って、はいそうですかとやられるわけにはいかない。

グラウカツツエはブーストアップしたジャベリンに全ての出力を集中させて、直撃すればコロニーごと崩壊するような光の柱とでもいうべきものを作り上げる。

黄昏の魔槍。それこそが彼の奥の手であり、真の必殺技だった。

『わかるよな、アイカ……エリイ！ 全力で来い！』

「グラウカツツエさん……なら、見せてあげる！ エリイちゃん！」
「はい！」

応えてやる必要などないのかもしれない。

この状況であの大技をぶっ放すなんて戦術のセオリーとしてはナセンスだし、あの「ワールド」のようにそこから巻き返しも何も考えていない、策としては下の下もいいところなやつぱちでしかない。

それがわからないアイカではもうなかった。だが、ここであの必殺をコロニーを犠牲にしてやり過ごすことで、全てのエネルギーを使い

果たして動きを止めたイグナイトフリーダムを淡々とビームサーベルで屠ったところで、それは面白いのか。

面白いと答えるのならそれもまた真理なのだろう。だが、このフォース戦に大量の賭け金を承諾してくれたのは、グラウカツツエが自分たちに「愛」があることを前提としての話だ。

だからこそ、アイカはそれがナンセンスだと知っていても、敢えてその挑戦を真正面から受け止めることにしたのだ。

エリイのリビルド・パワーゲートが形成されたのを確認すると、アイカはその全身から、今度は全力全開の「システム・フェアリー・テイル」を起動して、擬似感覚のフィードバックが切られる限界まで、Gによる圧迫感を食いしばりながら耐えて突き進んでいく。

そう、更なる翼を得たのなら、これは新たな物語。

『ありがとうよ、アイカ……行くぜ、これがオレの黄昏の魔槍……ミーティアス・ジャベリンだアっ!!!』

「これが、あたしの……」

「わたしの……!」

『再び描き、その結末を迎える物語!』

アイカとエリイは声を合わせて、記された物語とその結末につけるべき名前を叫ぶ。

『フェアリー・ストライク……ブライド!!!』

これが冠を頭上に頂き、妖精の羽という光のヴェールを身に纏い、トスされた花束のゲートを潜って迎えるブライドという結末。アイカとエリイが夢に見た、フルメンヘラコンピネーション極大必殺突貫攻撃だった。

パワーゲートを通ったアイカは、フェアライズガンダムはもはや一個の機体という枠を超えて振り下ろされる剣そのものだ。

そうでなければ純粹なエネルギーの塊だろう。己全てを剣と変えて、全てを捧げてその後には何もなく、勝利を掴めねばそこで無惨に果てるだけの乾坤一擲を成す一撃だ。

それは果たして星をも縫いとめる槍を打ち砕いて、相對する敵機を呑み込まんと、流星を通り越し、彗星を乗り越えて、一個の燃える遊星となったフェアライズガンダムが、打ち砕いた光の槍ごと、イグナ

イトフリーダムのコックピットごと、グラウカツツエを灰塵に、元初宇宙の砂へと帰せしめていく。

『うおおおおおーッ!!!』

断末魔を上げながらもグラウカツツエは、そこにどこか導きの星が瞬くような神聖さを感じてさえた。

紛れもなく燃える、全てを飲み込んで破壊するほどに危うくも美しい愛がそこにある。そしてその愛と矛先を、文字通り何も残らないほどの全力で撃ち合って負けたのだ。

ならば、それをどうして悔いることができるか。いや、違う。

悔しいのだ。だが、同時にそこまであの小さな機体に燃える天体のような力を宿し、愛によってそれを形にしたアイカが、エリイが、GNを愛してくれていて、ここにいるという事実が誇らしいのだ。

グラウカツツエの中でそれは矛盾しない。

故に彼は、誇り高き敗者となることを選んだ。

妖精の羽が散っていく光のそれと、ウイングゼロの翼がはためく度に発生する羽根のエフェクトに包まれながら、イグナイトフリーダムのテクスチャは霧散していく。

『最早ここまで……ならば、我らも!』

『グラウカツツエ……戦いの中に、愛を思うか……!』

残されたグフ・カスタムとグフ・フライトタイプのコンビもまた必殺技の発動を選択し、二つのヒートロッドを束ねた稲妻の鞭を、何度挟撃を受けても倒れることなく、小さな斥候との連携で、グラウカツツエが落とされるまでチームの盾となった勇者たちの力を試すべく振り下ろした。

「……アイカさん、これを!」

だが、勘違いをしている。

アキノとチイがこの戦いで果たすべきは盾。あくまでも遊撃による決着は遊撃手によって付けられなければならない。

グラウカツツエを撃破しても尚止まることなく剣を構えたアイカのフェアライズガンダムの背中を押すように、エリイが射出した残り二基のファンネルと、アキノが投擲したIフィールドソードが新たな

パワーゲートを作り出して、燃え尽きようとしていたフェアライズガンダムへもう一度その空へと飛翔させるだけの力を供給する。

アイカはもう目の前が真っ白になりそうまで、気を抜けばGのフィードバックを受けすぎて、油断したらコックピットの中で吐いてしまっただった。

だが、エリイの意図とアキノの意図を汲んで歯を食いしばると、もう一度——グフコンビが振り下ろさんとする稲妻の鞭ごと切り裂くべく、機体を加速させる。

「……アイカさん……頑張つて……！ わたしの、アイカさん！」

「……エリイ、ちゃん……あたしの……たった一人の、大事ななああああつ！」

『何を……ッ!?!』

「……はあ、ゲホッ……ゴホッ……つぐ、エリイちゃんのために……」

『ぬううううっ!?!』

「死ねえええええッ!!!」

——フェアライ・ストライク・ファイナーレとでもいうべきか。

ちやつかりと自身の武器も即席パワーゲートの中に放り込んでいたチイが、稲妻の鞭……「サンダーボルトロッド」を引き裂いて、二機のグフを一息にテクスチャの塵へと変えたその反動を受けながらも、ボロボロのビルドボルグを支えに膝を突いてこそいたが、確かに地面に立っているフェアライズガンダムを見てニヒルに笑った。

【Battle Ended.】

【Winner:リビルドガールズ】

意識を手放しそうになるのを堪えて、アイカはそのダイアログを確認する。

勝つたのだ。フェアライズガンダムは、そして、リビルドガールズは。

「おめつとさん、アイカ」

「よく頑張りました、貴女は……」

「……アイカさんっ……!」

ああ、そうだ。

ずっと——ずっと探してて、できてたつもりになって、独りよがりの一人相撲ばかりを続けてきた人生だったけど。

探していた星は、確かにここにあったのだ。

アイカは自分の一番近くで瞬くその美しい星々と、自身がこの戦いでその手足として魂を捧げたその架空の星に祈りを捧げながら、ただ静かに、沸き起こる充実感とでも呼ぶべきものに、使命を、ミッションを達成した感覚に身を任せて、そっと涙を零すのだった。

第四十四話 「ご」利用は計画的に〜ホーム・リビルド・スウィート・ホーム」

こいつは、強力すぎる。

映像作品「機動戦士ガンダムF91」の劇中で、ビームシールドごと相手をぶち抜く威力を持った武装である「ヴェスパー」を放った主人公、シーブック・アノーが無意識に呟いていた言葉だ。

ヴェスパー……ヴェスパーだのベスパーだのとよく間違えられるそれは「Variable Speed Beam Rifle」の略称であり、出力調整で射出するビームの速度を変えられるからヴァリアブルのVでヴェ、ビームのBとライフルのRでバーなのだと一部の熱狂的なファンが鼻息を荒くするほど名前を間違えられやすい代物なのだが——今はそれは置いておこう。

アイカが試合後に抱いた雑感は正しく、シーブックが呟いていたことと同じものだった。

フェアリー・ストライク・ブライドは確かに強力だ。

相手もやたらとデカイ光の槍を構えてくれたことがビーコンになってくれたおかげで方向を見失わずに済んだが、これがコロニーという密閉空間かつ狭い場所であることを鑑みれば、一種の奇跡だといっても差し支えがないほどに、パワーゲート通過後のフェアライズガンダムは速い。

もし迂闊に要塞内部など、破壊不可能オブジェクトがある場所でもむろにぶつ放していたら、アイカは、恐らく壁の染みになっていたのではないかと不安を抱いていた。

真に恐れるべきはフェアリー・ストライク・ブライドに近いスピードやそれ以上のスピードを常時制御した上でハリケーンの如く周囲に災害をもたらしている英傑や魔物、そして現人神たちなのだが、彼らは最早例外なので考えない方が精神衛生に良い。

ただ、エリイとの連携をより強固に、そしてそこからの必殺技を更なる規模へと拡張するというフェアライズガンダムのコンセプトを

考えれば、デビュー戦の戦果は上々だったといっても過言ではない。だが、その代償は大きすぎた。

「……つぶ、ごめんチィちゃん、あたしちよつと吐きそう……」

「まああんだだけGがかかってりやあな、とりあえずグラウカツツエの旦那にはチィが話つけとくからその辺でエリィと一緒に休んどけや」華々しい勝利をその手に納めたのにも関わらず、アイカは擬似感覚のフィードバックによってほぼグロツキーになっている。

あの速度を制動するためにかかる負荷はほぼフィードバックが切られてログアウト措置が取られる限界域に近く、それをいきなり慣れない初心者……からはだいぶ飛んで中級者と呼んでも差し支えなくなつたとはいえ、初めてのアイカが完璧に御せるかといわれればその答えは今、青ざめた顔でロビーの壁に体重を預けて、エリィに甲斐甲斐しくその丸まった背筋を撫でられている姿こそだろう。

正直ここまできついとは思わなかった。

アイカはエリィが涙ぐんでなんども「大丈夫ですか」と問いかけるのにあー、とも、んー、ともつかない返事をするのが精一杯で、一つ壁を乗り越えたとはいえまた新しく壁が現れてきたような感覚に、呆れるような楽しみなようなそんな複雑な感情を、覚える。

確かに今も絶え間なく吐き気が押し寄せていて、ここで吐いたら口グインするのが自宅ならともかく今日はガンダムベースだから色んな意味で洒落にならない。

全身全霊で吐き気を堪えつつ、アイカはエリィに大丈夫だよ、と与えるために口元を覆うのに忙しい右手ではなく、ふるふると震えながらも空いていた左手で親指を立てて答えてみせる。

「いいやその必要はないぜ、チィ……そしてアイカは上級者に仲間入りする最初の壁にぶち当たったか」

「お、グラウカツツエの旦那。ご足労いただいてわりいですがな、まあ見ての通りうちのリーダーはグロツキーなんで不肖チィとアキノが戦後交渉は代理人を務めさせていただきまっせ」

「なぜしれつと私を巻き込むのですか……」

しれつと姿を現したグラウカツツエと、自分もブリューナクを制御

する時に似たような感覚に陥っていたなど、飲料水をインベントリから取り出しながら、アイカの吐き気が落ち着くのをそつと見守っていたアキノだったが、チイから飛ばされてきた火の粉にその表情は呆れに変わっていた。

「ははは、構わねえぜ、オレもイグナイトフリーダム、そのレボリユーションを使い始めたときはグロツキーになっちまったもんだからな。それじゃあ改めて……いいギグだったぜ、『リビルドガールズ』。報酬の50万はちゃんと振り込んだから確認しといてくれよな」

「ひーふーみーよー……確かに確認しましたぜグラウカツツエの旦那、そんじゃありーダーに代わつての挨拶つてことで……グッドゲームでしたぜ」

「良き試合でした。また何か機会があればもう一度剣を交えたいものです」

「ははは！　そう言われるとちよいと悔しいけどな、だからこそもつかいやりてえつて思えるライバル……いや、ダチと出会えたんだ。オレも普段は『ハイウインド・エリア』のメガロポリスで流しの歌歌いをやつてるんだ、よけりや見にきてくれよな」

最後まで爽やかに笑うと、グラウカツツエは報酬を振り込んで踵を返して、恐らく彼が拠点としてるのであるうあの不夜城へと戻るべく、雑踏へとその姿を溶け込ませていく。

——ぜつてーやだ。

恐らくアキノを除いて、グロツキーになっている方と介抱している方の、仲良し二人組はチイがぼそりと呟いていたその言葉には同意していたことだろう。

別にグラウカツツエが嫌いではないしむしろ好感すら抱いている良い男なのはアイカもエリイもチイも認めるところだったが、何せあのデイメンションのあのエリアにはロクな思い出がないのだ。

ゲーミングに発光しながら襲いかかってくる鳥型のガンプラとそれを駆る全身タイツに鳥頭という紛れもない変態の編隊にして最速を追求する紳士たちのことを思い返しながら、チイはそつと溜息を吐き出した。

一応、アイカの提案もあって放送されたあのバエルお嬢様と「パロツツ・パーティー」の決戦はそれなりにあの狂った最速の世界へと身を投じるレーサーを呼び込んだらしく、中でもリーオーを改造したレーシングモデルを駆るダイバーは有望株で、一回敗北を喫したという報告が文面の時点であるさいメッセージで、「リビルドガールズ」にハートから送られてきたのを覚えている。

蓼食う虫もなんとかかんとかと人間はいうらしいが、それにしたって偏食が過ぎるだろうと、チイは再び脳裏をよぎる記憶に頭を抱えるのだった。

「……まあとはいえ旦那への義理もあるんだ、行かなきゃいけねーんだらうな……」

「珍しいですね、チイがそのような話をするのは」

「あ？ いや50万BCなんて金額出してくれたのなんて、アイカたちへの何かしらもあったんだらうけどふつーに考えたら自分たちの名前を売りたいからっしょ、なら受け取った金額分のはすんのがチイたちの義理つてわけ」

「なるほど、確かに一理ありますね」

とはいえ以前のチイならそれを無視して絶対にあのメガロポリスに近寄ることはなかったのだろうと、アキノは静かに微笑む。

基本的には金勘定と金額に応じた行動しかしないと思っていたチイだが、今も口こそ悪いものの、初めて出会ったときのどこかやさぐれていて隙あらば自分たちを道具にしようとする剣呑さは薄れているように、アキノには思えた。

あの「パロツツ・パーティー」の人々も悪い人々ではないし、この機会に以前の雪辱を果たすのも悪くはないかもしれない。

それでも渋い顔をしているチイと、グロツキーなどところを追い打ちされたかのように鳥の幻影にうなされ始めたアイカと、それで目の幅涙を流しながら彼女に抱きついて「死なないでください、アイカさんが死んだらわたしも死にますから」と繰り返しているエリーのことは視界に入らず、アキノは一人でふんすふんすと待ち受ける再戦の予感に気合いを入れているのだった。

やっぱこいつ底抜けの鈍感女だ、と、チイが呆れたように肩を竦めて呟いていることにも、気付くことなく。

「あー……死ぬかと思った……てか仮想の世界で死んだら人間どうなるの……？」 仮想と現実の違いって……？」

「……あ、愛香さん……変な扉、開きかけてます……おねがいです、戻ってきて……」

ガンダムベースを出ても尚頭の中がぐわんぐわんと唸りを上げて高速回転しているような感覚に苛まれながら、愛香は変な扉を脳内で開きかけながらも、いつも通り絵理とその帰り道を共にしていた。

普段であれば目が見えない絵理を先導するべく、愛香は彼女の目になつて歩いているのだが、今日はふらふらと足元がおぼつかないために、申し訳ないが絵理には一人で、なるべく転んだ時に巻き込まれない程度の距離を保って、埠頭にかかる巨大な橋、その歩道部分を歩いていた。

バージョン1・78は神アプデと名高いものの、この高速戦闘によるGのフィードバックに関しては今も賛否が分かれている。

曰く、それまでの環境でトランザムやNT-D、土星エンジンのような機動力を上げるパーツが強すぎたから腕が伴ってないと使えないようにするのは妥当だとか、曰く、いやいくらなんでもこれはやりすぎだろうだとか、そんな意見がスレッドを蹇々諤々と飛び交うことは珍しくない。

そうしてアクティブ二千万もいる以上、その仕様に抗議する過激派からの怒りのメールボムは運営に日々叩きつけられ、ガンダイバー姿のGMは頭を抱えているのだが、それは愛香たちの知るところではなかった。

「あー、目が回る……つと、うわっ!？」

「あ、愛香さん……っ!？」

油断をしていた。

おぼつかない足元が愛香の左と右でそれぞれ絡まり合つて、愛香は車道の方へと倒れ込みそうになる。

だが、絵理は距離が離れているためにそれが見えなかった。かろうじてびつくりしたような愛香の悲鳴で、何かがあったことは察せられたのだが、声のする方に行こうにも車道との距離感を白杖で測りながらでなければそれもままならないために、出足が遅れてしまった。

だが。

「……その、大丈夫ですか」

死んだと、そう思っていた。

死の予感に対して愛香の心臓がばくばくとブラストビートを刻む中で、その淵から掬い上げるかのように、どこかぶつきらぼうながら優しさを感じさせる声音が彼女の耳朵にそっと触れる。

「ああはい、すみません……って、あれ？」

「あ……」

「なになに、ヒロト？ 急に走ってどうしたの？」

いわゆるお姫様抱っこのような姿勢で気がつけば、同じ学校の制服に身を包んだ少年に、愛香は転んでもつれたその体を抱き留められていた。

そして少し遅れて、少年——クガ・ヒロトを追いかけるように、今日は愛香と入れ替わりでG-Cafeのシフトに入っていた同じ学校の少女、ムカイ・ヒナタがぱたと駆け寄って来る姿が視界に映る。

愛香が話したこともなければ名前しか知らないクガ・ヒロトと、簡単な業務についての話や引き継ぎ、そして当たり障りのない会話をしたことはあるムカイ・ヒナタだが、彼らも同じ方角からやってきたということは、バイトがあつたヒナタはともかくヒロトもガンダムベースにいたのだろうか。

まだ耳鳴りの残る頭で、ようやくたどり着いた絵理を心配させまいと立ち上がりながら、愛香はヒロトに頭を下げる。

「助けられちゃったね、ごめんなさい。そして……ありがとう。クガ君でいいんだっけ？」

「……ヒロトでいいよ、クガって呼ばれるの、慣れてないから」

「じゃあありがとうヒロト君」

「えつと……朝村さんが助かったならよかった、行こう、ヒナタ」

ヒロトの言葉は相変わらずぶっきらぼうで、愛香のことも助けた瞬間しか見えていないようなその茫洋とした視線はしばらく宙を彷徨って、ヒナタの瞳に固定される。

彼がどうしてそんな瞳をしているのか、どうして彷徨い続けているのかは愛香にはわからないし、そこに踏み入る資格もきつと持っていないのだろう。

心配そうに大丈夫でしたか、と愛香に声をかけつつも彼を追ってばたばたと走っていくヒナタと、歩き続けるその背中から哀愁を漂わせるヒロトのそれに、愛香はどこか中学三年生の自分を重ねていた。

今の自分なら、ヒロトに対して何かしてあげられることはあるのではないか。

そう思う心がなかったかといえは嘘になる。

彼の問題はきつとヒナタにしかわからないのだから、いつも通りに放っておけばいい。

そう思う心もなかったかといえは嘘になる。

優しさと冷たさ、冷淡と温情。背反する感情が愛香の胸中で渦を巻いている間にも、二人の背中はずがかっていく。

「あのー！ ヒロト君！」

「……朝村さん？」

「ヒロト君も、GBNやってるの!？」

気づけば、叫んでいた。

遠く離れていく黄昏が地面に落としたその影を縫いとめるように、愛香はただ一心に、彼の名前とGBNという、細く、途切れてしまいうような自身との接点を問いに乗せて、言葉を紡ぐ。

「……ああ、うん。朝村さんは……」

「ヒロト？」

「……何か見つかったみたいで、良かった」

困惑するヒナタをよそに、短く、ぶっきらぼうに、それでも決して突き放すのではなく、そこに何かあるものを、否、何かそこにあつた

ものを愛香の瞳の中に見つけ出したかのように眩くと、ヒロトは微かに笑みを浮かべ、踵を返して家路に戻っていく。

見つかつて良かったと、愛香にそう告げたということは、彼の探し物はまだ、見つかりそうにないのだろう。

クガ・ヒロトという少年が今もあの電子の海を彷徨い続けている理由の一端に触れたような、触れてしまったような気がして、愛香はそこにそれ以上の言葉を見出すことはできなかった。

「……愛香さん」

「……きつと皆、いろんな理由があつてあの世界にいるんだね」

心配そうに、立ち上がった愛香がまた倒れてしまわないように制服の裾を左手で掴んだ絵理が、消え入りそうな声でその名前を呼ぶ。

ああ、そうだ。

きつと皆いろんな理由を抱えて、あの電子の海を彷徨つて、仮想郷の中ではダイバーとして理想を叶えたり、叶えられなかったりして、楽しんで、苦しんで、そして現実に戻ってくる。

あの架空のソラは電子の世界に貼り付けられたテクスチャで、今も回り続けているこの地球のそれとは物理的に繋がっているわけではない。

それでも、姿を変えようがロールプレイをしていようが、この世界とあの世界を繋いでいるのは自分たちに他ならない。

寂しげに俯く絵理の頬に愛香はそつと右手を添えて、絵理がぴくりとその感触に反応し、給餌を待つ雛鳥のように震えながら薄い唇を微かに突き出してくるその仕草を返事として、自分のそれを重ね合わせた。

悲しいほどに自分たちという存在は弱くて脆い。

一人で何でもやろうとして、何でもできると信じて、壊れかけていた愛香の心には今も無数のヒビが走っているけれど、こうして絵理と一緒に時間を過ごして、すっかり癖になってしまったキスを交わしている間だけはそれを忘れられるような気がするのだ。

今度は絵理が愛香の唇を割って入れてきた舌でその輪郭を飾っているのは、不透明なこの世界で愛香が消えてしまわないようにつなぎ

とめるためであり、そしてその証明であり燃料に、自身の愛がそこにあると示すために。

返して絵理の舌と絡めあった愛香のそれは、どこにも行かないと、決して絵理以外の誰かを好きになることなんてあり得ないという、同じ傷を見せあった同士の、文字通りその舐め合いであり、人がきつと道化芝居だと皮肉に笑うのかもしれない行いだっただ。

だが、幸せに本物と偽物などどこにもない。あつたとしてもそれを決めるのは他人じゃない。

「……つぶ、愛香、さん……」

「つぶあ……大丈夫。あたしは絵理以外のことなんて絶対好きにならないよ」

恐らくは駆けつけてきた彼に対する嫉妬でむくれていたのだろう。

そんな彼女の欲深く、独占的で危うい、自分との繋がりが切れてしまえばその命まで断ちかねない一面まで含めて、愛香は絵理を愛しいと思っている。

だって立場が逆だったら、あたしも嫉妬してたし絵理に大嫌いですもう二度と近づかないでください、なんて言われたら、今度は迷わずに窓から飛び降りて死を選ぶだろうから。

愛香は微かに苦笑を浮かべながら、まだ少しむくれている絵理の額にそつとキスを落としてみせる。

「……よかった、です……えへへ……」

「あたしも……絵理が彼女でよかったよ、絵理が彼女じゃなかったら、きつとあたしは……多分、探し物をずっと見つけれなかったのになつて。まあその探し物がなんなのかはわからないんだけどね」

見つかったけれど名前がない。映画に出てくる行方不明者のようだと愛香は笑う。

ならばこれからもGBNに潜り続けるのは、絵理と一緒に時間を過ごすため、もつと楽しく、強くなるための最優先になるのだろうけれど、ジェーン・ドウなその感情に名前をつける旅路になるのかもしれない。

そして、きつと。

「そうだ絵理、ラムネ買って帰ろうよ、うち今日もお母さんいないから」

「……いいいんですか……？ わ、わたしも、お母さんが、お仕事なので……」

「そっか、じゃあどっちの家に行く？」

「……愛香さんで！」

「即答かあ」

「……え、へへ……愛香さんのおうちと匂い、だいすきなんです……」
「そっか」

なんだか匂い、という言葉を使われると複雑になってしまうのが乙女心というものだが、絵理はきつと純粹にいい意味で褒めてくれるのだから、それはきつと喜ぶべきことなのだろう。

家の匂い。

ずっと、無味無臭で、愛香以外に誰の帰りもなく、たまに母が帰ってきては疲れたその体を休める棺のように使っているだけの空間だった。

それでも絵理と付き合いだしたその時に、家は愛香の中で帰るべき場所として確かにその定義を再構築されたのだ。

あたしも絵理のいい匂いが好きだよとばかりに、その牛乳と石鹸が溶け合ったような香りを脳裏に刻み付けるように、愛香はもう一度絵理と無言で深いベーゼを、夜の約束を刻んで、同じ家路に戻っていく。きつと、一人じゃ生きていけないから。

名前はわからなくとも、最終解答が導き出したその結論を、二人でその胸に分かち合いながら、これから待つ楽しみに心を踊らせて少しだけ足早に、二人は駅を目指して歩いてゆくのがあった。

第四十五話 「あの忘れえぬ日々、彷徨える黒銀の剣」

がむしやらに夢を追いかけていた日々のことを覚えている。

自身の機体をカモにせんと六十に渡るその数で包囲殲滅を試みってきたハードコアディメンション・ヴァルガの汚点にしてGBNの恥部と呼ばれて憚らない「モヒー・カーン」の率いる軍団をその二刀流でなます斬りにし、背後や死角からの強襲は「ドラグリーン・インコム」で撃ち落としながら、ダイバーネーム、「リヒト」はその満たされない感覚に飢えているかのように咆哮する。

「お前たちはGBNを汚すシミだ！ 悪質なミッションを作る奴とグールになって初心者を騙して数の暴力で押しつぶすことをなんとも思っていないクズだ！ だからこそ、俺は……この銀の誇りとガンダム・エリュシオンに懸けて、お前たちを許しはしない！」

『吠えてんじゃねえぞ厨二病！ 最近シルバリイの残党を見なくなつたと思つたら……ふざけやがって！ まだ生きてやがったのかこの自治厨共がア！ 迷惑なのはテメエらなんだよオ！』

どのツラを下げて、と突っ込みたくなること請け合いの表情でカーンは咆哮しながら単騎で実に六十という軍勢と対峙し、大した傷を負うこともなくその大半を殲滅しているリヒトに憎悪を向けていた。

ザ・シルバリイ。それはかつてこのGBNに存在したフォースの名前であり、今はどこにも存在しない、リヒトが黄金の夢を見続けているあの日々を過ごした居城であり騎士団を示す名前だ。

二年前、ブレイクデカールと呼ばれたチートツールがGBNに蔓延した時、その力を誇示することで今のカーンたちと同様、始めたての学生グループのようないたいけな初心者たちをチートの力で罫り殺すという出来事が相次いで、その被害者の中にたまたま「GHC」の総帥を務めるダイバー、「アトミラール」の娘がいた、ということがあった。

そしてたまたま、リアルでの取引先である、アトミラールからその話を聞かされたのが、後にGBNの中でも極めて強力で秩序的なフォースを結成するその嚆矢となったダイバー、今はもういない

「ビーティース」だったのだ。

ビーティースと、彼が駆る愛機である「クロスボーンガンダムX0
アサルトゴースト」は、単騎でブレイクデカールを使用したマスタ
イバー——極端な話Dランクのダイバーが使えばAランクやSラン
クすらも圧倒しうるそのチートツールを使つた者だ——を恐るべき
ことに単騎で殲滅するだけの力を持つていたため、同じくマスタ
イバー狩りをその生業としていた男、「アインソフ」と並んで、それぞれ
「地獄の門番」「銀の幽霊」としてマスタイバーたちから恐れられて
いた。

そして、リヒトもまた、ビーティースに救われた者の一人だった。

忘れもしない。初めてGBNにログインした時、ガンダムメーカー
で塗り分けた雑誌の付録である大剣、「フェザーブレイド」を持たせた
フリーダムガンダムを、ただ組んだだけの旧キットであるシャア専用
ザクが一瞬の内に化け物のような姿に変わって追い詰めていく光景
を。

自慢の剣はそのビルドアップされた装甲に届くことなくへし折れ
て、手足もまたビニールをちぎるようにもぎ取られて、迎撃のバルカ
ン砲すらその咆哮に阻まれて届かなかつたという屈辱を、リヒトは恐
らくこれからも忘れることはない。

だが、同時にリヒトは覚えている。

もうこのゲームにログインしたくないとすら恐怖を感じて目を閉
じた瞬間に、ブレイクデカールで強化されているはずのその装甲を突
き破つて、コックピットを一撃の元に貫いていた「銀の幽霊」の、そ
の勇姿を。

だからこそ憧れた。弱者を守るために己の身をその剣として、理不
尽を敷く者に抗い続けるビーティースの姿勢と、自分のような始めたて
のダイバーにすら紳士的に接してくれたあの人柄に。

迫りくるモヒカンの群れを流れ作業のように殲滅しながらも、リヒ
トの脳内に見えているものはいつも、シルバリーとビーティース、そし
て。

「アキノ……お前は今どこで、何をやってるんだ！」

湧き起こる怒りに任せて「モツヒー」のライセンスを両断しながら、リヒトは咆哮する。

そう、いつも彼の頭の中にあるのは自分と同じぐらいに、GBNの秩序を重んじていた金髪の女性——かつては二刀流という、今のリヒトと同じ戦闘スタイルだったダイバーのことだけだった。

リヒトはビーテイスに憧れて、彼の元に半ば押しかける形で弟子入りを志願して、それが「ザ・シルバリー」の原型となった。

リヒトと同じく志を持つ者がビーテイスの掲げた旗のもとに集うことでいつしか、名前を持たない「銀の幽霊」の寄り合い所帯は銀の騎士団と書いて「ザ・シルバリー」と読ませる、という名を持つようになり、そこには血よりも重い「銀の掟」が出来上がっていった。

ビーテイスはその辺りからずっと「ザ・シルバリー」の在り方に疑問を抱き続けていたのだが、リヒトも、そしてアキノも、恐らくその当時シルバリーに所属していたダイバーの大半が、それに気付いてはいなかったのだろう。

曰く掟の一つとして、我らはGBNの守護者である、我らはGBNの秩序と安寧をこそ重んじる者である、故に全ての違反からGBNを守るためにその剣を振るうものとする、などという条文が書かれた時点で、本義であるマスダイバー狩りからはもはやその定義ははみ出してしまっていたのだろう。

そして、シルバリーに入隊する者は皆、最初は一様に「GMF91」という機体をビルドして搭乗することが義務付けられていた。

連携の効率化と統一性を図るためだ。

その中でも目覚ましい活躍を遂げた者だけが専用機への乗り換えを許されて、隊長を務めるといふその厳格な掟はかの「GHC」や「第七機甲師団」という戦略、戦術を重んじるフォースの比ではなく、また専用機に乗り換えた時も必ず機体のどこかに「銀」の意匠を入れなければならぬという、ある種偏執的なまでにその掟は徹底していた。

だからこそ、マスダイバーを許さない者たちの中で、同じようにブレイクデカールには手を染めず、しかし個人の力では敵わないという

層がマスダイバーに復讐を果たすべく集まったともいえよう。

徹底して効率化された連携は個人の撃墜すらもその中に組み込まれ、皮肉にも今のカーンたちがやっているような物量作戦は確かにマスダイバーといえども圧殺される他になく、その数すらも圧倒する相手が出てきたならビーティスと隊長格が先陣を切って戦う。

アインソフのフォース「アイン・ソフ・オウル」よりも厳格に規定されたその掟とビーティスと隊長格の実力を屋台骨として、「ザ・シルバリー」は多くのマスダイバーを殲滅し、その名をGBNに轟かせた。

だが、彼らの奮闘によりマスダイバーはその姿を消したのかと問われれば、その答えは否である。

ブレイクデカールは、使用した痕跡を決してそのバックログに残さない。

撃墜時の再出撃可能時間というペナルティこそ課されるものの、その気になれば何度だって戦場に、マスダイバーたちは戻ってくることでできたのだ。

要するにいたちごっこである。シルバリーやアイン・ソフ・オウルが、遅れて参戦した「GHC」が殲滅したマスダイバーたちは何度でも蘇り、彼らの手を煩わせ続けた。

その終わりになき戦いに絶望した隊員がいたのかもしれない。

或いは秩序の番人という言葉をかかっている以上、それは遅かれ早かれ必然だったのかもしれない。

銀の騎士団は、「ザ・シルバリー」は次第にマスダイバー狩りだけを本義とするのではなく、一般的なダイバーの些細な利用規約違反すら、運営の代行者を名乗って取り締まるようになっていったのだ。

今現在も残っているシルバリーの悪評の半分はここにあるといってもいい。

味方だと思っていたはずのシルバリーが、ブレイクデカールを使っていないのにも関わらず出動して自らを追い詰めてくる様に、あるダイバーは恐怖して、あるダイバーは激憤した。

だが、シルバリーの隊員のそのほとんどは、馬耳東風とばかりに彼らの叫びを聞くことなどなく、同じダイバーにさえもその銀の鉄槌は

下されることとなったのだ。

——秩序に背く行いをしたことが悪い。

今もリヒトが叫んだその言葉は、何もかもを拒絶する銀の蝗害を示す呪いのジャーゴンとして、今もGBNに残り続けている。

六十機いたはずのカーンの軍勢は今や片手の指で数えられるほどに減少し、自身の機体を守っていたはずの腹心の部下はインコムだと思っていたらその線を切り離して自律行動を始めた、ドラグーン・システムにコックピットを貫かれて爆散していく。

カーンは動揺していた。

これがあのFOEなどと生意気なあだ名で呼ばれている男であれば、うざったいとは思うが納得はあったし、何より仕方ないと諦められる。

「ふんぬらばウガアアアアオオオオアアアア!!!」

だが、目の前にいる男はなんだ。ただの自治厨の残党じゃないか。

こんな結末など認められるかとばかりに言葉にならない、醜い叫びを上げながらカーンはその大斧をガンダム・エリユシオンに向けて振りかぶるが、それを振り上げた瞬間にザクⅢのモヒカンカスタムは上半身と下半身が泣き別れし、爆散していた。

「……消えろ、秩序を乱し、数に頼をおくだけの雑魚どもが！　だがまだだ……このエリアは……このハードコアディメンション・ヴァルガは！　秩序を乱す奴らで溢れている！」

その漁夫の利を狙って背後から襲いかかってきたブリッツガンダムをノールックで剣を逆手に持つことで貫いて、リヒトは次なる標的である狙撃手やシーカー、アサシンを片っ端からその超機動力と精巧な剣捌きで手にかけていく。

「キャプテン・ジオン……あの卑怯者め！　この混沌を見て、何も思わないのか！　なぜヴァルガに姿を現さない！」

リヒトは、アキノと違ってキャプテン・ジオンすら存在を許していなかった。

当の本人は今、「コーラサワー」なるダイバーと共に未知のディメン

シオンを探訪する配信を行っていることが、なによりもリヒトを苛立たせる。

守ろう心の南極条約。そんな美辞麗句を掲げておきながら、この無法地帯と化した場所には気紛れにしか現れず、そして秩序を取り戻そうとする自分にも、自分たちにも協力しない。

狙撃手であった都市迷彩のケルデймガンダムを、反応するよりも先に切り捨てて、リヒトは災害の如く攻撃の余波がクレーターを作り続けている地帯を目指して、ガンダム・エリュシオンを走らせる。

そうだ。ここでは確かにフリーバトルが無制限に認められている。

その「嵐」の余波に巻き込まれて爆散したジム・クウエルを憐みながら、瞳には爛々と憎しみを湛えて、リヒトは荒れ狂う嵐であり、鳴り響く天地の鳴動を引き起こすその中心に聳える巨龍——「二桁上位の壁」と名高い、ゴシツクロリータな衣装に身を包み、ヤギのツノを頭から、その背と腰から竜の翼を生やした個人ランク13位のダイバー……「クオン」が操る「ジャバウオックの怪物」を睨みつけた。

そして、その怪物に挑みかかる白亜の聖騎士、このハードコアディメンション・ヴァルガの主として名高い、FOEさんの渾名を頂戴している個人ランク39位、「キョウスケ」の操るディバインダブルオークアンタに対しても同様だ。

『ふ、ふふふ……白亜の聖騎士よ、よくも我を……この終末を喚ぶ龍たる【ジャバウオック】をここまで追い詰めた。しかし……負けない、負けるつもりなんかないんだから！』

『僕をあのFOEさんとかいう名前では呼ばないのは君たちぐらいだ、クオン……フェスでは初めて君と同じ土俵に立った、そして今はこの戦いで、ガンプラバトルで僕は初めて君と同じ土俵に立っている！』
『すごい執念……！ じゃなかった、こほん！ 見事な執念よ、聖騎士……！ しかしてヴォーパルの剣でなければ我を切り裂くことは敵わぬ！ 勇者たらんとするのなら、言葉ではなく……その剣で語ってみせて！』

所々で地が出ているものの、さながら大魔王のごとき威厳を湛えたそのロールプレイに違わず、ジャバウオックは、怪物は最近新調した

ばかりの片翼を損傷し、機体に深い傷を刻みながらもサイコ・フレームの光を放って、残ったフェザー・ファンネルとテイルブレードで、同じく顔の右半分、左脚を損傷し、フェネクスのものに置き換えられたクラビカルアンテナを破壊されながらも「蒼色に染まったトランザム」で怪物へと挑みかかる聖騎士を迎撃する。

ちなみにこれはクオンが企画した「フォースフェス、ミス・シーサイド同率3位記念！ ああ、F O Eさんと何度めかわからないリターンマッチ！」と題した生配信の真つ只中であり、クオンもキョウスケも猛追するリヒトのことなど眼中にも入っていない。

『GNマテリアルカード、セット！ 発動……ヴォーパルウェポン・Sランク！ 見せてやる、これが僕の……』

『私の……』

『全力だあああッ!!!』

ジャバウォックの放った必殺技である「エンドオブワールド」と、デイベインダブルオークアンタが放ったそれである「クアンタムストライク・ヴォーパル」がぶつかり合い、閃光がその一帯を覆い尽くしたかと思いきや、少し遅れて発生した膨大な衝撃波が、ビル群を、そこで殺し合う有象無象を、そして秩序を正すためにその怪物を両方とも倒すつもりだったリヒトのガンダム・エリユシオンをも呑み込んでいく。

デイベインダブルオークアンタは、トライエイジシステムこそ搭載していないが、チャンピオンとのコラボ記念でキット化された限定キット、「HG トライエイジガンダム」をその鎧に取り込んでいるために、GN粒子が為せる範囲であれば劣化とはいえ、トライエイジシステムと似た機能を使うことができる。

今回キョウスケが選択したGN粒子で代替したカード生成機能——GNマテリアルカードはその圧縮を最高値まで高めたSS級、中でも機体の武器に纏わせることで威力を上昇させる「ヴォーパルウェポン」であり、必殺のクアンタムストライクに上乘せされたその威力は確かに終末の神器たる、その全てを拒絶し、否定する終焉の一撃に匹敵するものとなっていた。

今までは各種の搦手に使っていたそれを今回は力と力の比べ合いに使って、FOEさんのその心意気に応えるべく、クオンもまた必殺の一撃を放った、当人たちからすればそれだけの話だ。

そしてここは無制限のフリーバトルが認められている戦闘狂のラスト・リゾート、チンパン収容所、モヒカン生息危険地帯、騙されたのでなければダイブするのは全て自己責任へと還元されるハードコアデイメンション・ヴァルガに他ならない。

「うおおおおおッ!?!」

だからこそ、リヒトは許せなかった。

こうして弱者を無制限に巻き込んででも自らの快楽を優先させる姿勢が。フリーバトルを行いたいのであれば他人を巻き込む危険性が少ない白夜のデイメンション、「デイメンション・トワイライト」の極圏エリアでやればそれで済む話だろう。

歯を食いしばり、その二刀流で未だある程度遠くに居ても尚、並居るダイバーの必殺技を束ねても争うことはできないであろう衝撃波を受け止めながら、リヒトは憤激する。

だが、リヒトは知らなかった。

クオンが企画したこの配信は、いわゆる「凸待ち」と呼ばれるものだ。

何が起きても不思議じゃないハードコアデイメンション・ヴァルガだからこそ、あらゆる理不尽をクソゲーと罵りながらも多くのダイバーが上級者となるべく、そして或いは戦いではなく殺しをするために潜り続ける場所だからこそ起こる出会いを期待して、二人は純粋な一騎討ちではなく「より戦場に近い場所で互いにベストを尽くす」という条件で合意して、敢えてヴァルガを舞台に凸待ち配信での決闘を行なったのだ。

そのため、リヒトが乱入しようとしていたのは決して無粋な行為などではない。

だが、いかに凸待ちであろうがなんであろうが問題は、「そもそも災害みたいなトップランカー同士の戦いに割り込める人間がそうそう居てたまるか」という、そういう話だ。

凸できそうな中でも「災害系黒和装妹」ユユはお兄様の決戦には手出し無用としているし、「ジャイアントキラー」、「マクギリスの生まれ変わり」たるエリアは凸待ちであろうと「漁夫の利を狙うような行為は無粋だから、何よりあのF O Eの立ち回りを見たいから」と傍観に徹しているし、リアルでのやむにやまれぬ事情があつたのか、こういう場には嬉々としてやってくる「獄炎のオーガ」は今日、その弟である「煉獄の若頭」たる「ドージ」共々GBNにログインしていないし、「ビルドダイバーズのリク」は相変わらず「サラ」と穏やかなディメンションでの散歩を満喫していて、例のチャンプは休日出勤させられた仕事帰りに長寿のデジタルカードゲーム、「ガンダムトライエイジ」を遊んでいるため配信の存在を知らなかった。

ちなみにチャンプは引き当てた最高レアを、子供が引いたガンダムAGE-2のコモンカードと交換する程度にAGE-2という機体とあのゲームと未来ある子供たちもGBN同様に愛していることを付け加えておこう。

要するに、誰もこの災害現場に乱入できないのである。

そしてそれは、SSランクであるはずのリヒトも同様だった。

誰が言ったか、英傑を目指す者が覚えておく必要がある言葉が一つだけこのGBNには存在している。

詠み人知らず、「英傑を食い荒らすからこそ魔物であり化物なのだ」という格言こそがその教訓なのだ。

その言葉は今のリヒトにびたりと当てはまった。

ただでさえ長時間の戦いで危険水域に達していた機体のダメージが限界を超えて、テクスチャが霧散していく中でリヒトは押し寄せる無念にただ、吠える。

「畜生っ！ 畜生おとおおっ！ 俺じゃまだ、ダメだっというのか……銀の誇りは、俺たちのシルバライは！ まだ死んじやいないんです、ビーティスさん！ 貴方ならきつと——」

きつと、どうしたのか。

その答えをビーティス本人が知ることはない。そしてその答えの如何に関わらずとも、クオンもキョウスケも「だからどうした」とり

ヒトの言葉を無情にも切り捨てていたことだろう。

そうしてとうとう限界を迎えたガンダム・エリユシオンは、ハードコアデimonション・ヴァルガの地からはじき出されてリヒトはロビーに、その機体は格納庫へと強制送還される。

実に六時間二十五分四十八秒。

かの「ジャバウオックの怪物」と「白亜の聖騎士」が、初めて相討ちという形で、ドローゲームという劇的な幕引きを迎えるのと同じ時間が、リヒトのヴァルガにおける限界滞在時間だった。

『ふふ……熱い戦いでしたわ、次はどうなることか……次回の配信はデイモンション探訪、不人気と呼ばれて名高いトワイライトの白日とその魅力をこの終末の元に曝け出しましょう……それでは亡者の皆さん、良き終末を……』

画面の中ではあのFOEさんと同一人物だと判明した「キョウスケ」と握手を交わすと優雅にハロカメラの方を振り返ってゴシツクな日傘を傾け、そのまま優雅にロビーへと解けていくクオンが映し出されていた。

配信終了である。

フェアライズガンダムの挙動をさらに安定化させるべく、埋め忘れていた、というよりはエポキシパテを詰めるとボールジョイント受けを潰してしまいかねない翼の接続基部に貼り付けたプラ版を大雑把にカットしてヤスリで均していくという作業をしながら、愛香はその配信を作業用BGM代わりに見ていたのだ。

「うわー……なんていうか災害って感じだね、絵理」

「……けぷっ……あ、ご、ごめんなさい……はい、そうですね……聞こえてきた音だけでも……なんとというか、災害なので……」

愛香は食卓で作業をして、絵理はリビングでけぷけぷしながらラムネを飲んでいるという平和な休日とその災害じみた現場をリアルタイムで生中継する狂気の光景は似つかわしくないように思える。

だが、愛香は一種のサスペンス映画のような感覚でそれを見ながらもヤスリがけに集中していたし、絵理は類稀なその聴力で一部始終を

脳内再生しながらも、やっぱりけづけぶと苦手だけど大好きなラムネと格闘していたため、さしたる問題ではなかったようだ。

「やっぱり平和が一番だよ、うん」

「……はい……わたしは……愛香さんと、一緒に過ごす時間が……愛香さんが……いちばん、大好きですから……」

「……うん、そうだね、平和は二番。あたしの一番は絵理だよ」

ちようどヤスリをかける作業も終わったのでマスクを外し、流しで手を洗って、ヤスリがけを終えたパーツを「塗装待ち」の箱に入れ、使い古した紙やすりをゴミ箱に捨てるという一連の作業をRTAでもやってるかの如く超スピードで消化して、愛香はぼすん、と絵理の隣に収まるなり、甘えるようにその肩へと自分の頬を擦り付ける。

「えへへ……嬉しいです……」

「明日世界が減んでも、今日絵理と一緒にいたから別に後悔しないしね、あ、でも明日絵理といられないのだけはイヤかな」

「それは……わたしも……」

そうして絵理は愛香の声を頼りに顔を突き合わせ、互いに笑い合おう、春の木漏れ日のように穏やかな声が、二人きりのリビングに響き渡る。

尚、愛香も絵理も、「リビルドガールズ」がコンテンツ内掲示板においてはGBNの中でも結構な武闘派扱いされていることなど、知る由もないのだった。

第四十六話 「放浪の戦女神くゴールデン・ドーンはまだ遠く」

——遅い。

アキノは愛機であるミネルヴァガンダムを挟撃するように襲いかかってくる初代ガンダムとガンダムMk-IIのアナザーカラー、鹵獲やライバルをイメージした色に塗り替えられたNPDの銃撃と斬撃を最小限の動作で回避し、その勢いで接近戦を試みたMk-IIがビームサーベルを握っていた右手を蹴り飛ばした。

大きく体勢を崩したMk-IIもしかして高難度に設定されたNPDであり、名前こそロックオンマーカーに表示されないものの、その反応速度はネームドの上級クラスと比較しても遜色がない。

切り返しに放ったシールド・ランチャーをバルカンで撃ち落としつつ、今度は背を見せたとみるや距離を詰めるべくビームライフルによる攻撃を仕掛けてくる初代ガンダムの速度とエイム、そしてMk-IIと自身と初代の相対距離を一瞬の内に判断してアキノは情報という選択肢を取った。

果たして初代ガンダムのエイミングは、高難度に登場するNPDらしくアキノのコックピットを狙った完璧なものであったのだが、彼に不幸があるとするならその狙いがあまりにも完璧すぎたことだろう。

ちょうど、アキノが壁になる形で覆い隠していたMk-IIは体勢を立て直しての切り返しを図っていたのだが、初代ガンダム、アキノ、そしてMk-IIの位置関係が一つの線で結べるものであったために、上昇したミネルヴァガンダムが回避した敵弾は見事にMk-IIのコックピットをぶち抜いてしまったのだ。

いわゆるフレンドリー・ファイアである。

高難度のNPDとなるとそうそう狙える現象ではないが、「より人間に近い思考ルーチン」というバージョン1.78における仕様の隙間をつく形で、アキノは初代ガンダムが「攻めを焦っている」ことを見抜いた上でそれを誘発していた。

アキノの舌打ちが、狭いコックピットに虚しく響く。

味方を撃つたことに僅かに動揺した初代ガンダムは果たして、キャスバル専用カラーをモチーフにしていながらも搭載されたAIはアムロ・レイの思考や戦闘をラーニングしていたのだろうか。

一瞬だけ垣間見せた隙を見逃さずに、アキノは迷いなくIフィールドソードをボウガン状に展開し、ミネルヴァ・ブラストの一撃で逃走経路をも塞ぐ形で、初代ガンダムを破壊する。

遅いと舌打ちをしていたのは、敵の話ではない。

鈍っているのだ。他でもない、自身の反応速度が。

より正確に表すのなら、アキノが鈍っていると感じているのは、アタッカーとしての自分の判断力だった。

G5アタック。今アキノが挑んでいるミッションは、最高難易度クラスの初代ガンダムからレガンダムまでの歴代映像作品の主役機五つを、どれほどの速さで殲滅できるかを競う上級者の遊び場であり、中級者の修練場だ。

噂によれば「ビルドダイバーズのリク」は僅か一分から二分の間で五機の主役を殲滅したらしいが、アキノが最初の二体である初代とMk-IIを倒すのにかかっているのが、それぐらいの時間であると考えればどれほどの偉業を彼が成し遂げたかを理解できよう。

だからこそ、鈍っている。そして、焦っている。

そんなアキノの焦燥と動揺など知ったことかとはかりにはるか遠距離から、極大のビームが閃光の尾を引いて、ミネルヴァガンダムを呑み込めんと撃ち放たれる。

「しまっ……っ!？」

——完全に、油断した隙を突かれていた。

アキノはとっさに防御を試みて機体に指示を出したが、その入力と反応が間に合っているかは五分五分だ。

機体が押し寄せる波動の閃光に飲み込まれていく中、走馬灯のように脳裏をよぎったのは、アキノがその焦りを自覚した、つい昨日の出来事だった。

電腦の海に浮かぶメガロポリスに眠りは訪れず、それは同時に夜明けが来ないことをも意味している。

デイメンション・シュバルツバルト。一年を通して明けることのない常闇に覆われているそのエリアにおいて、唯一光を灯しているのは、仮想の世界で尚その毒々しさを感じさせる虚飾の星、街の明かりだけだ。

人々が夢見る百万ドルの夜景、ニューヨークとロンドン、パリと東京、モスクワとブリュッセル——要は世界の大都会をイメージした、デイメンション・シュバルツバルトにおいて異彩を放つ区画である「ハイウインド・エリア」は、その美しさを堪能する場所かと問われればその答えは否である。

この街が持ち合わせているもう一つの側面は、主に大都市の動脈たる、十八メートルに拡大されたガンプラが複数並んでも尚余裕を持つほど、幅もその高さも、何もかもスケールが巨大な高速道路「ストレイ・ハイウェイ」に集中していた。

耳をすませば聞こえてくるのは夜景をバックに語らう恋人たちの睦言ではなく、「殺せ」だの「今だ」だの、「やっちまえ鳥ア！」だの、山賊が如き激励にして罵詈雑言、そしてハイウェイを切り裂く機体が噴かしているブーストの残響と、時折爆発音といった風情だ。

恐らくこの使われ方は運営にとつても想定外だったのだろう。

今まさに睦言を囁こうとオープンカフェに陣取っていた二人の男女がワイングラスに手をかけて乾杯をしようとしたすぐそばを、あのハイウェイが魅せる高速の夢へと乗り出すために武装した特攻服姿のダイバーたちが列をなして歩いていく。

僕は君が好きだ、と囁こうにもその言葉は全身タイツに鳥の被り物をしている見た目だけなら紛うことなく変態である紳士のオープンチャンネルから放たれる高笑いにかき消され、私もよ、と返そうとすればどこかで何かが、というかコーナーを曲がりきれず高速道路の壁に衝突してそのシミになったガンプラの爆発音がそれを遮る。

このエリアは雰囲気こそいいのに治安が世紀末だ。

詠み人知らずの恋人たちの嘆きが評する通りに、「走り屋たちのペ

リシア」と呼ばれるこの区画は、命知らずのレーザーたちにとって間違い無く聖地と呼べるものだったが、バトルやレースに縁のない一般人からすれば襲われぬハードコアディメンション・ヴァルガと似たようなものだった。

だが、そんなムーディなブルースが流れる空気よりも、爆発や歓声をバックにコアな反骨を好む人間にとって、「ハイウインド・エリア」はレーザーたちとはまた違った側面を見せる理想郷でもある。

メガロポリス中央街区、現実の大都市であれば時間の如何を問わずして人々が行き交うそのネオンの光に照らし出された大通りも、このエリアの悪評を聞いてかその姿はまばらであり、たまにすれ違う人間もレーシングスーツに身を包んでいたり、特攻服を着ていたりとの鳥頭全身タイツの同類たちといった風情だ。

「モヒカンよりやマシなのかもしれないけどさ、これまた世紀末だねえい」

まあチイは鳥頭以外は嫌いじゃねーけど。

首を回しながらビームを撃つてくるという効率的ながら奇行そのものな彼ら「パロツツ・パーティー」のムーヴに追いかけて回された恨みからか、チイはすれ違う人々を評して肩を竦めながらいつものようにニヒルに笑ってみせる。

「あはは……これ、あたしのせいなのかな……」

そしてその後ろにいるのは、恐らく彼女が呟いた通りあの「エリア」との配信が功を奏したことで「ハイウインド・エリア」における見た目と精神衛生面での治安を悪化させることに一役買った張本人であるアイカと、アイカの親友にしてズツ友^{メンヘラ}にして恋人であるエリイだった。

相変わらずエリイはアイカの背中に隠れるように一歩引いて歩いており、チイの隣にいるのは恐れを知らなかったり後ろめたい事情を抱えていなかったりする鈍感女なアキノだけだ。

「いえ、アイカさんのせいではないかと。元々あの競技に魅力があったて、その魅力に惹かれる層が主に威圧的な外見をしていて、そしてその発掘にあのエリアさんと『パロツツ・パーティー』の戦いがあった

だけの話です」

「それふつーにアイカのせいだって言ってるようなもんだぜ、アキノ」
「よくわかりませんね、私は事実を述べただけですが」

小首を傾げて、何って額面通りのことを言っただけだが？ とでも言いたげないつも通りの仏頂面をしているアキノに、こりやダメだとチイは肩を竦めて、お手上げだとばかりに物質化したIBCを指先で弾く。

ぱしり、と左手の甲に落ちたそれを右手で受け止めるが、開く前から結果は分かっているような気がした。

裏だな、と、声には出さずチイは呟く。

そうしてその予感通り、彼女の左手の甲にあるIBCは見事に裏面を曝け出していた。

「……あ、あはは……大丈夫ですアキノさん、事実なのは確かですから……」

「……アイカ、さん……その、落ち込ま、ないで……ください……」
アキノがなんとというか歯に絹を着せないというかオブラートに包まないことは知っているからそこにはアイカとしても何か思うところがあるわけでもないが、それはそれとして街にリーゼントに特攻服、鉢巻きに着崩した学ランという明らかにヤンキーな出で立ちのダイバーが増えた責任の一端が自分にあるというのはそれはそれとして複雑なのだ。

エリイから励まされなければ即死だった。

何故か好奇心で覗いてみた掲示板でたまたま話題になっていた自分たちの評判が「やべーやつら」「武闘派」「アグニカ・カイエルの魂」「百合とメンヘラをコンクリートミキサーにかけてぶちまけたGBNのゴモラ」だの散々なものだったことを思い出して、涙を眦に浮かべながら、いつもとは逆にエリイから頭を撫でられているアイカは、どうしてこうなったと嘆息する。

大体、「リビルドガールズ」は武闘派でもなんでもなければただの帰宅部の学生が放課後に集まって作った寄り合い所帯のようなものなのに何故かやべーやつら扱いされているのも納得がいかなければ、百

合とメンヘラをコンクリートミキサーにかけてぶちまけたGBNのゴモラってなんだよと、これまた身も蓋もない評価に今度は思い出し怒りがこみ上げてきて、アイカの表情はさながら百面相のようなところ変わっていく。

(あの様子じゃ掲示板でエゴサでもしたんかね)

とびだせエゴサーなんて素人がやったところで、鋼のメンタルと鉄と蒸気で駆動する、ワイヤーの毛が生えた心臓を持っていなければ毒にしかない。

チイはそんなアイカが面白かったから敢えていうことはしなかったし、自身も散々な悪評を特定されない範囲で流されている先駆者として、今度は再び消沈の層に変わったアイカに無言の慰めと激励を送るのだった。

ぜってーやだとはざいていたチイを筆頭にする「リビルドガールズ」の四人がこのエリアを訪れていたのは、ひとえにグラウカツツエに対しての義理を果たすために他ならない。

フォースへのメッセージに記されていたその座標と地図上にある建物が重なり合ったのを確認して、アキノが控えめに掲げられた電飾にぼんやりと灯る明かりが作り出すその文字を読み上げる。

「ラング・ド・シャ……猫の舌、ですか」

「なんか美味しそうな名前……」

「灰色の猫が舌を出して牙を剥くってか、中々粋なところを指定しなされるねグラウカツツエの旦那も」

「……らんぐ……？　しゃ……？　土砂崩れ……？」

三者三様ならぬ四者四様の反応を見せた四人は、案内された通り地下へと続く階段への入り口に手をかけて、チイを先頭に、今も店名の由来に困惑しているエリイを最後尾にしてその店へと続く階段を下っていく。

フォースネストのように拠点となるような場所を持たないグラウカツツエと「イグナイターズ」だが、彼らがライブを行うときに鼻屑にしているのはこのバーだと、メッセージにはそう記されていた。

しかし相変わらず、GBNの作り込みは狂っている。

「エリイちゃん、どっかの言葉で『猫の舌』って意味なんだよ、アキノさんが言ってた通り」

「……そ、そうだったんですか……て、てつきりわたしたち……埋められちゃうのかな、って……」

「……エリイちゃん、たまにとんでもないこと考えつくよね」
「？」

アイカはエリイにラング・ド・シャの由来を説明し、返ってきた、予想の斜め上をいく答えに困惑しながらも、わざわざ迷宮でもないのに地下層を作り込んで、ご丁寧に地下鉄まで再現しているGBNグラフィック班の努力の結晶であり狂気の産物に小さく唸った。

地下への移動を行う際に、戦場へ移行する際と同様のエリア移動処理を挟むのではなく、こうして階段が物理的に地下に続いているという構造を実装するのは中々面倒くさいものだ。

普通のVRMMOであればまずそれを頑張って実装したところで世界観やストーリーに何か影響があるわけではないし、サーバー容量を圧迫すると切って捨てられるそんな普遍性をわざわざ実装しているのは、ひとえに運営もまたGBNをただのゲームに留まらない、一つの「世界」と捉えていることの証左だろう。

アイカがそんなことを考えているうちに、一人分しか幅がない階段の先頭を歩いてきたチイは、店の入り口にたどり着いていたようだ。駆け足でアイカとエリイも先を行くチイとアキノに合流して、グラウカツエから教えられた「作法」をチイが行うのを待つ。

古い木製扉を三回に分けて四回ずつノックすることが、「ラング・ド・シャ」に客が足を踏み入れるための作法であり符丁だ。

そこに意味は特にない。

ただ、このバーのマスターを務める人物たる「ヴィオラ」という女性は一リアルでも同じ職業に就いていて、リアルではできないことをしてみたいと、文字通り採算を度外視できるこの世界だからこそやれる「泡沫の二元さんお断りな店」を作ったという、それだけの話である。

故にグラウカツエもチイも、「だから気に入った」とでもいえるべき感情を抱いたのだろう。

いつになくそわそわとした雰囲気は背中から感じられるチイに、夏祭りの時といいこういう部分は年相応なんだな、とアイカたちは密かに苦笑するのだった。

『貴女たちがカッツェから招かれたお客さんね？ ようこそ、「猫の舌」へ。今日はゆつくりと楽しんでいくといいわ』

どこことなく妖艶な色香を漂わせる声音と共に古い扉が開かれて、「リビルドガールズ」の四人はその猫が大口を開けた舌の上へと乗せられる。

これで道中にあれこれ注文があったら食べられていたのだろうか、と、有名な文学のことがふと、アイカの脳裏をよぎって消えていく。

青いスパンコールドレスに、長い黒髪をお団子状にまとめあげた髪型という出で立ちの女性、このバーの主人たる「ヴィオラ」の招きに応じて踏み入った店内は、決して広い空間ではない。

ライブのためのステージが店の奥にあつて、その前に四人がけのテーブルが一つ、あとは六人座れば上等なカウンターがあるというだけのそのバーで、そして壇上で、約束通りグラウカツェは「リビルドガールズ」を待ち受けていた。

「来てくれたんだな、『リビルドガールズ』。恩に着るぜ」

「そりゃあこつちの台詞ですぜグラウカツェの旦那、チイたちの無謀な条件……いわば生意気な心意気にあんだけ出してくれたんなら、これで応えなきや女が廃るってもんでさあな」

「中々言うじやないの、チイ。そうだな……言葉はいらねえ、無論退屈はさせねえつもりだ。だからこそ……楽しんでけよなお前ら！ このイナツマみてえな街に響き渡る、オレたちのROCKをよ！」

グラウカツェの合図に応じて、ベースのギガンツ、ドラムのアツキー、そしてキーボードのパツカーが即興のフレーズを披露する。

それは恐るべきことに、彼らの楽器が音を出している仕組みも、あらかじめ録音したそれにモーションパターンを当てはめるのではなく、現実と同じ仕組みでこのGBNにおいては楽器というフレーバーアイテムも動作していることを示す証だった。

なんでこんなことに凝ってるんだとアイカは半ばそのプログラム

とグラフィック班の執念に引き気味になっていたが、エリイは逆に目を輝かせて、一曲目からぶっ飛ばしていくと宣言した通り、バンドアレンジされた「機動戦士ガンダムSEED」の第一クールオープニングをグラウカツツエが高らかに歌い上げる光景に見入っていた。

しかしエリイが目を輝かせるのも無理はない。

アイカも彼の美声と冴え渡る演奏の世界に引き込まれそうになって、無意識にその唇から言葉を紡いでいたのだから。

「すつご……リアルでもプロなのかな、グラウカツツエさん」

「あら？ この世界でリアルのことを持ち出すのはナンセンスよ」

「すみません、ヴィオラさん……あ、飲み物ありがとうございます」

「気にしないで、今日はカツツエの奢りだから……ふふ、エリイちゃん、本当にラムネが好きなのね」

「……は、はい……けぷつ……あ、ごめんなさい……その、思い出の、味、なので……」

「ふふ、焦らないで。ゆっくり飲んでいいわ。私もこれ以上は語らない。時間を忘れて……気分だけでも、この街の夜に酔いしれていってね」

宣言した通り、それきり一言も発することはなく、ヴィオラはグラウカツツエのライブが終わるまで無心にガラスを磨き続けた。

(色々あったが……これでGBNからマスタイバーはいなくなっただ！)

おれたちの……勝利だ！)

それは幻聴に他ならない。

それはアキノの過去が、大好きなラムネをゆつくりと啄みながら歌声に耳を傾けるエリイの笑顔に、そんなエリイの傍でイチゴミルクを飲みながらエリイとグラウカツツエの演奏、両方とも楽しもうとするアイカのちよつと欲張りな姿勢に、そして水の入ったグラスを掲げてノリノリでタンバリンを鳴らしているチイの楽しそうな姿に、在りし日の声と在りし日の自分が重なっただけだ。

オレンジジュースが注がれたグラスを指先で弄びながら、アキノはそこに、同じように楽しく、同じように笑い合っただけで、そして最後に訪れた別れのことを思い返していた。

出会いがあれば別れがある。それは当たり前前のことで、この世界だけにかまけていられないのは、理由があつてGBNにダイブするなら、現実を生きるのにだって理由がいるのはわかつていた。

二曲目の、フリーダムガンダムが蒼天を割ってアークエンジェルの窮地を救う時に流れていた劇伴を今度は打って変わってしつとりと歌い上げるグラウカツツエの技量も世界も、そして楽しいに永遠の夜が魅せる刹那の幻想に浸っている三人も、全てアキノにとってはかけがえないものだ。

——だが。

「んだよアキノ、辛気くせー顔してさ、こういう時は楽しむもんだぜ？」

ちようどエリイみてーによ。

いつのまにか仏頂面をしかめていたアキノを見かねてか、サビに差し掛かったところで感動に涙を浮かべているエリイを指してチイはそう言った。

別に楽しんでいないというわけではない。

無意識に心のうちに踏み込まれたような感覚に少しささくれ立った思いを感じながらも、やはり隠しきれずに拗ねた声音でアキノは答える。

「……チイには、そう見えますか」

何も知らないくせに、と言っているのに等しいその皮肉は、ただの負け犬の遠吠えだと他でもない自分自身がわかつていた。

チイはきつとまだ子供だ。金勘定にうるさいだけで、良くも悪くも他人の心にずけずけと踏み入って巧みにそれを刺激するのは、子供が悪戯をするのとそう変わらないはずだ。

わかっていた。だが、アキノは喉の奥に何かがつかえたようなその感覚を、振り切ることができなかった。

「まあな、アキノは変なところお堅いからな……なあ、アキノ」

「どうしましたか、チイ」

それでも、チイが彼女らしからず、気にした様子を見せなかったのはグラウカツツエが作り出す世界に浸っていたせいなのか、それとも

何か別な要因でもあるのか、水を一息に飲み干してから、チイはぼそりと、アキノにしか聞こえないように小さく、その言葉を紡ぎあげたのだ。

「……チイは、『リビルドガールズ』で……良かったと思う、心からな。そんだけだよ」

——銀の誇りはまだ死んじやいないんだ！

この世界には、去つていこうとする「銀の幽霊」がまだ必要だと、マスタイバーが「ビルドダイバーズの奇跡」によつて根絶されてそのフオースを畳んだ男の背中に縋り付いた少年のことを、アキノはよく覚えている。

アキノにとつて、「ザ・シルバリー」の終わりはそのまま自分の終焉にも等しかった。

だから、あの少年が——リヒトが掲げた新たな旗の下に集う気にもなれず、ただ己の中に燻った誇りだけを微かな燃料として、ハードコアテイメンション・ヴアルガで初心者狩り狩りを咎めたり、ロビーで初心者にシャークトレードを仕掛けようとする仕手を運営に突き出すということを徒に繰り返していただけだ。

そんな中で、突如としてキャプテン・ジオンなるG-Tuberが現れて、自らと同じくマナーの啓発をその動画の趣旨の一つに含めていたのは、アキノにとつては「リビルドガールズ」に拾われたことと同じぐらいに、救いをもたらしてくれたはずだった。

そう、だったのだ。

わざわざ彼が公開したジオニックソードの制作講座ではなく原型であるタクティカルアームズから己の思い描くジオニックソードを創造し、サザビーとリガンダムを掛け合わせたような機体をリスペクトして、シナンジュとユニコーンをミキシングした。

それは彼が、自らの中で燻る銀の誇りを、半ばで折れて飛ぶことを諦めていた翼を補ってくれたからだ、アキノはそう思っていたのだ。

だが同時に、心の底から「リビルドガールズ」としての日々を楽しんでいる自分がある。

自分以外誰も信頼できないあの戦闘狂のラスト・リゾートで、タンクとアタッカーを目まぐるしく切り替えて戦うのではなく、フォースの盾としてタンク役に専念していた自分がいた。

——銀の誇りに懸けて。

幾度となく叫んできたその言葉に身を蝕まれたかのように、アキノはただ奥歯を食いしばることしかできなかつた。

リビルドガールズと、シルバリー。

今の自分は確かにチイが言った通り、リビルドガールズで良かったと思っっている。

だが、シルバリーだった過去がその足を掴んで、お前はそこにいるべきではないと今もアキノの脳内で叫び続けているのだ。

「私は——」

そうして呟いた言葉が、アキノの脳裏に浮かぶ走馬灯と現実の境界を曖昧にしていく。

——果たして、その入力は間に合っていた。

展開したIフィールドソード・アイギスモードでハイ・メガ・キャノンの直撃を防ぐと、アキノは咆哮しながらアナザーカラーのZZガンダムにそのままビームを押し返すがごとく突撃してその出力を叩きつけると、背後に迫ってきたZガンダムにフレキシブル・スラスタターを切り裂かれながらも必殺技の発動を選択した。

「私は……私はあああッ!!!」

なんて、取り返しをつかないことをしてきたんだ。

嗚咽を押し隠した叫びと共に振るわれた炎の剣が、アナザーカラーのZガンダム——皮肉にも地球の秩序と統制を謳ったティターンズ色に染められた機体を焼き払って燃え盛る。

今にして思えば、シルバリーのやってきたことは、秩序の番人を名乗ったあの過剰な取り締まりは、アイカやエリイ、そしてチイたちから、その笑顔を奪っていたことに、あの忌々しいブレイクデカールと同じ過ちを犯していたことに他ならなかつた。

最後の増援として現れたZガンダムにその後悔と慚愧を叩きつけ

るように何度もメインカメラやコックピットを殴打しながらアキノは泣き叫ぶ。

「……………私は……………私を、叱ってください……………チィ……………私は……………」

無機質な機械音声が静かな嗚咽をかき消すようにコックピットへ響き渡る。

ミツシヨンは果たされた。

だが、立ち込める銀色の霧の中で今も尚、アキノは迷い続けているのだった。

おまけにクオンちゃんの配信と聞いて凸ってきた亡者が結構な数いたからいつにも増して地獄だったな、スポーン位置で屑運引いたから三分生き残れなかった

392：以下、名無しのダイバーがお送りします

>>391

その状況で二分ぐらい生き残れるとかお前GBNうま男か？

393：以下、名無しのダイバーがお送りします

亡者共本当にゾンビ映画かってぐらいいて草も生えんかったわ、全部クオンちゃんとFOEさんが六時間殴り合ってた余波に巻き込まれて消し飛んでたけど

394：以下、名無しのダイバーがお送りします

これ以上は専スレ定期、でもその後配信見逃してたオーガがブチ切れて乱入してきてそれを鎮めるために「ビルドダイバーズのリク」がわざわざやってきたのも酷かったな色んな意味で

395：以下、名無しのダイバーがお送りします

始めて二年でチャンプに最も近い男になつてんの嫉妬で狂いそう

……！（静かなる怒り）

396：以下、名無しのダイバーがお送りします

おっとそれは愚痴スレ案件だって言いたいけどヴァルガの愚痴スレないんだよな

397：以下、名無しのダイバーがお送りします

このスレが愚痴スレみたいなものでしょ、ついでに愚痴っとかけど亡者といや「ノイエ・シルバリー」の連中が最近また活発化してきたらしいな

398：以下、名無しのダイバーがお送りします

あいつらも大概懲りねえよな

399：以下、名無しのダイバーがお送りします

自称運営の代行者だっけ、あれ本当なー

400：以下、名無しのダイバーがお送りします

しかもリーダーが無駄に強いのが腹立つんだよな

401：以下、名無しのダイバーがお送りします

わかる、てかシルバリーといや「リビルドガールズ」にもいなかったっけ

402：以下、名無しのダイバーがお送りします

>>401

「リビルドガールズ」に入ってからあいつこの猿山で見てないな

403：以下、名無しのダイバーがお送りします

>>402

居場所を見つけたんやろ、そつとしいてやれよ……そろそろダイ
ンスレイヴ落ちかねないからこの話はやめやめ！ はい終わり！

404：以下、名無しのダイバーがお送りします

ノイエの連中からするとそうもいかねーみたいだけどな

※※※

『貰ったぞー！』

「しまっ……!?!」

「バツキャロー、何やってやがるアキノ！」

背後を取ったフルアーマーガンダムの380ミリキャノン砲が、僅かに足を止めていたアキノを死角から砲撃していた。

もう少しでアキノがSランクに昇進するということで「リビルドガールズ」はバトランダムミッション——文字通りの無差別マッチによるフォース戦に挑戦していたのだが、平均ランクがSに達している相手は流石に一筋縄ではいかない。

フォース「アーマード・ファイターズ」は全身に装甲を纏ったタイプのガンプラを中心に構成され、その重装甲と重火力を活かすようなフォーメーションを組むことで高い練度を誇示しているが、決してその足回りは鈍足というわけではない。

鈍足機体の定義にはそのパブリックイメージと実際の事情には若干のズレが存在している。

単純に装甲化を施して、ブーストダッシュの速度が落ちた機体は得てして鈍足の定義に当てはまるが、それは直線加速力だけを見ての話

で、旋回性という観点から評価を下しているパイロットは少ない。

フルアーマー化を施すパイロットは、上のランクに行けば行くほどその装甲による重みを知っているからこそ、旋回性、AMBAC等に気を配って、「鈍重ながら小回りが利く」というカスタマイズを施す傾向にある。

中には例外的にひたすらブラスターもガン積みして重装甲と超加速を無理やり両立させるロマン派もいるのだが、それは今は割愛しておこう。

そして「アーマード・ファイターズ」の面々は手堅い選択肢を選んだ前者であったからこそ、直線加速力こそ「リビルドガールズ」の面々に劣っても、その旋回性と小回りを利用することで細かく刻むように距離を詰め、とうとう隙を見せたアキノの背後を急襲したのだ。

しかし、それを易々と見逃すチイではない。

まず無線観測機を落とされ、有線観測機も同様に狙撃で叩き落とされたことで徹底的に「目」を奪われ、更には敵機の中に混ざったデュエルダガーが、ミラーージュコロイドテクターによつてその欺瞞をも無力化することで、チイは徹底的にその役割を奪われていた。

上位陣は決して斥候や偵察を軽視しない。

手札がバラされる、というのはゲームにおいて致命的であり、例えば傭兵として「ジムの惑星」に加担していたチイの存在を軽視していた、ビッグガンを持ち札としていたフォース「ゾック・ズゴック・ジョング」はその作戦を完全に暴かれたことで敗北を喫したことから、偵察機を、情報を蔑ろにすることがどれほどの愚行であるか伺えるというものだろう。

そうなれば、チイにできることは「イグナイトーズ」の時同様に回避盾ぐらいしかなかったし、その回避盾をメタるほど圧倒的な弾幕を「アーマード・ファイターズ」が保持しているなら、今ここで役に立たない、失って損がない手札は自分だけだ。

380ミリキャノンの直撃からアキノを庇い、レッドアラートが絶え間なく鳴り響くコックピットでチイは眉根に深くしわを刻んで、呆けていた彼女を叱責する。

「何考えてんのか知らないけどさ、この戦いはアキノがやられりや終わりなんだ！ アイカとエリイは火力と自衛こそできてるけど耐久は並かそれ以下だ！ お前は火力とメイン盾、そしてチイは役立たずなら要になるのがお前だつてことぐらいわかんたろ！」

「……っ、すみません、チイ……」

「はい反省会終わり！ アキノにどんな事情があつたかは知らねえし訊かねえ！ だからとつととあいっつらシメて夕飯にカツ丼食うぞ！」
『ははは……威勢がいい、だが大破したSDではあと一発、そしてそのIフィールドソードで私の弾を防ぐことは不可能！ カツ丼は我々の手にこそふさわしい！』

フルアーマーガンダムを駆るダイバー、「アムドラン」は満身創痕のチイから確実に処理すべく、万々に備えてアキノが構えたIフィールドソードの死角を突くように機体を小刻みに動かし、今度は一斉射でもってチイとアキノの両獲りを狙って照星を覗き込んだ。

「バーカ……焦りやがったな？」

『何……っ、まさか、しまっ——』

こうしてチイとお喋りしてるからそうなんだよ。

満身創痕ながらもチイはニヒルに笑って、その機動力でジエスタキャノンとフルアーマーZガンダムの包囲を掻い潜ってフリーとなったアイカが、フルアーマーガンダムのコックピットに自慢のビルドボルトを突き立てる光景を見届ける。

『アムドラン！ 仇は取るぞ！』

「取らせない！ エリイちゃん！」

「……っ、はい！」

しかし、背中を晒す形となったアイカを撃ち抜くためにフルアーマーZガンダムのダイバー、「テツパン」は必殺のハイパー・メガ・キャノンを構えたが、仲間のジエスタキャノンとデュエルダガーに任せていたはずのリビルドウォートもまた、赤熱化したように真紅へと染まった機体——トランザムの発動によりその包囲を振り切つていたので。

エリイはビームライフルに六基のフィン・ファンネルを纏わせる

と、バーストショットで足を止めたテツパンの機体をその重装甲ごと撃ち抜くのではなく、ハイパー・メガ・キャノンが接続されているバックパックを狙ってトリガーを引いた。

まだ残っていたミサイルが、エネルギーが臨界寸前までチャージされていたハイパー・メガ・キャノンに直撃することで暴発し、テツパンの機体は一撃の元に、レッドアラートをコックピットへと吐き出す形となる。

そしてエリイが足を止めてくれたなら、アイカが止まる理由はない。

フェアライズガンダムを加速させ、アイカは左手で引き抜いたビームサーベルをすれ違いざまにテツパンの機体、それに刻まれた傷口へと投擲するとその機体を破壊して、今まさにミサイルポッドの掃射でエリイを追い詰めようとしていた、デュエルダガーへと強襲をかける。

『猪武者ではなあー！』

迂闊に中距離からの突撃という選択肢を選んでいたアイカに対して、レールガンによる迎撃を試みたデュエルダガーの対応は、普通であれば極めて正しいものだった。

そこに裏の扱がなければ、という前提を置くことを除けば。

この試合でアイカはビルドボルグを引き抜く一度しかビルドドラグーンを起動していない。

レールガンを回避して旋回するフェアライズガンダムが握り締めている大剣からその刃が脱落していると、デュエルダガーのダイバー「フォルテス」が気づいた時には遅かった。

『何、ドラグーンを積んでいたのか!?!』

ビルドボルグから分離した刃は、デュエルダガーの誇る増加装甲……フォルテストラの正面装甲を切り裂いて傷口を開くと同時に、ノックバックによる衝撃で彼の機体、その姿勢を打ち崩している。

「そういうことっ、アキノさんー！」

そして、いつまでも呆けているのがアキノではない。

「……私は……いえ、今はこの誇りではなくチイの献身に懸けて！」

機体を加速させたミネルヴァガンダムは、その名に違わない分厚く大きく大雑把なIフィールドソードをデュエルダガーへと撃ち下ろし、アイカが傷を刻んでいたとはいえ、その正面装甲ごと強引に機体をへし切っていく。

否。斬る、というよりそれは潰す、といった方が正しい。

重量と加速が生み出す質量兵器の攻撃力、そしてそれを振り回して尚腕部に異常をきたすことのない、サイコ・フレーム搭載機であるミネルヴァガンダムの本質は味方を守る守護の盾であり、敵対者を完膚なきまでに、そして文字通りに押し潰すチャリオットなのだ。

デュエルダガーは断末魔を上げる間もなく押しつぶされて、「アーマード・ファイターズ」が掴み取ったはずの勝利へのワン・チャンスはいつしかその掌からこぼれ落ち、微笑んでいたはずの勝利の女神は嫌味な笑みを浮かべながら彼らの頬をひっ叩いていた。

これが上級者たちの世界、その入り口では日常茶飯事の光景だ。

故にこそ修羅場を潜り抜けた者たちは口癖のように呟いている。

獲物を前に舌舐めずりをするのは三流の兵士のすることだと、そのどこかでコッペパンを巡って発泡沙汰を起こしていそうな高校生が呟いたその言葉は、ダイバーたちにとってもまた、極上にしてほろ苦い格言に他ならなかった。

舌舐めずりをして許されるのは「獄炎のオーガ」だけだ。違うというならば彼と同じところに行けばいい。

GBNでは後ろにその言葉が付け足される通り例外となる災害があるのだが——「アーマード・ファイターズ」はその例外ではなかったのだろう。

トランザムを起動したエリィに猛襲を受け、四人の中では一番足が早かったにしても砲撃者としてその両方にロングバレルビームキャノン装備している、重量バランスの悪いジェスタキヤノンではその曲芸じみたファンネルを潜り抜けることが精一杯であり、頭上から降ってくるアイカのフェアライズガンダムと、正面から突撃してくるアキノのミネルヴァガンダムへ対処することなど不可能であった。

それでも迎撃をしようとしたのは、Sランクダイバーゆえの反射神

経だろう。

指先が勝手に引いていた引き金からロングバレルビームキャノンが発射され、正面から来たアキノを撃ち抜こうとしていたが、彼女が構える黄金の剣とその刀身——対ビームコーティング加工が施されたそれは迎撃射を突っ切つて、止まることなくジェスタキヤノンへと差し迫る。

「これで……終わりだっ☆」

「……終わりです、『アーマード・ファイターズ』！」

『お、終わりだよ〜ぐああああっ!?!』

妙にノリのいい断末魔を上げながら、なんだか有名なブログの締めくくりに使われていそうな顔文字型の爆炎を残して、ジェスタキヤノンを駆るダイバー「モモチヨ」はアिकाとアキノ、「リビルドガールズ」が誇る二人のアタッカーによってその機体を装甲ごと貫かれてテクスチャ宇宙の塵となつていった。

【Battle Ended!】

【Winner:リビルドガールズ】

そうして、バトランダムミッションが終わったことを無事に告げる機械音声が四人のコックピットへと響き渡り、加えてアキノのコックピットには、彼女のダイバーランクがAからS——上級者のきざはしへと立つスタートラインとなるところまで昇格した旨が伝えられる。

だが、アキノの心にあったのは喜びではなかった。

(私は、またも……またも過去に囚われて、今を……)

アिकाとエリイが何やら送ってくれていた祝福さえ、今の彼女には届かない。

アキノは静かに瞑目し、己を包む「ザ・シルバリー」の制服、その胸元をきつく握りしめながら、犯し続ける過ちに歯噛みしていたのだった。

「ようアキノ、昇格したってのに随分浮かねーツラしてんな」

バトランダムミッションは文字通りのランダムマッチであるため、試合後に相手フォースと出会うようなことはほぼない。

受付ロビーに送還された「リビルドガールズ」の四人も、立っていた位置はバラバラで、アイカとエリイはチイから持ちかけられたミツシヨンの誘いをそのまま承諾したカフェの近くに、そしてアキノを連れてミツシヨンを受注したチイは彼女と同じくロビーの近くにリスポーンしたと、そういうことになる。

そして、チイが指摘した通り、アキノの表情は決して晴れやかなものではなかった。

むしろどこか悲しんでいるような、昇格というめでたい事態にあつて尚、自分にはその資格がないからと辞退を考えているような、そういう切羽詰まった雰囲気、彼女の背中からは漂っている。

「……チイ……」

「別にチイはアキノのママじゃねーからな、話したいことがあるなら聞くけど話したくねーなら何も訊かない。好きにしろよ」

こうも年下に見える子供に、自分の心を見透かされているというのは、ずっと一人で何かをやり続けてきたアキノにとってある種屈辱的でもあった。

だが、それ以上に今の彼女を縛り付けているもの、その感情の正体はひとえに後悔と罪悪感に他ならず、そこに自尊心を傷つけられた怒りのような些細なものが入り込む余裕などない。

アキノは呼吸を整えるように小さく息を吸い込むと、何か意を決したように、背を向けてカフェにいていちやついているのであろうアイカとエリイを呼び出そうとしているチイへと言葉を投げかける。

「チイ、貴女は」

「あん、何さ？ とりあえずあいづら呼びたいんだけど？」

「……貴女は、シルバリーのことを知っていますのしょう？」

フレンドワープの申請を二人に送信してから、ゆっくりと踵を返してチイは、その問いかけをぶつけてきたアキノへと向き直った。

「知ってるけど、それが何？」

チイは「ザ・シルバリー」が現役だった頃にGBNをやってはいない。

だが、彼らが残していった爪痕は今も尚GBNにおける銀の蝗害、

災禍の証明としてそのフォース名を忌み名とするほどに深く刻まれており、そして掲示板を覗けば彼らの残党がまだ、諦めずにGBNでの自治活動を行なっているという嘆きが見られれば、それがどういうフォースであったかということにも察しがつく。

しかし、それが何だというのか。

フレンドワープが承認され、「今食べてるケーキを食べ終わったら行く」という？気なアイカからの返答を確認しつつ、チイはアキノから投げかけられたその質問にただ首を傾げる。

別にシルバリーが自治厨の集まりだろうと、その結果として二年前がドツタンボタンで大騒ぎしていて、今もその残党が暴れまわっているように、チイの懐が痛むわけでもなければ、残党と関わりがあるわけでもないアキノに何か因縁めいた話を聞いていたわけでもない。

だからチイとしてはアキノが元第七機甲師団だろうが元AVALONだろうが元シルバリーだろうが、何も関係はないしそこに不都合はなかった。そういう話だった。

しかし、アキノにとつては違つたらしく、彼女はぼろぼろと涙をこぼしながら、懺悔でもするようにチイへとその過去と、自らの行いを告白していく。

「……私は、許されないことをしました。正義のため、誇りのためだと信じて傲慢にも運営の代理人を名乗って……多くの罪なき、いえ、規約には反していたとはいえ、軽度のもだったダイバーまでも私刑にかけてきました、それは……今のチイやエリイ、そしてアイカさんから笑顔を奪っていることに他なりません。そんな私が……『リビルドガールズ』において、良いのでしょうか……？」

この「リビルドガールズ」で過ごしてきた日々はアキノにとつてもかけがえのないものだ。

だが、出て行けと言われるなら、そこに名残惜しさこそ覚えてもアキノは素直にその言葉に従ってまた、放浪の旅を続けるつもりだった。

だからこそ、裁いてほしかったのだ。チイに、アイカに、エリイに。そうでもしなければきっと自分はいつまでもこのぬるま湯に浸かり

続けて罪から目を逸らし続ける道を選び続けたから――

アキノは継り付くように、涙をこぼしながらもチイの瞳を真っ直ぐに見据える。

だが、返ってきた言葉は。

「バツカじゃねえの？」

「……は？」

「いや、アキノお前本気でバカなんじゃねえの、って思ったただだよ」
チイは心の底から呆れて、その言葉を返事としていた。

前から堅物で四角四面で融通が効かないと思っていたが、よもやここまでバカだとは思いつかなかった。

それこそがチイの本音であり、すべての答えだったが、アキノにそれが伝わる筈もなく、涙を溢していた顔は見るうちに怒りへと染まって、肩を竦めていつも通りビルドコインを弾き出したチイへと怒鳴りつける。

「バカとは何ですか！ 私は真剣に……っ！」

「いやバカはバカだろ、逆に訊くけどさ」

「っ……っ！」

「アキノはどうしたいわけ？ それでいいじゃん。辞めたいなら多分アイカもエリイも止めはするだろうけど最終的にはアキノの判断をそんちよーしてくるだろうし、チイも同じだよ。続けてえってんならあいつらは喜ぶしチイとしてもいつも通り金を稼げて愉快にやっけるからそれでよし、欠けてんのはお前がどうしてーかってだけの話だよアキノ」

別に過去の罪がどうのこうのという話でもない。

自治厨として私刑をしていたからそんな自分を私刑に処してくださいというなら本末転倒もいいところだし、本当にアキノが何か罪を犯しているならその裁きを下さすべきはチイでもアイカでもエリイでもなく、あのガンダイバー姿のGMとガードフレームたちだ。

そいつらが飛んできてないということは、それがすべての答えということだろう。

代わりに、ふわりとロビーに着地したアイカとエリイはなんだか剣

呑な雰囲気に戸惑っているものの、その顔にアキノを責める意図はどこにもない。

「私は……『リビルドガールズ』に……いて……」

「いいに決まってるだろう、お前がそうしてーならな、違うか？ アイカ、エリイ」

とうとうその本音を口に出しかけた堅物へ、ニヒルに笑いかけながらロビーに現れたばかりの二人へ、チイはその問いを投げかける。

「何があつたかわかんないけど……アキノさんに怒ってなんかないですよあたしたち。それにさっきの試合もチイちゃん守れなかったの、あたしのせいですし……」

「……え、えっと、その……わたし、も……よくわからない、ですけど……その……泣かないで、ください……アキノさん……」

「アイカ、エリイ……私は……」

困惑しつつもアキノの存在を否定することなくアイカはさっきの試合で自らやらかしたことについて頭を下げて、エリイは泣いているアキノを宥める優しさだけを言葉に出して、あわあわと、しかしアイカの後ろからは出てアキノを慰めようと四苦八苦していた。

きつとこれが答えそのものだ。もう過去を追いかける必要はどこにもない。一人では追い込む必要もない。

そんな説教だって、わざわざかますのも無駄だろうと、チイが物質化したIBCを指で弾いたその瞬間だった。

「いいや、アキノ……お前は俺たちと来るべきだ」

「あん？ 空気読まずにいきなり誰だよてめーは」

とうとうその口から本音を聞き出せるとチイが踏んでいた樂觀を踏みこじめるように、アキノとよく似た意匠の軍装——「ザ・シルバリー」の制服を着た青年とその取り巻きと思しき男女が十五人、「リビルドガールズ」を取り囲んでいた。

「俺はリヒト……リヒト・フェーンミッツだ。フォース『ノイエ・シルバリー』、運営の代行者にして秩序の番人として、貴様たち『リビルドガールズ』に鉄槌を下すと同時に仲間を……取り戻しにきた！」

引き抜いてはまずいからか鞘ごと、腰に提げていた飾りの剣をアイ

カとチイ、そしてエリイへと突き付けながらリヒトは高らかにそう宣言する。

「リヒト……」

終わったと思っていた。

これで自分がもしも許してもらえたのなら、アキノは「リビルドガールズ」の一員として、頭を下げた上でリスタートを切るつもりだった。

だが、人生は歩き回る影法師。哀れな役者を嘲笑うかのように、その過去は、過去に囚われた黒銀の亡霊は、構えた剣の切っ先を、今生きる少女たちに突きつけるのだった。

そこに正義があると、何一つ信じて疑わず。

第四十八話 「誠意は金額だけではない〜アキノ、その訣別と挑戦」

「俺はリヒト……リヒト・フエーンミッツだ。フォーンス『ノイエ・シルバライ』、運営の代行者にして秩序の番人として、貴様たち『リビルドガールズ』に鉄槌を下すと同時に仲間を……取り戻しにきた！」

いきなり現れて剣を突きつけてきたそいつに対してアイカが抱いた感情は、概ね「リビルドガールズ」の総意であったといっている。何いってんだこいつ。

見てみればなんとなく、アキノと同じ制服を着ていることはアイカにもわかる。

だが、こいつの態度が気に食わない。シンプルなその一言に尽きた。

「リヒト……」

しかし、アキノにとってこのリヒト・フエーンミッツという男は何やら因縁浅からぬ存在であるらしい。

リヒトを見つめる彼女の瞳に悲しみや後悔、一語では言い表せない複雑な感情が渦を巻いていることを見て、鞘に収まっているとはいえないきなり剣を突きつけてくるという蛮行を働いた彼に怯えて、アイカの背に隠れながらもエリイは、そこに何か言葉をかけるべきか迷っていた。

いきなり現れて何を言っているんだこいつは、というのは語気こそ違えど、エリイにとってもそれは「怖い人が怖いことを言ってきた」という認識に違いないのだが、そういう強い言葉をぶつけてくる人間が、何かしらの理由を抱えていることは過去の体験から理解できる。

そう、それが例え一般的には取るに足らない、大したものではなかったとしても。

アイカのドレスの裾をきゅつと握りながら、小動物が威嚇をするような表情でエリイはリヒトを睨みつける。

とはいえ、許せないものは許せないのだ。

そんな彼女の精一杯の抵抗に、成長したなあと感慨深さを感じてこ
そいたものの、リヒトを睨むアイカの表情もまたアイドルを参考にし
たアバターを使っている人間のそれとは思えないほどに険しい。

チイに至っては最早、呆れを通り越して無になったのか、それとも
怒りに震えるアイカとエリイを見て多少冷静になったのか、冷めた視
線でせっかく解決しかけた問題を掘り起こしてきた無粋な野郎を一
瞥して、鼻で笑いながら物質化したIBCを指先で弾いている。

「アキノ……お前がこの二年間、どこで何をしていたのかはわからな
い。だけど、俺と同じように正義を愛しているお前なら確実に戻っ
てきてくれると思って俺は今日までビーティスさんの後を継いできた
んだ。そして……お前がヴァルガにしていると知った時は喜んださ、やっ
と帰ってきてくれたんだと」

「リヒト……私は、ただ」

「だが！ 今のお前はなんだ！ そんな、と、所構わず抱きつきあつ
て、こ、公序良俗を乱している……破廉恥な奴らがいる！ そんな
フォースに所属して何をやってるんだ!？」

リヒトは口角泡を散らす勢いで剣の切っ先をアイカと、その後ろに
隠れつつ彼を静かに威嚇しているエリイに向けて、少しばかり頬を赤
らめながら絶叫した。

——はあ？

思わずコインを取り落としていたチイが呟いていたその言葉は間
違いなく「リビルドガールズ」四人の総意であった。

確かにアイカとエリイは夏祭り以来「リビルドガールズ」の活動記
録としてツーショットのスクショやアキノの姿——撮られることを
拒否しているチイを除いて——など、全員の姿をガンスタグラムに
アップロードするという活動をしているが、倫理コードに引っかかる
ような写真なんか当然の如く撮っていないし、撮られた時も精々二人
でひつついて頬をすり合わせたり、ミッションクリア記念にアイカが
エリイに抱き付いたりだとかそういうスクショだけしか上げていな
い。

それを公序良俗云々と突っ込まれるような筋合いなどないし、運営

からのダインスレイヴが直撃していないのだから倫理的にも問題ない。

それに何より、自分たちの関係にそんな無粋極まる突っ込みを入れる権利がこいつのどこに存在しているのか。

支離滅裂なりヒトの言動に、開いた口が塞がらないといった、もしくはフレーメン反応を起こした猫のような表情をしているアイカと目を点にしているエリイは、幸か不幸かその感情を怒りから憐みへとシフトさせたことで、多少思考回路の演算に余裕ができていた。

ノイエ・シルバリー。

リヒトが高らかに叫んでいたそのフォース名は、調べるだけで腐るほど悪評が出てくる程度にはよろしくないものだ。

前身となつた——というよりは前身にされた——「ザ・シルバリー」の時点で、ブレイクデカルなるチートツールを使うダイバーこと、マスダイバー狩りという本義から外れた自治活動を始めたことで悪評が立つてはいたのだが、なんだかんだでマスダイバーを狩ってくれるその有用性と、その「銀の騎士団」の団長たる男、ビーテイスの実力と人格によって見逃されていた部分があつたのは確かだった。

だが、本義として定めたマスダイバーが第一次有志連合戦を境に駆逐され、ビーテイス自ら「ザ・シルバリー」の解散を宣言し、GBNを引退したのは彼がリアルで第二子の出産に立ち会い、しばらく育児に専念するためと公には説明されている。

だが、自身の首を差し出すことで、その過激な自治活動の落とし前とする向きもあつたことに違いはない。

当然、「ザ・シルバリー」の解散に当たっては納得した者もいれば、そうでない者もいた。

ビーテイスが口にしたのと同じく、マスダイバーがいなくなったのであればこのシルバリーに、或いはGBNにいる意味はないと身を引いて、リアルに帰ったか或いは別な形で悪評と立ち向かいながらGBNを続ける者たちがいた。

ビーテイスの引退とその言葉、そして何より「ザ・シルバリー」というフォースが打ち立てた栄光を忘れることができず、彼の影を追う

ようにして、本義から外れた部分の自治活動を、運営の代行者を名乗って始める者たちがいた。

それこそが、リヒトを代表とする「ノイエ・シルバリー」だ。

曰く、マスタイバーが消えてもGBNから規約違反を犯す者がいなくなつたわけではなく、そうしたダイバーを取り締まって運営に突き出すことは必要であると、ビーテイスに代わってそれを行うと宣言したりヒトは、彼に賛同する少数の仲間を集め、そこから十五人規模の精鋭を選び抜くことでその秩序の剣とした。

だからこそ、彼はその旗を立ち上げた時に、かつては自身と同じようにこのGBNを守ることを、秩序を守ることを何よりも重んじていたアキノをフォースメンバーに誘つたのだ。

だが、アキノは燃え尽きていた。

マスタイバーはいなくなつた。シルバリーもなくなつた。ならばこの「アキノ・ベルナル」というダイバーはどこにいればいい。

二年後に「リビルドガールズ」へと加入するまで、シルバリーの中でも特に過激だつたりヒト派に属していたアキノを受け入れるフォースなどどこにもなく、彼女は鼻つまみ者のようにGBNの片隅に追いやられて、それでも自身の中で燦る正義だけを燃料に、「初心者狩り狩り」をやっていたのだ。

だからこそ、リヒトはそれを尊重していた。

アキノがまだ迷っているのなら、迷いが晴れた時、再び正義がその胸に宿った時、この旗のもとに集ってくれと頼んでそれぞれに袂を分かつたはずだったが、今のアキノは何の因果かメンヘラ公序良俗違反破廉恥の三拍子揃つたフォースのぬるま湯に浸かっている。

それが何よりもリヒトは許せなかつたのだ。

大体、秩序を重んじるならゲームの中で必要以上にべたべたとくつついているアイカとエリイは真つ先にしよつ引かれるべきだしGBN―ガードフレームは何故彼女たちを無視しているのかと怒り心頭なりヒトだが、「リビルドガールズ」が、例えメンヘラだろうが公序良俗には違反していないし破廉恥でもない、というのが運営の見解であることに変わりはない。

要するにリヒトは初心なお坊ちゃんだった。

チイは呆れたように肩を落として、このバカにどんな薬をつけるのが一番効くのかと脳内でチャートを組み始めるが、厄介なのはこの純情バカだけの問題ではなく、アキノが絡んでいるということだ。

言っていることは支離滅裂で正しさなどどこにもないのに、アキノは自らを責めるように傷付いた顔をして、僅かに後ずさっているのがその証拠だろう。

うるせーしらねーガンプラバトルネクスサスオンラインで済まされそうな案件ではあるが、それがアキノにとって避けられないことであるならば、尊重すべきは彼女の感情だ。

例えばどんな過去があろうと頓着しない、というチイの心持ちは、このフォースにおいてはいい方向に作用しているが、それ自体は良くも悪くもドライで他人任せな側面を持っていることに変わりはない。

「大体破廉恥つてなに？ 好きな子と抱き合うくらい普通じゃない。女子校のこと知らないの？ それにいきなり現れて何言ってるの？」
流石にアイカは我慢ならなかったのか、憐憫の目を向けつつも怒りのポーズを表明して、「リビルドガールズ」のリーダーとして正式に抗議している辺りは自覚が出てきたのだろう。

ミナミコアリクイが人間や猛獣に威嚇する程度だとはいえ、あのエリイが怒りを表しているというのも珍しい。

チイは冷静に状況を俯瞰しつつ、「その話」を差し込むタイミングを伺って、俯くアキノと同様に今は静観に徹していた。

「そのままの意味だ！ 運営にもメールしているしお前たちのガンスタグラムは規約違反で通報している！ だが取り締まられないことをいいことにお前たちは昨日も……二人で一つの飲み物を分け合っている写真を上げたじゃないか！」

「素直に恥ずかしがらないで間接キスっていえばいいじゃん！ 大体あたしたちが違反してんだったらあんたじゃなくてガードフレームが飛んでくるべきでしょ？ それを勘違いしてメールボム送ってるとか、運営の胃袋でも破壊したいわけ？」

「こいつ、言わせておけば……！」

———すごくどうでもいい。

正直なところ論争の相手を買ってやっているアイカも、その後ろに隠れて精一杯、お人好しを体現したような童顔で慣れない睨みつけを行っているせいでぶるぶると震えているエリイも、黙り込んでいるチイも、そして恐らくリヒトたちの仲間も、心の底からそう思っていた。

「それに、本題はそっちじゃない！ アキノ、お前は銀の誓いを裏切るのか？ お前から正義の心は消えてしまったのか？」

この会話を録音したテープをこいつの自宅に送りつけたらどうなるんだろうか。

額に青筋を立てて、今度はアキノに剣先を向けた上で怒鳴りつけるリヒトを心の中で嘲笑いながらも、チイは後ろ手に隠した指先で収集していた情報から彼のダイバーランクや実力を割り出して、少し警戒の色を強めていた。

(こいつ、アホだしバカだけど実力は本物だ)

アキノの性格上、恐らく「ノイエ・シルバリー」と激突することは避けられないだろう。

そうなった時に厄介になってくるのが、腐ってもリヒトはSSランクダイバー、この前やりあった「アーマード・ファイターズ」の連中よりも圧倒的に格が上、もしかすればあのアリアと同格とまではいかなくとも彼女に匹敵する強敵として立ちはだかることは避けられない。

奇しくも、その戦い方も二刀流を主体としているためアリアとよく似ていると評価したチイだが、恐らくアリアがそれを聞いていれば間違はなくブチ切れて白手袋を叩きつけてきたことだろう。

「……リヒト、私は……私は、シルバリーを裏切りたいわけではありません」

「ならばどうして俺と共に来ない!？」

「——それは」

「それはどうした!？」

「私が……『リビルドガールズ』の盾だからに他なりません」

アキノの中で、正義や秩序を重んじる心が完全に死に絶えたわけではない。

今でも初心者にはシャークトレードを仕掛ける悪質な仕手がロビーにいれば、それが悪質なら運営に突き出しているし、マギーを呼ぶことでその場の仲裁を行ってもらうという軽度の自治活動は「リビルドガールズ」として活動している今でも、アキノは継続している。

何よりフォースを結成するきっかけになったのが、アイカとエリイがログイン初日にして悪質なクリエイティブミッションを踏まされて、ハードコアデイメンション・ヴァルガに飛ばされるという悲劇だったのだ。

自分にとっては転機になったとはいえ、そんな初心者が引退しかねないような規約に触れずとも悪質極まりない行為があれば、アキノは一つの覚悟を固めた今尚運営へとそいつを突き出すと決めている。

だが、心がどこにあるかと問われれば、先程は答え損なったものの、それはシルバリーという過去ではなく、「リビルドガールズ」という今にある。

それこそが、アキノの答えだった。

「ふざけるな！ だったら落とすし前はどうか付ける！ ビーティスさんは……マスダイバーが増えたのは自分が狩りを行ったせいかもしれないと言ってGBNを去っていったんだぞ!? もしもお前がまだ正義を愛しているなら、その落とし前を付けないのはどうなんだ、アキノ！」

リヒトは当然の如く激昂し、今にもその鞘から剣を抜いてアキノに突きつけんばかりの勢いで彼女を怒鳴りつけた。

ビーティスが引退と共に残した言葉は、「シルバリーが疎まれるようになったのはおれのせいかもしれないな、ごめんよ」というもので、そこにマスダイバーが増えたことに関する意図は何もなかったのだが、得てして人間の発言というのは歪曲されるし曲解されて、都合のいいように解釈されるものだ。

リヒトの前ではそうなんだろう。リヒトの前がそう思うんならな。

ここがもしもロビーではなく掲示板の中であれば間違いなくそう

返されていた。つまりはそういうことだった。

だが、不幸にもアキノは超がつくほどの堅物だ。

例え些細な過ちであつても自らを責め続ける、折り目正しく常に安定しているように見えてその内面は絶えず揺らぎ、後悔に荒れ続けているのがアキノという人物であつたし、それは彼女の美点でもあり欠点でもある。

人間の長所と短所は大体がコインの表裏だ。どんな奴にもいいところがあれば、どんな奴にも悪いところがある。

チイはそろそろ頃合いかと、指先でコインを弾き飛ばしながら、心の中で表、と、二分の一の問いに答えを賭けた。

「わかっています、リヒト……私は今でも秩序を重んじています。ですが、『ノイエ・シルバリー』に誘つてくれた貴方の気持ち裏切ったことになるということには変わりありません、ですから」

アキノは毅然とそう言い放つと、様子を見守っていたアイカたちに向き直つて、深々と頭を下げた。

「……ですから、アイカさん。エリイ、チイ。私にその償いをする戦いをさせてください。その許可を出してください。チイ……貴女にとってこれは一銭の得にもならないことはわかっています、ですから報酬は私が持っている全財産、全てアイテム類も売却すれば500万BCにはなるはずですよ。なので、どうか……この戦いを、リヒトとの決着を、私につけさせてくれませんか」

びたりと、チイの左手にコインが落ちる。

塞いだ右手をめくればその面は表、見事にチイは賭けに勝った。

「……この戦い、もしアキノさんが負けたらどうするんですか？」
アイカが問いかけた言葉は真つ当なものだ。

今の言葉でアキノが提示したのは勝利条件だけで、そこに敗北についての条項は含まれていない。

そして彼女が始まる前から価値を確信するような人物ではないことは、他でもないアイカが、エリイが、チイが誰よりもよく知っている。

だからこそ、それを当然であるかのように毅然とした表情を保つ

て、アキノはアイカの目を真つ直ぐに見据えた上で答えるのだ。

「私は……GBNを去ります。向こうが私の引き抜きを勝利条件に提示してきてそれで合意したなら、それに従います。それが……私の落とし前です。いかがですか、リヒト？」

「……いいだろう、アキノ。お前が勝つたら俺はお前のことをすっぱり諦めよう。そして特別に破廉恥女、お前たちのことも見逃してやる。だが、もしも負けたらアキノ……一緒に来てもらうぞ、それでいいな『リビルドガールズ』？」

視線でやりとりを交わしたアキノとリヒトは、ならばこれ以上の言葉など無用だとばかりにアイカへとフォース戦の具体条件を提示したが。

「足りないねえ」

「は？」

「足りねえ、つってんだよアキノ、そんでリヒト」

チイは敢えて踵を返し、怒りに顔をしかめたように取り繕って、指先でコインを弾き飛ばしながら淡々とそう告げる。

そして、チイがそのフェイズに入ったのなら自分が挟まる必要はないとばかりにアイカは無言で頷くことで彼女へと発言権を手渡して、もう威嚇する必要もないよ、とエリイの頭をそつと撫でながら、チイのネゴシエーションが成立するまでを無言で見守る決意を固めた。

「……500万では、まだ貴女にとって不足ですか？ でしたら私は……もう500万死ぬ気で稼いで返済しましょう、これでも足りませんか？」

「バーカ、足りねえに決まってるだろ。大体な、お前の提示した条件はチイたちにとって勝とうが負けようが何の得もねえんだ、そんな敵だけが得する条件出しといて決着つけさせてくださいだ？ 何様のつもりだよ、アキノ」

「だがこれは決まった——」

「勝手に決めんじゃねえよ腐れチエリーが!!!」

口を挟もうとしたリヒトを、珍しく本気の怒りで一喝して黙らせる。チイは再びアキノへと向き直って言葉を続ける。

「てめえの進退賭けるってんだ……なら足りねえのは一つだけだ、アキノ。お前は……どうしたいんだ？ 何を賭けるかじゃねえ、てめえが何を望んでるかを読んでんだよ、チイは」

「っ、それは……」

「今の条件も足んねえけどな、交渉つてのは未来のために話してんだよ、アキノ。てめえの願いを聞くまでチイはぜってーに首を縦に振ってなんかやんねえからな」

そう言つて踵を返してみせる辺り、チイもまた役者なのだろう。

ふっ、と笑みがこぼれそうになるのを堪えて、アイカは震えるアキノがその唇から言葉を、願いを紡ぎ出すのをただエリイと共に黙して待ち続けた。

一瞬がどこまでも引き延ばされて、一秒が永遠にも感じられる沈黙が両肩にのしかかってくるような錯覚に耐えながら、静かにアイカはエリイと頬を寄せ合つて、チイはコインを何度も、秒数を数えるように弾き飛ばしながら、その時までじつと、我慢して黙り込んだ。

——そして。

「……私は……私は、『リビルドガールズ』にいたいのです！ アイカさん、エリイ、チイ！ 迷惑かもしれないですけど……迷惑をかけるかもしれないですけど！ 勝ったなら、今一度私を仲間として受け入れてくれますか!？」

涙でくしゃくしゃに顔を歪めながら、アキノはそう言い放つた。

「……その言葉が聞きたかつたぜ、そうだろ、アイカ、エリイ？」

「うん！ アキノさんを迷惑だなんて思わないし、むしろこれからも一緒にいたいかなっ☆」

「……わたしも……アキノさんが……その、好き、ですから……嫌いに、なりませんから……」

ニヒルに笑つてコインをインベントリに仕舞い込みながら、アイカとエリイ、このフォースを結成するきつかけとなった二人の言葉という追い風を受けて、チイは銭ゲバラしからぬ一世一代の賭けに、その帆を張つて乗り出していく。

「おい聞いてつかチエリーボーイ、チイたちは……500万だ！ そ

して、てめーらに負けたら……全員このGBNから出てってやる！」「なっ……俺にはリヒトという名前が……」

「うるせーしらねー！ けどな、交渉ってのは対等じゃなきゃいけない……アキノ一人が進退を賭けて戦うだ？ その時点で不平等なんだよ、そしてアキノがチイたちを選んだならこの場のイニシアチブはチイたちが握ってる。そんぐれえわかるよなりヒトの坊ちゃん？」

「貴様、どこまで俺を愚弄すれば！ そのぐらいわかって当然だろう！ ああ、やつぱりこいつはバカだ。バカとまでは言わないでやるなら単細胞だ。」

見事にチイの口車に乗せられて、「この交渉におけるイニシアチブは『リビルドガールズ』が握っている」という条件を無意識に吞まされたことに、彼の仲間たちも怒りの目を向けるばかりで気付いていない辺り、人間がいうところの類は友を呼ぶというのは本当なのだろう。

チイはにやりとほくそ笑みながら、同時に極めて平静を装いながら、その条件を、改めてアキノの進退を、そして「リビルドガールズ」の存亡をその天秤に乗せた一世一代の条件を提言する。

「チイたちが負けたら、500万とフォースの解散とGBNからの引退、そしてアキノの身柄を賭けてやる。だから出血大サービスでめえらが皿の反対側に乗せる条件は……500万とフォースの解散だ。これ以外はぜってーに認めねえ。GBNからの引退をてめーらの敗北に含めなかったのはアキノの顔に免じてると思いな！ さあどうだ！」

一世一代の啖呵を切つて、チイは言葉の白手袋を激昂して冷静さを失っているリヒトへと思い切り叩きつけた。

「ちなみにこれは……あたしたち『リビルドガールズ』全員の意見だと思ってくれて構わないから。交渉役はチイちゃん、責任負うのはあたしだから。文句ないでしょ？」

そしてアイカもまた、逃げ場をなくすように追加の白手袋を叩きつけて、リヒトからの返答を待つ。

果たしてそれは、今度は一秒もかからずに口角泡と共に「リビルド

「ガールズ」へと叩き返される。

「いいだろう！ その条件で決闘を受けてやる……！ 時刻は互いに作戦を練る期間を考慮して明後日だ、そしてステージは公平を期すためにランダムだ！ それでいいな『リビルドガールズ』は！」

「上等☆」

「後悔するんじゃないぞ！ 行くぞ、お前ら！」

『はっ、隊長殿！』

典型的な捨て台詞を吐いて、リヒトたちはロビーを後にする。

こうして「リビルドガールズ」と「ノイエ・シルバリー」の決戦、その火蓋は切って落とされた。

「……ありがとうございます、アイカさん……エリイ……チイ……」

「泣くんじゃねえよアキノ、あいつらから500万ぼったくってカツ井どころか回らない寿司でも食ってやるぜ」

自らの居場所を見つけたことに涙をこぼしているアキノを叱咤しながらも、チイは胸に縋り付いてくる彼女のことを咎めはしなかった。

「……まったく、チイはおめーのママじゃねえんだよ」

呆れこそしているが、どうしてか悪くない。

胸中に一抹の不安のようなものを抱えていることを誤魔化してくれるらしい擬似感覚の、胸に温かな綿を詰め込まれているようなそれに身をまかせながら、チイは脳裏で考えを巡らせる。

文字通り、自分たちの、自分の進退を賭けた、その決戦を勝利へと導く、博打であり黄金律を、優しくアキノを抱きとめながら、チイは組み立ててゆくのだった。

第四十九話 「リビルドガールズ、決戦開始くチイの小さく大きな」約束」

思えば、とんでもない約束をしてしまったのだと思う。

アイカは最後の下調べとして、チイから送られてきた情報と、フォース経由で送られてきた「ノイエ・シルバリー」に関するあれこれを確認した上で決戦に臨もうとしていた。

だが、不思議とそこに後悔はない。

チイが気風のいい啖呵を切ってくれたからか、或いは自分も彼女と同じで、秩序がどうのこうのなの、破廉恥がどうのなの言われたことよりも、勝手に仲間を引き抜かれるような話を持ちかけてきたリヒトに対して怒りを抱いていたからか。

多分、両方だろう。

苦笑と共に、言葉には出さずそう呟きながら、アイカは一通り並べたメモに目を通していく。

まずは推定戦力比だが、どう見積もっても四対一になるだろう。

木星帝国にカチコミをかけた宇宙海賊よりはいくらかマシだが、同じ数を揃えた上での戦いでも二対一という状況を作られればそれだけ不利に追い込まれる以上、常時四機に自分が囲まれるという状況こそ発生しなくとも、確実にそれは想定できるだろうし、最悪はそれ以上の数に囲まれる、という可能性だって考えておかなければならない。

アイカが決戦に臨むに当たって苦労したことは、「ノイエ・シルバリー」というフォースの悪評やリヒト個人に関する言及はいくつかあるものの、その全体としての戦力が見えてこない、というところだった。

それは取りも直さず、あのフォースがリヒト一人を屋台骨に支えられていることの証なのではあったが、リヒト以外がおまけ程度の實力しかないのであれば、ここまで悪評が立つこともなければまず、ハードコアディメンション・ヴァルガでの自治活動は行えないだろう。

そこでアイカは、掲示板や人から聞く口コミに関しては何かに一切を一任した上で、自分の知り合いを頼ることに決めた。

幸か不幸かはわからないが、アイカの知り合いには何かと問題児が多く、リヒトがあの特徴であるのなら一回ぐらいは絡まれたことがあるのではないかと推察しての行動だったが、結論からいうならそれは正しかったといっている。

まず、アリアからの回答だが、それに関しては彼女らしく「リヒトという男には多少手間取らされたがそれだけで、他は常にドラグーンを基軸とした包囲戦術を敷いてくるが、包囲自体は大したことがない」と、どこまでがアリアの実力でどこまでが「ノイエ・シルバリー」の実力不足なのかよくわからないものであった。

だが、敵が無線兵器を持っていて、それを基軸にした物量による連携戦術を基本としているという指針が得られたのは大きい。

もしもハマモリのように、サイコミュ・ジャックを持っている機体があったならばメタとして大きく機能したのだが、残念なことにアキノのミネルヴァガンダムがベースとしているのはシナンジュであり、ユニコーン要素はアンテナとフェイス部ぐらいだから、その特効武器は持ち合わせていなかった。

そうなればアイカたちが取るべき戦術は、必然的にドラグーンによる包囲網を抜けての近接戦で各個撃破する、というものになるのだが——これに関しては、いい意味でアイカにとっての想定外があったのだ。

「……あの人たち、変態だけど強いんだなあやっぱり」

デイメンション・シユバルツバルト。常闇に覆われたその区画において唯一眠らないメガロポリスを拠点とする、鳥頭に全身タイツという紛れもない変態の編隊にして紳士たちがいる。

彼らの名前は「パロツツ・パーティー」。ゲーミングに光ながら鳥頭から変形ゲロビを垂れ流し、バリー・トワードなルールでのレースに日々勤しんで「最速」の世界を夢に見てその翼を羽ばたかせている挑戦者たちだ。

結論からいうなら、「パロツツ・パーティー」は、バンデット・レー

スという変則的な形ではあったものの一度「ノイエ・シルバリー」と対戦し、彼らを破ることに成功している。

考えてみれば当たり前のことだろう。彼らにとってファンネル攻撃などお手の物であったし、「パロッツ・パーティー」の主であるハートから送られてきた文面には、要約すると「リヒト以外の団員は全て無線兵器の制御をオートに頼っており、どちらかといえば無線兵器を軸に近接戦を仕掛けてくる傾向がある」という正に具体的な対策が記されていた。

そして、彼らのファンネル制御はエリイに遠く及ばない、という賛辞が付け加えられていたことも、アイカにとっては自分のことのように嬉しく、あの巨大ハイウェイで発光しながら追いかけて回されたトラウマこそあれど、ハートには頭が上らない思いだ。

オートでのファンネル制御には、独特の癖がある。

一日与えられた猶予を生かし、アイカは「HGCE ストライクフリーダムガンダム」を購入して素組みした上でGBNにログインしてその検証を行なっていたが、オート制御されたドラグーンは確かに原作同様相手の死角に回り込むような挙動を取るが、その運動パターンはランダムといえど幾つか決められており、恐らく付け入る隙があるとすればそこになるだろう。

付け加えるなら、どのパターンであれ自機の背後に回る挙動は共通しており、背後から確実に数発、スラスタやコックピットを狙う弾が飛んでくるとわかっていけば、速度で張り切って迂闊に飛ばせば誤射を誘発させる辺りまで近づいて、逆にツーマンセルで一機ずつ十字砲火で倒していけば勝機は多少現実的なものとなる。

そんな、アイカが組み立てた方程式はチイのそれとほとんど答えを同じくしていたが、問題は「ノイエ・シルバリー」が従える十五機のガンプレー——プロヴィデンスガンダムをベースに、複合防楯をインフィニットジャスティスのビームキャリーシールドからアンカーを取り除いた代わりに二本のビームサーベルを装備し、ユーレイキウムビームライフルをルプス・ビームライフルに変更した上で頭部をジムクウエルのものに換装した「プロヴィデンスジム」ではない。

リヒトという最大の壁が操る「ガンダム・エリュシオン」への対処こそが問題であり、それについてはアキノが盾になるという提案をする形で落ち着いたのだが、正直なところアキノとリヒトの間では、実力に開きができてしまったことは否めない。

だからこそ推定戦力比四対一ではなく、五体一の包囲網を突破した上でアキノと合流してリヒトを袋叩きにする以外に勝ち目はない。

ファンネルにしろドラグーンにしろ、無線兵器使いと長期戦を挑むということは、それだけでイニシアチブを彼らに渡していることと同義だ。

吐かせるだけ吐かせてクールタイムを待つ、という戦術もチイは考慮したが、そうなれば恐らく彼らは得意とする囲んで殴る戦術に踏み出してくるだろうし、もしも捌き切れなかった時の被害を考慮すれば、大きく損害を被るのはそっちの方だ。

だからこそ、短期決戦と袋叩き。

それ以外に「リビルドガールズ」が勝利する条件はないというのが、ブリーフィングにおける情報共有で導き出された結論だった。

「つつーわけだ、あの変態どもが役に立ってくれたのは予想外だが……これはアイカのお手柄だな、やるじゃん」

「ううん、シルバリーの戦術と……ガンダム・エリュシオンについて調べてくれたのはチイちゃんだから」

「そう謙遜すんなよ、礼は素直に受け取っとけ……って、さて、こっから一つだけ重要な話がある」

出撃まで残り一分という時間の中で、チイは改まって咳払いをする
と、他の三人を一望し、僅かに目を逸らしながらその唇から言葉を紡ぎ出す。

「この戦い、チイは多分回避盾になれねえし偵察も無意味だ、だからなるべく火力で貢献するつもりだが……まあ要するになんかあった時チイは庇えない、って思ってくれればいい」

相手が奥の手を準備している可能性があるのなら、それはチイも同じではあったのだが、できればそれは避けたいものだったのだが、四の五の言っていられる状況ではないことはわかっている。

だからこそできるのは、それを使わずに組み立てたチャート通り
ことが運んでくれることを祈るだけなのだが、乱数の神は凄まじい気
紛れである以上そのまま自分の願いを通してくれるほど甘くはない
ことぐらいわかっている。

「オツケーわかった、じゃあチイちゃん、何機かプロヴィデンスジムを
相手してもらおうことになるけどそっちは大丈夫？」

「……訊かねえのか、アイカ？」

「うん、聞いてほしいの？ 違うなら問題はあいつらをぶっ飛ばすこ
とだから最優先はそっち、だからチイちゃんにも手伝わってもらえるな
ら……なんでもいいよ☆」

「へっ、すっかりリーダー風吹かせるようになりやがって……任せと
けよ、今日のチイはAGIを鍛えた軽戦士だ、アイカとエリイに比べ
て時間はかかっちゃうかもしれないねえが……まあ処理してやんよ、そん
でアキノ」

「ええ、私も……リヒトを抑えられるように最善を尽くします」

「エリイちゃんもいつも通り、よろしくね！」

「……は、はい……！ 頑張ります……！」

全員が一通り決意を固めたところで、残りの時間が十秒を切る。
万全とはいえないかもしれないが、人事は尽くした。

ならばあとは天命を待つだけ。

コックピットへの転送を終えた「リビルドガールズ」全員が祈るよ
うな心境で操縦桿を握りしめて、出撃シーケンスへと移行していく。

「アキノ・ベルナルル……ミネルヴァガンダム、先行します！」

「チイも出るぜ、悪いが今日は偵察抜きだ！」

「……お願い、リビルドウォート……エリイ、出撃します……！」

「コアチェンジ……コメットトウフェアリイ、エボリューション！」

フェアライズガンダムは、アイカで行くから！」

声を揃えてカタパルトに下された足が固定され、戦場へと四機のガ
ンダムを運んでいく。

高速でスクロールする視界の先に映ったものは、漆黒の宇宙に浮か
ぶ青い水の星と、そして。

その周辺へと無数に並べられた鏡の森が、「リビルドガールズ」と「ノイエ・シルバリー」の面々を戦いの場に出迎えるのだった。

結論からいいうのであれば、その試みは概ね成功したといってもいい。

乱数の神様がデレてくれた、というのもあるのだろう。

アイカは配置されたステージが「地球近郊 ソーラ・システムEEI」であること及び、自分たちがその太陽熱を集めた鏡を守る連邦軍側ではなく、破壊するために侵攻したジオン軍側からスポーンしたこともまた、幸運だったといっていだらう。

シルバリーの戦略、戦術は腐つても「ノイエ・シルバリー」に受け継がれていた。

アイカはフェアライズガンダムの踵で思い切りソーラ・システムの鏡を踏み砕き、敢えてビルドボルグを引きずるように旋回しながら、ドラグーンによる包囲を躲して、自身の機体を狙うプロヴィデンスジムの群れに、旋回と牽制を中心にした、刻むような動きで接近していく。

『腕は鈍っていないようだな、アキノ！ 俺とお前……戦い方が逆になったのも因果か！』

「逆になった？ 貴方こそ私を見縊らないでください、リヒト！ 今の私は『リビルドガールズ』の盾……なれど秩序の切っ先を全て捨てたわけではない！」

戦場の中心では、Iフィールドソードでナイトブレードとバトルブレードの二刀流と打ち合うアキノのミネルヴァガンダムと、リヒトのガンダム・エリユシオン——奇しくも同じ、シナンジュ・スタインをそのルーツに持つ二機が光の軌跡を戦場に描きながら、激しくぶつかり合っている。

大振りなIフィールドソードの隙をついたかのように繰り出された剣戟をアキノは、それを待っていたとばかりにビームトンファアで受け止めるとそのままリヒトのガンダム・エリユシオンに蹴りを入れて、体勢を突き崩したところにラッシュを加えていく。

だが、リヒトとて手練れだ。崩された姿勢からすぐに復帰して、構えていた剣先でIフィールドソードのそれを滑らせるように受け止めると今度はアキノの体勢を崩して、意趣返しのようにドラグーン・インカムによつての追撃を行う。

瞬きをすればそれが致命の隙となるような戦いだ。

そしてそれは長く持たないだろう。

『な、なんだ!? ビームが明後日の方向に……!』

アイカは戦場を俯瞰しつつ、踏み砕いたミラーに自機の後方狙いで放たれたドラグーンの弾が命中したことでそれが動揺したダイバーが言ってくれた通り、明後日の方向に逸れていったのを確認すると、躊躇いなくビルドボルグで正面のプロヴィデンスジムを貫くと、その機体を盾にするような形で自身を包囲していた同機へとそのまま突っ込んでいく。

「悪いけど、アキノさんのために……エリイちゃんのために盾になつて死んでもらうから」

『こ、この外道……!』

「だから死ね」

味方を肉の盾にされ、おまけに周辺にはアイカが踏み砕いたソーラ・システムのミラー、その破片が漂っていると考えれば迂闊なオーレンジ攻撃も近接戦闘も仕掛けられない。

そして普段はその指示を出してくれる頼れる隊長はあのアキノという女に首つただけで戦場全体を見据えてはいないのであれば、烏合の衆となった「ノイエ・シルバリー」の面々がまともに動けないことは最早自明の理だった。

戦場が見える。

そして余裕を失った「ノイエ・シルバリー」を俯瞰しているのは、何もアイカだけではない。

ミラーによる跳弾でドラグーンによる全方位攻撃を防ぐのではなく、オート制御で放たれたその軌道を全て掌の上で握りながら、エリイは迷うことなくトランザムシステムを発動させて、赤く染まった因幡の白兎、リビルドウォートは掻い潜った包囲を抜けて、逆にマ

ニューアル操作のフィン・ファンネルによって四機のプロヴィデンスジ
ムを手玉に取っていた。

エリイの指先が手繰る光の網に引つかかった者を、或いはそれを回
避しようとして不用意に背後を晒した者を撃ち抜いていくその姿は、
気が弱くいつも泣いているような少女のそれとはかけ離れており、対
峙する「ノイエ・シルバリー」の団員たちは、ゲームメイカーとなっ
た彼女にただただ圧倒されている。

その光景をアリアが見ていたのであれば喜んでいただのだろう。

力を持ちながらもその牙の使い方を知らず、野に蹲っていた獣がG
BNという世界に解き放たれたことでその力が真実を示す。

彼女が見込んだ通り、アグニカ・カイエルの魂がアイカの中にも
眠っていたのなら、アイカとニコイチであるエリイの中にもそれが秘
められていたとしてなんの不思議があるだろうか。

「……スイッチ、です……!?!」

「任せてエリイちゃん!」

二人の役割は、ひたすら包囲を掻い潜って暴れることだ。

トランザムを切ったエリイと交代する形でアイカは「システム・
フェアリー・テイル」を起動して、先程のミラーを利用したトリツキー
な戦術ではなく、今度は純粋な速度でドラグーンを掻い潜りながら、
一機ずつプロヴィデンスジムをビルドボルグのサビへと変えていく。
さつき使った肉盾は引き抜いた上でバルカン砲を当てることであ
らかじめ処分してあるので無駄もない。

『どういうこと、押されている……!?! 各機、近くの味方と合流して
フォーメーションを組み直して! そしてあのウインドウォートか
ら……っ!?!』

「おっと、あんたの相手はこのチイだぜ! よそ見してたら後ろから
ドカンだ!」

リヒトが不在である時、「ノイエ・シルバリー」はどのような指揮系
統を構築しているのか。

混乱の最中で、アイカが乱舞してエリイがそのステージを操るがご
とく見えない糸を手繰り寄せる恐怖に怯えながら、「ノイエ・シルバ

リイ」の副団長である女性、「アリスティーナ」はいつも通りになんとか団員を統率しようと指示を出していた。

だが、それを邪魔する形で、ビームマシンガンにビームダガーを接続した銃剣とでも呼ぶべきものを得物としたチイのガンダムグラスランナーに割り込まれることで指示は団員たちに届かない。

平時であれば、リヒトが対応しなければいけない時の団員の統率は唯一、計十五機のプロヴィデンスジムの中でガンダムヘッドを装備することが許されている「プロヴィデンスガンダムアイリス」を駆る女性であるアリスティーナに任されていたのだが、彼女は元々シルバリーの団員ではなく、リヒトという個人の正義に燃える姿勢に憧れて入隊したため、咄嗟の事態にはパニックを起こしてしまうという弱点を抱えていた。

しかし、それでも彼女が副団長に据えられていることには理由がある。

シャイニングエッジビームブーメランをシールドサーベルとして利用する剣撃から巧みに逃れながらも、掠めただけで恐らく中破以上に自身の機体を持っていかれるであろうその威力と、パニックさせておいて尚これだけの実力を誇っているアリスティーナに冷や汗を流しながら、チイはビームマシンガンによる牽制へとそのスタイルを切り替えた。

『副団長、お助けします!』

『違う、貴方は近くの味方と合流して……っ!』

「隙ありつてなあ! ここは学校じゃねえんだ、お喋りしてえなら教室でやっつくんだな!」

アイカとエリイが形成している乱戦エリアから最も遠いプロヴィデンスジムが味方との合流ではなくアリスティーナへの救援を選んだその瞬間にチイはスモークデイスチャージャーを発射して煙幕を張ると、ミラージュ・コロイドを展開した上でプロヴィデンスジムの背後に回って、その背中へ銃床に接続されたビームダガーを突き立てる。

『な、バカな……俺がこんな、SDに!?!』

「けつ、SDだろうが旧キットだろうが背中見せたら死ぬんだよ、もつと人の話聞かお勉強しとくべきだったなあ!」

これで計八機。マーカアの点滅を確認して、チイは回避盾はやらな
いと宣言こそしたものの、回避盾とよく似たスタイルでアリスティ
ナの足止めを選択した上で、プロヴィデンスジムの残りは全て、ア
イカとエリイのズツ友コンビメンヘラタッグに一任することを決めた。

正直なところあの二人の連携は予想以上だ。地形に恵まれたとは
いえ、ミラーを破壊して跳弾を誘発するというアイカの判断もク
レバーだったし、エリイに至つてはファンネルの撃ち合いで負ける道理
がないとばかりに張り切っている。

それ自体は喜ばしいことなのかもしれない。

だが、厄介なのはドラグリーンという兵器が兼ね備えているその性質
だ。

プロヴィデンスジムのフォーマットが原型機と変わらないのであ
ればそのドラグーンの銃口は四十三にかけること十五となる。

当たらなくとも、どれだけうまく回避しようとも、掠めて蓄積した
ダメージは決してバカにしていけないようなものではない。

チイもアリスティーナが操るドラグリーンに直撃こそしていないが
各部装甲は焼かれていて、もうすぐでコーションが鳴り響くか響かな
いか、という辺りまで耐久値が削られていることは自覚していた。

そして、アキノもそろそろ限界が近い。

リヒトからの剣撃を受け続けたIフィールドソードの刃が欠けて、
その破片がミラーへと突き立てられて鏡を砕く。

リヒトは腐つてもSSランクだ。そしてスピードと小回りを重視
したビルドながらその機体のパワーは決してミネルヴァガンダムに
劣るものではなく、ドラグリーンシステムを起動してアキノはIフィー
ルドソードを背中のマウント部に戻すと、ビームトンファアによる応
戦を選択する。

『さっきまでの威勢はどうした、アキノ! お前の剣では俺に届かな
い! 今の内に降伏するんだ!』

「誰が! 私は……私は『リビルドガールズ』の盾なのです! ここで

一歩でも食い下がれば貴方が仲間を斬り捨てるなら、テコを入れられようが核を撃たれようが私はここから退くつもりはない!」

『強情な! どうして……その潔さを正義のために使えないんだ!』
だが、それが悪あがきであることは他でもないアキノ自身がわかっていたし、彼女をよく知るリヒトであれば尚更だろう。

交わし続けた剣戟は、虹の粒子を纏う黒銀のナイトブレード……サイコフレームを削り出して作ったという設定で製作されたその剣が、受け止めたビームトンファアごと、ミネルヴァガンダム左腕を切り裂くという形で初めの決着を迎えることとなった。

『悪いがここからは本気で行くぞ……サイコフレーム、俺に力を貸してくれ!』

「くっ……手札を切らされようところかも! サイコフレーム!」

青と虹、それぞれに胸元が発光した、同じ原石から磨き出された二つの機体が二度目のぶつかり合いを開始したが、恐らくアキノは持つはずがない。

そしてアキノがやられれば、いかにアイカとエリイの火力がリヒトの喉元に届きうるものだとしても、その前に潰されてしまうだろう。

リーダーに写る敵影は残り六。リヒトとアリスティーナを含めなければ残存するプロヴィデンスジムの数は四だ。

「アイカ、エリイ! すまねえ……っ!」

『何を!? 逃げるつもりなら……!』

「チイちゃん!? わかった、任されたあつ!」

「……わかりました、チイさん……!」

——チイは、仲間に恵まれたな。

自身の内から何か塩辛く温かな擬似感覚が滲んでくることに違和感を覚えながらも、チイはアリスティーナの対処とプロヴィデンスジムの対処をアイカとエリイに押し付ける形で、アキノを活かすための手札を、決して切りたくはなかった鬼札をここで消費することで腹を括って、フラッシュグレネードをプロヴィデンスガンダムアイリスへと投擲する。

そして、チイは全力で機体を戦場の中心へと急行させた。

(……済まねえな、アンシユの旦那……でも、チイは……!)

この切り札があれば確実にアキノは生き残れる。

だが、チイは。

操縦桿を握る手が僅かに震えていることを自嘲するように、へっ、
といつも通りにニヒルな笑いを浮かべながら、粒子を纏う二刀流を振
るい、アキノを追い詰めるリヒトと、今まさにデブリへと背中を叩き
つけられて追い込まれたアキノを助けるべく、チイは躊躇いつつもそ
の選択をした。

こんなクソみたいな賭けを条件に出したのはチイ自身だ。

自嘲しながら、そして温かくも胸を締め付けるような、切り裂かれ
るような感覚を振り払うように全力でブーストを噴かしながら、チイ
は静かに、まるで刑死の鎌を受け入れる罪人のように、リヒトを睨み
つける。

天秤の反対側には常に釣り合うものが乗らなければいけない。

それこそがチイのポリシーであったし、どうしても破ることのでき
ない誓いのようなものでもあった。

そしてチイは、心から望んでいる。

アイカとエリイ、そしてアキノが楽しくGBNを続けられる未来
を。

そして心の底から感謝している。

自身が面白おかしく金を稼がせてもらって、アキノという堅物だけ
どどこか憎めず、愛おしさすら感じるような人間と出会えたことを。

『これで終わりだ、アキノ!』

「くっ、抜かったか……!?!」

「いいや……アキノのバカはやらせねえ!!!」

全力で駆けつけたチイはヘッドバッドでそのままミネルヴァガン
ダムを突き飛ばすと、アキノに向けて振り下ろされた二刀の剣撃をそ
の身で受け止める。

「……チイっ!!!」

「バーカ……ここで死ぬって訳じゃ——」

そうして迸る光の中に、ガンダムグラスランナーの姿は呑み込まれ

て消えていく。

予定が狂ったかと、リヒトは舌打ちをするが、どのみち今のアキノではあのSDの挺身で延命したところで長く生き延びられはしないだろう。

数分だけ寿命が伸びただけなら、そこになんの意味がある。

悲しみに絶叫するアキノをどこか冷めた目で、しかし怒りの混じった瞳で睨みつけながら、レーダーを一瞥したその時だった。

「……そうだよ、ここで死ぬって訳じゃあねえんだ」

——敵の数は三ではなく四。減っていないのだ。

そうして、晴れていく爆炎の中にその機体が立ち上がるのを、ゆらりと立ち上がるのをリヒトは、そしてアキノは、否。

この戦場にいる全員が、愕然とした表情で見つめていたのだった。

第五十話「機動人形は未来の夢を見せるかく亡霊が討ち果たされた日」

爆煙が晴れた中には、確かに一機のガンプラが直立していた。

だがそれはどこかに傷を負うでもなく、袖口のスリットから展開したビームピアサーで、呆氣にとられていたりヒトを急襲すると、その左手に握られていたナイトブレードを無力化すべく、指関節を狙っての刺突を放つ。

しかし、誰もが言葉を失っていた。

そこにただのガンプラが立っていただけならば、驚きこそするものの、ZZガンダムを見たときのマシュー・セロのようなリアクションだとか、そういうもので済んでいたことだろう。

だが、そこにあつたものは「ガンダム」でも、「ガンダムに登場したモビルスーツ」のプラモデルをスキャンしたそれではなく、チイのダイバールックをそのままメカの姿に押し込めたような——いわゆる、モビルドールと呼ばれる存在だったのだ。

「EL、ダイバー……」

アイカが無意識の内に呟いていたその言葉が伝播したかのように、「リビルドガールズ」にも「ノイエ・シルバリー」にも動揺が広がって、膠着していた戦場が、混乱という形で動きを取り戻していく。

ELダイバー。それは、GBNに集積された感情の余剰データから生まれたとされている電子生命体の総称である。

とされている、という曖昧な形で濁されているのは、そのままの意味だ。

ELダイバーの発生原因については、日々運営もエナドリと胃薬を友として、その解明に全力を尽くしているのだが、わかっているように全くわかっていない。

その第一号として、この国からも認定されている「サラ」が、自身の出自に対して上記のような「ガンプラへの想い、GBNにおける何かを大好きだと思ふ感情から生まれた」と語っていた。

つまり、それぐらいしかELダイバーの発生に関する根拠はなく、ゲームのそれではないガチの検証班、運営スタッフは何か余剰となるデータが生まれうるのかと、日々バックログを漁っているのだが、「余剰」と呼べるべき感情データ群はどこにも見当たらないのだ。

ミラーミッシュョンはより多くダイバーの感情や心理を読み取るため、そこが由来かと当たりをつければ見間違いに終わり、そして二年間、今は「ビルドデカール」と呼ばれるELダイバーのデータをGBNと親和させ、現実における躯体となるガンプラー——「モビルドール」にそのデータ、魂とでも呼ぶべきものを定着させて保護することが精一杯、というのが現状であった。

皮肉にも「ビルドデカール」を開発した人物は「ブレイクデカール」を作り上げたことでGBNを混乱に陥れたそれと同一なのだが、今はGBNにおけるELダイバーを管轄するスタッフとして働いている——が、今は割愛しよう。

とにかく、爆炎の中から現れたものはモビルドールと呼ばれる存在であり、そしてさつきまでそれに包まれていたのはガンダムグラスランナーであることから、あのモビルドールを操縦しているのは、他ならぬチイであるということになる。

そして、モビルドールがELダイバーの現実における躯体となるのなら、取りも直さずそれは、チイが生身の肉体を持つダイバーではなく、電子の海に生きる、八十四人の内一人のELダイバーであることに他ならない。

チイがその姿を晒した理由は単純だった。

この作戦は、四人が生き残らなければ完遂できない。不意を突く形でリヒトの左手を無力化することには成功していたが、それでも彼のドラグーンインコムは、姿を現した「モビルドールチハヤ」を猛追し、そしてチイもそれを回避しつつも基本的にはグラスランナーのビームマシンガンしか手持ちの武器がないためジリ貧だ。

アキノが中破している今、なんとか戦線を立て直せる方法があるのなら、グラスランナーよりも身軽なモビルドール形態になることで回避盾となつてアキノと共に戦線を支え、残りを片付けたアイカとエ

リイの火力で強引に押し切るしかない。

(こーいうとき、あいつならもつとスマートにやれるんだろうけどよ)
チイは基本的に、ガンプラバトルそのものが得意だというわけではないし好戦的ではない。

だからこそクリエイトミッションの穴について報酬をせしめる斥候型ビルドを、その身体を覆い隠すための偽装にして愛機として利用していたのだし、モビルドール形態への移行だって必殺の布石というわけではない。

『E.L.ダイバーを隠していたのか、「リビルドガールズ」……だがその程度の攻撃で怯む俺ではない!』

「させません、チイ!」

「おうよ、アキノ! ボサつとしてた分取り返してもらおうからな!」

チイがビームピアサーと銃床のビームダガー、その両方を駆使してリヒトに対しての時間稼ぎを行っていた間、アキノはリヒトが取り落としたナイトブレードをアジャストし、それを握ることで二人の剣戟へと飛び入り参戦する。

チイが蝶のように舞い蜂のように刺すフェンサーなら、剣をその手にしたアキノは火力で薙ぎ払い押し切るファイターだ。

手……というよりは可能な限りSDとして偽装すべく短縮したものを採用していた足の短さという枷から解き放たれたチイのモビルドールは、必殺というわけではないが、アキノと足並みを合わせられるという点においては間違いない有効打であった。

チイが前に出て関節狙いの一撃を繰り出し、迎撃を回避したかと思えばアキノがドラグリーン・インコム of 攻撃を縫って、リヒトに猛攻を仕掛けていく。

そして、呆けている場合ではないのは、アイカたちも同じだった。

反応の遅れているプロヴィデンスジムをビルドドラグリーンで貫いて撃退すると、アイカはビルドボルグのコアユニットから発振したビームサーベルで、アリスティーナへと果敢に斬りかかる。

『くっ、残存する味方は……!?!』

「させないって言った!」

敵のまさかと思う瞬間が、こちらにとつてはチャンスとなる。

映像作品「ガンダム Gのレコンギスタ」において登場した台詞だが、それはまさに今のアイカとアリスティーナの交戦状況を示すのは打ってつけだ。

三体一という不利を背負っていても、ドラグーンに頼るだけの敵を相手に、同じファンネル戦ならばエリイが負ける道理はない。

アイカは心の底からエリイを信頼した上で残った敵の対処を任せ、アキノとチイの救援へと向かうべく副団長撃破RTAを条件問わずのレギュレーションで突発的にスタートしたのだ。

とはいえ、迂闊にフェアリー・テイルを使えば後に控えているリヒトを相手にするときには負け筋となる。

「ちっ……っ！」

『私だつて……銀の誇りを胸に持つ副団長！ 貴女になんて負け……』

「誰がどこを盛ってるっての!?!」

『そんな話してないでしょ!?!』

副団長というだけあり、巧みなビームサーベル捌きでアイカと渡り合うアリスティーナの背後と下に回り込むように二基のビルドドラグーンへと指示を出しながら、アイカは勘違いによる盛大な逆ギレを己の燃料にした上で、決して攻勢には回らせないという覚悟で、あの日「ワールド」と「タイガーウルフ」が見せた、ガードさせて尚有利な、荒々しくも無駄のない動きで副団長の彼女を追い詰めていく。

「……トランザム……お願い……っ！」

そしてエリイもまた賭けに出ることにした。

交戦時間を鑑みれば射出できるファンネルは残り二基、勝ち筋のために温存しなければいけない四基のことを考えるなら、機動戦を仕掛けることでしかこの状況を突破する方法はない。

再び赤熱化したリビルドウォートはドラグーンの網を滑るように掻い潜り、ビームライフルでの牽制を加えながら、遠ざかった一機を無視する形で正面に見えたプロヴィデンスジムヘシールドバツシュを叩き込むと、その背後から二基のフィン・ファンネルで撃ち落とす

た上で、残り二機になった敵からの十字砲火で機体を損傷、中破させつつも、なんとかファンネルを守り切ることは成功していた。

——十字砲火の対処にダメージを食らっていいという条件を加えるなら。

片肺を失った白兔はビームライフルを背後の敵にノールックで撃ち放ってそれを撃破すると、ライフルを投棄した上で腕がれた左腕のシールド裏からビームサーベルを回収して、残ったプロヴィデンスジムへと咆哮と共に切り掛かっていく。

「っ、あああああっ……!」

『そんな見え見えの正面突撃でどうにかなると!』

ならない。それはわかっている。

実際にエリイがビームサーベルを振り下ろした右腕はプロヴィデンスジムの右腕に切り裂かれ、四肢を残ったドラグーンに撃ち抜かれたが、それでもまだ、一枚上手なのは彼女の方だった。

フィン・ファンネルは、他のファンネル系武装と比べて稼働時間が長い。

まだも動いていた二基のフィン・ファンネルはエリイとリビルドウォートを斬りつけた最後のプロヴィデンスジムを撃ち抜くと、その役目を終えたかのように背部のブーストポッドへと帰還していく。

肩のGNドライヴは二基とも損傷ないし損失しているが、副動力の核融合炉はまだ、リビルドウォートにその血液としてエネルギーを送り出して拍動している。

そして、アイカもその翼を切り裂かれ、ドラグーンによる全方位攻撃を全力で回避しながらも細々としたダメージを負いつつ、とうとうアリスティーナの左腕を切り捨てて、ビルドドラグーンによる奇襲で背後からそのコックピットを貫くことに成功していた。

「これで……終わり!」

『そんな、私が……! リヒトさん、ごめんなさい……!』

『ティーナ!』

「よそ見してんじゃねえぞ純情坊や!」

副団長の撃墜という事実動揺した一瞬の隙を見逃さずにチイは

ハイキックでガンダム・エリユシオンの顎を蹴り上げると、そこにビームマシンガンによる追撃を加えていく。

ブリューナクを使うならば今しかない、アキノはそう判断しかけたところを押さえ、通常の剣戟を続ける道を選んだ。

果たしてチイの決死の攻撃により体勢を崩しながらも、リヒトはその類稀なる操縦技術でドラグリーン・インコムを発射してチイの右足関節を砕き、妄執してきたアキノの氣勢を削ぐことで攻撃のタイムリングを遅延させて、お返しとばかりに一閃した剣閃でミネルヴァガンダムの右腕を胴体ごと袈裟懸けに切り裂いてみせる。

『俺は……負けれないんだ、この誇りにかけて、ビーティスさんの跡目として！俺がGBNを守らなきゃ誰が守るっていうんだ！』

サイコフレームの発動によって劇的に反応速度が向上しているガンダム・エリユシオンに、リヒトの過集中が重なったそれはまさに、戦場を駆け抜ける一つの嵐だった。

吹き荒れる剣閃からアキノを庇いつつも、チイの躯体であるモビルドールは傷付けられて、左腕が飛び、ビームピアサーでガードした右手首もそのビームごと、サイコフレームソードに切り裂かれてしまう。

——もはや天命は尽きたか。

それが飛来したのは、チイのガードを突破した目の前にガンダム・エリユシオンが現れてその剣を振りかぶる姿を視界に認め、アキノが諦めに歯を食いしばろうとしたその時だった。

四基のフィン・ファンネルがリヒトの死角から攻撃を放ち、取り囲むように光の網を描いていく。

『邪魔だ、死に損ないが！』

だがそれも一瞬で叩き落とされてしまい、エリイの抵抗は無駄に終わったのかと問われれば。

その答えは間違いなく否であった。

ビルドボルグの一撃がサイコフレームソードへと振り下ろされて、アイカはフェアライズガンダムの小柄な体躯を活かすことでリヒトの懐に飛び込んで、その土手っ腹を蹴り飛ばしたところに左手で引き

抜いたビームサーベルによる投擲で牽制を加える。

全ては勝利の布石のために。

勝ち筋を拾うのではなく負け筋を潰すために。

アイカもエリイもただ、それだけを脳裏に描きつつ、同時に勝ち筋をも拾い上げるべく最後の賭けに出ることに決めていた。

驚きこそしたけれど、チイがどうして今まで自分がE.L.ダイバーであることを黙っていたかなど関係ない。

それこそ彼女が言っていたように、話したいのなら話せばいいしそうでないのなら話さなくてもいい、誰もが一つは抱えている人生の秘密、ただそれだけの話だろう。

「でやああああっ!!! エリイちゃん、アキノさん!」

「……はいっ……!」

「そういうことですか……了解しました!」

ファンネル系武装がリキャストを必要とするのは、そのエネルギーを使い切ったと判断したときだけだ。

それはバグではなく仕様として検証されていて、例えばクシャトリヤのファンネルを一基叩き落としたところで他による攻撃が止むことはないように、四基のフィン・ファンネルこそ失ったが、まだエリイの背には二基のフィン・ファンネルが生きていて、アキノは両腕を失っていたが、自慢のIフィールドソードはまだ完全に大破したわけではない。

エリイが迷わずに必殺技を発動したのを確認して、アキノは彼女にIフィールドソードのコントロール権を手渡した。

「エリイ! アイカさん! どうか……お願いします!」

「足りつかどうかわかんねえけど、チイの武器も持つてきな!」

リビルド・パワーゲートが形成されると同時にチイは残った足で周囲を漂っていた右手首や左腕が握り締めていたビームマシンガンをゲートの中にシユートして、アイカがその、必殺を宣言することに文字通り全てを賭ける。

「任された! ……これが……これが私たちの描くフェアリー・テイルとその結末! 自治厨でもなんでも関係ないしどうでもいいけど……」

あたしの大切な友達を勝手に持つてこうとしたんだからそのまま死ねえええええツ！」

『ふざけるな！ 俺はまだ負けてない、貴様らもろとも消し炭にすればそれで済むんだ！ 来い、ドラグーン！ お前の力と俺の誇りで、立ちをはだかる悪を打ち払う銀の剣とする！』

吹き飛ばされたりヒトは、ドラグーン・インコム線の線をパーズするとそれを残っていたサイコフレームソードの刀身に沿わせて装着することで、チャンピオンが用いている必殺技、EXカリバーとよく似た巨大なビームの刀身を形成する。

『ドラグーンソード……ミスリルストリームツ!!』
「フェアリー・ストライク……ブライドおおおっ!!!」

聖銀の輝きを纏う、ガンダム・エリユシオンの刀身と、妖精の羽のように緑を基調としつつもそこに七色の虹を纏う純粋なエネルギーの塊となって駆け抜けていくフェアライズガンダムが激突する。

モニターはスパークする閃光で白く染まり、アイカの視界にはもはや何も映ってはいなかったが、決してその足を止めることなく、食いしばった歯が砕けそうな擬似感覚のフィードバックを堪えて、フェアライズガンダムを、その妖精の羽を帆にして進む女王を前へ、前へと進めていく。

そうして仲間からの支援という追い風を得て、フェアライズガンダムは主人の願いに答えるかのように猛く羽ばたく。

負けられない。負けるわけにはいかない。

ぶつかり合う光の剣と妖精の一矢に、もはやしがらみなどというものはどこにもなく、ただガンプラバトルに興じるダイバーとしての意地がリヒトを、そしてアイカを突き動かしていた。

——だが、決定的に両者を分かちものがそこには存在している。

ぶつかり合っていたエネルギーの閃光が次第に晴れて、伸びていたのはリヒトの振り下ろしたミスリルストリームの方だった。

しかし、妖精の羽は消えてはいない。

その冠を輝かせ、光の剣の残滓を——「対ビームコーティングが施されている」ビルドボルグの刀身で切り裂きながら、アイカは、フェア

アライズガンダムは進んでいく。

止まらない。止まるわけにはいかない。

アキノという大事な仲間のために。チイがその秘密を曝け出してまで守ってくれたこの機会のために、最愛の彼女であるエリイのために、そして。

——いつか出会ったその時、コアガンダムを初めて作って今もどこかで彷徨い続けている誰かに、恥じることのない、あたしが初めて信じてあげることができた、あたし自身の「大好き」の、コアガンダムの、フェアライズガンダムのために！

「死ねええええええッ!!!」

『そんな、バカな！ 俺は……俺は！ アキノ！ ビーティスさん！ シルバリーは！ シルバリーがなくなったら、誰がGBNの秩序を——』

「そんなの……あたしたちの知ったことかああああ!!!」

そうだ。知ったことじゃない。

こいつの抱えている事情も過去の話も何もかも。アイカは絶叫しながら、その純粋な力のみが示す真実を、「大好き」という気持ちが生み出した、そして「大好き」という気持ちが手繰り、寄り合わせた縁が作り上げた牙であるビルドボルクの切っ先を、エネルギーの尽きたガンダム・エリユシオンのコックピットへと思い切り突き立てた。

フェアライズガンダムがまだ「妖精の羽」を展開できていることに理由があるとするならば、それはアイカのリソース管理が上達していることも挙げられるが、何よりも——エリイの必殺技である、リビルド・パワーゲートの性質にこそそれは見出せるものだった。

リビルド・パワーゲートはパワーゲートの名の通り、単体での攻撃力こそ持たない代わりに、フェアリー・ストライクの、通過した武装の威力を増幅させる性質を持っているが、同時に通過する機体に対してエネルギーの供給を行い、武器を投げ入れればその威力を加算するのだ。

だからこそ、アイカの剣はそのビームコーティングと、仲間たちからの支援という追い風を得たことでSSランクの喉笛を食いちぎる、

あるいはその首を失って彷徨い続ける亡霊の鎧を打ち砕くヴォーパルの剣となったのだ。

リヒトも奮闘していたことは確かだった。

もし、先ほどの条件の中からどれか一つでも欠けていたのなら負けていたのは「リビルドガールズ」に他ならなかった。それほどまでにSSランクという存在は凄絶であり、「アイカが必殺技を当てる」と以外の勝ち筋はないと、他でもない本人たちがそれを認めているのだ。

だからこそチイは秘密を捨ててまで挺身した。だからこそアキノはブリューナクを発動するのではなく自身の愛剣をパワーゲートの糧にした。そして、だからこそエリイは、勇気を出して戦った。

もしも、アイカとリヒト、二人の勝敗を分かť絶対条件がそこにあるとするなら、アイカはフォースメンバーを「仲間」として見ていて、リヒトはフォースメンバーを「部下」として見ていたことだろう。

そのことに対する善し悪しではない。ただ、そんな些細な違いが勝敗を分かť条件となるのがガンプラバトルというだけの話だ。

無論、逆に「仲間」として見ることが足を引っ張ることだってあり得るように。「部下」として見ることが効率的な勝利を手繰り寄せることだってあり得るように。

だが、この戦いはそうではなかった。それだけなのだ。

【Battle Ended!】

【Winner:リビルドガールズ】

絆が手繰り寄せた勝利に「リビルドガールズ」は勝鬨を上げるかのように、それぞれに微笑みを浮かべて機械音声が勝利の通知をダイアログにポップさせるのを見届けて、ロビーへと解けていく。

そして、最後まで残っていたチイは、その光景を、アイカの、エリイの、アキノの笑顔を脳裏に焼き付けて、目蓋の裏に刻み付けるかのように見届けると、ふっ、と自嘲するような笑みを浮かべて、その凱旋を果たすのだった。

「クソッ！」

惜しくも敗北を喫したりヒトは「リビルドガールズ」と顔を合わせずに報酬だけを振り込んでフォースを解散すると、がむしやらに損傷した機体を、結構なお値段のする課金アイテムで三割ほど修復した状態で復帰させて、当てもなくデイメンションを彷徨っていた。

シルバリーの血筋はこれで途絶えた。ならば誰がこのGBNの秩序を、運営に成り代わって守っていくというのか。

キャプテン・ジオンは都合の良い時しか現れない。マギーだって同じだ。

ならば統制された集団こそが必要だというのに！

怒りに任せてがむしやらに機体を走らせていたリヒトは、眼下に見る景色の中に、見覚えのある機体を発見した。

リバーシブルガンダムをベースとしていたそれは、細部こそ違っているが元々マスダイバーが使っていたものだ。

弾かれたように、がむしやらに降下してリヒトはその機体と共に湖畔に浮かぶ月を眺めるかのように佇んでいたダイバー……「アクセル」に剣を突きつけて、フリーバトル申請を行う。

「お前……元マスダイバーのアクセルだな！　まだGBNを続けているのか！」

リヒトの言葉にゆっくりと振り向いた茶髪をウルフヘアーにした男、アクセルは自嘲するように肩を竦めながら答える。

「ああ……そうだ。おれは元マスダイバーだ。それでお前は……確かにシルバリーだったか、これがな」

「そうだ！　……っ、いや、シルバリーは……違う！　とにかく俺は銀の誇りにかけてお前を討ち果たす！」

「いいだろう、来い。おれもお前も亡霊だ、夜に戦うならちようど良いだろう」

アクセルはそれだけ告げて、自身の愛機である「リヴァーサルガンダム・ソヴァール」に乗り込むと、槍のような武装を振り回して、損傷したガンダム・エリュシオンにその切っ先を向けた。

結論からいってしまえば、それはもはや勝負にすらならなかった。

万全の状態であればある程度は持ち堪えたのかもしれない。だが、損傷に損傷を重ねて砕けたサイコフレームソードは三割の耐久で復活しながらも個人ランク99位という「二桁の魔物」が振るう荒れ狂った力に耐え切ることができず、それはガンダム・エリュシオンもまた同じだった。

一瞬の内についた決着に愕然としながら、リヒトはただ力を失って、湖畔を見下ろす草原に倒れ込んでいく。

終わった。全ては。もう俺は決定的な敗者で、シルバリーの血筋は潰えたのだ。

その事実を喉元に突きつけられたような感覚に、リヒトは嗚咽して静かに涙を零していく。

「……その様子だと、誰かにでも負けてきたか」

「……っ、そうだよ！ 俺が負けたせいで、『ノイエ・シルバリー』は解散した！ そして今元マスダイバーのお前なんかにも負けたんだ！

もう放っておいてくれよ!!!」

絶叫するリヒトの隣に座り込んで、愛機から降りた、薄水色のフライトジャケットを纏うアクセルは先ほどと変わらず、湖面に浮かぶ月をただ茫洋と眺めているかのように、じっと視線を前に向けていた。

「……おれも負けた」

「はあ!? だからなんなんだ！ ブレイクデカールなんてチートを使ったやつがビーティスさんに敵うわけがないだろ！」

「ふ……そうだな。その通りだ。おれには才能がないと、だからGBNを辞めてしまえと言われているような……そういう気分だったさ」
アクセルは覚えている。自身が「ザ・シルバリー」の精鋭に押し切られて敗北を喫して以来、ブレイクデカールにこそ手を出さなかったものの、元マスダイバーという烙印を抱えて、抜け殻のようにGBNを旅していたことを。

「……っ、その通りじゃないか！ 間違っただらろ!? ならやめて責任を取るのが筋なんじゃないのか!!!」

「奴はそう思っていたようだがな」

「奴……?」

「お前の尊敬する男だ。だが……おれはこの烙印を押されてふらふらと彷徨っていたことで、それでも得られた気づきがあった」

ビーティスが辞めてしまった理由に察しはついた。アクセルはそれから、ビーティスへの復讐という動機すら失った上でただデイメンションを彷徨う亡霊となったのだ。

そこからはただの地獄だった。行く先々で煙たがられて石を投げられるような日々で、本当にGBNを辞めてしまおうかと、そう思っていたと、アクセルは静かに湖面を切るように小石を投げながら淡々とリヒトへとそう語った。

「……なんだよ……なんだよそれ、間違ってたら……」

「そうだ。おれは誤った。過ちを犯した。だが……それでもこの世界が大好きだったんだ」

不思議なもんだな、これが。

アクセルは自嘲するように微笑むと、リヒトに向かってその手を差し伸べる。

「……なんのつもりだ!! 俺に情けを……」

「そうだ、そして……人は誤ちを繰り返さないために、やり直せるのさ」

「っ……!」

「おれはやり直した。それでも過去の罪が消えないことは否定しない……もしもお前が過去に囚われて引き返せないだけで、誤っていたと思うのなら、同じ穴の貉の先輩として送る言葉があるというだけだ、これがな……」

元マスタイバーの手なんか借りなくても、お前は自分で立ち上がれるだろう。

そう言い残すと、アクセルは差し伸べた手を引っ込めて、再び放浪の旅へと戻っていくのだった。

「畜生……ちくしょう……うわあああッ!!!」

リヒトはただ、湖面に映る月へと向けて咆哮する。

わかっていたのだ。自分たちが本当は間違っていることも、だからアキノに振り向いてもらえなかったことも、ビーティスが去っていつ

た理由を作ったのは、自分だったのも。

ただ、それを認められなかったのだ。認めるわけにはいかなかったのだ。

認めてしまえば今までの自分が全て意味をなくしてしまいそうだったから。認めてしまえば、あの楽しかった日々を否定することにもなってしまうから。

静かに頷れた彼の足はもはや力を失っていた。だが、それでも。

それでもいつか、前に進める。

そう言い残すかのように、仮想の空に浮かぶ月へと、先に蹉跌し、再生した過去の亡霊とその愛機は、リヴァールサルガンダム・ソヴァール……「大好き」を叫んでこの世界とELダイバーの両方を、そして自分を救い上げてくれた少年にリスペクトを込めたその機体は、「大好き」な空を翔けてゆく。

銀の亡霊は討ち果たされた。ならばここにいるのは。

ただ、蹉跌から立ち上がるとうとする一人の少年と、彼を救い上げた小さな救世主に、他ならないのだった。

幕間其の四：特定電子生命体の誕生及び【閲覧権限がありません】

〔A. D. 20XX 1/12〕

特定電子記録機器における電子生命体、公称特定電子生命体、通称ELダイバーの誕生は、ある種の奇跡とでもいわなければ説明が成り立たない。

GBN——ガンプラバトル・ネクサス・オンラインにおいて、アバター表情等を再現するために、プレイヤーの感情を読み取った際に余剰として集積された感情データ群及び、「ガンプラの想い」が彼女たちを生む土壌になったということは、特定電子生命体第一号「サラ」へのインタビュールから判明している。

だが、実際のところ、彼女が言うような「ガンプラの想い」、即ちダイバーの感情に関わらない余剰データ群と呼ぶべきものは、この一年バックログを徹底的に調査したが、見つからなかった。

ミラーミッションと呼ばれる特定ミッションは、その性質上ダイバーの感情や深層心理を大きく読み取ってその内容に反映するため、当初はそのデータ群こそがELダイバー誕生の鍵になったのではないかと調査チームは検討をつけたのだが——結果は知っての通りである。

GBN運営チームは決して読み取ったダイバーの感情データや深層心理等を何かに悪用する意図はない。

だからこそこの業務は調査班にとっても心身ともに多大な負担を強いられるものであったことは明白であり、こうして記録をつけている我々も正直なところ罪の意識から、非公式に残しておこうと深層デイメンションに秘匿させてもらっている。

不満がないかといえば嘘になるが、カツラギさんのことを思えば文句など言えようはずもない。

日本政府との対外折衝、そして無茶振りされた業務を部下に押し付けてしまうこと及び、その失敗に責任が課せられる——このような仕

事を一体どこの誰がやりたいというのか？

本題からは逸れてしまったが、E.L.ダイバーについて現時点で確実に分かっていることだが——我々も笑ってしまう他にないのだ。

ないのだ。何一つとして、確定情報が。

個人の発言や個人に依存する技術によってE.L.ダイバーは世に送り出される運びとなったが、我々としては正直なところ屈辱を感じざるを得ない。

しかし、彼女たちがこのゲームと、ガンブラから生まれてきたというのであれば、我々運営スタッフは神父のように生まれくる彼女たちへと祝福を与えなければならぬ。

故にこそ、「按手」を招いたのは屈辱でこそあつたが必然だつた。

E.L.ダイバーがこの電子の世界を脱して現実で人々と共に暮らすために必要な技術となる、彼女たちの魂とでも呼ぶべきものをナノサイズのデカール状データチップに埋め込んで、モビルドールと呼ばれる躯体を、我々が棄てたG.P.D.の技術であるプラネットコーティングで動かすことで、彼女たちは電子ではなく現実はその生を受けることが可能となった。

だが我々は——いや、この文書記録を記している私は、その「現実での共生」という在り方そのものに疑問を呈している。

確かにビルドデカールを定着させた躯体を用意して彼女たちを現実へと送り出さなければ、法律的に彼女たちは不正アクセス禁止法によって裁かれることとなるのだが——厄介なことに、E.L.ダイバーの人権というものについてはあれから一年が経つた今でも、恐らくその先も宙ぶらりんであり続けるのだろう。

白とも黒ともつけたがらない官僚主義と日和見に吞まれたこの国を嫌うわけではない。それ故に甘い汁を吸えてきた部分があることも否定しなければ、此度の仕事のようにその反動で苦いものが誰かに押し付けられる世界だ。

燃える蝋燭が載っている皿をニトログリセリンに浮かべたものが注がれているタライが回ってきた時点で私も、我々も、逃げておくのが正解だつたのかもしれない。

またも話が逸れてしまった。筆者たる私の悪い癖だ。

要するに特定電子生命体における誕生記録とその調査であったが、結論としては失敗といったところだろう。

誕生因子は解明できず、そしてかの「ブレイクデカール」を製作した人間に対して、器物損壊罪や不正アクセス禁止法、威力業務妨害等々現行の法律でしょっぴけそうなところを血眼になって探していた法務部の努力を嘲笑うかのように我々はその「庵主」と親友を、運営スタッフとして迎え入れる運びとなった。

それは、GBNの敗北宣言であったのやもしれない。或いは「第二次有志連合戦」なるものが開催されたことでユーザーにゲームの命運を託すという狂気的な事態が発生していた時点で何を今更といった風情であるが――

もはやこの文書を見る者はいないだろう。私も守秘義務を課された上でGBN運営チームを去ることになっている。

噂によれば「桜宮」の本家とその令嬢が何やらGBNと各方面での関わりを強めてきているようだが、ここを去る私には関係のない話だ。

引き継ぐことになった彼は神秘の解明に携われると目を輝かせていたが、今はただその純粹さが羨ましい。

その若さは、私がとうに失ってしまったものであったから。

私は特定電子生命体を嫌悪しない。むしろ生まれてきたことを祝福する一人の神父にして、その奇跡に対しては敬虔な信徒でありたいという思いさえ抱いている。

だが――彼女たちがこの電子の海を母胎に生まれたのであれば、それを現実に取り摺り出して共生を謳うというのは何か歪みがそこに発生しているのではないかと、私は思ってしまうのだ。

第一号、「サラ」とその後見人となった「ミカミ」家とその息子は良好な関係を築いているため、確かに奇跡を信じたいくなる気持ちは理解できる。

しかしながら、人類が異なる文化や文明と出会ってきた時、そこには少なからずどちらかの悲劇があった。

不理解。不協和。対話しようにも生み出されたすれ違いが彼女たちの身にも降りかからないことを祈りながら、私は長いこと世話になつていたこの会社を後にする。

もしも君がこのイースターエッグを発見したのであれば、何をそんなこと、と笑い飛ばせるような世の中になっていることを私は切に願うものである。

人類と彼女たちの「対話」は、まだその入り口に立ったばかりだからだ――

※※※

〔A. D. 20XX 4/12〕

僕がこの文書を見つけたのは全くの偶然であることを、このコメントに付け加えさせてもらいたい。

だが、引き継ぎを担当したあの人が、カツラギさんすらその退社を惜しんでいた理由はこれを見るだけで理解できた。

彼の慧眼は恐らく今という事態を見越していたのかもしれない。

連絡手段もなく、どこに行つたかわからない以上、ここに僕が何かしらを付け加えるのはただの自己満足だ。

それでも、贖罪をしなければならぬと思つた。そうでもしなければ僕の良心がその呵責に耐え切ることができないから、逃げているだけだと嘲笑ってくれても良い。

幸いであつたのは、桜宮家がこのGBN運営において大きな発言権を持つことになった、そのことだが、同時にそれは最大の不幸によつて訪れたといつてもいい。

ELダイバーに人権を認めるべきか？

その議論は今も国会を紛糾させているし、その中でも「第一次特定電子生命体に関する特別法案」が参議院を通過したのは喜ぶべき事態なのだろう。

官僚に飲まれた与党は否定のポーズを取ってこそいるが、彼らもその仕事が対外折衝であることを考えれば、他国にはないELダイバー

でも残さなければとてもじゃないが気が狂ってしまいそうなのだ。さておそらくこの資料にたどり着いたということは、あなたは知っているだろう。

GBN内において現在、一人のELダイバーが行方不明となっている。

その経緯について記すことが許されないのには憤激を覚えるが、仕方あるまい。

しかしあなたがその案件について調査しているのであれば恐らくそれは——公然の秘密として処したほうが、我々のためにも「彼女」のためにもなる。

……ここまで書いたのならもう、腹を括るしかあるまい。

僕はおそらく明日にはこの会社からいなくなり、行方不明者捜索届が出されていることだろう。

それが公安なのか政府なのか或いは別な勢力なのかはわからない。だが、桜宮グループにコネクションを持たない僕では、抗うことなど出来ないだろう。だからこれは、せめてもの、細やかな、子猫が爪で引つ搔くような爪痕であることはここに記しておく。

ELダイバー、「イリハ」のログインが途絶えたことと、君が調査している失踪したELダイバーについては決して無関係ではない。

どうか、このファイルを開いた者が桜宮に関わる者であることを切に願う。

そして、彼女たちと我々の未来を、より正しい方へと導かんとするその志と対話を続ける精神を持った、トレイルブレイザーであることを最後の結びとして、この追記を締めくくろう。

※※※

【A. D. ※※※※※】

特定電子生命体——号「イリハ」に関わる案件甲及びその顛末についての報——（これ以降は全て黒塗りにされている）

第五十一話「例えば塗装後に接着したパーツがもげる
ようなくアイネ・クライネは突然に」

「わりいけどさ、これでチイはお別れだから」

銀の亡霊たちに勝利を収めたアイカたちを出迎えたのは、歓声でも喝采でもなく、背中を向けたチイが放ったそんな冷たい言葉だった。

聞き間違いかと思っただけで、アイカはまだGのフィードバックが残っている軽い吐き気に耐えながら小さく首を傾げたが、それを冗談だと言いつけるような空気でもなければ、言い出すようなチイでもないということはすぐにわかる。

「……え、あ……あの……ど、どうして……」

「どうして？ おいおいエリイ、忘れちゃったのか？ チイとエリイたちは……『リビルドガールズ』はフォースメンバーであってフレンドじゃねえ」

「……で、でも……！ フレンドワープを……」

「ありやフォース画面のメニューからメンバーにも使えんだ、嘘だと思うならその受付に聞いてみな」

「あ、ああ……うう……っ……」

エリイが真っ先に食い下がってチイを引き止めようとしたが、取りつく島もないといった冷たい態度に気圧されて、ぽろぽろと涙をこぼしながら、力なくロビーの床にへたり込んでしまう。

「ちよつとチイちゃん！ どういうつもりなの!? エリイちゃん泣かせたのもだけど、フォース戦の条件にチイちゃんの脱退なんて入っていないでしょ!？」

アイカは傷付き顔れてしまったエリイを抱き抱えてチイへと叫ぶが、彼女は後ろを向いたまま振り返る気配もなく、全てを拒絶するその背中には、理論武装も曖昧に当惑のままにぶつけた言葉が通じるはずもない。

「言っただけからな、それにあの『ノイエ・シルバリー』みたいに抜ける時なんやかんやってルールもこのフォースにやねーだろ？ だか

ら……潮時つてこつたよ」

「このっ……！」

「やめなさい、アイカさん。チィ……本気なのですか」

怒りのままに立ち上がって、チィへと平手打ちを放とうとしたアイカを静止しながら、シルバリーの制服を脱ぎ、よく似たデザインながら赤と金を基調とした新たなダイバーブルックに装いを改めたアキノが、毅然と去っていく彼女の姿を睨みつけながら問いかける。

「本気じゃなきゃこんなこと言わねーよ」

「だったら……だったらなんでアキノさんの時にあんなに熱くなつたの!? わかんないよ! あたし、チィちゃんがわかんない!」

「アイカさん!」

アキノに引き止められながらも、アイカは感情のままに雑踏へと溶けて消えていくチィの影を縫い止めようと精一杯に引き留めるための言葉を投げつけるが、その全てはロビーに溢れるダイバーたちに踏み砕かれて、届く前に消えてしまう。

わからない、と叫んでいたのは本当だ。

確かにチィはELダイバーだったという事実を隠してこのフォー스에所属していたが、それこそ彼女自身が言ったようにアイカたちは、チィ個人の過去や事情など関係なしに四人が集まっていることこそが重要であり、そこに生物としての在り方の違いなど関係ないと思っっている。

それとも、ELダイバーと人間、その在り方には致命的な断絶があるだけで、自分たちが理解できていないだけなのか。

アイカは混乱する頭を整理しようと考えを巡らせていたが、思考回路が発した命令は同じところを走り回るだけで、脳を疲弊するだけ疲弊させて結論にはたどり着いてくれなかった。

それでも、アイカが公衆の面前でチィが秘密にしていた、彼女自身がELダイバーであるということ叫ばなかったのはその良心が、或いは事情こそ違えど心の傷や秘密のようなものを抱えているだろうか。

アキノは発奮するアイカを取り押さえながらも、微かにチィの言動

に引つ掛かりを感じながらも、このフォースに拾われた、そしてアイカについて行けた理由をそこに見つけられたような気がして、複雑な面持ちでもうすっかり小さくなってしまったその背中を見つめるところしかできずにいる。

「……チイ！　ならばどうしてかぐらいかは教えてくれませんか!？」

「……どうして、ね。もう500万稼いだからかな、まあこれからも金はあるからぼちぼち他んとこてやってくつもりだけどね」

「だったら！　私がもう500万稼ぎます、それでは不足ですか!？」

「……チイは即金以外認めねーよ。じゃあな、アイカ、エリイ、アキノ」
——稼がせてもらってありがとうよ。

それを最後の言葉にして、チイの背中是完全に雑踏へと溶けて消えてしまった。

ELダイバーであるというのは、彼女があのお店でこぼしてくれた言葉よりも重いのだろうか。

とうとうエリイと同様に泣き出してしまったアイカを見て、アキノはただ途方に暮れながら考える。

それとも、あの言葉も自分の身柄のためにあんな、秘密を晒す危険があるほどの賭けに打って出てくれたことも含めて、全て金を稼ぐための方便であり嘘だったのだろうか。

アイカとエリイの二人が人目も憚らずに泣いているから多少歳上として冷静になれているだけで、アキノ自身も当惑し、頭の中はあれこれと用をなさない推察や考えが、感情が渦巻いていてどうしようもない。

かといって、二人にかけるような言葉が思いつくでもなく、ただ自分がこうして黙って歯噛みすることしかできない自分に心底嫌気がさして、アキノは右の拳を固めながら、自己嫌悪からくる怒りに震える。

アイカにも、エリイにも、チイのことがわからない。

そしてアキノにもわからないしチイも語らずに去っていくのであれば、何をしようにも八方塞がりだ。

光が走ったのは、このまま「リビルドガールズ」が空中分解してい

くのをただ黙って見ているしかないのだろうか、三人がそれぞれに途方に暮れて黙り込んでいたその時だった。

「……つく、ぐすつ……何……?」

「……」

「これは……ガードフレーム?」

転移してきたと思しきGBN―ガードフレーム四機がアイカたちを取り囲んだかと思えば、モーセが海を割ったかの如く人混みが左右に割れて、ロビーを悠然と歩いてくる存在がアイカの視界に映り込む。

ガンダイバー。SDガンダムフォースに登場するキャラクターをそのアバターとしてしている存在など、GBNには一人しかいない。

「じ、GMだぞ……」

「あいつら何やらかしたんだ……?」

「確かあいつらって、『リビルドガールズ』じゃあ……」

それは他でもない、このゲームの運営、それを統括するゲームにおける最高責任者にして会社における中間管理職たる男であるゲームマスターだ。

そしてGMが降臨するということは、何か特大の問題が発生している、というのがダイバーたちにおける共通認識であり、彼が現れた時に人々が道を譲ったのは決して純粋な敬意だとか崇拜だとかそういうものがさせたことではなく、ひとえに「目をつけられた奴らが俺たちだったら堪ったもんじゃない」という忌避の感情に尽きる。

運営など憎まれ役だとわかっていても、ガンダイバーのアバターを使う男――カツラギとしては複雑なのか、ダイバーたちには聞こえないように小さくため息をつく。

そうしてカツラギはガードフレーム四機から送られてきた情報にきりきりと胃の辺りが痛み出すのを、仮想空間だということにも関わらず明確に感じる。またも、一足遅かったらしい。

涙をこぼして途方に暮れている少女二人とどこか宙を見たまま魂を投げ出したかのような抜け殻の目をしている少女を取り囲むガードフレームとゲームマスターという構図は悪役そのもので、今もひそ

ひそとカツラギの行動を咎める声がロビーを飛び交っていることは彼自身も理解していた。

だがこれは会社と国に関わる問題なのだ。いうなれば、カツラギもまた、一年前から現在進行形で押し付けられている問題の被害者に他ならないのである。

そんな事情はつゆとも知らず、悠然と歩み寄ってくるガンダイバーに恐怖してか、エリイはアイカに抱きつく力を強めてその胸に顔を埋めながらがたと震えだした。

ガードフレームが飛んでくるといのが何か重大な事態で、その銃口とまではいかなくとも無機質なカメラアイが自分たちを見据えている、つまり問題の発生源が自分たちであることはエリイにも理解できたし、だからこそ見覚えがないのに囲まれている、という状況に恐怖しているのだ。

「すまない。君たちが……フォース『リビルドガールズ』で間違いなかったか？」

「はい、GM……申し訳ありません、リーダーとメンバーの二人は今とても話せる状況にないので、何かお聞きしたいことがあって足労いただいたなら私からお話しいたします」

「君も大分参っているように見えるが……すまないね、これも仕事なのだ。さて、いきなり本題に入らせてもらうが……察しているとは理解している。君たちのフォースに先ほどまで加入していたELダイバー、『チハヤ』について聞きたいことがある」

桜宮家の令嬢経由で突きつけられた処分済みの深層ファイルについて思い返して胃を痛めながらも、カツラギは泣いているアイカとエリイではなくアキノを見据えてそう言った。

「チハヤ君は……一年前から『失踪』していたELダイバーだ。バックログを漁って行動を追っていたのだが、ログイン日時が一年前から更新されず、ログインし続けていたというのは妙な話でね……君たちが何か知っているのであれば是非とも協力してもらいたい、任意なので強制はしないがね」

静かに腕を組んで瞑目するカツラギの言葉は事務的で圧力の強い

ものでこそあったが、そこには確かに上から言われただけで、付けた目星そのものが間違っているという自覚と、そんな間違いにいたいけな少女たちを巻き込んでしまったことへの後悔が含まれている。

カツラギ自身も勿論、「リビルドガールズ」がチハヤ失踪事件に何か、重要な形で関わっているとは思っていない。

悪用こそしないものの、GBNはダイバーのログイン履歴や場所、GBN内での行動といった逐一の情報をバックログから常に監視しているため、例えばGBN内の掲示板において、私怨から敵対したダイバーの個人情報晒し上げる、といった書き込みを発見した場合即座にIDからダイバーギアに紐付けられた情報を特定して、該当する書き込みを強制削除した上でアカウント永久停止といった措置を可能にしている。

そういう意味ではバックログにも履歴を残さない二年前のブレイクデカールは凶悪だったが、まさか目の前にいる少女たちは、アキノというダイバーを除いて初心者だ。それに匹敵する技術を生み出せるはずもあるまい。

加えてアキノが元シルバリーであるならそういったチートコードに近いものを忌避していることは明白であり、カツラギにとってこの聞き込みは何か一つでも知っていることがあれば御の字、以上の意味など持ち合わせていなかった。

「失踪……？ いえ、心当たりがありませんね、そもそもELダイバーが失踪することなど可能なのでしょうか？」

ELダイバーは、生まれた時点ではGBN内におけるデータの異物として認識されてしまうため、ビルドデカールを定着させた躯体へとデータを転送した上で再ログインを行わなければ、バグとして認定されて削除されてしまうというのが公式見解だ。

だからこそ、ELダイバーの世界——GBNと現実というある種二つの異世界が共存を余儀なくされていることへの善し悪しは横に置いておくとしても、確実にここで一年以上も活動するのならチイはELダイバーの登録を行う施設、ELバースセンターでの洗礼を受けただろうし、現実に躯体を、アバターと似たモビルドールを持っている

ことは確かだろう。

だが、モバイルドールには活動限界が存在している。

明確にそれを測るのはELダイバーの死に繋がりがねないためにタブー視されているが、モバイルドールを覆っているプラネットコーティングは定期的に充填されねばならず、丸一日充填なしで行動することならともかく一年単位でコーティングを補給せずに活動し続けることはほぼ不可能であるもいつてもいい。

「考えられる可能性は二つある。君たち三人の誰かがプラネットコーティングを常に充填できる環境を持っていてそのまま彼女が……チハヤ君がログインし続けているように偽装していたか、或いは彼女が一度ログインした場所からずっとログインしたまま、つまりログアウトすればELダイバーとして死を迎える状況を是認した上で活動していたか……或いはその両方の複合だ」

一応、かかる電気代を是認するなら、肉体の都合上定期的な食事や休息を必要とする人間とは違い、電子世界をこそその産土としているELダイバーをログインしっぱなしにすることは可能である。

ただ、プラネットコーティングは動かなくても漸減していくため、ログアウトすることを死ぬこととする覚悟がなければ、ELダイバーであれば丸一年ログインし続けた上で潜伏するなどという真似はできない。

そうなると現実的な線として考えられるのはアクセス情報の偽装、欺瞞ないし、自宅にGPD筐体を用意してプラネットコーティングに繋ぎっぱなしにして更にダイバーギアに接続するという電気代がいくら飛んでいくかわかったものではない荒技だ。

GPDの筐体は生産停止になったため、ELダイバーの保護観察者になった人間は必ずプラネットコーティングマシンを購入しなければならぬのだが、GPD筐体と違ってオフラインでのスタンドアロン、つまりダイバーギアとの接続性を意図的に排除しているから後者が不可能となると、犯人は自然とGPD筐体を持っている存在に絞られる。

「いえ……残念ながら私たちも困惑しているのです。アイカさんとエ

リイが初めて間もない初心者であることはそちらも確認されているかと思いますが」

「うむ、公表はしないが彼女たちのログイン履歴から、チハヤ君の失踪に囁んでいる確率は極めて低いと知っている。そうなるとアキノ君、君を疑っているようで申し訳ないのだが……」

「……気を悪くしたなら申し訳ありません。私も……チハヤが、いえ、チイがELダイバーであるという事実を知ったのはつい先ほどでした」

「そうか……こちらこそあらぬ疑いをかけて申し訳ない。彼女の身柄については運営側が全力で捜査した上で確保する。君たちも彼女を見かけたら連絡してくれ」

ガンダイバーことGMはそう言って、アキノに小さく頭を下げるとガードフレームを携えて、そのまま去っていった。

何がなんだかわからない。アイカは混乱で頭がどうにかなってしまいそうだったし、Gの残滓に耐えることをやめていつそこで吐き出してしまったらどれだけ楽になるだろうかと打ち震えていた。

「……勘弁してよ……」

「……アイカ、さん……」

「……勘弁してよお、やめてよお……っ、あたしが何したっていうの？

あたし、チイちゃんのこと怒らせてたの……？　ねえ、エリイちゃん、アキノさん……」

チイが突然フォースを抜けたというだけでも訳が分からないのに、急に彼女が一年間失踪し続けていただの、GMが現れてGPDがどうのこうのだのELダイバーがどうのこうののだのと喚かれたところかわかるはずもない。

あのガンダイバーだって仕事でやっているのだから、好んで自分たちを死体蹴りしに来たのでないことぐらいはわかっている。

だが、吹奏楽部の冬を想起したトラウマと吐き気にアイカの顔は青ざめて、ダイバーギアが深刻な体調不良を検知して彼女を強制ログアウトさせてしまった。

取り残されたエリイとアキノは顔を見合わせると、お互いに無言で

ログアウトを選択して、現実に向けていく。

いつもであれば、きつとそれをニヒルに笑いながら指先でコインを弾き飛ばしている快活な少女の笑顔がそこにはあったはずだった。

だが今はもう、どこにもない。

何かの事情を察した、パトリック・コーラサワの姿を模したダイバーが、どことなくお通夜のような空気の漂うロビーで、さつきまで「リビルドガールズ」がいた場所を一瞥して去っていく。

そしてきつと三十分も経てば、ロビーはいつも通りに活気を取り戻して、回り続けるのだろう。

GBNとは良くも悪くもそういう場所だった。誰かが泣いていたとしても、その横で誰かは笑っていたり怒っていたりする。

アクティブ二千万の中の四人を気にしていたら、このゲームなどやっけてられない。

誰も敢えて語ることはしないが、それこそがダイバーたちの本音であり、この電子の海における暗黙の了解なのであった。

ただし、ごく、一部を除いては。

「うっ……お、えええええっ……」

「……あ、愛香、さん……」

「げっほ、ごほっ！ つえっ、う、おええええ……」

なんとかガンダムベースを出るまでは持つてくれたが、耐えきれずに愛香はそのあたりの電柱に、胃の中身を全てぶちまけてしまった。

Gの残滓といなくなったチイとトラウマと自己嫌悪、その他諸々をミキサーにかけて脳味噌をかき混ぜられているような感覚に、吐くものがなくなっても愛香は胃液をコンクリートに吐き出し続けて、咳き込みながら悶え続ける。

絵理はその背中をそつとさすりながらも、自分もどこか気を抜けば吐いてしまいそうで、涙だつて溢れているのが止まらなくて、パンクしてしまいそうな心地だった。

あの愛香がここまで追い詰められていることそれ自体が絵理に

とってはある種のショックだったし、友達だと思っていたチイから裏切られたかのような言葉をぶつけられたことを思い出せば、胃の辺りから喉を灼くような熱さが込み上げてきて。

「…………、ごめんな、さい、つぶ…………うええええっ…………！」

声と手の感触で愛香の位置を探りながら、吐瀉物がかかってしまわないように配慮こそしたものの、絵理も顔れて地面に胃の中身を吐き出してしまった。

遠くで立ち込める黒雲が、目蓋の裏を横切った閃光に遅れて雷鳴を轟かせる。

「絵理…………絵理い…………っ…………あたし、あ、あたし…………」

「…………あ、愛香さ…………あいか、さん…………」

声を揃えて慟哭する二人の嗚咽を掻き消すかのように土砂降りの雨がコンクリートの地面を叩いて、雷鳴が周囲に轟く。

無事に勝ったはずだった。アキノもチイも含めた四人でカフェに行っても通り楽しく話すつもりだった。

アキノが残ってくれただけ良かったのかもしれない。だが、500万BCなんてチイと過ごした日々を考えれば端金もいいところだ。

「…………勘弁してよおおお…………っ…………！」

こんな端金で良ければくれてやるから、頼むからチイちゃんを返して。

天の向こうでバケツをひっくり返したような雨を降らせる神々に向けて、愛香は血反吐を吐くように慟哭する。

だが、それが届くはずもないことなどわかっていた。

それが届くのであれば、自分の人生なんてとづくにどうにかなっていったことなど、愛香も、絵理も、わかっていたのだ。

汚れた服で抱き合い、涙を流し続ける愛香たちを嘲笑うかのように都市を覆い尽くす黒雲はけたたましい音を立てて雫の礫を頭上から投げつけ続ける。

どうせ時が経てば忘れてしまうと、一時ばかりのこの雨と似たようなものだと、その冷たさに震え続ける愛香と絵理を嘲るように、通り雨がシーサイドベースを駆け抜けていくのだった。

第五十二話「色褪せた空の下で〜電海カテドラル、あたしの小規模なりライズ」

GBN総合スレpart. 862

1：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

ここはガン普拉バトル・ネクサス・オンライン、通称GBNに関する総合雑談スレッドです。

各種ミッションについてはwikiを参照した上で専門スレへ、フオース勧誘、ビルド構築、クリエイトミッションの攻略に関する相談も専用スレでお願いします。

【GBNまとめwiki】<https://www.gbn.jp/wiki/>

【ミッション攻略スレ】<https://www.gbn.jp/boards/mission/>

【ビルド構築スレ】<https://www.gbn.jp/boards/build/>

【フオースメンバー募集スレ】<https://www.gbn.jp/boards/foos/>

※※※

45：以下、名無しのダイバーがお送りいたします
梅雨に入ってきたな

46：以下、名無しのダイバーがお送りいたします
梅雨だ！ 室外塗装派モデラー殺しの魂！

47：以下、名無しのダイバーがお送りいたします
室外トップコート派も死んでるんだよなあ……見ろよこの無残な姿をよお！（白被り）

48：以下、名無しのダイバーがお送りいたします
雨降ってないし出勤前にコート噴いとくかってやったらおもつくぞゲリラ豪雨くんによられてて涙が出ますよ

49：以下、名無しのダイバーがお送りいたします
夏まだ来ねえのかなあ……

50：以下、名無しのダイバーがお送りいたします
来たら来たでクソ暑いんだよなあ

51：以下、名無しのダイバーがお送りいたします
室外塗装派としては来て欲しいけどそもそも外に出たくなくなる
ヤマアラシのジレンマよ

52：以下、名無しのダイバーがお送りいたします
流れぶつた切つて悪いけどリビルドガールズ解散したつてマジ？

53：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

>>52

シルバリーの残党じゃなかったんか解散したの

54：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

この前ロビーにGM来てたしなんかあったのかな

55：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

あいつらがチートに手を出したとかは考えにくいよなあ

56：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

元シルバリーが身内にいる時点でないでしょ

57：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

マジかよ、よく見たらガンスタグラムもGM来た日から更新されて

ねえ……アイエリは俺の生きが이었다のにどうしてくれんだあの

クソGM

58：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

あんまGM責めてやんなよ、何があったか知らねえけど

59：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

何があったかわかんねーのが怖いんだよな、あの後受付からお問い

合わせでなんで来てたのか聞いてもお答えできませんなテンプレ返

信だったし

60：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

チイママ……チイママどこ……？

61：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

GMが動き出したつてことはまたなんか一混乱あんのかもな、有志

連合戦的に考えて

62：以下、名無しのダイバーがお送りいたします

またGMの胃袋が爆発すんのか

※※※

チイを失ったGBNの空は、いつもと変わらないはずなのにどこか色褪せているように見えた。

ここ数日、フェアライズガンダムに乗ってデイメンションを彷徨うアイカは、エリイのリビルドウォートと連携してチイの反応を探していたが梨の礫だ。

その間にもフォース戦の申請がいくつも届いていたりしたのだが、アキノがリアルで定期考査前の小テストにおける試験期間に入ったのと、何よりそんな気分ではないからアイカはそれら全てを蹴り付けていた。

一晩経つても二晩経つても、心の底から信頼していた仲間にあんなことを言われて一方的にフォースを抜けられた心の傷が癒えたわけではない。

バトルロワイアルミッションが開催されている乱戦エリアを示す光の壁から迂回しつつ、眼下に見えるアレックスとバスターライフルを持ったジム・スナイパーIIのコンビの位置どりが悪いなあ、なんてことを現実逃避のように考えながら、アイカは無言で操縦桿を倒す。

それでも完全に冷静になれた訳ではないけれど、とりあえず混線していた思考回路の整理に成功したのは他でもないエリイのおかげだろう。

——もう一度、チイに会って真意を問いたです。
なんてことはない。アキノの時と同じだ。

探す範囲がヴァルガからデイメンション全体に変わっただけで、虱潰しに探していればいつかは見つかるだろう。

そんな自棄を起こしたような考えを抱いている時点でアイカは大分危険だったし、エリイに至ってはその考えに継ぎのような思いでいるのだから、誰かが止めなければならぬのだが、アキノですら冷静ではなくこの場にはいないのなら、どうしようもない。

そしてそれは、チイを探すという今の「リビルドガールズ」に課されたミツシヨンも同じだった。

手がかりも何もなくデイメンシオンを当てもなく彷徨って特定の個人を見つけるという行いは、サハラ砂漠の砂に埋もれた一粒のダイヤモンドを探せと言われてるのに等しい。

その茫漠に耐えきれず心が擦り切れるか、そうでなければ、狂ってしまうか。

「……チイさん、見つかりませんね……」

「うん……」

「……もし、このまま……このまま、チイさんがいなくなっちゃったら、わ、わたし……」

「……大丈夫だよ、エリイちゃん」

人が少ないデイメンシオンなら身を隠すのにも最適だろうと一昨日はデイメンシオン・トワイライトの各エリアを探し回った。

そして今日は逆に人が多い初心者から上級者まで広く親しまれているデイメンシオンを手当たり次第に探している。

こんなに頑張っているならいつか報われる。

アイカは自分を何度も裏切ってきた、自分を何度も見失わせたその言葉に跪くようにエリイへ、そして自身に何度も、大丈夫と、大丈夫だと言いつづけていた。

「えへへ……そう、ですよね……そうですよね、きつと……」

エリイもどこか安心したように呟いたが、その眦には涙の雫が滲んでいる。

アイカの言葉だから信じられるし信じたい。だけでもしそうじやなかったらとてもじゃないけど耐えられない。

そんな、か細い蜘蛛の糸を互いの手足を錠で繋いで登り合うかのような緩慢な自傷をアイカとエリイは二人で続けているのに等しかった。

それはもはや病的だといっていい。だがそれを指摘する人間もいなければ、指摘されたところで聞き入れる余裕は二人にない。

その後もアイカはエリイと共にガンダムベースの閉店時間まで、

デイメンション内の各エリアを探索し続けていたが、目ぼしい成果など得られるはずもなく、ただ消沈した足取りで家に戻る他になかった。

バイトの予定も詰まっているから明日はGBNにログインできない。

いつもなら笑って我慢できたような事態が今は無性に腹立たしく、ログアウトするときアイカはいつそ、喉元を掻き筆ってしまいたいほどの衝動に駆られていた。

それがなんの意味もないこともわかっていても。実行したとしてもしなかったとしても何かをなすわけでもなく、ただ命が思考回路のどちらかを浪費しているということも。

わかっていても、今のアイカには何かを冷静に考えて受け止められる余裕などなければ、よしんばそれがあつたとしても、まだアイカは十六歳の高校一年生なのだ。

大人には確実に近づいていてもその分別が完璧にできているならば。それはできすぎているかスペシャルな少年少女か、あるいは代償として何か欠如しているかだろう。

仮想の海を泳ぐ躯体である「アイカ」の意識が解けて「愛香」へと登るように戻されていく感覚の中で、リアルの方が涙を流しているのだと、意識が交差するその瞬間に愛香は知覚する。

エリイと絵理がいればそれだけで世界が平和じゃなくなつていいと言つてたけれど、仲間を失うというのはこんなにも痛い。

だからこそ、当たり前のように側にいてくれるエリイが、絵理が愛おしかったのだし、だからこそ愛香は、そこにまたいつか来るであろう別れのことを考えてしまつて涙を零す。

愛香さんと、自分を慕つてくれた絵理が突然「さよなら」と告げていなくなつてしまつたら。

想像するだけで恐ろしいそれと同じなのだ。

このフォースが、「リビルドガールズ」が愛香を中心とした縁で寄り合つたのなら、チイがいなくなつたというのはその身を引き裂かれたのにも等しい。

繰り返されてきたよくある話だと大人は笑うのだろう。フォースの繋がりなどドライなものだと傭兵たちは嘯いて、或いは戦い続ける戦士たちは己の苦い過去に勝手に愛香たちを重ね合わせて。

絵理と分かれた家路で、愛香は傘を放り捨てながらただ雨の中に立ち濡れていた。

一緒にするなど、見えない敵に篠突く雨の中で叫び続ける愛香の姿に、通行人たちは見てはいけないものを見たかのような、或いは可哀相な人を見るような哀れみの視線を送って遠巻きに去っていく。

「……なんで……なんで、チイちゃん……」

力なく膝から頽れて、愛香は脳裏にあのニヒルだけれど悪戯っぽくて子どもっぽい笑顔を浮かべながら、戻ってこないその名前を呼ぶ。

本当なら絵理に抱きついて泣き喚きたかった。

いつもそうしてきたように肌と肌を重ね合わせる温もりに溺れて、世界の輪郭を二人に合わせるように狭めて夜に沈んでいきたかった。

でも、自分の前だから笑おうとしてるだけで、本当は絵理の方が遙かに傷ついていることぐらい、愛香にはわかっている。

だから、彼女の傷を広げるような真似をしちゃいけない。痛みを受け止めるべきは自分の方なのだ。

溢していた涙を雨に濡れた袖口で拭って、愛香は誰の帰りも待つていない家の扉を開けた。

「そうだ……絵理が……絵理が悲しんでるなら、あたしは腐ってなんかいらんない……」

泣きたい。喚きたい。辛いと叫ぶだけ叫んで、可哀想だったねと哀れんで、抱きしめてもらいたい。

それでも、前に進むことを選ばなければいけないと、愛香の中で何が、或いは今も鞆の中で主人に寄り添っているフェアライズガンダムがその名に込めた祈りの通りに叫んでいたのかもしれない。

自分のためじゃない誰かのためなら。自分だけで独り相撲をしてきた日々にお別れを告げられるなら。

絶え間なく溢れてくる涙を拭いっつ、リップグロスも落ちてしまった唇をきつく引き結んで、濡れそぼった服を脱ぎながら愛香は決意す

る。

まずは知らなきゃいけない。チイのことを、ELダイバーと呼ばれる存在のことを。

知らないままにがむしゃらになっていたって何のいいこともないと、自分がわかっていたはずだ。

タツパーから取り出して、アクションベースの上に安置したフェアライズガンダムを見つめながら、愛香はひたすらに歯を食いしばって、一糸も纏わない身体に布団を巻きつけて目蓋を閉じる。

「……だから、だから……今だけは、泣いていいよね、フェアライズガンダム……？」

当たり前だが、そこに言葉はない。しかし、愛香には一瞬、部屋の蛍光灯が照らす光を拾ってフェアライズガンダムの双眸がきらりと瞬いたように見えた。

多分錯覚だろうと片付けて眠りの淵に落ちていく愛香を見守るかのように、最終解答者のごとく勇壮なポーズを決めているフェアライズガンダムはその手を、何かを掴みとらんと広げている。

もしも彼に言葉があったのならば、きつと愛香の弱音を肯定して他のだろうか。涙が滲んだかのように、蛍光灯を常夜灯に変える余韻を再び拾い上げて、フェアライズガンダムのツインアイは優しく、慈しく、そしてどこか物悲しげにきらめくのだった。

——主よ、清らに燃える炎よ、我らを哀れみたまえ。

アイカはかの施設の名前を調べるときにそのように願ったり祈ったりするような場所だとばかり思っていたのだが、どうにもそのようなことはなく、割と普通というか事務的な場所なのだ、というのが正直な感想だった。

ガンダムベース本店へのヘルプに志願したせいで、シーサイドベース店よりもてんてこまいな在庫補充や接客難度の高さに四苦八苦こそしたものの、休憩時間を利用して「サラ」にある程度の話を聞き出すことができたのは大きかったし、何よりメンターになってくれた先

輩がELダイバーと関わりを持つているのもまた嬉しい誤算だ。

そんなわけでELダイバーにまつわるあれこれを聞きたい場合はどこにいけばいいのかという愛香の質問に対して彼女たちは声を揃えてELバースセンターの名を口ずさんでいた。

どうやらメンターの人の兄がそこでELダイバーを現世に送り出すために働いているらしいことを、バースの屋上でほとんど無許可で栽培しているトマトを齧りながら彼女が語っていたのは今でも覚えている。

トマトの栽培許可はともかくとして、例外的な自分を除けばELダイバーはそこで生まれてくるらしいと語ったのはサラだった。

生まれたてのELダイバーは、GBNにとっての異物であるため、さながら洗礼を受けるかのごとくビルドデカールなるものに自身のデータを圧縮して登録、現実に戻してからの再ログインだったか、或いはモビルドールの準備ができていない場合はビルドデカールを貼り付けた素体にGBNからデータを転送してログイン状態を維持しつつ待つてもらおうという手順を踏まなければならない。

どちらにせよあの時GMが口にしていた、一年間の失踪が可能であるかはともかく餅は餅屋だ。

ELダイバーを扱う専門家なら、もしかしてELダイバーのIDを掌握していた居場所が分かったりしないかな、などとある程度アイカが楽観的な考えを抱いていることは確かだった。

だが、今そんなELバースセンター、誰が言ったかGBNのカテドラルなどという異名を頂戴している場所にアイカが立っているのは、それ以上にまずELダイバーとはなんなのか、現実とどう折り合いをつけているのか、知らないことを訊きたいという気持ちの方が強いからだ。

ELバースセンターの扉を開いて、アイカは緊張と共に乗り込んだが、返事はない。

仕事に忙しいのか或いは口止めされているのかは知らないが、なんらかの機器の駆動音こそ聞こえるものの人の声はしないのだから、留守だと考えるのが妥当だろうが、ここまで来て収穫なしだったという

のも骨折り損だ。

「あのー、こんにちはー！ 誰かいませんか!? あたし、ナナ……じゃなかった、ナミさんとサラちゃんに紹介されてここに来たんですけど！」

別に紹介状を持っているわけではないが嘘は言っていない。

チイのような真似をしながらアイカは声を張り上げて受付近くをじろじろと眺めていたのだが、流石に大声を出せば気付くのか、スタッフオンリーと書かれた扉から受付にやってくる人影があった。

少しだけ猫背気味に長身を丸めている銀髪にエルフ耳という中々濃い属性のスタッフ——「コーイチ」は、サラはともかく妹からの紹介で来たと名乗るアイカの姿に何かを察したのか、目線を合わさず、どこか事務的に口を開く。

「ああ……えっと、ELバースセンターにようこそ。普段は僕じゃなくてツカ……じゃなくて『アンシユ』が対応するんだけど……君は、確か『リビルドガールズ』のアイカちゃんだったかな」

「はい、ELダイバーについて知りたいならここに行けって言われたので……主にナミさんから」

「あいっ……まあいいや、でも申し訳ないな。『チハヤ』ちゃんの居場所を知りたいとかだったら、僕も一応運営だから……そういうのは答えられないよ」

わかりやすく冷や汗を流しつつ視線を逸らしながら、コーイチは精一杯に冷淡な声を取り繕ってアイカへと伝えるのだが、本音としては彼女に協力してやりたいといったところだった。

とはいえ守秘義務は守秘義務だし、ついさつきまでもやっていたことはチハヤの、チイの搜索であるわけで、訊かれたことに答える権限があつたとしても知らない、進捗がないの一言に尽きるのもまた悲しいところだ。

一応、コーイチの中に目星をつけた存在がないわけではない。だからこそ密告こそしなかったが、カツラギもそれを察していたのだろう。

故にこのカテドラルで生への祝福を行う神父であり按手たる男は

今GMに呼び出されて、残りの業務を全て引き継がされたというのが
コーイチという男の現状であった。

「あはは……やっぱバレちゃってますか」

「うん、ごめんよ……」

「じゃあせめて、ELダイバーがなんなのかについて訊かせてくれま
せんか？ ELダイバーと人間って……本当にたったそれだけの理
由で共存できないんですか？」

アイカは切実に、上目遣いで長身のコーイチを見上げながらどこか
纏るようにコーイチの手を握って問いかけるのだが、頬を赤らめこそ
しても、彼もまたどこかで堅いところがあるのは否めない。

ぶんぶんとかぶりを振りつつ眼鏡のズレを指先で直してから、わざ
とらしい咳払いと共に彼はアイカの問いへと淡々と言葉を返してい
く。

「……申し訳ないけど、その話もできないんだ」

「どうしてですか!？」

「……守秘義務があるんだ、僕も一応運営の側だからね……ELダイ
バーの概要について知りたいなら、Wikiを読んでほしい」

「そんな……」

取り付く島もないとはまさにこのことだ。

纏り付くように手を伸ばすアイカに踵を返して背を向けて、そのま
まスタッフルームへとコーイチが帰還しようとした時だった。

「いいじゃねえかコーイチ、減るもんでもねえ」

「ツカサ……お前GMとの話は」

「ああ？ クビだってお偉いさんが怒り狂ってようが、オープンソー
スにしたって奴らはビルドデカール一枚再現できないんだぜ？ 今
回の事件にしたって知ったこっちゃねえと……それで、アイカだった
な」

突如として転移してきた紫色のハロ——正確には機動戦士ガンダ
ム00に登場する「HARO」なのだがそれは置いておくとして、ダ
イバーネームにアンシユと書かれている男は昔からの知り合いであ
るかのようにコーイチへとぶつきら棒に言い放つ。

そして流れるように、当然の権利のように他二人が立っている中で躊躇なく椅子に腰掛けて、その男は、コーイチからツカサと呼ばれていた「アンシュ」はどこかふんぞり帰ったような態度をしながら絶望に暮れていたアイカの瞳を、無機質な赤い吊り目で覗き込んだ。

「はい、アイカはあたしですけど——」

「お前にあいつが救えんのか？」

「……は……？」

「チイのことでここに来たんだろ、各ディメンションを放浪してるからってそろそろ運営も目えつけはじめてきたから老婆心ながら警告しとくぜ……つと、そうじゃねえな、アイカ。テメエはチイを救えんのかって聞いてんだよ」

そうじゃなければ、何も話すことはねえから帰れ。

ある意味ではコーイチ以上に容赦なく、傍若無人な態度を取るアンシュだったが、問いかけられているのはこの問題の本質的な部分であることは、アイカも直感的に理解できる。

だが、チイを救う以前に探さなければいけないのに、救うとはどういう話でどういう見なのかと、そういう問いを返すことができずにアイカが黙り込んでいたのはひとえに、この問題に対しては無知な部外者であるという証明に他ならなかった。

「あたしは……」

「……俺はGBNに魂を売ったわけじゃねえ」

「は……？」

「GPDを廃れさせといてこっちが本家です、みたいなツラしてるところが気に食わねえ。だがそれはそれとして——生まれてくる命に對して祝福をするのが俺の仕事だ。そっから先は命と向き合う人間の仕事だ。それを背負うってのがどういうことかわからねえなら……ここに来るんじゃねえ、『リビルドガールズ』。これは運営の意見でもなんでもない俺の持論だがな、そんなあやふやな状態であいつを助けますと言ったって空回りするのなんざ目に見えてんだろうが」

んなわけで今日は帰れ、何も話すことはねえ。

言い過ぎだとコーイチから諫められながらも止まることはせず、ア

ンシユは一息にその長広舌をぶちまけると、諫めながらアイカに頭を下げていた彼を連れて己の仕事に戻っていく。

にべもない、という風情であしらわれこそしたが、アンシユの言葉にはいくつものヒントが詰められていた。

アイカはその中でも頻出した、「覚悟」を示す言葉を脳裏に描きながら静かに拳を握りしめる。

どうしたいのかという願いは揃っている。だが、どうすればいいのか、ここからどうしていくのかという行動指針だけが致命的に欠けている。

そんなアンシユの指摘は鋭くアイカに突き刺さり、心臓の辺りに斬り付けられたような、そこから引き裂かれたかのような痛みを与える。

言われるがままにE.L.バースセンターを出たアイカは眦に浮かぶ涙を拭いながら、静かに歯を食いしばって、色褪せた電子の空を睨みつける。

「あたしにできること、あたしにしたいこと……」

それは奇しくも、コメットコアガンダムをフェアライブガンダムに生まれ変わらせる時とよく似た問いかけだった。

ならば再び始まるだけのことだと、フェアライズガンダムに乗って、アイカはとりあえずはロビーへと戻っていく。

今ここには、一つの決意が生まれていた。

再び行う電海の巡礼。それがひとひらの塵が重力に逆らって空に舞うだけの行いなのか、或いは嵐を起す蝶の羽ばたきなのかはわからない。

だが今一度、仲間を取り戻すために、妖精の翼は羽ばたいていく。

アイカが願いと探し物を見つけられるようにと、今度は自分が主人の願いを叶える番だと、その双眸に光を灯したフェアライズガンダムは頷れていた大地を蹴って、天高く舞い上がる。

そして鬱蒼と周囲を覆った木々の影でそんなアイカを見つめている人影が、否、白亜の機体があることに、彼女は最後まで、気づかないのであった。

第五十三話 「幸運にも黒塗りの高級車に拾われてしま うゝ凜音、再び」

朝、目が覚めたときに真つ先に考えるのが愛しい誰かのことであったのなら、きつとそれは幸せなのだろう。

泥のように眠っていた愛香はいつもより圧倒的に早く目覚めるなりシャワーと入浴と着替えを終えて、義務的に登校することばかりを考えていた。

別に学校に行くことそのものを愛香は不幸だと思っていない。

少しぐらい前までなら、心のどこかではそう思いながら笑顔を取り繕って、自分を騙し騙し通っていたのだろうとは、確信しているが。

一晩眠って、やつぱり全てがすつきりした訳ではないのだが、ずつと吐き出したかった弱音をフェアライズガンダムが、コメットコアガンダムが、コアガンダムが聞いてくれたというのも大きいのだろうか。

愛香はそんな、どこか晴れやかとまではいかなくとも胸の奥に詰められた鉛が少し溶けたような気持ちを抱いて、いつも通りタツパーに梱包して緩衝材と共に鞆の中に詰めている愛しいガンプラにそつと笑いかける。

まるで恋人との、絵理との逢瀬だ。

心を通わせていながら、あの架空のソラを眺めているときは二人で同じ方向を向いていてもその意識はGBNへと向けられていて、ニコイチを自認しながらも時折遊離するその感情はどこまでも複雑だ。

などと苦笑している愛香が満喫していた、朝のわずかな平穩を打ち破るものが現れたのはその時だった。

トースターから焼いた食パンを取り出して、もそもそと口に詰め込みながら牛乳で流し込むというズボラ極まる絵面で朝食を淡々と消化して、昨日出しっぱなしのままだった洗濯物に異常がないかと、リビングのカーテンと窓を開いたときに、それは視界の直下に映り込んだ。

「……なにあれ？」

皆が寝静まった夜でもなければ漫画の読みすぎというわけでもないが、とてもすごいものを見てしまったのは確かだった。

洗濯物は飛んで行ったり盗まれたりしていなかったから今日帰ってきたらもう一回洗えばいいと思っただけを取り込もうとしたのが運の尽きだったのか、それとも最初から気まぐれな乱数の神様に屑運を押し付けられたのか。

どっちでも多分最終的には同じなのだろうが、見間違いでなければ愛香の住んでいるマンションの前には確かに、駐車場には収まりきらないほど縦に長いそのリムジン——いわゆる黒塗りの高級車の何かが停泊している。

別に自分がリムジンと縁のあるような人生を送ってきたからあれは自分に関わる何かしらに違いないなどと増上慢極まることを愛香が考えていたわけではない。

だが、目の前に見慣れないものがあつたり当然のハプニングが起こったとき、それに巻き込まれるのは高確率で自分だったという悲しき屑運が引き起こしてきた案件の数々が彼女の脳裏をよぎっただけだ。

二十三区を中心に近いこの街なのだからリムジンそれ自体は珍しいものの、都市伝説というわけではない。

だから、現実的に考えればこのタワーマンションの最上階とかに住んでいる人の知り合いが乗り付けてきたとかそういう話も十分に考えられるしそっちの方が可能性は高いはずだ。

カゴに洗濯物を取り込みながら愛香はどこか祈るような心境でそう繰り返す。

もはや何も見なかったことにしてしまった方が精神的にもいいだろう。

そういう現実逃避じみたアラートを脳味噌が発している時点で大分死亡フラグが立っているのだが、それを踏み倒すかのように見て見ぬふりをしながら愛香は凄まじい速さで洗濯物を取り込んで、窓に鍵をかけてカーテンを閉めた。

地上何十階まで登ってくるような変態はいないだろうし泥棒だつてわざわざ壁面を登って家の主がいない窓を割り、侵入するなんてそんなどこぞの、具体的には格闘漫画に出てくるロシアの死刑囚じみたことなんてやらないだろうとは思っていても実質的に女一人での暮らしなのだから、用心に用心を重ねるに越したことはない。

本走チャートを構築するときには大事なのは事前の準備と入念な調査で、本番はそれにかけて時間こそが時短に直結するのだとはRTA走者が口を揃えていることなのだが、それでも防ぎようのないことはある。

曰く理不尽。曰く屑運。曰くガバ。

要するに回避不可能な不確定要素に対してはアルファベット三文字ちゃんのごとく剛運を引き当ててもしくは遭遇しないことを乱数の神に祈るしかない。

だがしかし、人の祈りが天におわす彼ら彼女らに全て通じて叶えてくれるのなら、この世界は億万長者で溢れているし、名前を書いたらにつつきあいつが死んでいる黒塗りの高級ノートは世界中にばらまかれていた。

要するに愛香が遭遇したのは、そういう類の事故屑運であり、回避不可能な不確定要素、神様が振った百面のサイコロが全て一の目で止まったようなファンブル、つまりはそういうものだった。

胸中によぎった不安と疑念を肯定するように、或いはここから十四へ行けと言われているように、オートロックを中継して愛香の部屋のインターホンが高らかに鳴り響く。

——やべえよやべえよ。

そのとき愛香の脳裏をよぎった無数の言葉や感情たちを一つに括ってまとめるのなら、その一語に尽きる。

朝飯を食べたことが悪かったのだろうか。それとも、雨が降っている時に紙の舟を追いかけるがごとく洗濯物を取り込んでそれを見失ってしまったことが悪かっただろうか。

考えたところで答えなど出るはずもないが、明らかにタイミングから逆算すれば停車していたリムジン絡みの案件であることは間違いない。

ない。

「……どうか押し間違いかでありますように、どうか押し間違いか人違いとかそういうものでありますように……！」

庶民が黒塗りの高級車と関わったことから連想できる最悪の事態になれば、自分はコンクリートを掛け布団にして東京湾の水底を敷布団に、明日の朝日を拝むことのない眠りにつくのだろう。

恐怖でがちがちと歯が鳴り、震える手はインターホンの応答ボタンを押すのは手一杯だったが、無視すれば強行エントリーされかねないのもあって、愛香は意を決して応答ボタンを押した上で薄目を開きながらモニターに映る人物を確認する。

『朝早くに失礼します、こちら朝村愛奈さんのお宅でよろしかったでしょうか？』

シワひとつない燕尾服にぴっちりと身を包んだ長身の男性は恭しく一礼すると、愛香にそう問いかけてくる。

長い茶髪にウェーブをかけて伸ばしているその髪の毛と鋭い目つきは何処かで見ることがあるような気がしたのだが、生憎気が動転しているため愛香はそれを思い出せずに、朝村愛奈という名前について考える。

朝村愛奈。アイナと書いてマナと読むそれは普段であれば新宿に行くための駅近郊に借りているセーフハウスとかビジネスホテルを拠点にしているためにいつもほとんど不在である母親の名前に他ならない。

だが、愛奈はいつも不在であれど家にいる娘については気にかけているタイプの母親であり、連絡だけは欠かしたことがなかった。

それは例えば荷物が届くとかそういった些細なものから元気でやってるかどうかとか食材を仕送りしたとかそういう気遣いまでレパートリーは豊富で、それはありがたいのだが、娘である愛香としては一週間でいいからこっちの家にいてほしいというのが本音なのだ——それは今は置いておこう。

目の前の執事のような男性が知り合いだという話など聞いたこともないし、そういうこの家に誰かが来るといいう用事があったなら愛奈

は必ず愛香の携帯に連絡を入れているし、それが無いということから考えれば件の執事服の人物は愛奈の戸籍か何かを頼りにして、愛香を探していると推察できる。

正直なところあたしは愛奈じゃなくて愛香なので人違いです、で済ませてさっさと遅刻気味になってしまっているのだから学校に向かいたかったしなかったことにして忘れてしまいたかったのだが、無視したらしたで十四へ直行なのは容易に想像がつく。

そのため、愛香は上ずった声音を喉から絞り出し、言葉を震わせながらも執事服からの質問に応答する。

「は、はい……あたしは母の愛奈じゃなくて娘の愛香ですけれど……」
『朝村愛香さんでしたか、ならば丁度良かったです』

「……ち、丁度いい？」

まさか探して沈める手間が省けたとかそういうあれだろうか。

穏やかに微笑む執事服の男性の笑顔がもう完全にそういう類のものにしか見えぬ、愛香はびくりと肩を震わせて硬直する。

『はい、我が主人……御嬢様がお会いしたいと仰っていたのは朝村愛香さん、貴女に他ならないのです。そして……申し遅れました。私は石動。桜宮凛音様の執事であると申し上げれば……いえ、ダイバー「アリア」の従者たる「ミツルギ」と申し上げた方が、ご理解が頂けるでしょうか?』

穏やかな笑顔を浮かべたままに名乗りを済ませると、慣れた動作で石動は恭しく、モニター越しの愛香に一礼してみせる。

どうやら東京湾案件でなかったことは確かだが、桜宮凛音——かつて愛香にビルドボルの原型を譲ってくれた女性と、GBNの中でバエルバエルマクギリスアグニカと常に叫んでいるあの女性が繋がらずに困惑しているというのが正直なところだ。

だが、愛香の脳内でクラッシュを起こしていた記憶は完全に復元し、一つの線を結んでいた。

アリアと凛音の関係についてはよくわからないものの、あの時、カレトヴルツフを譲ってもらった時、影から溶け出てきたかのように突然現れた執事は確かに石動と呼ばれていたし、記憶の中の外見的特

徴とも一致していた。

「あ、あの時の方でしたか……今オートロック開けますか？ それともあたしがそっちに行った方がいいですか？」

『ご理解いただけで幸いです。朝村様、御足労いただく必要はありません。オートロックを開けていただければお迎えに上がりますので、どうか我が主人との御面会を願えないでしょうか』

「……え、えっと……はい、わかりました……」

『ありがとうございます』

愛香がオートロックの解錠を選ぶと、ぷつりとインターホンが切断されてモニターに映る石動の姿も途絶えたのだが、正直ノリで答えってしまったもののどうしようかと愛香は頭を抱えていた。

今日は平日だし普通に学校もあるし期末試験も近いしで、ただでさえ平均点付近を低空飛行しているのが最近はGBN漬けだったのもあってだいぶヤバイと自覚し始めてきた時にこれだ。

かといって、凜音には多大な恩があることは確かで、それを無視して学校に行くことこそ学生の義務ですなんて清く正しく女子高生をやっているわけでもなければ勉強が好きなわけでもないのも確かなわけで。

どうしたものかと愛香が頭を抱えること一分近く。今度は部屋の前のインターホンが押されたことで、ぴんぽーん、と気の抜けた音が誰の帰りを待っているわけでもない部屋に響き渡る。

「えっ嘘早くない？」

エレベーターを使ってももう少しかかるといふのに、一体どんな手品を使ったというのか。

悩んでいる暇など与えないとばかりにやってきた石動を、予備の綺麗な制服にほとんど中身がスカスカな学生靴という、お嬢様に会いに行くにはなんとも反応に困るような、自身の身なりに困惑しつつも、愛香は鍵を開けて玄関の扉を開いた。

「えっと……お待たせしました？」

「いえ、こちらこそ一分もお待ちいただきありがとうございます。早速ですが朝村様、御嬢様とお会いしていただけるといふことでよろし

いででしょうか？」

「それはまあ……はい。凜音さんには恩がありますから」

結局のところはそこだった。

確かに学校に行けば勉強はクソつまらなくとも絵理がいてくれて、昼休みには楽しいお喋りができるからそれを楽しみにしているのだが、貰っただけとはいえ借りを作ったままにしている凜音を放っておいていいのかと訊かれればそれは何か、人として違う気がする。

そんなどこまでも中途半端な自分を嫌悪しつつも、愛香は石動の言葉を首肯して、彼に招かれるがままに部屋のドアを施錠すると。

「……さて、朝村様。不躰ながら二つお願いがございます」

「なんですか？ ドレスコードとかなら着替えてきますけど……」

「それはこちらでご用意いたしますので心配は無用です。ただここから先、お体に少しばかり触れる無礼をお許しいただくことと、絶対に私の身体から手を離さないでいただきたい、ということですよ」

真顔でそんなことを言っただけのける石動の視線の先にあるのは住人が待つ小規模な列を作るエレベーターでもなく、諦めたようにスーツ姿の男性が全力疾走する非常階段でもなく、落下防止のためにそびえるコンクリートの壁と眼下に見下ろす景色だった。

つまりそれが何を意味しているのか、理解できてしまったのが愛香の不幸なのだろう。

そして流されるままにトラブルに巻き込まれてから後悔する屑運体質もまた愛香にとつての不幸なのだろう。

あつはい、と生返事のような調子で返したことが間違いだった。

それを承認と受け取ると石動は失礼します、との言葉と共に愛香をいわゆるお姫様抱っこの姿勢で抱え上げると、そのまま凄まじい速さで助走をつけて、一息に落下防止のための壁を乗り越えて跳躍する。

あの、ここ地上十何階とかそういうあれなんですけど。

愛香がツツコミを入れる間も無く突入したフリーフォールに、人生の終わりを感じ取った脳が走馬灯を再生する。

だが絵理との出会いと「リビルドガールズ」との出会い以外に愛香の脳裏を駆け抜けた思い出の数々は何一つとしていいことがなかつ

た。

さながらカップラーメンの写真が旅の思い出となったよりはマシンな、短くも濃密だった黄金の時間に想いを馳せながら先立つ不幸をお許しくださいと涙ぐんだ愛香だったが、果たして重力に引かれる感覚が途切れても、その五体が痛みを訴える様子はない。

「申し訳ございません、この方が早かったのです」

「……は……？ あの、確かあたし十階以上のところから……？」

「次元霸王流を修めていれば、いえ、執事としては造作もないことです。少し狭苦しいかもしれませんが、ドリンク等はお好きに飲んでいただいて構いません」

もしこれが最上階からであれば、捻挫ぐらいはしていたかもしれないが。

そんな冗談とも本気ともつかないことを口にしながら愛香をどこが狭いんだとばかりに広々としたリムジンの客席へと着座させると、待機していた他の執事四人組を招集して石動は運転席へ、四人組は狙撃に備えて愛香を守るような陣形を組んで客席に乗り込んでいく。

何から何までガチだった。

とりあえず目の前にデカデカと提示されている最高級のメロンやらマンゴーといった水菓子といい狙撃に備えた四人のボディガードといい、庶民の感覚と意識が遠のいていきそうな中で、愛香は手を震わせながらとりあえず目の前に置かれていた水のボトルを握って一息にそれを飲みくちます。

——この水もいくらなんだろう。

訊いたところでげっそりしそうなのは目に見えているため、喉元でその質問を押しとどめながらどうにでもなれとばかりに、愛香は状況に身を任せるのだった。

ちなみに水の値段は大体ボトル一つで15000円だった。

ガンダムSEEDの劇中で、丁度こんなシーンがあったような気がする。

いつから用意していたのか、典型的な大豪邸に招かれた愛香は、そ

の体格にぴったりなドレスをメイド達から着せられて、石動のエスコートを受けた上で凜音の部屋へと案内されていた。

曰く今日は御嬢様の調子が良かったため今日しかなかった、学業についてのフォローは話を通してから大丈夫だ、本当なら絵理も招くつもりだったが彼女は今日義眼の調整があるから呼べなかった、といったことが石動の口からは語られたのだが何もかも理解が追いつかない。

慣れないピンヒールで十センチの背伸びをさせられながら、さながらガンダムベースの販促映像で見た、バルトフェルドに招かれるキラとカガリ——キラに当たる存在がないのだが——のごとく愛香は、凜音が待っているとされる部屋へとどうにか辿り着いた。

普段履いているローファーと違ってとにかくハイヒールというのは歩きづらい。

石動が凜音にコンタクトを取っている間、現実逃避のように、さながら呼吸を楽しむかのような顔をして無になりながら、愛香はそんなことを考えていた。

「こほっ……よろしくてよ、石動……ドアをお開けなさい……けほっ……」

「はっ、御意に！ 朝村様、ここからは朝村様と御嬢様の二人きりです。ですが、何か不足等があればすぐにお申し付けください。私が補充しに参りますので」

「は、はあ……ありがとうございます……」

食べないのも礼儀に反するかと思つて道中はむしやむしやと義務的に、用意されたメロンやらマンゴーやらを咀嚼していた愛香だったが、緊張でその味など覚えてはいるはずもない。

あれだけのアメニティを不足だと感じる世界があるのかと、ブルジョワジーとプロレタリアートの断絶を感じながらも、愛香は石動が恭しく頭を下げたまま見送るレッドカーペットを歩いて、ガンプラー——全て鉄血のオルフェンズシリーズで鉄華団とマクギリス関連のものだ——が最高級ワインなど共に、柵へと並べられたその部屋の主人へ一礼する。

「えつと……お久しぶりです、凜音さん」

「ふふ……けほつ……お久しぶりですわ、愛香さん……ささ、どうぞ座ってくださいまし……堅苦しいのはなしでお話いたしましたしょう。多摩、椎名。お茶を」

『かしこまりました、御嬢様！』

車椅子を動かす凜音にエスコート役を交代して、愛香は用意された席に腰掛けた。

そうしている間にも、多摩と椎名と呼ばれたあの四人組の内二人は瞬く間に二人分のティーポットとカップを用意して、スコーンやらケーキやらが用意されているティーセットの中心にそれを並べて、カップには絶妙に熱くもなく冷たくもないロイヤルミルクティーを注いでいく。

「お、おお……なんかテレビで見た世界……」

「ふふ……お気に召していただいて光栄ですわ。さて、愛香さん……」

愛香が紅茶に手をつけたのを確認してから優雅に自身もそれに口をつける、凜音はあの時見たのと変わらない、今にも消えてしまいうような儂く、薄い、それでも朗らかな笑みを浮かべながら、愛香へと本題を持ちかけてくる。

「お久しぶりですわね……恐らくお会いしたのはあの……けほつ、失礼……こほつ……クリエイトミッション、以来ですか……」

「……えつと、カレットヴルッフの時、じゃなくて……?」

「はい……こほつ、何を隠そう、ダイバー……『アリア』はわたくしなのです、石動から聞いてはいませんでしたか……?」

凜音は咳き込みつつも苦笑し、小首を傾げた。

いや、確かにアリアからの用事だとかそんなことを言われた気はしていたが、今日の前にいる凜音と、あのハイテンションな高笑いをあげながら常にむせ返っているアリアの存在が点と線で繋がってこないのだ。

愛香もGBNでは「アイカ」としてロールプレイをしているが、もしも凜音とアリアがイコールであるのならそれは堂に入っている、を乗り越して別な魂が目覚めたのにも等しい。

「えつと……聞いてはいたんですけど、なんかごめんなさい、繋がんなくて」

「ふふ……驚いたでしょう。こほっ、けほっ……GBNではあのよう
に元気なわたくしが……リアルではこのように背負った身体のハン
ディキャップに苦しめられている……故にこそ、わたくしはあの世界
こそが……けほっ、けほっ、けほっ……!」

「だ、大丈夫ですか、凜音さん!？」

思い切り咳き込み始めた凜音は、心配は無用だとばかりに愛香へと
左手を差し出すと、車椅子の右側、その肘掛けにセットされていた酸
素吸入機を口に当てて、呼吸を整えた。

リアルでは調子が良くてもこれなのだ。今は完全に嬉しくて「ア
リア」の時と同じようなテンションで喋ろうとした反動だとはいえ、
己の抱えているままならなさに凜音は嘆息する。

「……っはー、はー……はあ……失礼、いたしましたわ……ええ、そう
ですわね……まずは本題から、こほっ……お話した方が……いいか
と、けほっ……」

「本題、ですか……?」

「ええ……」

——ELダイバー、「チイ」のことについて。

眦に涙を浮かべながらも、凜音はどこか試すような視線で愛香を見
据えながら、微かな、今にも消え入りそうな声でそう呟くのだった。

第五十四話 「デカール仕掛けの現実（リアル）〜リライジングお嬢様！」

ELダイバー、「チイ」のことについて。

凜音が呟いていたその言葉は、愛香が今最も欲するものであることに違いはない。

コーイチとアンシユは運営から何かしらの口止めでもされていたのか、ELダイバーの発生についても結局語ることをしなかったのだが、愛香が何より知りたいのは「チイが失踪していた」という部分であり、それを紐解くための手がかりがELダイバーの成り立ちにあるのではないかと考えて、あの電脳海洋のカテドラルを訪れていたのだ。

「凜音さん……知ってるんですか？」

「ええ……知ったのは、こほっ……ごく最近ですけど」

「最近？」

「ええ……その前に、こほっ、けほっ……ごめんあそばせ、愛香さん。一つだけ……わたくしから問いかけさせていただいても……けほっ、よろしいでしょうか……？」

咳き込みつつも、車椅子の肘掛けを開いてそこから薬の入った小さなケースを取り出して、凜音は愛香へとそう持ちかけた。

彼女がゆっくりと、震える手で一錠ずつ薬を取り出して、ティーカップの隣に置いてあるグラスに注がれた水でそれらを飲み下すのをゆっくりと待ちながら、愛香は無言でその問いかけを首肯する。

「……ありがとうございます……こほっ、ああ、このような身体でなければもっと、愛香さんと……こほっ、楽しくお話できるのですけれど、ままなりませんわね……それで、本題ですが、愛香さん……」

「はい」

「……貴女は、ELダイバーという生命体に死が訪れると、そうお考えですか？」

ELダイバー。電子の海から生まれた、ガンプラをスキャンすると

きに発生する何百万分の一という感情の余剰データが集積した生命体であると、GBNのまとめwikiにはそう書かれていたし、バイトのヘルプで入ったとき、それとなくサラに訊いてみた返答も、似たような趣旨のものであった。

ならば、と、愛香は思い返す。

彼女たちの本質がデータであるのなら、人間がそうであるような病気だとか老化だとか、そういった外的、内的要因での死は訪れないのだから、ある意味では不老不死を体現しているといってもいいのだろう。

一応、「サラ」の姿はGBN内において発見された当初と比べて明らかに成長したものとなっているため、自己定義の更新という形での老化はありうるのではないか、というのが運営スタッフの見解ではあるのだが、愛香がそれを知るはずなどないために、それは横に置いておく。

だが、彼女たちの本質がデータであるのなら、プログラムにこそ詳しくはないが母親が仕事でそうしているところを覗き見た程度の知識でも分かるように、物理削除コマンドを、平たくいえばゴミ箱行きの論理削除ではなく、そのまま跡形もなく消し去るコマンドを実行したのならばそのデータは消え失せて、白紙化された空白だけが残ることになる。

「……死ぬ、と思います、データを消されれば」

「……正解、ですわ。こほっ……では、愛香さん。ELダイバーが現実にはダイブするとき用いられている技術と仕組みもご存知ですわね……？」

「ええ、一応……なんかよくわかんないですけど、モビルドールとか、プラネットコーティングとか、そういう関係があるから、チイちゃんが一年間失踪し続けるなんてできないはずだって、GMは悩んでるんだと思います」

誤解を恐れずにいえば、ELダイバーはその死を必然的に約束された存在だ。

生まれた時点でGBNは彼女たちのデータを異物とみなして排除

しようとしたり、或いは彼女たちというイレギュラーが処理に干渉する形で様々なバグが発生したりと、そういった経緯で実際に起こったのがかの第二次有志連合戦——ELダイバー「サラ」の因子が各サーバーに拡散してしまったことを原因とした、彼女を消してGBNを助けるか、或いは助けた上でGBNも助けるか、その代わりに成功確率は12パーセントという極めて無謀な賭けであり奇跡だった。

そして基本的に、第二次有志連合戦における「賭け」が成功した後も、生まれたばかりのELダイバーは初めから修正パッチによる死が決定づけられている。

だからこそ、かの「ビルドダイバーズ」がそうしたように、生まれたばかりのELダイバーはあのELバースセンターで保護を受け、「ビルドテカール」というプログラムに自らを圧縮した上で現実世界での躯体となる「モビルドール」というガンプラにその魂を吹き込むという過程を経なければ、彼女たちはGBNに長期間ログインすることはできない。

土塊ではなくプラスチックに命を吹き込むという違いこそあれど、大昔に錬金術なる秘術が流行ったときに作られたゴーレムと、奇しくもそれは良く似ている。

そしてゴーレムは定式化されたEmethからEをとればmethとなり崩壊することが決定づけられているが、まさかそういう自壊コマンドがモビルドールにも組み込まれているのだろうか。

愛香は最悪の可能性を脳内で想定しながら、凜音の問いにそう答えた。

「そこまで知ってらっしゃるなら話は早い……わたくしが今からお話しすることは三つありますわ、こほっ……一つ目は、チイさんの消息と無事について、二つ目は、ELダイバーの死、それも現実世界に、おけるもの……こほっ、こほっ……つ、はー……三つ目は、チイさんが失踪したことと関係するお話ですわ」

薬を飲んでも興奮すると息が詰まるのか、真剣に語ってくれているのにも関わらずその熱量に凜音の身体は追いついていない。

執事たちがそんな彼女を気遣って止めに入ろうとしたが、凜音は左

手でそれを制して、水を静かに飲みながら、詰まった呼吸が戻っていきの静かに待つ。

例えここで死んだとしても、この話だけは愛香に伝えなければならぬ。

彼女の薄く、指先で触れただけで折れてしまいそうなその背中からは対照的に、屈強で芯の通った、生半可なことでは折れはしないとばかりに固めた覚悟が伺える。

だからこそ凛音は病院ではなく自宅に愛香を呼んだのだ。

いつ、どこで誰が聞いているか分かったものではないから。

今から凛音が話そうとしている真実はそういう類の危険なものであったし、だからこそ彼女はリアルもGBNも問わずに、内々的に愛香の行動を監視していたし、登下校時やガンダムベースに通うときにも密かに石動たちを筆頭とした凄腕の護衛をつけていたのだ。

勿論、愛香当人はそんなことなど知る由もないのだが。

「まず……チイさんの消息と無事でしたわね……結論から申し上げますと、GBNにおける消息は不明……申し訳ありませんが、そう断言せざるを得ませんわ、こほっ……ですが、この現実において彼女の消息と無事は確認されていますわ……」

「……えっと、無理しなくていいですけど、どういうことですか？」
「簡単ですわ。チイさんは現実において、特定の人物による保護とプラネットコーティングの供給を受けた上で、こほっ……アクセス情報を欺瞞し、ログインを続けていた……それこそが、その絡繰」

奇しくも愛香の問いに答えた凛音の薄い唇から紡ぎ出されたのは、GMであるカツラギが真っ先にあり得ないとしながらも今はその線で調査を続けている案件が正解であるというものだった。

GPDの筐体は生産中止となったが、流通していないわけではない。

凛音の家に匹敵するほど大きな商家が経営するホビーショップでは未だに数台のGPD筐体が現役で稼働しているし、のめり込んで戻れなくなったマニアは家に二台GPD筐体を確保しているのが常識、といわれるほど中古市場は極めて活発なものだ。

だが、GPDに精通しているものでなければ流通ルートも扱いもわからないため、だからこそGBN運営チームはELダイバーの後見人となった存在にGPD筐体ではなく、その機能を極めて簡略化してスタンドアロン化させた、プラネットコーティング装置の購入を義務付けているのだ。

春の国会で通過した、「特定電子生命体に関する特別法案」にはそのプラネットコーティング装置の購入は特定電子生命体の後見人のみに限定する、という文言が書かれている。

それは不当に誰かが家出したELダイバーを保護することがないようにと、言ってしまうえば「家出」対策の条文として盛り込まれていたのだが、蛇の道は蛇というやつだ。

もしくは獅子身中の虫、心臓に向かう折れた針とでもいうべきなのだろうか。

落ち着いてきた呼吸を整えるように優雅に紅茶に唇をつけながら、凜音は全てを暴いた上で尚ニヒルに笑っていた、チイの「家主」たる男にして「庵主」であり「按手」のことを思い返す。

今思えば、彼女の人格形成には彼の影響も少なからず盛り込まれていたのかもしれない。

そんなことを考えて苦笑する凜音に、愛香は小首を傾げながら問いかける。

「ごめんなさい、わからないんですけど……そのGPD筐体を持ってGBNにログインする情報を偽装するだけのハッカーが、チイちゃんを拐ってるってことなんですか？」

「……誘拐、ではありませんわね……彼は……シバ・ツカサは、逃げたきたチイさんを保護する形で彼女の『家出』に協力していたわけなのですけれど……それについては二つ目のお話をしなければなりませんわ、そして、愛香さん」

「な、なんですか……？」

自身の名を呼ぶ凜音の声が、まるで研ぎ澄まされた刃のような鋭さを帯びるのを愛香は感じて、思わずその威圧感と恐怖に背筋を震わせた。

恐らく、こつちが「令嬢」としての凜音の顔なのであろうし、そういう政治的なシビアな一面を持っているからこそ、シバ・ツカサなる人物がチイの保護と家出に協力している、という運営すらも欺いていた真実にたどり着くことができたのだろう。

改めて、愛香は桜宮凜音という人物の執念に戦慄する。

あの世界では「アリア」としてバエルやマクギリスに向けられていた狂気的なまでの情熱を現実で行使したのなら、恐らく白日の元に曝け出されない事件などそうないのではないかとさえ思えてならない。

「……桜宮は……この家は、その名にかけて貴女をお護りいたします。ですがこの話は他言無用……知られれば、わたくしとて……その手管を全て尽くしても……手遅れになりかねない、お話ですわ……」

「……それって、どういう……」

「……ELダイバーの死でしたわね、実際に死んだELダイバーは、今のところは確認されておりませんわ。ですが……『心が死んだ』ELダイバーがいるのは、事実なのです」

そしてそれはさる大物政治家とその地盤となる商会に関わる一大スキヤンダルであったと、凜音は静かにそう語った。

元々桜宮グループ——凜音の実家が経営するコングロマリットがGBNの大株主として、そしてリアル企業の方の「GHC」と手を結んだのには、その商会の失墜が大きく絡んでいる。

GHCと組んだのは保険のようなものだ。

桜宮グループが大株主となる前にその株式を保有していた「タチバナ商会」はGHCと競合する事業が多く、仲が悪かったのもあって、桜宮グループが主に製薬などを中心とする都合上、競合する部分が少なかったのも彼らと手を組み、株主として連携を取る体制の構築に一役買った要因でもあり、そして凜音がGBNの暗部へと入り込むための布石となった要因でもある。

要するに、敵の敵は味方というやつだ。「タチバナ商会」はGHCにとっても目の敵であったし、桜宮グループにとっても邪魔だったからこそ、身から出た錆であるそのスキヤンダルで彼らがGBNの経営における発言権をなくしたことは桜宮家にとっては幸運だったのだが、

そこには大いなる不幸が伴っていた。

「……一時期……政治家や大物芸能人の間で、ELダイバーを保護することが美德だという風潮が起きましたわ……」

異世界からの友人を保護することこそこの国の美德とする大いなる和の精神であると吹聴して、双子のELダイバーを保護した政治家がいた。

橘大十郎。彼こそが「タチバナ商会」及びそのコングロマリツトの中心となる持株会社の名誉会長にして、大臣のポストを約束されていた大物国会議員だった。

彼の発言はツイスタというSNSを中心に拡散され、ELダイバーが広く受け入れられる土壌を培った大人物、というのが世間というより政治に詳しいとされる人間の见解であったし、今もメディアは彼についてそう報じることが多い。

だが、彼の言葉はただのビジネストークで、実態としては自らの政治基盤を固めるためにGBNという多くの若者が利用するゲームのユーザーを囲い込もうとする意図しかなく、保護された双子のELダイバーに対しては「異世界の友人」どころか「喋るペットか置物」程度の扱いしかしていなかったことは知られていない。

「……橘大十郎は、ELダイバー……『イリハ』に対して日常的な虐待を行なっていたとされています、そして『イリハ』は『チハヤ』の双子の姉……つまり、同じ時間に誕生したELダイバー、こう言えば、繋がってくるのではないのでしょうか……？」

「……」
愛香は明かされた真実と、その胸糞悪さに耐えかねて、思わず机に拳を叩きつけていた。

橘大十郎は、「チハヤ」を最初は虐待の対象としていたのだが、それを「イリハ」が庇つたために何かと「チハヤ」を引き合いに出してはビルドデカールを貼り付けたモビルドールが躯体であり、例え素体が破損してもデカールを張り替えれば元に戻ることをいいことに、手足関節の切断や両眼パーツの破壊など、そうした行為で日頃のストレスを発散していたというのが、GBN運営法務部の調査によってわかつ

ている。

凧音によつて付け加えられた事実には愛香は憤慨し、橘はなぜ逮捕されなかったのか、事件が表沙汰にならなかつたのかと激昂して凧音へと詰め寄つたが、実のところ刑法、民法として彼を立件するのは困難である、というのがGBN法務部や警察の見解であつたのだ。

と、いうのも、現行法においてもELダイバーの人権は極めて曖昧なところに着地点を見出せないままぶら下がっているからだ。

ELダイバーは確かに新たな生命体で、「サラ」のように定職について収入を得る個体も増えてきているが、彼らの扱いについてはまさしく法律上においてはペットどころか「モノ」であるといわざるをえずなく、橘大十郎の行為も、ただ自分の所有していたものを壊して遊んでいただけ、ということにしかないのだ。

確かにELダイバーを生み出したのはGBNだ。だが、一度後見人に引き取られてしまえばその「所有権」は後見人に移行する。

だからこそ、「ELダイバー」の積極的保護を謳い、特定電子生命体に関する特別法案を提案した男が日常的にそのELダイバーを虐待していた」というのは橘大十郎をポスト大臣の座から引き摺り下ろし、GBNの経営において発言権をなくす程度には深刻なものであつたのだが、逆にいえば「表沙汰にせず揉み消せる」程度のものであつたのだ。

「……それで、そのイリハさんって子は……」

「……彼女は、人々の『この世界の空が好き』という気持ちから生まれたELダイバーで、チイさんとは異なつて極めて大人しく、口数の少ない性格だつたようです」

だからこそ、チハヤを姉として庇うことしかできないという責任感と、虐待されているときには泣き叫んでいたという記録が残されていた以上、それを理由にして橘大十郎に狙われたのでしよう。

凧音は橘大十郎に対する不快感も露わに眉根に深いしわを刻みながら、愛香へとそう告げた。

それは奇しくも絵理が狙われた理由と似たようなものだつた。大人しく、真面目で、いい子ほど悪い奴らからの標的になる。

「……ふざけんなッ!!!」

だからこそ愛香は、その理不尽に憤激し、思わず立ち上がって椅子を蹴り飛ばしてしまっていたのだ。

「朝村様、困ります」

「よいのです石動……わたくしもこの身体が自由に動いたなら……彼女と同じぐらい、思いのままに暴れたいと……そう思った、けほつ……事件でしたわ……」

チイの失踪が、このELダイバー虐待事件と絡んでいることは愛香にも想像がついた。

どこでイリハに対する虐待が発覚したのかはわからないが、恐らくそれを掴んだGBN運営が橘大十郎に接触を図ったとき、人間を信じられなくなっていたチイは自分と姉を大十郎へと引き渡した運営ではなく、シバ・ツカサの元に身を寄せることを選んだのだろう。

「……だから……だからチイちゃんは、あの姿を見せたくなかったの……?」

「……あの姿、というのがモビルドールのことでしたら、恐らくそうですわね……ですが、愛香さん」

「……なんですか?」

「もしも……それほどまでに自らの事情を押し隠すほど……深刻な秘密を抱えていたチイさんが、それでもモビルドールの姿を、こほつ……曝け出したというのなら……希望は、あるのではないですか?」
「っ……………」

穏やかに微笑む凜音と、チイが最後に残した言葉とそのどこか物悲しげな背中がオーバーラップする。

——潮時ってことだよ。

チイは確かに、潮時だとは言ったし、エリイに対してフォースマンバーでこそあれ、フレンドではないとも言っていたが、誰にも「嫌いだ」とか「あいつと同じだ」というような憎しみの言葉はぶつけていない。

だったら、真意を聞く余地ぐらいいは残されているんじゃないだろうか。

光を失い、熱の冷めた心火の炉心に、その核に何かが焚べられていくのを拍動する心臓に感じながら、合点が入ったかのように愛香は再び立ち上がった。

そうだ、希望はまだあるんだ。絶望にひしがれていた心をつなぎとめたフェアライズガンダムの瞳と、慈しみに満ちた凜音の瞳、そして今もまた元の日々に戻ることを願う絵理の祈りと、悲しげなチイの背中。

一つ一つが星座を描くように線を結んで繋がって、愛香の心に灯る希望は明かりを越して一つの炎となるまでに噴き上がる。

「ありがとうございます、凜音さん……」

「……いえ、お礼を言わせていただくのは、こちらの方……チイさんのGBNにおける消息についても、全力でわたくしたちは探し続けますわ……」

「どうして、凜音さんがお礼を……」

「だって……ふふ、本当はこつちを先に言いたかったのですが……わたくしにとつて、GBNこそが、こほっ……真実の世界だと、そう思っていましたわ、ですが……わたくしは、この世界で……現実で、貴女に会えた……その奇跡が、とても嬉しいのです」

立ち上がった愛香に向けて車椅子を進めると、凜音は殆ど骨しかないように細い指を、最大限の感謝と共に愛香に差し出す。

凜音は元々、GBNの事情に深入りするつもりなど全くなかった。

実家の事業に関しては腹心の部下に任せて自分は座敷牢で飼いやりにされるだけだとわかっていたからこそ、凜音は「アリア」としてGBNにのめり込んでいたのだし、執事であり教育係、そして事実上の監視役である石動もそれに付き合っていたのだ。

だが、もしも凜音を変えてくれるきっかけがあったとしたのなら、それはあの時ガンダムベースでカレトヴルツフを譲り渡した愛香が、クリエイトミッションとはいえ自身を下すほどに成長し、そして彼女の仲間たちと共に日々アグニカ・カイエルの魂に至らんと研鑽している。

愛香が、そしてアイカが自身という理不尽にして強大な壁を打ち

破ったのであれば、自身もその心意気に応えなければ桜宮の家に生まれた者としては申し訳が立たないだろう。

だからこそ、愛香の持つアグニカ・カイエルの魂に、マクギリス・フリドの志に打たれた凜音は、現実から「大好き」なGBNに関わるべく、父親を殆ど喧嘩のようなやり取りで説得して、GBNの経営方針や株の所有権については自身に譲渡させるよう頼み込んだのだ。まだ病室を完全に出ることはできないし、薬も手放せない。

それでも——ただ嘆いていた頃より、無謀な挑戦ばかりを繰り返す緩慢な自傷を続けていた頃より凜音の身体は遥かに持ち直して、医者すら目を疑うほど快方に向かっている。

つまり、凜音もまた、愛香との縁によって助けられた存在に他ならないのだ。

「愛香さん……願わくば、わたくしは……貴女を、友と呼んでもよろしいでしょうか……？」

「凜音さん……ううん、凜音ちゃん、あたしも……ありがとう……」

「ああ……石動……わたくしは、こんなにも……生きていて良かったと、そう思う日が来るとは……己の人生に、牙を突き立てて革命を起こせるとは……」

「……御嬢様……」

『桜宮凜音様！ 我々の魂……この命かけて忠を尽くすべきお方！』

そして朝村愛香様！ 凜音様をお救いいただいた御友人！』

——我ら一同、心の底より感謝いたします。

一番最初に涙を零していたのが誰なのかはわからない。だが、執事四人組である阿久理、二階堂、多摩、椎名が声を揃えてそう宣言するなり男泣きするのにつられて、石動もまた敬愛する凜音の成長に、その眦に何か熱いものが込み上げてくるのを感じずにはいられなかった。

この世界とGBNは、現実と仮想という長い国境線で断絶されているのかもしれない。

だが、それでもこの身体があの世界とこの世界を行き来できるのであれば、現実の空も架空のソラも繋がっている。

弱さを抱えながらも凜音は高く飛び立つことを決めてくれた。

ならば自分がもう一度翔ぶ番だ。

凜音を折れてしまわないように、だけど力強く抱きしめながら、愛香は丁重に預かってもらったフェアライズガンダムに想いを馳せる。

そうだ、ここからもう一度始まらせる。折れてしまつて終わりを、あの日々の繰り返しだから。

笑われないために、また心臓の棺で眠る「愛香」が血の涙を流さな
いために。

弱気になつたつて何度でも立ち上がると、愛香は強く、その決意を
固めるのだった。

第五十五話「モラトリウムとナラティブとくあたしたちの小さな再生」

凜音から聞いたことを総合して考えるなら、シバ・ツカサという人物は恐らくあの「アンシユ」と同一人物であると考えていいだろう。

いくらするか想像もしたくないヒールの靴とドレスと各種コスメ類をお土産に、帰りのリムジンに揺られている中で愛香は思考を整理する。

要するにELダイバー「イリハ」と「チハヤ」は橘大十郎なる政治家に引き取られて、何らかの原因でチハヤ——チイが虐待されるようになったところをイリハが庇って日常的に彼女が虐待されたことで、どこかから足がついて橘大十郎は失脚した。

そんな腐れ政治家の話はどうでもいいとしても、今もGBNにログインすらせず、壊れた心を修復しようとサラや他のELダイバーたちが躯体を新しくした「イリハ」と話し続けているらしいが、一年が経って尚、俯いて一言も話せない程度にはひどいものだということだ。

そして、そんな姉を、姉を虐待する人間を見てきたからこそ、チイはツカサに、アンシユに頼み込んでログイン情報を偽装しつつ定期的なプラネットコーティングの供給を受けながら潜伏していた、ということになるのだが、もしアンシユイコールツカサであったなら、運営側の人間がそんなことをする理由がない。

「もしかして、あのアンシユって人……運営の中でもアウトローなの……？」

アンシユがツカサであるというのは凜音の口ぶりから察することはできたし、ならばそれが真実であると仮定した上で導き出される結論はそれだ。

アンシユもまた、運営に対していい感情を持っているわけではない、そして同時にELダイバーやGPDに精通している。

ならば、チイが運営とアウトローの彼、どちらに己の命運を託すかと考えれば後者だろう。

虐待を受けたイリハはGBN運営に引き取られ、スタッフの中でも公認G—Tuberとされている人物が後見人を務めているから今のところ更なる虐待の心配はない、と凜音は付け加えていたから、こちらについては今は考えを優先させるべきではない。

ならば、素直に運営を信頼した方が無駄に考えなくて済む分クレバーだ。

愛香はいくつか考えていることを没にするとその数だけ指を折りながら、自身に残された手札、選択肢の数を計測していく。

とりあえずチイが家出、失踪をした理由はわかった、とまではいかないが決定的な手がかりを得られたことは確かだ。

そうなれば残された課題は、チイを見つけること、そして話聞くこと、何より。

「……手続き上、多分チイちゃんの後見人つてあの政治家になってるんだよね」

恐らく宙ぶらりんのまま逃げ出したのだろうが、橘大十郎なる人物がまたチイを手元に取り戻そうと圧力をかけてくる可能性は否定できないし、運営としては一応、公的な手続きの一環としてチイの身柄を確保したうえで、一年前に空中分解した後見人移譲の話し合いをしたい、というのが落とし所になるのだろう。

凜音の口ぶりから考えれば、橘大十郎なる腐れ政治家はどうも裏社会での行動が早いらしく、それについては、愛香は全く対抗策を持たないただの女子高生であるために、事実上自身のパトロンとなってくれた彼女の言葉を信じて夜道でざっくり行かれないことを祈るほかにない。

とはいえ、橘大十郎が道具としてイリハとチイを利用してその価値を自ら毀損したのなら取り返す理由も薄いのだが——最悪の事態は想定しておくに越したことはない。

ともかく、やるべきことと課題は別物だ。

マストでやらなければいけないのはチイの搜索と場合によっては捕獲、その上で話を聞くことだ。

後見人のあれこれについては正直なところ何もいい考えが浮かん

でこないのだが餅は餅屋、一人で考えて行き詰まるよりは、絵理やアキノと情報を交換した方がいい考えは出てきやすくなる。

三人寄ればなんとやらだ。リアルでも連絡用に、と教えてくれたアキノ——涼月秋乃という名前のアカウントと絵理のアカウントに自身のツイスタから、今日凜音に聞いてきたことの大枠を記したダイレクトメッセージを送って、愛香はスマートフォンを電源を切った。

このやり取りも監視されているならもはやお手上げだが、専門的なやり取りの秘匿性に関してはGBNの系列企業が運営して提携している内部ツールであるツブヤキよりも、外国に本社を置く外部ツールであるツイスタの方がやりやすい。

家まで送り出された背中を恭しい礼で見送られる感覚にはどこか慣れなくて冷や汗をかいてしまうが、それ以上に護衛兼荷物運びとして石動が持っている簡易クローゼットに詰められたドレスやピンヒールの値段を考えればそっちの方が精神衛生に良くない気がした。そう考えると凜音ちゃん呼びは相手が気に入ってくれたからいいとはいえ、攻めすぎたのかもしれないと愛香は冷や汗を流しながら、そんな益体もないことを考える。

と、いうのも、チイに合うといっても、搜索に関する手がかりは未だに五里霧中で八方塞がりであることには変わらない。

石動と、彼についてきた阿久理、二階堂という二人の執事が、愛香のその辺に置いといてくださいという指示に従って「お土産」を玄関先に置くのを見送りながら、愛香は彼に一礼する。

「なんだか色々ありますがごさいます、石動さん」

「いえ……僭越ながら感謝をさせていたきたいのはこちらの方です、朝村様。御嬢様の喜びは私の喜び……あのお方が対等な『友』を得られたのは初めてのことなのです。故に私は何があっても貴女とその家族を全力で守り通して見せましょう」

恭しく庶民の自分なんかに頭を下げてくれる燕尾服姿のイケメンというのはある種夢に見るようなシチュエーションなのだろうが、言っていることの前半はともかく後半が物騒すぎて、愛香はあはは、と曖昧な笑いを返すことしかできなかつた。

いや、そんななんかあってくれたら困るんですが。

とはいえ凜音があれほど警戒しているのだし、愛香も性格上「最悪」を常に想定して行動するため、どこかではそれを考えておかねばならないのではある。

(まあ、なんかあつたら石動さんたちが守ってくれるって信じよう……凜音ちゃんの言葉だし)

次元霸王流がどんなものかはワールドとタイガーウルフの野良試合で見たのだが、あの動きをガンプラじゃなく生身でやれる人間に立ち向かえる相手なんてそうそういるはずもない。

むしろいてたまるかというものだ。

だからその辺りも餅は餅屋として、凜音に全てを任せよう。

お土産の搬入を終えて戻っていく執事たちと石動を見送ると、愛香は机の上に出しっぱなしにしていたクリアプラ板を一瞥する。

「絵理の許可次第だけど……あれならワンチャンあるかも」

そう、問題はチイに会うだけじゃない。

会った後に話す時間を作ることもまた問題なのだ。手を洗って、鉢巻きを締めるかのように自らの頬をピシヤリと叩くと、いつも通りに愛香はチャンプとクオンの制作配信を流しながら、型紙に「切り札」の設計図を書き始める。

まずは、あたしにできることから。

その精神で、クリアパーツの切り出しという慣れない経験に愛香は挑んでいくのだった。

「……ってことがあってさ」

「……な、なんていうか、その……」

「うん、色々突っ込みたくなるのはわかる」

翌日の昼休み、いつものように絵理の机に自分の椅子を持っていった愛香はエナジードリンクでもそもそとコッペパンを流し込みながら、昨日のことを絵理へと伝えていた。

一応肝要な部分はツイスタを通じたダイレクトメッセージを通じて発信したものの、彼女が視力をほとんど失っている都合上、読み上

げソフト等に頼らなければならぬだろうし、そのフォローというの
もあれば何より、こういう話は直接しないといけない気がしたのだ。

無論、橘大十郎という名前とタチバナ商会及び凜音の家の都合など
は伏せているが、それでも不幸にも何処かから何かがすつ飛んでく
る、なんてこともあり得る世界なのが怖い、それをなんとかできそ
うな石動たち次元霸王流の体得者も怖い。

「あたしも次元霸王流習つとけばよかったのかなあ、道場どこにある
か知らないけど……」

「……や、やめた方がいいと、思います……なんだか、ギアナ高地とか
に……連れて、行かれそうなので……」

絵理が脳内にイメージしていたのは、GBN内の有料コンテンツで
ある映像アーカイブで見えていた「機動武闘伝Gガンダム」の流派東方
不敗だったが、概ねそれと違っていないのが事実は小説よりも奇なり
といったところだろう。

「まあねー、あたし武闘派じゃないし……つと話逸れちゃったね、とり
あえずなんだけど……チイちゃんに關しては、出て行きたくて出てつ
たんじやない、っていうのは間違いないと思う」

人間に対してのトラウマが原因であるなら、愛香たちはもつと彼女
から恨みをぶつけられていたとしてもなんら不思議ではない。

状況証拠からの判断だが、そう考えるのが賢明だろうと伝えるな
り、絵理は安堵に涙を浮かべて、ほつと胸を撫で下ろした。

「……よかった、です……わたし、チイさんに……嫌われちゃったのか
な、つて……」

「……正直あたしもそれが心配だったけど、チイちゃんの言葉を信じ
るなら……『誠意は言葉じゃなくて金額』だからね」

そのポリシーが嘘でないのは彼女の銭ゲバっぷりを見ればわかる。
誠意は言葉じゃなくて金額。なんだか引つかかる人は引つかかり
そんな格言ではあるが、言い換えるのであれば「金を稼げるなら個人
の人格や発言には執着しない」というのがチイのポリシーということ
になる以上、絵理の、エリイの性格や愛香の言動が訣別の引き金に
なった可能性は低いだろう。

橘大十郎がどのような人物だったかは憶測するしかないのだが、イリハとチイをモノとして扱っていたなら、恐らくチイに金銭の類は渡していないはずだし、引き渡しの日以外で自宅から出られていたのかどうかも怪しい。

そうなれば、大十郎の「誠意」とやらが上つ面だけを取り繕った言葉だけのものではなかったということとはなんとなく想像できる。

まあ、確かめようもないので所詮は邪推なのだが——片目を瞑って愛香はチイがそうしていたように肩を竦めてみせた。

「……それで……チイちゃんと、どうお話しするかなんですけど……」
「うん、居場所については凜音ちゃん……アリアちゃんが色々調べてくれてるけど、あたしたちもアキノさん含めて話し合わないといけないと思うから今はパス、だから、捕まえる方法とその後のことを考えたいんだけど……絵理、GBNで『機動戦士ガンダムNT』見たことがある?」

機動戦士ガンダムNT。それは稼働試験中に暴走を起こして行方不明となったユニコーンガンダム3号機「フェネクス」を捕獲するために連邦と袖付きの残党があれやこれやと戦いを繰り広げる話なのだが、奇しくもその状況は今の愛香たちと重なり合うところがあった。

「は、はい……一応……まさか、愛香さん……」

「うん、そのまさか。あたしは……絵理のリビルドウォートにサイコ・キャプチャーを作ってあげたいの、だから……その許可が欲しかった」

そして、連邦がフェネクスを捕まえる「不死鳥狩り」作戦で用いていた装備が、フィン・ファンネルのバリアで自機ではなく他機を覆うようなサイコ・キャプチャーという装備なのだが、これこそが愛香の描いていた必勝への切り札への一つだったのだ。

チイがどんな事情で動いているのかは本人に聞くしかないが、業を煮やしたGBNの運営がいつ懸賞金をかけてでも彼女の身柄を確保しようとしてくるかわからない以上、それを出し抜いて先に接触しなければきつと話をする機会なんて訪れないし、そういう状況を想定し

てチイが逃げ回っているなら、捕まえるための装備が必要だ。

だからこそその、サイコ・キャプチャー。

デイベニダドのフェザー・ファンネルを一枚一枚、高速射出整形機ではなく手作業で切り出し、削り出して貼り合わせていた「クオン」の放送を思い返ししながら、それならガンダムベース店頭サンプルのように切り出したクリアプラ板にフィン・ファンネルとの接続ダボを設けて貼り合わせるだけの作業など苦ではない。

「……わかり、ました……こういう時、お力になれなくて……」

「ううん、あたしね、絵理の力を借りたいんだ」

「……えっ……?」

「……あたし、一人じゃきつと何にもできない。チイちゃんのためだつて頑張ってるけど……それだつていつ独り相撲になるかわからない。だから……近くにいてくれるだけでいいの。絵理の声を聞かせて。疲れたら、絵理に触れさせて。勝手かもしれないけど……お願い、絵理」

実際今もコツペパンのエナドリ漬けなる珍妙な食べ物主食にして眠気を押し込めているあたり、愛香が無茶な橋を渡り始めているというのは他でもない、自分自身がよくわかっていたのだ。

最前線で戦うだけが兵士ではない。

それこそ、GBNにおいてチイがそうしていたように、後方支援や、リヒトたちに勝利したときのように激励が力になることがあるのなら、絵理に、いちばん大好きな彼女に「頑張つて」と言われれば愛香は二徹だろうが三徹だろうがやり通すだろうし、「休んで」と言われたら躊躇なく休むだろう。

だから、絵理がこの現実で何の力も持ってないなんてことはありえない。

むしろ、絵理だからこそ、絵理がいてくれるからこそ、愛香はその力を全て発揮できるのだ。

絵理の両手を優しく包み込みながら、愛香は必死に頭を下げる。

「……なんだか、不思議ですね……」

「絵理?」

帰ってきた答えには涙が滲んでいて、眦から一つ零れ落ちたその雫が、机の上で跳ねて消える。

それはどこか、絵理の碧眼という空から零れ落ちてきた、小さな星の欠片のようだと、愛香はどことなく場違いなのはわかっている。そんな神聖さを感じずにはいられなかった。

「……嬉しいんです、ずっと……わたしから、触っていいかどうかって、訊いてきた、ので……愛香さんが、わたしに……触れたいって、思っていてくれたことが……すごく……」

「……ああ、そっか……」

絵理はごしごしと袖口で涙を拭いながら笑おうとしたが、すぐに涙は溢れ出て、きつと彼女の心にまだその爪痕を刻んでいる古傷から、色のない、透き通った血液を溢し続けているのだろう。

分かり合えたつもりだったけれど、それでも分かり合えていないことがある。チイのことだってそうだし、アキノのことだってそうだし、なんなら、絵理だってそれは例外じゃなかったのだろう。

己の見落しと、その優しさに甘えていた部分を恥じて、愛香はごめんね、と、心から絵理に頭を下げた。

「……あ、あの……そ、そうじゃなくて……わたし……」

「ううん、今まであたしが絵理の好意に甘えて……自分からとか、そういうこと気にしてなかったから……だからやっぱり、絵理には力があるんだよ」

愛香の目線で見えるものと、絵理の感じる世界に映るものは当たり前だが違っている。

だからこそ、一人では生きてなどいけないように、誰もが自分の脆さを抱えてこの蒼穹の下で彷徨い続けている。

そうしてどこかで惹かれあっても、わからないことがあって、次第にわかり合えなくなっていくことが珍しくないなら、今それに気付けたのは幸運だった。

「……愛香さん……ありがとうございます、わたしの力で良ければ……足りないかも、しれないですけど……受け取ってください……サイコ・キャプチャー……お願いします……っ！」

「よし、任されたー！」

そんな風に快活なやり取りをしていても、クラスメイトが愛香と絵理を特別に見たり、或いは四月ごろのようになどどこか侮蔑や好奇の入り混じった目で見てくることはもうない。

慣れた、というのもあるのだろう。

だが、それはきつと、絵理が頑張つてこの席に座り続けてきたからで、そして、愛香が表向きは絵理の親友として、学校を出れば恋人としてお互いにできた心のひび割れを閉じあっていたからこそ、二人の会話は教室における「当たり前」になったのだ。

「二人ともすつかり仲良くなったよね、にやはは」

「恵美」

「アタシも実はGBN始めたんだよね、まあ仕事絡みだけどさ……だから愛香と絵理にアタシも頼ることあるかも」

「あはは……素人で良ければ相談になるけど」

「……わ、わたし……っ、わたしも、あ、その……わたしなんかでも、何か相談に乗れること、あるなら……恵美さんの、お役に立てるなら……」

「ありがと……愛香、絵理！ 持つべきものは友達だよね！」

隣の県から自転車を通ってきている茶髪の少女は向日葵のような笑顔を浮かべて二人の肩をそつと抱き寄せた。

愛香と絵理が変わったのかといわれれば、確かに変わった部分こそあつても、根底にあるもの全てがひっくり返ったわけではない。

それでも回る世界のどこかしらに突き立てた旗を見て、誰かがそこに集ってくれるように、些細な変化を勝ち取つて、そんな風に馴染むはずのないと思われる者たちが交わり合うことは日常となった。

絵理は自分なんかが、と卑下する癖は抜けていないが、それは間違はなく彼女の力が勝ち取ったものだし、愛香もまた絵理が頑張つたからというけれど、その手助けをしていたのだから愛香の力だ。

強くなれと、大人になれと人は言う。

それでも、このモラトリアムのカサブタの中でなくとも——弱いままでもきつと、生きていくことは悪いことなんかじゃないのだと、愛

香は朗らかに笑うきつと本当の絵理に、絵理はいつも強いけれどどこかで脆さを抱えている、そんな自分と似た弱さまで含めて大好きな愛香に、そして恵美たちは仲睦まじくする二人を見て、そんなことを想うのだ。

例えそれが精一杯の強がりであったとしても、わがままであったとしても、世界がそうであってほしいと、少女たちは願っているのだった。

「それで、アイカさんはさっそくエナドリハイになっているのですか……」

「……ご、ごめんなさい……わたしもずっと一緒に起きてて、頑張つて、つて……」

「うふふあははは、我ながらよくやったと思うんだけどどうかな、アキノさん☆」

「……早死だけはしないでくださいよ？」

絵理の愛情が百万パワー、そこにエナドリ漬けが加わって二百万パワー、そしてGBNのクリアパーツ切り出し耐久配信を頑張っているトップランカーに背中を押された捻りを加えて四倍の四百万パワーだとばかりにアイカは突貫作業ながらも丁寧にサイコ・キャプチャーのエフェクトを僅か二日で作り上げるといふ狂気を貫徹し、チイが残してくれた500万と共有財産で購入したフォースネスの中をくるくると回っていた。

あの破城槌はとにかく「効く」、多分集中力が必要なプロゲーマーとか、下手したらあのチャンプやクオンも愛用しているのではないかとすら錯覚する。

エナドリといえば独特のえぐみがあるものだがそのえぐみすら「味」に変えてしまったあれは芸術品だと、完全に「ハイ」つてやつになったアイカは熱弁していた。

だが、とうとう暴徒の暗黒面に呑まれたのかと、アキノにはどこか可哀想な人を見るような目で彼女を見ることしかできなかった。今のアイカは完全に様子がおかしい人なので。

それはともかくとして、サイコ・キャプチャーというのは悪くないと、アキノは思っていた。

チイの言葉を信じるのであれば、おそらく彼女は自分たちにも迷惑がかかることを嫌って憎まれ役を演じたのだろう。

それを差し引いてもどこか素直じゃないチイが素直に積極的に応じてくれるとは限らないのだから、こつちから捕まえてしまえという結論に至るのは極めて自然なことだ。

「アイカさん」

「なんですか、アキノさんっ☆」

「……ちゃんと聞いてくれますよね？」

「はい、今のあたしなら一言一句聞き逃しませんよっ☆」

「……いや、それが心配なのですが……まあいいです。アイカさん、私は……貴女に感謝しているのです」

エナドリ漬けになっているのが惜しいのだが、それはいつか言わなければいけないことだったし、そして今でなければ叶わないことだった。

とうとう運営がチイを公開指名手配して、懸賞金をかけ始めるという噂……というよりはほぼ確定した情報がアリアから流されてきた以上、自分たちに残された猶予はそう多いものではない。

「感謝、ですか？ それならあたしだって、エリイちゃんだって、アキノさんには感謝してますよ」

「……そう言っていただけるのは、嬉しいものですね。ですが私も……それに負けないぐらいお二方に、そしてチイにも感謝しているのです。きつと『リビルドガールズ』と出会わなければ、私は変わることもなどできなかつた……なれば、チイもそれは同じだと思うのです」

あの日、グラウカツツエのライブに招かれたときにチイが零していた本音を拾い上げると、この場にはいないチイの代わりも兼ねてアキノは深々とアイカたちに頭を下げた。

シルバリーの崩壊と黄金の日々という蹉跎から立ち上がることでできたのは、「リビルドガールズ」があつたからだ。

皆がいたから立ち上がった。アイカが笑っていて、エリイが微笑ん

でいて、チイがニヒルに苦笑している。そんないつもの当たり前に支えられて、ようやく自分は立ち上がった。

アキノは装いを新たにしたダイバールツクの胸元に手を当てながら、銀の妄執に囚われていた日々と、去っていくチイの背中を重ね合わせる。

「アキノさん……」

「きつと……チイも同じです。あの子はこのフォースにいて良かったと、そう言っていました。だから、それは嘘ではないと思うのです。そして……私たちは皆、何か事情を抱えていたからこそ寄り合ったのかもしれないね。アイカさん、エリイ」

「……はい、きつと……わたしも、アイカさんに出会わなければ……アキノさんに助けってもらわなければ……そして、チイさんに案内してもらわなければ……ここには、いませんでしたから……」

アキノの言葉を肯定して、涙を流すのではなく微笑んで、エリイは彼女と共に、アイカの瞳を真っ直ぐに見据えてそう断言した。

だから、取り戻さなければいけない。

三人じゃ足りない。あたしたちは四人揃ってこそその「リビルドガールズ」なのだ。

「うん……なんだかちよつと恥ずかしいけど……チイちゃんのためにも、あたしたちの不死鳥狩り、頑張ろっか！」

「応ー！」

「……お、おーっ……いー！」

そこに言葉こそなくとも、三人は心に同じ誓いの旗を立てて、「不死鳥狩り」ならぬ「銭ゲバ狩り」作戦への決意を強く固めるのだった。

きつと、身を寄せる旗を探してたった一人で彷徨い続けている、もう一人の仲間のために。

第五十六話「按手の誇り、仕手の謀り」ヴィジランテ、今は」

「これはどういふつもりだね？」

アイカたちがサイコ・キャプチャーエフェクトを二徹フルスクラッチするとう狂気の行為に勤しんでいた時、東京のメガロポリス、その経済の中心となる場所に聳え立つ、地上三十八階建なビルを丸々本社としたGBN運営チームの最高責任者にして社内の中間管理職である強面の男——かのガンダイバーことカツラギは、自身に負けず劣らず強面な赤毛の男性を前にその眉根に刻まれたシワを一段と深くしていた。

特定E.L.ダイバー失踪事件。一年前に迷宮入りしたと思われていたあの事件は「リビルドガールズ」なるフォースによって再び白日の元にさらけ出されて、恐らくその元凶となった橘大十郎からの要請を受けた息子、橘忠治による圧力が本社にかけられたことでそのまま調査は再開されたのだが、ここまではいい。

未解決事件を未解決のまま放っておくというのはGBN運営としては沽券に関わることだったし、「チハヤ」を保護した後の保護観察者としての橘大十郎の権利は事実上消失しているので、再び彼女が虐待される心配はほぼないからだ。

だが、そのせいで大分運営チームのみならず本社も余計なところを突き回されていた事件に、よりにもよって身内が関わっていたというのは、カツラギとしては許し難いことであった。

そして何より今、ぴっちりとスーツを着こなしてソファに行儀良く腰掛けている彼とは違い、赤毛の男——シバ・ツカサはスーツを着崩して脚を組み、不敵な目つきでカツラギを舐めつけているのもまた度し難いがそれもなんとか許してやるとしよう。

だがこの男は、ツカサは、かつてブレイクデカールによってGBNを混沌に陥れた、法務部が威力業務妨害、不正アクセス禁止法、器物損壊その他諸々の罪で立件しようとしていた前科者になりかけのア

ウトローだ。

そんな人物を運営に迎え入れたのは他でもない。

彼こそが、GBNにとつては異物として生まれてきたELダイバーを正常に迎え入れるための鍵である「ビルドデカール」の生みの親にして、数々のELダイバーを保護してきたという実績があるからこそカツラギとトリーは法務部を説き伏せて、彼を入社させたのだ。

なおその際にカツラギは胃薬を一瓶空にしていることは言うまでもない。

「橘の息子がそんなに怖えか?」

長く沈黙を保っていたかと思えば、ツカサはどこか呆れたような口調でそう口にすると思えば、わざとらしい溜息をついてみせる。

ツカサも、ELダイバーの救世主の一人ということでテレビからインタビュの依頼が来たり政治家から講演会の依頼が来たり、プログラマー崩れからビルドデカールのオープンソース化などを依頼されてきたがその全てを断ってきた。

一応補足するならインタビュは代わりにリクとサラが受けているので問題はなかったし、講演会に関してはコイチとその妹であるナナミに代わってもらったので問題ないしオープンソース化については、GBN運営チーム内のみ、という条件の元容認している。

政治的なあれこれに関しては下らない、というのがツカサの本音であったし、そもそもELダイバー虐待事件に関しては相当腹に据えかねているところがある、というのもまた彼の本音であった。

そしてその原因を作った相手の息子からの圧力を受けて、安心ですからどうかチイを運営に引き渡してくださいという事実上の依頼に黙って首を縦に振るほど、ツカサは出来た人間ではない。

チイの「家出」に協力してやったのだから、言ってしまうえば自分が送り出したELダイバーが、GPDの因子を継ぐ娘たちが悲劇に遭わされたケジメであったし、なによりも「何回でもぶっ壊れても立ち上がる」GPDの特性を「意図的に、合法的に何回でもぶっ壊せる」と悪用された時点でツカサの憤慨は怒髪天を衝く勢いであったのだ。

「彼は関係ない。運営スタッフが一年間も不正なアクセスを行い、情

報を隠蔽していた……いや、今もアクセス情報を欺瞞し続けているその事実が、どれほど会社に、G B Nに損失を与えていると思っっているのだね」

——君一人の首で済ませられるような話ではないのだぞ。

語気を少しだけ荒らげて、カツラギはツカサに詰め寄った。

とはいえ暖簾に腕押し、糠に釘なのはわかってている。

そんなカツラギの怒りはポーズで、内心としては嫌な役回りを上から押し付けられた心労で潰れそうなことに、ツカサはとつくに気付いていた。

それについてはご愁傷様だとしか言いようがないのだが、どうしようもないので置いておくとしても、元より自分がG B Nに関わる条件の中に、というよりはコンプライアンスに反した行いをしていることは流石にツカサも自覚している。

——だが、それがどうした。

それがツカサからすれば一貫した本音だった。

元々G B Nが好きで関わっているわけじゃない。ただ、親友への借りと想いや、廃れ、消えていくのを待っただけだったG P Dの技術とその因子が未来に繋がった喜び、そして「按手」として送り出してきた娘や息子たちとも呼べるE Lダイバーへの義理があるからここにいる。

クビをちらつかされようが刑務所行きを引き合いに出されようが、シバ・ツカサという個人にとってのG B N運営チームへの所属理由はそれだけの話なのだ。

それを毀損するような、大物政治家だから安心だと政治の道具にして娘の人権を踏みにじるような行いを容認したに等しい経営陣に対しては侮蔑の感情しかないし、カツラギを代理人として、いや、違う。代理人などという上等なものではない。彼を腹話術の人形として今も恐らく、経営陣は万が一があつた時の責任逃れのために沈黙しているのだ。

そんな奴らのどこに気を払ってやる必要があるのか。

「知らねえなあ……とりあえずそつちが俺をクビにしたいかムシヨに

ぶちこみたいつてんなら好きにしるよ、だがオープンソース化してもビルドデカール一枚作れやしないしどうやって動いてるのかもわかっちゃいない今のプログラム班で、どうELダイバーを支えていくのは見ものだな」

「君は……」

「それにな、この件に関しては俺も相当頭にきてんだよGM、引き取られたELダイバーがその後どんな人生を歩もうが知ったこっちゃあねえ、だが……意図的にその人生を踏みこむようなクズにあいつらを、イリハとチイを引き渡したのはあんたの後ろにいる、橘の野郎を恐れてる経営陣だろうが……!」

「……っ……!」

そもそもイリハとチハヤという名前だって、彼女たちが考えたものではなく前々からELダイバーが新しく生まれたら保護下に入れさせてほしいと袖の下を送ってきた橘大十郎がつけたものだ。

イリハはそれを気に入っていたし、今もその名前だけは自分のものとして認められる程度に心が回復してきたからそれはいい。その選択は彼女の権利及び自由として尊重してやるべきである。

だが、今も反発し続けているチイをチハヤと呼ぶこと自体がまず、ツカサとしては我慢ならない。

ツカサは口も悪ければ態度も悪いし愛想も悪いと三拍子揃った真正銘のダメ人間だが、その度量や愛と慈しみには極めて深いものがある。

だからこそ「アンシュ」と名乗って、生まれくる生命を「按手」として祝福することを認めたのだ。正直なところ今も恨みを捨てて切れない、このGBNで、GPDの誇りを守る「庵主」として。

カツラギが黙り込み、無言で胃薬を噛み砕くのを一瞥しながらツカサは露骨に舌打ちをする。

「それで今更チイが見つかったから探してくれって依頼してきたのもテメエの後ろにいる経営陣だろ、あんたがただ苦労してんのかは見りゃわかるがな、会社の発言権ででけえのはあいつら経営陣だ、また橘とその息子にチイを渡さないとも限らないなら、俺は絶対に引き

渡すつもりはねえ」

「……それは、協力を拒むという回答でいいのか？」

「好きにとれよ、クビにしたいならしてもいいぜ。さつきも言ったがまたバグの嵐でサーバーがパンクすることになるだろうがな」

「……わかった、その件については君の力は重要なものだ、経営陣には私から話を通しておこう。だが、ELダイバー……チイ君を我々が確保するという方針に変更はない」

「勝手にしろ、とにかく俺はこの件に関しちや相当頭に来てんだ、これ以上話すこともなければ協力することもねえ」

乱雑に言い放つと、アメニティとして置かれていた、輪切りにされたパイナップル型の飴を乱雑に引っ掴んで口の中に放り込み、机を蹴り飛ばしながら、ツカサは第四応接室——社内での通称「説教部屋」を堂々とした足取りで後にしていく。

ダメで元々の話し合いだったとはいえ、やはりこういう憎まれ役ばかりを押し付けられていては身が持たない。

きりきりと痛む胃を押さえつつ、カツラギは嘆息する。

本来であれば今日は休日で、バージョン1.78への大型アップデート記念として版元と組まれた大規模キャンペーンの一環として発売されたSDCSガンダイバーとSDCSキャプテンガンダムを組むつもりだったのだ。

それをいきなり電話で呼び出してきたかと思えばあの鼻持ちならないタチバナ商会の代表取締役社長から圧力がかかってきたからなんとかしろだの、具体的なことも言わず保身に走る経営陣については、できることならツカサのようにブチ切れて机を蹴っ飛ばすぐらいはやっておきたい程度にはむかつ腹が立っている。

カツラギも輪切りになったパイナップル型の飴を口の中に放り込んでそつと溶かしながら、深い溜息を吐き出した。

どうしてこうなったと、思えばブレイクデカールが流通し始めた頃からこんなことばかりだったしその前も、GPDプレイヤーからの怒りのメールボムを解体処理する責任は自身の両肩にのしかかっていたのだ。

それでもひとえに胃痛と格闘しながらこの仕事を続けてきたのは、カツラギ個人として、ガンプラが、そしてそんなガンプラが動いて世界を旅する夢を叶えてくれたGBNが、ガンプラを好きでいてくれるユーザーが好きだからに他ならない。

なのに、社員としてはそんなユーザーたちの想いが生んだ、カツラギにとっても困惑と胃痛の材料でこそあったが同時に娘や息子であるELダイバーを道具としてしか見ずに踏みにじった奴が背後にいる命令を遂行しなければならぬ。

中間管理職の宿命とはいえ、やるせないものだ。

諦めたように溜息を再び吐き出していると、彼の携帯電話にメッセージが届いた通知がびこん、と間抜けな音を立てて説教部屋に響き渡った。

ツイスタのダイレクトメッセージ機能を用いたその差出人は「マクラギ・ミリア」と名乗る女性のアカウントだったが、果たしてその中身はカツラギもよく知る人物だ。

「……はてさて、今度はどう転ぶのか」

唯一不安材料がないとすれば、この事件がどう転んでも、橘の手にチイが渡ることは絶対がない、ということだ。

矢継ぎ早に飛んできた「提督」からのメッセージも、「ミリア」……桜宮と歩調を合わせたもので、それは大資本の圧力に対して屈することはないという後ろ盾となる宣言に等しかった。

だが、悪役は引き続き続行しなければならないだろう。

第四応接室、説教部屋を出た先にあるお手洗いで顔を洗って鏡を見れば、そこにはすっかり仕事で荒んで人相が悪くなってしまった自身の顔がある。

「……アバターを変えた方がいいのだろうか」

ガンダイバーは好きだ。カツラギが心の底から好きなキャラだった。

だが自身がアバターとして使うことによってによって彼というキャラクターに風評被害が行くのは可哀想だといつも心の中では詫びている。

しかし、カツラギがガンダイバーを好きでいて、そのアバターとしていなければ、今一度SDCSブランドで「SDガンダムフォース」シリーズが展開することにはならなかったのもまた事実であり、やはり仕事というのは表と裏、正と邪が絶え間なく入り混じる修羅の巷だ。「……彼女たちも何かを仕掛けてくるだろう。すまないなガンダイバー……だからもう少しだけ私に付き合っただけ欲しい、家に帰ったら必ず組んでやる、四体目以降の仲間も再販分はガンチョップパー拡張セットも含めて予約したから待っていてくれ」

思った以上にコアなファンが多かったのは嬉しかったが、ガンチョップパー拡張パーツとガンダイバーが飛ぶように売れて、方々のガンダムベースサテライトを駆けずり回っても三体しか買えなかったのは心残りだった。

唯一の救いは公式通販サイトで再販を確約してくれたことだろうか。

そして、この後控えている経営陣へのクソみたいな申し開きが終われば家に帰って、夢にまで見たガンダイバーの新キットを組めるのだ。

カツラギは気合を入れ直すようにぴしゃりと自身の頬を叩くと、それだけを心の支えにして、己の戦場へと赴くのだった。

「……首尾は上々、といった具合ですわね、こほっ……」

内々的に勧められている案件の擦り合わせが無事に終わったことを確認し、凜音は紅茶を一口啄みながら安堵に胸を撫で下ろす。

あの「提督」が協力してくれたのは本当に幸이었다。GH Cと組めなければ文字通り自分の首が飛んでいく覚悟だったし愛香たちにも危険が及んでいたと考えれば、この綱渡りを成功させた意義は非常に大きい。

そして、ツイスタのダイレクトメッセージを通して愛香から飛んできた連絡に目を通しつつ、凜音は一つ仕掛けを打つべく、火種を撒くことにした。

「……火のないところに煙は立たない、と申しますが……火などなく

とも煙を立てる方法はいくらでもある……そうでしょう、石動？」

「はっ、こちらでも滞りなく行っております、御嬢様」

「結構……こほっ、ふふ……さながらこれは、有志連合戦の再来とも言えますわね……」

端末から表示される掲示板の画面を眺めながら、凜音は「チイの捕獲に賞金がかけられる」という、カツラギからリークされた情報を歪曲するだけ歪曲して、「この前ロビーに来たことについてテンプレ返信しからない運営が何かを隠している」という方向で疑心の種を撒いていた。

そして運営からの公式発表でチイに賞金がかかったとなれば、GBNは大きく動き出すことだろう。

何よりも重要なのは、ここで内々的に処理してしまうことではなく、騒ぎを大きくするだけ大きくして二千万のアクティブユーザーを巻き込んだ大騒動として、チイの失踪を仕立て上げることだ。

凜音も、内心としては愛香たちに任せるだけ任せてしまって、自身はそのバックアップだけをしていればいいなら、それで済ませたかった。

だが、橘の鼻っ柱をへし折って、チイの身柄がどう転んでもなるべく安全にかつ穏便な形で確保されて奴らの手に渡ることがないようにするためには、彼らをGBNの経営から完膚なきまでに追い出す必要がある。

そのためならば、自分は鬼とも悪魔ともなろう。

凜音はGBNからタチバナ商会を締め出した後も余計なことを言わせないためにかき集めた手札を優雅に確認しながら、あの「提督」と歩調を合わせて、GHCと桜宮グループという二大資本の全力札束パUNCHで政財界からも完膚なきまでに叩きのめすべくその顔つきを陰しくする。

コングロマリットとしてタチバナ商会との経営競争に負けてしまったことで父親はすっかり腑抜けてしまっているが、なんてことはない。

あつちが勝手に自爆してくれるならこつちが立ち上がれるし、桜宮

だけがその家名を看板にして未来を担っていく時代はどうせ、父が腹心の部下を事業の後継者に決めた時点でとうに終わっている。

より効率的に、そしてより多くの顧客が望むものを提供できるのであれば、資本提携としてライバルと手を組むことだって、最悪GHCに桜宮グループが買収されることさえ凜音は厭わない。

全ては愛香という掛け替えの無い親友と、そして奇跡を見せてくれたGBNと、生きる希望を与えてくれたバエル、そしてマクギリス・フアリドのために。

狂気を情熱に変えて凜音はひたすら突っ走っていく。

——見ていろ橘大十郎、そして息子の忠治。貴様らが便所に隠れていようと必ず見つけ出してこの政財界における息の根を止めてやる。

凜音は指を組み、静かに不倶戴天の敵をそこに見出して、虚空を睨みつけた。

これは革命だ。この桜宮凜音が、貴様ら橘一族の驕れる牙を砕き、必ず友と誓ったGBNの未来を切り開いてやるのだ。

心の中で黄金に輝く剣を抜き放ち、凜音の「革命」は幕を開けた。それは確かに、未来を変える一矢となるのだが、今はまだそのことを誰も知らない。

そして、その嚆矢を引き絞る弓と射手こそ、「リビルドガールズ」と、朝村愛香——アイカという、一人の今を生きる等身大の少女であることも、同様だった。

シーカーやアサシンが隠れ潜むなら、どこが適しているのか。

チイからバトルロワイアルミッションにおいて教えられたことを頭に描きながら、アイカはフォースネストのホワイトボード上にフォロスクリーンを表示する。

「少なくとも純粋に人が少ないデイメンションは向いていると思うけど、ガードフレームの警戒に引っかかりやすいつてことがあたしの頭からは抜けてた」

「そうですね、運営がチイを搜索していると考えると、目下最大の敵に

なると考えられるのは他のダイバーではなく、ガードフレームとベースガンダムでしょう」

アイカの表示したデータに映っている、GBN―ガードフレームと、そのガードフレームに初代ガンダムを模した装甲を施した機体―「GBN―ベースガンダム」、違反者を必ず殺すという殺意に満ち溢れたイカレ性能の機体を指して、アキノは彼女の言葉に同意する。

「……なんとか……倒せないでしょうか……」

「うーん……あたしもそれは考えたし、実際ガードフレームだったら撃破したって報告はスレにも上がってたんだけど……まあなんていうか……あれは色々アレだから……」

ガードフレームの撃破は違反者にとつては一つのステータスになるらしく、PKをわざと誘発して現れたガードフレームと戦う、というのは二年前にどうやら流行っていたようで、その対策スレも治安の向上した今では過去ログに埋まってしまっていた。

それ故に探すのにはアイカも苦労したのだが、唯一上がっている撃破報告は「毒電波を流し込んで背後からビームサーベルでコックピットを突き上げる」というなんだかカミィユ・ビダンと似た声で狂気的な宣言をぶちまけていそうな、倫理的に色々アウトな一件のみであったのだ。

こんなの参考にできないししちやいけないしできたとしてもやりたくない。よって却下だ。

と、アイカはその変態極まる報告を記憶の中から意図的にデリートしつつ、ガードフレームとベースガンダムの二体のデータに向き直る。

相変わらずふざけたステータスをしている。チャンプやハイランカーでようやく試合になるベースガンダムなんか、アイカたちからすれば存在そのものが死刑宣告に等しい。

だが、ガードフレームならば、なんとか抜け道を使えば倒せるのではないか、というよりは無理に戦わずとも無視して進むことができるのではないかと、アイカは考えている。

故にこそ、チイが潜んでいる場所にアイカは当たりをつけられたの

だ。

「それで、アイカさん。隠れるなら、というのは？」

「うん、アキノさん。チイちゃんが言っていたのは、木を隠すなら森の中……つまりわざとらしくどこかに隠れ潜むより、堂々と人が多い場所を隠蓑にした方が捕まりづらいし見つかった時も最悪盾にできる、つてことだったんです」

バトルロワイアルミッションの中での話とはいえ、中々外道極まる話なのではあるが、シーカー構築やアサシン構築を組んであのミッションに参加する中で、定位置に留まってステルスをしているのは三流だと、他でもないチイは言っていた。

つまるところ、チイがその三流の選択肢を選ぶことは絶対にならない、ということだ。

迷走していた自身の行動を恥じつつも、アイカはそれを糧にして、目標となる場所をスクリーン上に表示する。

「……………って……………」

「うん、ハードコアディメンション・ヴァルガ……多分チイちゃんが隠れているなら、ここしかないと思う」

もしガードフレームに見つかつたとしても多くのダイバーや人間災害にヘイトを擦りつけて逃げられてかつ、単純に同接ユーザーが多いから個人の見分けがつきづらく、その魔境性故に運営チームも中々調査に踏み出しづらいという条件が揃ったその場所は、「生き残れる腕があるなら」潜伏拠点としてはこれ以上ないものとなる。

そしてチイならばきつと、生き残ることができる。

奇妙にも、自分たちにとつての始まりとなつたその蠱毒の壺に三度飛び込もうとしていることにアイカは犯人は犯行現場に舞い戻つてこういふことなのかな、と静かに苦笑した。

「……………考えとしては私も妥当だと思います、しかし……………三人でかつ、エリイがサイコ・キャプチャー発動のためにフィン・ファンネルを温存した状態で、ヴァルガを生き抜くことは可能なのですか？」

とはいえそこが、並み居るダイバーであれば層運を引けば二十秒、引かなくとも三分かそこから消し炭になる危険地帯であることには

変わりない。

アキノの疑問はもつともであったし、アイカもそれは考えているところだった。

だが。

「……屑運引かなければ、多分」

「その根拠は」

「詳しくはいえないけど、あたしの友達が……アリアちゃんが仕手として、多分今回の件に火をつけてくれるはず。そうなれば……チイちゃんを狙う運営側と最低でもあたしたち、そして漁夫の利を狙うモヒカンたちで乱戦になるから、逃げるだけならさつきチイちゃんが言ってた条件が成立する」

決め打ちをされなければ、乱戦というのは少数派にとつては美味しい状況なのだ。なんせ多数派と多数派が混戦している状況から自分たちだけを狙ってくる奴に対処して、チイを探すことに専念できる。

そして状況が大きく動けば、隠れ潜んでいるチイも動かざるを得ない。

それを根拠として提示して、アイカはアキノの瞳を真っ直ぐに見据える。

とはいえ、最後は乱数の女神様の機嫌次第であることには変わりない。

アリアの仕掛けがどれだけ上手くいったとしてもあくまでアイカたちは有志連合ではなく、その仕掛けは運営に対して不満を抱くパルチザンたちを焚きつけるような形であるのだから、彼らが「リビルドガールズ」の味方になるとは限らない。

或いは運営が無理やりE.L.ダイバーを確保しようとしている、という第二次有志連合戦と同じ構図に憤慨してくれる人など少数派も極まっているだろう。

だからこそチャートの祈りは必修科目。どれだけ人事を尽くしても、最後は天命を待たねばならないのだ。

「……いいでしょう、アイカさん。チイは……私のためにあれだけの大博打に打って出てくれた、ならば私も博打に出ねば無粋というも

の」

「……わ、わたしは……アイカさんのためなら、地獄でもどこでも……
いっしょ、です……っ！」

「……ありがとう、アキノさん、エリイちゃん。絶対に……絶対にチイ
ちゃんを取り戻しに行こうね！」

フォースネストを買ったのは、プライベートモードで運営にこの会
話を聞かれる心配がないからだ。そして、チイが帰ってくる場所を作
るためだ。

拳を突き合わせて、アイカたち三人、一人を欠いた「リビルドガ
ルズ」はその欠片を、最後の一人を取り戻すため、一世一代の大博打
に、それこそ自らの命を天秤の反対に躊躇いなく乗せた。

そうだ。賭けとは、取引とは公平でなければならぬ。

だからこそ、チイがあの時言っていたように、チイの身柄を取り戻
すためにはその反対に誓約として、アイカたち三人の身柄を乗せる必
要があるのだ。

これは有志連合などという上等なものではない。そしてGMに突
きつける反攻の凱歌に他ならない。

故にこそヴィジランテ、そして。

『今はリビルドガルズ改め、リビルドバンガード！』

声を揃えて三人は頭の中に浮かんだその名前を唱和する。

そう、ならば今は海賊らしく、チイの身柄を頂いていくために。

第五十七話 「誰が仕組んだ地獄やらく開幕する饗宴 (狂宴)」

その日、一つの地獄が生まれていた。

ハードコアデイメンション・ヴァルガ。本来はランク制限がかかるフリーバトルを無制限に行えるというのが表向きの理由で作られたとされるその場所は、しかしてその実態は世紀末、モヒカン、猿山、蠱毒と多様な蔑称でダイバーたちから呼ばれて憚らない。

と、いうのもある意味では当然である。

無差別マツチが生み出されれば、当然食うものと食われるもののヒエラルキーはより過酷な形で現れて、そのおこぼれを狙う者も、そしてさらにおこぼれのおこぼれを狙う者も、と言った具合に弱肉強食が連鎖する。

人類の文明は、その本質を原始社会からの脱却と置くのであればこのような、誤謬として用いられる理論に正当化された四字熟語は忌避されて然るべきなのであるが、残念ながらここは猿山だ。

プリミティブな衝動に殉じた闘争を望む戦闘狂たちは歓喜して、己の腕を磨くために、或いは来世に向けて徳を積むために苦行に身を投じる修行僧たちは顔をしかめて、ドロップや採掘アイテム狙いのチャレンジャーはそんな終わりなき戦いに身を投じる彼らを忌避して、このヴァルガを地獄と呼びながらも自らその世界にダイブしてきたはずだった。

だが、今日の前に展開されている光景は多くのダイバーたちの認識を打ち壊し、地獄とはなんであるか、その二文字がどれだけ重いものであるのかを知らしめるためとでも言わんばかりの阿鼻叫喚だ。

まずその嚆矢となったのは、運営の大本営発表だった。

凜音と「提督」……ダイバーネーム「アトミラール」、「GHC」を率いる総帥たる男及び、愛香たちの企みは果たして予定通りに、そしてお嬢様と社長の二人がカツラギと口裏合わせたとおりに恙無く行われた。

現在失踪中のE.Lダイバー、個体名「チハヤ」は現実において危険な状態にあるため、保護を必要としている。

故に協力してくれた有志がチハヤを、チイを運営に突き出したのなら1000万BCという破格の報酬という名の懸賞金が与えられる。

その情報は、アクティブユーザー二千万人をざわつかせるには十分なものだ。

有志連合戦以前からやっている古参のダイバーはまたE.Lダイバー絡みで何かあったのかと事態をおおまかながら察して、新参のダイバーたちは捕まえるだけでその高額賞金を手にするチャンスが得られる。

そこにどんな狙いがあるうとも、どんな目的であろうとも、GBNに大きな波紋を作るという意味では極めてその情報は有効に働いてくれた。

とはいえ、ヴァルガが本命だと思っているユーザーは運営の想定より少なかったものの、それでも同日の該当ディメンション同時接続人数は歴代の記録を大幅に更新して、十万単位でのアクセスが確認されていたらしい。

その他のディメンションも同様だ。

世はまさに大航海時代。そんな一攫千金を夢見たダイバーがチイを探して三千里を走り回るなら、またあの運営が何かやらかしているのかと若い義侠心ないし逆張りでそんな炭鉱夫たちに挑みかかるヴィジランテが仮想の四万キロを覆い尽くして飛び回る。

どこのディメンションでも多かれ少なかれ地獄のように人がひしめいているのなら、そこに無制限フリーバトルという要素が加わればどうなるのか？

その問いに対する答えは明白である。

あるダイバーは、いつも暗雲に覆われたヴァルガの空が一際暗く染まっっていくのを見たと言っている。

スポンキルを生業にする、都市迷彩のケルデイルガンダムを愛機とする「回収屋」……ダイバーネーム、「ピーター」は珍しく運営が天候を間違えて雨でも降らせたのかと最初に勘違いをした。

だが、何となく上を見た時に自身を、そして怒号と悲鳴が飛び交う地獄の戦場を覆い尽くすように現れたのは、ハイパーメガ粒子砲を艦首に二門搭載したドゴス・ギア級の改造戦艦に率いられた、同じくハイパーメガ粒子砲を一門その艦首に搭載したラー・カイラム級五隻及び、無数のマゼラン級やサラミス級という戦艦の群れだ。

ピーターはごしごしと目を擦った上で、レーダーと自身の頭上をもう一度見つめ直す。

間違いはない。あれは艦隊だ。最後尾はこのハードコアデイメンシオン・ヴァルガ南部の穀倉地帯跡地へと伸びる、鶴翼陣形の艦隊はそれぞれに機銃を掃射して、立ちほだかる賞金稼ぎ——本来ならばこちらこそが「有志連合」と呼ぶべきである——を遠ざけながら、母艦たる改ドゴス・ギア級、「天城」が、ヴァルガの中心に向けてある兵器を展開する。

「な、なんだこれ……!? クソっ、こんなことするバカどもなんて『GHC』しかいねえ！ 皆今すぐ逃げろ！」

ピーターは「天城」から射出されたその兵器の正体を知らない。だがあれは特大級に「ヤバイ」。

おこぼれを狙う者としてではあるが、曲がりなりにも長い間ヴァルガを生き抜いてきた彼の直感は、果たして数秒後に正しく作用することになる。

フォトンリングレイ。映像作品「機動戦士ガンダムAGE」に登場した、エネルギー増幅器を応用したそれは「天城」の正面に時空の歪みを描くかのように展開し、その後ろに座した艦首の砲口には淡い光が灯り始めている。

『いいか、此度の目的は人質救出作戦だ！ 目標の漸減こそ必要だが、絶対に対象に当てるんじゃないぞ！』

『サー、イエッサー！』

『ハイパーメガ粒子砲回路、収束から拡散へ……エネルギー充填率60パーセント、満足には程遠いデース……でも！ これがワタシと提督の今出来うる限りのバーニング・ラヴなら是非もなしデース！ 全艦連動、拡散ハイパーメガ粒子砲、FIRE!!』

改ドゴス・ギア級「天城」の指令席に座す男、「アトミラー」の命令を受けた艦長——「コンゴウ」の指示によって、開戦を告げる号砲は放たれた。

普段の六割の出力で撃たれたそれが、フォトンリングレイによって増幅されれば120パーセント以上になることをアトミラーとコンゴウが勘定に入れていたかどうかはわからない。

だが一隻の改ドゴス・ギア級と、五隻の改ラー・カイラム級群、「赤城」、「加賀」、「瑞鶴」、「翔鶴」、「信濃」の艦首から放たれたハイパーメガ粒子砲は一条の束となってリングに収束すると、そこから光の鞭となつて容赦なくモヒカンを、賞金稼ぎを、そして哀れにもロツクから外れながらも逃げ遅れたヴィジランテをも巻き込んでヴァルガの景観を破壊していく。

その中には賞金稼ぎが気合を入れて用意した全塗装HGガデラーザだとかネオ・ジオングだとか、そういう高額キット群も含まれていたのだがそこはそれ、札束と狂気が織り成すフルスクラッチ砲の前には耐えきれず、哀れにも有象無象として散っていく他にない。

「イカれてやがる——」

そしてそれは、「回収屋」として悪名が轟いているピーターも同じだ。

あり触れた断末魔を残してログイン天誅狙いの男は天から降り注ぐ光の雨による誅伐を下されて、テクスチャの塵へと化していくのだった。

「相変わらず無茶苦茶な威力だな……」

事前にこの茶番なんだか本気なんだかわからないELダイバー争奪戦に参加していた男——「ユーリ」はガンダム・マルコシアスの太刀でぶつた斬ったデンドロビウムのIフィールドジェネレーターと、自身のナノラミネートアーマーによって光の雨を耐え切っていた。

それでも損害は少なくなき、味方に当てるなどはなんだったのかと文句の一つも言いたくはなるのだが、モヒカンやログイン天誅狙いの暗殺者はそれこそ畑から取れる勢いで降って湧いてくるのがこの

ハードコアデイメンション・ヴァルガだ。

あれぐらいやらなければ「本命」のエントリーも安全にはならないのだろう。

デイメンション北西部にある軌道エレベーター付近に陣取った賞金稼ぎが駆るモビルアーマー、ハシユマルから放たれる子機であるプルーマたちをその巧みなサブアーム捌きで切り裂き、引き裂き、撃ち落としながらユーリは「お仲間」たちと共に本丸を落とさんとする。「ミツルギさんだったよな、俺たちはあの軌道エレベーターを抑えればいいんだったな!？」

「その通りだ、彼女が採掘エリアにいるかどうかはわからないが、足を抑えられていては探索ができません！」

原作とは異なり、ハシユマルの護衛についているガンダム・バルバトスルプスが放ったレールガンの一撃を、ヘルムヴィーゲ・リンカーが持っていた大剣の腹で防ぎながら、ミツルギの駆る▽ガンダムは即席チームの盾として、アタツカーたちを本丸に送り出すべくバルバトスルプスに立ちはだかる。

ユーリがヴィジランテをやっていることに理由はない。強いていうなら、GMには気の毒でこそあるものの、第二次有連合戦の時のようにまだ生まれて間もないELダイバーを消したり何かに利用しようとしていたりするその口振りが気に入らないだけだ。

逆張りと言われようが構わない。

賞金稼ぎのハシユマルを守る最後の砦であったガンダムアスタロトオリジンを、そのγナノラミネートソードごと一刀両断しながらユーリはマルコシアスを跳躍させて、大技の代償として折れた太刀を放り捨てる。

『太刀のないマルコシアスなんてなあ！ ナイフでこのハシユマルをどうにかできんのかよ!』

北西部軌道エレベーターに陣取る賞金稼ぎは、そのほとんどがタチバナ商会の息が掛かった即席の傭兵だ。

プロに札束で突貫工事を依頼して大型機を用意させ、数と金の力でチイを奪還して鬱憤を晴らす——その小物極まる目的など、ユーリは

知らないし知る余地もない。

だが、こいつには愛がない。

それだけはすぐにわかった。

「おいおい、こいつは……GBNだぜ！」

γーナノラミネートソードと似た原理で、右の拳にエイハブ・ウェーブを集中させると、マルコシアスはその拳を振りかぶって、ただ額面通りの設定だけをかじった傭兵には理解が及ばない技を繰り出す。

「爆熱……ゴッドフィンガー！ ナノラミネートエディションだ！」

『ば、バカかテメエは!?!』

無論そんなことをすれば実機の拳はエネルギーに耐えきれず砕け散るのだろう。だがこれはゲームだ、そして必殺技というユニークスキルがその「できたらいいなあ」という妄想を具現化する背中を後押ししているし、なによりも。

「ガンプラは……自由なんだぜ！」

ミツルギがバルバトスルプスを破壊したのと同時にハシユマルの首を捻じ切って、ユーリは宣言する。

そうだ、自由でなければならぬ。ガンプラも、この世界も。

ならば、この世界から生まれてきたELダイバーだってそれは同じなはずだ。

ミツルギの他にも並んでいたヴィジランテたちが無事なのを確認すると、畑で取れたが如く軌道エレベーターを防衛するために派遣された、タチバナ商会の戦略を打ち砕くべくユーリたちは疾駆する。

こいつらには愛がない。愛がなければ連携もあのふざけた砲撃が本質かと思いきや恐らく「第七機甲師団」に匹敵する戦略、戦術をその本懐とする大艦隊にも及ばない。

愛なき者を駆逐すべく、その愛を受けて顕現した悪魔は双眸から赤い残光の尾を引いて疾駆する。

その姿はまさに、タチバナ商会に雇われた傭兵たちからすれば「悪魔」そのものに映ったのであった。

マルコシアスが悪魔なら、七十二柱を統べる王とは何か。

無限湧きするモヒカンと賞金稼ぎを一刀の下に斬り伏せて、流星のような奇跡を刻むその白亜の機体の頭上にこそ、王たる冠は正統に輝く。

『ば、バエルがあんなに強いなんて聞いてねえぞ！』

『キマリスヴィダールなら勝てるんじゃないのかよ?!』

かの商会の息がかかっていようがかかっていまいが関係ない。

道を開くために自分は、バエルは三度蘇ってここにいる。立ちはだかるのは敵だ。立ちはだからないのは訓練されたアサシンだ。

「そう……このバエルが、アリアが一人で道を切り開き、全てを葬り革命を成し遂げる！ それこそが！ この機体……悪魔の王たる本懐なのですわあああッ!!!」

作り込みが浅いと、アリアは金属パーツに置換していないドリルニーを蹴り碎いてキマリスヴィダールのコックピットにはバエル・ソードを突き立てて、背後を狙ってきた黒いガンダムエクシアにはノールックでもう一本の剣をやはりコックピットの中心に突き立て、そして。

『俺を盾にしたのか!? うわあああッ!』

『ヨウター！ クソッ、このバエル、俺にも気付いて——』

「遅い」

三段構えの態勢でアリアを葬らんとしていた最後の切札、ハイパージャマーを起動しながら襲いかかってくるガンダムデスサイズの鎌にエクシアを切り裂かせた上で、真つ二つになった胴体の隙間から、キマリスヴィダールの胸から引き抜いた剣を突き出してデスサイズを葬る。

これら一連の作業にかかった時間は僅か十秒にも満たない。

何の感慨もなく、心を躍らせることもない——アグニカ・カイエルの魂から程遠い者たちを全て跳ね飛ばしながら、バエルとアリアは決して止まることなく戦場に嵐を巻き起こす一つの災害として君臨していた。

それはあの「アトミラール」たちの砲撃を全て躲していたことから

も窺えるだろう。シーカーとアサシンは気配を読み取って薙ぎ払いで確殺し、スナイパーには肉の盾と機動性を利用して急接近することで斬殺し、アタッカーには素直な死をくれてやる。

まさしくアリアとバエルはこの戦場において五線譜に描かれた音を奏でるように優雅に、しかしながら純粹に恐ろしい暴力を行使して、訓練されているはずのヴァルガの民をも巻き添えに荒れ狂う。

ある程度数を漸減しつつ、自分たちもチイを探しながら、本命である突撃前衛——三人の少女たちにはダイブしてもらわなければならぬ。

アイカが屑運を引かなければ、とその作戦の前提に付け加えたなら屑運を極力ねじ伏せればいい、というのがアリアたちの示した回答だ。

しかし、これだけの実力を誇るアリアとてGBNの中ではまだ頂点には及んでいない。

意識の隙間を突くようなその攻撃を辛うじて回避しつつ、影に溶け込んでいたが如く戦場に突如として現れたその機体を、アリアは舐めつける。

『ごめんなさいねえ、でも……あなたたちが未来を見ているなら、その未来を試すのは……命を預かるのに相応しいかを見極めるのはアタシの役目!』

「……個人ランク第23位……『アダムの林檎』のマジイ様ですわね? 貴女ならば……わたくしと、このバエルと踊ってくださいるのでしよう!」

『いいえ、踊るのはあなた——そして、奏でるのは愛と死の舞踏!』
暗闇から現れたその機体、「マジイ」の駆る「ガンダムラヴファントム」が振り下ろす死神のビームカマと、アリアが駆る悪魔の王たるその切っ先、バエル・ソードが嵐のように打ち合っ火花を散らす。

ああ、そうだ。アイカさん。

ここで阻まれたとしても——ミツルギたちが上手くやってくれる。そして自分はもちろん、敗れるつもりなど毛頭ない!

「上等ですわ、わたくしこの件ブチのギーレエでしてよ、ランカーだか

何だか知りませんが……鬱憤晴らしに付き合ってもらいましてよ!!!!」
『あら……若いって素敵ね。お嬢さん……!』

アリアのバエルが優雅に荒れ狂う暴力なら、マギーのラヴファントムは優雅に闇から現れて静かに舞い踊る技の化身だ。

そのどちらも勝るとも劣らない剣戟に介入しようとする不埒者は当然の如く存在したが、その全てが、余波がコックピットに直撃して爆散するか、マギーもしくはアリアに細切れにされて爆散するかでテクスチャの塵に変えられていた。

戦場に一つ空白地帯が生まれたことに、アリアは決して安堵しない。

なぜならマギーの目的は恐らく遅延だ。

自分を食い止めて、困難に「リビルドガールズ」もとい今は「リビルドバンガード」を飛び込ませることでその覚悟の証明とするのだろう。

理解はできる。命を預かるのがどんなに重いことなのか、アリアは、「凜音」は、幼い頃から主治医の先生が笑顔を浮かべながらもどこか申し訳なさそうに自分と接していたことで理解している。

だが、そんなことはどうでもいい。

気に入らないのだ。この自分とバエルを前座扱いすることが。

「ふふ……野に放たれた獣が一斉に牙を解き放っている、そしてわたくしもその獣というその目、その姿勢……全てが気に入りませんことよ」

『あら、踊り方なら丁寧にエスコートしてあげているけど?』

「んなもん病気がわかる前に死ぬほど叩き込まれましたわあ!!!」

ラヴファントムから放たれたカリドウス複層ビーム砲をバエル・ソードで切り裂くという荒技を見せながらアリアは絶叫する。

そうだ、楽しい。

ガン普拉バトルはこんなにも愛に満ち溢れている。そして愛を持つ者同士がアグニカ・カイエルの魂を目指して高め合うことほど崇高で尊い行いなどこの世のどこに存在するのだろうか。

「だから……わたくしと戦うためにあの銭ゲバを回収しなさいな、『リ

ビルドガールズ』!!!」

戦友よ、そしてあのふぎけた現実を認めて生きる覚悟を持たせてくれた親友よ、これこそが桜宮凜音であり、アリア・ファリドの覚悟である。

照覽せよとばかりにアリアはリミッターを解除して、その双眸に狂気と狂喜、愉悦と恐れを抱きながらも果敢に、このGBNにおける愛の番人へと立ち向かってゆくのだった。

「……クク、大資本のやることは過激ね……じゃなかった。こほん。過激であるわね……」

あの砲撃を避けずとも、サイコ・フィールドとIフィールドによって無傷で乗り切っていたその巨龍を操る少女、クオンは今も並み居るガンプラを高い密度を誇る対空砲火で叩き落としている戦艦六隻を見上げながら、大物狩りを果たそうとして挑みかかってくる四桁ランカーの機体を、テイルブレードで無慈悲に叩き落としてゆく。

誰が呼んだか、二桁の壁。或いは終末をもたらす「ジャバウオックの怪物」、御伽噺を悪夢で締め括る終焉の使徒は、例え四桁というハイランカーが相手であろうとも、巨大資本が狂気と情熱と札束を捧げて作り上げた戦艦が相手であろうとも沈むことはない。

彼女が駆る怪物の名前はそのまま「ジャバウオック」であり、二年という歳月をかけて改良し続けたそのガンプラは、ヴォーパルの剣を、勇気ある者が携える剣を持たなければ倒せないと恐れられている。

『ウソだろ、こんな……!』

セカンドVにアサルトバスターをミキシングした、「Vガンダムサード」を駆るダイバー、個人ランク1238位である「オリベツト」は構えたミノフスキー・シールドごとテイルブレードに破砕されたことに驚愕を覚えている間に、つい最近リニューアルしたばかりのフェザー・ファンネル——一つ一つ全てがフルスクラッチという狂気の産物である——に飲み込まれて爆炎の中に消えていく。

『二桁上位の壁だつてんなら、これぐらいで死なないのは当たり前前よ

「ならば諸共おおおおっ!?!」
「あら、ぐめんあそばせ……ふふ」

オリベツトが爆散したのを皮肉に笑い、背後に潜んでジャバウオツクの喉元に刃を突きつけようとしていた個人ランク987位である女性、「リザヴァリー」は愛機である【ネブラブリッツ天】のミラージユ・コロイドを解いたその瞬間に真つ二つにされて、ロビーに強制送還されていた。

リザヴァリーの脳内では音が割れた音楽が鳴り響き、クエスチョンマークが思考回路を埋め尽くしていたものの、その絡繰は簡単だ。単に上からの攻撃に対応できなかっただけだ。

ミラージユ・コロイドによる欺瞞を見抜いて、腰部のマウントラツチに収めていたビームサーベルでネブラブリッツ天を一刀両断した、リボンに飾られた黒髪ロングに黒和装というゴシックな出で立ちの少女——ユユは妖艶に微笑んで、心の赴くままに愛機である【グーイデア】を、ヴァルガの空で優雅に舞わせる。

別に助けられたというわけでもないが、彼女はかつて一度とはいえ自分と引き分けたあの聖騎士——ヴァルガの主人にしてFOEさんの通称で呼ばれる男の妹だったか。

68位という位置だったが、あの動きなら近いうちに自分たちの領域に差し迫ってくるだろう。

将来のライバル候補の勇姿を見て、どこか満足げにふんすと笑ってみせると、クオンは傘を傾けて、文字通りお散歩感覚でヴァルガに住まうモヒカンやシーカー、アサシン、そしてタチバナ商会の傭兵を蹴散らしていく。

『おい待てよ、なんでクオンちゃんがこんなところに——ぐああああ!!!』
『FOEさんから死ぬ気で逃げてきたらこれってありかよ!? うわああああ!!!』

『畜生、契約の時にこんなのがいるなんて聞いて——うおおおっ!?!』
ジャバウオツクはただ歩くこと、それすらも災害としうる力を秘めた巨龍だ。

クオンがヴィジランテに回った理由は単純だ。あのチャンプが今

回は例のクルーゼ仮面として運営を裏切って、偽装したダークマグナムハウンドで暴れ回ると風の噂で聞いたからだ。

曰く、「リビルドバンガード、海賊だね……海賊といえばバロノーク、そしてあの事件を知ってしまった今、僕は今度ばかりは味方になることはできない」と、胃痛を堪えるカツラギに詫びて今もヴァルガの宇宙で荒れ狂っているらしいが、彼と戦うためにジャバウオックの巨体をソラへ運ぶには、南西部マストライバーを利用しなければならぬのだ。

故にこそお散歩。そして「黒髪ロング黒和装災害系妹」がいるということは、断末魔にも紛れていたようにあの聖騎士もまたヴィジラントとして参戦しているのだろう。

「……そう、これは有志連合ではない……くく……各々がプリミティブな欲望のために戦う終末の具現……！」

ならば私は災禍になろう。チャンプが遊んでるなら私だって全力で遊びたい。

クオンは等身大の少女としての笑みを浮かべると、すぐにロールプレイに戻りながら、数多の屍を足下に積み上げながらマストライバー基地に陣取る「それ」と相對する。

「よう……待ってたぜ、この前は食いそびれちまったからな……おかげで腹ア減って仕方ねえぜ！」

「修羅たる鬼よ、我に挑むか！ ならば……」

「言葉はいらねえ！」

待ち構えていた男、「獄炎のオーガ」が振るう剣とジャバウオックのビームトンファーが激突し、周囲にビーム・マグナムの余波を思わせる衝撃を散らす。

予定外だったが、こういうのも悪くはない。

思いがけず上々な散歩の成果にほくそ笑んだかと思えば鬪争心を剥き出しにした笑みを浮かべて、オーガとクオンはぶつかり合う。

そしてその余波で足下に積み重なる屍の数は指数関数的に増大していく。

地獄だった。地獄の中に、地獄が顕現していた。

何を言っているのかわからないと思うが、巻き込まれて死んでいくダイバーたちは皆一様にその言葉を頭の中に描いている。そして。

何より恐ろしいのは、あの開戦の号砲が鳴り響いてから、まだ三分ほどしか経っていないという、GBNの深淵が見せる事実であった。

第五十八話 「その時、宇宙（そら）でくチイの猿山逃亡録」

フォーランキング堂々の次席を誇る「第七機甲師団」、その鉄の誇りに身を包んだ部隊を率いるモフモフの毛皮に包まれたオコジョのダイバールックを採用している推定男、ロンメルにとってこの戦いは大きな意味を持たなかった。

ELダイバーが失踪していたことは事実だとしても、運営の言い分に嘘が含まれていることもわかっていたし、何よりチャンプであるキョウヤを経由して虐待事件に関してもロンメルは仔細を把握している。

だが、その上で誤解を恐れずに言うのであればこれは運営にとって茶番で、どう転ぼうが無駄に金を投入している「タチバナ商会」が得をすることはないのである。

その辺りについてもキョウヤ経由で何やらGBNに絡む大資本がどうのこうのと聞かされていたのだが、はつきり言ってロンメルにとっては割とどうでもよかった。

どう転ぼうが運営は損をしない。第二次有志連合戦の時と事情が違うのならばいたいけな少女たちに味方して戦うというのも悪くはないのだろう。

一応、此度は運営の「有志連合」としてヴィジランテたちと銃火を交えているロンメルだったが、彼の動機は極めて個人的なものだ。

「まさか、大戦争イベント以外で本気の『GHC』と戦えるとはね……」自身の率いる「第七機甲師団」と同じく、フォースの主軸として戦術と戦略に重きを置きながらも、圧倒的な物量によってのローラー作戦を常道とするそのフォースは、ロンメルにとって何かと引き合いに出されることもあり、ライバルなのか戦友なのか、そんな奇妙な感情を抱く好敵手でさえあったのだ。

タチバナ商会のやり方については気にくわない。だが、奴らについてはあの男が、アトミラルが確実に追い詰めてくれるのだろう。

桜宮の令嬢もブチ切れた結果とうとう父親を説き伏せてGBN経営における大株主としての発言権を手に入れたのだから、巨大資本と巨大資本が手を組んで札束で殴れば死ぬ。巨大であつても落ち目の資本であれば尚更だ。

ああ悲しきかな資本主義、新自由主義の生み出した影。

有志連合として参加しながらも、ロンメルは一際大きな溜息とともにタチバナ商会の傭兵を、ミニモアザックに格納していた手榴弾で爆殺し、愛機「グリモアレッドベレー」を先頭に、隊員達とV字の陣形を組んで、衛星軌道に浮かぶ改ラー・カイラム級戦艦「扶桑」に突撃を敢行する。

「これがただの祭りであるなら……私も本気で乗らせてもらおうではないか、アトミラール……！」

その、並み居るガンプラであれば問答無用で破壊する密度の対空砲火を曲芸じみた機動で潜り抜けて、ロンメルは「扶桑」のブリッジにチェーンソーを叩きつけ、そして、自身を囮にすることでその警戒が緩んだ「クルト」たちを筆頭にする部下たちへ主砲やエンジンを撃ち抜かせることで、「第七機甲師団」は無傷で改ラー・カイラム級戦艦を一隻沈めてみせる。

運営の意向と桜宮の意向、そしてGHCの意向がどこを向いているかについては興味はない。だが、「とにかくこの祭りを盛り立ててくれ」と据え膳を与えられた状況ならば、喜んで食べるのが自分という男だと、ロンメルは自認していた。

とはいえ、本命は地上で暴れていたのだから、上がってくるまでは時間がかかりそうだが。

あの狂気の作り込みが施された「GHC」の戦艦たちを、提督不在とはいえ無傷で叩き落としていく「第七機甲師団」の姿は、まるでルウム戦役におけるモビルスーツの活躍を、一般ダイバーやこの状況においても尚採掘を諦めない不屈の炭鉱夫たちに連想させた。

しかし、息をつく暇もなく四方八方から攻撃が飛んでくるのがこのハードコアデイメンション・ヴァルガという場所だ。

真横から飛んでくるビームを回避しつつ、ロンメルはついに来た

か、と、唇……らしきものを歪めて獰猛な笑みを浮かべてみせる。

「キョウヤ……よもや君とまたあいまみえることになろうとは」

『すまないが、誰のことだかわからないね……今の僕はバロノークの男！』

『そして俺は海賊A！』

『同じく宇宙海賊ビシディアンのBです』

不動のチャンピオン、クジヨウ・キョウヤであることが明らかにバレレなクルーゼ仮面は通信ウインドウの中で不敵に笑って、自身の愛機である「ガンダムAGEⅡマグナムハウンド」に施した偽装と同様の欺瞞が施された「インパルスガンダムアルクローグ」と「インパルスガンダムランシエエツジ」を従えて、「第七機甲師団」を急襲した。筆頭の三人がロンメルを抑えにかかっているだけで、残りのメンバーもどことなく宇宙海賊ビシディアン風の偽装を施した機体でタバナ商会の傭兵を叩き落としながら、とうとうチャンプがその財力でレンタルしてきた「バロノーク」が戦場に姿を表す。

「いいだろう……海賊狩りと洒落込むぞ、クルト！」

「はっ、大佐殿！」

それだけの短い指示で、チャンピオン率いる三機を取り囲みつついつでも回避運動に移行でき、かつフレンドリーファイアを避けられる陣形を組んだ辺り、クルトという副長の實力もかなりのものだ。

弾幕放火を掻い潜るAGEⅡマグナムハウンドが構えたドツズランサーマグナムとグリモアレッドベレーが繰り出したチェインソーの一撃がぶつかり合ったかと思えば、インパルスアルクローグのビームが二人の間に割って入り、その背後にダブルロックを向けようとする隊員たちを制するように、インパルスランシエエツジが遊撃をかける。

ここだけ切り取ってみれば、普通のフォーストーナメントそのものなのだが、その周囲では絶え間なく爆発音が響いているし流れ弾で傭兵も賞金稼ぎもヴィジランテも問わずして撃破されているのだからやはりここは猿山にして戦闘狂のラスト・リゾート、ハードコアディメンション・ヴァルガに他ならない。

——どーしてくれんだよこれ。

誰ともなく採掘エリアで呟かれた言葉は、しかして戦場に届くことはない。

いきなり怪物たちの頂上決戦が始まったことに頭を抱えながらも、チイは比較的平穏な採掘エリアの鉱石群と、モビルドールに搭載しているミラージユ・コロイドとハイパージヤマーを駆使して逃げ回り続けていた。

ここ最近はずっと普段であれば利用者が少なく不人気な軌道エレベーター基地を拠点にしてチイはヴァルガで補給路を確保しながら見事隠れ仰せていたのだが、今日になって自身の首に賞金がかけられたことが発表されると、いきなりスレが祭り状態に突入したため慌てて宇宙に逃げてきたという風情だ。

ハードコアデイメンション・ヴァルガに、基本的に平穏の二文字はない。

だがそれは、例外的には存在するということだ。

モビルドール姿の自身を見ても関心を払うことなく、ランドメイスでヴァルガの月に聳え立つ水晶のようなものを掘り続けている旧ザクやゲイレール・シャルフリヒターに頭を下げつつ、チイは定期的に隠れる場所を変えていた。

「……………ここは平和でありがたい限りだねい」

炭鉱夫と賞金稼ぎは、微妙にその性質を異にしている。

賞金稼ぎといえはそれこそチイもやっていたように金、金、金でダイバーとして恥ずかしいとかそういう感情は犬にでも食わせた銭ゲバ共だからこそチイを追いかけののだが、炭鉱夫が追い求めるのはレアドロップ、それもヴァルガでしか採掘できないものだ。

例えば「リギルド・センチュリーのサイコフレーム」というアイテムはこの採掘エリアで取れるパーフェクトレア報酬の一つだとされているし、その価値は優に1000万BCを上回る。

それだけではなく機体にプラグインとして組み込めば性能が向上し、一種の勲章にもなるのだから男も女も老いも若きも夢を見て、今日も炭鉱夫たちは黙々とピッケルを振るい続けるのだ。

勿論、そんな彼らをキルスコアの肥やしにしようとする目論む不屈き者もいて、チイが先ほど隠れていた場所には、どこから忍び込んできたのか賞金稼ぎの物と思しきアクト・ザクが三機エントリーしていた。

そして彼らは採掘を続けていたシャルフリヒターを囲んでヒートホークを叩きつける。

だが、次の瞬間には脇目もふらず採掘をしていたはずの旧ザクやボールといった機体がピツケルやらボールのようなものを持ってアクト・ザクを袋叩きにする。

彼らは確かに他者へ干渉しない。しかしてそれは抵抗しないこととイコールではない。

レア掘りを邪魔する主任だとかリーゼント頭のあいつだとかは可及的速やかにぶちのめさなければ快適な炭鉱夫ライフが送れない以上、炭鉱夫たちもまたいわゆる採掘ビルドでおぼれ狙いを叩きのめす精銳に違いはないのだ。

「……チイのことは狙わなくてもいいってか」

それはそれで助かるからいい、と呟きかけたものの、言葉が返ってこないというのは存外に寂しいものだ、と、チイは鼻の頭に何か塩辛いものが滲んでくる擬似感覚に困惑する。

あの顔も思い出したくない畜生の家にいた頃だって、お姉ちゃんの話し相手になってくれた。

在りし日を思い返しながら、チイはごしごしと右手で両眼を拭う。

イリハはエリイのようにゆっくりと、緩慢に喋る姉だった。

だから、チイも気を遣ってゆっくり喋ったりしていたけれど、それでもチイはイリハのことが大好きだったし、「チハヤ」という名前が気に入らないと話したら「チイ」という愛称を付けてくれたのだった。イリハだ。

今がどんな状況で、自分の首に懸賞金がかかったのかは想像がつかない。

橘大十郎という男とその息子は醜悪極まっているし、裏社会にだって顔が効く存在だ。

今更自身にしようもない復讐を願っているのかそれともまた政治の道具として自分を利用しようとしているのかは知らないが、少なくともその蛮行に、チイは仲間たちを巻き込みたくはなかったのだ。それに。

「——誰が愛してくれんだよ、金が欲しいって思いから生まれたELダイバーなんてさ」

チイが真つ先に虐待されそうになったのは、それが理由だった。当初はこんなスレた喋り方なんてしていなかったし、イリハをちよつと快活にした程度のチイだったが、何か欲しいものはあるかい、と問われて、「私、お金が欲しいんです！」と大十郎に答えた時の、彼のまるでゴミでも見ているかのような目は、今でも忘れられない。

それがチイの生まれた理由なのだからどうしようもないのだが、考えてみれば金に汚いELダイバーなんて確かに可愛くない。

「……きつとあのオツサンも、サラねーちゃんみたいな可愛い子を期待してたんだろうな……」

そして姉のイリハはその条件をクリアしていても口数が極端に少なく、喋ったとしても声が小さいために、彼らの「お人形」として、チイとイリハの姉妹は失格だったのだろう。

だからといってチイは橘大十郎を許すことなどないし、その息子についてもそいつらに引き合わせてくれやがったGBNの運営、その背後にいる経営陣についても同様だ。

なら、どうして自分はモビルドールの姿なんて晒してしまったのか。

チイはずつと、その問いに対しての答えが見つからずに悶々としていた。

アキノが不公平な条件で引き抜かれるのが我慢できなかったのは確かだ。そしてアイカとエリイが必殺技を当てなければ、あのリヒトに勝つことはできなかったのもまた確かだ。

だが、回避盾をやるに当たってどうしてグラスランナーのままではなく、モビルドールへの変身という行動を取ったのかが説明できない。

もつともらしい理屈は捻り出せるが、それだけでは何かが欠けているような気がしてならないのだ。

「……わかんねえ、わかんねえよ、アキノ……アイカ……エリイ……」
チイはコックピットで周囲を警戒しながらも、脳裏を常に埋め尽くしている答えの出ない問いかけに、一人涙を零す。

そして自身が泣いていることにさえ気づかないまま、答えを探し続けるのだった。

ポークは激怒した。必ずあの邪智暴虐の運営を除かねばならないと思う訳ではないが、それはそれとしてヴィジランテに回ろうとした。

ポークには政財界のことがわからぬ。しかし己の生きがいったったカップリングを眺める趣味については豚一倍敏感だった。

衛星軌道上、本来ならヴァルガにおいて最も不人気な宇宙ステーションも星が三分に敵が七分という訳の分からない状態になっているが、それはそれとしてここにいれば何となくアイカに刺してもらえそうな気がするし、彼女の敵も倒せそうな気がしたのだ。

「どんな理由だよ……」

「豚の勘よ、過疎コンテンツに人が集まり始めるなんてくそげのお祭り、そして騒動あるとこに『リビルドガールズ』ありなのよ」

相方であるアオヤギが新調した乗機、「ヴェルテクス・ドーガ」——リゲルグとヤクト・ドーガのミキシングである——に持たせていたビームガトリングでタチバナ商会の傭兵を破壊するのに負けじと、ポークは彼の弾幕で足を止めた敵をZガンダムNZCのシールドに埋め込んだ拡散メガ粒子砲で撃ち抜いていく。

ポークはくそげにも人一倍敏感である。

そしてこの明らかにヴァルガ慣れしていない奴らが大量に湧いてきたということはどこかの誰かさんがブレイクデカールののように傭兵を雇ってばら撒いたと考えていいだろう。

別にゲームの運営だとかそういうのが全て潔白であるだなんてポークは考えていない。

だが急に札束を投下してその力だけで自分たちの遊び場を荒らさ
れようとするのことに對して憤りを感じる程度にはこのゲームを愛し
ていたし、そんなのと組まざるを得ない経営陣の判断には絶望してい
る。

ポークはそういう女だった。白のザフト制服に身を包み、顔部分の
アクセサリには相変わらず電子掲示板、そこにしよんぼりとした感じ
の顔文字を浮かべて突撃していく。

ヴァルガを地獄たらしめているのはモヒカンだろうが一般ダイ
バーだろうが少なからず何かしらの練度が高いことに他ならない。

ならば、このどこかの誰かさんに雇われた動きがぎこちない傭兵た
ちは外部から来たお客さんだ。

「よく来たわね、歓迎するから十四に行つて？」

「何企んでんのかはわかんねえけどせっかくの祭りだ、踊らにや損だ
な！」

そんなくそげを忌避する女とどこことなく体育会系で脳筋な男が組
んでいる理由も連携ができている理由もわからないが、それはそれと
してポークとアオヤギは、傭兵の駆るレジェンドガンダムを、そのド
ラグーンを躲しながら十字砲火で淡々と魔法の数字十四送りにして
いく。

向こうでは明らかにバレバレな「AVALON」と「第七機甲師団」
と「GHC」が三つ巴の戦いを繰り広げていたはずだが、その戦況は
どうやらまたも変化を迎えたようだ。

無言でZガンダムNZCをウェイブライダー形態に変形させると
ポークはアオヤギを手招きしてその背に乗せながら、新たなくそげの
気配に満たされた戦場予定地から離脱していく。

「あれは勝てないわね、はまじくそげ」

「お前本当喋り方以外はまともだよな」

「振り落とすわよ、あやまって？」

「悪かった」

背後を振り返ったアオヤギの視界に映ったものは、確かに一瞬でも
ポークの合図に気付くのが遅れたら、そして今その背から振り落とさ

ればテクスチャの塵になりかねない、「太陽」そのものだった。
ヴァルガにまともな雨など降ることはない。

雨が降る直前にはいつも光が走って、周囲が更地になっている。それが日常なのだ。

しかしそれにも限度というものがある。

林立する「光の柱」に飲み込まれて破壊されていく「GHC」の戦艦群やそこから発進した兵隊たちを見て、二人は降臨した太陽の化身、その威容に思わず背筋を震わせていた。

『クジヨウの坊、少しばかり遊びがすぎるのう』

誰が呼んだか、半神半魔。その高い実力は一桁の神々と同じであるのに、敢えて個人ランキング10位という位置に留まり続け、自らを一桁に上がるための最後の壁と規定している女性——「テンコ」はその大戦争に天照の威容をもって介入しながら、悪戯っぽく唇を動かして言葉を紡ぐ。

テンコの心境もロンメルと同じようなものだ。

悪役を買って出たいわけではないが、この戦いの背後に潜むロクデナシ共をあのアトミラールや桜宮のお嬢様が確実に処理してくれるとあれば、戦力の不均衡というのはイベントとして美味しいものではない。

なるべく火をつけてボヤ騒ぎを拡大しつつ傭兵を処理しながら膠着状態を作り出す。

ある種運営が自ら胃痛の種を作っているのにも等しい行為だが、それでもあのE.L.ダイバー、チイとやらを黒幕には渡さず、その鼻っ柱をへし折りながら多くの人間に注目してもらおうことで内々の処理を不可能にしようかミカゼアタックめいた強引な手腕は、テンコとしても嫌いではない。

ランカーの血がたぎるままに、「第七機甲師団」vs「GHC」、「バロノーク連合」に第七機甲師団の助っ人として参戦したテンコは愛機の九尾を展開すると凄まじい速度でチャンプのマグナムハウンドへ食らいつき、ビット攻撃と格闘戦を巧みに使い分けたドッグ・ファイトを繰り広げる。

「ほう……テンコ様がいらっしやるとは、この宇宙海賊風情も随分と高く買われたものです」

『お主はそれを本気で言っておるのか遊んでおるのかたまにわからなくなるのう……じゃが』

「そう、此度のこれは本気の遊び！ ならば私も今度は有志連合を束ねるのではなく、この舞台で役者として踊らせてもらおうということだ！」

『うむ……それは妾も同意するところ、ならば今宵のアンコールまで付き合ってもらおうとしようかのう！』

ロンメルには「GHC」の対処を依頼しつつ、テンコとキョウヤは流星がでたらめな軌道を描いて宇宙を駆け抜けていくとしか表現できなない、凄絶な速度での戦闘を心ゆくまで楽しんでいた。

チャンピオンと「一桁への壁」が戦っているという映像が撮れているなら、このヴァルガに来ていなくなつたつてこの騒動を知る人間は指数関数的に多くなつていくだろう。

運営公認G-Tuber、「ザクムラ」は愛機である【ワークスザク】にアウトフレームが用いているガンカメラを持たせ、余波に巻き込まれない位置に陣取りながらその映像を記録に収めていた。

ザクムラは運営側の人間だ。当然ELダイバー虐待事件の顛末も全て知っている。だが、資本の力は強大だ。

故に日和見主義の現経営陣とタチバナ商会の暴虐には手を拱いていたのだが、それにGMと一緒に奴らへと一泡吹かせられるチャンスが巡ってきたとなれば躊躇も遠慮も必要などあるまい。

元ランカーとして意地でもマグナムハウンドと、テンコが駆るその太陽の化身にして威容の具現化たる、ガンダムレギルスベースとした【天道天照】がぶつかり合う様をカメラに収めるべく、ザクムラは食らいつく。

それは生身で見るガンダムAGE、メモリーオブエデンの再現だった。

チャンプがワイヤーフックがレギルスビットを叩き落としたかと思えばテンコの背後に潜んでいたFファンネルもまた叩き落とされ

て、互いに武器を持ちながらも時折ステゴロで殴り合うという様は最早、優雅という言葉からはかけ離れているにも関わらず美しい。

撮影のために引いてこそいるとはいえ、ザクムラが近くまで食らい付けてないのなら自分たち一般ダイバーはどうしようもあるまい。

ポークとアオヤギはその一部始終を見届けながらも、「GHC」に對抗して作られたと思しき「アドラステア」の群れが、艦隊に結構な損失を出した「GHC」宇宙軍の死体蹴りをするのを阻止すべくアドラステアへの突撃を敢行する。

タイヤに突っ込むのではない、狙うのはブリッジだ。

アオヤギはポークから借り受けたハイメガランチャーを構えると肉薄した瞬間を狙って、アドラステアの艦橋を撃ち抜き、そのままポークの背に乗って一撃離脱を試みる。

あの「第七機甲師団」を相手に劣勢だった「GHC」も、最後に残された改ラー・カイルム級戦艦「山城」を中心にして艦隊を再編し、一か八かの拡散ハイパーメガ粒子砲を、アドラステア艦隊——タチバナ商会の艦隊へと撃ち込んでいく。

「姉様の艦は沈んでも……私の誇りはまだ死んでいない！ 思い知れ外道共！」

そして、「GHC」の立て直しがここまで上手く行った理由があるなら、彼女たちの実力もさながら、さつきまで本気の戦いを繰り広げていたはずの「第七機甲師団」が寝返って、タチバナ商会旗下の艦隊へとその矛先を向けていたというのもまた大きかった。

『有志だったんなら味方じゃないのかよ!? なんで「第七機甲師団」が撃つてくるんだ!?!』

「君は一つ勘違いをしているね」

沈められたアドラステア級から命からがら逃げ出した三機のザンスパインに取り囲まれて恨み言を吐かれながらも、ロンメル表情が揺らぐことはない。

いつ何時も冷静に、時には道化の皮を被りながらもその下には硬い鉄面皮を備えているからこそこの戦場では生き残れる。

ミノフスキー・ドライブの高機動は恐怖だ、だがあまりにも動きが

直線的すぎて全てがバレバレなのだからどうということはない。

置き撃ちでザンスパインの一機を自らその弾幕に突っ込ませながら、ロンメルは特になんの感慨もなく動揺したもう一機を淡々と処理して嘆息する。

『勘違いだと、一体何が——』

「我々は有志であるが連合ではない」

つまり互いのデメリットが衝突すればぶつかり合うのもまた必然とばかりに、展開した膝部のクローで残ったザンスパインも破壊すると、ロンメルは「GHC」の残存艦隊に合流して暫定的な支持権を「山城」の艦長から譲渡されたのをいいことに、アドラステア艦隊の漸減を試みた。

そうだ。運営は最初から有志連合を結成するとは一言も言っていない。

ただ、チイというELダイバーを確保するための有志が欲しいといただけで、そこに有志間の結束であるとか連合であるとかといった細かなアライアンスなど存在していないのなら、今の今まで味方だった人間が突如として敵に回るということも十分に考えられるはずだ。

それを考慮していないあたりタチバナ商會が三流なのかそれとも運営とアトミラール、そしてかのバエってるお嬢様が一枚上手だったのか。

ロンメルの指揮によってその艦隊を立て直した「GHC」は、ほとんどそのロンメルのせいで物量で劣る状況にこそあつたが落伍する艦を一つも出さずに、アドラステア艦隊と撃ち合っていた。

恐らくアトミラールが近いうちに本命を連れて上がってくるだろう。

眼下に見える水の星と衛星軌道をまたたく光を一瞥し、ロンメルは秘密通信ウィンドウを開いてクルトとコンタクトを取る。

「クルト、しばし指揮は任せて大丈夫か」

「はっ、大佐殿……もしかしてあれをやられるのですか……?」

「うむ、このままでは一方的な消化試合なのでね、画面の向こうにいる

GBNプレイヤー以外にもこの『祭り』を知ってもらうことが運営の目的ならば私は従うさ」

目を伏せ、いかにも冷静を装っているように見えるがその尻尾が左右に振れているのを隠しきれないロンメルに苦笑しつつも、任されませんでした、と、クルトは指揮を引き継いだ。

確かにあのアドラスティア艦隊の練度であればロンメルな手管を尽くせばただのおやつで消化試合だ。

自分の指揮でもそうするだけの自信はあったが、決してクルトはそれを表に出さず、「アリア」が、奇しくも自分と似たようなリアルを持つ少女が願った「タチバナ商会の全滅とヴァルガ民の漸減を成し遂げつつ戦線を膠着させる」という矛盾極まる難題を遂行すべく、眉根に深くしわを刻みながら号令をかける。

ゴー・アヘッド。全軍突撃せよ。

そうして宇宙には戦いの光が瞬いて、決戦の開始を、いよいよ本丸を迎え入れる準備は整ったとばかりに、地上の軌道エレベーター付近の戦いも優位に進んできたという報告が軌道エレベーター施設の一部を乗っ取ったミツルギの部下たちからクルトへと、そしてロンメル、チャンプ、テンコ——錚々たる面々に、伝えられるのだった。

第五十九話 「その日、流星は翔（と）んでくりビルドバンガード、ミッション開始！」

ハードコアデイメンション・ヴァルガにおいて宇宙へ上がる方法はいくつがあるが、現実的なのは北西部にある軌道エレベーターを使うことだろう。

次点で、南西部にあるマスドライバ―基地を使つての大気圏離脱が選択肢に挙げられる。

そのどちらもヴァルガにおいては比較的不人気なエリアで、マスドライバ―基地に関しては戦闘のロケーションとしてガンダム的に申し分ないため戦闘狂のファイターやモヒカンと遭遇する危険があることは否めない。

だがその点、辿り着くまでは大変であつたとしても辿り着いてからは炭鉱夫以外からは不人気極まつている軌道エレベーターは極めて宇宙行きという目的を達成するだけなら簡単なものだ。

それは普段なら、という条件が付け加えられるが。

一応、タチバナ商会に雇われた傭兵たちも決してバカではない。

他のゲームなどで名を馳せているからこそ大資本は金を積んででも彼らを招聘したのだろうし、この無制限フリーバトル区域で自分たちの探索を優位にするのであれば軌道エレベーターを抑えることは戦略的にも極めて有効な手段であることに違はない。

そして南西部マスドライバ―基地は「獄炎のオーガ」とクオオンの死闘によって何隻かのアドラステアを宇宙に送りながらほぼ壊滅状態になつたのも、商会側の兵士たちにとっては朗報だ。

一応アトミラルの「天城」をはじめとした改装戦艦群は単独での大気圏離脱も可能としているがその代償は大きいため、マスドライバ―が大方破壊し尽くされたというのは致命的だった。

故にこそ、商会の兵士たちは今現在ヴァルガの宇宙へ上がるための唯一の足がかりとなっている、北西部軌道エレベーターを制圧してそこに戦力を逐次投入するという策を採っているのだが――惜しむら

くは、彼らが観察眼に優れていたとしても、ガンダムをそこまで見ていなかったことだろうか。

地上に恐らくチイはいない。

混沌とした乱戦エリアがそこかしこに形成されて、さらにハイランカーという災厄が立ちはだかっているこの地上では、さしものチイとて生き延びることはできないだろう、というのがエリアからアイカに伝えられた見解であったし、それはアイカたちも同意するところだった。

そしてアトミラールの砲撃、ジャバウオックのお散歩とオーガとのガチバトル、そしてエリアとマギーが奏でる死の舞踏などなどの要因で防御力に乏しいアサシンやスナイパーは殆ど全てが排除されたことで、アイカたちはヴァルガにおいて安全なエントリーに成功していたのだ。

とはいえ。

「えいつ☆」

『な、何故バレて——ぐわあああつ！』

例外はどこにでもいる。自身を狙う殺意を嗅ぎつけたアイカは一足先に回避行動を取りながらコアバスターライフ・フェアリーを生き残り、潜んでいた狙撃手——あの「回収屋」ピーターの弟である「ジャンクメイカー」ピーターの駆る都市迷彩が施されたケルデイルガンダムサーガを撃ち抜いた。

強いて理由を挙げるなら殺意というか銃口がこっち向いているのがバレバレだったから、とほぼ野生の勘のようなものと経験でアイカはそれを察知していたのだが、答える義理も義務もないのでスルーを決め込んだ。

現状のヴァルガ地表面における乱戦エリアとして一番規模が大きいのはやはり北西部軌道エレベーターだろう。

エレベーターを死守するために無限湧きのごとく逐次戦力を導入するタチバナ商会の物量とアトミラール擁する「GHC」とそれに従うヴィジランテたちが一進一退の攻防を繰り返しているため、迂闊に近づけば死が待っている。

かといって、空白地帯が出来上がっている南西部マストライバー基地はそれを上回る危険地帯だ。

ヴアルガにおいて空白が出来上がるといえるのは、不人気エリアを除けば「災害」と出くわしたかその災害が今も暴れ続けているかのどちらかでしかない。

漁夫の利を狙っているのか空白だから安全だと勘違いしたのか、誘蛾灯に群がる夏の虫のごとく、散発的に南西部を目指して移動するダイバーたちが、エリイの展開した広域レーダーには捕捉されているが、その全てが南西部に辿りついた瞬間にシグナルをロスさせているのだから、そこにはいまも災害が君臨しているという認識でいいだろう。

そうならば、アイカたちは宇宙へと上がる足を全て潰されたことになるのか？

その問いに答えるのならば、それは否だ。

マストライバー基地と穀倉地帯跡地が南部の西と中心であるのなら、その東側には更なる不人気を博しているエリアがある。

ハードコアデイメンション・ヴアルガ、南東部宇宙港。

その名前から想像すれば一番まともな宇宙行きに適した場所かのように聞こえるが、その実態は果たして、映像作品「機動戦士Ζガンダム」に出てきたケネディポートをモチーフとしているため、旧式のシャツルでしか宇宙に上がれない——要は飛んでいる間に撃ち落とされるために宇宙港なのに一番使えない場所、というのがダイバーたちの公式見解だった。

加えてスタート地点からとにかく距離が遠く、遮蔽物のない穀倉地帯跡地周辺を通らなければならぬ以上、モヒカンとのエンカウント率が極めて高いために、何よりも効率を求めてピッケルを振るう炭鉱夫たちがそんなリスクを許容するはずもない。

そして、だからこそモヒカンたちはその不人気エリアを拠点として陣形を組みながら、都市部へと毎日侵攻しているのだが、類を見ないお祭り状態である今日もそれは変わらないらしい。

『ピャツハー！』

実に世紀末な叫び声を上げて、鴨がネギどころか鍋とコンロと調味料まで持つてきてくれたとばかりに三人で平原へと突出する「リビルドガールズ」改め今だけは「リビルドバンガード」を葬り去らんと、その数実に八十とどこから生えてきたのかわからない新メンバーを加えて、モヒー・カーンの軍団はアイカたちを追い詰めんとしていた。

「……アイカさん……」

「わかってる、エリイちゃん」

コアバスターライフル・フェアリーをぶつ放したのであれば、ある程度モヒカン共を排除することは可能だろう。

だが、戦いの本番は宇宙に上がってからであって、こいつらには本来構っている暇などどこにもないのだ。

「私のミネルヴァガンダムも今は戦えません、そうならば……」

『一巻の終わりってこつたるオ!? 散々俺様たちに恥かかせてくれやがって……そこで素直にくたばるとけやピンク色共! いくぞテメエら!』

『ヒヤッハー!』

バイク型のサポートメカに搭乗するモノアイの機体が、アイカのフェアライズガンダムではなく、明らかに何かを温存していると見た、エリイのリビルドウォートとそして、背部に物々しいユニットを接続したアキノのミネルヴァガンダムから破壊すべく、ヒートホークを掲げながら接近してきた、刹那。

「今だウツキース! そこから叩いてくれ!」

「りよ、りようかああああいッ!」

アイカたちが三手に分かれたかと思いきや、その背後から光の奔流が二つ重なり合って飛来して、哀れにも反応が遅れた新参モヒカンである二十名の機体を呑み込み、テクスチャの塵へと帰さしめた。

そう、アイカたちだけならば、確かに鴨がネギと鍋とガスコンロと調味料を背負ってやってきたようなボーナスステージなのだろうが、その背後には、確かに何機かのガンプラが編隊を組んでモヒカンたちの迎撃に当たっていたのだ。

「フハハハハ!!」 モヒカン諸君、今日のお相手は彼女たちではない……我々、アライアンス『リビルドバンガード』だと心得ていただこう!!」

『鳥頭に全身タイツだア!? お前ファッションセンスどうなってんだよ!?』

閃光の正体——フォース「名機アルビオン」を率いるハマモリのビーム・マグナムと砲手であるウツキースのロングレンジビームキャノンによる遠距離砲撃を更に目眩しとして、その全身タイツに鳥頭という変態極まりない男、「ハート」を筆頭とした変態の編隊、「パロツツ・パーティー」が自慢の変形ゲロビで先頭集団の護衛であり鉄砲玉たるモヒカンたちを駆逐していく。

「失礼な！ 我々はただ鳥を、この空を、翼を愛する者たちよ！」

「モヒカン肩パッドだつてファッションの一つだろう！ それを愚弄されればどんな気持ちになるのか想像がつかんのかね！」

「しかし良いモヒカんだ、シャモを彷彿とさせるのもポイントが高い」「うむ、我ら『パロツツ・パーティー』、レース以外の戦いはしない主義だが、『リビルドガールズ』には返しきれない恩がある！ 故に助太刀に参ったまでよ！」

『いっぺんに喋って正論で殴ってくるんじゃねエよ!?』

カーンが困惑する通り、この変態の編隊の中身は極めて温厚で紳士的な、ただレースを、鳥たちの見る空を愛するがあまりにちよつとだけおかしくなってしまっただけの集団だ。

そしてそのふざけた格好と珍妙なカスタマイズが施されたガンブラだとしても彼らにとつてそれはおふざけでもなんでもなく、大真面目に愛を注ぎ込んだ結晶であることには違いない。

それがどれほどGBNにおいて重いのか、カーンは瞬く間に目減りしていく部下たちを見て額に脂汗を浮かべながら、虹色に発光して首をぐるぐると回して自身らの上空を旋回するパロットスクランブルと、対空砲火を阻止するがごとく暴れ回るキモ……独特なモビルアーマー、ドードラブロズゲーを睨み付ける。

元々カーンたちはヴィジランテの側に着くつもりだった。

ヴァルガはどんな形であれ自分たちの遊び場だ。ELダイバーだかなんだか知らないが、そんなくだらない事情で遊び場を荒らしに来るなら全てポイントに変えてやろうと決めていた程度にはこの場所に愛着がある。

しかし長い物には巻かれると、金は命より重いと、そんな言葉があるように、タチバナ商会からコンタクトを受けて金銭を授受していたカーンたちは有志たちの側に加わることになった。

つまりはそういうことだった。

手を挙げて、カーンは通信ウィンドウ越しに連絡を入れる。

『せ、先生エー！ 奴らです、「リビルドガールズ」は南東部宇宙港を目指してやってきています！』

『ふふ……慌てていて可愛いわね。いいわ、暇だったから……ここにも戦力は待機させてるし、四百も寄越せば十分でしょう』

先生、と呼ばれた赤毛を三つ編みにした女性——「サキ」は小馬鹿にしたような笑みを浮かべてカーンとの通信を切ると、南東部宇宙港を護衛するために残っていた総勢千の軍勢のうちその四割でもって、「リビルドバンガード」を圧殺することを決定した。

そして、自身もまた出撃することでその体制を盤石にする。

黒と赤で彩られたストライクフリーダムに乗り込みながら、サキは密かにほくそ笑む。

タチバナ商会とやらの思い入れがあるわけでもなければ、運営の掲げる保護とかELダイバーとかそういう謳い文句に興味があるわけでもない。

だが、個人ランク38位という自身の腕前を見込んで、脂汗を流しながら土下座をさせられてまでも頼み込んできた橘忠治の姿があまりに滑稽で、そして、そんなつまらないことにこだわって、自身を雇っておきながら閑職に回すという小物ぶりが面白かったから、今回の作戦に傭兵として参加しただけだ。

ああ全く、馬鹿馬鹿しい。

サキはそう思っていたのだが、本命がこの基地の設備を利用しようとしているのは中々に鋭いと、そう思って愛機を最前線へと出撃させ

ていったのだが、それこそが間違いだったと彼女は気付かなかった。「早くオーガを止めて、そしてE.L.ダイバーの子を助けないと……!」若い義侠心と義務感に駆られた影が一つ、サキと入れ替わる形で、大気圏から南東部宇宙港へと舞い降りる。

完全に失敗だった。オーガなら確実にチャンピオンがいる宇宙を食事の場を選ぶと思っていたのだが、地上に「ジャバウオックの怪物」が現れたことでそっちを優先させてしまったらしい。

舞い降りる剣の主たる少年——「ビルドダイバーズのリク」はこの前クオンの配信をオーガが見逃してしまった原因が己にあることを悔やみつつ、その新たななる剣の矛先を地上に陣取る六百から一つ引いた軍勢へと向ける。

「トランザム……インフイニティ! そして、ハイマツトフルバーストだ!」

自身が救い出し、いまも仲睦まじく日々を送る相手である「サラ」を彷彿とさせる白と紫がかった青を基調としたその機体——【ガンダムダブルオースカイメビウス】はハイマツトフルバーストモードとトランザムインフイニティという規格外の合わせ技でもって、施設の設備を傷つけることなく、的確に動揺していた六百引くことの一つのコックピットや手足などをもぎ取って、撃ち漏らした機体をビームソードで全て掃討してから、目撃証言のあった南西部マスドライバー基地へと進んでいく。

「俺には、君たちがどんな事情を抱えているのかわかんない……でも、チイは君たちの仲間なんだから、『リビルドガールズ』……!」

俺にできるのはこれぐらいだから、後は任せろ。そうとでも言わんばかりに六百から引いて一つを除く有象無象を殲滅した上で、自身のミツシヨンを達成するべく蒼天の剣は無限の軌跡をその空に刻みながら戦場を駆け抜ける。

そして、「パロツツ・パーティー」の奮戦と「名機アルビオン」の連携によってその数を二十にまで減らしていたモヒカンたちの元に増援の四百と一つが到着したのはその時だった。

『残念ね。貴女たちもおしまい……!』

それだけ眩いたサキは躊躇なくハイマツトフルバーストモードを起動して、モヒカンや自身が従える部下が巻き込まれることも厭わずに、全武装一斉射撃という大技を「リビルドバンガード」たちに向けて撃ち込んだ。

「うおおおおっ!?!」

「クソっ、ヨネヒトお!」

「これは……耐えきれないっ……! すみません、アイカさん!」

『ヌヴオオオオオオ!』

個人ランク二桁が徹底的に作り込んだストライクフリーダムの一撃は、果たして百機単位の味方を巻き込みながらも「名機アルビオン」と「パロツツ・パーティー」、その全てを壊滅させることに成功していた。

いや、味方など最初からサキにはいない。ただ後ろから撃たれたときの反応が面白いから、ボウリングのピンは多いに越したことはないからという破綻した思考回路が導き出した結論で、いたずらに四百という数を投入してただけの話だ。

『せ、先生エ!? 話がち、違……』

『違わない。このディメンションの掟が弱肉強食といって初心者狩りをしてたのはだあれ? ふふ……それに、有志であって私たちは連合じゃない、金を積まれた分だけ仕事をすればいい、違う?』

『あ、ああ……っ……』

何やらカーンが爆散する中で絶望していたが、それ以上にアイカの胸中は最悪だった。

ハイマツトフルバーストに巻き込まれて百二十の敵が減ってくれたのはいいが、残り二百八十の中にあのストライクフリーダムがいることが何よりも厄介だ。

自分たちをロックしなかったのは見せしめということなのだろう。この作戦は、サイコ・キャプチャーを背負っているエリイとそして、アキノもまた完徹フルスクラッチで完成させた「光の翼」、漫画作品「機動戦士クロスボーンガンダム 鋼鉄の7人」に登場する「スピードキング」が装備していた、マザー・バンガードの帆を改装したユニツ

トが破壊されればそれで御破算だし、何より作戦の実行にはチイに追いつくためにアイカの存在も必要だと、誰一人欠けても破綻する綱渡りだったのだ。

乱数の神様はここで屑運をぶつけてきたのか。

「二桁ランカー……勝てる気はしないけどっ！」

ビルドボルグを抜き放ち、混乱する有象無象を尻目にアイカがサキと相対し、最悪アキノが生き残ればなんとかなる絶望的な可能性に賭けて、差し違えてでもサキを止めようとしたその時だった。

「おつとお！ か弱い女の子泣かせちやあ、悪党つてもんだぜ！」

遙か上空から、太陽を背にする形でその機体はビーム・ワイヤーを伸ばして、ストライクフリーダムとビームライフルを絡めとった。

「おれには彼女たちへの義理も義務もない……だが、立ち上がろうとする者の味方にぐらいはなれるんだな、これが！」

『あら……元マスタイバーのアクセル君、そして歌歌いのグラウカツツエくんだったかしら。とりあえずは歓迎するわね』

スーパードラグーンを起動し、奇襲を仕掛けたグラウカツツエをあしらいながら、指先に仕込んだビーム砲でアクセルのリヴァールガンダム・ソヴァールを牽制しつつ、サキは近接戦の用意を固める。

「そうだ……義理と義務があるのは俺の方だ！ 食らえ、ミスリルス トリイイイムっ!!!」

その虚をつく形で、アクセルが一旦身を引くと同時に、銀の閃光がサキのストライクフリーダムを呑み込めんと彼方から飛来してくる。

しかしそれはすんでのところ、サキが展開したビームシールドに防がれてしまったが、それでもその数秒間彼女の足を止めることに成功していた。

「まさか、リヒト……!?!」

「何をボサツとしてるんだ『リビルドガールズ』！ お前たちがやるべきことは、あの銭ゲバ女を助けることだろう!?! こんなところで足を止めることじゃないはずだ！」

その機体には確かに、アイカも、エリイも、そしていまその名を呟いていたアキノも見覚えがある。

先日、銃火と剣を交えた相手であるリヒト・フエーンミッツの操る銀の愛機たるガンダム・エリユシオンだが、その機体から銀の意匠は取り払われて、リヴァールサルガンダム・ソヴァールとよく似た白と金のツートンカラーにその装いを改めていた。

「……こうなったのは俺のせいだ、だから許してくれなんて言わない！でも、せめてケジメぐらいはつけさせてくれ！」

「リヒト……わかりました、貴方の協力に感謝します。アイカさん」

「はい！ エリイちゃん、一気に戦場を抜けちゃうよっ☆」

「……わかり、ました……っ！」

リヒトとアクセル、そしてグラウカツエと「イグナイターズ」という精鋭たちに背中を任せて、スーパードラグーンによる弾幕砲火——地上でも使えるほどの作り込みが施されているものだ——の、もはや細い照射ビームといった風情の弾幕を掻い潜り、「リビルドバンガード」は、南東部宇宙港へと向かっていく。

『あら、逃げられちゃった……』

「よそ見をしている余裕などないんだな、これがな！」

『ふふ、ちゃあんと見てるわよ、アクセル君』

呟いた通り「リビルドバンガード」を取り逃がしたサキではあったが、タチバナ商会への義理なんて宇宙港の護衛で果たしたし、正直なところ彼女たちを止める理由もなかったため、彼女はプリミティブな衝動に従って、より自分に近い者たちとの死闘を楽しむことを選択した。

太陽を背にした奇襲とはいえ、Aランクながら自分のビームライフルを奪ってみせたあのグラウカツエも見込みがあるし、ちよつと若すぎるきらいもあるけれど、中々の必殺技を見せてくれたリヒトという彼も悪くない。

最近のGBNは退屈だった。だからこそ思い出すのだ、第二次有志連合戦で「ビルドダイバーズ」の味方となって暴れ回っていた日々のこと。

あれほど合法的に暴れることができる場所なんて「大戦争」やレイド戦ぐらいしかないと思っていたらこの猿山で、ハードコアテイメン

シヨン・ヴァルガで大戦争に匹敵する祭りが開かれるとなれば、その祭りを何より優先したいのがダイバーというものだ。

操り人形の糸をたぐるように指先に仕込んだビーム砲で一人の魔物にして英傑、二人のハイランカーを翻弄しながら二桁の怪物は、押し寄せてくる喜悦に唇を歪めて、静かに笑うのだった。

アイカたちが選んだ大気圏突破方法は、そのまま漫画作品「機動戦士クロスボーン・ガンダム」を参考にした、機体をシャトルの先端に固定しての大気圏離脱だった。

だが、それだけでは打ち落とされる危険と速度、そしてエリイが大気圏離脱のためのバリアを持っていないということで、アイカの案を一部採用しつつ、現実的な形に落とし込んだのが、アキノが狂気の完徹スクラッチで作り上げた「スピードキング」の翼と、そこから伸びるEガンダムのビーム・バリアを複合させたユニット、「アテナの衣」だった。

アイカとエリイはアキノを挟む形でそれぞれの愛機の手を「ミネルヴアガンダム・アテナイ」とつなぎ合わせていた。

そして「クロスボーンガンダム」の劇中同様に弾頭部分を切り落としたミサイルの先端にミネルヴアガンダム・アテナイを固定して、それをブースター代わりに利用した上で光の翼を展開して大気圏を離脱する。

スピードキングは単体であったからいいものの、今回は二機を抱えて離脱しなければいけない以上、それは苦肉の策とでも呼ぶべきものだ。

だが他に案がなければやるしかない。アイカもエリイもアキノも、覚悟を決めた上での作戦だった。

ヴォアチュール・リユミエールを利用して打ち出してもらおう案もあるにはあったのだが、アキノは完徹と魔剤に頭がやられていてそれが浮かばなかったし、アイカはサイコ・キャプチャーを作り上げるのに全ての力を使い果たしていて、エリイは現実では目が見えないという都合でその案はボツとなったのだ。

何故か南東部宇宙港を護衛していたはずのガンプラは全て残骸となっていたことで、ミネルヴァガンダム・アテナイの固定作業と、アイカとエリイもミサイルから振り落とされないように、しかし光の翼を展開したときには離れられるような簡易的な固定を行って、射出までの時間を待つ。

この南東部宇宙港のモチーフとなつたのはケネディポートだったが、ここはGBNだ。ならば、そういうシチュエーションもやりたいよねとばかりに複数のガンダム作品の景色が共存していることは決して珍しくない。

——乱数の神様。

アイカは祈る。決着は人間の手でつける、などと大層なことを言うつもりはない。

ただ、飛翔した先にチイがいること、それだけを願って、アイカとエリイ、アキノは歯を食いしばってミサイル射出の衝撃に耐える。

そうして発射されたミサイルは、それを阻止しようとどこから飛んできたビームに当たることもなく、見る見るうちに三人を高空へと運んでいった。

「加速度臨界点……ミサイルをパージ、光の翼に移行します！ アイカさん、エリイ！」

「……はいっ、アキノさんっ……！」

「アキノさん……お願いします！」

「絶対にチイを連れ戻す……だから、今一度！」

——ビーティスさん、貴方の翼をお借りします。

アキノが呟くと同時に、ミネルヴァガンダムの背部に展開されたユニットは帆のような形を成す「光の翼」を展開し、同時に前面にはミノフスキードライブで出力を増幅したビーム・バリアが開く。

「待っててね、チイちゃん……！」

帰る場所はまだ作つた。チイが稼いでくれたお金があつたからだ。

アイカはきつく目を瞑り、滲んできた涙を拭いながら宇宙へと飛翔する。

エリイもまたGに耐えながら、チイの無事を敬虔な信徒のように、

いるかどうかわからない乱数の神様へと祈り続ける。

果たして、無謀に見えた大気圏離脱は成功していた。

アイカが瞑っていた目を開ければ、そこには見下ろす水の星と、そして無数の戦艦やガンプラの残骸が漂っている漆黒のソラがある。

そして、その残骸たちを作り出した砲火はまだ煌き続けている。

よりにもよって、アリアによる事前の報告から、宇宙であればそこにいる可能性が高いとして、目標としていた場所——採掘エリアのある月面近くに、巨大な乱戦エリアは形成されていた。

課題は未だ山積みだ。しかしその日、リビルドバンガードは確かに、蹉跌から立ち上がり、流星となって翔びあがったのだ。

決着をつけるために。仲間を、その手に取り戻すために。

第六十話 「誇りと勇気の御伽噺（フェアリー・テイル） 〜再び繋がるブーケトス」

ヴァルガの宇宙は、いつにない混沌に満たされていた。

ロンメルと入れ替わり立ち替わりで現れた謎の男、キャプテン・ジオンはその愛機であるレージオンガンダムが掲げるジオニツクソードで、タチバナ商会の艦隊を薙ぎ払い、アドラステアをいとも容易く一掃してみせる。

『ば、バカな！ アドラステアだぞ！ プロに作らせたんだぞ?!』

「他人に作ってもらったガンプラに感謝もせず、ただ政治の駒として利用するだけの愛なき傭兵たち……迷惑だ、とてつもなく迷惑だ！」

『この、昼飯全身タイツ——』

「守ろう心の南極条約！ マナー違反を通り越し、愛も感謝も持たぬ者にはアクシズではなくこの剣を落として決着としよう！」

最後に残っていた「リシテア」を、ジオニツクソードのハイメガサーベルモードで一刀両断し、キャプテン・ジオンは生配信をしているハロカメラに向けて親指を立ててみせた。

そして、今度は「ビルドダイバーズのリク」の介入によって何とか被害を免れたマスドライバーを使って宇宙に上がったきた、改ドゴス・ギア級「天城」とその随伴艦である「赤城」、「加賀」の三隻が、キャプテン・ジオンの周囲に集まっていたクルトたち「第七機甲師団」のメンバーが誰一人欠けていない——のではなくなんか一人変なのが紛れ込んでいて肝心のロンメル隊長がいないことに肩を落としてつつも、主砲による砲撃を行う。

「む……彼らの到着が予想以上に早かったな、しかして私はキャプテン・ジオン！ この『GHC』が誇る艦隊にも一人で立ち向かい、勝利してみせよう！ クルト君、君たちはバロノーク連合の支援を！」

「はっ、キャプテン・ジオン！ どうかご武運を！」

「うむー！」

一連のやり取りは配信の都合上オープンチャンネルで中継されて

いるため、アトミラールはなんとなく今日の前にいる全身タイトの身がなんであるか想像がついたのだが、怒髪天を衝く勢いな愛妻が怒りを募らせていることに小さく苦笑する。

『むむむ……提督はロンメル大佐との戦いを所望してるのデース、だから……大人しくそこを退いてもらいマース！ 主砲、Fire!』
『いやあれどう見ても……つていうかどう聞いても……まあいいや、一人で立ちほだかるというなら、キャプテン・ジオン！ 貴方の知っている物量の恐ろしさ……それをご馳走するでしょう!』

アトミラールは中破しながらも残存していた「山城」を筆頭に残された艦隊をまとめ上げると、艦載機を発艦させてロージオンガンダムへと容赦ない急降下爆撃を放ちつつ、足を止めたそこに主砲による猛攻を浴びせかけるといふ艦隊戦を仕掛けていく。

だが、キャプテン・ジオンとて猛者の一人だ。

どこまでも作り込まれたベルティゴに敗北を喫した経験を活かして急降下爆撃を回避しながら、直撃コースの主砲を、対ビームコーティングの施されたコンバットナイフで切り裂いて、「山城」との距離を詰めていくという離れ技を披露してみせる。

『What, s!?!』

『やるね……ならばモビルスーツ隊発進、そしてコンゴウ、「第七機甲師団」を引き摺り出すぞ……ハイパーメガ粒子砲回路開け!』

『サー、イエッサー! ハイパーメガ粒子砲、回路開きマース!』

残存艦のうち、ガンプラを搭載している「天城」「赤城」「加賀」の三隻からリゼルやメタス改などを中心としたTMSが出撃し、キャプテン・ジオンの猛攻を阻むべく包囲し、常に十字砲火を狙える陣形を組みつつ、アトミラールはハイパーメガ粒子砲を今度は120パーセントの出力で放つべく、対空砲火と正面投射を「赤城」「加賀」「山城」と残存艦何隻かに任せてチャージを開始した。

戦略、戦術の手法に関して、数に頼みを置いていると勘違いされることが多いアトミラールだが、彼の本番は追い込まれてからだといっ
ていい。

スチームローラー作戦を突破してきた相手にこそ、細かな戦術は打

つものであつて物量作戦といえば聞こえはいいがそれは戦術を弄する更に前にある前提の話でしかない。

そして、スチームローラー作戦もただいたずらに数を突っ込ませるだけではない以上、彼に対する偏見や評価が誤りであることをキャプテン・ジオン——というかその中の人——は誰よりも知っている。

配信者としては一人で戦い抜くことが理想だが、戦略家としてはクルトたち腹心の部下を呼び戻して頭脳戦を楽しみたい。

そのジレンマが、なんともキャプテン・ジオンを悩ませるのだ。

「時に提督殿、こんな言葉を知っているかね？」

『ほう？　ご教授願いたいな、キャプテン』

「力は、更なる力によつて滅ぼされる……今ここに見せよう、私の切り札を！　君たちが頑張りすぎたからその心意気にアクシズ落とし！

守ろう皆のG・B・Nツ！！」

そしてキャプテンは、配信者としてのプライドを選ぶことに決めた。

はつきりいつてしまえば、この状況下におけるアクシズ落としの発動は博打もいところだ。

宇宙である以上底がなく、ましてやアクシズ自体の弾速も遅いとあつては、いかに「天城」が巨大な戦艦であろうと直撃など期待できるはずもない。

だが、艦載機群や随伴艦はどうか。

派手な絵面やよく考えたら勢いだけで言つてる台詞に誤魔化されそうだが、キャプテンの狙いはあくまでも「GHC」の連携を分断しての各個撃破だ。

その「中身」の本質はソロになろうとも変わっていない。

そして、召喚されたアクシズが乱戦エリアの中央を目掛けてゆっくりと落下していく、そんな混沌とした戦場に、アイカたちは向かわなければならなかった。

「なにあれ……」

「……あ、アクシズ……？」

「キャプテン・ジオン……彼も戦いに参加していたのですね」

三者三様に、アイカは知ってこそいたが、改めて間近で見るとその規模にドン引きし、エリイはアクシズが落ちているという状況そのものに困惑し、アキノは冷静に、配信者なら今は美味しい状況だから参戦もしてくるだろうと、状況を分析する。

ミネルヴァガンダム・アテナイが纏っている「アテナの衣」のエネルギーは大気圏離脱でそのほとんどを使い果たしてしまっていた。

だからこそ、月面には迂回せずに直行しておきたかったのだが、直行ルートだとキャプテン・ジオンと「GHC」残存艦隊の決戦が繰り広げられていて、迂回しようにもそつちでは「光の柱」が無数に林立する光景が展開されているなど、どこをどう見ても地獄しかない。

とはいえ、アクシズ落としに自分から突っ込んでいく理由がない以上、選択肢は自ずと一つに絞られていく。

未だに生き残っていたタチバナ商会の傭兵たちが放つビームを躲し、時には強化されたバリアで受け止めつつ、「アテナの衣」が持つその限界までアキノはなるべく最短コースをなぞるようにして、「リビルドバンガード」を最前線へと運んでいった。

しかし、そこもまた地獄であることには変わりない。

アイカは目の前に展開される光景に、思わず固唾を呑み込む。

キャプテン・ジオンが壊滅させたアドラステア艦隊はタチバナ商会の傭兵群、その中ではごく一部であり、此方ではガデラーザとリボーンズガンダムを中心とした編隊が、映像作品「機動戦士ガンダムAGE」に登場する海賊戦艦バロノーク一隻を取り囲んでいる。

そして更にその周囲を護衛する黒塗りの、どこかで見たことがあるような、具体的にはチャンプが率いるフォース「AVOLON」に所属してそうな機体群が奮闘こそしているものの、有志側にハイランカーが付いているのもあって中々膠着した戦線を打開できずにいるようだ。

「ここを抜けないとチィちゃんに会えないなら……っ！」

「……アイカさん、落ち着いて……！」

「エリイちゃん？」

「……あ、えと、その……ごめんなさい、今のところ、あの……わたし

たち、無視されてるみたいなので、通り抜けちゃえばいいかな、つて……」

エリイから指摘されて気づいたが、リーダーに映る敵影は確かにバロノークと、それを護衛する「バロノーク連合」及び「第七機甲師団」へと集中攻撃を仕掛けているだけで、アイカたち「リビルドバンガード」が飛び入り参戦したことに気付いているのはそういなかった。

或いはいたとしても、アイカたちにわざわざ構っている余裕などないのだろう。

明らかに偽装だとわかる、MGダークハウンドの頭部パーツを被つて、肩のラッチからアンカーショットをぶら下げたその機体——ガンダムA G E IIマグナムハウンドは機体を損傷させながらも数百の敵機と、一機、いや、一柱と数えるべき「光」と渡り合っている以上、リソースを分散させるべきでないことは明白だ。

「ありがとうエリイちゃん、あたし、また周り見てなかったみたい」「……あ、いえ、そんな……」

「貴女の観察眼は謙遜すべきではなく、誇るべきことですよ、エリイ」それでも自身に接近してくるギラ・ドーガをビームサーベルの一刀で両断しながら、アイカはエリイにお礼を言いつつ、機体を採掘エリアに向けて加速させていく。

それにしても、明らかにバレバレだとはいえチャンプはチャンプだ。

数百の敵に囲まれたなら、普通は戦うどころか諦めているだろう。それだけ、数というのは圧倒的な優位を持っている。

だが、三人寄れば文殊の知恵という言葉があっても同時に、船頭多くして船山に登るといふ格言があるように、数ばかりを集めてしまうとそれが弱点になるのだろう。

無論生き残れる腕があればの話だが、チャンプは傭兵たちの射線を混線させて、常にフレンドリーファイアが起きる状況を狙った上で立ち回っている。

バトルロワイアルミッションでもフレンドリーファイア狙いは常道ともいえる戦術だが、それをこの数とこの規模相手にやってのける

のが、チャンピオンがチャンピオンたる所以なのだろう。

アイカは感心しつつ、コアバスターライフル・フェアリーでデブリの影に潜んでいたジム・スナイパーカスタムを撃たれる前に処理しながら嘆息した。

「彼がここを引き受けてくれるのなら、私たちは早めにここを——っ!?!」

『そう簡単に事が通ると思うてか、お主たちよ』

再び残ったエネルギーを振り絞って光の翼を展開しようとしたアキノとミネルヴァガンダム・アテナイ——その中核となる「アテナの衣」が光の柱に包まれたかと思えば、剥離するように砕けていく。

「すまない、『リビルドガールズ!』」

『今です!』

「むうう……っ、やる! 更に腕を上げたなクーコくん!」

何故今まではチャンプを追尾して、その軌跡に残骸の山を築いてきた光の柱が、アキノからその翼だけをもぎ取ったのか。

その答えは、チャンプの操るマグナムハウンドに食らいつくダイバーランク1位たる女性——「クーコ」が駆る、ザンネックの改造機である「月華武者ザンキ」が奮戦を見せているからだ。

しかしチャンプとてそう簡単にやられる男ではない。Fファンネルで一旦クーコとの接近戦を仕切り直しながらも、自身はドツズランサーマグナムのビームマシンガンで牽制打を加えつつ突撃するとうクレバーな攻撃を繰り出しているのは流石の腕前といったところだろう。

だが、そんなチャンプですら無視できない、脅威として振り払うのではなく立ち向かうことを選ばせたクーコという女性の腕前も相当なもので、そして。

『月並みな台詞じゃがの……先に行きたいのであれば妾に覚悟を示すが良い、そなたらが……本当にあの娘を救えるかどうか、その覚悟をじゃ』

老獪な喋り方を、脳が溶けそうな甘いボイスでやっている光の柱を操る主、「テンコ」にアイカの脳は一瞬バグって処理落ちを起こしそう

になったが、間違いでなければこの人は確実にトップランカーで、自分の知っている最高のダイバー——チャンプを除いて——であるF OEさんを遥かに上回る実力を持つているということだ。

アキノから光の翼が失われた以上、ここからは自力で採掘エリアにたどり着くしかない。

だが、その前に立ちはだかる壁は強大だった。あまりにも強大すぎた。

サイコ・キャプチャーの温存などもつてのほかだ、それどころか自分たちが全てのリソースを使い果たしても勝てる可能性なんて天文学的な確率、いや、違う。

ゼロだ。全くの皆無なのだ。

それほどまでに、腕を組んで立ちはだかる九尾のガンダムレギルスは、【天道天照】は、アイカたちの道筋を照らすどころかその光さえ奪い去り、闇に閉さんとしている。

「……アキノさん、何かあった時チイちゃんを頼めますか」

「アイカさん、何を……！」

「あたしは……チイちゃんにはアキノさんが必要だって思ってます、だってあたしには教えてくれなかった本音を教えてくれたのは、アキノさんにですよ？　なら……あたしはリーダーとして、ここで皆の背中を任せられます！　それぐらいの猶予は許してくれますよね、テンコさんっ！」

アイカはビルドボルグを抜き放ち、躊躇いなくシステム・フェアリー・テイルを起動させると、震えるその切っ先を天道天照へと向け、戦線を布告する。

『よいよい……では、参ろうかの』

「……ッ……！　エリイちゃん、絶対に生き残ってね！」

「アイカさんっ！　ダメですっ！」

エリイが未だかつてないほど大きな声で制止するのも聞かずに、アイカは一秒でもいいから時間を稼ぐべく、天道天照の全容をその高機動の中で観察しながら、「光の柱」の状態を探っていく。

まず、追尾するタイプのその正体は、あまりに密度の高いレギル

スビットだ。

避けているつもりでも、フォトン・トルピードが掠ったかのようにウイングゼロの羽が穴だらけになっていくのにアイカは歯を食い縛りながら、微動だにせずその光を散らす九尾のガンダムを睨み付ける。

そして恐らく、追尾せずに撃ち下ろすタイプの何かがあつて、その正体はわからないが、ここに沈んでいる戦艦やモビルアーマーなどはその犠牲になった確率が高い。

あまりにも「綺麗すぎる」円形に穿たれた、残骸の傷跡からアイカはそう推測した。

だが、わかつたところで何か対処法があるわけでもない。

——だったら。

「っ、あああああアッ!!」

『猪を狩るのは簡単でな、足を奪えば良いのじゃよ』

「させるかっ！ ボルト・アウト！ そして行けっ、あたしの……ビルドドラグリーンツ！」

『なんと……っ？』

面白い童じや。テンコがそのレギルスビットを極限まで収束させた「アメノサカホコ」で狙ったフェアライズガンダムの脚部が一瞬の内に分離すると、刺突を狙ったのかと思つたその大剣の先端が分離して弧を描き、テンコに僅かながらも回避運動を選ばせる。

だが、それだけだ。

テンコは密度を増したレギルスビットを両腕と両脚に装着された、レギルスシールドを改良した特殊装甲——「ヤサカニノマガタマ」から発振したビットで全身を包み隠すと、折り返しで更に分離したビルドドラグリーンBのコンビネーションを、その刃を融解させる光の衣で防ぐという芸当を披露してみせた。

「なっ、対ビームコーティングしてるのに……っ……っ……！」

『アマノイワト……同じ光に届かんとするならば、剣などという無粋なものでは開かんのう……じゃがそなたの一撃、筋は悪くない』

全てを懸けたつもりだった。

隙を晒したフェアライズガンダムの全身をレギルスビットが蝕んでいき、同じようにシステム・フェアリー・テイルによって展開された「妖精の羽」を機体に纏わせることで防御しようとアイカは試みるが、元々のスペックが違いすぎる。

僅か十数秒。文字通り後先を考えずに何もかもを擲ったアイカの乾坤一擲、その一撃は、トップランカーを両手の指には余る程度の時間しか、止める事ができなかった。

だが。

「……もんか……」

『むっ?』

「諦めるもんか! まだ手足が残ってる、バルカンがある、やろうと思えばなんでもやれる! あたしは……もう泣かないんだ、もう蹲ってメソメソするのはやめるって、そう決めたんだあああッ!!!」

そう叫びながらも、アイカの両眼からは絶え間なく絶望に心を砕かれたことでこぼれ落ちる色のない血液が降り注いでいる。

巷に雨が降る如く。残ったビルドボルグのコアユニットから発振したビームサーベルでレギルスビットを薙ぎ払いながら、満身創痕の機体を引きずって、アイカは天道天照に、文字通り己の覚悟の全てを込めた一撃で切り掛かった、そのつもりだった。

だが、慈悲があるならトップランカーなどやってはいないとばかりにその一撃は空を切り、アミノサカホコが後ろの左右から自身を狙っているのを振り返ったアイカは視認し、押し寄せる仮想の死の予感に、きつく目を瞑ってしまふ。

——それでも。

敢えていうのならアイカの攻撃自体は無駄だったのかもしれない。

しかしそれでも、十分に時間を稼いだという意味では間違いなくアイカの覚悟に、願いに、価値と意味は存在していた。

蒼い極光がアミノサカホコを打ち払い、そして粒子のマントを翻す白いダブルオークアンタ——忘れもしない。

あの日、あの時、出会っていなければきっと自分たちが「リビルド

「ガールズ」になることはなかった、命の恩人にしてヴァルガの主人として恐れられる、F O Eのあだ名で呼ばれるダイバー、キョウスケの駆る「デイバインダブルオークアンタ」が、アイカの危機にか、あるいは格上の首を狙ってか参陣してくれたのだ。

『む、妹御を大事にするえふおーいー……ええいややこしい、キョウスケか、久しいの』

「貴女を見たのは『ヴァルガが静止した日』以来か……しかし、今は一人の敵！ さあ行け、『リビルドバンガード』！ アイカ！ 君の戦場はここではない！」

デイバインダブルオークアンタはアメノサカホコとレギルスビツトによる波状攻撃を被弾しつつも致命傷は避けるように捌きながら、とうとう天道天照にそのビームサーベルを使わせることに成功する。

だが、キョウスケもわかっている。

これは戯れだ。本気を出すのであれば、彼女はi f sユニットを使った予測不可能な跳弾も含めて、弾幕で自分を近づかせる前に処理しようとしていたはずだ。

「……キョウスケ、さん……」

「……僕はかつて過ちを犯した。それは結果論かもしれない……だが、もう誰かが自由に生きたいと願う心を止めることはしない！」

『ちようど良い……童の覚悟も見せてもらったことじゃ、今度はそなたのそれを見せてもらおうかのう！』

テンコはそのターゲットをキョウスケに変えたらしく、満身創痕のフェアライズガンダムを一瞥すると、意地悪なことをして悪かったとばかりに、覚悟は見せてもらったとばかりに小さく首を傾げると、人外魔境の死闘へとその機体を飛び込ませる。

エリイとアキノはだいぶ先に行ってしまったが、追いつけるだろうか。

ブーストゲージと損傷度合いを確認しながらアイカはごしごしとその目に浮かんだ涙を拭って、採掘エリアへと傷ついた機体を走らせるのだった。

この戦いにはいくつかの制約が課せられている。

テンコの熾烈なる弾幕を防御、回避、切断の三拍子を繰り返すようにして捌きながら、キョウスケはやはりいつもより幾分か隙の多いその攻撃に確信を得る。

今展開されているのは、GBNの未来と存亡をかけた第二次有志連合戦と重なる部分があれば、その再現でもなければ、目的だって大いに違う。

キョウヤを経由して耳にしたELダイバー虐待事件、それ自体が表沙汰になることは、最大限に希望的観測をしたとしても相当遅くなるのだろう。

だが、行方不明になったELダイバーの存在を公表し、わざわざこうしてその奪還戦を生放送で放映することで、「行方不明になったELダイバー」の件については絶対に闇に葬らせず、その証拠として残す意図があるからこそ、アトミラルも初撃でヴァルガを更地にするのではなく、ロンメルは時折敵対しているはずの「GHC」に協力し、テンコはこうして明らかに時間稼ぎを目的とした攻撃を本気の弾幕の中にいくつか織り交ぜている。

ならば、この戦いで運営が、その背後にいる桜宮とアトミラルが描きたい筋書きとは何か？

答えは自明だ。

それはドラマだ。どのような形であれ、劇的に、そして長時間放映されることでそれは多くの人々の目に触れて、もしチイの件を内々に葬ったのなら知りたがりなマスメディアが突っ込んでくるというコンボを成立させること、それこそが運営の真の狙いなのだろう。ならば、こちらも劇的に仕上げなければなるまい。

キョウスケは装甲値が削られていく中でも不敵にほくそ笑み、そのジョーカーを切ることを決意した。

「GNマテリアルカード、クイックドロ―！ セット、パラライズミス
ト、ランクSSS！」

トライエイジシステムこそ積んでいないが、このデイバインダブルオークアンタにはチャンプとのコラボ記念で発売されたトライエイ

ジガンダム、その機能がGNドライブのなしうる範囲で限定的に受け継がれている。

生成したカードを、「アマノイワト」を纏った天道天照へと投げつけると、果たしてそれは光の衣に阻まれて消えてしまうが、それこそがキョウスケの真の狙いだった。

『む、機体が……？ でばふ、というものか、中々やるではないかお主も』

「いいや、驚くのはまだ早い！ GNマテリアルカード、ダブルディール！ セット、ミラージユデイズ！ ランクSS！」

ツインドライブを接続している自律稼働無人機ともなる大容量コンデンサー、「クアンタムレヴ」の容量全てを使い切って、キョウスケは二枚目のカードをデイルすると、GNビームライフルでそれを撃ち抜き、高濃度のGN粒子によるジャミングを周囲に展開する。

これだけやっても恐らく大した決定打にはならないだろう。

新たに機体へと装備させたGNバエルソードを構えながら、カレトヴルフフェーダーとGNソードV2をソードビットの群れに加えて、キョウスケはデバフをかけたテンコへと果敢に斬りかかる。

しかし、今かけた二種類のデバフは回避と命中に関わるものだけで、「アマノイワト」を突破する決定打となりうるものはない。

ヴォーパルウエポンを選んでいればあるいは、といった風情だが、それが攻撃を当てることを前提にした博打なら、選ばない方が負け筋を潰せるのだ、よって却下すべきだろう。

だからこそ、キョウスケは三枚目の切り札を用意し、それを躊躇いなく切ることに決めていた。

「……ユユー！」

「はい、お兄様……！ if sプロージョン、フルドライブ！ さあ……これより舞うは歌舞伎者の花鳥風月、天の九尾よ、太陽の分け身よ、照覧あれ……！」

テンコの直上から、全身をイーフィールドの乱流による攻撃判定と防御判定に包んだユユの機体が、キョウスケの招きに応じて急降下する。

ダブルデイルとクイツクデイルを使った以上、デイバインダブルオークアンタの粒子残量に余裕は残されていない。

だが、それでも。

アイカたちが、「リビルドバンガード」がチイの元へ辿り着くまで一杯に時間を稼ぐ人、という自らのロールを完遂すべく、キョウスケはまた、戦略としてはナンセンス極まる隠し札のオープンを決定する。

『同じifsユニット使いに出逢えるとはのう、そなた、中々見どころのある……流石はキョウスケの妹御よ!』

「ふふ、お褒めいただき光栄です……!　　ですが、ユユが褒められて嬉しいのはお兄様だけ!　　ですが……いいですよ、ガンプラビルダーズ!」

『応とも……!　　しかし、聞きしに勝る「ぶらこん」ぶりじやのう……!』
ユユとテンコは奇しくも同じ作品を起源とするユニットを、その愛機に組み込んでいた。

分離したユニットから放たれるIFBSの包囲攻撃をテンコの天道天照が受け止めたかと思えばレギルスビットをIFイルドの乱流が弾き返し、その硬直を狙って放たれた「アメノサカホコ」が乱流を割いて、G-アイデアの左脚を破碎する。

名実ともにトップランカーたるユユが二種の強烈な、並み居るダイバーであれば行動不能に陥りかねないデバフによる支援を受けてなお、「二桁の壁」は決して崩れる気配を見せはしない。

「故にこそ!　　トランザムブーストモード……ドライアクセル!」
全てをここで使い切る。

キョウスケの宣言と共にデイバインダブルオークアンタが、FXバーストを彷彿とさせる蒼色に染まったかと思えば、瞬きをする間には視界から消えている程度の速度でテンコに肉薄し、その黄金の切っ先を振り下ろす。

『ここまで長く戦ったのも、クジヨウの坊との戦い以来じゃの……!　　しかし、こうもアンコールを見せられては心が躍るというものじゃ!』
しかし、太陽に仕える巫女を模した衣装に身を包む狐耳に尻尾とい

う出で立ちの少女は、テンコは全てをその千里眼で見通していたが如く、キヨウスケの背後と真横にアメノサカホコを「置いて」いた。

ディバインダブルオークアンタの右手が破損し、トライフレームホルダーが切り裂かれたことでGNパーティクルマントもその機能を停止する。

デバフはまだ切れていない。相手のモニターにはこちらの機体が二重三重にぶれて映っていることだろう。

それでも尚、これか。

キヨウスケは、ユユは、聳え立つ壁に冷や汗を流しながらも、そこにいつか行くべき「未来」を見て静かに笑う。

この戦いは、理屈ではない。

誰かが仕組んだ筋書きのあるドラマだとしても、例え自分たちは舞台の上で哀れに役を演じる影法師に過ぎないとしても。

「この戦いは……僕の！」

「ユユの！」

『戦場だ!!!』

『よくぞ……申した!!!』

光が、爆ぜる。

そして、重なり合っていく。

採掘エリアの最外周で、脇目も振らずに鉱石を掘り続けていた旧ザクの炭鉱夫は思わずその手を止めて、星をも動かす奇跡を起こした光によく似たそれが、地球圏を包み込むのを見た。

閃光が己の目を焼こうとも、さながら「リギルドセンチュリーのサイコフレーム」を掘り当てたときのように、男にとってそれは、一生の宝となりうる光景だったに違いない。

聖騎士は膝をついた。Gの形象は砕けて散った。

だが、同時に行く者には道を照らし、阻む者にはその光を奪う太陽の分け身たる九尾も、その「アマノイワト」及び神器の一つと尻尾をいくつか失っていた。

しかし、この場における勝利者は間違いなく、そして完膚なきまでにテンコだった。

『は……ははははー！』

よもや、あの妹御がアメノウズメに、そしてあの不屈の騎士がスサノオになろうとは。

テンコは久しぶりに「壁」として己の任を全うした、そこにある「未来」を見届けた喜びに、等身大の少女が如く満面の笑みを浮かべる。

ああ、素晴らしい。ここにはこんなにも未来が、希望が、愛が。

——そう、「大好き」が溢れている。

これを狙ってGMがこんなドラマを組んだのなら、苦労人に見せかけて彼は相当な食わせ者だ。

誇り高い挑戦者たちを見送って、テンコは未だ健在であるチャンプとの戦いに復帰すべく飛び去っていく。

その誇りと未来と、そしてそれを手繰り寄せた小さな少女の大きな勇氣に、感謝をしながら。

「待つてください、チイ！ 私たちは……！」

「うっせえ！ もうチイとアキノたちはフォースメンバーじゃないんだ！ ほっといてくれよ！」

採掘エリア、その天まで伸びる鉱石柱に姿を隠していたチイを見つけたアキノとエリイは、ひたすらな彼女をおいかけ、その影を繋ぎ止めるべく言葉を紡ぐ。

「め、メンバーじゃ、なくても……！ わたしは、アイカさんは……！」

チイさんのことを……！」

「だったら何でそのアイカがいねーんだよ、エリイ！」

チイは最早発砲もやむなしと判断して、両手に保持していたビームマシンガンによる弾幕砲火を形成し、エリイへと浴びせかける。

「させません！ だったらチイ、貴女は——貴女はどうして、泣いているのですか！」

その攻撃を一身に受け止めながら、アキノは通信ウィンドウの中で涙をこぼしながら暴言を吐くチイへと、同じような嗚咽と共に呼びかける。

「ばっきやるー、チイは、泣いてなんか——！」

「……泣いて、ます！」

「ッ……！」

「……痛い、人は泣くんです……身体が痛くても、心が痛くても……わたしは、いっぱい泣いてきたから、わかるんです！」

右眼を失ったときの痛み。そして右眼を失ってからも痛めつけ続けられた心があげた悲鳴としての痛み。

わかっているからこそエリイは叫ぶ。心が痛い、泣いているから、泣きたいと願っているから、耐え切れずに身体が涙を零すのだ。

そしてそれは仮想の海でも現実でも、人間でもELダイバーでも、心がそこにあるのなら変わらない。

だからこそ、手を伸ばす。

アキノはチイが痙攣を起こしたように振り回す攻撃を受け止めながら、そしてエリイは心がつながり合うその一瞬を伺いながら、チイの心へその指先を触れ合わせようとしていたのだ。

「……お前に、チイの何がわかるってんだ！ チイは……チイは、名前すら勝手につけられて、勝手に道具にされて……ねーちゃんを……イリハおねえちゃんを……っ……！」

「……わたしは……リアルだと、目が見えません！ 小さい頃に……いじめられて、傷が残って……それでも！ それでも、アイカさんがいてくれたから！ 死なないで生きてきたから！」

「うるっせえ!!! チイにアイカはいねえんだよ!!! 誰が……誰が、金が欲しいって理由で生まれてきたELダイバー!!! なんか愛してくれる!? イリハおねえちゃんの心を、身体をぶっ壊すことを何とも思っつこなかった人間を信じられる!? なあ、答えてみるよ、エリイ!!!」

チイはビームマシンガンを投げ捨てると、アキノが底った隙間をすり抜けてリビルドオートを蹴り飛ばして体勢を崩させると、その頭部を何度も何度も殴りつける。

そして、カバーに入ってきたアキノからは徹底的に逃れて、ビームマシンガンを拾い上げながら弾幕砲火をかつての仲間たちに容赦なく撃ち放った。

「だったら……私が貴女のアイカさんになります!!!」

「は……う？」

アキノはIフィールドソードを投げ捨てて、全ての武装を解除すると躊躇いなく必殺技の発動を選んで、退路を断ちながらチイへと肉薄する。

だが、その手足を焼かれてもチイはアキノを拒絶するように蹴り飛ばして逃げ出すが、その言葉には少なからず動揺が広がっていた。

エリイにとってのアイカ。それはきつと自分が求めてやまなかったものだ。

そしてかつて壊されて、失ってしまったものだ。

運営に引き取られる直前、左脚をもがれて片目を潰された状態で部屋の隅に転がされていたイリハが、何も語らずに虚空ばかりを見つめていたことを思い出す。

だからこそだ。だから、イリハをこんな目に遭わせたのだから、自分は願っても愛される資格などどこにもないのだ。

チイがそう、きつく眼を瞑った瞬間だった。

「チイちゃん……捕まえたああつ！」

「アイカ、てめえどこに……!?!」

チイが警戒を怠ったその瞬間、真後ろからそのアンテナや肩アーマーに腰アーマー、ボルトアウトした脚部も含めて、損傷していない箇所を数えた方が早いフェアライズガンダム——否、「アイカのコアガンダム」が、アイカがその脚に組み付いて、モビルドールチハヤを転倒させる。

「あたしはここにいる！ 絶対三人で……チイちゃんを取り戻すって決めたから！ ……エリイちゃん！」

「はい、アイカさん……！ お願い、リビルドウォート！ わたしの

……だいすきな人に、だいすきな人たちに、応えて……っ！ サイコ・キャプチャー……っ！」

果たして、アイカの作り出したその一瞬で、エリイのリビルドウォートから分離したフィン・ファンネルは逆紡錘形を——さながら、結婚式で投げ飛ばすブーケのような形を展開して、その花束にチイを包み込んでいく。

——ああ。

倒れ込むアイカも、燃え盛るアキノも、とうとう自分を捕まえたエ
リイも。

どうして、泣いてるんだよ。

チイは諦めたように、自分のことを棚に上げながら涙をこぼして、
しかし、その顔には年相応にあどけない笑みを浮かべて、どこことなく
嬉しそうに、そう呟くのだった。

最終話 「それは世界で例えようがない」

嬉しい時に笑って、悲しい時に泣くのが人間なら、きつと嬉しい時にも泣いて、悲しい時に笑うしかなくなってしまうのも人間だ。

サイコ・キャプチャーに包まれたチイは観念したように、今まで心の中に溜まっていた全ての膿を押し流すように涙をこぼしながら、アキノにどこか縋り付くように問いかける。

「……ぐすつ、なあ、アキノ……本当にチイでいいのかよ、可愛くねえし、銭ゲバだし、そんなだぞ……？」

「馬鹿を言わないでください、チイ。私は……そんな貴女に救われてここにいます」

ブリューナクを解除したアキノは、ミネルヴァガンダムを跪かせて倒れ込むチイのモビルドールとその視線を合わせながら、効果時間が過ぎて解除されたサイコ・キャプチャーに閉じ込められていた彼女にそつと手を差し伸べた。

「過ちばかりの人生だったというなら自分もだ。」

シルバリーにいた頃がいい思い出に満たされていた黄金の時間だったとは、今は毛の先ほども思わない。

そうやって過ちを犯して煙たがられて、心にヒビが入ったとしてもそれを自分のせいだと諦めてきたのがアキノの半生で、受け入れてくれたのはアイカとエリイもかもしれないが、自分を拾い上げてくれたのは他でもないチイなのだ。

それだけで、理由なんてものは十分だった。

「貴女は言ったじゃないですか。私にどんな過去があろうとも関係ない……ならば私も同じです、私にとっての貴女は少しだけおませでお金にうるさい可愛い子……それで十分ではないですか？」

「……この野郎、随分と言ってくれやがって……」

愛される資格などどこにもない。

チイはそう思っているのかもしれないが、愛に資格や免許が必要だと一体どこの誰が決めたというのだろうか。

時は未来に進んでいく。今はそれは変わらないし、もしかしたら

ずっと変えられないかもしれない。

それと同じように、愛なんてきつと遙か昔から色んなところに色んな形で転がっていたものだし、あげるのにも受け取るのにも資格なんていらぬから、人は繋がりあって、時にすれ違って、傷つけあったりする。

それでも、いつかまた、人は立ち上がれる。

差し伸べられたミネルヴァガンダムの手を取って、サイコ・キャプチャーによる過熱を冷ますためにツインアイから冷却水を溢すモビルドールチイが、左手でセンサーを拭う姿を見せる。

ELダイバーにも心があるなら、それはきつと同じことだ。生まれ方が違うだけで、産土が違うだけで、生き方が少しだけ違うだけで、その他はきつと、人間と変わりない。

感極まって涙を零すエリイにつられてアイカも今までの想いを吐き出すように涙をこぼしながら、いっばいっばいになった思考の片隅でそんなことを考える。

GBNに出会って、自分はもう一度立ち上がることができた。

それはきつとエリイも、アキノも、そしてチイだって同じで、そんな四人が寄り合ったことと、再び寄り合うことができた奇跡に、アイカはいるかどうかわからない神様に感謝をする。

「おめでとう、君たちはこの戦いに勝利した」

「げっ、GM……！」

「……そう露骨に嫌われると堪えるものだな」

四人が勝利の余韻に浸っていると、戦禍の全てがロールバックされた月面に降り立つガンダイバー……に拡張パーツを取り付けた、ガンチョッパー姿のGMと、その隣にはほぼ全壊といった惨状に近くとも、確かにあの「マギー」を相手に生き残ったアリアと、彼女が跪く悪魔の王であるガンダム・バエルの姿があった。

そしてその隣には、彼女と死闘を演じて中破したマギーのラヴフアントムが、バエルの肩を支える形で直立している。

チイが露骨に見たくないものを見たような顔をする理由は確かにわかるからいいとしても、傷つくものは傷つくのだと胃の辺りがきり

きりと痛むいつもの感じを覚えながらも、ガンチョッパーことカツラギは言葉を続ける。

「まずはここでは話しづらからう、運営班のルームまで案内しよう」
カツラギがぱちん、と指を鳴らすと同時に、満身創痍だった「リビルドバンガード」……改め「リビルドガールズ」に戻った四人、そしてアリアとマギーはいつも運営班がゲーム内で調整を行っている部屋、「SDガンダムフォース」の司令室へと一瞬で転移させられている。

運営がラグなしの転移を使えるのもガードフレームやベースガンダムの強みだったりするんだろうな、と、どこか場違いなことが浮かぶ程度には勝利の余韻に浸っていたアイカは静かに苦笑しつつ、エリイと顔を見合わせる。

「……運営さん、すごいなあ、って……」

「うん、あたしも同じこと考えてた」

「やれやれ、終わった途端にこれかよ、気が早えーなあ、アキノ？」

「そういう貴女もどこか浮かれているように見えますが」

「う、うっせバーカー！」

この漫才じみたやりとりを聞けるのもいつ以来だろうか。

そう考えると、本当にチイを引き止められてよかったのだとアイカは思う。

四人揃わないと「リビルドガールズ」にはならない。あたしたちは四人揃ってようやくその名前になれるんだ。

きつと魂の居場所を示す、そんな名前に。

G Mに招かれるままに応接室のような部屋に通されると、腰掛けた四人に向けて口を開いたのは彼ではなく、今まで静かに黙っていたアリアだった。

「まず、結論からご報告致しますわ。チイさんの身柄についてですが、G M……」

「うむ、チイくん、君の身柄と後見人については、一年前に曖昧なままとなつてそのまま行方不明になっていた。故に、再び後見人保護申請を出してきた橘忠治に引き渡されることになる……はずだった」

一瞬差しかけた不穏な空気に、「リビルドガールズ」の四人は顔をしかめかけるが、最後の「はずだった」という部分で一樣に小首を傾げて、代表者であるアイカがその言葉をおうむ返しに問いかける。

「はず、ですか？」

「うむ。だが……彼の手続きにどうも『不備』があることが発覚してね、そこで却下されたためにチイクンの後見人は不明のまま、つまり由々しき問題だったのだが……いやあ、アキノくん。君がまさか後見人申請を予め届け出てくれているとはね」

「は……？ 私はそのようなもの……」

「ええ、とても喜ばしいことですわ。その証拠はこのわたくしが……桜宮凜音が確実に保証いたしますわ、なので万が一ですが……まあそんなことありえないとは思いますが、裁判になったとしても確実に勝てる、そういうことですわ」

アキノの言葉を遮ってアリアはオペラを歌い上げるかのような大仰な仕草を交えて、「アキノがどうしてようがどうしてまいが筋書きとしては最終的にそういうことになったしそうした」という、背後でどんなことが起こっていたのか想像もしたくないような政治的な含みを持った言葉で、「リビルドガールズ」の勝利を締めくくる。

「……お嬢様、あんたえげつないぐらい政治家してんな……」

「ふふ、それほどでもありませんわ。わたくし一人では絶対にこの勝利は勝ち取れなかった……ですから、アイカさん。貴女という親友と、『リビルドガールズ』という存在が……この奇跡を手繰り寄せたのです」

ぱちぱちと手を叩きながら、アリアは心の底から試練を乗り越えて今一度、一つになった「リビルドガールズ」へと賛辞を送る。

事後処理に関してはあの「提督」……アトミラールと自分の仕事だが、そんな後ろ暗い汚れ仕事というか死体蹴りをした上で全身の毛を塗り取るような所業について語るなど、無粋も極まっているだろう。

だからアリアは、そういうことにした。

この物語は、「リビルドガールズ」が愛と勇気で仲間を取り戻した電子の海のフェアリー・テイル。

そこで一度「La Fin」の文字が打たれて、チイはアキノに引き取られて無事に暮らす。そしてアイカとエリイもいつも通りに仲睦まじく平穩に過ごして、「リビルドガールズ」は今一度一つになる。アグニカ的にも完璧な筋書きだと、高笑いを上げて咳き込みながらもアリアは多くを語らずして、その笑顔を全ての答えとした。

「良かったね、チイちゃん」

「……お、おう……クソっ、なんでだよ、嬉しいのにさ……なんだかこっ恥ずかしくて、それで、涙が出てきやがる……」

きつとこれから、ELダイバーを巡る世界も少しずつ良くなっただろう。

一歩ずつ、星の一秒から見ればあまりにも遠い歩みかもしれないけれど、電子の海に浮かべられたテクスチャの空と、肉眼に映るこの惑星の青い空の間に引かれた長い国境線は少しずつ崩れていく。

そんな未来を、願ってしまうのだ。

アイカはチイの背をそつと撫でながら、涙ぐんで嗚咽を噛み殺そうとして、それでもできずに大泣きしてしまった彼女の子供らしさに愛おしさを感じてそつと微笑んだ。

「……嬉しい時も……人は泣くんです。だから……チイさんも、泣いていいんです……」

「……おめーも泣いてどうすんだよ、エリイ……クソっ……畜生……」
「チイ……」

ごしごしと乱雑に涙を拭いながら、言葉に詰まった自分をその胸にそつと抱きとめて、優しく髪を撫でながら、「チイ」という名前を呼んでくれたアキノの姿は、チイがずっと求めていたものであるはずなのに、どうしてか涙が止まるどころか余計にこぼれ出してきて止まらない。

どーしてくれんだ、と、声にならない声でアキノの胸に顔を埋めながら、チイは今まで泣けなかった分だけ、いくら泣いても足りないとはばかりに涙をこぼして、彼女の愛を受け取る選択をする。

ああ、きつと。きつと自分は、これからも金銭への執着が捨てられないんだらうけれど、それでも、そんな自分でもこいつは受け入れて

くれる。

そして当たり前だと言ってくれる。それがどれだけ嬉しいだろうか。初めて人間に引き取られた時に、言ってもらいたかった言葉だっただろうか。

チイはまだ、自分の蹉跌を受け止め切れていないと、他でもないチイ自身が分かっていた。

だが、それでも、つまづいて、転んで、その先にそれこそ潮時になるまで金を稼ぐつもりで作ったただの宿木だったはずの、終の住処があつたというなら、やはりそれは喜ぶべき奇跡なのだろう。

いや、それでも足りない、きつと乱数の神様がどこかで気まぐれを起こした思し召しなのだろう。

それを掴み取ったのが、アイカであり、エリイであり、アキノであり、チイである——人間の手だったというだけの話で。

「……うまく言えねーんだけどさ……チイ、初めて……生まれてきてよかつたって……そう思ったんだ……だからよ、ありがとう……ありがとう、アイカ……エリイ……アキノ……チイなんかを、拾ってくれてさ……」

「なんか、じゃありません。チイはチイです……今日から私の大事な家族です」

だから、帰りましょう。

アキノは立ち上がって、チイの手を取りながらフレンド申請を押し、アイカとエリイもそれに倣ってチイへのフレンド申請を飛ばしてから、フレンド画面でのワープをメニューに開いて待機する。

「……ありがとよ、お前ら……って、帰るって……?」

「私たちのフォースネストですよ」

「はあああああ!? いくらかかったんだよそれ!」

「大体500万BCぐらいかなつ☆」

「この前の報酬全部パーじゃねえか畜生……」

別の意味で泣けてきたぜ、と皮肉を飛ばしながらもチイは三人からのフレンド申請を受け入れて、三人に返した申請が承認されたのを確認すると、そのフォースネストに、帰るべき居場所に向けてワープす

る。

なんてことはない。「リビルドガールズ」のフォースネストは、シーサイド・エリアの海が見える小高い丘に建てられた一軒家だ。

たまたまそこを出るフォースがいたから格安で買ったというこれまた乱数の神様の気まぐれに出くわした結果、「ノイエ・シルバリー」戦の報酬は泡へと消えてしまったわけだが、それでも色んな意味で安いものだといかには笑う。

「……くすつ、ふふふ……」

「何笑ってんだよエリイ、他人事じゃねーんだぞ、チイたち完全に素寒貧だぜ……?」

「あ、いえ、その……チイさんが、ううん……チイちゃんが、そういうことを言うの……久しぶりに聞いたから、嬉しくて……」

「んだよそれ……まあいいや、今日からバシバシ稼いでくかな、つてことで頼むぜアイカ!」

転移したフォースネストのベランダから、そこに広がる大海を一瞥して、悪くないとばかりに照れ隠しに頬を染めながら、チイはリーダーであるアイカに号令を求める。

「うん……あたしたち、リビルドガールズ! 再結成記念と再始動記念ってことで……またよろしくっ☆」

もう、決めポーズを取らなくてもいい。四つの掌が重なり合う温度と、めいめいの、そしてバラバラのテンションな返事がアイカの耳朶を打つけれど、その方向は全く同じところを向いている。

思えば、空中分解を起こしてもおかしくないようなフォースだった。

途中で崩れて、今のようなことが起きて、そしてまたGBNを今までのように捨ててもおかしくなかった。

だからこれは、蹉跌を抱えた四人じゃなければ、この四人じゃなければ成り立たなかった、再生の物語。

そして、再構築のお伽話。

とりあえずは家を建てるのに使った500万BCを稼ぎ直すために、ヴァルガで鉱石を掘るとか、宝探しミッションを受けるとか、ま

たフォーラス戦をするとか、ああでもないこうでもない他愛もない言葉
を交わす時間を、その幸せを、アイカたちはいっぱい噛み締める
のだった。

「まさか、何かあつたら頼つてねとは言ったけど、最初にリアルで頼ら
れることになるとは思わなかったわあ」

「すいません、なんか知ってるお店とか、絵理のこととか受け入れてく
れそうなの、マギーさんしかいなかったんで……」

「……ご、ごめんなさい……」

それから数日後。梅雨の晴れ間といった風情の日差しが照らす新
宿駅東口で、愛香と絵理はフレンド繋がりから、ツイスタを通じて送
信した「オフ会を開けないか」という無茶な依頼を嫌な顔一つせず快
諾してくれたマギーに揃って頭を下げていた。

「いいのよお、アタシだってもっとGBNでも頼つて欲しかったんだ
からあ……でも、やっぱりリアルとGBN、いい意味で印象が変わる
わね。愛香ちゃんはキリツとした美人で……絵理ちゃんは宝石みた
いにキューティクル。その白い帽子とワンピース、似合ってるわ
よお」

「……そ、そうですか……？ え、えへへ……あ、ありがとう、ござい
ます……」

このワンピースと帽子は愛香に選んでもらって新調したものだっ
たから、絵理にとってはとびきりのお気に入りだったのだ。

そして帽子のツバが広いこともあり、絵理は初めて眼帯を外して、
人前では右眼を隠すように帽子を目深に被るけれど、その傷跡をさら
け出しながら外を歩いていた。

理由は単純なものだ。これからチィと、そしてアキノと会うのだから、
心の傷をさらけ出してくれた二人に隠し事をするのは申し訳が立
たないような気がして、だからこそ絵理は眼帯を外して、いつものよ
うに愛香と二人で腕を組んで歩いていたのだ。

「おう、そこにいる癖っ毛がアイカで……そんで白ワンピースがエリイか
？ なんつーか変わんねーなお前ら」

「こら、チイ、失礼でしょう。ああ……お待たせしました。私は涼月秋乃……アキノ・ベルナールです、こちらは知つての通りチイ」

「おう、チイはチイだぜ、こっちでもよろしくな」

しかし一年ぶりに吸った娑婆の空気は美味しいな、と、チイは、眼鏡をかけて、茶色がかつた髪をGBNのアバターと同じおさげにしている秋乃が小脇に抱えたハンドバッグからひよっこりと顔を出して、そんな刑期を終えた罪人のような軽口を叩く。

変わらない、というのも愛香はなんだか不思議だった。

愛香のアバターは現実からかけ離れた容姿をしているのにも関わらず、チイはそんなことを当たり前のように口にするのだから、きつと、人間よりも人間を見た目じゃなくて本質で見ているのかもしれない。

でも、そんなチイだからこそ助けたいと思つたのだし、あれから仲間としてやっていったのだと思う。

「しかしあれから一日後に大規模な電波障害が起こるとは思いませんでしたね……」

「そうなのよお、GMとかプロバイダとかが色々頑張ってくれたから二、三日で復帰したけど、現代ってなんでも電波頼り、ってことを思い知らされちゃったわあ」

「……ってこたあ、よく考えたらチイ、下手したら死んでたんか……」

一応ツカサの家にいた頃はプラネットコーティングを常に供給されていたから理論上は強制ログアウト措置が取られた後にモバイルの肉体へとチイの意識は戻っていくのだろうが、データ関連、それもE.L.D.Iバーに関わるものは未知数だ。その可能性がないとは言いい切れない。

そうなることとん乱数の女神様は自分達にデレてくれたらしい。

チイはその幸運に感謝しつつ、明日から乱数の女神様に足向けて寝れねえな、と冗談を飛ばしながら溜息をつく。

「あはは……なんだかあたしたち、本当綱渡りだよなー」

「……はい……出会ったのも、ヴァルガでしたし……」

「それで結成するきっかけになったのもヴァルガ」

「更に再結成する記念になったのもヴァルガですね」

「それだけ聞くとなんだかアナタたち、修羅の道を歩んでるみたいねえ」

「あはは……」

いや本当にそんなつもりなんてないんです、と愛香はマギーに反論しようとしたのだが、好奇心で覗いた掲示板に自分たちのスレッドが立っていたことに驚いて蓋を開けてみれば、砲火後ティータイムだのゆるふわ武闘派だのと書かれていて、挙げ句の果てに自分のファンアートの実に九割が包丁と血に塗れていたのだからもうなんとも言えない気分となる他にない。

一応、エリイと、絵理とセットになっている絵はお耽美というかどこことなく厳かで儂い雰囲気醸し出しているものが多かったのが救いだろうか。

「あたし武闘派じゃないのに……てかなんでヤンデレ扱いされてんの……」

「な、泣かないでください、愛香さん……」

ガツクリと肩を落として涙を眦に滲ませる愛香に、絵理は絡めていた右手を解いてそつと、頭を撫でるのだった。

「ありがとう絵理、あたしには絵理しかないよ……」

「いえ……愛香さんがいなければ、わたし……死んでましたから……」

「あはは、じゃあお揃いだね」

「はい……えへへ……」

そんなんだからヤンデレメンヘラコンビ扱いされてんじゃねえのか。

チイは思わずそう口に出しかけたが、秋乃が睨みつけてきたために慌ててそれを飲み込むように口元に手を当てながら、白々しく彼女から視線を逸らす。

なんというか、あまりにも変わらない。

変わらなさすぎて安心する、というのが、チイも、秋乃も、そして愛香と絵理も胸に抱いている想いだっただけ。

これもまた縁が手繰り寄せる奇跡なのだろうか。マギーの案内に

従って、オフ会の場である彼女のお店へと向かう愛香たちは、他愛もない言葉を交わしながらそんなことを思う。

きつと、この蒼穹の下で、それぞれに違う弱さを、そして同じ痛みを抱えて巡り合ったからこそ、生まれた奇跡がそこにある。

「……あの、愛香さん……」

「どしたの、絵理？」

「あ、えと……その……わたし、そろそろ、愛香さんを、名前で、呼びたいなあ、って……えへへ……」

「なんだ、そんなことならいいよ！ さあ来て絵理！」

「……あ、あう、そ、その……！」

—— だいすきです、愛香。

絵理は愛香の声を頼りにその輪郭に触れて耳元で囁きかけると、その唇にそつとキスを落とす。

やってくれたな、とばかりに赤くなった愛香がお返しに舌を入れたことで、絵理はたちまち、頭から湯気を噴き出す勢いで耳まで真っ赤になってしまう。

そしてそんな二人を見てようやく察した秋乃は顔を赤らめながらもお幸せに、と言葉を送り、鞆から顔を出すチイがひゅーひゅーと吹けもしない口笛で囃し立てる。

徒競走ではずっと三位だった。

中学の三年間、死に物狂いで頑張ってきた吹奏楽は全部ダメ金で終わった。

だけど、ここにあたしの一番がある。

愛香は絵理に甘えるように頬をすり寄せながら、絵理もそうするのに応えてしばらく立ち止まり、もう一度エンゲージリングを交換するようにベーズを交わす。

ああ、きつと。

「……愛香……」

「絵理」

—— だいすきです。

何度も確かめるように、二人は互いに囁き合う。

その蹉跎だらけの軌跡はきつと、この世界にありふれたもので、それでもそんなありふれて、途絶えた場所だらけの足跡が連れてきてくれた奇跡は、きつと。

愛香と絵理、そしてチイと秋乃、四人まとめて「リビルドガールズ」であることは、そして愛香が絵理と互いに恋人として同じ目線に立つことができたのは。

きつと、この世界で例えようもない、小規模だけれど、唯一の、奇跡だった。

リビルドガールズ・エクストラミッション Ex. 01:「割と平穏なGMの一日くプラスチック の雨が降る」

他の人から見たらどうかはわからないが、愛香はバイト先に知り合いが来ても動じることはあんまりないと思っっている。

実際、ガンダムベースシーサイド店にひよっこ顔を出した恵美にも「なんかGBNに使うやつ以外でガンプラ組みたいからいいの教えて」とか定番のことを聞かれたから、迷わずEGガンダムを勧めた経験があった。

さりとて例外があるというのが物事の常だ。

シーサイド店の制作ブースに長身を丸めて入り浸っている、どことなく疲れたような胃を痛めてそうな、目つきの悪い男性客を一瞥して、愛香はなんとも言えないような気持ちを抱く。

「あのお客さん、ガンダイバー好きなんだねえ」

「そうですね店長、あははー」

ほっこりとした店長の言葉に返した愛香の笑いは乾いていたし、それはもう見事なまでの棒読みだった。

どことなくほのぼのとした顔で、日曜日だというのに、ぴっちりとしたスーツを着こなしている彼は閉店時間ギリギリのいまも制作ブースに入り浸っている。

そしてガンダイバーとガンチョッパーをそれぞれ三機ずつ組み上げて塗装までやってのけている彼は、店からすれば間違いなく上客であることに違いはない。

自前で大きなエプロンだって完備しているし、エアブラシを使う時には常に使い捨て手袋を嵌めて、吹き返しが無いような距離を保ち、塗料の扱いに細心の注意を払っている辺り制作技術もガチ勢のそれだ。

しかし、世界でそんなだけガンダイバーが好きな人、という条件で脳内のデータベースを探れば、愛香の中で心当たりがあるのはたった一

人なわけ。

(あれ絶対GMだよね……なんか声も似てるし……)

その隣で黙々とEGガンダムの肉抜き埋めと一部パーツをHGUC、REVIEWE版のそれに置き換える作業をしているヒロトが気付かないふりをしてるのか単に本当に気付いてないだけなのかは、愛香にはわからない。

しかし、とにかく異様に気まずい。何かやらかしたというわけではないのだが、目の前にいる目つきの悪い人がGMだと思つくと、謎の緊張感めいたものが愛香の心に差し込んでくるのだ。

「……やはりガンダイバーはいいな、癒される」

そんな愛香の事情はつゆ知らず、トップコートを吹き終えたガンチョップパー三体を、先に仕上げていたガンダイバーたちと一緒に並べて眺めながら推定GM——確かにカツラギその人はすっかりご満悦といった風情の表情を浮かべていた。

「SDガンダムフォース、好きなんですか」

「うむ……子供の頃の思い出ね」

「わかります、俺も……小さい頃はファーストガンダムを子守唄がわりにしてましたから」

その隣で黙々とHGUCガンダム、リバイブ版の脚部を幅増し——幅詰めとは逆に切断してプラ板を挟み込むことでポリウムを増す作業を指す——をしていた少年、クガ・ヒロトは気づいているの気づいていないのか、ほっこりしているカツラギを一瞥すると控えめにそう問いかけた。

そしてカツラギは少し照れ臭そうにしながらも、己の若かりし頃、テレビの前でシュウトと共にキャプテンガンダムへと声援を送っていた自分を思い返しながらか、彼の問いを肯定する。

愛香たち、「リビルドガールズ」がGBNを巻き込んだどったんぼつたん大騒ぎなあの「ELダイバー奪還戦」から何ヶ月という時間がたった。

電波障害の原因となった三十光年先の惑星——エルドラから、「ア

ルス」と名乗る電子生命体なのかそうでないかはわからないがインベーダーが現れて、あの奪還戦に勝るとも劣らない戦いが繰り広げられたのだが、それを何とかした、否、ずっと何とかしてくれていたのが愛香の目の前にいるヒロトと、もう一つの「ビルドダイバーズ」だった。

あれから一週間、久しぶりの長期休暇ということもあって、目の下に隈こそ浮かんでいるが、カツラギの表情は非常に明るい。

胃薬の世話にならないで済んだのはいつ以来か。

ガンダイバーたちの隣で整列するガンチョッパー、そしてヒロトが組み立てている彼だけのEGガンダムを見て、カツラギは満ち足りたようにふっ、と短く笑う。

マニア同士は多くを語らないとはどっかの有名な漫画の格言だが、二人の会話はまさにそれを体現するものだった。

ヒロトが何となく熟練した雰囲気を出していたことはわかったのだが、作り込みの腕前もさながら、短く返した言葉の中に大きな感情を封じ込めたあの声音はガチだ。プロのそれだ。

そしてそれはカツラギも相当なものだった。

彼らは多分、愛する作品か各話の台詞とか全部暗唱できる人種に間違いないと愛香は確信する。

「……平和、なのかなあ」

「平和だよ、愛香ちゃん」

「平和の中にあたしの平穏がないってなんだか皮肉みたいですわね……」

向こうが楽しそうなら、バイトのあたしには関係ないし幸いなことなんだろうけど。

愛香は自嘲するが、その顔からは微かな笑みが溢れている。

そうだ、何も問題はない。ただヒロトとSDと初代談義で盛り上がっているカツラギの笑顔と冷徹なガンダイバーの姿が重なり合わなくて脳が処理落ちを起こしそうなだけなのだ。

「……まあ、いっか」

そもそも誰がどこで何してても、どんな過去を持ってても気にしな

いのが「リビルドガールズ」だ。

ならば自分がそれを気にするのも野暮に違いな。

ここにチイちゃんがいたら相当渋い顔してるんだろな、と、誤魔化すようにそんな他愛もないことを考えて愛香は苦笑する。

だけど、生憎彼女は今日、ようやく人と会話できるまでに回復した愛する姉——イリハと一緒に本店の方に出張している。

サラが休みだからだ。たまにヒロトたちと一緒に行動しているE.L.ダイバー、「メイ」もシーサイドベース店で接客をしてくれるが、彼女はバトルがしたいという感情から生まれたらしく、緑色のゴシックドレスに身を包んだその姿を見られるのは稀だ。

「早くバイト終わんないかなあ」

別にこのアルバイトが楽しくないわけではないのだが、どうしてもこの後に待つてることを考えると気が抜けてしまう。

モップの柄に顎を乗せながら、無意識にそんな言葉を愛香の唇は出力していた。

「聞こえてるよ愛香ちゃん」

「す、すみません……」

やんわりと咎めるマツムラ店長の言葉に恐怖しつつ、愛香はカツラギとヒロトの観察をやめて与えられたタスクに戻っていく。

あの推定GMにとつてのガンダイバーは、このいつも殺伐として退屈な日常の掛け替えない癒しなのだろう。

そう、それは丁度愛香にとつて世界でただ一人の彼女にして大事な人、例える言葉が見つからないその名前と同じように。

—— 絵理。

退屈を誤魔化すように、そして会いたいと願って、愛香は小さくその名前を口ずさむ。

もうすっかり二人の家になってしまった自分の部屋で帰りを待つ彼女の姿を思い描きながら、愛香はただ、無心でガンプラコーナーの床にモップをかけ続けるのだった。

「……つてなことがあつてさあ」

パチン、パチンとニツパーでゲートからパーツを切り出す音を響かせながら、バイトから帰ってきた部屋でサボった分のサービス残業として、という店長のジョークと共に渡された、元から作る予定だった店頭展示用のサンプルである「HGUC E x Sガンダム2号機ブルースプリッターカラー」を愛香は組み立てる。

ベッドの隣に腰掛ける絵理に今日の一部始終を面白おかしく語りつつ、現代の技術で蘇ったその複雑極まる分割に、心理的な面で苦戦しながらも慣れた手つきでE x Sガンダムを組み立てていく。

「……GMも、やつぱり人なんですね……」

「むしろ、今まで人じゃないとか思ってたの？」

ほっこりとした笑顔を浮かべて答えた絵理に、作業に飽きてきたのもあって少し意地悪な笑みを浮かべて愛香はそう問いかける。

「……あ、いえ、その……ただ、ガンダイバーと、その……愛香から……教えてもらった人の特徴が、重なり合わなくて……」

「うん、間近で見てたあたしも脳がバグりそうだった」

いや、本当にGMを人間扱いしてないわけじゃないんだけど。

ブチギレたのか、あの「アルス」との最終決戦に直接ガンパンツァーでエントリーしてきて修正パッチ砲をぶっ放していたGMの「不正アクセスは許さない……!」という言葉に込められた凄絶な怒りが、昼間のちよつと目つきが悪いだけでほっこりした笑顔を浮かべる壮年の男性とどうしてもコンフリクトする、それだけの話だ。

愛香は嘆息しつつ、ぱちん、ぱちんとパーツを一度、ほんのちよつとゲートを残す形で切り出して、残ったゲートをもう一度、今度は奮発して買ったちよつとお高い青い柄のニツパーで丁寧に切り出していく。

素組みで綺麗に見せるというのは、塗装で仕上げるのとはまた違ったバクトルでの難しさと緻密さが要求される。

二本のニツパーを目まぐるしく持ち替える手間に心が折れそうになりながらも、愛香は会話が途切れてもどこか上機嫌に、鼻歌まじりに愛香に頬をすり寄せている絵理の存在をモチベーションにして、E x Sの胴体と両腕を完成まで導いた。

「なんだか上機嫌だね、絵理」

「……はい……なんだか、愛香がニツパーでパーツを切り出す音、落ち着くので……」

雨みたいで、と、絵理はどことなく風情を感じさせる言葉を残して再び、急かすように、愛香の肩へとその頬を擦り付け、腰に手を回してしなだれかかってくる。

——誰の帰りも待っていなかった部屋に、プラスチックの雨が降る。

物理的に降られたら降られたで掃除に困るからと箱の上でゲートを切り出していたのだが、その音を雨に例える感性は、きつと絵理にしかないものだ。

彼女が見えないリアルで見ているものに触れた気がして、愛香はどこか気恥ずかしさと愛おしさが緋い交ぜになったような感情を抱く。温かな綿で心臓をそつと包み込んで締められているような、心と心のどこかが触れ合う感覚は、繋がりがあってもまだ気恥ずかしさを覚えないかと言われれば嘘になる。

しかし、それは自分のことのように愛しいからで、慈しいからで。絵理が傷痕と義眼を曝け出しても笑っている、それだけのことを愛おしく思う。

それはきつと、世界でたった一人、自分にだけ許された権利だと思うのは傲慢だけれど、それでも彼女の頬に触れられるのは、彼女が頬に自ら触れようとするのは、愛香しかないのだ。

ぱちん、ぱちん。

プラスチックの雨を静かな部屋に降らせながら、愛香はその時間を噛みしめるように、作業へと戻っていくのだった。

それはそれとして、ガンダムってなんで手足が二本あるんだろうと、この後に控えている両脚の組み立てにげつつっそりするような感じ、ガンプラの組み立てに慣れた者であればこそ覚える想いを抱きながら。

EX. 02:「闘えバンデット・レーザーズくチイといりハの小さな木漏れ日」

人類が他人と共生せざるをえない時、真つ先に気にするものは何か。

それは人によつて様々なのだろうが、とりあえず身近な範囲に、マンションだとかアパートだとかに限定して考えるのであれば、その答えは間違いなく「音」の問題に違いない。

曰く隣人が睦言を囁きながらスプリングを軋ませる音がうるさいから、音圧を割れるまで高めた、今はなき鎌とハンマーの国がそのテーゼとして掲げていた歌を流していたら壁を殴られたのだ、今年も申年だと盛り上がっていたら壁を蹴られたのだ、そんな逸話は電子の海を泳げば掃いて捨てるほど漂っている。

それに関してはGBNも全く同じで、つい最近まで運営も一日何百通と届く勢いのお怒りメールボムに頭を抱え続けていた。

デイメンション・シユバルツバルト。

永遠に太陽の光が差すことのないそのデイメンションは、鬱蒼と茂った空と同じ色をした漆黒の葉に飾られた樹海と、中心部に聳え立つ毒々しいまでの虚飾、地上に人類が灯した文明の星によつて瞬くメガロポリスなどで構成されている。

問題はそのメガロポリス——「ハイウインド・エリア」において、主に発生していた。

異星から来訪した電子生命体「アルス」によるGBN襲撃から数週間、未曾有の危機はもう一つの「ビルドダイバース」と、「マギー」が帆を掲げ、「キャプテン・カザミ」の漕ぎ出した船へと乗り込んだアルゴノーツたるダイバーたちとブチ切れたGMの手によつて解決されたのだが、それでもアクティブ二千万を抱えるゲームで細々とした不安が消えてくれるわけではない。

その苦情は丁度、全世界を覆った未曾有の電波障害——公表こそされなかったものの、「アルス」によつて三十光年先にある惑星「エルド

ラ」から発射された超巨大兵器による余波であるとされる——から数週間前から、GMに届く回数が増えたとされている。

きつかけとなったのは、今は運営スタッフとまではいかなくとも運営会社の大株主として君臨する「桜宮グループ」における代表者の令嬢である凜音が、ダイバーネーム「アリア」が行った一つの生放送だった。

バンデット・レース。

山賊の、無法者の名を冠するその競技は「ハイウインド・エリア」のメガロポリス、その大動脈である「ストレイ・ハイウェイ」を一部のダイバーが不法に占拠する形で細々と行われていたのだが、アリアとその一部のダイバー……フォース「パロツツ・パーティー」の決戦に感化された者が次々と現れて、本来であれば永遠の夜景を楽しむために作られたその都市は世紀末無法地帯と化してしまったのだ。

これにコンテンツ内写真共有サービス、ガンスタグラムを中心として活動するダイバーたちは激怒した。

かの邪智暴虐の鳥頭全身タイツとリーゼントに特攻服という出で立ちの連中を除かなければならないと決意したのだ。

バエルならぬ映えるを求めてガンスタグラムの魂をその胸に宿す者たちにレースの楽しみはわからぬ。

ただタピオカを啜って、百万ドルの夜景をバックに自撮りをすることで暮らしてきた。

けれども彼ら彼女らは自分たちの夜景が変態の編隊に占拠されることに関しては人一倍敏感だったのだ。

バリケードを掲げて、ジム・クウエルをその背後につけながら「バンデット・レースの開催に抗議する」という横断幕を掲げた彼女たちと問題の鳥頭全身タイツたちは一触即発になった——かと思いきや、そんなことはなかったりする。

確かに「パロツツ・パーティー」の格好は紛れもない変態のそれだ。

現実で遭遇したら二秒で指がエマーシージェンシーコールから110番へと押されているのに違いないそれだ。

しかし、彼らは誰かに迷惑をかけたわけではなかった。

ただひとえに、「バンデット・レース」という、リアルでは決して味わうことのできない、この仮想の海におけるバーリ・トワード（なんでもあり）なルールに則って行われる最速の世界、その魅力を多くの人に知ってほしかっただけなのである。

これに対して責任逃れを十八番にする、運営の上司たる経営陣はまともや胃痛を患ったGM、カツラギを通してアリアに、というか凜音に直訴したのだが、彼女としてもそんなつもりはなかったのでカツラギと二人で頭を抱える他になかったのだ。

しかし、金の匂いがそこにあれば、群がってくるのが銭ゲバというものだ。

ほとほと困り果てた凜音——アリアが、「リビルドガールズ」のフォー스ネストを訪れたその時、「いい案がある」とばかりに手を挙げて積極的に名乗り出たのは案の定その銭ゲバチイに他ならなかった。

『んふふ……チイにいい考えがございやすぜ、アリアお嬢様』

『まあ、それは頼もしいですね、してチイ、貴女の考える名案とはいかに？』

『任してください、それは——』

果たして銭ゲバの介入によってバンデット・レースの血筋は途絶えてしまったのか。

一部の、本気でバンデット・レースを憎んでいた者たちにとっては悲報であったが答えは否である。

「さあ張った張ったお客さん方！ 今宵走るは未だに敗れぬ常勝の王者、変た……独特なセンスに唯一無二の愛を込めた『パロツツ・パーティー』と、新進気鋭のスピード狂！ ヘアピンカーブの事故はハードラックと踊っちまった愚か者、神を名乗る挑戦者、『ゴッドスピーズ・ラヴァー神速究愛特攻族』だぜー！」

チイの快活な営業トークが、「ハイウインド・エリア」の中心に店を構えているバー「ナハトカイゼル」のホールに響き渡る。

彼女の提案は至ってシンプルなものだった。

なに、あの鳥頭全身タイツの変態が不法に高速道路を占拠している？

——なら、合法化すればいいじゃん。

正にコンブスの卵、コペルニクスの転回。チイがエリアを通して運営へと提出した対策案としては、まず騒音の原因となる「ストレイ・ハイウェイ」を防音効果のあるビームロープで遮断するというのが一つだ。

これにより、愛の睦言を囁き合うカップルの横で爆発音が聞こえたり、大音量でガンダムの主題歌を流しながら高速道路を突っ走るギガンやガリクソンといった問題は解決できる。

だがそれだけでは臭いものに蓋をしただけだ。根本的な解決にはなっていない。

勿論、それをわからないチイであるはずがない。故にこそ彼女は二つ目の切り札を用意していた。

毎週水曜日及び、土日を隔週で切り替える計二回の定期イベントとしてバンデット・レースを正式に登録し、「ハイウインド・エリア」で野試合を行う場合は両者が協議をした上で運営へとその旨を申告することを義務とする。加えて、デイメンション・トワイライトの接続人数が少ないエリアに練習用フリーコースを制作する。

それがチイの導き出した必勝への方程式であり、とにかく走りたい者たちと、夜景をバックに星一杯バエたい奴らの需要を同時に叶える、正に悪魔のチャートだった。

元々デイメンション・トワイライトは北極圏や南極圏をモデルにしているため、面積の七割を海洋が占める不人気エリアであり、その中でもとりわけ人がいない極圏エリアに人を呼び込む需要としてのフリーレース場を作る、というのは確かに彼らだけではなく運営にとっても利益がある。

一ヶ月をかけて整備されたチイの提案は、果たして身を結ぶこととなり、「バンデット・レース」は無法者たちの野試合から、最速に命をかけるファイターたちの正式な決闘へと格上げされた。

その無法性を好むのであれば唯一例外的に、「デイメンション・トワイライト」に設けられた、このメガロポリスに極めて近い、というかほぼ構造をコピーした極圏ドーム都市で行えばいい。

かくしてバエたい彼らと走りたい彼らの問題は見事に解決されたのだが、タダ働きをするのであれば銭ゲバなどやっていない。

チイはその功績に対する対価として、「公式開催されるバンデット・レースに賞金及びトトカルチョをつける」ことと、「自分たち『リビルドガールズ』がその胴元の代理人を務める」ことを要求してみせたのだ。

「俺は『神速究愛特攻族』に1万BC!」

「あたしは『パロツツ・パーティーに』3万BC!」

「んふふ……その若いお二方、ノってるね？ さあさあ若い二人に負けちゃあいけない、ベットは試合の五分前まで受け付けっからじやんじゃん賭けてってない!」

そして代理人の手間賃として、「リビルドガールズ」というかチイは賭け金総額の一角を授受する。

それこそがチイの編み出した新たな「稼ぎ」であったし、現実でやろうものなら公権力とヤの付く自由業の方々に沈められかねない蛮行であったが、残念なことにはここはGBNだ。

もう好きにしてくれ、と、彼女に借りがあることもあって、GMはどうせ上手くいかんだろうと半ばヤケクソでその案を承認した。

しかし目論見と違ってそれは見事に成功してしまったことで、彼の新たな胃痛の種になったのだが、その成果を鑑みればさしたる問題ではないと断言できよう。

果たして迷惑な鼻つまみ者だったバンデット・レースは、チイの奇策によって音を遮断してこそいるが、一部のバーやカフェでは常に中継されるため、夜景を楽しみつつその過激な最速の世界を垣間見る、というのは「デイメンション・シユバルツバルト」における新たな名物であり楽しみ方となっていたのだ。

『シャバイ……シャバイ現実をオレは歩いてきた』

『目を見ればわかる。君は……この最速に飢えていた』

『ああ…… 女と抱き合うよりもオレはただ、この神速が見せる、幻想ユメに抱かれて酔いてエんだ……』

『それは私たちとて同じ！ ゴツド・スピード・ラヴ！ これ以上に言

葉が必要かね、特攻族！』

『いらねエなア……鳥たち！』

試合開始五分前、ベットが締め切られて、画面の中には「ハート」が操るパロットスクランブルと、なんか読みづらい上に独特なルビが振られてるフォースを率いる男、「ピロシキ」の操るZZガンダム、というかGフォートレスのハイパー・ビームサーベル部分にV2ガンダムのミノフスキー・ドライブを搭載した改造機、マックスフォートレスV2「超最大愛神速特攻号」がスタートラインに轡を並べている。

「……ねえエリイちゃん。なんていうかあたしたち、どんどんヤの付く自由業めいてない？」

「……そ、それは……その……ごめんなさい、ちよつと否定できないかも、です……アイカさん……」

そんな地獄みたいな絵面の中で目のハイライトをBCの文字に変えているチイを見て、席の隅っこに座ってモニターを眺めているアイカとエリイは嘆息する。

現実でこそ呼び方は変わったが、始まりのGBNではそのままを大事にしようということと呼び方も、決めポーズを取らない以外はロールプレイもそのままにしている二人だったが、苦笑しているエリイはともかく露骨にげっさりしているアイカはそのメツキが剥がれている。

——まあ、いつものことではあるのだが。

「すみません、後で私から言い聞かせておきますので……」

日曜日のゴールデンタイムで昔よく見た、子供が空き地で野球をしていたらホームランで隣家の窓ガラスを割るといのはちょうどこういう感覚なのだろうかと、二人から目を逸らしつつアキノがどこか申し訳なきげに答える。

すっかりげっさりしていた「リビルドガールズ」だったが、その中にはただ一人、賭け金を回収しているチイを、きらきらと目を輝かせて見つめている者がいた。

「チイ……たのしい……？」

チイと瓜二つの顔つきだが、髪を伸ばしてサイドテールを右側、つ

まりチイと反対のところでは括っている少女——彼女の姉である「イリハ」は、さつそくほくほくとした笑顔で「リビルドガールズ」の座席に戻ってきたチイへと語りかけた。

「ん、最高に楽しいぜイリハおねーちゃん。やっぱ世の中金だよ金、付けけ」

「チイ、たのしい……おかね、わからない……でも、イリハ、たのしい……」

声こそよく似ているものの、チイと違って迫り方や喋り方で言葉を紡ぐ姉を、チイは金だよ金と言っていたのが嘘のような、さながら聖人のごとく清らかな笑顔で見つめている。

ああ、よかった。

運営公認G—Tuberの女性が後見人になつてると聞いた時は不信感を抱いたものだが、「サラ」や「メイ」も話し相手になつてくれたらしく、そのおかげでほとんど元の人格を取り戻したイリハは、今度はバンデット・レースが中継されるモニターを見て無邪気に笑っている。

「……お前は四六時中こんな調子なのか？」

そして、「リビルドガールズ」の隣に、イリハの後見人というか保護観察者代理としてついてきたことで腰掛けていたメイが、呆れたようにチイへとそう問いかける。

「メイねーちゃんがバトルしたいって思うのと一緒っしょ？」

「まあ、それもそうか」

「あ、それで納得しちゃうんですね……」

アイカが呆れた通り、メイはチイの言動をさして気にする様子も見せず、他の観客と同じく闘争の気配に満ちた画面を注視していた。

アイカのコアガンダムを通じた奇妙な繋がり、そしてイリハとの繋がりから「BUILD DIVERS」と関わることとなった「リビルドガールズ」だったが、概ねこの調子で平行線というか、特別親しい間柄というわけではない。

「ふふ……イリハ、たのしい……いきてる……たのしい……」

「ちよ、泣かないでつてばイリハおねーちゃん！」

「だいじよぶ……イリハ、かなしく、ない……チイとまたあえた……だ
いすき……たのしい……」

チイが手玉に取られているというのも珍しい。

涙ぐみながらも確かに笑っているイリハに翻弄されるチイを見つめて、「リビルドガールズ」の三人とメイはどこか、世話の焼ける子供を見ているかのように苦笑する。

穏やかで、それは永遠に光の差さないこの「デイメンション・シユバルツバルト」において、木漏れ日のような優しい温かさを、自分たちの胸に運んでくれる気がした。

——画面に映る、暴走族と変態の編隊の決戦を除けば。

一瞥した画面の惨状に観客たちが歓声を上げるのにアイカはなんともしえない表情を浮かべながら、再構築された姉妹の愛をそつと見遣るのだった。

EX. 03 「恐れと畏れ」FOEさんと奇妙な夏の
日」

幽霊の正体見たり枯れ尾花。

こんな狂歌が詠まれた通り、伝説や伝承に現れる「怪物」というのはその恐怖の根源を「未知」にしている。

故にかつての人々は理解を超えた出来事に、妖怪変化の仕業である
と名前をつけて、その名前によって「理解」をしようと、そして恐れ
敬うことで、何とか超常と日常を共存させようとした。

しかして科学が発達し、未知のほとんどを既に塗り替えたこの世
界において、全てが枯れ尾花、かつて恐れられた奇病はヒトの手で根
絶されて、そしてかつて妖怪だとされていたものはあまりに悲しい歴
史の断片であったと暴き出されたのがこの世界なのだろうか。

十分に発達した科学は魔法と区別がつかない。

どこかの誰かが残したそんな格言と同じように、GBNの存在はも
はやある種の魔法であるといっても過言ではないのだろうか、山道
を登りながら山南京介——その妄想郷の無法地帯にてFOEさんの
あだ名で恐れられる、ダイバーネーム「キョウスケ」その人である——
は考える。

彼が山を登っているのは、山頂で行われている撮影現場にいるアイ
ドルを迎えに行くため、駐車場からだいぶ離れた場所であつ獣道を
通らなければならなかった。

人が山を登るのはそこに山があるからだ、なんて答えた人は訊いて
きたことそれ自体にほとほと困り果ててそう答えたとか、そんな逸話
をどこかで聞いたことがある。

国語の文章題に父親の書いた小説が出されたから「作者の気持ち」
を聞くために問いかけたら締め切りに追われていたからわからんと
回答を経て、そのまま書いたらバツにされたという娘がいるだとか、
「枯れ尾花」の累計は枚挙にいとまがない。

しかして、本当に人類は科学の、文明の灯で全てを照らした気に

なつてこそいるものの、その実生存圏として整備されたのは都市の一部であり、こうして手付かずの自然、というより手をつけられない自然はこの国の首都たる東京にも確実に存在しているのだ。

京介は黒いジャケットを脱ぎながら額の汗を拭い、大昔の飛脚はこんな整備されていない道を走っていたのだろうかと思息する。

「僕も文明に毒されているな」

そうは呟いたものの、文明社会を否定するような行い自体は京介自身も愚昧だと思っている。

精神的な豊かさと物質的な豊かさは必ずしも直結するものではない。

だがたまに、文明から切り離された場所にこそ本当の豊かさがあると他人にもその持論を押し付けてやまない輩がいるのが問題なだけだ。

個人で思う分には何も構わない。ただ、他人に押し付けた時、そこに物質的な痛みを伴わなくとも思想もまた暴力となりうるのだ。

京介は文明によつて無事に生まれてこられたことを自認している。生まれることと死ぬことが鏡合わせだった時代から、死は随分遠いものとなった。

それはひとえに文明の灯が照らした結果であり、人類が自然に対して勝ち取ったものだといつてもいい。

しかし、どこか目の前に広がる山道は無限に続いているような雄大さを湛えている気がして、そこにどことなく畏敬であるとか感謝であるとか、そういうものを抱きたくなる気持ちもわかるのだ。

額に浮かぶ汗を拭い、時折制汗剤を噴霧しながら、京介は無限に続いているような山道を無心で登る。

聞こえてくるのは蝉時雨と、吹き抜ける風に木々がざわめく音ばかりで、そこに人の気配はどこにもない。

だが、そんな場所にその社は静かに佇んでいた。

「山頂への中間点か……？　こんなところに神社があるとは聞いていないが……まあ、何かの縁だ」

幸いなことに自身が担当しているアイドルに関する悩みはない。

つい最近ちよつとした軋轢があったものの、対話によって乗り越えることはできたし、その頂点にある栄冠は祈りによって得るものではなく、彼女が自らの手で掴み取るべきものだ。

故に、仕事については「決着は人間の手でつけます、だからどうか手をお貸しにならないで」というトビア・アロナクスが漆黒の宇宙へ旅立つ時に抱いたものが祈りとなるだろう。

そうなれば、残っているのはGBNだ。

39位を定位置として、つい最近まで28位を行ったり来たりしていた京介が漠然と感じていたものは、己の限界だった。

元々、グイバインドブルオークアンタを組み上げたのは現実における芸能事務所が合同で主催する、アイドルによるアイドルのためのアイドルのガンプラバトル大会——「Worldwide Idol Network Gunplabattle tournament」において、フォースとして参加することになった担当アイドルたちの指南役をやるためだ。

あの「ELダイバー奪還戦」において、個人ランク10位たる「テニコ」との勝負ではそれが噛み合ってくれたから何とかその機体到手傷を負わせることができたものの、それだって複数の制約があつての話だ。

「僕も大概ナーバスになっているな」

こういうことを考えてしまえば、それだけドツボにハマるから本来ならば考えない方がいいとはどこの誰が言っていたのだったか。

賽銭箱に500円玉を投げ入れて、からんからん、と鈴を鳴らしながらも京介はどこか漠然と、「己の限界がそこにありませんように」と、無意識に祈っていた。

だからなのかもしれない。

不意に風のささやきが、京介の耳朶を打った。

それは本当に木々がざわめいただけなのかもしれない。

或いは暑さにやられていて、蝉時雨の中に幻聴を見出してしまっただけなのかもしれない。

鞆からスポーツドリンクを取り出して喉に流し込みながら、京介が

気のせいか、と眩こうとしたその時だった。

「なんじゃお主、惑うておるのか」

賽銭箱の上に腰掛けた、銀髪に巫女服という少女が飴玉で出来た鈴を鳴らしたかのような声音で、老獪な言葉を紡ぐ。

「さつきから話しかけておったのに気づかんとは、お主、筋金入りの鈍感じやな？ そうなると——ふふ、あの童も大変じゃろうて」

「……君は？ 失礼だが、賽銭箱に乗るのは良くないよ。神様が怒ってバチを当てかねない」

「……お主本当に堅物じゃの、妾がどうしようと妾の勝手じゃがまあ良い——久しぶりに五百円も祈りに使こうてくれたさーびすじゃ、立つとしよう」

くあ、と小さく欠伸をしながら少女は緩慢に立ち上がって、困惑する京介を覗き込むように小さく背伸びをする。

大人であろうと冷静に振る舞ってこそいるが、そこにある京介の迷いを感じ取って、少女は小さくししし、と悪戯な笑みを浮かべた。

ここに迷い込んでくる人間は二種類に分けられる。

足元の小石を草履で小さくつつくようにゆっくりと京介に歩み寄りながら、少女は長い間、あまりにも永い間見つめていた世界からの結論を頭の中に思い描く。

一つは知りたがりの愚か者だ。

自然を踏み荒らし、自らが松明を掲げて神秘の全てを暴こうとしている探究者なのかそれともただのバカなのかは知らないが、えてしてそうした輩には、少女はお帰り願っている。

もう一つはちようど、今の京介のように何か強い祈りや迷いを抱えている人間だ。

彼らは恐れている。

それが意識的であれ無意識であれ、目の前に広がる雄大な自然の中で、人間というのはちっぽけな、それこそ宙を舞うひとひらの塵にすぎないということを理解しているからこそ、自らの矮小さをどこかで恥じ、或いは悔やみ、或いはそれに抗わんともがいている。

だがその根源は全て恐れへと接続される。

京介の瞳を覗き込みながら、少女はそこにある、子供が闇の中で膝を抱えて座り込んでいるような恐れに向けて、囁きかける。

「お主、役割に囚われておらんか？」

「……役割？ 一体君は……」

「妾がなんであるかなど関係なからう、そうじゃなあ……例えば今のお主はあいどるなるものの、まあ巫女じゃな、巫女のぷろでゅーさー……？ ええいややこしい、仕掛け人をやっておるのじゃらう」

「……何故、それが」

「くふふ、目を見ればわかる。お主のそれは誰か一人を映すものじゃ、そのためになら命だつて懸けられる、バカと紙一重の真剣な証拠じゃよ」

指先に蜻蛉を止まらせながら、少女は朗々と、まるで歌劇を演じるかのように言葉を紡ぐ。

京介は、言葉にこそ出さないが確かに彼女を恐れていた。
不気味すぎる。

人の目を見ただけでわかる、とは業界人の間では通じることだが、まさかこの、担当アイドルよりも遥かに年下に見える少女もアイドルで、偶然ロケ地近くの神社に来ていました、なんて確率は今から頭の上に隕石が降ってくるそれに等しいものだ。

しかし同時に京介は少女を畏れてもいた。

理屈で説明できない不気味さこそあるものの、その観察眼は「目を見ればわかる」。長く人間を見てきたものでなければ、殺伐とした芸能界を生き抜いてきた京介の瞳の奥底など、覗けはしない。

それに、どうしてか思い出すことができないが、どこかで会ったような——容姿に見覚えは確かにないのだが、その甘ったるくも老獪な言葉遣いはよく慣れ親しんだどこかで聞いたことがあるという確信が、胸の中に息衝いているのだ。

「お主、相当決意が固いの。妾のことをこの場で微かでも覚えていられる……これは相当なものじゃぞ、誇っても良い」

「……決意、とは」

「何、そなたを縛る鎖と同じものじゃよ。陰と陽、光と影は同じ絵札の

裏と表。決意とは頑迷であり、頑迷は岩をも通す一念ともなる」

己の細い指先から飛び立った蜻蛉を見送りながら、少女は静かに、まるで泣いている子供に言い聞かせるような口調でそう語った。

長所と短所はえてして、裏返しになった同じものだ。

就活の時の自己分析セミナーとやらで耳にタコができるほど聞かされた言葉だが、それは間違いなく一種の真理、宇宙に定められたルールだといっている。

例えば規則正しい人間がその規則を破る者を許さないように、礼儀正しさは礼儀に縛られていると言い換えられる。

例えば無計画に旅をしては放浪する人間は、計画するだけ計画して何もしない人間よりは行動力があるといえる。

要するに何事もいいことばかりではないし悪いことがあって、悪いことばかり続くのではなくどこかにいいことが転がっている。

そんな風に考えられること自体がある種の幸福であることは否定しない。

必死に日々を送れば送るだけ、ただその世知辛さに縛られることの方が多いのだから。

だから少し立ち止まれと、この子は言っているのだろうか。

京介は微かに訝しむ。

「己の手札が沢山あっても、そこで使う役を固定してしまっていては……勿体無いじゃろう?」

あえてハズレを引くのもまた楽しみ。しかして、常に博打を打っては愚か者。

その均衡こそが大事で、京介にはその均衡が欠けていると少女はじつとその目を見つめながら、指をさして断言する。

「……君が、GBNについて知っているかどうかはわからない」
「うむ」

「……確かに僕の悩みは、デイベインダブルオークアンタを……いや、違う。大好きだと思って作ったガンプラの可能性を、自分が信じてやれないということだったのかもしれない」

会ったばかりの少女にこんなことを零すのも情けないと思いなが

らも、京介の唇はどうしてかその言葉を、己の中にあつた焦りを、恐れを紡ぎ出していった。

「壁に当たった時、真つ先に疑いたくなるのは己の限界だ。伸び代がどれほど残っているかなんて、それこそ神様しかわからない。だからこそ、人は、いや、違うな……僕は焦つて、才能を言い訳にしようとしていた」

「うむ、よくぞ……その答えに辿り着いたの」

恐れを認めて、敬うことが、立ち向かいながらも背中合わせのそれを拒絶するのではなく、手を繋いでいくことこそが寛容なのじゃ。

少女は満面の笑みを浮かべて、腰に手を当てながらそう言つて胸を張つた。

自分以上のものを目指すあまり、足元が見えなくなるなどよくあることだ。そしてそれは、何度も京介が陥つてきたことだった。

ならばその度に自分はどうやって立ち直つてきたのか。

答えは簡単だ、まだ至らないことを認めて、まずは一步を踏み出す。壁に恐れるのではなく、その届かない未来を畏れて、夢を見ながらも現実を踏み締めて歩いていく。

それは何もGBNに限ったことではない。

現実でだって、京介は担当アイドルと共にそうやって歩んできたのだから。

「……ありがとう、会つたばかりの僕の悩みなんかを聞いてくれて」

「なあに、賽銭の礼じゃと言つておるじゃろう、キョウスケの坊よ——強い祈りというのはな、強い恐れと敬いはな、妾たちにとってはそれだけで嬉しいものなのじゃよ」

いつか人々は、この星を離れて遙か遠くまで旅立っていくのかもしれない。

太陽を掴むように手を伸ばしながら、少女は小さく、己の「恐れ」を誤魔化すかのように笑つてみせた。

数字にすれば数億年。星にとっての一秒は人間にとっては長すぎるが、永劫の中では短すぎる。

あの果てしない流れ、何処かに向かって進んでいく時の大河。

その景色を思えば今の地球など、泡沫の夢に過ぎないのかもしれない。

「キョウスケ？ 僕は――」

「待っておるぞ、高みでな」

だからこそ、夢を見よ。

故にこそ、夢に挑め。

ならば妾は敢えてその壁となろう。敢えてその未来を示すことで、瞬く星の一刻を生きる人々にとって、より実りある太陽の光となろう。

少女はそんな、己が抱く決意にもよく似た夏の日差しのような微笑みで、迷い込んできた京介を送り帰す。

きっと彼なら、そして彼の愛機たる聖騎士、デイバインダブルオークアンタならすぐに10位代まで来てくれることだろう。

だからこそそんな近い未来に、少女は、一人の戦士とあいまみえることを夢見るのだった。

「あのー、大丈夫ですか？」

「ん……？ すまない、君は……？」

「あ、私この神社に用があつてきたヒナタ、つていうんですけど……えっと、暑い中ずっとぼーつとしてたから大丈夫かなって」

「……ぼーつとしていた？」

確かに長時間、どこかで何かをしていたような感覚が自分の中に残っているのは把握している。

乾いた喉に改めて鞆の中から取り出したスポーツドリンクを流し込んでいくが、その量が、どこかで飲んだはずなのに減っていないことに困惑しつつも、京介は茹だった頭の中で考える。

目の前では、確かに旅行雑誌に載る予定の担当アイドルの写真撮影が行われていて、自分は山道の駐車場に車を停めて、それから彼女を迎えにきていて。

それから、どうしたのだったか。

どうしても思い出せない記憶の欠落に、どこか不気味さを抱きつつ

も、不思議と自分の胸の支えが取れているような感覚に、京介は小さくふっ、と笑った。

「ヒナタさんだったかな、ありがとう。僕は心配ないよ」

「そうですか、ならよかったです……ごめん、ヒロト、待たせちゃったー！」「ん、大丈夫。ヒナタ」

心から安堵したように胸を撫で下ろすと、ヒナタと名乗った少女はきっと同級生であろう、ヒロトと呼ばれる参道近くで待っていた少年と合流して、GBNがどうのこうのと他愛もない言葉を交わしながら去っていく。

「……幽霊の正体見たり枯れ尾花、か」

それは、本当に枯れたススキが見せた幻影だったのだろうか。

微かに頭の中に残る、飴玉の鈴を鳴らしたような声音を思い返して、京介は静かに、彼方へと飛び去っていく秋茜を見送った。

文明の灯は、未だ全てを照らし切れていない。

光の届かない海の底、そしてまだ見ぬ星の彼方。

そんな大それた場所でなくともそれは、案外近くにあるのかもかもしれない。

改めて神社の賽銭箱に五百円玉を入れて、からからと鈴を鳴らしながら京介はありがとう、と、そのどこかで聞いたような声に、感謝を——恐れと畏れを、同時に捧げるのだった。

Ex. 04 「シルバー・ブルースと積みプラの塔とチイの小規模なお怒り」

人はなぜガンプラを買うのか。

それは恐らくガンプラを嗜む者の至上命題にして、頭を悩ませる問いかけであるに違いない。

例えば翌月に新商品が出ると知った時、ミキシングの糧にするでもなく純粹に組みたいと思って買ったものが押し入れに眠っていたり、必要はないけど売り切れられると困るなどと思って買ったものがミキシングの素体としてGBNで活躍したり、とかくガンプラを巡る事情は複雑怪奇、蒟蒻問答だ。

本気でそんなこと言ってるの、と突っ込まれそうではあるが、実際のところプレミアムな財団のサイトで三ヶ月後に届くことが楽しみでポチったにも関わらず届く頃には別のキットにお熱だったり、逆に少年と出会った乙女座の人みたいになったりもする。

心が付いたら離れたりするのさながら恋人との逢瀬だ。

買わない理由が値段なら買え、買う理由が値段なら買うな、とはフィギュアとの一期一会な出会いを待ちわびるマニアたちの格言ではあるが、案外値段が安いから勝ったキットが運命のガンプラ——ステイニーガンダムという意味ではない——になるのとは往々にしてあり得ることだ。

ガンプラはその弛まぬ企業努力と独自の販路のおかげで、値段という点に関しては異常なほどに、狂氣的なほどにお安い。

では、その値段に見合ったチープな出来なのかと訊かれれば、ガンプラを組まないモデラーですら何を馬鹿なことを、と答える程度に、そのクオリティは異常に高いものとなっている。

本来、整形色による色分けと組み立てづらさは相関するものであったが、ガンプラはその二律背反を嘲笑うかのよう、最近は一部を除いてシールに頼ることなく設定通りの色分けを実現しながらも、圧倒的に「組みやすい」仕上がりを見せているのだ。

本来倍の値段で売られてもおかしくないクオリティのものが安価でかつ大量に店頭に並ぶとあれば、こちらも財布の紐を緩めなければ無作法というもの。

秋乃はそんな侍じみた心境で、大学帰りに家電量販店を訪れていた。

本来ならチイが勤めているガンダムベースに行つてあげるのが一番なのだがこの家電量販店、ただでさえ安いガンプラが更に割り引かれて安くなり、おまけに購入額のポイントがつく。

つまりそれはとりも直さず買つていけばいくほどお得になり、一万円を使う頃にはHGUCガンダム（REVIVE版）だとか、HGガンダム・バルバトス（第四形態）が実質無料で買えるという素晴らしい文明の産物だった。

代わりに限定キットこそ買えないものの、大学生にとってそのポイント優待制と、何より駅から近くにある、というのは大きな魅力に他ならなかった。

「しかしストライクダガーがパラシユートパック付きでキット化されるとは良い時代になったものです」

並んでいた同好の士が三分の箱を抱えて迷わずレジに並ぶのに倣つて、秋乃は「HGCE ストライクダガー パラシユートパック装備」をカゴの中に入れて、他にも何か巡り逢いがいかと、家電量販店だというのに巨大な売り場面積を占めるガンプラコーナーを散策し始める。

ガンプラというのは、見ているだけでも楽しい。

サンプルを飾るショーケースの中にはガンダムマーカークの塗料をエアブラシで吹くことができる画期的なアレで全塗装が施された作品……黒地のゴールドフレーム天ミナを天ハナに塗り替えたものが展示されていた。

ガンダムマーカーク。部分塗装とお家塗装派の共である彼らの中における白のそれが牛乳と椰掬されていた時代があった。

だが、そんな赤で成形された足の甲を白く塗るためにマーカークを使って涙を流したビルダーたちが数多い時代は最早遠く、その濃い

成形色ですら隠蔽して塗膜を乗せられるほどにガンダムマーカの白色は劇的な進化を遂げている。

秋乃はそんな時代に生まれたわけではないが、その塗装に臭いのきついラツカー塗料を使っている以上集合住宅では迂闊にエアブラシを起動できない。

一応そういう人のための制作スペースでありガンダムベースの制作ブースなのだが、ガチで気合を入れて作るものとは別に、少し肩の力を抜いてガンプラを作りたくなる時もあるにはある。

そのため、ささつと積みプラを消化してしまうなら色の足りない部分をマスキングして、これでサツと塗ってからトップコート、という仕上げをするのも悪くはないのではないかと、そんなことを秋乃が考えていた時だった。

「お姉さん、ガンプラが好きなんですか？」

ふと、甘く問いかける声が秋乃の耳朶に優しく触れる。

声がる方に振り向けば、そこには大体、ダイバールツクの外見としてのチイと変わらなさそうな年頃の女の子が小首を傾げて秋乃の瞳を覗き込んでいる姿がある。

金髪をポニーテールにまとめあげたその少女にどこか、小さな同居人の面影を見出しながら、気付けば籠の中に入れていたストライクダガーだけではなく、再販がかかったキットとストライクダガー以外の本命——本来はこっちが目的でここにきたのだ——があることに気付いて苦笑しつつ、少女へと言葉を返す。

「ええ、大好きですよ。ところで貴女は？　お父さんとお母さんはいらつしやらないのですか？」

「んー……お父さんとお母さんはね、洗濯機のコーナーにいるから、弓彦に来てもらってるんだけど、弓彦もガンプラが好きだから、今はレジにいるの」

ちょうど先ほど、ストライクダガーを三機抱えてレジに並んだ、秋乃とそう年頃の変わらない少年を指差して、少女はどこか困ったような笑みを浮かべつつ、秋乃の問いかけにそう答えた。

「では、抜け出してきたのですか？　ダメですよ、逸れてしまつては危

険です」

「あはは、お姉さん優しいんだね。でも密航と脱出はね、鈴の得意技なの。生まれて一回も迷子になったことないんだよ？」

「……なんと」

まるでクロスボーン・ガンダムだ。

密航が得意だと言っただけではなく、生まれて一度も迷子になったことがないと自慢する少女に、割と方向音痴で駅から徒歩五分の位置にある大学のキャンパスに三十分かけて辿り着いた己の不甲斐なさを嘆きながらも、秋乃は素直に称賛の言葉を送る。

とはいえ、危険なことには変わりがない。そして、レジへと伸びる長蛇の列が動くこともそうない。

「鈴ちゃん、でよろしかったですか」

「うん、鈴は鈴だよ？」

「……本当なら、弓彦さんのところに戻った方が良いのです、私も……悪人でないとは限らないのですよ？ よろしければ洗濯機のコーナーまで案内しましょうか？」

弓彦が並んでいて退屈だというのなら、せめて両親の元に送り届けるのが年長者としての義務というものだろう。

秋乃は鈴と名乗った少女へと手を伸ばしてそう提案するが、歳不相応に老成した様子を見せる彼女はうん、と首を横に振る。

「あなたの提案はとってもありがたいんだけど……鈴もガンプラを見たいから、だって弓彦が大好きなんだもの」

「……大事な人なのですね」

「うん！ だって弓彦は鈴の将来のお婿さんだから！」

屈託のない笑顔でそう答えてみせる鈴だったが、聞いている人が聞いていれば即座に110番を押されかねない案件だ。

とはいえ、鈴の身なりは極めて綺麗なものに纏まっていて、その言葉遣いからも育ちの良さが窺える以上、あの少年は許婚とかそういう間柄にあるのだろう。

鈴の言葉を聞いていたのが自分だけだったことに感謝しつつ、弓彦がいつでも見られる位置取りを心がけながら、秋乃は彼女の願いを叶

えるようにガン普拉コーナを巡ることにした。

平積みにされた再版キットの塔も、今は余裕があるように見えて明日ごっそりと削られているなんてこともこの界限では珍しくない。

あれはなに、これはなに、という鈴の無邪気な質問に答えながらも、「掘り出し物」を買い物カゴに突っ込みたくなる衝動をグツと堪えた上で秋乃は一つずつ丁寧の説明していく。

「これは……ザンネットクですね。Vガンダムに出てきた機体で、地球の上から地球にある目標を撃てる恐るべき機体なのです」

本編での活躍もさながら、「機動戦士クロスボーンガンダムゴースト」において、無慈悲にもローズマリーの乗ったVガンダムを撃ち抜いてみせたその悪役としての活躍を思い返して苦い顔をしつつも、大きな箱を手にとって問いかけてきた鈴の質問に秋乃は答える。

あの作品は全体的に「命」の重さと、「戦場」の狂気でそれがいとも容易く失われていく無情さを描いた名作だ。

Vガンダムの時代をベースとしていることもあって、その、時代という基盤が徐々に崩れていく危うさの中で人々がなんとかそれでも宇宙と地球を支えようと手を伸ばし、命を奪っていく狂気に立ち向かう姿には秋乃も受験の時に勇気付けられたのを覚えている。

「ふうん……お姉さん、この機体は好きじゃないんだね」

「……ええ、好きな方には申し訳ないのですが……思い入れのあったキャラクターを葬ったモビルスーツなので」

「じゃあ、こっちはなんていうガン普拉なの？」

ザンネットクを棚に戻すと、鈴はその隣にぽつねんと佇んでいたキットである、「HGUC クロスボーンガンダムX0フルクロス」を手にとって、秋乃へと再び無邪気に尋ねてくる。

奇しくも、その機体もまた秋乃にとっては思い入れが強い、否、思い出そのものだと言ってもいいものだった。

正確にはフルクロスではなく本体のX0の方なのだが、それはかつて「ザ・シルバリー」を束ねていた男が使っていたガン普拉だ。

そしてフルクロスの代わりにV2アサルトのユニットを組み込ん

だミキシングモデル、「アサルトゴースト」は「銀の幽霊」としてマスダイバーたちからは恐怖の象徴となり、そして秋乃たちのように同じ旗の下に集ったダイバーたちからは畏敬の象徴となった機体だった。

秋乃は今でも夢に見る。

初心者だった自分を追い詰めて弔り殺しにしようとしていたマスダイバーの膝関節を薙ぎ払うことで再生時間の間足を止めさせた上でコックピットへと無慈悲にもその「クジャク」を突き立てて葬り去った銀の幽霊とその主人であるビーティスのことを。

シルバリーについてだが、秋乃にとつてはそれはもう、あの「ノイエ・シルバリー」戦を経て吹っ切った過去の残滓でしかない。

故にダイバルックだつて「リビルドガールズ」の盾として自らを規定した服装に装いを改めている。

だからといって、かつて自分が抱いていた尊敬や憧れが完全に消えたわけではないのだ。

自らの中に息衝いていた憧れと過ちの欠片を慈しむように笑みを浮かべながら、秋乃は鈴の問いかけにザンネックの時とは違う、優しい声音で答えてみせる。

「クロスボーンガンダムX0フルクロス……漫画に出てくる機体ですね、面白い漫画です。フルクロスの部分が新規金型なので色分けがかつて出ていたX1フルクロスよりも向上しているので組みやすいかと」

ガンプラは確かに安い。

しかし、安いから手に取ってもらえるという販売戦略上どうしても生じてしまう枷のようなものは確かにあって、フルクロスのようにあまりにも薄く、細かな色分けが難しいものはHGブランドではどうしてもシールに頼らざるを得ない。

江戸の仇を長崎で討つがごとく、大体そういうのはRGブランドでリベンジを果たされたりするのだが、X0フルクロスの場合には既にX1フルクロスを持っている客にもアピールする狙いなのか、実質的な値上げを行ってでもフルクロスの色分けを向上させたことをアピールポイントとしているのだ。

「お姉さん、クロスボーンガンダムが好きなの？」

「そうですね……好き、ですよ。思い出のある機体なのです」

「ふうん……確かに目を見るとわかるね、じゃあ鈴はこのフルクロスを買っちゃおう！ お父さん、お母さん！」

鈴は秋乃に手渡していた箱を受け取ると、家電売り場にいるはずの両親へと向けて呼びかける。

いくらなんでもそれは通じないのでは、と秋乃ら訝り小首を傾げた。

だが、次の瞬間にはどういうわけか彼女の父母と思しき、日に焼けた健康的な肌にサングラスの男性と、癖のある金髪を結えた、鈴とよく似た女性がガンプラコーナーへと歩いてくる姿がある。

「ね、凄いでしょ？ 鈴、わかるんだよ」

「え、ええ……」

まるで、最初から来ることがわかっていたかのような口ぶりである、と胸を張ってみせる鈴だったが、ニュータイプというのはこのようなことを指すのだろうか。

秋乃は人智で説明できる範囲を超えたその感覚に驚きを隠せずに冷や汗を流していたのだが、鈴の両親が近くに訪れた時にもまた、何か第六感じみたものが脳の中心をくすぐるような、むずむずとした感じを覚えていた。

「鈴ちゃん、大丈夫だった？」

「へーきだよお母さん、あのお姉さんがガンプラについて教えてくれたの！」

母に駆け寄った鈴はその身体に抱きつきながら、買い物カゴを抱えて呆然としているアキノを指してそう言った。

「ふむ……？」

その唸り声が聞こえたのは、教えてくれた、というよりは訊かれたことに答えていただけなのだが、と秋乃が何か言葉を紡ごうとした瞬間だった。

サングラスをかけた男性——恐らく鈴の父親は、秋乃の顔を覗き込むなり、まるで旧知の人間の中から符合する顔を見分けるように、組

んだ指へと顎を乗せて考え込むような仕草を見せる。

「あの、失礼ですが私に何か……？」

「ああ、すまないね。どこかで君に似た女性を見たことがあったから……鈴の面倒を見てくれて感謝するよ」

「いえ、私は……ただ鈴ちゃんから訊かれたことに答えていただけですからなんとも」

「ははは、それだけでも十分さ。鈴は知りたがりだからね。彼女の問いに答えてくれるだけ、親としてはありがたいのさ」

あつけらかんと笑いながら言葉を紡ぐ鈴の父親の言葉に、秋乃はどこかで似ているはずもない鈴とチイを重ね合わせながら、子供の面倒を見るといふのはこういう感覚なのだろうか、と考えを馳せる。

とはいえ、チイの口から出てくるものは金、金、金と銭ゲバとしては恥ずかしくないものであるため、鈴のように世間擦れしていない無邪気なそれとはまた違うだろうか――

母に連れられて、X0フルクロスフルクロスの箱を大事そうに抱えながらレジから伸びる長蛇の列に入っていく鈴を見送りながら、秋乃が物思いに耽っていた時だった。

「X0か……昔使っていたのが懐かしいな」

「使っていたのが懐かしい？　というと、貴方もGBNを？」

「うん、まあね……とはいえおれは引退勢なんだけどさ」

サングラスを外して、きつと娘が向かおうとしている先を見ているかのような眼差しでレジに並んだ彼女たちを見つめながら、まるで帰ってこない誰かを待ち続けるような口調で鈴の父親はそう零す。

事情があつてGBNを訪れる者がいるなら、事情があつてGBNを去っていく人間がいる。

だからこそ、それについて訊くのは野暮だと秋乃にもわかっていった。

誰の過去も気にしない。誰の事情も気にしない。

ただ、一緒に昼ごはんを食べるような、そうじゃなければ放課後にくるに活動もしていない部室に入り浸っていつまでも他愛のない言葉を交わしているような、そういう寄り合いが「リビルドガールズ」で

あり、それこそが特に掟や規定を設けているわけではない自分たちにとって唯一の、暗黙の了解のようなものだった。

だからこそ、秋乃は鈴の父に多くを問うことはしない。

ただ一言、きつと同じ目をしているのなら、していたのなら、それだけで通じるバベルの言葉で、尋ねるのだ。

「……ガンプラは、お好きですか？」

「ああ……妻と娘とおんなじぐらいにね」

復帰してみるのも悪くはないのかな、とサングラスをかけ直してからからと笑いながら、鈴の父親——飛田明人は、秋乃の方へと振り返り、ひらひらと手を振りながら去っていく。

「……アキノ、君は……おれの亡霊から解放されてくれたみたいで良かったよ。いい仲間に出会えたんだな」

「……はい、ビーティスさん」

「それは……もういない男の名前だ。仲間と一緒に、元気だな」
どこことなくわかっていた。

一足先に会計を終えていた、弓彦と呼ばれる少年を説教するビーティスの、明人の顔に憂いはない。

きつと秋乃にかけて、いや、「アキノ」へと投げかけたその言葉こそが、彼にとつて、最後の禊となったのだろう。

もしかしたら、明人はGBNに戻ってくるのかもしれない。

それでも、「ビーティス」というダイバーは帰還しない。

不思議だと自分でもわかっている。だが、秋乃はそれに対して悲観することはなく、むしろどこか晴々しい気持ちさえ抱いていた。

「……今まで、ありがとうございます」

返しきれない恩があった。重ね続けてきた罪があった。

それでも、その言葉こそがビーティスにとつての禊であるなら、それは秋乃にとつては一つの赦しに他ならなかったのだ。

そうして秋乃は、いつかくるお別れ、中途半端に終わってしまったそれを見送った。

こつそりと、もう一つだけ他のキットの箱の後ろに隠されていたクロスボーンガンダムX0フルクロスを手にとって買い物カゴへと入

れて、レジへと向かいながら。

しかし、その顔にあるものは憂いでも涙でもなく、一つの——蕾が綻んだような笑顔に、他ならないのだった。

チイは激怒した。必ずあの金銭感覚に無頓着な鈍感女を叱らなければならぬと決意した。

チイには積みプラの塔を作る気持ちがわからぬ。銭ゲバとしてリアルでは真面目に接客をして、GBNではアコギな商売もやりながら金を稼いで暮らしてきた。

けれどもチイは、ガンプラの思いについてはELダイバーだからこそ敏感だった。

チイは家計簿に抱え込んだボールペンで記帳しながら、正座させたアキノを前にして、あからさまに大きな溜息をついてみせる。

「なあ秋乃、こいつはどういうことなのか説明してくれよ」

「……買ってきたガンプラです」

「こいつらは？」

「先月以前に買ったガンプラです……」

「積むなら組めや、あいつら泣いてんぞ」

「ち、違うのですチイ、時間が……時間とかが……」

「あ？」

「はい、組みます……」

有無を言わず目幅涙を流してニッパを握る秋乃に、だからチイはママでもなんでもねえんだぞ、と嘆息しつつも、その浪費を咎められない自分に甘さを覚えて、ばつが悪そうに肩を竦める。

人はなぜガンプラを買うのか。

多分買って家に帰って箱を開けるまでが一番楽しいから。

そんなのはチイにとっては戯言ではあるのだが、それもまた、ビルダーたちにとっては一つの真理なのかもしれない。

「縦一列組むまで次のガンプラなしな」

「そんな、殺生な……」

「うるせえ、そんなんだから食パンにジャム塗ったもん食って生きて

んだろうが、むしろなんでその食生活で色々デカくなったんだよ秋乃は」

「胸は関係ないでしょう!？」

「うっせバーカ、悔しかったら積みプラ消化してから言いやがれ」

「ぐぬぬ……」

積みプラ。それは願いによって形作られた星積みの塔。

お持ちなさい、貴方の望んだそのガンプラを。

しかして積むだけでは天井まで届く罪になる。

だからこそ、そこに込めた願いや祈りへの禊として、人は今日もどこかで積みプラを消化しているのだ。

そう、それこそ今の秋乃とチイのように。

そしてそれは、そんな素朴な願いと祈りが交錯する、二人のありふれた日常的一幕に他ならないのだった。

Ex. 05:「バトリングお嬢様！〜お嬢様でなくなつた者は失格となる」

【お嬢様】 フロイライン・コロセウムスレPart2 【専用】

1. 以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ

このスレッドはユーザー主導で初開催されたイベント、「フロイライン・コロセウム」について語り合う総合雑談スレッドでしてよ、大会に向けたビルドの構築相談はビルド相談スレで、今話題のお嬢様方との百合の花園についてはカップリングスレでお願い致しますよ

Q. 「フロイライン・コロセウム」とは何ですのセバスチャン？

A. その名の通りお嬢様によるお嬢様のためのお嬢様のバトルトーナメントでございます、お嬢様

Q. 参加資格等はありませんか？

A. はい、「お嬢様であること」それ以外に参加の資格等はありません。無論、心がお嬢様であれば、紳士諸君の参戦も受け付けております。

Q. 大会の特殊ルールを教えてください！

A. 「お嬢様でなくなったものは失格となる」、単純にお嬢様ルールが崩れた瞬間に敗北判定が下される以外は普通のトーナメントと変わりございません、お嬢様

Q. ロールプレイとか言って大丈夫なのでして？

A. それは言わない約束でございますお嬢様

【GBNまとめwiki】<https://www.gbn.jp/wiki/>

【ビルド構築相談スレ】<https://www.gbn.jp/boards/build/>

【カップリングスレ】<https://www.gbn.jp/boards/cup/>

※※※

12: 以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ

少し気になったからわたくしこのスレッドを覗いた通りすがりのお嬢様ですわ、何故このような狂気の大会が開催されたのでして？

13：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ
わたくしたちにもそれがわかりませんの

14：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ
そんなサイコフレームの発光でもありませんのに

15：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ

>>12

なんでもこの前「アルス」なるイベントボスとの戦いがありまして、
それがものすげえ勢いでサーバーにお負担をおかけになってブチ切
れなされたエンジニアのお嬢様が主催したらいいですわ

16：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ

あれ本当にイベントボスでして？ レイド戦で鯖落ちしたのはわ
たくしの記憶だとバグが起きた第二次有志連合戦やブレイクデカ
ーとかいうお排泄物が流行ってらした二年前以来でしてよ

17：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送りいたしますわ

>>15

おハープ不可避ですわ、エンジニアリングお嬢様も胃を痛めていら
してるのですわね……ところでどうしてGMはこのような気の狂っ
たイベントを許可されたのかこれがわかりませんわね

18：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ

「アルス」戦に関しては運営にお手紙をお送りいたしましたら復刻予
定はないとだけしか返ってこなかったものでしてよ、マジモンのバグで
はなくてセバスチャン？

19：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ

ただのバグがあのように気合いの入ったモデリングを準備なさる
と？

20：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ

噂では三十光年先の電波障害を起こした星から来た電子生命体の
侵略者らしいですわよ

21：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ

そんなSF映画でもあるまいしオカルトなんてありえませんか、あ
りえせんわよね……？

22：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ

>>>17

GMなら休暇中でしてよ、運営班が代わりに許可したようですわ、彼らも相当疲れていらしてるのね……

23：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ

>>>21

ここはGBNでしてよ？ 何が起きても不思議じゃありませんわ

24：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ

そろそろアルスだかエルスだかに関してはスレ違いでしてよ、しかしここにいらっしやるお嬢様諸氏は出場なさるおつもりでして？

25：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ

わたくし文章でお嬢様にはなつておりませうけれど戦闘になるとメッキが剥がれるので即失格ですわね、だから観察するだけにしますわ

26：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ

わかりましてよ（キリンお嬢様）

27：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ

お持ちなさい、あなたの望んだそのお嬢様を

28：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ

ヒトデみてえなのを掘り出して積むとかそんな賽の河原じみた苦行なんてプラ板切り出すだけで十分でしてよ……

29：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ

こういう時に素でお嬢様ロールやってらっしやる方はお強いですわね

30：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ

「ドラゴン騎士団」のエマお嬢様がわたくしの最推しでしてよセバスチャン、少々言動が荒っぽいお嬢様ではありますけれど、そのギャツプがたまりませんことよ

31：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ

>>>30

わかりみが深えですわね、高笑いと共に覗くあの八重歯が最高の高な

のでしてよ！

32：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ
お嬢様というとかのバエリングお嬢様も参戦なさるのかしら？

33：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ

あのお方、リアルでもガチお嬢様とお聞きしたから反則なのですわ

34：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ

腕前もガチガチのガチなのですから優勝候補は間違いありません
わね……

35：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ
クツソピーキーなビルド組んでらっしゃるジャイアントキリング
お嬢様なら或いは何とかなるのではなくて？

36：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ
バエリングお嬢様、塩試合がお嫌いだと明言してらっしゃるのにご
興味のないお相手には塩試合をなさるからそこを掻い潜れるかです
わね

37：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ
かのお嬢様はアグニカ的にもポイントたけえので試合はなさって
いただけだと思いますわ

38：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ
試合していただいても勝てる気がしませんことよあのお方……ど
うなってるっしやるのです？

39：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ
マクギリスの生まれ変わりとか呼ばれてるから当然ですわ、バエル
をそのまま使ってるダイバーはお嬢様かどうかに関わらず異様に強
いお方たちが多いのでそこが怖いですわね

40：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ
何が彼ら彼女らをマクギリス准将への愛に駆り立てるのでしょ
うか……

41：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ

>>>40

愛に駆り立てられるのではなく愛が駆り立てるのですわ

42：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ
愛といえば「リビルドガールズ」のアイカお嬢様がバエリングお嬢様とスパーリングする時の戦績が三割勝ちになったとかマジですか？

43：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ
マジですよ、あのお方とバエリングお嬢様はさながらオーガトリクみてえなもんですわ、同じ近接型ビルドでアグニカ同好会なのでスパーリング相手としてはこれ以上ないのですわね

44：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ
こええですわ……近寄らんとこですわ……

45：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ
最近「バンデット・レース」の胴元を銭ゲバお嬢様がお勤めになられたことでアイカお嬢様のファンアートで持つてる得物が包丁からドスになったのラストロス生えますわ

46：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ
軽率にそんなやべーもん生やさないでくださいまし

47：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ
流石におハーブを禁じ得ませんわね、もしかしたら「リビルドガールズ」も出場するのでして？

48：以下、名無しのお嬢様ダイバーがお送り致しますわ
エリイちゃんお嬢様からの声援に応えた決め台詞で初手退場くらいそうですわね

※※※

「……は？」

その瞬間、確かにアイカはビルドボルグを構えて相手のコックピットを貫いていたはずだった。

古城を背景にした、古代ローマをモチーフとしたMSサイズの闘技場にて、アイカの操るフェアライズガンダムは、ビーム・ランスの代わりにコールドブレードとコールドナイフを装備した夜間警戒仕様のギャン・クリーガーを討ち貫いていたことに間違いはない。

現に、目の前で火花を上げている敵機は爆散寸前だし、アイカのコンソールにも撃破を宣告するログが流れている。

しかし、審判が下した判定は「アイカの失格負け」というものに他ならなかった。

『残念ながらアイカ様、貴女はお嬢様たる資格を失ってしまったのでここで敗退にごさいます……よって相対していたクライネ様が二回戦進出と相成ったことをここにお伝えいたしますー!』

執事風の服装を身に纏った老紳士——審判員を務めているダイバーネーム「ラビオット・リンホース」は左の手を挙げながら、本来のバトルであればアイカに撃破された時点で問答無用で敗北するはずである相手の特殊勝利を宣告する。

原因は極めて単純だった。

アイカはスレッドを覗いていないため知る由もないのだが、せっかくだから優勝賞金のために出てみたらどうかとチイに煽られたのと、エリイが今日のために気合を入れて、全体的にちよつと丈の短い、蒼を基調としたチアリーダー風のコスチュームを着てくれて、恋人のために全力で飛ばした声援に応えようと張り切りすぎただけだ。

『エリイちゃんのために死ねえええッ!!!!』

せめてこれがおくたばりあそばせだとか墓穴にぶち込んで差し上げますわだとかさういったものならセーフだったのだが、半ばアイカというメンヘラバーサーカーを象徴するその決め台詞は「お嬢様ではない」ため、無意識にロールプレイを崩してしまったことで敗北が決定したのである。

「ええええ……」

アイカは突如として襲いかかる理不尽ルールの暴力に、がくりと肩を落として溜息をつく。

「何やってんだあいつ……」

「いえ、そもそもこの大会が色々狂ってるのでは……?」

「……あ、あう……ごめんなさい、わたしの、せいで……」

大会の観客席でエリイ同様のチアコスチュームに身を包んだ三人組は、チイは呆れ、アキノはそもそもこの大会そのものの趣旨に疑問

を覚え、エリイは穴を掘って埋まってしまう気分であるなど三者三様であった。

しかし、まさかロールプレイをこの中で一番得意としているアイカが、エリイ絡みで時たま暴走することが全員の頭から抜け落ちていたのは完全に失策だった。

特に最近は大人数で戦っているためそこまで発奮することもないだろうと、アキノでさえもそう思っていたのだ。

そういえばこいつはこういう奴だった、と頭を抱えるチイにアキノはぼん、と無言でその肩に手を置くことで全ての答えとする。

「諦めましょう、もう試合は終わったので」

「死体蹴りすんのやめてくんない？」

優勝賞金はお嬢様フェスティバルのお題目にふさわしい100万BCという大金であったため、自分たち四人の中では一番ロールプレイが得意というか、普段からアイドルっぽいロールプレイをしていて、尚且つ三割ぐらいの確率でアリアに勝てるアイカを送り込んでおけばほぼ優勝ないし準優勝は間違い無いとチイは踏んでいた。

しかし、残念ながら金に目が眩んで、そこにメンヘラランドメインが爆発する危険性を考慮していなかったのは間違いなくチイの落ち度である。

そう、さながらヘルメットを被った猫がストロングでゼロな焼酎のことを考えて指差し確認するように。

呆然として帰ってきたアイカに際どいチアコスチュームを手渡しながら頬を膨らませて、チイは露骨に不機嫌な顔をする。

「……なんかチイたちに言うことは」

「……えっと、ごめん……」

「じゃあとりあえずこれ着てアリアお嬢様の応援に回んど、知り合いのよしみってことでちよつとは賞金分けてくれつかもしんねーからな……しっかし」

アイカは頬を赤らめつつも、返す言葉がないためエリイのそれよりいくらかスリットの切れ目が長いなど色々アレな感じのコスチュームを罰ゲームとして身に纏いながら、ふてくされたように第二

試合が行われている会場を眺めるチイを一瞥した。

「しかし、どうしたの？」

「見りゃわかんぜ」

お手上げだとばかりに肩を竦めたチイが指し示した先には、確かに二機のガンプラが相対していて、コロッセウム内をバトルフィールドに激闘している勇姿がある。だが。

『見え見えでしてよー！ これでおくたばりあそばせ！』

『残念ですわね、隙が大きすぎるのですわ！ そんなお排泄物な攻撃ではわたくしにチャンスを与えてくれたというものでしてよー！』

最早お嬢様でもなんでもない筋骨隆々とした髭面の男性アバターの二人が操るアルケーガンダムとガンダム・キマリスヴィダーが互いの獲物をぶつけ合いながら、幾分かオブラートに包まれているものの、言っていること自体はアイカのそれと大差ない言葉を唇から紡ぎ出している光景が、アイカの視界には映し出された。

——なんだこれ、地獄か？

いつぞやヴァルガに潜った時以来、そんな感情を抱きながら、愕然と肩を落として第三試合に控えているアリアが出場する玄武の方向の観客席へと、チイを先頭にした「リビルドガールズ」は消沈しながらとぼとぼと歩く。

「ねえ、チイちゃん……」

「んだよ、アイカ」

「お嬢様って、なんだろうね……」

「んなもんチイが聞きてえぐれーだよ……」

お嬢様。それは人々の永遠の憧れであるノーブル。

お嬢様。それは人々の闘争に疲れた体を癒してくれる元気のGはお嬢様のG。

なんだかよくわからんけどお嬢様っぽければとにかくヨシ、とそんなノリで開かれた狂気の大会は果たして、スレッドで事前に注目されていた「エマ」と「アリア」の激闘によって締め括られて、両者引き分け、賞金も二人で半額ずつ折半という結果に収まることとなった。

そのためおこぼれを期待していたチイは本気でがっくりと肩を落

として、なんだかGBNの深淵を覗いた気がする三人は、満面の笑顔で表彰台に登って肩を組む二人のお嬢様に、なんとも言えない表情を浮かべ、死んだ目で拍手と声援を送っていたのだった。

EX・06 「あたしの小さなやり残しく星追いのコアガンダム（ふたり）」

愛香がそれを知ったのは、マギーを経由して送られてきた一本の動画からのことだった。

何が何やら正体不明、ただし、シークレットミッションとして実装されているらしい、「エルドラ」とやらの大地に立って戦う、もう一つの「ビルドダイバーズ」の奮戦が、何やら「カザミ」と名乗っているダイバーの手によって投稿されていたのだ。

シークレットミッションとなれば検証勢が喜び勇んで食いつきそうなものではあったが、マギーから紹介されるまでその再生回数はわずか一桁に留まっており、新着動画欄はすぐに埋もれてしまうために、愛香もそれに気づくことはなかった。

しかし問題というかなんというか、非常に気まずいのはその「エルドラ」の大地において戦っているガンプラと一人のダイバーが、愛香にとって見覚えのある存在だったということだ。

「……まさかこんな近くに本当の持ち主がいるとか思わないじゃん……？」

「……あ、愛香……泣かないで、ください……」

「うん、ごめん……でもさ、こうなんかさ……気まずいじゃん……」

元々、愛香が作ったコアガンダムはキャプテン・ジオンがオープンソース化していたとはいえ、別の持ち主がいるというのはあの日層運なんだか豪運なんだかよくわからないランダムエンカウントで引き当てたチャンプが教えてくれたことだった。

加えて、持ち主がわかれば言わなければいけないことがあるとは愛香もわかっている。

だからこそその決意を固めて今日までフェアライズガンダムに乗ってきたのだし、戦うためだけではなく、あの仮想郷を旅するためには愛香はコアガンダムを作ったのだと今でも自負しているのだ。

しかし、その「エルドラ」の大地に立っているダイバーが、コアガ

ンダムを駆るダイバーが、隣のクラスで今も昼飯を食べているであろう存在だとなると、非常に気まずいのだ。

カザミのチャンネルに投稿されている動画を追っていけば、コアガンダムはどうやら新たに生まれ変わって、額や胸部の放熱フィンをクリアパーツに置き換えるなど改良が加えられているようだった。

更に、本家本元というだけあって、ガン普拉バトルにおけるプラネッツシステムの使い方も、Aランクに昇格していた愛香が舌を巻くほどだ。

十八メートルクラスにグローアップしたそれは、確かに「可愛い」とはかけ離れているものの、自身のフェアライズガンダム同様に、ただ純粹に戦いを求めているのではなく、何か背負った「願い」のために戦い続けていたのではないかと、愛香はそう思った。

そこに根拠は何もない。

ただ、強いて言うなら同じ機体を扱っている者同士の直感とでもいうべきものだろうか。

強い「願い」と共にコアガンダムは生まれてきたと、ガンプラの気持ちがるチイは以前語っていたし、そういう事情もあって、いざとなるとやはり、二の足を踏んでしまうのだ。

愛香は嘆息しつつ、「攻略方法を皆で考えて」というメッセージと共にマギーから送られてきたクソゲーこと衛星砲破壊ミッションについて、想いを馳せる。

「……………これ、絵理はクリアできると思う？」

「……………さ、参戦人数四人では、ちよつと……………」

「だよね……………」

本家コアガンダムがプラネッツシステムでグローアップした、「ジュピターヴガンダム」はタンク役を務めているらしい奇妙な右腕のガンダムを見事に引きつけてはいた。

だが、言い換えるのならそれは時間内における衛星砲の破壊というミッションにおいて足止めを喰らっていたということに他ならないのだ。

しかし彼らも決して腕は悪くない。

すんでのところで残りのメンバーが機転を利かせて食い止めようとしたのだが、連携が上手くいかずに結果としてミッション失敗、という様子がその映像には収められている。

せめて四人以上のメンバーが欲しい、というのは愛香にとつても音を聴きながら脳内にその様子を克明に描く絵理にとつても共通するところだった。

加えて方が一衛星砲が発射されたなら、それを上から叩くだけの手段が欲しい。

しかし、それこそ「機動戦士ガンダムSEED」に登場するジェネシスや、「機動戦士ガンダム00」2ndシーズンに登場するメメント・モリという巨大兵器と真つ向から撃ち合える武器など、GBNに存在しているのだろうか。

「サテライトキャノン積むとか……？ いやでも、ここの舞台つて月が敵に抑えられてるから使えないのか……」

「……ぶ、プラズマダイバーミサイルも、多分……」

「そうだね、運んでる途中に打ち落とされる」

愛香たちは始める前だったからつい最近まで知らなかったものの、GBNにおいてもこのクソゲー極まるミッションに近いクリエイトミッションが配信されていたことがあった。

ロータス・チャレンジ。

十五分という制限時間の中が課されるその難題は、まず惑星から飛び出して宇宙空間まで侵攻した上で二重三重に敷かれたトラップや迎撃に出る軍勢を掻い潜った上で、ラビアンローズを改造したフォースネスト、ロータス要塞こと「ラビアンクラブ」のコアユニットを破壊しなければならぬというものだった。

愛香も、このミッションがマギーから送られてきたとき、それを参考にすべく幾つかアーカイブ化されていた「AVOLON」や「第七機甲師団」の挑戦記録等々を見返していたのだが、やはりいうかなんというかクソゲー極まっていた。

「軌道エレベーターを使える分は考慮しなくてよさそうだからいいけど……多分これ衛星砲内部とかにもIフィールドとかあるパターン

じゃないかな」

「……ですね、恐らく……」

ロータス・チャレンジの厄介なところは、ラビアンクラブの破壊が勝利条件ではなく、コアユニットまで含めて破壊しなければならぬ、という一点に尽きる。

だからこそ多くのダイバーは五連サテライトキャノンやプラズマダイバーミサイルとコロニーデストロイヤーの合体攻撃、果てはキマリスヴィダール五体を並べてダインスレイヴ鶴瓶撃ちなど、思いつく限りの戦略兵器を投入した。

だが、その全てを嘲笑うかのように難攻不落の要塞はIフィールドを筆頭とした様々な防衛手段を尽くしてそれらを事前に食い止めてきたし、先述のダインスレイヴ五連射も直撃こそしたがろくにダメージを与えられず、素の装甲値まで高いというその鉄壁ぶりを、多くのダイバーに極限の絶望と共に見せつけてきたのだ。

これならエクストリームガンダム七機と一斉に戦わされる公式超難度ミッションの方がまだマシだったとか、「終末を喚ぶ竜」こと当時は「ジャバウオツキー・ジャバウオツカ」の名で呼ばれていた高難度クリエイトミッションの方が正攻法を通じるだけまだマシだとか阿鼻叫喚になっていた様子だったが、それでもこの衛星砲破壊ミッションよりは幾らかマシだと、愛香も絵理もそう感じていた。

「まず参戦人数四人つてところが厄介だよね、足並み揃えて突破しなきゃいけないから、一人だけ重火力盛ったって置いてかれて蜂の巣にされる」

「……だけど、あのSDの方が使ってた武装よりも更に出力が高いものがなければ衛星砲は壊さない……」

「うーん……四人が分担してそれこそハイパーメガバズーカランチャーみたいな、そうじゃなきゃローエングリンランチャーみたいなもののパーツを持って衛星砲に肉薄すればなんとか……?」

愛香にも、呟いた案が現実的なものではないことはすぐにわかった。

例えば、もう一つの「ビルドダイバーズ」が全員コアガンダムを使っ

ていたのなら、あるいはそれは可能だと言えるのだろう。

だが、見る限りメンバーの構成は件のコアガンダム、そしてインフィニットジャスティスから全身の武器を取り払って防御特化したような機体、ガンダムアストレアをモチーフとしたのであろうSDガンダム、そしてウオドムを小型化した機体——の中に入っているモビルドール、チイの先輩であることを考えれば、全員の規格に合わせた巨大砲のパーツ組み立て及び分割の考慮など現実的ではない。

そして、化物には化物をぶつけるんだよとばかりにこちらも巨大砲を作るのであれば、どうしてもその砲身は長大にならざるを得ないし、そうなれば重量も嵩んで、ジュピターヴガンダムやアストレアをモチーフにした「ヴァルキラランダー」の機動性は殺される。

まさにあちらを立てればこちらが立たず、といったところなのだ。

声が聞こえたのは、校庭の花壇に腰掛けて、愛香たちがああでもないこうでもない「エルドラ」の攻略ミッションに頭を抱えていたその時だった。

「……………めん、それ……………エルドラの動画？」

以前、GBNでフィードバック酔いから危うく車道に転びかけた愛香を助けてくれた、そのぶつきら棒ながらも優しい声は、間違いなくコアガンダムの主——クガ・ヒロトのものだ。

愛香は、それこそ絵理のようにびくりと肩を震わせて、ぎぎぎ、と軋みを上げる首を無理やりヒロトの方に向けるが、やはり居た堪れなさが消えてくれるわけではない。

「……………えつと、うん。ヒロト君だよね？　こんな難しいミッションやってたんだ」

にこやかに愛香は問いかけるが、絵理にとっては優しくともぶつきら棒なその声は正直なところちよつと苦手だった。

だからこそ、愛香と「リビルドガールズ」の前以外では眼帯を装着して彼女の背中に隠れる癖は変わっていない絵理はびくびくとしながら制服の背を掴んで継り付いてしまう。

そんな絵理を宥めつつも、愛香はここまで来たのだからと腹を括つて、ヒロトから言葉が返ってくるのを待った。

「……まあ、うん。それ、どこから？」

「マギーさんから回ってきたんだけど……ヒロト君とマギーさんって知り合いなの？」

「いや……俺は違う。メイ……えっと、俺の仲間、なんだけど、その子がマギーさんと知り合いだから」
「なるほど」

以前にマギーの店でオフ会を開いた時、彼女もまたELダイバーの後見人を務めているということは知らされていたし、それ故に秋乃がチイを養うにあたっての事細かなアドバイスを受けていたこともまた愛香は覚えている。

そしてもう一つの「ビルドダイバー」に所属しているウオドムの改造機の中からモビルドールが飛び出てきたということは、その「メイ」という少女が、チイの仲間なのだろう。

——俺たち以外見てなかったから、不思議だと思って。

急激に伸びた、一桁から百万の大台にまで成り上がったカザミの動画、その再生数を指してヒロトはなんともいえない表情を浮かべてぽつりとそう呟いた。

「バズるってやつなのかな……マギーさんって、すごい人なんだね」

「それは……俺もそう思う。知り合いではないけど、GBNやってればあの人についての話は色々聞くから……ごめん朝村さん。ただ、驚いただけで」

「ううん、大丈夫。ヒロト君」

どこか何か、決して言葉には出さないけれど確実に胸の内へと感慨を抱いて去っていきこうとするヒロトの影を縫いとめるように、愛香はその背中に向けて呼びかける。

「えっと、何か？」

「……一つ話があるんだけど、今、時間あつたりするかな」

「……時間は、あるけど」

「じゃあよかった。手間は取らせないから……一つだけ、どうしても言いたいことがあつたんだ」

愛香は律儀に足を止めてこちらに向かってきてくれるヒロトに感

謝を捧げつつ、いざという時というか何か盗まれたりしたら嫌だから、いつも持ち運んでいる学生鞆の中からタッパーを取り出した。

そして、梱包されているフェアライズガンダムから一つ一つのパーツを取り外して、元のコアガンダムへとその姿を帰していく。

愛香の手にあるのは、フェアライズガンダムへの改造によってサーベルラックを増設したことで、への字スリットがないのと、庇を削つて目を大きく見せている以外は原型機とその姿を同じくする、コアガンダムそのものだった。

流石にヒロトも困惑したのか、あるいは怒りを抱いたのか、眉根にシワを寄せると首を傾げて問いかける。

「えっと……何？」

「……あたし、ずっとコアガンダムってキャプテン・ジオンが作ったものだと思ってた」

「ああ……」

ヒロトもコアガンダムについて、カザミが憧れているG—Tube rが配信していることは最近把握していた。

把握したのが最近でなければ内心は荒れに荒れていたのだろうと俯瞰しているが、それでも彼のフォロワーとしてコアガンダムを作り上げたビルダーがこんな近くにいたことには、さしものヒロトとて驚きを隠せない。

コアガンダムは、ヒロトにとっては自身の思い出と切っても切り離せない大事な、否、そんな言葉でさえも足りないほどに思い入れのあるガンプラだ。

その姿が「コアガンダムII」へと変わっても、心核は決して変わることはない。

そして脈々と受け継がれてきた思い出が、その似姿として目の前にあることに対して、ヒロトが何か思うところがないかと問われればその答えは否である。

それでも、ただそれを見ただけで判断を下すのは早計だと、そう思ったからこそヒロトは、愛香の口から言葉が紡がれるのを待ったのだ。

「……えっと、その。あたし、どうしてもヒロト君に謝らなくちゃいけないくて……本当の使い手がいるって、チャンピオンから教えてもらって、その……ごめんなさい！」

あれこれと言葉を並び立てるよりは、ただ頭を下げるのが最善だ。だからこそ愛香は深々と頭を下げて、もう二度とコアガンダムを使わないでくれと言われたら、その通りにする覚悟で彼に謝罪した。

知らなかったでは許されないからこそ、文字通り全てを差し出すように、その掌に愛香のコアガンダムを乗せて。

「……朝村さん」

ヒロトは顎に指をやってしばらく考え込むような仕草を見せると、意を決したように愛香の苗字を呼んだ。

どこか刑死を待つ罪人のような面持ちで愛香は顔を上げて、ヒロトの顔を見上げてみれば、そこにあつたものは。

「いいんだ……だけど一つ聞かせてほしい」

笑顔にはまだなりきれないけれど、それでもどこかにその名残を持つている欠片が、不器用に三日月を描く口元に、そして穏やかな湖面のように澄んだ彼の瞳には存在している。

そうして、投げかけられた問いを愛香は無言で首肯した。

きつと、その答えこそが自分に必要な言葉であるべきだから。

かくして今度は恐れと誇り、その間に立つ勇気でヒロトの目を見据えて、愛香は彼からの問いかけを待った。

「……朝村さんは、何のためにコアガンダムを作ったのか、聞かせてほしいんだ」

ヒロトにとつて、コアガンダムは相棒であり、恋人とまではいかなくとも仲睦まじく過ごした思い出の相手が願った、祈りの化身だ。

だからこそ、戦いを共にこそしているものの、それだけのために――否、最初はそのために作り上げたのかもしれないが、最後に残った願いはそれとは全く違うもので。

「あたしは……GBNを、大好きなあの世界を、大好きなひとと……そして大好きな仲間と一緒に旅するために、コアガンダムを、そして……この『フェアライズガンダム』を作ったんだ」

そうして愛香はずっと伝え損ねていたことを、勇気と共にはつきりと、物語るように、或いは心の内を全て曝け出すようにヒロトへと宣言する。

そうして、外していたパーツが組み込まれれば、そこに出来上がったのは、ヒロトの作ったプラネッツシステムとは趣を異にしているものの、確かに彼女の願いに、そして、ヒロトの、イヴの願いに重なり合うガンダムの姿だった。

「……そっか、なら、大事にしてほしい」

「ヒロト君……」

「なんていうか、俺……よくわからないんだ。でも、思い出のガンプラを、俺と同じように大事にしてくれる人がいて……そして、朝村さんがもう一度、コアガンダムのおかげで翔べたなら、こいつも喜んでるのかなって、そう思うんだ」

ヒロトも偶然持ち歩いていた学生鞆から、タッパーに梱包されていたコアガンダムIIを掌に乗せて、アイカへと提示してみせる。

そこには二つの星があった。

太陽系を巡って、いずれは星の海原へと飛び立っていくためのコアガンダム。そして、架空のソラに浮かんで仮想のソラを飛ぶ、存在しないけれど星の海原に浮かんでいるコアガンダム。

二人が追いかけている星は違えど、そこにある願いは、きつとコアガンダムが描くフェアリー・テイルは、この瞬間に、確かに、そして微かに交わり合っていたのだ。

「ヒロト君……」

「……フェアリーって架空の星、俺も知ってるから……よく似合ってる可愛いと思う。それじゃあ、ヒナタが待ってるから」

くるりと踵を返して手を振りながら、ヒロトは教室へと引き返していく。

「……よかったですね、愛香……」

「うん……っ……っ……」

どうして涙がこみ上げてくるのかはわからない。

ただ、いつもとは違って、絵理の胸に顔を埋めて愛香は一頻り泣い

た。溢れる涙を止める術を見つけられず、子供のように泣きじやくつた。

だけど愛香はその瞬間にどこか何かで赦しに触れたような、そしてまだヒロトが抱え続けている鎖に縛られた痛みに触れたような気がして、どうにも、居てもたつてもいられないような気持ちを抱いたのだ。

きつとまだ、ヒロトは星を追いかけている。

そして愛香もまた、星を追いかけている。

だからこそ願うのだ。

だからこそ、その可能性の心核へと祈るのだ。

同じ痛みの旗、その下に集った彼にも、そして自分に痛みから立ち上がる始まりをくれた彼にもどうか輝く星が、見つかりますようにと。

そしていつか、彼がもう一度その荷を下ろして、その手に光を掴めますように、と、仲間と共に、笑い合える日がきますように、と。

EX. 07 「予兆く或いは我らの決戦前夜」

それが現れる、という情報がマギーを通じてアイカたちにも入ってきたのは奇しくも、「ロータスチャレンジ・ver. エルドラ」なる高難度クリエイトミッションがぶち上げられた日だった。

先日邂逅したヒロトが受けていたストーリーミッションである「エルドラ」関連は試験的に先行実装されたシークレットであり、隠し球として運営は巨大なレイドバトルをその最後に仕込んでいるのではないか、というマギーの推測はともすれば突拍子もないものだ。

バイト先の店頭に飾るためのSDCSハイパーキャプテンガンダムを組みながら、すっかり最近自身の家で過ごすことが多くなった絵理へと、愛香は問いかける。

「マギーさんの言ってるこの話、本当だと思う？」

愛香は若干ではあるが、その情報の疑わしさを捨てきれずにいた。ヒロトたちが、「もう一つのビルドダイバース」が受けているシークレットミッションには謎が多い。

カザミのチャンネルにアップされていた衛星砲攻略ミッションの難易度もそうだが、妙に凝った舞台設定であったり、某神ゲーに比類するレベルで作り込まれているNPDの思考パターンであったりと、「GBNのミッション」として「エルドラ」関連のあれこれを見た場合には極めて不自然、というより説明がつかない箇所は枚挙に暇がない。

愛香の肩に寄りかかっていた絵理は、その質問を受けて少し考え込むように細かい顎に指をやりながら、自らの思考を整理するように、というよりは言葉一つ一つを確かめるように答えを紡いでいく。

「えつと……可能性は、その……ある、と、思います……」

「ふむふむ、その心は？」

「……そ、その……マギーさんを……疑いたくない、っていうのも……あるんですけど……先行実装されたミッションなら……既存にない仕様も、あるのかなあ……って……」

どうでしょう、愛香。

助けを求めるように絵理は苦笑する。

やってしまったか、と、一瞬愛香は後悔したが、それでも恋人の唇からかなり前向きな、そして現実的な可能性が飛び出てきたことには感謝していた。

「……ん、ごめんね絵理。でも確かに先行実装なら、ありえるのか……」

GBNにおけるNPDの思考パターンが旧来のAIじみている、というのはサービス当初から運営も把握していた。

だからこそバージョン1.78という事実上のバージョン2.0に等しいレベルの先行アップデートでは、感覚のフィードバックとか、NPDの思考パターンをより原作のキャラクターに近づけるといふ方向でサブコンテンツの拡充を図ったのは愛香も掲示板を通して把握している。

以前から実装されていたNPDレンタルサービスに限らず、色々とソロプレイヤーやガンプラバトルを嗜まないダイバーでも楽しめるようなサブコンテンツの充実は運営の目標であり頭痛の種だ。

例えば永遠の夜景を実装するために作ったデイメンションが全身タイツの鳥頭に占拠されたりだとか、フリーバトルのために作ったデイメンションがモヒカンと猿山をコンクリートミキサーにかけてぶちまけたゴモラと化したりだとか、ユーザーの行動が実装に対して斜め上に突き抜けるなど、ままある話にしてこの世の無情の一つなのである。

だからこそ運営も自分たちの目指した方向にコンテンツを楽しんでもらうべく、公認G-Tuberである「ザクムラ」や「ナルミ」といったスタッフ側からダイバーに歩み寄る姿勢を見せているのだ。

そういう意味では、先行実装されたシークレットの結末に大規模なレイド戦を持つてくる、というのは抽選か何かで選ばれた「もう一つのビルドダイバーズ」への溜飲を下げつつ、ユーザー全員——諸々の事情で参加できないダイバーもいるだろうが——が楽しめるという意味では極めて妥当な落とし所だろう。

「……にしても、AIがあんだけ凝ってるのに、GBNの中で見せても

らった映像だとあのコアガンダムもどき、随分テキストだよね」

「……え、えつと……そうですね……」

愛香が悪態をつけた立場ではないのだろうか、それはそれとして「カザミ」がアップロードしていた映像に写っていた中ボス格と思しきレガンダムもどきとアルケーガンダムもどきの動きは確かに粗末なものであった。

それは絵理が否定しないところからも窺えるだろう。

例えばあのレガンダムもどき——【フェイクレガンダム】は、攻撃のほとんどをフィン・ファンネルに頼っていて、ファンネルと本体の連携によるセルフクロスなど、オールレンジ攻撃が恐れられている所以である戦術を用いていない。

あの日、チイを捕まえるために戦った「テンコ」の操る【天道天照】は、その本気を出した相手に対してはレギルスビットを様々な形に変えて、更にはif sユニットと連携した乱反射などを交えた予測不能な弹幕砲火に、本体の攻撃まで追加するという地獄の欲張りセットみたいなスタイルを貫いているからこそ「一桁への壁」として恐れられている。

愛香が味わったのはその片鱗ばかりだったが、それでも相手の死角にファンネルを回らせつつ、位置取りでもって接近を許さないという立ち回りは絵理も、「エリイ」も用いているようにオールレンジ攻撃の使い手としては挨拶のようなものだ。

この「カザミ」という男だつて筋は悪くないどころか、機体の剛性でいえば自身を上回っていると、愛香は素直にそう認めている。

ただ、オールレンジ攻撃の対処に慣れていないだけだ。

それなら、「リビルドガールズ」は愛香のバイトだとか秋乃の大学だとかの都合で参加こそ断ったが、錚々たるメンツが顔を並べた「ロータスチャレンジ・ver. エルドラ」で揉まれれば速成栽培で慣れるはずだろう。

なんせあのチャンプが参戦しているのだから。

自分たちが参加する側になったら一も二もなく断っていたであろう地獄のクリエイトミッションを想像して、愛香は苦笑と共にどこか

背筋が震えるのを感じていた。

「……あ、あの、えっと……」

「ん、どしたの絵理」

「……あのアルケーガンダム……でしたよね……？　　なんだから、動きが不自然だったような……」

GBN内で見た映像に写っていた、アルケーガンダムなんだかそうでないんだか不審な機体こと「デユビアスアルケーガンダム」のトランザム、そしてその軌道を思い返しながら絵理はそつと言葉を紡ぐ。アルケーガンダムという機体は、一見その大剣の存在からゴリゴリに相手を詰めていくパワータイプだと勘違いされやすい。

だが、その本質は極めてトリツキーな独自の動きで相手を翻弄するユニークアタッカーだ。

脚部のビームサーベルや、末端肥大気味な、人型と異形の間を取るそのプロポーションから繰り出される攻撃は相手に中々間合いを讀ませず、更には擬似とはいえ太陽炉搭載機独特の軽快な機動でもって相手を翻弄するテクニシャンぶりは、「アルケーに故郷の村を焼かれた」とまで憎むダイバーもいるほど癖が強く、そして読まれづらいし読んだとしても通してくる圧を持っている。

だが、動画で見たアルケーもどきことデユビアスアルケーの動き方は、トランザムを発動していることを加味しても極めて直線的だ。

愛香もまた、絵理と同じ景色を脳裏に描きながら、そして彼女ならどうしていたのかと考える。

「……てか、絵理ならあれ倒せるんじゃないの？」

「……そ、それは……た、ただ、グラウカツツエさんの方が、怖かったな、って……」

「まあ実際置きゲロビとかに自分から突っ込んできそうだしねあのアルケーもどき」

GBNにおいても相手より先に飛ぶことは悪手とされやすいが、かといって二次元的な横軸の移動だけでの行動というのは極めて読まれやすいというジレンマも抱えている。

そしてうっかり高機動型に乗った初心者がブーストを噴かしたら

移動方向に置かれていた照射ビームに突っ込んで爆散するというのは、古より滝行というスラングで親しまれているほどの風物詩だ。

絵理なら、エリイならば恐らくフィン・ファンネルが描く光の網であのアルケーガンダムもどきをたやすく絡めとっていたことだろうと、宣伝大使が星に帰って久しい究極のニッパでゲート跡を二度切りしながら、愛香はどこか誇らしい気持ちでふんす、と鼻を鳴らした。「にしてもレイド戦かぁ」

「……チイちゃんのこと、思い出しますね……」

「流石にあの時みたいにテンコ様とか、クオンさんとかが敵に回らないだけいいっていうか……流石に親玉のアルスとかいうNPDがチャンプより強かったらクソゲーでしょ？」

地獄の「E.L.ダイバー奪還戦」、その光景と脳裏に刻まれた恐怖を思い起こして身震いしつつ、大規模レイドのボスより強いチャンプってなんなんだと改めて恐怖を覚えながら愛香は言った。

GBNの最上位は人外魔境どころの騒ぎじゃない。

そして、そんな最上位が楽しめるバランスをぎりぎり保ちながらも決してチャンプ目線で調整しない運営班には頭が上がらないというものだ。

「……思うところもあってロータスチャレンジには参加しなかったけどさ、あれが……ううん、このレイド戦がもしかしたら、ヒロト君にとって何かの終わりになるなら、新しい始まりになるなら、あたしはそれが贖罪になるのかな、って思うんだ」

「……愛香……」

「知らなかったとはいえ、後から許可貰った身だからね」

今は自身の部屋の机に寛いだような姿勢で飾られているフェアライズガンダムの姿を思いながら、愛香は少しだけ胸を氷の針で突かれたような痛みに、曖昧な笑みを浮かべて絵理へと懺悔する。

ただこれは、愛香にとっての本心であることは確かだった。

クガ・ヒロトという個人がどんな痛みを抱えてGBNに潜り続けたのかなど、愛香にはわからないしそれを尋ねる権利もない。

ただ、そこに深い悲しみが横たわっていたことぐらいは、彼の目を

見れば想像できる。

そして、「カザミ」の動画に映る彼の姿だけでなく、あの日直接会って許しを貰った時の目は、そこから少しだけ前に進んでいたような感じがしたのだ。

妖精の名を冠する惑星はこの宇宙には存在しない。

しかして架空のソラにそれが浮かんでいるのなら、仮想の世界に果てがないのなら、きつとコアガンダムという可能性の心核はそこに手を伸ばし、旅をすることができると愛香は信じている。

「……愛香も、飛べますか」

絵理の質問は浮かべた笑顔と同じように控えめだった。

それはきつと、答えがわかっていたからだろう。

以心伝心、という言葉も今は古くなってしまったのかもしれないが、ぺたぺたと自身の頬に触れる絵理の体温からはその親愛と確信が伝わってくる。

「うん、あたしも……きつとこれで、もう一度飛べるから」

だから、全力で楽しもう。

そんな約束を明日に託すように、愛香と絵理は軽いベレーゼを交わすのだった。

信じるか信じないかどうかはともかくとして、またGBNのアクティブユーザー二千万人を巻き込んだ大規模イベントが開催されるかもしれない、という噂は身内だけのものだったはずなのに、瞬く間に千里を駆け抜けている。

人の噂も七十五日とは古い諺だが、良くも悪くも——というよりは悪い方に触れているが——七十五日で消えてくれない情報化社会で、噂話というのはとにかく話題性があれば自動で増殖するかのよう拡散して一人歩きしていくものだ。

既に祭り状態になっている掲示板を開いているタブを閉じて、キヨウスケは自身のフォースネストに何故か集まっていた、錚々たる面々を前に嘆息しつつも問いかける。

「……で、これは本当だど？」

「なに、本当か嘘かはともかく祭りというのはな、踊らねば損なのじゃぞキョウスケの坊よ」

古城の食卓に座する、古風な喋り方をする少女——テンコは、とりあえず形式的に問いかけてみましたとばかりなキョウスケの問いに、少しのからかいを込めてそう答える。

「こちらとしても艦隊戦が望めるのなら、本領というところでしょう」
「YES！ このGBNで戦艦はどうも冷遇されてる気がするのデース……でも、このイベントならAー1 OK！ ワタシたち『GHC』のバーニング・ラヴを見せてやれマース！」

そしてその円卓に座しているのはテンコだけではない。

彼女に同調して、普段から戦艦による艦隊戦をこよなく愛する、GBN最大のフォース同盟である「GHC」を率いる男、「提督」のあだ名を頂戴する「アトミラル」とその妻である「コンゴウ」はどこか興奮気味に、テンコの「踊らにや損」という言葉に同意を示した。

確かに、想定される戦力があの要塞砲を守護していたガンプラ群だと考えれば、それがレイド戦に引っ張り出されてくるのなら艦隊戦は避けられないだろう。

そうした時に狂気のフルスクラッチでハイパーメガ粒子砲をさながら拡散波動砲のごとく運用している「GHC」の艦隊がレイドバトルモードに移行した各サーバーに自慢の艦隊を分散配置するというのは極めて心強い。

「うむ……想定される戦力比は此方に勝るとも劣らない、まさしく終末の具現……って、いかテンコ様と一緒に戦えるってだけで大分こつちとしては美味しいってどうか」

「……貴女の想いは理解した、だから落ち着いてはくれないだろうか、クオン」

竜人として威厳あるロールプレイをしていたかと思えば素に戻って、憧れのダイバーと同じ円卓に腰掛けてかつ同じ戦場で戦えることに興奮を隠しきれないクオンを宥めながら、キョウスケは自身のフォースネストがこの会議に使われることになった経緯を思い返して目頭を抑える。

曰く、無駄に広くて人がいなさそうだったから。

そんな、悪戯っぽい笑みと共にからかいが八割、本気が二割ぐらいの感じで提案を持ちかけてきたテンコのそれはまあ確かに事実ではあった。

無駄に広い古城を買ったことは確かだし、普段であればユユとキョウスケ以外人の出入りが無いのもまた同様に確かだ。

だがそれでは自分がろくに絡む相手もいないぼっちみたいなものじゃないか、と、キョウスケは半ば当たっているからこそ耳が痛い事実、溜息を吐きながらも、ここにこうして錚々たる面子が集まってくれたことそのものには感謝をしていた。

「二千万対二千万ねえ……鯖が持ちやいいんだけど。まあ、そっちはともかくアイカたちは乗り気っぽいし、チイたち『リビルドガールズ』も今回ばかりは口ハで踊る阿呆にならせてもらいやすぜ」

「……イリハ……がんばる……たのしい……たたかい……たのしくない……でも、チイは……たのしい……」

「ん、ありがとイリハおねーちゃん。危なくなったらいつでもチイつかアキノの後ろに隠れていいからね」

「……うん……アキノ……がんばる……だから、イリハも……がんばる……」

そして、「リビルドガールズ」代表として大学の定期考査に勤んでいるアキノに代わってこの魔物たちが集う円卓会議に出席していたチイは、どこか場違いなものを感じながらも、乗り気なアイカとそしてイリハの手前、それを表に出すことなくキョウスケの問いを肯定した。

サーバーが持つかどうかについてはわからないとしても、とりあえず先行実装シークレットミッションの最後に皆で楽しませよう、というのは運営的にも極めて健全だし、イリハを保護している女性も同じような趣旨のことを言っていたと、チイは彼女から聞き及んでいる。

「君たちは騒動の槍衾に囲まれやすいな……しかし、まあこうも有識者が集まってそうだと言っているんだ、僕としてもレイド戦が開催さ

れるものとして動くつもりだ。今日は珍しくないが……それはユモも同じだよ」

「ヴアルガの主人に言われちゃあ世話ないっすな、まあチイも言えた義理じゃねーんだけど」

「何をいうか、退屈するより余程いい。祭りというのはな、敬意をもつて行われる神事なのじゃ。故に我らは楽しむという敬いでそれに応えねばならんのよ」

「……お、おう……できれば楽しみで鯖に穴開けないでほしいっす、テンコ様」

どんな相手にも金の交渉以外では割と平坦に接しているチイでも、この年齢不詳な少女の蘊蓄を伴った言葉にはどうにも圧というか年の功というか、そういったものを感じずにはいられなかつたし、故にこそ多くの人間が彼女を様付けで読んでいるのだろうと気圧される。

「テンコさま……？ たのしい……？ うやまい、たのしい……」

「うむ、最高に楽しい祭りじゃ、のうアトミラールの坊よ」

「ええ、タチバナのクソツタレ共ももういないんです、ならこちらとしても盛大に——アルスとやらを歓迎してやるべきでしょう」

アルスの正体が実は異星からの侵略者で、大分前に起こった電波障害の主犯であるかもしれない、という旨のことはカツラギとトリーを、そして今ここにはいないアリアを通してアトミラールも聞き及んでいる。

となれば、「エルドラ」で起きていることは全て現実であり、あの少年たちは凄まじい重荷をその両肩に背負って戦ってきたということになるのだろう。

アトミラールは軍帽を目深にかぶり直し、組んだ指の隙間から虚空に「アルス」の姿を、そしてあの忌まわしき衛星砲を描きながらそれを睨みつける。

彼らが——「もう一つのビルドダイバーズ」が「エルドラ」で手荒い歓迎を受けたというなら、こちらもGBN流の歓迎でもって返すのが礼儀というものだろう。

礼には礼を、無礼には無礼を。円卓に集まっていた次元霸王流格闘

術の継承者、「ワールド」もそれには同意していた。

「よくわかんないけど、あつちが戦うってんなら、それで……『BUILD DIVERS』がアルスつてのと決着つけなきゃいけないんなら、オレは全力でその手伝いをさせてもらいますよ」

「言うじゃねえかワールド、となれば俺も乗っかるのが筋つてもんだ」
ワールドが切った啖呵にタイガーウルフも乗っかることで、この円卓における一つの議決が承認されたと見做したのだろう。

代表者として立っていたキョウスケはそれを俯瞰すると、静かに仮想のグラスを持ち上げて、掲げてみせる。

「それではレイド戦に向けて、一つ乾杯で締め括りましょう。あとは各々交流を深めるといふ形で……と、無粋ですね、言葉はいらない……ただ我々の、ダイバーたちの勝利を祈って！」

『乾杯！』

それは、世界を救う戦いである。

だが、その真実を知っているのは、きつと今も遠い星で使命を果たそうとしている「もう一つのビルドダイバーズ」だけなのかもしれない。

それでも、「アルス」とやらの侵攻がレイドバトルであれ侵略であれ、ダイバーたち二千万人に向けられた宣戦布告であるのなら。

我々はガンプラとそこに込めた愛と想いで歓迎という名の迎撃をしよう。

この円卓に居合わせたダイバーも、そして居合わせずとも大規模レイドバトルを楽しみにしている、或いは半信半疑ながらもどこかで期待しているダイバーも。

きつと、同じ想いを抱いて、明日だと推測される決戦に控えているのだった。

EX. 08 「このGBN（せかい）の明日のために」
ご注文は号砲ですか？」

『何度でもガンプラの民がお前を阻むだろう』

それに——アルスにとつて、この惑星を、エルドラという星を守ることは何よりも優先すべき使命だった。

自分が今も帰りを待ち続けている古き民、イルハーヴやシャングラたちが遺した言葉を、約束を糧にしてアルスは今日という日まで幾星霜の時を待ち続けていたのだ。

だが、眠りから覚めて蓋を開けてみればエルドラという星は新き民を、山の民を名乗る動物のような外見を色濃く残す人類種に占拠されて、自らの味方であったはずのクアドルンも敵に回っている。

それだけではない。

異世界からの来訪者、「ガンプラの民」の力を利用して洗脳下に置いていた「シド」と「ガンダムテルティウム」も、衛星砲を真正面から撃ち破った彼らに——「BUILD DIVERS」によつて解放されたことで、皮肉にも、従えていたはずの彼から自らの使命でありレゾンデートルをアルスは否定されていたのだ。

——ならば、ガンプラの民を根絶すればいい。

だからこそ、彼はその結論を導き出した。

アルスは、壊れた機械だ。

もはや彼に柔軟な思考など、かつてエルドラの文明が栄えていた頃と同じ考えなど望むべくもなく、ただ全てを拒絶して己の使命にしがみつき続けている姿は、クアドルンから見れば哀れなものだった。

だが、アルスはそれでもエルドラの守護という役目を、シャングラとイルハーヴが、旅立って行った彼女たちが帰ってくる場所を守るといふ、そんな小さな約束を、「自らの役目は終わって、彼女たちはもういなくなった」などという言葉だけで信じていることなど到底できない。だとしたら何故、帰ってくるという言葉を残したのか。

そして何故、クアドルンは自分たちの星にとつての異物でしかない

あの獣人たちを認めているのか。

さらに何故、ガンプラの民とやらは自分の使命を邪魔するのか。

いくつもの「ハテナ」がアルスの思考サーキットを埋め尽くしていたが、その答えが分からなくともできることは単純だ。

あの衛星砲を真正面から撃ち破った黄金の、太陽の化身——「リライジングガンダム」が、そしてガンダムテイルウムが異世界からやってきたのならばその異世界を滅ぼすことで、エルドラにとっての脅威を排除すればいい。

それを認めたからこそ、アルスは転送システムからの逆探知を利用する形で、現状投入できるすべての艦隊を率いた上で、「ガンプラの民」の本拠地である仮想郷、GBNへの不正アクセスを果たしてみせたのだ。

だが、勝利を確信した彼の脳裏にあったものは、そして、転移を終えた瞬間に視界で捉えた光景は、その想像を遙か斜め上に突き抜けるものであった。

「いらっしや〜い！ GBNへ、ようこそ！」

——よく来たな、迎撃する。

そう言わんばかりに、実に数万という規模の「ガンプラの民」が彼の転移してきたメインサーバーに最も近いエリアには控えていたし、分艦隊を念のために派遣した各種サーバーにおいても血に飢えた精鋭たちが今頃待ち構えていることだろう。

諸手を広げて歓迎のポーズを取った紫色のガンダム、ガンダムラヴファントムを駆るダイバーであるマギーの宣言は凶らずも宣戦布告の嚆矢となった。

マギー自身は純粹に異世界からの来訪者を歓迎するためにその言葉を発したのだが、事情を知らない大多数のダイバーからすればアルスは降って湧いてきたレイドボスでしかない。

そして、異例のメインターミナルを除く全サーバーをレイドバトルモードにするというGMの対応によって、GBNのアクティブユーザー二千万人の中でもマギーの呼びかけに応じた多くは異界からの侵略者と戦うべく各サーバーに分散し——アルスが用意した数に対

しては劣るかもしれないが、その質は圧倒的に勝っている——彼を待ち構えていたのだ。

『これは……一体……?』

アルスは困惑する。

わざわざエルドラへと兵を送り込んできたのだから、あの「ビルドダイバーズ」と、そして「シド」が、ガンプラの民の中では一番強いのだろうと踏んで、それでも慢心せずに全ての戦力を注ぎ込んだつもりだった。

だが、目の前に展開する数々のガンプラは圧倒的に危険だということとを、アルスのAIとしての本능が警告している。

しかしそれは、GBNの有志たちもまた、得体のしれない敵である彼らに対しては同じだったのだ。

「空が三分に敵が七分、ってほどじゃないけど……こいつは思ったより多いな」

北欧サーバーに設けられた、ベルリンをモチーフとしたエリアに陣取っていたガンダム・マルコシアス使いのダイバーである「ユーリ」は、アルスたちが本隊を派遣するのに先んじて現れた巨大戦艦二隻と、そこから展開される戦力を睨みつけて苦笑した。

「勝てるんすかね、こんなの……」

彼の後ろで、自慢のジャイアント・ガトリング——「システムウエポンキット」でアップグレードしたものだ——を装備させた、陸戦重装型のペイルライダーを駆る男、「ローエ」は幼さの残る声で彼に問いかける。

幾らガトリングを頑張って作ったところで、推定戦力比はさながらクロスボーン・ガンダムのように三十対一とかそういう次元の話だ。

メインサーバーが置かれているエリアにはあのチャンプや「ジャバウオツクの怪物」、「FOEさん」、「黒髪黒和装災害系妹」、「半神半魔」、「リビルドガールズ」、そしてあの「ビルドダイバーズ」という錚々たる面々が待ち構えているとはいえ、各ディメンションに分隊として配置された自分たちが「GHC」の支援もあるとはいえ勝てるのか、初

心者であるローエにはわからなかったのだ。

だが、ユーリは彼のそんな不安を否定することなく笑って親指を立ててみせる。

「大丈夫だ、お前は俺たちの後ろで支援火力をやってくれればいいんだ」

「でも……」

「おいおい、緊張すんなよ。ここはGBNだぜ？　しかも……レイド戦なんて負けたってただ悔しいだけなんだ、だったら自由に楽しもう、な！」

お前のペイルライダーも、きっとそう言ってるさ。

決戦開始の合図の如く、ベルリンの空に浮かんでいる改ラー・カイラム級戦艦「扶桑」と「山城」が主砲による先制砲火を放ったことを確認した上で、ユーリは己の愛機であるマルコシアスを前線への一番槍とすべく突出させていく。

正直なところ、この気合の入った新規モデリングで作り返されたレイドボスたちがどれほどの強さを誇っているのかはユーリにもわからなければ、彼もまたローエのように勝利に対する不安を抱いていなかったかと問われれば、それは嘘になる。

だが。

背後において、おそらく障害となる巨大戦艦と「GHC」の戦艦が撃ち合ってくれているなら、さながらハードコアデイメンション・ヴァルガのように開幕から大火力で擦り潰される心配はない。

付け加えるなら、各サーバーに分散配置された戦力は、寄せ集めなどでは断じてない。

恐らくはウィンダムをモチーフとしたのであろうやたらと刺々しく、水中眼鏡をかけているようなフェイスクスティアへと改装されたエネミーユニット、「エルドラウィンダム」のビームサーベルを、バスタードメイスの力強い一撃で弾き飛ばしながら、ユーリはちらりと一瞥した視界に駆け抜けた閃光を見る。

「さてさてそんじゃま……あーしもちよっちやりますか！」

そうだ。自分はともかく彼女を付け合わせのミックスベジタブル

扱いできるダイバーなどこのGBNに存在しているはずがない。

着崩した白シャツと、ホットパンツに小麦色の肌、そして金髪の頂点に虎の耳を戴くそのいかにも「ギャル」な感じのダイバーは、まさしく戦場を駆け抜ける光であり、多くのダイバーたちから畏怖と羨望をもつて一身に注目を集める「一桁の現人神」その一柱にしてダイバーランキング4位、「テトラ」に他ならない。

彼女が操るガンブラー——「ザ・ギャン」は、ギャンという機体のコンセプトを極限まで高めて、そして極限まで作り込まれた一つの芸術品だ。

自分が処理に手間取っているエルドラウインダムを、ただその場を駆け抜けただけで一閃したのと勘違いするほど、神速の槍捌きによって何機もテクスチャの塵へと変えながら、テトラは不意を狙って放たれたのであろう大火力砲すらもまるで微風の如くそのミサイルシールドは受け止めて跳ね返す。

大火力砲をそのまま弾き返される形で爆散したレイドボス、「エルドラードトレス」にもしも中身が入っていたなら、自分が何をされたかもわかつてはいなかっただろう。

サブアームに持たせたナイフで四肢の関節をもぎ取り、バスタードメイスをエルドラウインダムのコックピットへと叩きつけながらも、ユーリは、その美麗さと美術品のごとき優雅さを誇る極限のギャンに呆然と見惚れかけていた。

あの光沢はマ・クベが愛していた白磁をイメージしているのだろう。

白立ち上げから丁寧にクリアの層を重ねて研ぎ出しを行い、更にパールクリアを吹き付けてそこから研ぎ出して仕上げのパールを吹いた上からウレタンクリアでコートする——その塗膜の層の厚さを考慮したクリアランス調整も、その処理一つ一つも気が狂いそうになるレベルの作り込みであることは疑いようがない。

「オタクくん、あーしに見惚れてつとこ悪いけどー！」

「わかってます！……それでも、いつかあなたと同じとこに俺も行ってみたい！」

背後から襲いかかってきた四脚型のレイドボス、「エルドラブルト」に、サブアームからのナイフ投擲で牽制をかけながらユーリはテトラへと素直な憧れを口にする。

戦いからは離れていたこともあった。

一時期のことを思い返しながら、そしてチャンプとの激闘を思い返しながら、自身に向けられた純朴なリスペクトにテトラはふつと、どこか懐かしいような感覚を抱きながら笑みを浮かべる。

そうだ。ガン普拉バトルは楽しくて、苦しいことも沢山ある。

それでも、その気持ちを忘れなければ。諦めなければ。

自分を、その立ち位置を正しく見続けていられるなら。

「来れるっしょー！ ゴッドフィンガーをマルコシアスに積むの、あーしは嫌いじゃないしね！」

自身はイマイチ乗り切れなかった「E.L.ダイバー争奪戦」だったが、その時に見た全ての光景をテトラは覚えている。

だからこそ、GBNが好きだからこそ、今度は誰の思惑に囚われることもなく純粹にレイドバトルを楽しめる。

その喜悦に満面の笑みを浮かべながら、北宋の壺を思わせる白磁の風は、仮装の海に浮かんだベルリンの街を閃光と共に駆け抜けていくのだった。

機械は決して動揺しない。

ドイツ軍人はうろたえないとかそういう話ではなく、単純にこのGBNへと侵攻してきた「ヒトツメ」——アルスの手駒たちであるガードアイは高度な思考ルーチンなど有してはおらず、ただ彼からの命令に従って動くだけだ。

だが、それでも彼らに感情というものが存在していたなら、ディメンション・シユバルツバルトに派遣された分艦隊はまず困惑し、そして自らの正気を疑っていたことだろう。

「フハハハハハハ！ 歓迎しようではないかレイドボスたちよー！」

「おうテメエら！ ハートの兄貴がああ言ってるんだ……オレたちの『聖地』は穢させねエ……！」

「あたしらバトルとかガラじゃないけど……このデイメンション攻めてきて話し合えないんなら断固反対、抗議だかね！」

永遠の常闇に覆われたメガロポリスの上空にもまた「GHC」の支援艦隊は轡を並べて、一隻という規模で侵攻してきた巨大戦艦に対して主にマゼラン級を中心とした艦隊が砲撃を加えている。

だが、その地上と空中にあるのは主に全身タイツに鳥頭という見た目は極めて変態そのものな格好をした、バンデット・レースの王者である虹色ゲーミング可変機、パロットスクランブルを操る「パロット・パーティー」と、彼の魅せる最速の夢に酔い痴れる暴走族たちが、ガンスタグラムで「バエ」るため、抗議の意味を込めて持ち出したジム・クウエルと肩を並べているという極めて珍妙にして怪奇な光景だ。

「ムツハハハハ！ レースでない戦いなど断るところだが、我々はレースを運営に認めて貰った恩がある！」

「イエツハハハ！ そうだとも！ ならば運営の用意した祭りに乗って飛ばうではないか同志諸君！」

「ハハハハハハ！ よく見ればこのバインダーガン……フライトユニットのようだな！ ならば面白い、空中戦は我らの翼の本領よ！」

言ってることはまともなのに、格好のせいで極めて変態性が高いというかその物腰の柔らかさの温度差で風邪をひきそうな具合だが、普段は水曜と土日はこの「ハイウインド・エリア」においてバーリ・トウードなレースに明け暮れる「パロット・パーティー」たちはダイバーとしての実力も確かであり、エルドラウインダムの編隊が敷いた包囲網を巧みに潜り抜けながら、鳥型の首を回しながらその変形ゲロビの照射でもって薙ぎ払っていく。

空を飛ぶのが温度差の鳥なら地上を走るのは熱き魂をその胸に秘めた暴走族だ。

パラリラパラリラと管楽器アレンジのガンダム主題歌を垂れ流しながらも彼らはガリクソンの操縦技術で巧みに弾幕砲火を回避して、エルドラウインダムを轢き潰すというなんともワイルドな方法で処理していく。

そして、討ち漏らした敵はガンスタグラム勢のジム・クウエルがそのライフル掃射でもって美味しくいただくといった具合だった。

かつては犬猿の仲として睨み合っていた者たちも、話し合いと歩み寄りを通じて今は同じくこの常闇の住人として互いを認め合っている。

ジム・クウエルがあわやエルドラードトレスの砲撃に飲み込まれようとした刹那、姿を現したドードラブロズゲーがその巨体で庇い立て、暴走族たちが砲撃手へと殺到する。

「おいゴルア！ カタギに手エ出すとかためエ……落とし前どうつけてくれんだ!？」

「このシャバ造が、野郎共突っ込むぞー！」

「ありがとね、族さん、鳥さん！」

「何、これぐらい人として当然のことよ！」

美しき絆。麗しき友情。

たとえ本質的にはわかり合えなくとも、歩み寄ることで隣に立つことはできる。

脳がバグリそうな絵面である以外は、GBNが描こうとしているものは確かにあった。

その絵面こそが最大の問題なのだが。

しかし、不夜城の主たちもまた、侵略者を許すことはなく果敢に不利な戦いを制しようと戦っていた。

見た目も絵面もそこには関係ない。ただ熱意と想いが、「大好き」が溢れていれば、きつとそれこそが、全ての答えなのだろうから。

「そう……この極圏に立つわたくしが、バエルでもって全ての侵略者を一人で葬る！ その行いが世界を変える！」

アリアは高鳴る胸を抑えきれず、咳き込みながらも咆哮して、白亜の悪魔にしてその王としての冠を、恐れ の 頂点に立つ名を冠するガンプラで、デイメンション・トワイライトに侵攻してきたアルス艦隊の実に三割という数を殲滅せしめていた。

恐らくアルスとやらもここが不人気であることは知っていたのだ

ろう。

戦艦一隻と少数の——といっても相対的な話だが——ガンプラ、そんなもので自身とバエルを止めるつもりだったというのなら片腹痛い。

エルドラードトレスもエルドラウインダムも、そしてダナジンとよく似た機体もその区別なくアリアが掲げる黄金の剣は、その切っ先は全てを裂いて塵へと変える。

まさしくこれが悪魔の力だと、ケンプファーを駆っていたダイバーは、味方であるはずなのに荒れ狂うアリアの圧倒的な暴力に恐怖さえ覚えていた。

「GBNは……わたくしにとつて真実の世界！ このデイメンションを片付けたならわたくしは革命のために、この世界を守り通すという偉業を成すためにバエルと共に全てのデイメンションを回り尽くす覚悟！ さあ、悪魔の王を恐れぬのなら……かかってくるがいいのですわああああ!!! おーっほっほ!!! ゲツホゲホゲホッ!!!」

「お嬢様ああああっ!!!」

むせ返って動きを止めたバエルを狙ってその背後から切り掛かってきたエルドラウインダムの胴体を、すぐ近くに控えていた▽ガンダム——ヘルムヴィーゲ・リンカーの大剣を手にし、機体色もそれに合わせたミツルギのガンプラがアリアを庇うような形で両断する。

「ゴッホゴホッ……大義でしてよセバスチャン！」

「だから僕はセバスチャンではないと……お嬢様！」

「委細承知、ダウンローデッドですわセバスチャン！ 沈めるべきはあの戦艦！」

有象無象に構っている暇などない。

だからこそエルドラウインダムやエルドラードトレスの対処をミツルギに任せる形で、アリアは宙に浮かぶ巨大戦艦の弾幕砲火を自慢の機動力で掻い潜りながら、分厚い筈の正面装甲に易々とバエル・ソードを突き立てて切り裂いていく。

もはやそれは駆け抜ける嵐だった。バエルという純粹な力が放つ輝きに、ヒトツメたちは圧倒されていたかどうかはわからないが、こ

の戦局を、その行く末を握っているのがアリアであることには誰も何も疑いを持つ余地などない。

「これが……バエル!!」　そしてわたくしの……敬愛するマクギリス・フリアド准将の、世界を変える革命の力ですわああああ!!!」

本能のままにアリアは叫んだ。

そして突き立てたバエル・ソードは巨大戦艦のエンジンを、ブリッジを貫いて爆散させたにも関わらず傷一つ付いていない。

白亜の悪魔も同じだ。手傷など負うことはなく、一つのデイメンションにおける戦況をひっくり返して次のデイメンションへと消えていくその姿は自由にして奔放、もはやアリアを止められる者などいないのではないかとというハイテンションぶりだった。

そして普段であれば諫める立場のミツルギもまた、心を躍らせ、昂る胸には一抹の期待を抱いている。

この戦いは、アリアの革命はきつと彼女をいい方向に導いてくれるのだろうか。

ワープアウトしてきたアルスたちヒトツメ艦隊に対して、メインサーバー近くである本隊との交戦状況は決して良いとはいえなかった。

先陣を切った「ビルドダイバース」のガンプラであるモモカプルから転送されてきた情報は全てアンノウンで埋め尽くされているし、先ほどまでカザミが配信していた動画の中に出てきたサイコドートレスとも呼ぶべき巨大ガンプラまで、戦線には投入されている。

空が四分に敵が六分といったところだろうか。

改ドゴス・ギア級戦艦「天城」の指令席に座る男は、アトミラールら事前に伝えていた射線から全員が外れているのを確認した上で、巨大戦艦を標的にしたマルチロックオンを行う。

「アルスだったか……物量だけに頼る愚か者よ、一つだけ教えてやろう」

そうして、「天城」の艦首に設けられていたハイパーメガ粒子砲二門へと静かに光が灯り、艦首の先に展開していたフォトンリングレイが

ゆらりと虹色に輝く歪みを空間に作り出す。

「エネルギー充填120パーセントブース！ 全艦連動、マルチ隊形を取りつつハイパーメガ粒子砲の回路を収束から拡散へ！」

「ありがとう、コンゴウ……さあ、教えてやるぞアルスとやら！ 力は……更なる力によって擦り潰される！ このGBNにのこのこ出てきたのが間違いだったとな！」

アトミラールの、「提督」の号令と同時に、決戦開始を告げる号砲は放たれた。

フォトンリングレイによって拡大された拡散ハイパーメガ粒子砲の一撃は、全艦隊集結してのそれとは比べるべくもないが、それでも数隻の戦艦を撃ち落とし、多くの敵機を巻き込んで破壊するという確かな結果を戦場に齎していた。

さながらそれは災禍の雷槌だった。

相変わらず馬鹿げた威力、金満と資本主義が織り成す一撃に、ダイバーたちは苦笑しながらも、レイドバトルはこうでなくてはと、半ば風物詩と化した歓迎ハイパーメガ粒子砲の軌跡を見送る。

「へっ、金金金……フォースとして恥ずかしくねーのか」

「チィ、それは貴女が言えた義理ではないでしょう」

「わーってるよ畜生、どーせチィは持たざる者だよ！ ……つと、与太話はここまでか。アイカ、エリィ！ そしてイリハおねーちゃん、準備はいいな！」

アキノと漫才じみたやりとりをしながらも、彼らの砲撃を待つてから遊撃隊として前線へと切り込んでいく算段だった「リビルドガールズ」——新たなメンバーとして双子の姉である「イリハ」を加えた——へと呼びかけながら、チィは愛機であるガンダムグラスランナーと共に戦場へと切り込んでいく。

「オツケーチィちゃん！」

「……は、はい……いつでも、行けます……！」

「イリハ、がんばる……チィ、たのしい……アイカ、エリィ、アキノ、たのしい……だから、イリハ、せかい、まもる……！」

かくして、盛大な歓迎となったハイパーメガ粒子砲の一撃をその嚆矢として、「リビルドガールズ」はめいめいにその翼を広げて決戦の空へと飛び立ってゆく。

この戦いの主役は自分たちではないと理解しながらも、それでも「もう一つのビルドダイバーズ」を助けるために、そして。

「エリイちゃんの空を……この世界をどうしようってんならあたしが許さない！」

だから全てを叩き切るとばかりに、エリイの、最愛の人のために妖精の女王を、フェアライズガンダムを駆るアイカは、高らかにそう叫ぶのだった。

EX. 09 「きみの描く未来へ／あたしたちの Re : RISE」

マギーによる歓迎の挨拶と、アトミラルの率いる「GHC」艦隊の砲撃を交戦の合図として、メインサーバーに繋がるデイメンションに集結した有志連合たちの戦いは開幕した。

アルスにとつての過ちがあったとするならば、彼がこのGBNにおける最大戦力を「BUILD DIVERS」及び「シド」と仮定していたことに他ならないが、しかしてそれは、手を抜いていたことを意味するわけではない。

「こいつ……硬いぞ、なんなんだ!？」

「ひゃーっはっは! ダメじゃないかキンケドゥ! 落ち着かなきゃあ! こいつは……レイドボスだと仰っていたのだよ! ドウガチ様が!」

F91をクロスボーン・ガンダムX1と同じ色に塗装した、キンケドゥをモチーフにしたアバターを使用しているダイバー、「ツジ」が放ったヴェスバーは、エルドラウインダムの防楯に弾かれて明後日の方向に逸れていく。

ツジもまたマギーに召集をかけられる程度には優秀なダイバーであり、彼が作り込んだF91も、このメインエリアの防衛を任せられる戦力であることに疑いはない。

しかし、アルスが用意した主力部隊は、このGBNにおいて一機一機がレイドボスレベルの体力や防御力、そして火力を持った存在として判定されていた。

速度重視で連射したためとはいえ、ヴェスバーを弾き返したことからそれは伺えるだろう。

しかし、ツジの動揺を諫めるように、両眼に眼帯を着けるという狂気的な発想以外は真つ当に、漫画作品「機動戦士クロスボーン・ガンダム」に登場する、ザビーネ・シャルのなりきりロールプレイをしている男は、エルドラウインダムが盾を構えた隙を縫うようにその

シヨットランサーをコックピットへと突き立てることで撃破する。

彼はX1を見ると追いかけてはいられないほどにザビーネロールにのめり込んでいるダイバーとして知られているが、しかしてその愛と実力は「ツジ」同様に一流のものだ。

「推定戦力比は……三十対一かそれ以上、しかしこのGBNにはコックピット判定がある……クク……キンケドゥ、ダメじゃないか、そこを狙わなきゃあ！」

「だからおれはキンケドゥじゃない！ どっちかっていうとシーブツクだろ！」

キンケドゥ扱いしてくること以外は概ねまともなザビーネルツクのダイバーにそう返しながらも、ツジは言われた通りに襲いかかってくるエルドラウインダムのコックピットを狙って、ビームシールドをサーベル刃の代わりに使うことで両断する。

そうだ。この戦いにおける相手の戦力が未知数である以上は、こちらが動揺して手勢を減らすことこそ最悪の手となる。

それを理解しているからこそ「GHC」は本気で艦隊を投入して、今も改ドゴス・ギア級戦艦「天城」の艦首に備えられた拡散ハイパーメガ粒子砲のリチャージを行っているのだ。

そして、何もレイドボスと例えられるのは敵ばかりではない。

ずしんと、コックピットが振動する感覚が、ツジとザビーネロールを行っている男が戦場展開していた空域を飛んでいたアイカとフェアライズガンダム、そして「リビルドガールズ」全員にも伝わってくる。

「クオンさんが動いた？」

「……恐らくは……」

『そう、我は動き出した……ならばここに具現するは一つの終末！』

さあ、往くがいい、「リビルドガールズ」！ 我も……ちよつとは格好いいところ、見せたいんだから！」

クオンのジャバウオックはその腕で、巨大戦艦が轡を並べる戦場の中心地を指して、アイカたちを導くかのように、高らかにそう言い放った。

彼女の胸によぎっているのは何も高揚ばかりではない。

かつて、このGBNにおけるモヒカンの巢にしてチンパンのラス
ト・リゾートと名高い「ハードコアディメンション・ヴァルガ」を巻
き込んだ一つの戦いがあった。

ヴァルガが静止した日、と形容されたその祭りに——クジヨウ・
キヨウヤとテンコの戦いに乗り込めなかった後悔はある。

そして、先日の「ELダイバー奪還戦」の背景をクオンは知らずと
も、それが運営と誰かが組んで筋書きを記した、ただのドラマに過ぎ
ないことはわかっていた。

だからこそ今、この世界を守る本気の戦いで、思うがままに暴れた
い。

マギーから、仔細は伏せられていてもこの戦いがこの世界にとって
重要な、運営方針に関わるようなものであることはこの場に、メイン
サーバーに集った全員に、そして各サーバーに分散した有志たちにも
ある程度は伝えられている。

このレイドバトルの失敗はともすればGBNの崩壊に繋がりがね
ない。

ならば、この戦いを楽しむことは間違っているのだろうか。

「否！ 断じて否である！」

自問自答した答えを叫び、衝動のままにクオンはジャバウオックの
テイルブレードを振り回し、そしてビーム・マグナムによる攻撃と
ビーム・トンファアによるラッシュという、相対する者にとっては悪
夢でしかない必殺の連携を用いて、瞬く間に、蜂球のように群がるエ
ルドラウインダムや、その中に混ざっていた、上位個体として判定さ
れている「エルドラダナジン」すら一撃の元に叩き落とす。

マギーは、この戦いを「お客さんへの歓迎会」と言っていた。

そして、ガン普拉バトルとは何であるのか。

不毛な戦い、苦行とも形容されるような手作業を乗り越えてこの電
子の海へとダイブしたその果てに待ち受けている終わりのないその
道に、ダイバーたちは何を見出し、何のために闘いへと駆り立てられ
るのか。

その答えは人によって様々だ。

アームド・アーマーVNによる巨爪がエルドラダナジンを引き裂いて、そして突如として現れた巨大なレイドボス——サイコドートレスとでも形容すべき個体と、ジャバウオツクはがっぷり四つに噛み合っていて、さながら怪獣大決戦の如くそのパワーをぶつけ合う。

「なれば……ううん、これは愛！ 大好きだから本気になれる！」

懂れているテンコの背中を追いかけるのも、そして今も戦場の中心で、己の庭であるハードコアデイメンション・ヴァルガに吹き荒れる蒼い極光をこのメインサーバーに持ち込んで辻斬りを行っているキョウスケに自身の背中を追いかけるのも、全てはきつと、皆この世界が大好きだからだと、クオンはそう思っている。

「その通りだ、クオン！」

「フ……漁夫の利天誅、ヴァルガでは基本であるな……ってここヴァルガじゃないんだけど！」

「……いや、すまない、その……手癖で」

がっぷり四つに組み合つて、ハンドビームとテイルブレードによる近距離での応酬を繰り返していたジャバウオツクとサイコドートレスの隙間を縫うようにして、GNバエルソードを両手に携えたキョウスケの機体——デイバインダブルオークアンタが、サイコドートレスの巨体を縦一文字に切り裂いてみせた。

ずるい、と、クオンは叫んでいたが、それはそれとして不毛な戦いにはさっさと蹴りをつけたかったところでもあったので、キョウスケの乱入には多少感謝していたし、その表情に浮かんでいるのは相変わらずヴァルガの流儀を戦場に持ち出す彼に対する呆れの苦笑だ。

だが、そうなっていると黙っていないダイバーがもう一人いる。

巨大戦艦からリフト・オフしてきたサイコドートレスに、Iフィールドの暴嵐とでもいうべき、全身を攻撃判定と防御判定に包み込んだ白と黒のG—セルフ、そのカスタムモデルであるG—イデアが突撃していく。

「もう、お兄様！ またそうやってユユ以外に色目を使うなど……！」
「色目を使っていた覚えはないが……まあいい、僕らはあの艦を沈め

るぞ、ユユ！」

「……貸し一つですからね、ユユは嫉妬深いのです……！」

どこかHiiragganダムとレガンダムを思わせる二人が彼方へと飛び去っていくのを見送りながら、「ジャバウォックの怪物」はどこか満足げに、群がる無数のレイドボスからその身を盾とする形で、多くのダイバーにターゲットが向かうことを防ぐ。

しかしてそのサイコ・フィールドを容易く突破できるレイドボスが
いるだろうか。

いたとしたなら、それは単なるクソゲーだ。

相変わらず、災害のように暴れ回る上位ランカー陣を一瞥した上で、チイは静かにそう呟いた。

「しつかしいっあ大事だな……アイカ！ 作戦は頭に入ってたろうな！」

「勿論☆ チイちゃんたちも頑張ってたね！」

「ええ、委細承知しております、あのターンXもどきは私とチイとイリハ、三人で！」

「あ、アルケーは……わたしが……！」

「レガンダムをあたしが倒す！」

アイカたちは互いに作戦を確認しあつた上で、切り込み隊長として、チャンピオンたちが今も暴れ回っている戦場の中心地へと散開して飛び込んでいく。

事前の協議で「リビルドガールズ」が一番槍を担うことになった理由は極めて単純なものだ。

アイカたちの戦闘スタイルは、強敵に対して突きつけられる一本の剛槍であるからだ。チャンピオンは、全員を集めた上で事前にそう説明をしていた。

要するに、全員が全員高い機動力から繰り出される強力な単体攻撃を持つていて、かつこのレイド戦においてタンク役を引き受けるには耐久面で不安を抱えているから鉄砲玉としては申し分ない、ということだ。

まず最初に戦場へ到着したエリイは、相も変わらず初手でトランザ

ムを起動し、直線的な軌道で切り掛かってくるデュビアスアルケーガンダムの一撃を回避し、背部のブーストポッドからフィン・ファンネルを射出する。

「やらせない……この世界、大好きな……わたしと、アイカさんのGBNは……っ！」

トランザムシステムの切り合いであるなら、単純なぶつけ合いで負ける道理はこちらにない。

迷う事なくトリガーを引いて、エリイはトランザムの発動を選択した。

かつては事あるごとに怯えていた気弱な少女の面影はもはやそこにはない。

どうやって生きていくのか、その最終解答を導き出すことができた愛する人と、そしてこの空を駆ける愛するガンプラでもって、GBNに現れた異星からの侵略者を討ち払わんと、再構築された因幡の白兎は、リビルドウォートはバイザーに隠されたその双眸に力強く光を灯す。

そうして、射出されたフィン・ファンネルを単射から照射に切り替えると、エリイは光の網を描くようにファンネルを操作して、先読みで自身を狙うファンングを撃ち落としていく。

「……わたしは、目が見えない……でも、この世界だから見える……アイカさんと同じ景色が、そして皆が戦うこの場所が……！」

エリイにとって、気配を読み取って先行射撃で撃ち落とすことなど最早容易い芸当だった。だがそれは全て、自身に向けられてきた悪意や敵意、そういうものと向き合わざるを得なかった今までの人生がそうさせてきたことでもある。

それでも、GBNがあつたから、もう一度翔ぶことができた。

たった一度だけじゃない蹉跌と再生、それを繰り返すことができたのは、自分が「リビルドガールズ」であるからで、そしてそのきつかけとなったアイカがいてくれたから。

——だからこそ、この世界を守ることでわたしは、愛する人への恩返しとする！

恐れることなく、果敢に攻撃をかけていたのが一転して防戦に回ったデュビアスアルケーをビームライフルとフィン・ファンネルの連携で追い込みつつ、エリイは「置いた」攻撃へと直線的な敵機を巧みに誘導していく。

それはさながら、マリオネットを操るかのように華麗な芸当だった。

掌の上で転がされ、そして踊らされていたデュビアスアルケーはエリイが目論んだ通り、移動先に置かれていた照射ビームに自ら突っ込む形でその耐久値を減らしていく。

『これは……一体……？ あの子は……？』

アルスは、戦場を俯瞰して見つけたその光景に困惑していた。

あの「パル」と呼ばれていた少年がデュビアスアルケーに対して置き攻撃を加えたのは偶然で、トランザムを切ることができないという欠陥に当たって、また造れば関係ないのだから、自身の開発したエルドラコアガンダムとそして各種アーマーは完璧だと、少なくとも今までは考えていたのだ。

だが、ガンプラの民はアルスの想像を遥かに超えて、自身の用意した戦力を叩き潰している。

戦艦で乗り込めば戦艦が迎撃にあたり、そして巨体を持つ機体を導入すればそれに匹敵する巨体のガンプラが立ちはだかる。

しかし、アルスの想定が甘かったと詰ることはできないだろう。

一撃では落ちないデュビアスアルケーの耐久値もさながら、模造品、フェイクでありながら彼の作り出した「ガンプラ」の出来は極めて良好な部類に入る。

それでもここはGBNだった。

あらゆる愛が、あらゆる機体が、あらゆるガンプラが百花繚乱とばかりに集って愛の花を咲かせるこの世界を予見することができたのであれば、彼はそもそも「BUILD DIVERS」と「シド」を最大戦力として規定せず、チャンピオンや「ビルドダイバーズのリク」をはじめとしたハイランカーたちをコピーしていたことだろう。

「……これで、終わりです……！ アイカさんのために……！」

——落ちて、ください！

か細くも力強い声で断言するエリーの叫びと共に放たれたビームライフルの弾丸が、光の網に絡め取られて四肢を破壊されたデュビアスアルケーのコックピットを撃ち抜いて、その機体をテクスチャの塵へと帰せしめる。

「くふふ……やるのう、『リビルドガールズ』」

メインサーバー外縁部に陣取った艦隊を片手間に葬りながら、その様子を観察していたテンコはどこか満足げに、そしていつかは手合わせをしてみたいとばかりに期待を込めた悪戯な笑みを口元に浮かべる。

そして、その右手——ゴッドフィンガーを改造したマニピレータには、無慈悲にも外縁部に配備された艦隊から飛び出してきた「エルドラアースリイガンダム」の頭部が握られている。

この決戦のためにテンコは自らの愛機を一新していたのだが、これではとんだ期待外れだ。

物の十秒程度でスクラップとなったエルドラアースリイガンダムの首を放り捨てながら、驚異度が一際高いと認定されたのか、自身に群がってくるエルドラダナジンやサイコドートレスを「天照神威」はその威光でもって塵殺する。

元よりこの天照神威はキョウヤのガンダムTRYAGEMAGNUMとの決着をつけることをそのビルド構想の念頭にこそおいていたものの、マギーから聞きつけた「この世界の危機」に間に合わせたいと思っただけでロールアウトを急いだ経緯もあった。

故にこそ、この程度が危機であるとはテンコには思えない。

だが、それは慢心がそうさせるのではない。ただ、彼女の直感が、強いていうのなら、GBNの同類であるが故に想わせるアラートが、「アルスにはまだ何かがある」と告げているのだ。

「……はてさて、鬼が出るか蛇が出るか」

どちらであっても、ろくなことにはならないじゃろうかの。

テンコは嘆息しつつも恐らくそれは——アルスの用意した分析であり、切り札の発動は近いことと、自身の予測が大方当たっているで

あろうことに一抹の不安を覚えるのだった。

※※※

それは、突然に訪れた。

エリイとは比べるべくもない、稚拙なファンネルの展開とファンネルに頼り切った戦いを敷いていたフェイクルガンダムのコックピットを、アイカのフェアライズガンダム、そしてビルドボルグの切っ先が捕らえようとしていたまさにその瞬間だった。

——体が、重い。

擬似感覚のフィードバックにしては度を越している重さが、アイカの両肩に、そしてフェアライズガンダムへと重くのしかかる。

『電子データにより構成される世界……ならば……』

アルスは、ハイランカーたちの連携によりやや劣勢に立たされながらもその分析を止めることは決してなかった。

そうして得られた結論は、「ガンプラの民」の本拠地であるこの世界は自身と同じデータで構成されている物である、というものだ。

ならば、それに対する対処も極めて原始的なもので良い。

そうして、アルスの指示によって座乗艦である旗艦から放たれた砲撃が射線上に陣取っていたガンプラを何機か吹き飛ばす。

だが、アルスの狙いはそこにはない。

ターンXもどきことリバースターンXと戦っていたアキノですら、その砲撃はどこか特定の地点を狙って放たれたものではないと確信できるほどに狙いは稚拙だった。

だが、砲撃がGBNの空へと着弾したその瞬間、あの忌まわしきブレイクデカール事件の時と同じように、空模様にはクラックが走って、崩壊したテクスチャからは穴が空いたコロニーのように乱気流が吹き出し始める。

それだけではない。

アイカが眩いていた通り、機体が、そしてガンプラを動かしている操縦桿が妙に重いのだ。

背後から、普段であれば喰らうはずもないオールレンジ攻撃の一撃をもらいながら、アキノは小さく舌打ちをする。

「一体、何が……!?!」

「野郎、F5攻撃とか随分こすい真似してくれんじゃねーか……!」

「……イリハ、くるしい……おもい、からだ……」

チイが忌々しげに呟いた通り、アルスが試みた攻撃はガンプラを、そしてそれを駆るダイバーたちを狙ったものではなく、彼らが浮かび、戦っているこのサーバーをこそ狙ったものだった。

こすい、と評された通りろくでもない手段ではあるが、GBNのデータが全てサーバー上に浮かんでいるのなら、それを攻撃するというのは極めて理にかなっている。

普段であれば避けられるような攻撃が、遅延や処理落ちによって回避できなくなったことで、それまで優勢に渡り合っていた有志たちは次々と苦戦を強いられていく。

「……ぐっ、この……上手く機体が動けば、これぐらい!」

フェイクレガンダムของทีมサーベルを辛うじてビルドボルクで受け止めながら、アイカはこのラグが起きている中でもなんとか奮戦しているアキノたちを見遣ってほっと胸を撫で下ろす。

とはいえ、ラグだろうがなんだろうが折り込み済みで戦っているチャンピオンや「ビルドダイバーズのリク」は例外だとしても、戦力の量はともかく質で優っていたはずの有志連合は一転して守勢に回らされたことに違いはない。

中でもあの「ジャバウオツクの怪物」や、「GHC」の戦艦群は巨体ということもあってラグの影響をもろに受けているようだった。

クオンが先行入力していたはずのテイルブレードは入力から数秒の遅延を経て空を切り、そしてサイコドートレスの巨体から放たれるビーム砲を、キョウスケが事前に展開していたGNソードビットがバリアを貼ることで辛うじて弾き返す。

「……恩に切る、じゃなくて……ありがとう!」

「君を失えば有志連合の戦力は圧倒的に低下する! 当然のことだ!」

アルスのセコいところは、数だけでも処理落ちを起こしそうな軍隊を送り込んできたことにもある。

それとサーバーによるF5アタックが合わされば、避けられる攻撃だって避けられなくなるのも道理というものだ。

アイカはフェイクルガンダムが放つフィン・ファンネルに翼を焼かれながら、小さく舌打ちをする。

それでも、有志連合全体を見れば、まだ希望は消えていないとわかる。

アルスがサーバーへの直接攻撃という手段に出た直後、「エルドラ」から帰還してレイド戦に飛び入り参上した「BUILD DIVERS」の面々——それを率いるヒロトが敵艦への直接攻撃という指針を出したことで、ラグと処理落ちに阻まれながらも有志連合の機体群は、まず彼らと、そして「ビルドダイバースのリク」が率いる「BUILD DIVERS」が突貫しやすいように露払いに努めていた。

無論、フェイクルガンダムの対処を引き受けているアイカもその一人である。

「ヒロトくん！」

刹那、戦場にアイカのよく知った叫び声があがった。

ヒロトの操るコアガンダムⅡが、敵艦へのアースアーマーと合体しようとしたその瞬間、アーマーを奪うという形で本家アースリイガンダムのそれを身に纏った「アルスコアガンダム」が放った砲撃から、乱入してきたガンペリーが身を呈する形で盾となる。

「ケンさん！」

「店長、無茶して……！」

映像作品「機動戦士Zガンダム」に出てくるキャラクターである、ヘンケン・ベツケナーのダイバルックに身を包んだ彼は、紛れもなくヒロトの盟友にして、アイカのバイト先で店長を務めているマツムラ・ケンその人だった。

恐らくあのガンペリーには、ヒロトが作ってきたアーマー類が詰め込まれていたのだろう。

ラグと遅延に翻弄されながらも、エリイとは程遠いフェイクルガン

ダムは攻撃を回避しつつ、アイカは咄嗟に左手で引き抜いたコアスプレーガンによる攻撃を、「アルスのアースリイガンダム」へと牽制射として放つ形でヒロトへの支援を行った。

ヒロトが何を考えているかはわからない。

それでも彼の瞳から希望が尽き果てていないのなら、このコアガンダムを借りている身として——できることはあるはずだ！

「行っけえ！ ヒロト君！ そして……コアガンダム！」

「プラネッツシステムに限界はない！ エクストラ……リミテッド・チエンジ！」

アイカの叫びがヒロトに届いていたかどうかはわからない。

だが、その刹那に、たった一瞬とはいえ、二つの星が双眸に灯す光は交錯し、戦場に翡翠の軌跡を描いていた。

そして、ラグと処理落ちに、サーバーへの負荷という極限状態にブチ切れていたのは、何もチイたちELダイバーだけではない。

「不正アクセスは許さない……！」

今の今まで散々胃壁を削られるような思いをしてきたカツラギだっただけは同じなのだ。

わざわざ自作したガンパンツァーで、戦場となったメインサーバーに乗り込んできた彼は、トリーが突貫で作り上げた修正パッチを直接当てるといふ荒技によってクラックの修復と、サーバーへの負荷軽減を成し遂げて、見事にアルスの目論見を潰していた。

見ているか、アルス。

カツラギがそう呟いたかどうかは定かではない。

だが彼の怒りはもはや阻止限界点を突破したコロニーのごとく巨大で、そして胃壁とストレスを薪としてそのソウルドライブは全力で燃え盛っていた。

「からだ、かるい……GM……がんばった、だから……」

リバーススターXがラグと併せての四方八方から行うオールレンジ攻撃という凶悪極まりないコンボでアキノたちを追い詰めていたのも束の間、修正パッチが適用されたことで一気に身体が軽くなったイリハは、それまで自身の盾となってくれていたアキノとチイの眼前

に躍り出る。

「イリハおねーちゃん！」

「チィ、だいじよぶ……イリハ……がんばる！」

チィの心配を受け止めながらも、毅然とした表情でイリハは叫んだ。

艦隊からの攻撃を一身に受け止めてくれていた「天城」は殆ど轟沈寸前で、あのラグと遅延という極めて凶悪にして最悪な状況下でも敵を屠っていたアリアのバエルは、白亜たる悪魔の王は全身に傷痕を刻んでいる。

そしてそれはアキノのミネルヴァガンダムも、グラスランナー形態を維持しきれず、モビルドール姿へのパージを試みたチィも同じだ。

そんな中でも自分が傷付いていないのは、皆がその挺身によつて護ってくれていたからだ、イリハははつきりと認識していた。

だからこそ、皆にその恩を返したい。

人間のことはまだ怖いかもしれない。チィと一緒にしなければ接客だつてままならないかもしれない。

それでも、「リビルドガールズ」はイリハに沢山の「たのしい」をくれた。

GMを始めとした運営陣は、イリハが立ち上がれるまで、その心が再びこの世界に舞い上がるまで、しっかりと見捨てることなくサポートをしてくれたのだ。

小さく目を瞑り、息を整えて、イリハはその「言葉」を、そして、ツカサとコーイチという生みの親にして育ての親が搭載していたシステムを起動する。

「イリハ……がんばる、たのしい、まもる！ サイコ・シャード！」

それは、局所的に全ての武装を破壊する——という括りでは原義的に大雑把になってしまうのだが、それでもこのGBN内においては、確かにそのような効果を持った武装であることに違いはない。

スカート部分とバックパックから展開されたものと、そしてバックラーに隠されていた金色のパーツが結合することでリングを形成することで、モビルドールイリハの切り札たるサイコ・シャードは完成

する。

そして、リバースターンXという敵の弱点は、言ってしまうば全身を武装としていたことそのものなのだろう。

カザミの配信によってこのレイド戦を知ったダイバーたちが雪崩れ込んできたことで、戦況は一気に優勢へと傾いている。

イリハのサイコ・シャードは味方を巻き込むことなく、オールレンジ攻撃を放とうとしていたリバースターンXの機能を全て停止させる形で、そのコアユニットを無残にも戦場のど真ん中に放り出す。

「いいねえ、イリハおねーちゃん！ やんぞアキノ！」

「百倍返しといったところでしようか……承知しました、チイ！」

——これで、トドメだ。

アキノとチイはビーム・トンファーとビームピアサーを展開する形で、コアユニットだけとなっていたリバースターンXの胴体と頭部を貫いて爆発四散せしめることに成功する。

これで、アルスに残された切り札は、アイカと戦っているフェイクレガンダムだけということになった。

だが、それが切り札たり得ないことなど、この場にいる全員が分かっていた。何故なら、アイカは「リビルドガールズ」のリーダーにして鉄砲玉だ。

エリイという恋人が巧みにファンネルを扱うのなら、あんなAI制御のファンネルごときに翻弄されてやる道理などあるはずもない。

アキノは小さく笑い、イリハは自分の作戦が上手く行ったことに安堵しながら泣き笑う。

そしてチイは、ミツシヨンコンプリートだとばかりに、指先で物質化したIBCを弾き飛ばしながら、この場にいる三人の代表者として、今まさにファンネルの雨霰を掻い潜ってフェイクレガンダムのコックピットにビルドボルグを突き立てようとしているアイカへと皮肉混じりの激励を飛ばす。

「殺っちゃいなあ、アイカー！」

メンヘラヤンデレ娘

あの鉄砲玉なら、きつと言われずとも確実にレガンダムもどきをぶちのめしてくれることだろう。

チイの叫びさえもアドレナリンが見せる興奮の中には届かないのかもしれない。

それでも。

「……が、頑張つて、ください！ アイカさん……！」

「任せて、皆……！ アルスだかELSだか知らないけど……！」

エリイによる支援の砲撃が、フェイクルガンダムが頼みの綱としていたフィン・ファンネルを叩き落としていく。

そして、その死角を突くようにしてアイカの背後に回った最後の一基も、独自のアーマーを纏った赤いコアガンダム——【ガンダムアニマリゼ】が放った一撃で叩き落とされて、フェイクルガンダムは事実上丸裸にされる形で、アイカへとビームライフルによる牽制射撃を放つ。

だがそれは温い。妖精の女王を止めるにはあまりにも温すぎる。

チイの声援、エリイの激励、そして今まで歩んできた全ての軌跡に對して感謝を捧げるように、リビルドウォートが作り出したパワーゲートを通過したフェアライズガンダムは、一つの光の矢となつて、眼前の敵を、フェイクルガンダムを撃ち貫く。

「エリイちゃんのために……死ねえええええッ！」

アルスだかなんだか知らないが、そんな事情は関係ない。

奮戦を続け、とうとう敵の旗艦だけに戦力が絞り込まれた彼への対処として戦後処理を行うのは、二つの「ビルドダイバーズ」であつて、「リビルドガールズ」ではない。

この世界に救われてきた人間はきつと、アイカたち以外にもいくらでもいることだろう。

それは仲間たちだつて、そうに違いない。

アキノは過去の亡霊を振り切つて前に進むことができた。

チイとイリハもまた、過去の軛を断ち切つて、未来へと向けて再構築されたELダイバーとしての人生を歩んでいる。

そして、エリイは——アイカと、そしてそこにある返しきれない恩とともに、目が見えない自分というマイナスだと思つていたありのままの自身を、そして傷痕を持つている顔さえも「綺麗だ」とアイカが

認めてくれたからこそ、生きることが諦めずに、この世界とリアルに立っていられるのだ。

ならば、アイカは。

フェイクルガンダムのコックピットにビルドボルグを突き立てる、その刹那の内に、いくつもの思い出がアイカの脳裏をよぎって、そして泡沫のようにはじけて消えていく。

なんのために捨てたのかさえわからないものたちのこと。

なんのために泣いてきたのかさえわからない、青い、青すぎて心に痛みを覚えるような、青春のこと。

それら全てが赦されたなんて、アイカは思っていない。

ずぶずぶと、装甲を裂いて突き立てる刃を深く沈めながらも、アイカは皆が必死に守ろうとしているこの世界に、ただ静かに、祈るような思いを馳せる。

エリイにとって、アイカがいなければ前に進めなかったというのなら、それはまたアイカにとっても同じだった。

エリイがいてくれたから、皆がいてくれたから、そして。

——いきてれば、ぜったいにいいことあるから！

幼い頃にいじめられていた誰かを庇って、ぼこぼこにぶちのめした時に言い放った言葉が、そして、その時に差し出したイルカを象ったバレツタの記憶が、アイカの脳裏を過ぎる。

ああ、そうか。

そうやって、始まったんだ。

ここにたどり着くまでに刻んできた、いくつもの足跡のことを想う。

透明よりも澄んで、綺麗な輝きが描く軌跡のことを、そして、今ここに立っている強い理由と奇跡のことを、アイカはその脳裏に描く。

裏ではコーイチとアンシユが駆る「ロードアストレイダブルリベイク」が残った巨大戦艦を撃破する姿がある。

有志連合たちは各サーバーにも現れて、アルスが派遣した艦隊やガンプラを順調に撃破していることだろう。

そして、アルスとの決着は今まさに、リクとヒロトがつけようとし

ている。

ならばこの戦いは、「リビルドガールズ」が戦ったことの意味はどこにあるのか。

フェイクルガンダムが爆発する衝撃を全身に受けながらも、毅然と立ち上がって架空のソラを舞う妖精の女王はその双眸に翡翠の光を灯して、静かに手を伸ばす。

そして、空から降ってきた因幡の白兔が差し伸べられた手を取って、ダブルオースカイメビウスと、全てのアーマーを継ぎ接ぎで纏ったコアガンダムⅠⅠがアルスへと止めを刺す、その瞬間を見届ける。

「エリイちゃん」

「……なんですか、アイカさん……？」

「あたし、ここにいて良かったって、そう思うんだ」

「……えへへ、わたしも、です……」

多分きつと、ここがいいって、ここにいたいって、ずっと叫び続けてきたんだ。

アイカはこぼれ落ちてくる涙を拭いながら、コンソールに映る恋人の、否、きつとそんな言葉でさえ陳腐に感じてしまうほど大事なひとの姿を目に焼き付けながら、「E.L.ダイバー奪還戦」を除けば正式に認定される第三次有志連合戦に幕が引かれるのを確かに見届ける。

——あたしは、ここにいます。エリイちゃんが、ここにいます。

アイカの唇が誦じたその言葉はどこか、歌のように聴こえて。

チイがいる。アキノがいる。イリハが、キヨウスケが、ユユが、クオンが、テンコが——それぞれに理由を抱えてこの電子の海にいる。

きつと、理由を抱きしめて、理由に抱きしめられて。

今日も、「たのしい」と「だいすき」と共にこの場所に、立っているのだ。

そんな当たり前を、だけどきつと、何よりもかけがえのない始まりをその胸に抱きながら、アイカとエリイはここに至るまでの足跡を数えて、二人で涙と共に、そっと微笑み合うのだった。

Last Mission:「いつか大人になって」

机の上に置かれたガンプラを眺める時がある。

そこにはいつだって始まりがあつて、そして、いつだってそこにはかけがえのない思い出が横たわっている。

愛香が、花嫁の控える部屋にもフェアライズガンダムを持ってきたのは、始まりを確かめたかったからだ。

第三次有志連合戦——「アルス」との戦いが終結を迎えてから、実に八年という時間が経過していた。

その間にもガンダムの新作は放映されて、そしてGBNは大規模だったり小規模だったりと様々だが、色々なアップデートを重ねる形で、さらにアクティビユーザーを取り込む形で今も存続している。

その間に起きた出来事や思い出を語り合えば、枚挙にいとまがないのはきつと素晴らしいことなのだろう。

愛香は優しく、直立させていたフェアライズガンダムをくつろいでいるような姿勢に変えてディスプレイさせながら、ヴェールと純白のウェディングドレスに身を包んだ自身の姿に苦笑する。

「まさか、ビッグサイトが学校になっちゃうなんて思わなかったよね」
停滞してこのまま滅んでいくと誰もが心のどこかで思っている、時代は決してそうはならなかった。

愛香が語った通り、長年お台場の守護神を勤め上げてきた実物大ユニコーンガンダム立像が立っている場所から程近く、というほどでもないけれど、モノレールで行ける駅の近くに佇む別な聖地は今や巨大なマンモス校の校舎となつて、そしてGBNの内外を問わずして、様々なムーブメントが今日も巷を席巻している。

『それでは、新婦二人のご入場です！ 皆さま、拍手でお出迎えください！』

変わった、というのなら、それは世界の決まりとか、そういうものだって少しずつ変化していったのだろう。

スタッフがマイク越しにそう宣言するのを聞いて、ウェディング・ドレスに身を包んだ愛香はゆっくりと立ち上がり、そしてフェアライ

ズガンダムを手にしてヴァージンロードへと向かっていく。

桜宮家が、というよりは凜音が政治の世界に飛び込んだことで、E
Lダイバーにはまだ課題こそ残っているがある程度人権が認められ
た。

けれどきつと、課題なんて即座に解決するようなものばかりじゃな
いということは愛香にもわかっている。

だから、皆日々その最終解答を探してもがいている。

いくつもの「ハテナ」に頭の中を埋め尽くされながら、その海を泳
ぎ切ろうと、必死にもがいて、あがいて。

それはなんだか人間関係そのものなんじゃないかということをも、ア
イカは思ってしまうのだ。

知りたいと願うことだって間違っていないのに、知ってしまうことで
傷ついて、知らないままできていることが間違いなのに、その方が傷付か
なくて済んだりして。

そんな風に意地悪に世界を作った神様の気紛れで、あるいはどこか
で、何かが噛み合うことで、出会うことができたのだ。

——ねえ、そうでしょう。絵理。

同じように愛香の控えていた部屋の隣から出てきた絵理も、純白の
ウエディング・ドレスに身を包んでいた。

もうその右目に刻まれた傷痕を彼女が隠すことはない。

差し伸べてきた手を取ってヴァージンロードへと続く道を歩めば、
きつとそこに言葉はいらないのだろう。

「変わったよね」

「……はい。わたしも、愛香も」

「この世界も」

——あたしたちが籍を入れられるようになったことだって、多分世
界がどこかしらで前に進んだことで、その裏にはいくつもの悲しみだ
とか苦しみだとか、涙だとかがあつて。

愛香はそこにある痛みのことを想う。そうして結実した願いを手
に取って口に含むことができた喜びのことを想う。

結婚式なんて、どうせ儀礼的なものだなんてことはわかっている。

それでもこれから大人として生きていくのに、絵理が同居人ではなく配偶者として扱われることは色んな面で大きくて、愛香はその違いに辟易してしまいそうになるけれど、それでももう、大人になったのだ。

一概に大人といっても、いつだってなれている気はしない。

初めて迎えた成人式で酒を口に含んだ時、こりやダメだと頭痛に襲われたからなのか、タバコを吸おうとして盛大にむせかえって、やっぱりダメだと諦めてしまったからなのか、それとも、生き方の指針がいまだにブレているからなのかはわからない。

それでも、愛香がこうして絵理と籍を入れると判断したのは、その責任であり覚悟を負うことを決めた選択は、間違いなく子供にできるものではなかった。

同じ一步を歩むのにも歩幅が違う。

同じ場所にたどり着くのに、まっすぐ最短経路で進む誰かがいるなら、迷走に迷走を重ねて、いくつも足跡を要する誰かがいる。

だけど、そのどちらもきつと間違いじゃない。

そういうものだと、今の愛香ならば、ただ一つの「正解」などないと、理解することができると。

そうして、聖堂へと連なる赤絨毯を歩んで、スタッフの人が両開きの扉を開け放ったときに愛香と絵理を出迎えたのは盛大な拍手だった。

参列者の席にある姿は、愛香と絵理の親族や家族だけではない。

今や立派なキャリアウーマンとして名を馳せる秋乃が拍手を打って、そしてその胸ポケットから大人びた素体に現実での躯体を変更したチイとイリハが顔を覗かせて、吹けもしない口笛で、ひゅーひゅーと囃立てる。

そして、なんの縁なのかわからないけれど、GBNを通じて出会った仲間たちだけではなく、好敵手と呼ぶべきキヨウスケやユユ、果てはクオンの姿まであるのだから、愛香は自分の合縁奇縁とでもいふべきものが導いてくれたその結末に小さく苦笑する。

思えば、キヨウスケやクオンとも随分戦った。

第三次有志連合戦は、確かにGBNの歴史に刻まれるような出来事ではあったけれど、それでもGBNという電子の海が今も存続しているように、それは一つの区切りでしかない。

大学時代にハイランカーと呼ばれる領域まで愛香たちが足を踏み入れたときに待っていた死闘はそれはもう散々なもので、結局七年間、トータルの戦績を鑑みれば、アイカたちが四人でキョウスケ一人に勝てたのはたったの一回で、クオンとの戦いだってそれは同じだった。

それでも彼らは自分たちを好敵手と呼んでくれて、こうして結婚式にも参列してくれているのだから、義理堅いというべきなのか優しいというべきなのか。

まだ泣くには早いはずなのに、それを意識するだけで眦に涙が滲んでくるのを愛香は感じていた。

自分の人生にはなんの価値もないと思っていた、十五歳の冬。

そこから十年が経って、自分の人生と向き合った今、最高の瞬間がここにある。

だから神様っていうのはいつだって意地悪で、捻くれていて。

牧師の人が聖書を読み上げるのを聞きながら、愛香はそんなことを考える。

そんな捻くれ者でヘソと根性がねじ曲がっている神様だからこそ、こうして自分たちのところに奇跡を落つこととしてくれたのかもしれない。

そうして、愛香がちらりと横目で絵理を一瞥すれば、彼女もまた苦笑を堪えられない様子で、ひくひくと薄い唇の端が引きつっているのが見える。

ああ、きつと。

たまに忘れそうになってしまふけれど、自分たちはこうやって——いつだって誰かに支えられてここに立っているのだ。

名前を知っている誰かや仲間たちと笑い合って、名前を知らない人たちと一緒に世界の歯車を回して。

「新婦朝村愛香、貴女は互いに互いを捧げることを誓いますか？」

「はい、誓います」

「新婦悠陽絵理、貴女は互いに互いを捧げることを誓いますか？」

「……は、はい。誓います……！」

「それでは、誓いのキスを」

促されるまでもない。

それでも牧師の人の指示に従って、愛香と絵理は互いに互いのヴェールをめくり上げて、情熱を、情愛を、言葉では言い換えられない思いを乗せて、とっておきのルージュを引いた、互いの唇を触れ合わせた。

きつと魂はいつだって叫び続けていた。

どこかで出会うべき誰かに、巡り合うべき誰かに出会って、一緒にいたいと。

そうして愛香が絵理に出会った時、絵理もまた愛香に出会っていた。

やがて巡り合って、お互いの隣で今日も呼吸をして、心臓が動いていて。

そんな奇跡を、そんな軌跡を、愛香は、絵理は、心の底から愛おしく思う。

だからこそ、思い返すのだ。

電子の海を彷徨った、小さな冒険譚のこと。

勇気と愛というにはちよつと物騒で気恥ずかしいけれど、確かに歩み、綴り続けてきた御伽話のこと。

そこに名前をつけるのならば、きつとそれは。

——リビルドガールズ。

誓いのキスを終えて、互いの瞳に映る答えを確かめ合って、愛香と絵理は小さく笑う。

もう、ガールズなんて歳じゃないのかもしれないけれど。

それでも、ここまで歩んできた道に名前をつけるならそれしかない。

湧き起こる歓声と拍手に包まれながら、愛香と絵理は文字通り互いをニコイチにする、そんな儀式の壇上から去っていく。

そうして、放り投げるブーケはどこかに、誰かに届いて、新たな物語になるのだろうか。

その答えはわからない。

それでも、きつとそうであればいいな、と、愛香は願ってしまふ。誰かの紡いできた物語の果てに今の自分があるのなら、自分の紡いできた物語の果てに、誰かの物語があることを、傲慢かもしれないけれど、願ってしまうのだ。

「ねえ、絵理」

「なんですか、愛香……？」

「あたし、絵理でよかったよ」

「……わたしもです、愛香」

キスをするのが誓いの証なら、今交わしたものは、何に立てるものなのだろうか。

——多分それは、記念碑みたいなものなんじゃないだろうか。

愛香はそう、静かに懸想する。

こうしてここに辿り着くまでに、電子の海から始まって、キスから紡がれた御伽話を忘れないための、そんな碑文に代えて愛を刻む。

だから、それでよかったと愛香は思うのだ。

挫折だらけの人生も、途絶え続けた足跡も、今全てこの瞬間のためにあつたのだと、心の底からそう思うから。

そして自分の隣で、最愛の人が心の底から楽しそうに笑っているから。

そんな特等席に自分が座っている。

きつとこれ以上の結末なんて望むべくもない。

ライスシャワーを浴びながら、愛香と絵理は互いに顔を見合わせながら、お互いに持っていたブーケを空高く放り投げる。

それはいつか、重力に惹かれて地に落ちるのかもしれない。

だけど、我先にとそれを手にしようとする誰かがまた放り投げれば、推進器のない花束だって、何度でも空を飛ぶことができる。

それが、あたしたちのリライズ。

リビルドガールズが、リビルドガールズという名前で紡ぎ続けてき

た物語の結末。

放り投げたブーケが秋乃の手に渡ったことに、神様の悪戯には
できすぎていると、愛香と絵理は互いに顔を見合わせて苦笑しな
がら。

もう一度、そのかけがえない瞬間を、互いの脳裏に刻みつけるよ
うにブーゼを交わすのだった。